
魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～

えのき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikeS（夜天に舞い踊る荒鷲）

【Nコード】

N5118U

【作者名】

えのき

【あらすじ】

自由奔放な魔導士、アルフィリオス・ラーゼンハルグはかつての後輩、八神はやてが設立した機動六課に出向する事となる

彼が巻き起こす（悪）影響はどれほどのものか
それは貴方の目で確かめてください

はじまり（前書き）

どうも、えのきです

処女作ではありませんがよろしくお願いします

はじまり

彼はかつて言った

「お前がやりたいて決めたならそれで良いじゃないか」

それは一人の少女の夢を後押しする言葉

「いつでも呼べよ、何処へだろうと直ぐに駆けつけるからよ」

その約束は今、果たされる…

「さて行きますか…まあ、なんとかなるっしょ」

新たに設立された部隊《機動六課》

そこに出向する二人の魔導士

「俺はアルフィリオス、アルさんって呼んでくれや」

自由奔放な先輩魔導士…アルフィリオス・ラーゼンハルグ

「貴方の尻拭いはいつも僕がしているんですが…って聞いてんですか！？アルさん！！」

苦勞性の部下…レキ・アーベント

彼らは機動六課とともにどのような日々を送るのか

それはまだこれからのお話し

魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～

EP01…行こうぜ！機動六課！！にテイクオフ

キャラ説明（前書き）

少し修正しました

キャラ説明

名前…アルファイリオス・ラーゼンハルグ

年齢…21歳

身長…179?

体重…69?

性別…男

イメージCV…三木眞一郎

髪の色…赤、毛先のみ白

髪の長さ…背中の中間くらい（首もとで束ねている）
目の色…緑色

性格…自由奔放で意地悪好き、面倒見や人柄が良い

魔力ランク…総合AAランク（リミッター時はBランク）

魔力光…赤

ポジション…フロントアタッカー

階級…一等陸尉

趣味…昼寝、サボり、ハーモニカの演奏

好きな事…自由、安眠、楽器演奏

嫌いな事…束縛、減給、騒音

詳細…陸士108番隊に所属していた魔導士

はやてが捜査官をしていた時に知り合いになり以後、先輩として彼女に接する

その他にも様々な交友関係がある

機動六課、設立時には上司であるゲンヤ・ナカジマの命により出向する事となり直属の部下レキ・アーベントと共に出向

普段はロングアーチ7だが作戦の場合でコールサインが変更される縛られる事が苦手なためデスクワークはほとんどせずにスターズ副隊長ヴィータに追いかけて回されている

サボりに居眠りの常習犯だが戦闘においては愛機「イーグルレイダー」を携えて先陣を切る

その勇ましき姿から管理局では『荒鷲』『昼行灯』『戦闘狂』と呼ばび名が様々にある

過去の経歴が曖昧で本人はあまり語る事が無くまた資料もない

また髪の毛先のみ白いのは遺伝的特徴らしい

デバイス名…イーグルレイダー

種類…インテリジェントデバイス

リミッター…有り

待機状態…ネックレス

戦闘状態…複合機関銃（スーパーロボット大戦OGサーガのナイトファウル）

カートリッジ…リボルバータイプ
電子音声…女性

詳細

多種多様を目的として設計したデバイス
大型のマシガンに銃口の下には杭打ち器^{ステーク}を搭載、更に仕込み刃^{リップパー}を
搭載している

カートリッジシステムを二つ搭載していると言う唯一無二のデバイス
理由はステークを使用するのに爆発的な力が必要でステーク用のカ
ートリッジ、魔法強化用のカートリッジがある

威力を追求した結果、形態を変える事を破棄しリップパーやステーク
は手動で展開をする

またアルフィリオスが六課出向時に所持していたイーグルレイダー
は複製品で本体はフレームとカートリッジ増強のため本局に預けて
ある

多種多様に使用できるがピーキー過ぎる性能とステークの反動によ
る人体の負荷が問題となっているため企画は凍結している

試作品のテストターをしているアルフィリオスはそのまま自身のデバ
イスとして使用している

アルフィリオスにステークの反動の影響が無いことに技術者は頭を
悩ませているらしい

A. EP:七夕(前編) (前書き)

季節のイベントが近いためにやってみました
今回はアルフィリオス×はやてです

イチヤイチヤを上手く表現してみたいです

A. EP..七夕（前編）

「先輩、私と星を見にいかへんか？」

それははやてから唐突に言われた事だった：

アナザー
AEP..七夕（前編）

いつもの朝食の時間、はやてがいきなり星を見に行こうと誘いをしてくるあまりにも唐突なので俺は全く理解出来ずにはやてに聞き返す

「急になんだ？星なら夜になれば見れるだろうが：わざわざ見に行く必要はあるのか？」

「ただの星ちゃうんよ天の川っていう、星の川や

今日は私の故郷で七夕っていう行事なんや」

疑いの視線を向けている俺にはやては人差し指を立てて理由を説明していく

行事ねえ：地球だっけか？いろんな行事があるもんだな：下手すれば一年中行事で埋まるんじゃないか？

陸士108番隊ではやてと一緒にいた時になんとか聞いた事があるがはやての世界は本当に行事が多いと思う
嫌いではないけどな

でも考えて見ればサボれる口実になるんじゃないか？なるよな、な
っちゃうよな！？

「うっしならいっちょ行きますか！
俺、星が大好きだからな！！」

「あからさまな態度は怪しいんやで？」

先輩、どうせ仕事をサボれると思っとなるんやろ…そうは問屋が降ろさへんわ

帰ってきたらデスクワークの時間、先輩だけ延長やからな」

「なあにい！？」

チクショウ、一度持ち上げてから頂上付近で蹴り落とすはやて…ずいぶんと鬼畜なやり方じゃないか…

待てよ…今から断れば延長はなくなるんじゃねえか？

「はやて、やっぱり」ちなみに今から断ると更に倍になるけど…
何でもないです」

俺の最後の希望は打ち砕かれた…

デスクワーク倍とかあり得ませんって先生……ん？先生って誰だ？

テーブルに頭をつけながら落ち込む俺を無視して一人食事を済ませるはやて

俺はふと疑問に思った事があり顔を起こしてはやてを見る

「七夕ってのは何処でやるんだ？」

ミッドチルダに星が見えるところなんてないだろ？」

「そんなん、地球の行事なんやから地球に行くに決まっとなるやろ」
「はい？」

はやては何いってんだコイツみたいな目をしながら言ってくる
仕方ないだろ？七夕って行事はじめて聞いたんだからな

――――

まあ…その後はあれよあれよという間に俺たちは…

「よっし！到着や！海鳴市！！」

はやての故郷である海鳴市に到着した、はやてせめて私は帰ってき
たくらい言えば良いんじゃないか、全くそれくらい面白味を出せよ
な…すまん、余計な事を言いました、だから無言で夜天の書を出す
のは勘弁して下さい

にしても出張任務で一度来たが遊びで来るとまた違った感じがして
いいな

ちなみにメンバーは俺とはやてのみ

「本当に俺らだけで良かったのか？なのは達もっふうっ！？」

「ぐちゃぐちゃ言つとらんで先輩は私についてきたらええねん！」

はやてに質問を投げ掛けると凄まじいボディブローを打ち込まれる
はやては何故か顔を赤くして早口で言うと先に歩いて言ってしまう
俺はよろけながらもはやての後についていくしかし何処へいく気だ
？聞くと殴られそうだけど聞いてみるか…

「何処に向かってるか聞いても良いか？差し支えなければだけど」

「まだ時間があるから散歩がてら買い物しようかと思うんやけど…ええかな？」

「良いんじゃないか、ついでに前は出来なかった市内散策も頼んでもいいか？」

「ありがたいな、先輩
なら市内散策も兼ねてまわろうか」

俺に話しかけられるとはやては自分の腕時計をさしながら時間があると答えると少しだけ不安気に俺に問いかけてくる

それを見て微笑を浮かべながら俺は了承すると、はやての頭を軽く撫でてから歩きだす

頭を撫でられたのが嬉しいのか、はやては笑みを浮かべながら俺に並ぶように歩くと俺の腕に自分の腕を絡ませてくる

「せっかく付き合ってくれるんやからこれくらいのサービスはせんとな」

「そういう台詞はフェイト並みのスタイルになってから言うんだな」

「ごめんな…貧相なスタイルで…」

「いや俺も言い過ぎた…だからそれ以上つねらないでくれ、千切れる…」

腕を絡めてきた直後にはやてが機嫌良く言ってきたので少しばかり皮肉気味に答えると、はやては空いてる手でギリギリと腹の肉をつ

ねりはじめる

笑顔でいるわりにはその力は凄まじいものだった、はやてに対してスタイルは禁句だな…

――――

商店街まで出てきたが出張で来たときより変わっていた
どこの店にも笹や星が飾られていた
これが七夕という日なんだろうか？

「先輩、どないしたん？」

「いや、七夕ってのは笹がメインなのかなと思ってな」

「ああ、それは願い事を叶える札を飾るためや
私は願掛けやと思ってるんやけどな」

はやての言葉に思わず首を傾げてしまう何故、願い事を笹に飾るの
だろうと…

はやてに聞いても良かったのだがあまり聞くのも迷惑だと思いやめ
ておく事にした

商店街を歩いているとはやてはブティックの前で立ち止まり何かを
見はじめる

「どうかしたか？…はやて？」

「これ…先輩に似合うやないかと思って…」
俺が質問をするとはやては一枚のTシャツを取り出して俺に見せて

くる

それは全体的に笹がプリントされたTシャツだった、そして商品名は七夕限定「笹Tシャツ」と書かれていた

「俺はパンダか何かかよ…そして何故、俺に似合うと思ったんだ？」

「あたたたっ！？痛い！痛い！！」

結構食い込んどる、指が、指が！頭に！？」

Tシャツを見せつけてくるはやてに満面の笑みを浮かべてから頭を掴むとジワジワと指に力を込めていく俗に言うアイアンクローだ

はやては俺のアイアンクローに耐えきれずに痛がり、何とか離そうと抵抗するが力の差があるためそのまま締められていた

少しだけ気の毒になり離すとはやては少し涙目になりながら俺を睨んでいた

「痛かったで…先輩…」

「変なもんを薦めるからだよ…まあ後がのこんねえ様にしたから勘弁してくれや」

恨めしそうに睨み付けるはやての頭に手を乗せて優しく笑みを浮かべる

はやてはその笑みに何も言えずに黙っているしかなかった

「さてと、これからどうするか…まだ時間あるよな…」

「せやな一応、一通りは回ったからなあ…何処かへ行くにしてもち
いとばかり時間が足らへんしな」

ある程度回り終えると俺は時間を見てからはやてにこれからの事を
伺う

この海鳴市に來たのは昼過ぎで今はようやく日没になったところだ、
街の中で時間は経つものだと考えたが意外とたって無いことに驚く
はやても予想外だったらしく顎に手を当てて考え込んでいる
俺としては少しダラダラできる場所なら何処でも良いんだがな…

「そや、ここならアソコが近いな
先輩、ちよつと休憩しに行こか」

「どこだよ、ファミレスか何かか？」

「ええとこや、ほな歩いた歩いた！」

面倒そうに突っ立っている俺の背後に回ればはやては背中を押して
俺の身体を前へと移動させていく

さてさて、いったい何処にいくのやら…

A. EP:七夕（前編）（後書き）

どうも、えのきです

七夕（前編）はどうでした？

デート描写は得意でないので意見が聞きたいです

これの感想などを糧にして後編に移りたいと思います

本編を待たれてる方はもう少しお待ちください

それでは！

A. EP:七夕（後編）（前書き）

ようやく書き上がりました！七夕小説、ではお楽しみ下さい

最後に発表があるので見ていただければ嬉しいです

A. EP..七夕（後編）

星を見に行きたい、その言葉とともに俺ことアルフィリオス・ラーゼンハルグは後輩八神はやてと第97管理世界地球へとやってきたなんでも地球じゃ七夕という行事だという街中が笹ファイバーな感じを楽しみつつ散策するも時間が微妙に余ってしまった

それではやてが行きたい所があるという事で俺ははやてに先導をして貰ってる

「…ってのが前回のあらすじだな」

「先輩…何、独り言を言ってるんですか？」

「いやな…もしも前回の事が忘れがちな場合はこれを見れば一目瞭然ってのをヤツをしたかったただけだ、だからその痛い人を見る目はやめろ」

明らかに目を細めながら怪しむはやてに俺は説明をしながら手をヒラヒラと動かす

それでもはやては疑いの眼差しをやめないなので俺は話を変える事にした

「そーいや、目的地にはまだつかないのか？」

なんも教えてくれないしよ、何処にいくくらい教えてくれよ」

「先輩はせっかちやな、もう少しやであっ、あったあそこや」

歩きだしてから雑談はするものの、はやては俺に目的地の情報は全くくれなかった

俺の問いかけにははやては微笑を浮かべながら答えると一つの店を指でさした

うん：漢字で書いてあるからなんて読むのかわかりません：

外装から見て喫茶店か？

「喫茶店：だよな？」

「せや、ここはなのはちゃんの実家の喫茶店、その名も翠屋っていうんよ

ケーキとか凄く美味しいやで」

ケーキだと、はやて：いじめか？

俺がケーキあまり好きじゃないって事を知っててここを選んだんだろ：意地の悪い奴になりやがって

「先輩：一応甘さ控えめなのもあるからいいじゃないでくると嬉しいんやけど：

大の男が店先で地面にのの字を書いているのは非常に目立つんやから」

「つーん：知りませーん」

「……ていや！！」

「のんぶっ！？」

甘いものと聞いていじけている俺にはやては困ったように説得をしてくる

俺が聞く耳を持たないのでいるとはやては俺の頭にチョップを降りおろす

勢いをつけた一撃は綺麗に俺の頭に入った正直に言えば意識が飛ぶかと思う

「まだ言うようならもう一発いくで？」

「わかった、入るから…最近のお前らは実力行使する事が多くなつてないか？」

「先輩がそれくらいいしないと聞き入れてくれないという判断や嫌ならちゃんと聞いてな？」

「ハア…出来るだけ聞き入れるさ…」

痛がる俺を見ながらはやては手刀を作っていつてくる

俺がため息まじりに返すとうんうんと自分で納得してはやては答えるさすがに殴られ過ぎて頭を割られたくないから少しだけ気をつけるかな…何日持つかわからんけどな

喫茶翠屋の中に入ると二人の女性が雑談をしていた

一人は若めでなのはと少し似ている雰囲気を持つ人ともう一人は金髪でショートカットで…あれ？コイツどこかで見たような…あつ！

「その後ろ姿…アリサか？」

「ん?…はやてに…アル、フィリオス?」

なんでコイツ俺の名前をそんなに言いにくそうに言うんだ?
言いづらいからか?長いからか?

「どっちもよ、長いし言いづらいのよ、アンタの名前は」

「お前は読心術持ちか!?心の声に反応すんなよ!」

「先輩、普通に口に出てたで?」

おう!?マジか…

にしてもアリサがいたのには驚いた…

まあなのは達の親友だから来てもおかしくは無いか…

アリサとは出張任務の時に出会ったんだよな、宿泊施設を提供して
貰ったのを覚えてる

「それで、はやてはわかるけどアルフィリオスはなんでこっちに来てんのよ」

「ずいぶんと雑な言い方するな…俺は今日、こっちで七夕って行事があるからはやてに一緒に行かないかと誘われたんだよ」

年上っていう事を気にしないようにアリサは言ってくる…まあ初対面の時に好きに話せて言ったのは俺だけだな

俺の説明を受けてアリサはとても驚いた顔をしていた、なんだよ?七夕って星を見る行事じゃないのか?

「ちょっと、はやて!少し顔を貸しなさい!」

「アリサちゃん？ちよつ、待ちや！？」

アリサがはやてを連れて奥のテーブルに移動してしまう…取り残された俺は仕方なくアリサが座ってた隣の席につく

「貴方もはやてちゃんやなのは知り合いなのかしら？」

「あ、すみません…申し遅れました、機動六課のアルフィリオス・ラーゼンハルグです、はやてやなのはの同僚と考えてください」

「気にしないでいいわ、私は高町桃子…なのはの母です」

目の前にいたウェイトレスさんが俺に質問を投げ掛けてきた出張任務の時には挨拶する暇なんてなかったんだよな

目の前のウェイトレスさんに自己紹介をするとやんわりと笑って返してくれた

ってちよつと待てい…今なんて言った？

母？なのはの？ワッツハプン！？

状況をいまいち理解できていない俺はただ驚く事しかなかった

――――

「はやて…とりあえず一つ聞いてもいい？」

アルフィリオスから離れた席でアリサははやてに問いかける
はやてはと言うと凄く気まずそうにしながら頷く、アリサはそれを

見てため息を一つもらす

「海鳴市の七夕のジnkス：知らないわけじゃないでしょうね？」

「七夕の夜に一緒に同じ願い事をした二人は幸せになれるやろ？もちろん、知っとるで」

「ならアルフィリオスにはなんで話して無いの？
アイツ、只の天体観測としか思っていないのよ」

はやての返答にアリサはテーブルから身を乗り出して聞く
大切な親友が男と二人でいるアリサには心配でならなかった
それに対してはやては特に気にする事も無いようにするとゆっくり
と語り出す

「私は先輩と幸せになろうと思って来た訳じゃないんや：少し先輩
に恩返しできたらええかなって思ってきたんや」

「恩返し？アルフィリオスに？」

「そうや、先輩は管理局に入局した当初から何かと世話を焼いてく
れたり、私の事を知っても受け入れてくれた人なんよ：：
そんな先輩が私に言ってきたんや、星が見えるところを知らないか
って」

「だから今回誘ったって訳？」

はやてはアルフィリオスを連れてきた理由をアリサに語っていく
理由を聞いたアリサは真剣な眼差しで聞くとはやてはゆっくりと頷く

「はやてがなんの考えも無しに連れてきたならやめさせるけどそんな訳があるなら、引き留めるのは野暮ね…」

「アリサちゃん…」

「彼氏がないあたしが言うのもなんだけど、はやての行動でアルフィリオスも意識はしてると思うわ…まああんなちゃらんぽらんを好きになったはやてには好都合ね…」

「ア、アリサちゃん！？何をいうとるん！！私は別に…」

頬杖についてつまらなそうにするアリサに微笑を浮かべるはやて

アリサははやての方を向くと人差し指をさして言い、やれやれと言った感じに肩をすくめるとはやては少し頬を染めながら慌ててアリサに言葉を放つ

「あんたねえ…二人っきりで出かけておいて意識の一つもしないのはおかしいわよ？」

はやての本心まではわからないけど、只の恩返しにしては手が込んでると思うわよ？」

「そうやろうか？」

「なににせよ、頑張りなさいよ？あともしアイツが何かしたら言いなさい、星に変えてやるから」

アリサは立ち上がり、考え込むはやての肩を叩くと応援をしていき、アルフィリオスを見ながら拳を作って星に言うと言うと外に出ていくはやてはその姿を見送ってから礼を思うとアルフィリオスの元に戻っていく

アルフィリオスはカウンターで腕組みをしながら何かを考えていた
はやては不思議に思い恐る恐る聞いてみる事にした

「先輩？どうかしたんですか？」

「はやてか：少し高町家の謎を考えてただけだ：

「はい？」

考え込むアルフィリオスはそれだけを言うとまた考え始めた、はや
ては意味がわからずにただ首を傾げた

――――

考えているアルフィリオスを翠屋からなんとか出すことが出来たは
やてはアルフィリオスを連れて街にある広場にやってきた

そこではとても大きな筐がいくつも置かれており人々がそれぞれに
筐に短冊をつけていた

「へえ：結構きてるんだな：」

「まあ市内での行事やからな、先輩も短冊を吊るすやろ？」

「短冊？：あああの紙か：そうだな、どこで貰えんだろう？」

先程まで考え事をしていたアルフィリオスは目の前に広がる光景を
見て驚きの声を上げる

はやては微笑を浮かべながら説明をすると短冊はどうするかと質問を投げ掛ける

短冊という単語を聞いてアルフィリオスは皆が吊るしてる紙を見てから何処で配布されているのか探すために辺りを見回す

「今、とってきたで…先輩の分」

「ありがたいな、なんて書こうかな…」

紙とペンを渡されたアルフィリオスはじっと紙を見つめながら唸る、はやてはと言うと特に迷う事も無く短冊に書き綴っていく

「自分がしたいことを書けばええんや、そこまで難しく考えんでもええと思うで」

直ぐに願いをかける事に関心しているアルフィリオスにはやては短冊を見ながらアドバイスを言う

それを聞いてアルフィリオスはペンを持ち直して短冊に書き始める書き終えた短冊を見てアルフィリオスは満足そうに見るとはやてに視線を向ける

「はやては何を短冊に書いたんだ？」

「えっ！？…その…内緒や、どうしても知りたかったら先輩の教えてや…」

アルフィリオスからの質問にはやては驚くと手に持った短冊に自分の後ろに隠してから思いついた様にアルフィリオスに提案をしてくる

「俺のか？別に構わないけど…改めて言うのは恥ずかしいけど次の七夕もはやてと来れるように、だ」

「……………」

「どうした？いきなり黙って」

「な、なんでもない！」

さてと短冊を吊るしに行こか」

短冊の内容を聞かれるとアルフィリオスは苦笑をしながら書いた内容を話すとはやては驚いた表情をしていた

不思議そうにはやてに問いかけるとまるでごまかすかのように言う
と足早に笹の方に歩いて行ってしまう

「教えてくれないのかよ…」

残されたアルフィリオスはただそれだけを呟いた

—————

S i D E .. はやて

私は先輩から見えない位置まで来ると頬に手を当てた、凄く熱い…
多分鏡を見れば真っ赤なのは間違いないはずや、だって…

（同じやった：私と先輩の願い事：）

私の手には短冊がありそこには《来年も先輩と七夕に来れますよう》と書かれていた

先輩は私と来たことが嫌でなかった：それだけで私は凄く嬉しかった

「ここでええかな？ 来年も先輩と来れますように」

近くにあった笹に短冊を吊るすと私は改めて願い事をする先輩の所に戻る

なんで短冊の内容を覚えてくれなかったんだと言われたけど先輩は対して気にしてはいなかった

「先輩、少しええかな？」

「どうした、改まって構わないから話せよ」

「来年も一緒に来ような、七夕」

「：ああ良いぜ、約束だ」

ミッドチルダに帰る前に私は先輩に話しかける先輩は少し不思議そうにしていたが了承してくれた

私は先輩に来年、また一緒に来たいと言うと先輩は笑いながらOKしてくれた

私はあの人の隣にずっといたい
この気持ちはまだ恋なのかわからないけどお願いしてもええよね？

先輩…

おまけ

「「「おかえりなさい」」」

海鳴市から帰ってきたアルフィリオスにその言葉はかけられた
声をかけてきたのはなのは、フェイト、ヴィータ、シグナムであった

「アルさん、今まで何処に行ってたのかな？」

「えっと…地球の方に…行ってきました」

なのはが笑顔を浮かべながら質問をしてくるしかしその背後にはド
ス黒いオーラが出ていた

四人の威圧によりアルフィリオスは正座をして答える

「ほう、地球にか…」

「休暇届が出てないのに姿が見えないから心配してたんだけど
思いすごしだったみたいだね」

フェイト、シグナムが絶対零度に近い視線でアルフィリオスを睨み
付ける

ヴィータはと言うと無言でグラーファイゼンで素振りを行っている

（完全に殺る気だ！）「ちょっと待て、休暇届ははやてが出すからって言ってたんだ出てないのがおかし、い……オイコラ……はやて、こっちを見ろ」

アルフィリオスは背筋が冷たくなるのを感じて慌てて弁解をしてはやてを見る

はやては何故かアルフィリオスから視線をそらして別な方をむいていた

「はやて、お前……言ったよな？」

休暇届は私が出しとくからな、ってなんで出てないんだよ！？後、そのペコちゃんみたいな顔をやめろ！忘れてたんだな？そうだろ！！頼むから答えてくれ、俺の生死に関わるから」

アルフィリオスははやての肩を掴んで自分の方に向けるはやては視線だけを違う方にむけて舌を出していた

そしてアルフィリオスのツツコミで視線をアルフィリオスに向けて

「先輩……ごめん！」

チョップをするように手を前に出して謝ったアルフィリオスが文句を言おうとした時に彼の肩に手が置かれる

「主ははやての不手際なら仕方ないが皆に迷惑をかけたのは事実……仕置きが必要だな」

「せめて9割9分殺しで勘弁してやる……」

（それは死んでるのとかわりませんけど！？）

手を置いたシグナムとグラーフアイゼンを構えているヴィータにアルフィリオスはツツコミを入れるがそれで何が、変わるわけでもなくアルフィリオスは四人の処刑執行人に引きずられ訓練スペースに連行された

余談だが深夜、機動六課で凄まじい爆撃音と断末魔が響き翌朝訓練スペースにて人の形をしたボロ雑巾が見つかったという

A. EP:七夕（後編）（後書き）

どうも、えのきです

見ていただきありがとうございます！

あまり構想がまとまらなくて苦劳しました

それとこの小説のPV数1万を越えました！

たかが1万で、と言われるかもしれませんが嬉しいものがあります

それで記念小説を書こうと思っています

記念小説は見てくれた方々のリクエストで製作していこうと思います

良かったらリクエストしてください、感想でも活動報告でも構いません

それでは本編の更新をお楽しみ！

では

EP01：行こうぜ！機動六課！！（前書き）

さて始動を開始しましたえのき小説です

楽しんでくれたら良いと思います

EP01：行こうぜ！機動六課！！

時空管理局 陸士108番隊

時空管理局の一つで地上を守る部隊の隊舎、隊員がただひたすら事務作業に没頭するなかその男はいた椅子に管理局の制服をかけてもたれ掛かるように寝ている、誰が見てもサボりだ

顔は被せられたアイマスクで目元ははっきりとしないが顔つきは普通より細めで椅子の背より長い髪は一つに束ねていた、しかし髪は普通とは違っていて全体的な色合いは赤なのだが毛先のみ白だった
周りの隊員が全員、気にもとめて無いのは彼に注意することが無意味だからだとわかってるからである

青年が干渉されずに眠り続けていると一人の少女が青年に近づく

「アルさん？」

アルさん！アルフィリオス・ラーゼンハルグ、一等陸尉！！」

青いロングヘヤーの少女は青年、アルフィリオスに声をかけるが全く相手にされず何度か呼びかけても反応がないため
最終手段としてアルフィリオスのアイマスクを取ると彼の鼻をキュッと摘まむ

「ふが……ふご……えっふあっ！？」

息が上手く出来ないのか妙な奇声を上げるアルフィリオス、そして口から思いつきり息を吐くと目を開けて鼻を摘まむ少女に恨めしそ

うに視線を向ける

「…っ！ギンガ…もう少しマシな起こし方はねえのか？
お兄さん、息がつまりますよって」

「だったら早く起きてください、お父さんじゃなかったナカジマ三
佐がアルさんと呼んでるんですよ？」

文句を言いながらアルフィリオスは目の前の少女、ギンガ・ナカジ
マを見るとギンガは腰に手を当てて、ため息をつくとアルフィリオ
スに用件を伝える

首をひねっていたアルフィリオスは不思議そうにギンガに目を向け
て口を開く

「ゲンヤさんが？なんか用事でもあったか…この前の昼のツケは返
したし…昨日の事件の処理はレキに任せたから大丈夫…
どうしてだ？俺は何かしたか？」

指折りにアルフィリオスは数えていくと不思議そうにギンガにアル
フィリオスは質問を投げ掛ける

「むしろ、今…仕事サボってた件で呼ばれるって考えないんですか
？」

「ゲンヤさんが俺のサボりに一々口なんか出すかよ、そんな無駄な
事…」

（（（なら直せよ！）））

その時、ギンガ含めて陸士108番隊の意識は一つになったとかならなかったとか…

「…って考えてる暇があるなら早く行って下さい！いつまで待たせる気なんですか！！」

「待て…ここまで出てるんだ、後一時間くらい…すみません…今いきます」

ため息をついているとギンガはふと我に返るとアルフィリオスに急ぐ様に促すと、アルフィリオスは手を前に出してから喉元に指でさしながら説明をする

ギンガはゆっくりと左手を上げて握り拳を作ってから笑顔を向ける素直にアルフィリオスは頭を下げるとギンガの父、ゲンヤ・ナカジマのいる部隊長室に向かう

「しかしまあ…何を言われんだか…」

部屋前に止まるとインターホンを押してから入室をする

「ようやく、来たか

また寝てたんじゃないか？お前さんは」

「ご明察！話がわかるぜ、さっすがゲンヤさん！！」

アルフィリオスの顔を見て壮年の男性、ゲンヤ・ナカジマはため息混じりに言う。アルフィリオスはウインクをして腰に手を当てて、人差し指をゲンヤに向けると愉快的声を上げる

「そこはあんまり嬉しくは無いんだがな…まあお前さんと呼んだのには訳があるんだ…」

「また事件を解決しろって奴ですかい？それとも出張？出来れば後者が嬉しいんですがね」

「残念だがどちらも違う、お前さんにはある部隊に出向してもらいたいんだ」

ゲンヤの呼び出しの内容にアルフィリオスは指を二つ立てて言うから、二つの指の内的一本を動かして聞くとゲンヤは二つの意見に首を振るとアルフィリオスに出向をしろと頼んでくる

「なっ！…なんだって！！」

アルフィリオスは真剣な声を上げてからよろよろと座り込むとさめざめと泣き出す

「酷いぜ、ゲンヤさん俺にサボり癖があるのはわかるけどお払い箱なんて無いでしょ！！」

アレですか？昼飯の金を踏み倒した事が原因ですか？

それともこの前にギンガと食事に出かけた事を根に持ってんですか？アレは俺の財布が食いつくされるという最悪の結果だったんですよ！！」

「ギンガとの食事については後で聞くとしてお前さん、何を勘違いしてんだ？」

別に俺はお払い箱なんて言ってねえぞ」

涙を浮かべながらゲンヤに意見を述べていくとまるでこの世の終わりのような叫びを上げるアルフィリオス

ゲンヤはやれやれとため息をつくとアルフィリオスに事情を説明しはじめる

「お前さんは八神の事を覚えてるか？」

「当たり前じゃないですか、後輩の名前くらい覚えてますから、んではやてがどうかしたんですか？」

「ハア…今度設立される部隊、つまりお前さんが出向する部隊の隊長をやってるそうさだ

新設の部隊じゃいろいろと戦力にバラツキがある、そこで」

「俺を送ると？荷物ですか？俺は…」

未だに話しの理解が遅いアルフィリオスにゲンヤはため息をまた吐くと、指をアルフィリオスに向けるとアルフィリオスは、乾いた笑みを浮かべて答える

「ああそうさ、性格に難があるうがサボり癖があるうが、今の八神の部隊には戦力が必要だろうと思ってな」

「アレ？誉められてんの？全然嬉しくないんですけど…」

首を傾げてから肩を落としてアルフィリオスは言うのと直ぐに顔を上げる

「まあ落ち込んでいてもしゃあねえな…なんとかなるっしょ

それとゲンヤさん、一つ頼みが」

「珍しいな、どうした？」

「出向の際に一人連れていきたい奴がいるんですけど良いっすか？」

アルフィリオスのあまりない頼み事にゲンヤは驚きを隠せずに返すとアルフィリオスはもう一人連れていっても良いかと提案をしてきた

「まあ一人分くらいなら大丈夫だが誰を連れてく気だ？ ギンガか？」

「ギンガはこの隊に必要でしょ？」

俺が連れてくのは可愛い部下ですよ」

ゲンヤの問いにアルフィリオスは手をパタパタと振りながら答えると笑みを浮かべる、しかしそれは悪どい笑みだったという

――――
陸士108番隊 食堂

「ホントにアルさんには苦勞させられるわ：レキ君もそう思うですよ？」

食堂で少し疲れたように食事を取っているギンガは目の前にいる黒い髪の少年に問いかける

「僕は慣れましたね、あの人の自由っぷりを見ていたら：真面目に

すればちゃんと出来るんですがね」

「それは私もわかるんだけどね…」

黒髪の少年、レキ・アーベントはまだ幼さが見える少年だがその意見はとても達観したものだった

本人曰くアルさんに付き合ってたら精神的に老け込んだとの事らしい

レキの意見にギンガは食事の手を止めて同意する

彼女はこれまで何度かアルフィリオスと模擬戦をしたのだが、大抵は彼が逃避するか良いようにあしらわれて終るというのがほとんどだった

それは彼女が弱い訳では無くアルフィリオスが相手の戦意を無くす事に長けているからである

しかしそんな彼でも犯罪者が相手となれば率先して先陣を切って戦いさらに、面倒見や人柄が良いため陸士108番隊では彼に呆れる事はあっても嫌うものはいないという

レキやギンガも同じだった、しかし普段の態度はどうしても改善して欲しいため注意をするが聞き流されてるという

「おっ！ いたいた、レキちゃん、ちょっと良いか？」

「…僕はレキです、ちゃん付けは止めて下さい」

二人がアルフィリオスの話しをしているとその本人が遠くからレキの名前を呼びながら近づいてくる

レキはため息混じりに返すとアルフィリオスの方に視線を向ける

「悪かったってそんなに目くじらをたてるなよ…」

「お父さんからの話しは終わったんですか？」

自分を睨み付けるレキにアルフィリオスは苦笑しながら謝るとギンガがちゃんとしたか確認をしてくる

「ああ…まあな」

「今度は何をやらかしたんですか？」

「酷い言い方をするな…ギンガとのデートがバレただけだ」

睨み付ける視線をアルフィリオスに浴びせながらレキは質問をする
とアルフィリオスは口を尖らせながら返すと食堂全体の空気が冷た
くなった

「な…何を言ってるんですか!？」

デートじゃなくてアルさんがお昼を奢ってくれただけでしょ!

なんでデートになってるんですか!？」

冷めた空気の中でギンガが顔を赤くし慌てて否定をしてから事実を
説明する、アルフィリオスはしてやったりと意地悪い笑みを浮かべ
ていた

「人の財布の中身を食い尽くす程に食べた仕返しだ…まあ本当は新
設された部隊に出向することになったんだよ」

「新設された部隊? アルさんも大変ですね」

「ちょっと！無視しないで下さい、二人共！！」

「何を言ってるんだ？レキ、お前も行くんだぞ？」

騒いでいるギンガに構う事も無くレキはアルフィリオスに興味無さげに返すと、アルフィリオスもギンガを無視しながら、極上の笑みを浮かべながらレキに返答する

今まで興味のなく無表情だったレキに困惑の色が現れる、そして口にした食事を飲み込むとアルフィリオスにつめかかる

「ちょっと、待って下さい！！なんで僕まで行くんですか！？？」

「いやあ、俺一人じゃ寂しいからさ」

「今年で21になる人の理由じゃないでしょ！！」

「レキが泣くんじやないかなって思うと…」

「泣くかつ！？むしろ清々しますっ！！」

「かくかくしかじか」

「んな言葉が通じる訳無いでしょ！！」

にこやかな笑みを浮かべながら適当な理由を述べていくアルフィリオスに、レキは苛立ち混じりにツツコミをいれていく
それでもアルフィリオスは特に表情を変えずにいた

「なあレキ？事後承諾って言葉知ってるか？」

「何を言っ…て…」

アルフィリオスは懷から一枚の紙を取り出してレキに見せる
そこには異動届と書かれており氏名の欄には「レキ・アーベント」
と書かれていた

アルフィリオスはグツと親指を立ててからいい放つ

「書類は出しといたからもう決定済みさ！
行こうぜ！機動六課！！」

「だが、行くかぁー！ー！ーっ！！」

昼下がりの午後、陸士108番隊にて一人の少年の絶叫が響き渡った
この一つの決断がこれから先の大事件に二人を巻き込み事になると
は誰も思いはしなかった

今、自由奔放な魔導士と苦労性の魔導士の物語が始まる

EP01：行こうぜ！機動六課！！（後書き）

どうも、えのきです

思いの他時間がかかりました、自由奔放なキャラって楽しそうで楽しやないです

何処までして良いか制限がつき辛かったです

さて次回はいいよ、機動六課に出向ですがアルフィリオスが黙っているでしょうか？

いえ大暴れさせます！（笑）

次回から原作の次回予告風にしていこうと思います

魔法少女リリカルなのはStrikerS（夜天に舞い踊る荒鷲）
EP02：先輩、参上！！にテイクオフ

EP02..先輩、参上!! (前書き)

ドナドナ先生から前作者きのこのこととして貰った、バトンをこの前書きとあとがきでやりたいと思います!

この小説のイメージOPは

『強ing! Going! My Soul!!』 (ダイナマイトS
HU..元ネタ・デジモンセイバーズ)です

EP02..先輩、参上!!

SIDE..アルフィリオス

それは四年前の事…

「先輩…やっぱり、私は部隊を立ち上げたいです」

一人の少女の決意を聞いた…俺は少女の肩に手を乗せてから

「ならやってみろ、お前のやりたい事ならな」

「アル、先輩…」

「もし迷ったならいつでも呼べよ、俺が…」

俺の励ましに少女は嬉しさと期待に満ちた目で見つめていた

「全力で、冷やかにいってやるっ!!」

「こおんの!アホ先輩——っ!!」

親指を立てて最高の笑顔を送ったら全力で砲撃を撃ち込まれたんだ
よな

「なんでだと思う？」

「答える価値もありません…」

ミッドチルダの道路を車で走りながら俺はレキにはやての事を話していた

走り出してから不機嫌そうにしているレキを横目でみながら俺は機動六課へと車を走らせる

話を聞いてからレキは余計に不機嫌になり俺に文句をいつてくる

「それにしても冷やかしに行くなんて失礼過ぎでしょ、八神さんはアルさんを信頼してたんですよ？」

「知ってるよ、けどな…俺はアイツなら手を貸さなくても自力でなんとかする

そう信じてんだよ」

「でも…」

レキの文句に俺は車を運転しながら答える、レキは俺の答えに納得ができないのか、少し渋っていた

「アイツは魔導士としても女としても強い…だから大丈夫だと思うんだ

もし無理してたらそんな時は手を出すさ」

「信頼してるんですね」

「ああ、自慢の後輩だからな」

ようやく納得したレキは俺に向けて聞いてくると俺は笑みを浮かべて返す

「あの…もう一つ聞きたいんですが…」

「どうした？」

「なんで僕はバインドをかけられてんですか？」

レキは少し言いにくそうに自分の身体に視線を移し胴体に巻かれている赤いバインドに目を向ける、ちなみにかけたのは俺だ

「そりゃいきなり逃げるからだろうが…いくら納得出来なくても逃げちゃダメだろ？」

「逃げたのは朝方いきなり部屋に「アイ！ゲッチューーっ！！」なんて叫びながら入ってきた不審者が居たからですよ」

「誰だい？それ「アンタだよ…」」

むう、言い終わる前に台詞を被せるなよ
つまらないぞ

仕方なく俺はレキのバインドを解除する、レキは身体を動かして解すとジロツと俺を睨んできた

「これから部隊に入るんですからしっかりして下さい、せめて稼働

式は普通にしてて下さいよ？」

「わかったって普通にしてるよ…」

いつものように口煩く言うレキに返答すると俺は少しだけ笑みを浮かべる

普通にはするさ、俺基準だけだな
初めての奴もいる第一印象は派手にいかないと、な…

機動六課 部隊長室

「…遅い…いくらなんでも遅すぎや
本当に来るんやろうな？」

新設された部隊、機動六課の部隊長室にてその少女の唸り声が聞こえた

栗色の髪の少女、八神はやては腕組みをしながら椅子に座りチラチラと時計を見ている

その横ではサイドテールの少女と金髪のストレートの少女さらに銀色の髪の小さな妖精が心配そうに見ていた

「ナカジマ三佐から今日、出向してくる魔導士がいるというのは聞いたけど…いくらなんでも遅すぎや!!」

とうとう耐えきれなくなったのかはやては机をバンと叩いて立ち上がる

「はやて、落ち着いて！きつと何かあったんだよ！！」

「そうだよ！だからそんなに怒らなくてもいいんじゃない？」

「落ち着いて下さい、はやてちゃん！」

はやての行動に横にいた三人ははやてを宥めようと言葉をかける

「せやかて、フェイトちゃん、なのはちゃん、リイン…さすがに遅れるのはどうかと思うで？今日は機動六課の稼働式なんやから」

はやての恨めしそうな声に金髪の少女、フェイト、サイドテールの少女、なのは、銀髪の少女、リインフォース？は言葉を無くしたその時、部隊長室に通信が入る

《八神部隊長、そろそろ稼働式の時間ですが》

「あ、もう時間か…ありがとうな、グリフィス君…仕方ないからまずは稼働式を済ませようか…」

通信を入れてきた眼鏡の青年、グリフィス・ロウランにはやては礼を言うと言った稼働式を済ませる事にして三人と共に部隊長室を後にする

へなのは…はやて、ずいぶん落ち込んでるね…

へ多分、陸士108番隊から来る予定の人が来なかったからじゃない

いかな？

もしかすると知り合いじゃないかって話してたから▽

はやての後ろを歩きながらフェイトはなのはに念話を送る
前を歩くはやてはどことなく納得の出来ない顔をしていた

へそれってはやてが前に話してた先輩のことだよね？▽

へうん、凄くお世話になったって…でもその人かどうかはわからないけど、はやてちゃんは信じてみたいだから▽

へそっか…でも心配だね、ちゃんと来ると良いんだけど▽

フェイトは念話でなのはに問いかけるとなのはは黙って頷き念話で
返答する

前を歩くはやてを心配しつつフェイトとなのはは出向してくる魔導
士の事を考えた

機動六課 ロビー

稼働式がはじまり、はやての挨拶が終わろうとしていた時だった

「フッフ…アーハッハッハー!!」

突如ロビーに男性の笑い声が響き出す

隊員達は辺りを警戒し始めるが姿は確認出来ない

するとはやてと隊員達の間にかプセルのようなモノが横から投げ込まれると爆発を起こしロビーを爆煙が包み込む

「なんや！？いったいなんなんや！！」

「なんだ、かんだと聞かれたら答えてやるのが世の情け！！」

爆煙に包まれ咳き込みながらはやてが叫ぶと先程の笑い声と同じ声が響く

そして煙が晴れてきた時にはやてと隊員達の間一人の男性が機動六課の制服に身を包んで佇んでいた

「俺！参上！！」

男性は右腕を高らかに上げて叫ぶ、彼の行動に隊員達は啞然としていた

「なんだ？なんだ？反応無しですか？」

隊員達の反応が無いことに男はやれやれといった感じに呆れるが、隊員達が啞然とした理由は他にもあった

まず一つは男の恰好だ、服装は普通の制服だったが何故かバタフライマスクをつけていたそして男の左手にはバインドと猿轡をされた黒髪の少年が抱えられていた

「あっ！もしかして名前を名乗って無いからか？ソイツは失礼した…俺の名前はアル、メルポっ！？」

黙ってしまってるのは自分の名前を知らないからじゃないかと考えた男は名前を名乗ろうとした瞬間、後ろからはやての守護騎士の一人ヴィータのグライフアイゼンの一撃によって床に沈んだ

「てめえ…よくもあたしの前に姿を見せられたな…アルフィリオス…」

愛機であるハンマークラーフアイゼンを男、アルフィリオスに向けるとまるで宿敵に出会ったような口調でヴィータは言う、アルフィリオスは身体を起こしてヴィータの方を向くといったものと変わらない笑みを浮かべる

「よお、ヴィータ…相変わらずの一撃だな
どうした？そんなに怒ってもしかして…アノ日か？」

「……っ！」

ヘラヘラと笑いながらヴィータに問いかけるとヴィータはグラーフアイゼンをアルフィリオスに向けて降りおろす、鈍い音がロビーに響き渡る

「おぶあ！？ヴィータ！」

落ち着け、頼むから無言で殴るのは勘弁してくれ！」

「うるせえ！毎回毎回、騒ぎを起こしやがって！！」

「げふお！！ヴィータ…頼む、話を聞いてくれじゃない下さい！」

「…ちっ…仕方ねえな、最期の言葉くらいは聞いてやるか」

「最後が末期の期になって…すみません、真面目にやります」

グラーフアイゼンで殴られながらアルフィリオスは懸命にヴィータに訴えるとヴィータは最後の情けという感じに言う

アルフィリオスはヴィータの台詞にツツコミを入れるが彼女の視線により直ぐ様謝る

アルフィリオスはよろよると立ち上がるとヴィータに目を向ける、
ヴィータはアルフィリオスの言葉次第でいつでも殴れるようにグラ
ーフアイゼンを握り直す

（謝るだけじゃダメだな…誠意を見せないと） 「ヴィータ…本当に
ごめ〜んちやい♪」

アルフィリオスはヴィータを見ながら思うと小首を傾げて猫なで声
でヴィータに謝る

その瞬間…ロビーの空気が絶対零度まで下がった…

「…アイゼン…カートリッジ、ロード…」

ヴィータの呟きにグラフアイゼンは応えようとカートリッジを三発
分ロードし形態を身の丈以上の形に変形させる
ギガントフォルム…リミッター状態でも放たれるヴィータの必殺の
形態だった

そして処刑を執行するためにアルフィリオスに一步ずつ近づいていく

「とりあえずな…いっぺん、死んどけ!!」

ヴィータの怒号と共に機動六課に局地的な地震が発生した
震源地は新設されたロビーでそこにはクレーターと一つの人間の形
をした何かがあった

機動六課 部隊長室

「それで：何か言うことは無いんか？先輩」

部隊長室にて八神はやては目の前にいるアルフィリオスに言葉を投げ掛ける

はやての横にはなのはにフェイト、

先程アルフィリオスに処刑を執行したヴィータ、そしてヴィータと同じ守護騎士であるシグナムにシャル、ザフィーラ最後にリインフォース？がいた

ちなみにアルフィリオスの恰好はボロボロの六課の制服姿で石畳にバインドをされたまま正座をし、膝の上には石が3つ程つまさっていて額には反省中という紙を貼り付けてるという状態だった

「ねえ、はやて：あの状態はマズイと思うよ？」

フェイトはさすがに可哀想に思えてはやてに言うとはやては凄く呆れた様に返す

「心配はいらんよ、フェイトちゃん：

アレは偽物やから、下は発泡スチロール、石は大きなこんにゃくやからな」

「反省中の雰囲気だけでも出したくてさ」

はやての言葉に黙っていたアルフィリオスは愉快的な声を出しながら言う。と膝の上の石がぷるぷると動き、石畳からはキュッキュツと発泡スチロール独特の音になる

「ねえ、はやて…射っても良いよね？」

「待ちや、フェイトちゃん

気持ちにはわかるけどまだアカンよ」

心配した自分がアホらしく思ったフェイトはデバイスを起動させてからはやてに問いかける
はやては片手で制止をしながらアルフィリオスに目を向ける

「先輩が機動六課に出向してくる魔導士でええんやな？」

「ああ、そうだ…ゲンヤさんから頼まれてなにしても本当に設立しちまうとはな…すげえな、はやて」

「先輩が励ましてくれたおかげや♪
改めて…アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉の出向、承認します」

「ああ、堅苦しいの苦手だから緩く挨拶するけど
部下のレキ・アーベントと共によろしくな」

バインドと張り紙を取ってからはやての質問にアルフィリオスは答えると、はやてはにこやかに笑いつつ言う。とアルフィリオスも微笑して右手を軽く上げて応える

今、この時を持ってアルフィリオス・ラーゼンハルグは機動六課の

仲間入りを果たした

「それじゃあ先ずは先輩に稼働式を邪魔したお仕置きをせんとな…」
「あれえ？今までの雰囲気台無しじゃね？」

挨拶を終えるとはやてはゆつくりと立ち上がりこやかな笑みを浮かべながら、アルフィリオスにいい放つ

アルフィリオスはつられて笑みを浮かべながら後退りする

「まあ…それはそれ、これはこれ、やな…
さて覚悟はええか？先輩…」

「アッハッハ…まいったぜ…」

アルフィリオスのその言葉を最後に、部隊長室から凄まじい爆音と断末魔が六課に響き渡った…

EP02..先輩、参上!! (後書き)

読んでいただきありがとうございます

前書きの続きですが

イメージEDは

『青空デイズ』（中川翔子..元ネタ・天元突破グレンラガン）

ちなみにその日、機動六課の話し辺りで変更します

いわゆる第二期というやつです

OPはアルフィリオスをイメージして、EDはレキをイメージして
貰えると嬉しいです

続けてイメージC Vに移ります

アルフィリオス・ラーゼンハルグ..三木眞一郎

レキ・アーベント..折笠愛

ガンダムとテイルズ繋がりの人になりましたね..

ともかくバトンは以上です

それでは次回予告にいきます

アルフィリオス「機動六課が始まり初訓練..皆、頑張ってますなあ
..ってなんで俺までやるんだよ!？」

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS~夜天に舞い踊る

荒鷺くEPO3…初訓練！見学ととばかり…にテイクオフ！…面倒だからバックレようかな…」

すみません！レキ君の年を今回公表すると感想に書きましたが次回に移ります…本当にすみません

EP03：初訓練！見学ととばかり（前書き）

今回は原作でいう最初の訓練です

レキ君の活躍をご覧ください

誤字脱字があれば教えて貰えると嬉しいです

EP03：初訓練！見学ととぼっち

それはアルフィリオスの断末魔が六課に響く少し前のことだ

稼働式を終えたレキはフォワードメンバーと合流するために休憩室に向かっていた

本当ならアルフィリオスに文句ついとして一撃入れようかと思えたが、はやてに連行されたのを見てする必要があると考えフォワードメンバーと合流する事を選んだ

「どうやらここみたいだ」

廊下を歩いていると休憩室と書かれたプレートを見つける事ができたレキは中を覗き込む

中には赤い髪の少年とピンク色の髪の少女がいた、少女の近くには白いトカゲのような生物が寝ていた

（使い魔？ともかく…あの子達がフォワードメンバーだろうな）
「…あの、君達がフォワードメンバーかな？」

レキは休憩室に入ると少し緊張しながら二人に話しかける
二人はレキが話しかけると勢い良く立ち上がり敬礼をする

「はい、エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

「同じく、キャロ・ル・ルシエ三等陸士であります！それとこちらは飛竜のフリードです」

「キュク」

「僕はレキ・アーベント、コールサインはライトニング5よろしくね、二人とも」

見た目より丁寧に自己紹介をする二人に、キはちゃらんぽらんな上司とは違うと思いながら自己紹介をしてエリオに手を差し出す

差し出された手にエリオはしっかりと掴むんで応える

次にキャロに同じように手を差し出すと少しだけ緊張しながらゆっくりと握り返してくれた

エリオとキャロを見てふと気がついた事ができたレキは失礼と思いながら聞いてみる事にした

「二人は今、いくつなのかな

差し支えなければ教えてくれないかな？」

「僕は10歳です」

「私も10歳です」

「教えてくれてありがとう、僕は12歳だよ：そんなに歳も変わらないから敬語とかは抜きで良いよ」

二人の年齢を聞いてから礼を言うレキも自分の年齢を言ってからあまり堅くならなくて良いと二人に言う

「うん、レキがそれで良いならそうさせて貰うよ」

「私もあんまり慣れてないけどよろしくね、レキ君」

最初は戸惑いを覚えていた二人だが歳が近い事で納得できたらしく敬語を無くして話してくれた

二人が敬語をやめると言った時に話し声が聞こえてきた
声の感じで二人くらいだろうか？

「うわっ！？もうメンバー揃ってる、遅れちゃったみたいだね、ティア」

「アンタがノロノロしてたのが悪い、ほら挨拶をしに行くわよ」

休憩室の入り口で驚いたような声が聞こえるとそこには青い髪のシヨートカットの女性とオレンジ色のツインテールの女性が立っていた
青い髪の女性はレキ達が揃っていることに驚いたらしく少しだけオーバーなりアクションをし、ティアと呼ばれた女性はやれやれと言った感じに頭に手を当てると、青い髪の女性の背中を叩いてレキ達に近づいてくる

「アンタ達がフォワードメンバーでしょ？あたしはティアナ・ランスター」

階級は二等陸士それでこっちが」

「あたしはスバル・ナカジマ！
階級はティアと同じの二等陸士で15歳だよ、あっ！ティアは16歳なんだよ」

「レキ・アーベントです、こちらはエリオ・モンディアルにキャロ・

ル・ルシエそして飛竜のフリード：二人は三等陸士で、10歳です」

ツインテールの女性、ティアナはレキ達に確認を取ると自己紹介をする、それに続けて青い髪の女性、スバルは自己紹介をしてティアナと自分の年齢を教える

レキがエリオとキャロの分まで紹介をした時にスバルは不思議そうにしていた

「あれ？レキは同じ年じゃないの？」

「あ、忘れてました

僕は12歳です、階級は一等陸士」

「「「えっ!?!」」」

スバルに質問をされた時、しまったという表情をしてからスバルに年齢と階級を教える

すると全員が驚愕の声を上げる、当然だ：スバル達には自分より年下のエリオ達は自分達と差ほど変わらない年齢の少年が自分達より上の階級なのだから

「階級が上だからって敬語はいらないですよ、僕は敬語が苦手なのでそれじゃあそろそろ行きますか、高町教導官が待っているでしょうから」

レキは驚くスバル達に特に気にする様子もなく言う

階級や年齢の事を驚かれるのはレキにとって日常茶飯事なので今更どうということがないからだ

レキは移動を提案して休憩室を出ていく、呆けていたスバル達も続

けて休憩室を出る

スバル達が休憩室を出た途端、凄まじい轟音が廊下に響き渡る
突然の事にスバル達や隊員は慌てるがレキはやれやれといった感じ
にため息をつく

「アルさんが何かやらかしたんでしょう
まあ気にする必要は無いですよ」

それだけ言うのとレキはスタスタと先に歩いて行ってしまう

「レキってなんか冷めてない？」

「むしろあれは達観してるって言った方が正しいわね」

歩いていくレキを見ながらスバルは問いかけるように言う
とティアナは自分と同じようにたくさん苦労したんだと思い
少しだけ同情するように言う

エリオとキャロは何も言えずにいた

「うう…身体が痛いぜ、はやての奴…もう少し加減しろよな」

「でも自業自得だと思いますよ？アルフィリオスさんが悪戯したか
ら砲撃を射ったんですから」

はやての砲撃を受けたアルフィリオスはよろつく身体を引きずりな

がらなのはと共に移動していた

文句をいうアルフィリオスに前を歩くなのはは彼に事実を言う
アルフィリオスは自覚があるため言い返しはしなかった

「アルでいいぞ、長いだろ？俺の名前：それと同じ階級なんだから
敬語も使うな、堅苦しいのは好かないんだ」

「はやてちゃんが言ってた通りだね：うん、良いよ
ならアルさんって呼ぶね」

「なんて言ってたか気になるんだが聞いても良いか？」
アルフィリオスが敬語を無くしてくれと言うとなのはは、はやての
名前を出してから納得したように言う

アルフィリオスは何故はやての名前が出たのか気になり、なのはに
質問を投げ掛ける

「はやてちゃんから、先輩は礼儀とか考えて無いし、本人も敬語が
嫌いだからしないで良いって：まさか本当だとは思わなくて」

「はやての奴：どんな評価してやがんだよ
確かに敬語は嫌いだけだよ」（いちいち言わなくても理解できる所
を喜ぶべきかそこまでボロクソ言われて凹むべきか：悩むぜ：マジ
で）

「アルさん、大丈夫？訓練スペースについたんだけど」

頭に手を当てて落ち込むアルフィリオスを見ながらなのはは不思議
そうにしながら呼びかける

アルフィリオスが顔を上げるとそこには広い空間があった、しかしそれだけで何もなかった

「訓練スペースっていうわりには何もないんだな…ここでやるのか？」

「にやはは、さすがにここじゃやらないよ、シャーリィー準備は出来てる？」

「はい、なのはさん
今最終チェックをしています」

首を傾げる俺になのはが苦笑して答えると訓練スペースの側でモニターを開いている眼鏡の女性に話しかける

モニターを操作していた女性はその手を止めてにアルフィリオスの方に目を向けてから身体をアルフィリオスに向ける

「はじめまして、私はデバイスマスターのシャリオ・フィニーノ一等陸士です、シャーリィーって呼んで下さい、よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくな、シャーリィー
それで、種明かしはいつしてくれんだ？なのは」

「フォワードメンバーが来てからかな、だからもう少しだけ待っててくれる？」

眼鏡の女性、シャーリィーに挨拶をしてからアルフィリオスはなのはに、視線を向けてから訓練スペースについて質問をする

なのはシャーリーとは別のモニターを展開して操作をしながら
フォワードメンバーが来てから見せると答える

アルフィリオスはそれを聞くと退屈そうに欠伸をしながら後ろに手
すりがあるのを発見してなのはに声をかける

「ならただ突っ立っているのも疲れるし、少し後ろの方にいるから
な？」

「いいけど、暇だからって寝ないでね？」

「わーお…信用ねえな

大丈夫、善処はするから」

モニターを操作しているのはは一旦手を止めてからアルフィリオ
スの方を向いて注意する

アルフィリオスは乾いた笑みを浮かべながら手をヒラヒラと動か
して手すりの方へと歩いていく

SIDE…アルフィリオス

それから数分後にレキ達はやってきた、俺と同じで何もない事に驚
いていた

さてさて、どんなのが出てくるのやら

俺がそう思っているとシャーリーがパネルを操作していく
すると訓練スペースの中央に廃墟都市郡が浮かび上がる、ホログラ

ムか：手が込んでるわアイツらすごい驚いてるし

「まあ俺も驚いたんだけどな、こんなに驚いたのはギンガの食事量を見たとき以来だな」

「その例えは無いだろ…」

俺の呟きに誰かがツツコミを入れる、後ろを振り向くと呆れた顔をしている小さな鉄槌魔神ことヴィータがそこにいたいきなり後ろに立つなよ、びっくりするだろ？

寿命が5年程縮むかと思ったぜ

「お前がそんな肝っ玉の小さい奴かっての
つうか、誰が小さいって？」

何故、心の声に反応しやがる！？

何この子、読心術でも取得しやがったか？

やべえ、プライベートとかねえじゃん

「全部口に出てんだよ：あたしもいちいちツツコミをいれたくねえ
から黙ってる」

次にボケたら脳天カチ割るからな？」

「イエスマミー…ごめんなさい、すみませんでした！
だからグラーフアイゼンを振りかぶらないで！！」

ヴィータは面倒くさそうに言う俺の身体にグラーフアイゼンの尖端を押しつける、正直痛い…

目の前にボケキラーがいる…だけどここでボケないとボケとしての
プライドが許せねえ！？…そんなの捨てちまえ？ひどい事を言うなよ

まあ結果としてカチ割られんのは免れたけどそれに近い状態にはな
ったかな…ヴィータは手加減しねえからな

頭をおさえながら立ち上がるとフォワードメンバーの訓練が始まっ
ていた

内容は自立行動型魔導機械『ガジェットドローン』の撃破

確か機動六課が集めるロストログア『レリック』を搜索してる機械
で製作者が不明なはず資料で軽く目を通したくらいだから詳しくは
知らないんだよな

「ヴィータ：アレって実際はどのくらいなんだ？」

「実際の攻撃頻度と移動スピードは早いけどそれ以外は一緒だ…一
番厄介なのはガジェットはAMFを搭載してるってところだ」

隣にいるヴィータに質問をするとヴィータはモニターを見ながら簡
潔に答えてくれた

説明を聞くとついため息がもれてしまう

「アレ、単体でか…そりゃ苦勞するわな

しかもAMFを使うんだから動力も永久機関ってところか」

「アイツらが何処まで対応出来るかを見るのが最初の訓練の目的だ
…そこからあたしらが伸ばしていく、だからお前もサボるなよ？」

「ああ…さすがに死なせるのは勘弁だからそこはマジメにやるさ」

「なら良い…後、頭を撫でるな」

ガジェットドローンに手こずっているフォワードメンバーを見ながらヴィータは俺に釘を刺す、俺は微笑をしてからヴィータの頭を撫でながら答えると物凄い睨まれた…相変わらず子供扱いは嫌みいだな

ヴィータをからかいながら俺はフォワードメンバーに視線を移す、もうそろそろレキが動きだす頃だな…

――――
SIDE…レキ

訓練が開始してから此方はガジェットに翻弄されてばかりだった

出会って直ぐだからお互いのクセも把握は出来てない、それをいきなり訓練させるなんて高町教官はずいぶんとスパルタな事をするものだ…

だからと言って何も出来ないのは嫌だ…自信が無いけど、やってみるか

《ライトニング5からフォワードメンバーへ…このまま各個撃破していてもラチがあかない

皆、指示を出すから合わせてくれないか？》

《わかったわ…確かに撃破出来ないのは我慢ならぬわね

良いわ、アンタの指示に従うから」

《私も良いよ！レキ、頑張って》

《《よろしくお願いします！！》》

念話を使用して全体に通信を送るとそれぞれが賛同をしてくれた手があるならやりようはいくらでもある

僕はそう考えると皆に最初の指示をだす

《まずは全員の使用できる魔法を確認したい》

――

「あれ？皆の動きが変わってきましたね」

「誰かが指示を出しているんだと思う…多分、レキ君かな？実戦経験があるから」

データを収集していたシャーリーは動きが変わったフォワードメンバーに少し驚いた

なのはモニターを見ながら情報を冷静に分析すると自分の予測を出す

彼女の言う通りモニターではレキが地図を見ながら指示を出すレキの姿が映っていた

S I D E ..レキ

皆の魔法を確認してから僕は地形を把握するそして活用出来そうな場所を見つけると全員に指示を出す

先ずは目的地までスバルさんが誘導するように追いかける
フォワードメンバーの中で一番、機動力があるからだ

その間にエリオ、ティアナさん、キャロが目的地に先回りしておく
ガジェットが分散しないように目的地まで誘導すると、今度はエリオの定番だ

歩道橋の上でガジェットを待ち伏せして貰い近づいたら、カートリッジによって強化した一撃で歩道橋を破壊してもらう

魔力攻撃ではなく落石による質量攻撃にガジェット達はなすすべもなく飲み込まれる、しかしそれは先頭にいたガジェットだけであった

落石を逃れた五体に火炎弾が放たれる、二体くらいは何とか避ける
が三体は直撃を食らうがガジェットは機能を停止していなかった、
だが地面に魔方阵が展開しそこから生成された鎖によってガジェットは捕縛される

最初の火炎弾はフリードのブラストファイアで鎖はキャロの魔法、
アルケミックスチェーンだった

《ティアナさん！残り二機のうち一つはお願いします！》
《ええ、アンタこそ仕留めそこなうんじゃないわよ！？》

ビルの上で状況を伺っていた僕は逃げたガジェットを追いながらティアナさんに指示をだすと短く返事をしてから僕に言葉を投げ掛ける僕はティアナさんの言葉を聞いた後、右手を振り抜く動作をして待機状態に戻して置いた白を基調とした双刃剣型のデバイス『ファフニール』を展開する

「ファフニール、先ずはガジェットに追いつく…ソニックムーブ！」

「了解だ、レキ！ソニックムーブ！」

ビルの上を飛びうつる様に移動して前方に逃走するガジェットを確認するとファフニールに指示を出す

ファフニールの男性型、電子音声が響くと僕の身体に水色の魔力光が僕の身体を包み込みガジェットの前に高速移動する

「次にシフトB…^{バレット}多重弾核を連続で撃ち込む」

「了解、シフトB！ツインガンモード」

高速移動を完了させると直ぐ様、ファフニールに指示を出す

ファフニールは双刃剣は分離して双剣になると縦半分に割れると双銃の形になる

僕は双銃形態のファフニールをガジェットに構えると多重弾核で形成された魔力弾を撃ち込んでいく

僕の魔力弾はスピードと命中性を重視しているため威力はそこまで無い

だからこそ、連続で撃ち込んで相手を完膚なきまでに倒すやり方しか出来ない…それでも十分なんだけどね

僕は爆散するガジェットに目もくれずにみんなの場所へと移動を開始する、もし手間取ってたら支援するためだ

――――

「レキの戦い方はずいぶん豪快だな…あそこまで撃ち込むなんてな」

「まあ動かれても厄介だろ？あれくらいで良いんだよ」

レキの戦い方を見ていたヴィータは意外そうな声を出す

アルフィリオスは特に気にする事も無く言う

するとなのはがいきなりアルフィリオス達に通信を入れてくる

「アルさん、少し良いかな？」

「なんだ？出来れば簡単な用事にしてくれよ？」

「今からフォワードメンバーのお手本としてガジェットと戦って欲しいんだけど」

「嫌だ、めんどへガジェットが嫌ならヴィータちゃんと模擬戦して貰うよ？」全力でやらせて頂きます！！」

なのはが唐突に頼んできた内容をアルフィリオスは断ろうとしたが、ガジェットが嫌なら隣にいるヴィータと模擬戦して貰うと言われると態度を180°変えて了承する

「そんなにあたしとの模擬戦は嫌か？」

「まだ生き残れるからな…」

「…なのは、アルフィリオスがどうしてもあたしとやりたいとき」「ちよっ!?!? 待って!」

「そうなの? なら…良いかな」

隣にいたヴィータは睨み付けるようにアルフィリオスに聞くとアルフィリオスは親指を立てて答える

その途端、ヴィータは青筋をたててなのはにアルフィリオスと模擬戦をすると言い出す

なのはは苦笑をしながら了承をして通信を閉じる
希望が絶たれて地面に膝をつくアルフィリオス
その肩にヴィータはゆっくりと手を置いて

「じゃあ、行くか…」

そう短く言うアルフィリオスの首根っこを捕まえて引きずりながら訓練スペースに移動していく

その姿はまさに死刑囚と処刑執行人であった

EP03：初訓練！見学ととぼっち（後書き）

EP03を見ていただきありがとうございます
えのきです

今回はレキの戦闘描写なんですがいかがでしたか？

彼の戦い方はTOGのキャラを元にしました

そろそろレキ君の説明も製作していこうと思います

それでは次回予告です

レキ「アルさんは余計な失言によってヴィータ副隊長と模擬戦をすることになりました

これを機に人格改善されると良いのにな：

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP04：激突！紅の鉄騎vs荒鷲にテイクオフ

まあ死なない程度に頑張ってくださいね、アルさん」

EP04：激突！紅の鉄騎VS荒鷲（前書き）

アルフィリオスVSヴィータです
上手く出来てると嬉しいです

EP04..激突!紅の鉄騎vs荒鷲

SIDE..アルフィリオス

世の中には…納得のできないものがある…

なんで俺はヴィータと模擬戦をせな、いかんの？

いや…俺がわるいんだけどね

ビルの上で俺は膝について落ち込んでいた

ちなみに少し遠くの方にヴィータがバリアジャケットとグラーフアイゼンを構えている

完全に戦闘体勢だな…あれは

《アルさん、準備が出来た?》

「心の準備が《大丈夫そうだね》少しだけでも良いから聞いて」

通信を入れてきたのは俺の返事を聞く前に判断をする
なのは、容赦がなくなってきたな

やれやれとため息を吐くと俺は自分の首にかかってるネクレスに
手を添える

「イーグル…良いか?」

「スタンバイ完了…いつでもいけます」

「行くか、イーグルレイダー…セットアップ!!」

「了解！」

ネックレスから女性型の電子音声が響く赤い魔力光が俺の身体を包む
ネックレスは待機状態から戦闘状態である複合機関銃の形態に移行
する

イーグルレイダーのトリガーを握るとバリアジャケットを展開する

俺のバリアジャケットは武装隊のアンダージャケットを黒くしたも
のに黒いロングコートを羽織ったものだ

良く烏みたいだと言われるが黒が気に入ってるのだから仕方ない

「文句言っても仕方ねえな
さあて、やるとしますか……」

魔力光を振り払うようにイーグルレイダーを振るとヴィータに視線
を向けながら俺は呟く

向こうがやる気になってる以上、応えるしかないよな

――――

《それじゃあ、レディ……ゴ―っ!!》

互いの準備が完了したのを確認してからなのはは模擬戦を開始する
合図を出す

それと同時にヴィータとアルフィリオスは距離をつめる

最初に仕掛けたのヴィータからだった、グラーファイゼンを振りか
ぶりアルフィリオスの頭部、目掛けて勢い良く降り下ろす

アルフィリオスはイーグルレイダーの銃口でグラーフアイゼンの軌道をずらすと、そのまますり抜けるように移動をしてからヴィータに向けて魔力弾を連続で発射する

ヴィータは右手にグラーフアイゼンを持つと左手にシールドを展開して魔力弾を防ぐ

「相変わらず堅い防御、だことで…」

「フロントアタッカーが柔じゃ意味がねえから、な！」

「っち!?!」

ビクともしないシールドを見てアルフィリオスは苦笑をしてから言う、ヴィータが当然だと返し防御を展開しながらアルフィリオスに向けて片手でグラーフアイゼンを降りおろす

イーグルレイダーの銃身で受け止めるがヴィータの一撃の重さにアルフィリオスは顔を歪める

「このぐらいじゃないだろ…てめえの実力は！」

「ったりめえだ! イーグル、リッパーだ!!」

「ブレード、オン! 刀身固定します!」

「うおおおっ!!」

グラーフアイゼンをイーグルレイダーで防ぐアルフィリオスに向け

てヴィータは問いかけると、アルフィリオスは防ぎながらイーグルレイダーに指示をだす
銃身とは真逆の位置から仕込み刃が展開するとグラーフアイゼンを振り払うように切り払う

――
SIDE…レキ

「アルさん…ようやくエンジンがかかりましたね」

始まった二人の戦いを僕は少し離れたビルから見ていた
高町教導官は参考になればいいと思ったんだけど…正直…

「真似…出来ないよね」

「あたしらでできたら凄いわよ…近接型しかもベルカ騎士の一撃を
そらした上での反撃なんて、受け止めることすら出来ないわよ」

とまあスターズの二人の言葉だ…これには僕も同意だ…エリオとキ
ヤロは時々ハラハラしながら見ていた、観戦だよ…それ

「アルフィリオスさんのデバイスって射撃型に見えて近接もできる
両方こなせるタイプみたいですね」

「射撃、斬撃、さらにアレは杭打ち器？ 凄いの装備しているんだね」

僕達の後ろでは高町教導官とフィニーノ一等陸士がイーグルレイダーの分析をしていた

まあ教えるくらい良いかな

アルさんは面倒そうに思うけど

「イーグルレイダーは元々、多種多様をこなせるデバイスの試作品なんですよ

まあある理由から計画は凍結されたんですけど」

「レキ君、なんなの？理由って…」

「杭打ち器、ステークっていうんですが威力が高すぎて使用者の身体を破壊する恐れがあったんです

カートリッジを一つ使って撃ち出す杭ですからね…反動が半端ないんですよ」

イーグルレイダーの説明を聞いて高町教導官や他の皆さんは驚愕の声を出す

当然だ、自殺願望がある奴じゃなきゃ使わない代物なのだから

「なら、アルフィリオスさんは大丈夫なの？」

「本人のバリアジャケットもそうですけど、かなりいいじってるみたいで少しは軽減されてるみたいですよ、ただイーグルレイダーの方が持つかどうか…」

「イーグルレイダーがどうかしたんですか？」

反動についてティアナさんが僕に質問をしてくる
アルさんについてはあまり詳しくは話せなかった、あの人はあまり

自分を語らないから

僕がそう答えると今度はフィニーノ一等陸士が質問を投げ掛けてくる

「今アルさんが使ってるイーグルレイダーは本物じゃないんですよ、コアは本物ですがフレームが少し柔らかいんです、本当のフレームは本局で改修しているんです

だから今のフレームでステークの衝撃に耐えきれるかどうか」

僕はそう答えると再び画面に目を向ける

僕らが目を離していた間に二人の戦闘は激しさを増していた

「ぶち抜けーっ!!」

ヴィータは片手に拳くらいの大きさの鉄球を作り出すとグラーフアイゼンで思いつき叩き、鉄球を打ち出す

魔力を纏った鉄球は凄まじいスピードでアルフィリオスに迫る

鉄球を見据えながらアルフィリオスはイーグルレイダーの銃口を鉄球に向ける

「撃ち落とす! ブレイズバスター!!」

イーグルレイダーの銃口から砲撃魔法が放たれ鉄球とぶつかり合い爆発と爆煙を巻き起こす、アルフィリオスは腕で顔を覆うと辺りを警戒する

「ラケーテンフォーム！」

「うおおりゃあああっ！！！」

電子音声とともにヴィータが爆煙を纏って現れる、その手に持たれたグラーフアイゼンはピックのような突起とブースターが展開するフォーム、ラケーテンハンマーになっていた

「ちい！イーグル！！」

「ソニックムーブ！！」

アルフィリオスは舌打ちをしながらイーグルレイダーの名前を叫ぶとイーグルレイダーはソニックムーブを発動させる

アルフィリオスは後方に高速移動をしてラケーテンハンマーから距離をとると彼のいた位置を横から風ぎ払うようにラケーテンハンマーが振り抜かれる

（やっぱりラケーテンじゃかわされるか…ならっ！） 「アイゼン！カートリッジ、ロード！！！」

「ギガントフォーム！」

ラケーテンハンマーをかわされたヴィータはカートリッジをロードして形態を変える

それは自分の身の丈並みの大槌「ギガントハンマー」であった

「コイツで潰す！ギガントハンマー！！！」

「そいつは勘弁だ！イーグル！ステーキ、セット！！！」

「了解、ステーキカートリッジ、セット！」

降り下ろされるハンマーに合わせるようにアルフィリオスはイーグルレイダーの銃身に装備された杭打ち器、ステーキをむける向けた瞬間凄まじい轟音と共にステーキが打ち出されるハンマーとステーキがぶつかり合った瞬間、魔力同士の激しい爆発が巻き起こる…そして

「チェック、メイト…だな…」

何かが叩きつけられる音とアルフィリオスの言葉がに辺りに聞こえた煙が晴れていくとヴィータの手にグラーフアイゼンはなく、喉元に左手に持ち変えリップパーを展開したイーグルレイダーを突きつけるアルフィリオスの姿があった

「……………」

「ヴィータ？そろそろ機嫌直したらどうだ？」

六課隊舎に帰る最中アルフィリオスは隣で明らかに不機嫌な顔をしているヴィータに声をかける

「別に機嫌なんか悪くねえ…」

「なら睨むなよ…」

「睨んでねえ、これは元々の目付きだからな」

声をかけられるとヴィータは威圧するように睨み付けて返答をする
アルフィリオスはやれやれと言った感じに言えばヴィータは少し拗
ねたように言うと言顔を背ける

それを見てどうするかなとアルフィリオスは深くため息をつく

沈黙が続く中でヴィータは足を止めた

アルフィリオスはヴィータを追い越した辺りで足を止めて振り返る

「アルフィリオス：なんで、普段はやる気無いくせに戦闘になった
ら真剣になるんだよ、バトルマニアか？」

「人をシグナムみたいな言い方をするな
真剣になったのはお前のせいだよ」

「あたしが？ どうしてだよ」

アルフィリオスの顔を見ながらヴィータは質問を投げ掛けるとアル
フィリオスはげんなりした顔をしてからヴィータを指でさして返答
する

ヴィータは理由がよくわからないのか首を傾げてから聞き返す
アルフィリオスは頭をかきながら言葉を探す

「お前が、俺に対して真剣に見てきたから…その真面目に返さねえ
となって思ったんだよ」

「…ずいぶん律義だな…」

そう考えてくれてたなら嬉しいけどさ：でも普段から真面目にした方が良いと思う」

アルフィリオスの理由にヴィータは微笑を浮かべて返すと少しだけ顔を暗くして言い

「悪かったな：別に良いだろうが誰に何を言われようが気にしないし」

「あたしが嫌なんだ、お前がどうしようもない奴なら仕方ないけど、悪い奴じゃないのは陸士108番隊で一緒に行動していてわかる、だからなんも知らない奴に悪く言われんのが我慢ならねえんだよ！」

ヴィータの言葉を聞いてアルフィリオスは苦笑をもらす

今までここまで自分に言ってきた奴がはじめてだったからだ

アルフィリオスはヴィータの頭を左手で軽く撫でてから微笑をする

「ありがとうな、だけど：何も知らない顔も知らない奴等に俺を知られんのは勘弁だ

ちゃんと話し合ってわかりあった奴等に知られたい、まずは六課の連中に知られることからだ：それでも言ってくれて嬉しかった、ありがとう」

「う：気にすんな、これも仲間として当然だからな」

礼を言うアルフィリオスにヴィータは少しだけ言葉をつまらせると顔をそらしてから答える

「仲間っていうなら俺の呼び方、アルって言えよな…最初からずっとじゃねえか」

「言うタイミングを逃したんだよ!…えっと…あ、あ、お前向こうむいてろ!ガン見してたら言いにくい!!」

愛称で呼べといわれるがヴィータは中々言えずアルフィリオスの身体を反転させる

アルフィリオスは苦笑をしながらヴィータに背中を向けて言葉を待つ

「…ア、アル…これで良いか?」

「まあまあかな…もう少し恥じらいを無くせよな」

「無茶を言うなよ…大体な「録音データの保存が完了しました」っは?」

「イーグル…黙っててくれよ、滅多に見られないヴィータなんだぜ?」

たどたどしい喋り方でアルフィリオスの愛称を言うとアルフィリオスはため息まじりに返す、ヴィータが文句を言おうとした時イーグルレイダーの電子音声が二人の耳に届く

ヴィータは突然の事に目を丸くしアルフィリオスは非難をするようにイーグルレイダーに話しかける

「しかしながら録音をする必要は無いのでは?」

「これは後ではやてに聞かせるためだ、珍しいからな…っは!?」

「覚悟は出来てるか？てめえ…」

イーグルレイダーの質問にアルフィリオスは楽しそうに答えると殺気を感じてヴィータの方を見るとそこにはヴィータがグラーフアイゼンを構える姿があった

「ヴィータ：落ち着いて話し合おうではないか…」

「ああ…良いぞ、ただしアイゼンで殴りながらだけどなっ！！
本気で潰す！このバカアル！」

ヴィータの雰囲気におされてアルフィリオスは少し逃げ腰に言うようにグラーフアイゼンを担ぎながらヴィータは答えると怒号とともにアルフィリオスに殴りかかる

余談だが潰されたアルフィリオスは訓練が終了したフォワードメンバーに発見されたらしい

目撃情報によると潰れたトマトのような感じ主に頭を殴られていた
そうだ

EP04..激突!紅の鉄騎vs荒鷲(後書き)

どうもえのきです!

今回のお話はアルフィリオスが六課設立前からの知り合いという設定をフルに活用しました

一応さわり程度に捜査官時代の話はしますがもし詳しく知りたい方は感想かメッセージに書き込みをお願いします

ちなみにヴィータが目立ってメインに見えるかもしれませんが、本命ははやてです!

はやての出番を増やせるようにこれからも頑張っていきたいと思います

次回はいよいよファーストアラートです
お楽しみに!!

EP05：新しい力と初出動（前書き）

ファーストアラート編です！

ようやく、機動六課が始動します

先ずは出動までですがお楽しみ下さい

EP05：新しい力と初出動

朝…それは至福の時、何も邪魔されずに過ごせる時間…あえて言おう

「二度寝は…最高…」

「アル、そろそろ起きた方が良いかと思うのですが」

「イーグル…いい気分なのに水をさすなよ」

二度寝を満喫しているアルフィリオスにイーグルレイダーは呼びかけるとアルフィリオスはシートにくるまり恨めしそうに言う

「しかしフォワードメンバーの早朝訓練が始まってしまいますよ？」

「たしかにそれはまずい…がしかし今日はベッドが温いので行きたくない!!」

部屋にある時計を見るとイーグルレイダーの言う通り訓練の時間であった、しかしアルフィリオスはわざとらしい口調で起きないでいた

「…そうですか…なら一つだけ教えておきますね」

「なんだよ…出来るなら手短にな、早く二度寝したいから」

「ヴィータさんが起こしに来てくれましたよ」

「な…んだ、と…」

中々起きないアルフィリオスにイーグルレイダーは何かを諦めたような口調で話し出す

アルフィリオスはシーツの中で寝ようと目を閉じながら返すがイーグルレイダーの言葉で目を見開く、それと同時に彼の背後からカートリッジの排出音が聞こえた

アルフィリオスはその音で初めて自分以外の気配を感じ取る

奴がいる、確実に：

凶器と呼べるハンマーを肩に担いで今まさにそこに立っている

「さて、何か言うことはあるか？…アル」

（まだ言い慣れてないんだね、名前…いやそれを言えばギガントコースは免れない、ならばどうする！？）

後ろからひしひしと伝わってくる殺気と視線にアルフィリオスは冷や汗を浮かべながら考えた
そして一つを選択をする

「一緒に寝るか？」

「で、出来るかぁーっ！っ！」

アルフィリオスがしたのは自分が出来る最高のスマイルを相手にむけて添い寝を頼むことだった

ヴィータは少し言葉がつまると叫びながら凶器グラーフアイゼンを降りおろす

意識を失う最中でアルフィリオスの目には肩で息をしながら顔を真っ赤にするヴィータが映ったそうだ

S I D E ..レキ

機動六課が稼働してから早一週間が過ぎました

僕らフォワードメンバーは早朝の訓練があり朝が早いのですが大抵はヴィータさんがアルさんを起こす音で目を覚まします

部屋割でアルさんは一人部屋だと喜んでいましたが実際は、起こす時に同室の人がいたら被害を受けるからだと言隊長であるはやてさんから聞かされました

いつもながら寝起きの悪い人だと思う、残業で寝るのが遅いなら仕方ないと思うけどアルさんは残業はしない、ただベッドから起きたくないだけ、理由が単純な分だけに厄介だ

そういった事から起こし役としてヴィータさんが選ばれた、他の人では部屋自体、破壊しそうだからである

最初、フォワードメンバーはアルさんの目覚ましに驚いていたが今は慣れたらしい、適応力が高くて助かる

「それじゃあ本日の早朝訓練、ラスト一本皆頑張れる?」

「「「はい!!」「」「」」

そう考えている間に早朝訓練も終わろうとしていた
皆バテ気味だな…まあそれだけなのはさんの訓練が大変なんだろう
ちなみに僕の呼び方が変わってるのはなのはさん達が親しみを込め
て欲しいからだそうだまあ訓練や戦闘に支障がないならいいと思い
呼んでいる

「じゃあシュートイベーションをやるね、私の攻撃を五分間かわす
か一撃を入れれば終わりだから、ただし一人でも被弾したら最初か
らだからね」

そう言うとなのはさんは魔力スフィアを展開する、簡単に言ってる
けど体力が無い今は難しい

「この状態でなのはさんの攻撃をしのぎきれる？」

「無理！」

「回避より一撃を入れる方が賞賛は高いですよ」

「レキ：ずいぶん余裕だね」

「レキ君は疲れてないの？」

「空元気に近いかな：戦闘では疲れの色を見せたらつけこまれるか
らね、正直体力の限界だよ」

肩で息をしながらティアナさんが僕らに呼びかける、真っ先に答え

たのはスバルさん

素直だけど早すぎるような…

エリオとキャロが僕を見ながら問いかけてくる、たしかに僕は皆と違って肩で息をするほどではないけど

不思議そうに問いかける二人に僕は微笑を浮かべて答える

「それじゃあ準備は良いかな？レディ…ゴーっ!!」

「全員、散開！二分以内になのはさんに一撃を入れるわよ!!」

なのはさんの声と共に誘導弾が放たれる

それを見てティアナさんが僕らに指示を出す
指示を出されるとそれぞれで散らばる

僕らの作戦は単純だった、エリオのデバイス…ストラードによる一点突破…僕とスバルさんはエリオの突撃が出来るように隙をつくるのが役目だ

開始と同時に三つの操作弾が僕の背後につく双刃剣状態のファフニールを双銃に変えると操作弾を撃ち落とす

そして視界の端にスバルさんが操作弾に追われているのが見えた

ティアナさんが撃ち落とそうとしたが、手に持たれたアンカーガンから生成された魔力弾が突然消えてしまう

「レキ、ティアナのデバイスが弾詰まりを起こしたみたいだ！あれじゃスバルが危ねえぞ!!」

「わかってる、ファフニール！照準は任せるライトハンドでスバルさんの援護をする！！」

「任せろ！…今だ！撃て、レキ！！」

ファフニールが僕に状況を説明をする、援護をしようにも僕の後ろには二つ程、操作弾が迫ってくる

一つずつ処理してる暇が無いと考えた僕は右手の銃をスバルさんに、左手の銃を後ろにむけると操作弾を撃ち落とすために引金を引く放たれた魔力弾はスバルさんの後ろの操作弾は撃墜出来たが、自分の背後のは一つしか撃ち落とせなかった
もう一度撃墜しようと双銃を構えた時、瓦礫に足を取られる

「まずい、このままじゃ体勢が！？」

「レキ！？」

足を取られた事で僅かだが気が散り目の前に操作弾が迫る、しかしそれは真横からきたティアナさんのオレンジ色の魔力弾によって撃墜される

「レキ！大丈夫？ごめん、弾詰まりしちゃったから」

「なんとか無事ですよ…エリオ達は？」

「準備が完了したみたいよ！弾幕展開できる？」

「任せて下さい！」
「ファフニール！！」

「おっしやあっ！撃ちまくるぜ！！」

撃ち落としたティアナさんから念話が入る、申し訳なさそうに話すティアナさんに、心配ないと返すと僕はエリオ達の状況を聞く

ティアナさんは準備が出来たと答えてなのはさんの目眩ましとして弾幕を要請してきた

僕は両手に持ったファフニールをなのはさんに向けると大量の魔力弾を連続で、なのはさんに発射する

なのはさんはシールドで防ぐがこれは想定内だ…そして弾幕で出来た煙を引き裂くようなスピードでエリオがキャロのブースト魔法で強化したストラーダで突っ込んでいく

爆音と共にエリオは近くのビルに着地する

失敗か?…僕達の脳裏に不安がよぎった

「ミッションコンプリートです」

「うん、そうだね…皆お疲れ様!ちゃんと一撃入れる事が出来てたよ」

なのはさんのデバイスレイジングハートの電子音声で訓練スペースに響く

そしてなのはさんから訓練終了が告げられる、なのはさんのバリアジャケットの胸の所に少しだけ焦げた後があった

いくらBランクとはいえ全力の突撃で焦げ後だけなのは残念だけど今はそれだけ十分だろうな

――
SIDE…アルフィリオス

「いやあ…若いって素晴らしいものだね…」

「年寄りくさいですよ？アルもまだ若いでしょう」

訓練スペースにあるビルの上から俺は先程の行動を一部始終見ていた
まだ荒削りだけど全員がかなりの素質があると思いつつながら呟くとネ
ックレス状態のイーグルレイダーがため息をつくように話しかけて
くる

「イーグル…そんな事を言ってもな、この前線部隊じゃ俺が一番年
上なんだぜ？」

年寄りって言っても間違いないだろ…」

「精神年齢なら低いんですがね」

それって…褒めてないよね？イーグル…

やばい…自分のデバイスに泣かされそうだ…

とりあえず一人でいたら泣きそうだから皆の元へ足に向けて歩きだす

「ようす！お疲れ様…」

「アルさん、ちゃんと一人で起きたの？」

なのはよ…まず最初にそれを聞きますか…

しかもなんか子供扱いっぽいし

まあ気にしないでおこうか…

「ヴィータの愛情を込めた一撃で一発だったな」

「それは愛情じゃなくて怒りなんじゃ…」

本当に一週間でコイツら俺に言うようになったな…

呆れてため息をつこうとした時にふとスバルのローラーブレードから焦げた臭いがした

視線を向けるとローラーから煙が吹き出していた、スバルはそれに気づいていなさそうだ…仕方ない教えてやるか

「スバル…ローラーから煙が出てる」

「うえ！？ああああっ！やっちゃった…完全にオーバーヒートだ…」

「ティアナのアンカーガンも限界だよな？」

「はい…騙し騙しです…」

俺に指摘されるとスバルはローラーブレードを抱え込むと肩を落として落ち込む、こればかりはどうしようもねえよな…

次に俺の視線はティアナのアンカーガンに向けられる、ティアナに聞いてみると結構ガタがきているとの事だ

コイツはそろそろ良いかもしれないな…新デバイスを渡してもそれ

に無いと訓練出来ないしな

「なのは、そろそろ変えても良いんじゃないか？多分コイツらなら大丈夫だろう」

「そうだね…うん、皆新デバイスに変えちゃおうか」

「「「新、デバイス？」」「」」

俺となのはの言葉にレキ以外のフォワードメンバーは声を揃えて聞
いてくる

仲が良いな、レキ…合わせないとおいてかれるぜ？

「なんか無償にアルさんに剣を向けたくまりました」

今、お前が俺に向けてんのは銃口だぜ？

間違えるなよ…ごめん、悪かったから魔力弾を生成しないで…

「ま、まあ詳しい話しは飯を食べてからにするか、今はシャワーを
浴びてこいよ…良いよな？なのは」

「うん、それじゃあ皆で隊舎に帰ろうか」

とりあえずこの場にいたら、いつレキに蜂の巣にされるかわからな
いから隊舎に戻る事に決めた

隊舎に近づいた時、一台の黒い車が俺達の前に止まった、止まると
同時に窓が開くとそこには

「アレ？あの車って…」

「八神部隊長にフェイトさん？」

エリオとキャロが疑問を言葉にだす、というかはやての奴どっかに出かけるのか？

俺が質問しようとした時にフォワードメンバーがワラワラとフェイトの所に集まっていく

「これってフェイトさんの車だったんですか？」

「そうだよ、地上での移動手段なんだ」

スバルがフェイトの車を見ながら少し珍しそうにして質問を投げ掛けるとフェイトはやりわりと笑いながら答える

「皆、訓練の方はどないな感じや？」

「まあボチボチって感じだな」

「先輩は、まだ訓練に参加してへんやん」

「まあな、だけど早起きしてちゃんと見にいつてるぞ？」

「そのセリフはヴィータが起こさずに言って欲しいもんや」

つく！痛い所をつく！！

急所をつかれた俺は胸をおさえながら膝をつく、しかしながら皆慣れてしまったのか大した反応はなかった

「はやてちゃん、今日は何処かに行くの？」

「うん、聖王教会に用事があるんや」

「カリムのとこか：そーういや最近会いに行ってねえな」

さめざめと泣くアルフィリオスに大した反応をせずになのはとはやては話を進めていく

聖王教会という単語が出てきた時にアルフィリオスは復活して話に参加する

「先輩、さすがに遊びに行くわけやないから、同行はできへんよ？」

「わかってるよ、まあ気いつけてな：カリムによろしく」

「うん、伝えておくで

ほな皆も訓練を頑張ってな」

「お昼には戻る予定だから一緒に食べようね、エリオ、キャロ」

「はい！」

会話を終わるとフェイトは窓を閉じて車を走らせる

エリオとキャロは車が見えなくなるまで手を振っていた

「アルさんって聖王教会にも知り合いがいるんですね」

「ん？まあな：聖王教会ははやてを通じて知り合ったのがほとんどだけだな：ほら、お前らはシャワー浴びに行けよ

それとレキ、ファフニールの調整するから渡してくれないか？」

「わかりました、お願いしますね」

スバルが興味深々な顔で聞いてくるので軽く説明をするとファフニールの整備を思い出してレキに言うのとレキは十字架型の待機状態であるファフニールを俺の手に乗せる

「レキのデバイスはアルさんが調整するんですか？」

「うん、ファフニールはアルさんが設計したものだから整備はアルさんじゃないと難しいんだ」

「そういう事だから、またな…」

ファフニールを受け取るアルフィリオスを見てエリオは不思議に質問をする、レキは頷いてからファフニールについて説明をしていくアルフィリオスは手をヒラヒラと動かしてデバイスルームに向かうためその場から立ち去っていく

機動六課 デバイスルーム

デバイスマスターであるシャーリィーは新人たちの新デバイスの最終調整をしていた

いつでも動かせるように丁寧かつ迅速に手を動かす、その時デバイスルームのドアが開かれた

「おっす！調子はどうだ？」

「アルさん、順調に皆仕上がってますよ」

入ってきたのはアルフィリオスだった、その手にはレキから預かったファフニールが握られていた

シャーリィーは横目で確認をしてからアルフィリオスの問いに答える

「へえ：コイツらがそうか、皆手を込めてんだろ？」

「はい！特にスバルのマツハキャリバーは特にてを加えましたよ、ウイングロードをマツハキャリバーからも出せるようにしたんです」

「ありゃ先天系の魔法だろう？よく組み込めたな：俺も一度は試したけど出来なくてさ

シャーリィーは凄いなんだな」

「いやそれほども無いですよ、それよりファフニールを持ってきたけどメンテナンスですか？」

調整槽に浮かぶデバイスを見ながら、アルフィリオスが質問をする
とシャーリィーは握り拳を作ってから答えると特に頑張ったデバイスについて教えると、アルフィリオスはスバルが使うウイングロードは難しいなとしみじみに思うと空いてる機材を立ち上げてからファフニールの調整を始める

シャーリィーは照れながらアルフィリオスが手に持っていたファフニールについて質問を投げ掛ける

「ああ：コイツはシステムが普通と違うから俺が調整しないといけないんだよな：」

「私に頼めばやりましたよ？ファフニールやイーグルレイダーは少しシステムが気になりますし」

「お前にはスバル達の方に専念して欲しいんだよ、アイツらはまだヒヨッコだからな
ちゃんとしたものに仕上げて貰いたいからよ」

「アルさんって、意外に面倒見がいいんですね」

「意外は余計だ…」

シャーリーの質問にアルフィリオスはパネルを操作しながら答えていくとシャーリーがメンテナンスは自分も出来たと言うとアルフィリオスは新デバイスの方に目を向けてから答える

アルフィリオスの面倒見の良さにシャーリーは意外そうな声を上げるとアルフィリオスは不機嫌そうに返事をして作業に集中する

――――

シャワーと朝食を終えたレキ達はデバイスルームに集まっていたデバイスルームにはシャーリーとリイン、そしてアルフィリオスがいた

スバル達の手には調整を終えたデバイスが渡されて今、説明がされようとしていた

「ごめんごめん、お待たせー」

「ナイスタイミングです、なのはさん
今から機能の説明をするところなんですよ」

「そっか、ならちようど良いかな？」

ドアが開いて少し慌ててなのはが入ってきたシャーリィーが手を軽く合わせてから笑顔を浮かべて答える
ちようど良かった事に安堵の息をもらすとさっそくデバイスの説明に入る

「皆のデバイスには幾つかのリミッターがかけられていて、各々が扱える段階になったら外していくんだよね」

「あの、なのはさん達にもリミッターはあるんですか？」

「うん、私達はデバイスだけじゃなくて本人にもかかっているんだよ」

「このリミッターは

聖王教会の騎士カリムかクロノ提督にしか解除できないんですよ」

「げっ！？クロスケに頼まないといけないの！！」

リミッターの説明を受けるとティアナが隊長達にはリミッターがあるのかと聞くとなのはがデバイスと本人にもかかっていると話を聞くとフォワードメンバーは、驚きを隠せなかった

リインがリミッターの補足をしている時にアルフィリオスが心底嫌そうな声を出す、なのは達は何事かと思ひアルフィリオスに視線をむける

「アルさんはクロノ提督と犬猿の仲なんですよ、性格が真逆だから」

「ああ…なるほど…」

「俺はアイツに頭下げるくらいならカリムに解除して貰った方がいい！」

レキが呆れたように説明をするとなのはは納得したように頷くアルフィリオスはと言うとクロノだけは頼まないと宣言していた

「そういえば、アルさんもかかっているんですよね？」

「ん？ ああ…俺は元々が総合Aだから2ランクダウンさせてBランク、お前らとおんなじだな」

「Bランクまで下げてたのにヴィータ副隊長に勝てるなんて凄いですね」

「あのな、魔力ランクⅡ強さにはならないぞ？」

魔力ランクが低くても勝てる手段なんざいくらでもあるんだよ」

リミッターの説明を聞いた所でスバルがアルフィリオスに質問を投げ掛けるとアルフィリオスは指折りで数えて自分の状態を教える

アルフィリオスの魔力ランクを聞いてエリオが一週間前の模擬戦での事を思い出しながら言うアルフィリオスは呆れたように返す

アルフィリオスの言葉を聞いてフォワードメンバーは今日の訓練を思い出した、魔力ランクが上なのはのシールドをエリオは貰いたアルフィリオスの言う通り、魔力ランクⅡ強さで無いことの証明であった

アルフィリオスの話しが終わった時に突如六課に警報が鳴り響く

「このアラートは!？」

「第一級警戒体勢!？」

「グリフィス君!! どうしたの？」

《聖王教会からの出動要請が入りました!》

いきなり鳴り出したアラートにフォワードメンバーは騒然とするのかなのはは指令室のグリフィスに通信を繋ぐ
グリフィスはアラートの内容を簡潔に伝えたと今度ははやてが通信をいれてくる

《なのは隊長、フェイト隊長、グリフィス君それとアルフィリオス
陸尉!》

(今:俺の事ついでに言わなかったか?)

《はやて、状況は?》

はやてがモニターで各々の名前を呼びかける中でアルフィリオスは
ツッコミを入れる

はやてのモニターの隣にフェイトが通信を入れてくる

《教会調査団が追っていたレリックらしきものが発見、場所はエ
リ山岳丘陵地区、山岳リニアールを移動中》

《移動中って...》

「まさか…」

「リニアジャックってところだな、ガジェット共か？」

はやての報告にフェイト、なのは、アルフィリオスは真剣な表情をする

アルフィリオスの言葉にははやては頷くと報告を続ける

《先輩の言う通りや、中に侵入したガジェットがリニアレールを暴走、数は30は最低でもおる

中には新型もあるとの報告や…皆！いきなりのハードミッションやけどいけるか！？》

「「「「はい！」「」「」」

《いいお返事や…なのはちゃん、フェイトちゃん、リインに先輩はフォワードのサポートをお願い出来るか？》

「《「了解！」》」

「ああ、任せろ！！」

状況を説明したはやてはフォワードに呼びかける
フォワードメンバーは声を揃えて答える

その次になのは達にサポートを頼むと、四人とも了承する

《ほんなら、機動六課…出動！！》

全員の意思を確認するとはやては前線フォワードメンバーに号令をかける

今、機動六課のファーストミッションが開始する

EP05：新しい力と初出動（後書き）

どうもえのきです！

割り込み投稿をすると更新したことにならないとようやく気付いた今日この頃です

七夕小説を見てないかた、見てくださいね！

さてとようやくファーストアライトですが本格的な戦闘は次回からなんですよね

アルフィリオスとレキの活躍を楽しみに待ってて下さい

では次回予告をします

レキ「秘めたる力は巨大なもの、幼き少女はその力を使えるのか？
大丈夫：皆がついてるだから心配しないで、キャロ

次回魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷺～EP06…一緒に翔ぼう にテイクオフ」

ではでは、このへんで

EP06:一緒に翔ぼう(前書き)

ようやく仕上がりました！

EP06です！

アルフィリオスとレキのデバイスを展開するときイメージソングとして

アルフィリオスは『WILD FLUG』

レキは『絆を信じて』

どちらもスーパーロボット大戦OGで使われています
良かったら聞いてみてください

EP06:一緒に翔ぼう

アラートが鳴りアルフィリオス達はヘリに乗り込み、現場である山岳丘陵地区へと向かっていた

「いきなり新デバイスでのぶっつけ本番になったけど練習通りで大丈夫だからね」

「はい」

「大丈夫です」

「問題は無いですよ」

ヘリの中でなのは少し心配そうにしながらフォワードメンバーに呼びかける、スバル、ティアナ、レキの三人は特に緊張も無く答えるが問題はエリオとキャロであった

「エリオにキャロそれにフリードも頑張るのですよ!」

「は、はい!!」

明らかにガチガチ緊張しているエリオとキャロにリインはガッツポーズをして励ますと二人は固くなりながら答える

「危なくなったらなのはやフェイト、リインそれに俺がなんとかすっから思いつきりやれよ…あぐあぐ…気楽にしとけよ…もぐもぐ」

「アルさんは気を引き締めて下さい!なんでおにぎりを食べてんですか!?!」

「レキ：これはおかかだ：間違えるなよ」

緊張している二人に対面して座っているアルフィリオスが声をかけるが何故か手にはおにぎりが二つ握られていた

レキはため息まじりに指摘をするとアルフィリオスは真剣な表情をしてからおにぎりの中身を見せる

レキは黙って双銃形態のファフニールをアルフィリオスに向ける

「レキ！？落ち着くです！」

こんな所で射ったらまずいのですよ！！」

「止めないで下さいリイン曹長！

あの人の頭を撃ち抜きたくて仕方ないんです！！」

「俺はファフニールの調整で朝食を食べてないんだよ、だからそう目くじらを立てるな：げふ」

双銃をアルフィリオスに向けるレキにリインは慌てて止めに入るとアルフィリオスは特に気にせずにおにぎりを食べ終わるとお茶を飲んでから、一息つくと軽く背伸びをする

その様子を見てなのは達は呆れたようにため息をつくと笑みを浮かべた

アルフィリオスの行動が少なからず緊張をほぐしていた、しかし一人だけ表情を暗くしているものがいた、それはキャロだった
レキはファフニールをしまうとキャロの横に座る

「緊張してる？」

「えっ？そこまでは…緊張はしてないよ…」

「無理をしなくていいよ、最初は皆おんなじだしね…でも一人じゃないよ、皆がいるからなんとかなるよ」

「そうだね…うん、頑張ってみる…」

レキはキャロの方を見てから聞くとキャロは少しだけ自信無く答えると励ますように言いながら肩を叩くレキ

レキの励ましに少しだけ自信を持ってキャロは答えるとヘリ内部に通信が入る

《ガジェット反応！空から！？》

《航空観測隊から報告、反応を多数確認！》

「最近のガジェットは空が飛べんだな…お兄さんは驚きだよ、ありがた迷惑だな」

「そんな呑気な事を…」

通信の内容を聞くとアルフィリオスがわざとらしい声を出してから言うてティアナがそれにツツコミを入れる

「アルさん！私とフェイトちゃんと一緒に制空権の確保をお願いしまする？」

「ああ、制空権を確保しねえとリニアには乗り移れないからな
ヴァイス！開けてくれ！！」

「うっす！頼みやしたぜ！！アル、なのはさん！」

状況を確認するとなのはがアルフィリオスに呼びかける

制空権の確保に賛同したアルフィリオスはヘリパイロットのヴァイス・グランセニック陸曹に呼びかける

ヴァイスは了承するとヘリのハッチを開ける

なのはとアルフィリオスは降下するためにハッチに近づいた時にアルフィリオスは足を止めてキャロに視線を合わせるようにしゃがみ込む

「キャロ：一つ、いい言葉を教えとくな：なんとかなる、だ

俺はもう少し楽にしてなんとかなるっしょって言ってる」

「なんとか、なる…」

「自分に自信がねえ時に言うと思議とやれる気がするんだ
もし自信がなかったら試しに言ってみな」

アルフィリオスに話しかけられてうつ向いていた顔を上げたキャロは反芻するように呟き、アルフィリオスは立ち上がるとニンマリと笑ってからハッチに向かう

「それじゃあ、皆：初めての实战、おっかなびっくりじゃなくて思
いっきりいこう！！」

「「「「はい！！」」」」

「それじゃあ、私は先に行くね」

ハッチの前に立ったのはフォワードメンバーに振り返ると握り拳を作って言うとはッチから勢いをつけて飛び降りる

アルフィリオスも続けていこうとしたが途中で止まってしまう

「うわゝ…高ゝ…ヴァイス？もう少し地面に近「さっさと行く！！」
なああああー！ーっ！！？」

高度が高いことに怖じけづいたのかヴァイスに高度を下げるように言った瞬間、レキによってアルフィリオスは蹴り落とされた

「まったく…恰好つけたならそのまま行けば良いのに…」

「アルさんは、大丈夫でしょうか？」

「これ以上の高度からの降下も経験あるから大丈夫だよ」

エリオは心配そうにアルフィリオスの無事を聞くとレキはまるでもう飽き飽きのようにため息をついて答える

「まったく、レキは手荒な真似をするなあ…」

「緊張を解すためとはいえふざけすぎだからですよ」

レキに蹴り落とされて地表に向けて落下中のアルフィリオスはイー

グルレイダーに呑気に話しかけていた、イーグルレイダーは手慣れた様に返答をしていく

「さてと地上に激突しても困るからそろそろ行くとしますか…イーグル！」

「すでにスタンバイは完了しています」

「ならいくぜ、イーグルレイダー…セット、アップ！！」

アルフィリオスの掛け声と共に赤いベルカ式の三角系の魔方阵が展開するとまばゆいばかりの魔力光が辺りを包む

待機状態のネックレスが複合機関銃へと変わると、同時にアルフィリオスの身体をバリアジャケットが包む黒い武装隊のアンダーสูツに黒いロングコート、更に銀色の具足の様な装甲が脚部を覆うと複合機関銃となったイーグルレイダーを真上に向けて、引金を引くと魔力光を吹き飛ばすように砲撃が放たれる

「ロングアーチ7、アルフィリオス・ラーゼンハルグ！行くぜ！！」

アルフィリオスはその言葉と共になのは達が向かっているであろうガジェットの航空隊向けて飛翔する

アルフィリオスが蹴り落とされた後、リインによるミーティングが開始された

「任務は二つ、レリックの確保とリニアレールの停止です

レリックはここ七両目に安置されているはずですが、スターズかライトニングそのどちらかがレリックの確保をしてください、それで」モニターを表示してリインが説明をしていき空中で一回転をしてから笑顔を浮かべ

「私も現場に降りて管制を担当するです！」

「新人ども、隊長達の働きで無事に降下ポイントまで来れたが準備は良いか!?」

「「「はいっ!」「」「」」

陸士の制服から白い騎士甲冑に変えるとヴァイスから降下ポイントについたと知らせが入る

フォワードメンバーは一斉に返事をする。と先頭車両を担当するスターズがハッチにスタンバイをする

「スターズ3、スバル・ナカジマ！」

「スターズ4、ティアナ・ランスター！」

「「行きます!!」「」」

コールサインを言ってから勢いをつけて飛び降りる。ヘリは速度を落として後部車両へと移動をする

「次!ライトニング!レキにチビ共、気いつけてな」

「了解です!グランセニック陸曹」

「「はいっ！」」

ヴァイスに呼びかけられるとレキとエリオ、キャロはハッチに整列する、そしてレキは一步踏み込んでからエリオ達に向き直る

「僕が先に降りて降下ポイントをおさえるね：二人とも気をつけてきてね」

「レキも気をつけて！」

「直ぐに私達も合流します！」

「うん、ライトニング5：レキ・アーベント、行きます」

降下手順を確認するとエリオとキャロはレキを心配するように言ってくる、レキは微笑を浮かべてからコールサインを言ってヘリから飛び降りる

「ファフニール、行くよ！」

「ああ、いつでもいいぜっ！！」

「ファフニール、セットアップ！！」

手に持たれた十字架に呼びかけると電子音声に応えレキは微笑してからファフニールをセットアップさせる

レキの目の前に水色のミッド式、魔方陣が展開すると魔力光が辺りを包む

十字架は基本形態である双刃剣に変わるとレキはバリアジャケットを展開する

アルフィリオスとは色の違う水色の武装隊のアンダースーツを身に纏うと白いジャケットが更に展開され両手と両足に装甲が展開される、それは動きを阻害しないように最低限の装甲だった

そして水色の魔力光を引き裂くようにレキはファフニールを振るうと後部車両に着地する

S I D E・・レキ

僕が後部車両に着地するとそれより数秒遅れてエリオとキャロがバリアジャケットを身に纏って降り立つ

二人はバリアジャケットを見て感心の声を上げていた

「皆さんのデザインは各隊長をイメージしたんですよ、レキのバリアジャケットも外套だけライトニングと同じなんですよ」

リイン曹長から念話が入ると僕は自分の外套とエリオ達のを比べると確かに同じであった

前はアルさんと同じロングコートだったからずいぶんと動きやすいから良しでしょう

「レキ！ガジェットが下まで来てやがる！！」

「エリオ、キャロ！ガジェットが仕掛けてくる！！」

ファフニールの警告に僕はエリオとキャロに注意をした時に足元から青いレーザーが飛んでくる僕は緊急で回避をすると車両の天井部を切り裂いて中に侵入する

車両内部には五体程のガジェットがいた

僕は迷わずにファフニールを握り直すとガジェットに向けて走り出す、そして近くにいた2体のガジェットを双刃剣で切り裂く

僕のファフニールの基本形態、名前はシフトSシングルと言うが攻撃力が高く、ガジェットを切り裂く事は容易いしかし取り回しがきかないため振るう方は一定のパターンしか持ち合わせていない

残りの三機に刃を向けた瞬間、上からエリオが屋根を切り裂いて突入をしてくと手近のガジェットを撃破する

その後を追うようにフリードが三機の中で壁際にいた一体に火炎弾を打ち込む

僕はその間に残りの一体の背後からファフニールによって突き刺す爆散するガジェットを確認するとエリオとフリードに目を向けると二人は特に傷はなかった

「ガジェットの掃討は意外に骨が折れそうかもね」

「それでも倒してかないとレリックは確認出来ないからやるしかないよ」

「そうだね、さてと次の車両に移ろうか」

爆散したガジェットを見ながらレキはため息まじりに話すとエリオはストラダーを持ちながら頑張っていこうと言う

レキもファフニールを持ち直してから頷くと屋根にいるキャロに声をかけてから次の車両に移動する

「アクセルシューター！」

「ハーケン、セイバー！」

「撃ち抜く、ブレイズバスター！！」

フェイトと合流したアルフィリオスとなのはは制空権、確保のために航空型のガジェットとの戦いを繰り広げていた

航空型はAMFを発動させることは無いが機動力と数が多いため、三人は簡単に全滅させる事はできなかった

ある程度片付いたところで三人は一ヶ所に集まる

「これで最後かな？」

「そいつはまだ早いかな…まだレリックを確保出来てないなら増援がくる可能性がある」

「…エリオ達…大丈夫かな…」

状況を確認し終えてからフェイトはエリオ達の事を思い浮かべ心配そうにしているとアルフィリオスは大きなため息をつく

「フェイト…」

「どうした？アルフィリ、ふわっ！？」

「ちつとはアイツらを信用してやれよ：お前がそんなんでどうすんだ」

フェイトは名前を呼ばれてアルフィリオスの方を向くといきなりアルフィリオスにデコピンをされ、情けない声を上げる

デコピンをしたアルフィリオスは呆れたようにフェイトに言うとな
フェイトは軽く額を抑えながら恨めしそうに見ていた

《ライトニング小队！六両目にて新型思わしきガジェットとエンカ
ウントしました！！》

《航空型ガジェットの増援を確認！かなりの数です！》

緩んでいた雰囲気が一気に引き締まる、通信から入る情報を確認するとフェイト達の真後ろから航空型のガジェットが飛行してくるのが見えた

「なのは、フェイト！まずは航空型からだ、ライトニングの方が心配なのはわかるがコイツらを片付けないと手助けにもいけない」

「うん、そうだねアルさん」

「わかったよ、アルフィリオス」

アルフィリオスの言葉になのはとフェイトは納得をするとデバイス
を構えて航空型ガジェットの群れにむけて飛翔する

六両目まで順調に来ていたレキ達の前にソレはたちふさがった

ソレは巨大な球体のようなガジェットがだった

「でえりあああっ!!」

エリオは魔力変換の一つである電撃を刃に纏わせてガジェットに斬りかかる

しかし刃はガジェットの装甲を貫かずに装甲表面で刃は止まっていた

「っ! 堅い!？」

「エリオ!」

エリオの背後にいたレキは屋根の上まで移動すると、双銃形態にフアフニールを変形させてガジェットの上から装甲の一点にむけて集中射撃を行うが、ガジェットの装甲はヘコみすらしなかった

ストラーダの刃を受けながらガジェットはピンク色のフィールドを展開していく、それと同時にストラーダの刃に展開されていた魔力が解除される

さらに屋根の上にいたレキとキャロの魔方陣も解除されてしまう

「AMF!？」

「こんな遠くまで…」

魔力を解かれたエリオにガジェットは太いアームでエリオに攻撃を仕掛ける、エリオはストラダーダを使ってアームを防ぐが徐々に押され始める

「エリオ！」

「エリオ君！」

「大丈夫！任せて！！」

エリオの言葉を聞いてレキは表情を歪める単純に力の差が大きすぎるからだ

（何か打開策は無いか？AMFから抜けるための策は！？）

エリオが頑張って押し留めている中でレキは思考を巡らせてふと空が視界に入る

そして一つの考えが浮かぶとキャロのほうに顔を向ける

「キャロ！…竜召喚をしてくれないか？ガジェットのAMFから抜けて攻撃するにはそれしかない！！」

「無理です…私…制御できる気がしません…」

レキが竜召喚をキャロに頼むとキャロは顔をうつ向かせて首を振る

「キャロ…竜召喚でなきゃエリオは助けられない、スバルさんやフイトさん達を呼んでる暇もない
だからお願いだ！」

「レキ君…」

「もし制御できなかったら僕がなんとかする…だから信じて僕を…自分を…キャラなら成功できるはずだから」

キャラの肩を掴むとレキはゆっくりと説明をしていく、そして自分を信じろと励ました瞬間、鈍い音と共にガジェットが姿を見せるガジェットのアームにはエリオが捕まっていた、気絶しているのであろうその腕に力無くダラリと下がっていた

ガジェットはそのままエリオをリニアレールから放りなげる
キャラはそれを見て強く拳を握るとレキに目を向ける

「やります！私、やってみます！！」

「うん、いこうキャラ！」

レキはキャラの手を握ると放り投げられたエリオを追うように空中に身をなげだす

勢いつけて飛んだためエリオとの距離はどんどん縮まっていく
レキがエリオの手を掴んだ瞬間にピンク色の魔力光が辺りに広がる

「フリード…不自由な思いをさせてゴメンね…私、ちゃんとやってみるから、なんとかかしてみる
だから行くよ！竜魂召喚！！」

グローブ型ブーストデバイス、ケリユケイオンが光輝く中でキャラはフリードに優しく言う意識を集中させる

「蒼穹を走る白き閃光！我が翼となり、天を駆けよ！来よ、我が竜、

フリードリヒ：竜魂召喚！！」

キャロの詠唱が完了した瞬間ピンク色の魔力光を吹き飛ばすように白い飛竜が翼を広げて雄々しく吠える
それは見事、竜召喚に成功したフリードの姿であった

「う…ここは…」

「エリオ、目が覚めたか…」

「大丈夫？ エリオ君…」

「う、うん…大丈夫だよ、二人とも」

フリードの上でキャロに抱えられた状態で、エリオは目を覚ますと自分の状態に気づいて頬を染める

レキはそれを見て微笑をするとフリードの手綱を引いて上空に飛翔する

リニアレールまで近づいた時に球体型のガジェットがレーザーを射ってくる

レキはフリードの巧みに操ってリニアレール並ぶように飛ぶ

「キャロ！ 砲撃を頼めるか？」

「はい！ フリード、ブラストレイ…」

レキの指示をキャロに出すとキャロはケリュケイオンを前に出してフリードに魔力を送るとフリードは巨大な火球を作り出す

「フアイア!!」

小さい時とは比べ物にならない勢いの炎をガジェットに向けて放つ
しかしガジェットはアームをシールド代りに防ぐとレーザーを放つ
て反撃をしてくる

「やっぱり硬い…」

「あの装甲形状は砲撃じゃ抜きづらい、僕とストライダーがやる!」

「なら僕も手を貸すよ三人でアイツを倒そうか」

「「うん!」」

フリードの炎を耐えきったガジェットを見てエリオはストライダーを
構えて言う、レキも同じ意見だと言い三人で倒そうと提案をする
とエリオとキャラは快く了承する

「我が請うは青銀の剣、若き槍騎士に祝福の光を」

「ファフニール…シフトA^{アロー}行くよ!」

「任せろ!レキ…カートリッジ、ロード」

キャラがケリユケイオンを構えて詠唱して始めるとレキもファフニ
ールに指示を出す

ファフニールは柄からカートリッジを二つ排出すると弓のような形
に刃がスライドしレキはガジェットの方に腕を向ける

「猛きその身に力を、与える祈りの光を!」

「エリオ、先に僕が仕掛けるから続いて飛び出して!」

「わかったよ！レキ」キャロの詠唱が最終段階になったのを確認すると、レキはまるで矢を射るような動作をすると白い光の矢が出現する

そして背後にいるエリオに攻撃内容を確認するとガジェットに狙いをつける

「走れ！アスタニツシュ、グリッツ！！」

「行くよ！ストラダー！」

光の矢が凄まじい速度で放たれた瞬間、エリオはレキの肩を踏み台にして飛び出す

「ツインブースト！スラッシュ&ストライク！！」

エリオが飛び出した瞬間、キャロがブースト魔法を発動させる

レキが放った光の矢はガジェットのAMFで消える事なく直撃するシフトAでの砲撃は多重弾核と同じようになっていたためAMFで消される事がない、直撃を受けたガジェットはアームと武器であるケーブルを無くしていたがまだ稼働していた

エリオはキャロのブーストを受けてからリニアールの屋根に降り立つとストラダーのブースターを噴射してガジェットに向けて突撃をする

ブースト魔法で強化された刃はガジェットの容易く貫きエリオはそのままに切り上げる

爆散するガジェットを背にエリオはレキとキャロに手を振る

レキとキャロもフリードの上で同じように手を振って応えたりインからレリックを確保したという報告が入る
リニアレールも徐々にではあるが停止をはじめていった

リニアレールの横でフリードに乗るライティング小隊をアルフィリオスは遠くから眺めていた

「いやあ…若たって良いもんだな」

《アルさん、少し良いですか？》

イーグルレイダーを肩に担ぎながらライティング小隊を見ていた
するとリニアレールにいたリインから通信が入る

「どうかしたのか？」

《実はレリックがあった部屋に少し気になるコンテナを見つけたんですよ》

「気になるコンテナ？どんなのだ？」

《えっと、少し説明しづらいので来てもらえますか？》

リインの通信にアルフィリオスは答えるとリニアレールに向けて飛翔する

リニアレール内に入るとリインは一つのコンテナの前に浮かんでいた

「リイン、これか？気になるってのは」

「はいです、実はこのコンテナから魔力反応が出ているんです」

「魔力反応？これにか…見たところただのコンテナにしか見えないけどな…ん？これは」

コンテナの前にいるリインに事情を聞くと魔力反応を感知したと聞くとアルフィリオスは、コンテナを触らないように調べるとコンテナにベルカ式の魔方陣のようなモノを発見する

「ずいぶんと煤けてんな…払うくらい良いよな？…っ！？」

魔方陣を発見したが汚れがヒドイため手で払おうとしてコンテナに手を触れた瞬間、一瞬電流がながれたような衝撃が身体を駆け抜ける

「アルさん！？大丈夫ですか！」

「なんともないな…心配しすぎ…？
なんか聞こえないか？」

慌てて手を離れたアルフィリオスにリインは心配をしながら聞くとアルフィリオスは大した事は無いと手を動かした時、何かが外れる音が部屋の中に聞こえる

すると空気が抜ける音がコンテナの上部から聞こえるとゆっくりと持ち上がっていく

リインとアルフィリオスはお互いの顔を見てから恐る恐る中を覗き込む

「っ！これって生体ポッド？」

「アルさん、中に誰か入ってるです！」

「リインサイズくらいの女のコ？」

コンテナの中にはデバイスの調整槽みたいな装置がありその中にはリインと同じ大きさで髪が緑色のロングヘヤーの少女が丸くなって眠るように入っていた

目の前の少女についてはまったくわからないがアルフィリオスは面倒なものを開いたと肩を落とした

EP06：一緒に翔ぼう（後書き）

どうもえのきです！

本来なら昨日の昼頃に上げる予定でしたがかなりおくれてしまいました

まだレキのキャラ説明が出来てませんがいずれ書き上げます！

さて最後に出てきた新キャラ含め次回で謎解き出来るように頑張ります

これから応援よろしくお願いします！

アルフィリオス「生体ポッドに入った謎の少女：彼女は何者か？

謎があるなかでも日常は進んでいく

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～EP07…過ぎていく時間 にテイクオフ！」

次回もお楽しみ！」

EP07: 過ぎていく時間(前書き)

かなり時間がかかりました

スランプ気味で支離滅裂に見えるかもしれませんがよろしくお願ひします

EP07：過ぎていく時間

「まったく…とんだ拾いモノをしてきたんやな、先輩…」

機動六課のデバイスルームにて六課の部隊長八神はやては目の前にある調整槽を見ながら拾ってきたアルフィリオス・ラーゼンハルグに言う

「開いたものは仕方ないだろ？…というかやっぱりこの子は融合騎なのか？」

「ええ…しかも古代ベルカ時代に作られたんだと思います」

「古代ベルカやと夜天の書とおんなじくらいやろ？」

どうしてリニアールの中にしかも封印処理されていたんやろな」

「単純に考えて遺跡で発掘されたのを密輸して売ってのが妥当です…」

はやてに文句を言われて少し面倒そうにアルフィリオスは返すとシャリーに質問を投げ掛けると、モニターを開いていたシャリーはパネルを操作しながら答える

調整槽に浮かぶ少女を見ながらはやては疑問点を上げる

後からわかった事だがコンテナには封印処理が施されており特定の人間出ないと開けられない仕組みになっていた

アルフィリオスはその特定の人間に適合したためにコンテナの封印が解除されたらしい

はやての疑問にシャーリィーは少し言いづらそうにしてから仮設を述べるとはやてとアルフィリオスは顔をしかめた

「…ところでこの子は主が居ないんだろ？目覚めたら六課に置いてくのか？」

「あ、それなんですがアルさんがコンテナの封印を解いた事でアルさんが主として登録されてるみたいなんです」

「「はい？」」

「それってその子が先輩とユニゾンをするって事なんか？」

話題を変えるようにアルフィリオスがシャーリィーに聞くとシャーリィーは思い出したように言ってくる

突然の事にはやてとアルフィリオスは間の抜けた声を出すとはやてが調整槽の少女を指でさしてからアルフィリオスを指でさして聞くとシャーリィーは頷く

「今、この子は前の主のデータを削除してアルさんの魔力に合わせで組み換えをしているんです
だから目覚めた時にはアルさん専用の融合騎になっています」

「ユニゾンに置いて、融合時に起きる事故を無くすための処置ってわけか…使用者じゃなく融合騎が合わせるって形をとる、理想って言えば理想だがなんか気に入くないな」

シャーリィーの説明を聞くとアルフィリオスは頭をかきながらため息をつく和不機嫌そうに言う

束縛を嫌う彼にとって他者に決められるという行為は一番、虫酸が走るからである

「なら先輩は、この子をどうするん？」

「主になったのは仕方ないが自分で決めさせるさ…融合騎って言うてもそれくらい自由はある」

アルフィリオスの隣にいたはやては少女の処置について聞くとアルフィリオスは目を覚ましてから決めさせると答える、はやてはそれを聞いて彼らしいなと思った

――――

その後、調整槽から少女を出して医務室に寝かせる事にしアルフィリオスとはやては隊舎に向けて歩きだした

「初出勤からいろいろあったもんだな…ああ、疲れた…」

「お疲れ様やな、先輩はもう寝るんやろ？明日からフォワードのデバイスの調整を兼ねた訓練をやるってなのはちゃんが言うと思ったで？」

「そーいや言ってたな…忘れてたぜ…眠くないからハーモニカでも吹こうかと思ったんだがな…お前が俺の下にいた時、よく吹いてたの覚えてるだろ？」

アルフィリオスは首を解しながら言う隣を歩いていたはやてが質問を投げ掛けるとアルフィリオスは制服の懷に手を入れてハーモニ

力を取り出して見せるそれを聞いていたはやては怪訝そうな顔をする

「確かに覚えはあるけども先輩って吹いたり拭かなかったりしてたやん、私が頼んでも今日は気分が乗らないとか断ってたやん」

「まあな：でもなアレには法則があつてな、その日に変わった事があつた時だけ吹いてたんだよ、はやてが頼んだ時にはなんもなかったから吹く気にならなかったんだ、また聞いてみるか？」

「そうやな、久しぶりに聞いてもええかな？」

アルフィリオスははやてに聞かれると少し苦笑していうとハーモニカに見せながら、アルフィリオスははやてに質問をするにこやかな笑顔をみせてからはやては答える

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪」

隊舎近くにある海を背にアルフィリオスはハーモニカを奏でていくその音色はとても穏やかで心が休まるようだった

はやてはアルフィリオスの隣に立ちながら目を閉じて音色に耳を傾ける

「♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪：4年前の航空火災から部隊を立ち上げたいなんて言い出して本当に立ち上げちまうとはな」

「皆が協力してくれたのもあるけど先輩の言葉が一番やったよ」

「冷やかしに行くってやつか？」

「ちやうよ！自分のやりたいようにやれ

先輩がそう言ってくれたから自信がついたんや…それに、冷やかしに行く言うても先輩は私の事を助けてくれるそんな気がするんや」

演奏をやめるとアルフィリオスは昔を思い返すように言うとはやては自分だけの力じゃないといい、アルフィリオスの言葉がそのきっかけだと話す

アルフィリオスは少しからかうように言うとはやてはそれを否定するのように言い少しだけ嬉しそうに説明をする

「ったく、生意気言うな

後輩のくせに…

俺はもう寝るからな…おやすみ」

「あいた！…おやすみなさいや、先輩…」

嬉しそうにはやての頭を小突くとアルフィリオスは背を向けて隊舎に早足で歩きだすと片手だけ動かして挨拶をする

はやては小突かれて驚いていたが少しだけ嬉しそうにしながらアルフィリオスを見送る

SIDE…アルフィリオス

耳元でアラーム音がするおそろくイーグルがお節介で設定したんだろうな、しかしこの程度で俺の眠りは阻止できはしない！

しかしながら今日の布団はいつに無く暖かいな…まるで人が入っているような…

「ん…ん…」

あれ？今声がしなかった？しかも肉声…なんか猛烈に嫌な予感が…俺はそっと目を開けた

「…どなたですか？」

そこには緑色のロングヘヤーのエリオやキャロくらいの少女が寝ていた

しかも俺は少女を抱き抱えるような体勢だった…何故に？とりあえずまあ俺が出来る事は一つだな…

「…じえ、じえろにもー！ーっ！！」

「むう…うるさい…」

目の前の現実から目を背けるように俺は意味不明な叫びを上げるそしてその叫びで少女はうるさそうに唸ってからゆっくりと身体を起こす

まだ寝ぼけているのか瞳が呆けていた、だけど徐々に意識がはつきりしていくと少女はにこやかに笑いかけてくれた

「おはようございます、主^{ロード}…どうかしたんですか？そんなに騒いで」
「どうかしたじゃない…」

寝る前は誰もいなかったのに起きたら人が寝てました、なんてやられて騒がない人間はいないぞ？…ん？主^{ロード}？」

少女は欠伸をしながら俺に挨拶をして不思議そうに聞くと、俺は身体を起こした少女の肩を掴むと騒いだ訳を教えてから、ふと疑問に思った事を口にだす

今この子俺の事を主っていったよな？

それにこの髪色ってまさか…

「お前って昨日の融「アル！何かあったのか！？凄い叫び声が…」
…わーお…バッドタイミング」

少女の事を聞こうとした瞬間、ヴィータが部屋に入ってくる

ここで一つ問題が…

俺は少女の肩を掴んでいる、入室した訳を問いただすためにしかしながら事情も知らない人間がこれを見たら、どう思うか俺が少女を連れ込んだという見解にいたる、更に欠伸をした事で目尻には涙がある…どうなるか

「アル…なにしてんだ！てめえは！！」

「誤解だ！話をき、げふお！！」

こうなるわけだ…俺の顔面にグラーフアイゼンがめり込んで吹き飛ばされた…

「…なるほどなあ、先輩の事情はよくわかったでその子には手を出してないんやな？」

「ああ…わかってくれたなら良いが、バインド外してくれないか？」
ヴィータに吹き飛ばされた後騒ぎを聞き付けたはやてや隊長達に叩き起こされて俺は今正座をさせられている、バインド付きで…

ちなみに寝ていた少女こと、融合騎の少女は今は俺の真似をして正座をしながら俺の顔を眺めている
俺と視線が合うとニツコリと笑顔を見せてくれる、どうしよ…凄く和む

「「……………」」

正面から殺気を感じる目を向けると笑顔なのにどす黒い何かを背負うはやてと今にも俺に殴りかかりそうなヴィータがいた

なんとかしないと殺られる!?

俺は内心焦りながら助かる方法を探した

「名前！俺はお前の名前聞いて無かったな？」

「そうでしたね、私はセレス…ベルカの融合騎、疾風の舞姫セレスです！よろしくお願いします、主アルフィリオス」

「俺の名前はわかってるんだな：セレスか、俺の事はアルと呼んでくれ

後、敬語は必要ないからな？」

セレスと名乗った少女は凄く堅い挨拶してくる、俺は敬語と堅い挨拶は必要ないと言うとセレスは不思議そうに首を傾げた

「アルはちゃんぽらんだからな、堅い言葉は必要ねえんだよ」

「せやで、その人はいい加減な人だから必要ないんやで」

「二人とも言葉がヒドイ気がします」

「「ふんっ!!」」

凄くいい顔をしてセレスにヴィータとはやては教えていく、内容とはとてもなくひどかったがな

二人の言葉にセレスは何か考えていたが手をポンと叩く

「うん、わかった

アルはいい加減でちゃんぽらんだから敬語は無しって事でいいんだね？」

「真っ正面からそんないい笑顔で言われると凄まじく傷つくんだけど…」

自分はいい加減なのは認めるけど、こんなにいい笑顔で言われると正直こたえる

しかも本人は何かあったの？みたいな顔をしてる天然だな…間違いない

「あ…忘れてた、ねえアル！私の入ってたコンテナの他におんなじのはなかったの？」

「リニアレールにあったコンテナは、お前のしかなかったぞ」

「リニアレール？遺跡からじゃないの？」

アル達が見つ付けてくれたんだと思ってたのに…」

「どうした？何かまずいこともあるのか？」

俺を見ていたセレスは少し慌てたように質問をしてきた、俺はありのまま報告をするとセレスは顔を暗くして落ち込む、ただ事ではないと思いセレスに事情を聞く事にした

「実は私にお姉ちゃん…姉妹騎つてのが正しいかな、がいるんだよね一緒に所に安置されてたんだけどアル達が発見してないなら何処にいったのかな…」

ねえ、探すのを手伝ってくれない？融合騎が主に頼み事をするのは本来おかしいんだけど頼れる人がいないから…」

「…手伝ってやりたいが俺は六課に所属だからそう簡単に単独じゃ動けないな」

「それは私らも同じやな、手伝いたいけど場所も特定出来ないのにおいそれと部隊は動かせへんしな、かと言って隊員を単独で動かすのもあかんしな」

「そっか…なら仕方ないよね…」

セレスの事情を聞きなんとかしたいとは考えたが俺は管理局員…いくら不真面目でもさすがにマズイってのはわかる…
だがセレスをほっとけない…どうするか…

「はやて…聖王教会やクロスケに要請してみないか？
俺達で出来ないならそれしかないと思う」

「せやな…私もおんなじ事を考えてたで
次元航行艦や騎士団ならまだ自由が効くやろ、だけどあまり積極的
にはできへんで？」

「無いよりマシだ…セレス」

「…なに？」

何とかしたいと考えた俺ははやてに提案をすると同じ事を考えていたのか頷いてくれた
俺は微笑してからセレスに話しかける、顔をうつ向かせていたセレスは俺の方を向く

「お前の姉さんの特徴を覚えてくれるか？
俺達じゃ難しいけど少しいろんな奴に掛け合ってみるからさ」

「アルにはやてさん、ですよね？
ありがとう」

「うん合ってるで、礼はいらへんよ」

ただしお姉さんが見つかるまではここにいて貰うで？」

「はい！わかりました！」

俺達の言葉にセレスは満開の笑みを浮かべる、なのは達も賛同してくれたようで特に意見もなくセレスに挨拶をしていた…ところでさ…

「いい加減、バインド解けよ！！」

「ああ忘れとった」

俺の言葉にはやては今思い出したように話すがその笑みはわざとらしいものだった

「髪の毛はショートカットで金色…目付きは少しキツめと…他には？」

「外見特徴はこれくらいかな…服装はその主の望んだのを着用しているからわかんないだね」

「じゃあ今セレスが着るのは先輩が望んだからなんか？
なんか私の騎士甲冑と似ているようやけど」

バインドを解かれたアルフィリオスははやてと共にセレスの姉の事を聞いていた
なのは達はそれぞれの仕事に戻っていった今はアルフィリオスとは

やて、セレスの三人以外はいない

セレスの説明を聞いていて、はやてはふとセレスの衣服に目を向ける彼女が着ているのは、色こそは黄緑色だがはやての騎士甲冑と類似していた

「これはアルの見てきた服装から選んだよ、主の意識がない場合は私が選ぶ事ができるの、そっかははやてさんのだったんだ」

「着替えとかはどうすんだ？」

「戦闘時は魔力で作成した騎士甲冑を纏うけど普段は皆が着ている服かな」

「なら私のおさがりか何かを渡しておこうか、ライン用に何着があるからちようどええやろ」

自分の衣服に手を当てながら説明をするとアルフィリオスが質問を投げ掛ける

セレスは人差し指を口元に当てながら答え、はやてが普段から着る服が必要だと言って自分のお下がりを渡すと言う

「ありがとうね、はやてさん」

「暇を見つけて服を買いにいかないとな…」

「先輩は衣服に詳しい方や無いから私も一緒に行くけどええよな？」

「ああ、そのときはよろしくな」

セレスははやてに礼を言う

服と聞いてアルフィリオスが購入するかと、計画を練っているとはやてがその時はついていくと言ってきた
これにアルフィリオスは快く了承する

「あっ！肝心なお姉ちゃんの名前を忘れてた、探してくれる人たちにはお姉ちゃんじゃ通じないもんね…」

「そうだな：俺もうっかりしてたな」

「お姉ちゃんの名前はライナ、迅雷の戦姫ライナ
本名を知ってるのは私とお姉ちゃんの主だけだから言えば話しは聞いてくれるはず」

「ライナは気難しい子みたいやな」

話しを聞いていてセレスは姉の名前を言っていない事に気付くとアルフィリオスとはやてに説明をする

そして少し不安そうに言うとはやては冷や汗を浮かべて言うとセレスはゆっくりと頷く

「まあ何にせよ、みつけないきゃ話しにはならないだろ：セレス、一つ言っておくな」

「どうしたの？アル」

「お前が六課のメンバーになっても戦闘には出さない、融合騎だから一緒にいるってだけで戦闘をさせるわけにはいかない
戦う理由が弱かったら怪我じゃすまないからだ」

「戦う、理由……」

アルフィリオスは背筋を伸ばしてから少し真剣な表情でセレスに話しかけると戦闘には出さないと言う

セレスは驚いていたが話しの続きがあるため黙っていた

アルフィリオスは戦う理由がちゃんとしていないセレスを戦闘に出したら最悪死なせてしまうと、説明をするとセレスは何も言えずにただ呟いた

「役に立たないから出さないんじゃないぞ？」

もしも絶対に譲れないものがあって戦うなら俺は反対はしない
少し考えて欲しいんだ、融合騎としてで無くセレス本人としてな」

「わかった……アルが私の事を考えて言ってくれたってのはわかるよ、
考えてみる……難しいけどちゃんと答えをだすよ」

アルフィリオスの言葉を聞くとセレスはゆっくりと頷いて答える

「まあ先輩の言葉も大事やけどまずは六課になれて貰わんとな
入隊するだけじゃ仲間になったとはいわへんからな」

「そうだな、セレスは先にそっちを優先するべきだな」

「仲良くなれるかな？皆と」

「考えるより行動や！リインを呼んで案内とかさせるから自由に動きまわるとき」

難しそうにしているセレスにはやては六課と触れ合う方が先だと言
うと、セレスは不安そうに聞くとはやては親指を立てて答えてから
リインを呼び出すために念話を使用する

「皆、イイ奴らばかりだ直ぐに慣れるさ」

「うん、私頑張るよ！」

はやてが念話をしている隣でアルフィリオスは、セレスに補足する
ように言うとセレスは笑顔を浮かべてから意気込みをする

今、機動六課に新たな仲間が加わった
行方不明の姉妹騎を探す融合騎セレス、彼女はアルフィリオスと何
を描くのか：まだ誰にもわからなかった

EP07：過ぎていく時間（後書き）

どうも、えのきです

今回はいつもより更新が遅れてしまいました

前回に登場した融合騎ことセレスですがいかがでしたか？
天然を意識して書いたのですが表現出来たでしょうか？

よかったら意見などをお願いします！

S. EP..2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷺の裏ラジオ」(前書き)

会話文のみの記念小説です

いろいろな話しが聴けると思うので楽しんで下さい

S. EP..2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷲の裏ラジオ」

アルフィリオス「夜天に舞い踊る荒鷲、2万PV達成！というわけ
スペシャル
でSEPでいかせてもらおうな」

はやて「今日は今までの話しについて語るためにラジオ番組風でやるで！」

セレス「メインパーソナリティをつとめるのはアルフィリオス・ラーゼンハルグと八神はやての二人だよ！」

サブは私、セレスとレキ・アーベントがつとめるよ！」

レキ「このブースは機動六課につくられています、まあ放送はしませんけど…」

アルフィリオス「なんだよ、気の滅入る事をいうなよな
せつかくの記念だぜ？楽しくいかねえと」

レキ「それで何をするって言うんですか？僕は内容を聞いてないんですよ」

はやて「簡単に言えば今までの話しの裏や設定を話していくんや
内容がどうなるかは作者の頑張り次第やな」

セレス「それでそれで何から話していくの？」

アルフィリオス「まあ最初は俺達のキャラ設定からだろうな」

その1…各キャラのコンセプト

レキ「なんです？上のその1とか…」

はやて「今、何を話しているかの説明や
レキ君？あまりツツコミしてたら将来ハゲるで？」

レキ「嫌な事を言わないで下さいよ！」

アルフィリオス「レキがハゲるかは置いといてまずは俺からだよね？
主人公だし」

セレス「アルのコンセプトは皆のお兄さん何だって…頼りになったり
でも普段はそんなでもないよね…」
アルフィリオス「普段からフルロットルなんて無理だからな
適度に抜いているんだよ」

レキ「抜きすぎのような気がしますけど…」

はやて「それも先輩のコンセプトの一つやな、原作じゃ私やヴィー
タ達は何処か気が張ってるみたいな感じやん
だから作者は私らが笑えるようなキャラがいてほしいなって思って
先輩ができたんや

ちなみに私の先輩ってのも初対面より知り合いの方が親しみがある
から先輩って設定になったんや」

アルフィリオス「戦闘においちゃ皆を守るフロントアタッカーで加
速による一点突破を得意とした戦いをしていく

ヴィータと被るけど作者が特化した戦闘スタイルが好きだからな、
逆にレキはバランス型になったんだよな、俺の背中を預けるにはち
ょうどいいって事で」

セレス「確かイーグルレイダーもそんな戦闘スタイルに合わせて作
ったんだよね、でも最初はレキのファフニールを使う予定だったと
か言ってた気が…」

レキ「それは正解です、ファフニールはアルさんが使う予定でした
がファフニールでの一点突破は射撃なので止めたんですよ」

はやて「EP03でレキ君がしてた戦い方やな、確かに先輩には向
きそうにないかもしれへんな」

アルフィリオス「俺についてはこんなもんだな、次はレキにいつてみるか」

レキ「僕のコンセプトはアルさんと真逆なパートナーかつライトニング小隊との関わりが深くなるキャラって事です」

はやて「だから年齢が低いんやな、キャラやエリオ達とそんな変わらんし」

セレス「歳上ならエリオとキャラは絶対丁寧語になると思うから歳を低くしたんだって」

レキ「戦闘スタイルについては射撃を重視したオールラウンダーです
アルさんがクロスレンジだから射撃になったとか」

アルフィリオス「レキのキャラ説明がまだ出来てないからあんまり
言わないでるか」

はやて「セレス含めてキャラ説明はちゃんとせな、あかんな」

セレス「そこは作者の問題だね、皆さんもう少しだけ待っててね？」

はやて「レキ君のコンセプトはこれくらいやな…問題はセレスの方や」

セレス「登場したのが前回ってのもあるけど私のコンセプトを全部話すとネタバレになるんだよね」

レキ「とりあえず、差し支えのないところを説明しませんか？」

アルフィリオス「そうだな、セレスのコンセプトは心の成長だな偶然だけど目覚めたセレスが六課やレリックを通してどう関わるのかを書きたいと作者が考えたみたいだ融合騎なのは戦闘描写を三人にするのが出来ないからだそうだ」

はやて「技量不足を感じさせる理由やな…セレスが登場して六課に起きる変化もお見逃しなくや！」

その2…キャラのイメージC Vとビジュアル

アルフィリオス「さてと次は俺達の容姿についてだなキャラ説明じゃわかりにくいし作者が絵を描けないから説明するぞ」

セレス「まずはアルからだね、アルはTOVの主人公ユーリ・ローウェルだってさ」

面倒見良さそうなお兄さんって感じだから決めたんだって」

はやて「そういえば、先輩は髪の手が白やったな、なんでなん？」

アルフィリオス「特に理由はないな、作者が奇抜な髪の手にしたかったからだそうだ」

レキ「実は適当なんですネ…あの髪が特殊なものとかでなくて」

アルフィリオス「人混みでなら目立つだろうな、それだけだ」

はやて「なんや、悲しい感じやな…ちなみにCVは三木眞一郎さんや！

兄貴キャラの定番やな真面目と不真面目の落差が激しいのも採用の一つみたいや」

レキ「次は僕ですか、僕のイメージビジュアルはキノの旅の主人公キノだそうです」

アルフィリオス「でもそれって実は女のコでしたって子だよな？

レキもそうなのか？」

レキ「そんなわけないでしょ!!」

中性的なイメージと僕の髪が黒だからだそうです」

セレス「レキのイメージCVは折笠愛さんだよね
大人びた子供が似合うから採用したんだってさ

ところでレキは声変わりはしないの？」

レキ「いきなりですね…まだしてはいないです

作者はこの先の作品も考えているようなので一応声変わりしたイメージも決めてるみたいです

成長した僕は保志総一郎さんがやってくれるそうですよ」

はやて「声変わりしても可愛らしい感じはまんまなんやな

ほな最後はセレスやな

セレスのイメージビジュアルは、遊戯王デュエルモンスターズから
風霊使いウイン、やて」

セレス「私だけカードっ!？」

…イメージに合ったからってカードは無いと思うよ…ぐす」

アルフィリオス「作者の好きなカードなんだとき
ちなみに次回からのセレスはポニーテールで登場するらしいな」

レキ「作者はポニーテール萌えなんだそうですよ」

はやて「キョンかつ!？」

まあええわ、次にイメージＣＶに行こうか

セレスのイメージＣＶは阿澄佳奈さんや

純粹な感じで採用したみたいやな」

アルフィリオス「これで一通り説明をしたよな？」

レキ「そうみたいですわね、次はなんでしょうか？」

その3…E P O 1からE P O 7までの裏話

セレス「裏話だってさ、私はE P O 7だけの登場だからあんまり話
しに加われないなあ…」

アルフィリオス「まあ他の裏話を聞いて意見をいつてくれていいか
らよ、そんじゃまずは一つめにいくか、E P O 1からこんな話しが
あったのさ」

裏話1…アルフィリオス・ラーゼンハルグは：最初は陸士108番隊ではなかった

セレス「どうということ？」

アルは最初は何処から出向する予定だったの？」

アルフィリオス「多分そこらへんの次元航行艦隊かな：陸士108番隊に所属してたのはEP01を書きだした時に決めたんだと」

はやて「書いてる最中ってプロットとかは書かへんのか？」

レキ「作者は二度手間になるとかでプロットを書かずに執筆しはじめます、話しの筋は頭の中にボンヤリとあるくらいだそうですよ」

セレス「それって空で書いてるってこと？」

アルフィリオス「そういう、事だからスランプになったら執筆速度が遅くなるんだよな」

はやて「でも次元航行艦隊なら私の先輩にはならへんよね？」

アルフィリオス「まあな、この時はコンセプトが少しまとまりきってなかったんだよな、だからコンセプトはこのEP01が完成して

まとまったんだ」

はやて「なるほどなあ…ほな次の裏話にいこうか」

裏話2…レキ・アーベントは…初めはいなかった

セレス「これって本当なの!？」

レキ「残念ながら事実ですね、僕はEP01の執筆中にキャラが足りないと思った作者が作り出したのです

まあ作者はそこから詳細な設定に時間を費やしましたが」

はやて「主役二人の意外な事実が出てきたもんや…他には何があるんやろ？」

裏話3…EP04は…最初、書く予定はなかった

アルフィリオス「作者…これ本当かよ」

セレス「これってヴィータさんとのバトルですよね？」

はやて「そうやで、EP02でヴィータが先輩をアルフィリオスっ

て呼んだから作る事になったそうや

どうにかしてアルって呼ばせたかったみたいやな、作者は」

レキ「この一件でヴィータさんははやてさんに次ぐヒロインの地位を獲得したんですけどね」

セレス「準ヒロインって感じで目立ってるよね、朝起こしにいったりとか」

はやて「私は六課部隊長やし、先輩に絡める場面少ないやけど本当にヒロインなんやろか？：ヴィータに取られるんとかやうかな」

アルフィリオス「心配するな、はやて：作者がきつと何とかするからだから信じる」

レキ「まあ時期的にははやてさんは目立つかもしれませんが？」

はやて「ホンマか！？次は何の話やったけ？」

セレス「次は主張任務編だよ、私も出番あるといいな」

はやて「よっし！俄然とやる気が出てきたで！！」

アルフィリオス「俺の言葉は無視かよ…にしてもこの小説ってギャグ傾向が多いよな、まあ大抵俺なんだけどな」

セレス「ホテルアグスタ編まではギャグがメインなんだよ、アグスタではかなりの展開を考えてるみたいだから、笑いをチャージしてくんだってさ」

レキ「もう一度読み返して貰えるような小説にするのが作者の希望ですからね

皆で頑張りましょうか！」

はやて「せやな、たくさんの人が見てくれるようにせんな、ほら先輩もふてくされんのはその辺にしとき」

アルフィリオス「わかったよ…なら最後はみんなで次回予告をするか！」

レキ「訓練付けの毎日に突如、舞い込んできた一つの指令…」

はやて「それは懐かしき故郷へいくとなる指令だった…」

セレス「はじめてだけどどこか見覚えのある景色とそして出会う人々…」

アルフィリオス「今、俺達はその地に降り立つ、どこだろうがいつも通りだけだな

次回魔法少女リリカルなのはStrikerS「夜天に舞い踊る荒鷺」EP08…レッツゴー！海鳴市 にテイクオフ！！」

はやて「それじゃあ今日はこのくらいにしとこか」

レキ「ただ会話文のみでよかったのでしょうか？」

セレス「たまには良いんじゃないかな？

次回もあるんだよね？」

アルフィリオス「そうだな、次は5万PVを達成した時にでもやるかな

さてと、夜天に舞い踊る荒鷺！」

全員「「「これからよろしくお願いします！！
それではまた、いつの日か！！」」」

S. EP..2万PV記念「夜天に舞い踊る荒鷺の裏ラジオ」（後書き）

どうも、えのきです！

いかがでしたか？記念小説の方は

普段は会話文のみはやらないので少し新鮮でした

次回もラジオ番組風の記念小説をかけるように頑張って執筆します

2万PVをして頂きありがとうございます！

それでは、えのきでした

EP08：レッツゴー！海鳴市！！（準備編）（前書き）

出張任務編に突入しました！

予告では海鳴市までいくはずでしたが文面の都合により二分割しました

EP08..レッツゴー!海鳴市!! (準備編)

SIDE..アルフィリオス

セレスが六課の仲間入りを果たして数日が経過した
その間、レリックはまったく現れず新人達は訓練漬けの毎日を送っていた

「ではいくぞ、アーベント!」

「はい!シグナム副隊長!!」

フォワードメンバーはそれぞれの分野の人が訓練を担当している

スバルはヴィータ、ティアナはなのは

エリオとキャロはフェイト

レキは俺なんだが今はシグナムと稽古という名の模擬戦をしている
なんでも剣術の方の技術を向上させたいから、だそうだ:シグナム
に頼むとはある意味勇気があるよな、レキの奴は

「はああああっ!!」

「ファフニール!シフトD^{ダブル}!!」

レヴァンティンを構えて斬りかかるシグナムにレキはファフニールを双刃剣から双銃に変えて降り下ろされる刃を頭上で交差して受け止める

体格差と一撃の重さにレキの足は地面にめり込む

「受け止めた事は流石と言えるが、まだ甘い！」

「うわっ！？ファフニール！」

「ソニックムーブ！！！」

シグナムはレヴァンティンを風ぎ払うように振るうとレキのガードを弾き飛ばす

レキは体勢を立て直そうとソニックムーブで後退をすると直ぐ様双剣から双銃に変形させる

「ガトリングバレット！ファイア！！！」

後退する体勢のままシグナムに向けて魔力弾を連続で打ち込む、砂塵と爆煙がシグナムを包みこんでいく

レキは連射の反動で体勢を立て直すと双銃を双刃剣に繋げて身構えた瞬間、爆煙をまといながらシグナムが飛び出してくる

「でえええいや！」

「っ！？だあああっ！」

シグナムがレヴァンティンを降り下ろしたと同時にレキはファフニールで切り上げる

激しい金属音の後にファフニールはレキの後方に突き刺さる、そしてレキの喉元にはレヴァンティンの刃が突きつけられていた

「勝負有りだな…」

「そうですね…参りました…」

シグナムの言葉にレキは残念そうに答えるとシグナムはレヴァンティンを下ろす

二人の打ち合いの眺めていたアルフィリオスはスッと立ち上がる

「イーグル、時間は？」

「56秒です、高タイムかと」

「それでも一分もいってないのは悔しいですね」

「シグナム相手でここまでやれたんだ、普通ならまずは初撃で落とされる」

イーグルレイダーから時間を聞いたレキはファフニールを抜くと顔をうつ向かせて落ち込むとアルフィリオスは上出来だと言ってレキの頭を小突く

「私もなかなかの実力だと思う、アーベントまだやるか？」

「はい！もう一度お願いします…！」

レヴァンティンを鞘にしまってからシグナムはレキに問いかけると

レキは再びファフニールを構えて頷くがそれと同時に訓練終了の笛がなる

「シグナムとの打ち合いはまた今度だな…レキ、クールダウンしてから戻れよ？」

「わかりました、それでは」

笛の音を聞いてからアルフィリオスは苦笑をしてからレキに指示を出す。レキはファフニールを待機状態にしてクールダウンに入る、レキがクールダウンに入ったのを確認するとシグナムがアルフィリオスの傍に移動し隣に立つ

「お前はアーベントに教えないのか？アル」

「一通りの基礎はやったが俺がレキに教える事はねえよ、アイツはアイツなりの戦い方を見出だした
なら口を挟む気はねえし、クロスレンジならお前が上だろ？シグナム」

「確かにそうだが、私は人に何かを教える事は出来ない、近づいて斬れくらいだ」

「教える事だけが教導じゃねえよ
今のレキに必要なのは力の強い相手と戦う経験だ…どうにもサポートばかりさせてるからな

実戦じゃ経験なんて考える気にはならねえ
だからお前に頼んだんだよ、俺だとパターンが読めるから意味がないし」

クールダウンをしているレキを見ながらシグナムはアルフィリオスに問いかける

アルフィリオスは手をヒラヒラさせて軽く笑うとレキについて説明をする

シグナムはレヴァンティンを見ながら呟くように言う「アルフィリオスは背筋を伸ばして答えるとシグナムに相手をしてもらった訳を話す

「なるほどな、ならこの剣を存分に振るわせてもらおうか」

「お手柔らかにな、てかなんで騎士甲冑を解いてないんだよ？」

「何：久々に身体を動かしたがまだ物足りなくてな
アル、良ければ私と「断る！！」：最後まで言っていないだろ」

「お前に付き合ってたら命がいくつあっても足りないんでな、レキ！先に集合場所にいくぞ！！」

鞘に納まったレヴァンティンを見ながらシグナムは答えるとアルフィリオスは疑問に思った事を投げ掛ける

シグナムは質問をされると少しだけ楽しそうに返すとアルフィリオスに模擬戦を頼みこもうとしていたがその前にアルフィリオスに断られ少し不機嫌そうに返す

アルフィリオスはクールダウンにしているレキの横を通り抜けてシグナムに返すと少し駆け足でなのは達の所へ向かった

「あっ！アルさんようやく帰ってきたね」

「ああ…珍しい客が来てるけど何かあったか？はやて」

「そないな、言い方はないやん

少しお知らせにな、レキ君とシグナムが帰ってきてへんけど…あっ！来たようやな」

なのは達の所に戻るとはやてが一緒に待っていた

アルフィリオスは不思議そうに聞くと若干不機嫌そうにはやては返すと尋ねた理由を説明しシグナムとレキについて質問をした時にちようど良くレキとシグナムが戻ってきた

「主、何かありましたか？」

「今から説明するで、実は先ほど、聖王教会からロストログアがある管理外世界で見つけたそうや、騎士団は動けへんから機動六課に要請がかかったんや」

「それで何処の管理外世界なんですか？」

前線メンバーが集まってはやては話を始める話しの途中でティアナがはやてに質問を投げ掛けるとはやては黙ってしまった

「はやてちゃん？」

「場所は：第97管理外世界、惑星名「地球」
それで発見された現地名は日本にある海鳴市や」

「二度あることは三度あるって言ったもんだな」

第97管理外世界：そこはなのはやはやての故郷であり過去二度に
渡るロストロギア事件が巻き起こされた場所だった

フォワードメンバーやなのは達の表情が不安の色を浮かべる

「あっ！でも今のところ危険性がないちゅう話しや
だから大事にならないと思う」

「なら気軽な旅行に洒落込むとしますか
出発はいつなんだ？」

「さすがに旅行気分はマズイと思うで、先輩
出発は明日の昼からや、それまでに各自準備しておくように」

不安そうにしている前線メンバーにはやては慌てて補足をする
とアルフィリオスが茶化すようにいう

ロストロギア関連なのに相変わらずの調子の彼を見て一同は呆れる
が何処か安心が出来た

はやてが出発時間について答えると全員がそれぞれに返答をして朝
の訓練が終了した

「セレス、少し良いか？」

「ん、どうかしたの？アル
シャルさん、少し待ってて貰えますか？」

「ええ、良いわよゆっくりしてらっしゃい」

皆と別れたアルフィリオスはセレスに会うために医務室に来ていた
セレスは目覚めたばかりで知らない事が多い、そのため様々な人に
話を聞いて勉強をしている

今日はシャルに古代ベルカの事を聞いていた
入り口からアルフィリオスが声をかけるとシャルと話していた、
セレスはシャルに断りを入れてからアルフィリオスの傍に走りよ
ってくる

「実はな、明日の昼から管理外世界に出張するんだが一緒に行くか
？」

「アルも行くんだよね？なら私はついていく！
それに管理外世界は初めてだから楽しみだよ」

「浮かれてんなあ、まあこっちは仕事だけど六課預かりのセレスに
は関係ないんだよな」

走りよってきたセレスにアルフィリオスは用件を伝えたと、セレス
は特に迷う事なく決断をすると気持ちを隠しきれないのか、少し楽

しそうにアルフィリオスに言う

アルフィリオスは少し苦笑してからセレスの頭を軽く撫でてから少しうらやましそうに言う

「出張任務についていくならお洋服を買ってきた方が良いんじゃないかしら？」

「そうだよな、さすがにはやてのお古だけじゃ足りないよな」

「そうなの？ 私は問題ないよ」

「ダメよ！ セレスは女の子なんだから身だしなみに気をつけないといけないんだから！……セレス？」

セレスの背後まで歩いてきたシャルが会話に加わる

シャルの意見を聞いてアルフィリオスはセレスの格好を見る

六課預かりになっているセレスは、はやてのお下がりを着ていた

セレスは小首を傾げながら言うと言とシャルが力説するように言い、あまりの迫力にセレスは思わずアルフィリオスの影に隠れる

「シャルさん、怖いよ…アルも新しい服の方が良いの？」

「そうだな、初めての場所に更に新しい服で行けばウキウキはUPだな」

「なら買いに行きたい！アル、連れていってくれる？」

アルフィリオスの影に隠れながらセレスが言うのとシャルは落ち込んだように肩を落とす、セレスは隠れたままアルフィリオスに聞いてみる

アルフィリオスは顎に手を当ててから人差し指を立てて答えるとセレスは先ほど以上に目を輝かせて連れて行って欲しいと頼みこむ

「ああ、良いぞ

はやてに許可貰ってくるから準備をしててくれないか？」

「了解だよ！…早くしてね？アル」

「わかった、わかった…あんまり急かすなよ」

アルフィリオスは苦笑してから答えると、セレスは急ぎ足で外に出るが直ぐに戻ってくると顔だけだして言うのとアルフィリオスは苦笑を浮かべながら返す

「そんじゃ行くけどじゃあな、シャル」

「ええ…わかったわ…アルさん…」

未だ落ち込んでいるシャルに声をかけるとアルフィリオスは医務室を後にする

その足が向かうのは部隊長であるはやての部屋だった

「ってな訳だ、一緒に来てくれ」

「先輩…いきなりすぎや…確かにセレスに私服は必要やと思うけど外出届けを三人分とりに来て、私を連れ出すのはどうかと思うで？」

部隊長室ではやてはアルフィリオスにため息まじりに話す

つい数分くらいにアルフィリオスは部屋に入室してはやてに外出届けを出すと一緒に出ないかと言ってくる

ちなみにアルフィリオスの外出届けには、彼とセレスさらにはやての名字が書かれていた

「前にセレスの私服を選ぶ時は頼むって言ったろ？
女物の服はわかんないんだよ、頼む!!」

「仕方ない人やな…ええよ、ついて行くから車を回してくれへんか？
もちろん先輩が運転やで、誘った張本人やから」

「わかってるよ、なら車をとってくるから着替えとけよ？」

アルフィリオスは数日前に話した内容を掘り出してはやてに手を合
わせて頼み込むと、はやてはやれやれとため息をついてから車をア
ルフィリオスに任せる

アルフィリオスは微笑を浮かべてから部屋の入り口に移動するとは
やてに着替えるように言うのと部屋を後にする

「ホントに仕方ない人やな…にしても先輩と外出するのは考えたら
初めてやな…ふふ」

立ち去るアルフィリオスの背を見ながらはやては呟くと、ふと昔の

事を思い出してから実は外出するのは初めてな事に気づいて少しだけ嬉しそうに笑う

――――

車を隊舎前に移動したアルフィリオスは車に寄りかかって待っていた。その姿はいつもの陸士制服ではなく白いジャケットに黒のVネックのシャツに青色のジーンズであった。

「先輩！お待たせや
少し遅れたけど大丈夫やろ？」

後ろから自動ドアが開く音がすると私服に着替えたはやてがハンドバックを片手に走りよってきた。

「よお、セレスがまだだから間に合ってる
……なるほどな」

「ん？なんや？なんかおかしいところがあるんか？」

「いや、私服なんて初めて見るが似合うなと思ってな…」

「うえっ！？／＼／＼い、いきなり何を言うんや！先輩は！？外出するのに似合う服を選ぶのは当然やろ／＼／」

はやての私服姿をアルフィリオスは食い入るように見ていると、はやてはおかしい所があるのかと不安気にしながら衣服を調べてだす

アルフィリオスは私服が似合っていると言いだす

はやてはまさかアルフィリオスが服装について意見を言うなんて思っていたなかったらしく頬を染めて少し慌てながら答える

はやてが慌てていると自動ドアが開き先ほどとは違う服に着替え髪を二つに束ねるツインテールのセレスが出てきた

「お、セレスも出てきたな？」

誰かの服か？似合ってるぞ」

「本当？良かった：違う違う、コホン、別にアルのために着替えた訳じゃないんだからね！」

「はい？」

はやてと同じように服装を誉めるとセレスは、最初は嬉しそうにするが途中で首を振ってから腰に手を当てて人差し指をアルフィリオスに向けると若干、棒読みな言い方で言葉を放つ
アルフィリオスとはやては不思議そうに首を傾げる

「セレス、どうしたんだ？」

「男の人はこの髪型でこういうセリフを言えば喜ぶものだってヴァイスさんが教えてくれたから嬉しくなかった？」

困惑するアルフィリオスにセレスは自分の髪型をさしてから答えると小首を傾げながら聞く

「人それぞれだからな、俺はそこまで喜ばないな」

「そのわりには私に撮影を指示してましたよね？音声含めて」

「先輩……」

苦笑をしながらアルフィリオスは答えるとイーグルレイダーが撮影をしていた事を告げる

それを聞いたはやては目を細めながらアルフィリオスを睨み付ける

「いやこのセレスを見て写真をとらないのはおかしいだろ、可愛いし」

「アル、貴方はいま変態か親バカの境目にたってますよ」

「イーグル、うるさい！とりあえず行こうぜ店が閉まったら大変だろ？」

慌てながらセレスを見て言うアルフィリオスはイーグルレイダーはため息まじりに話すとアルフィリオスは早く行こうと車に乗り込む

「ごまかしたな、先輩……」

セレス、はよ乗ろうか」

「うんわかったよ、はやてさん！

でもその前に……髪型を元に戻してっ」と

「？そのまんまでもええやん、どうかしたんか？」

「なんか落ち着かなくてさ、やっぱりこれの方が良いと思って」

慌てて乗り込むアルフィリオスを見てはやては呟くとセレスに声を

かける

セレスは車に乗り込もうとしたがいったん足を止めるとツインター
ルをほどき、いつものポニーテールに結び直す

はやてはふと疑問に思い質問をするとセレスはポニーテールの方が
落ち着くと苦笑をしてから車に乗り込む

理由に納得したのかはやても笑みを浮かべてから同じように車に乗
り込む

――
SIDE..アルフィリオス

機動六課を出た俺達はミッドチルダの首都クラナガンへと向かった、
六課を出た時のセレスは凄くウキウキしていて着いたら疲れている
んじゃないかと思ったが：

「これがクラナガンなんだ、ねえねえアル
いろんな建物があるよ、見ていても良いかな？」

「まずは服だ、それからな」

前言撤回：テンションがはち切れそうなくらいに上がってる、いわ
ゆるMAX状態だ
車でコレなら降りたらどうなるんだかな

「セレス、すっかりはしゃいだるようやね
見失わないようにせんとアカンな」

「確かにな…大丈夫か心配だな」

「ふふ、そうしてるとホンマにお父さんみたいに見えるで？」

バックミラーを見ながらはやては呟くのを聞くと俺ははぐれた時を
考えて腹を抑える、本当に不安だ…

はやては俺を見て微笑を浮かべて意地悪く言ってくる、にやろう

「ならお母さんは、はやてだな」

セレスが六課で俺を除いて良くなつてるのは、はやてだからな」

「わ、私！？なにを言うんや、先輩は！！」

…先輩と夫婦なんて嫌な訳やないけど私としてはもう少し…」

仕返しの如くに俺ははやてにセレスのお母さんじゃないかと言うと、
はやては凄く慌てて返答すると何やらブツブツと呟きだす、どうし
たんだ？

後ろで騒ぎまくるセレスと思考にトリップをしているはやてに俺は
ただため息を吐いた

クラナガンにあるデパートの服売り場に來た俺達はセレスの服を探

すためにいろいろ見はじめた

まあ、俺は近くのベンチに座って待ってるんだがな

子供とはいえ女性用の服売り場にいたくはない…さっき親子連れに白い目で見られて泣きたくなかったしな

俺が座ってる少し前ではやてがセレスに服を合わせていく
セレスは退屈なのか欠伸をしながら立っていた

「うーん…これは迷うな…先輩！少しええか？」

「どうしたんだよ、呼び出したりして」

「この服とこの服…どっちがセレスに似合うとおもう？」

服を選んでいたはやてがおもむろに俺に声をかけてきた
その手には青いワンピースと白いブラウスと緑のスカートのセット
が握られていた

あんまり服に詳しいほうじゃないからよくわからないってのが答え
だがせっかく聞かれたんだ答えないと

「そっちのブラウスの方が良いと思うぞ」

「ふむふむ、先輩にしては良い意見やな」

「おい、聞いたいてそりゃねえんじゃね？」

まあ確かに良い意見は言った覚えはねえけどな」

俺の意見を聞いてはやては意外そうな顔をしてから、ブラウスを見

てから呟くとセレスに合わせる

俺は肩を落としてからベンチに座ると再び仲良さそうにしているはやて達を見る

改めて見ると親子みたいだな…

はやてが母親か…器量良し、料理できる、顔立ちも悪くない…アレ？今考えたら理想的なんだよなあ…アイツ…

…なんか他の奴にやるのが嫌になってきたな…って！何を考えてんだ、俺は…

いやでも、まともな奴じゃないと納得は出来ないよな…

だから違うっつの！！

「先輩、どないしたん？凄い百面相して…なんかあったん？」

「アル…大分怖いよ…」

「おう！？もう終わったのか…悪い悪い考え事しててななら行くか」

はやてとセレスに話しかけられて、俺は声を裏返らせて答えると慌てて立ち上がる

まさかはやてについて考えてたなんて言えないよな…
しかもあり得ない心配をしてたなんて余計に言えない

その事もあってからかはやての方は見れなくて帰るまでそのままだった…

——おまけ——

「ア、アル！？待って、くれ！悪かった、俺が悪かったから！」

機動六課のある一室にてそれは起こっていた後退りをしながらヴァイス・グランセニックは目の前にいる男に謝っていた

ヴァイスの前にいるのはバリアジャケットを身に纏い肩にイーグルレイダーを担いで仁王立ちをしているアルフィリオスだった、無垢なセレスに余計な事を教えた、ヴァイスを肅正しにきたのだった

「謝らなくて良いぜ？…少し痛い目にあってもらうだけだからな」

その言葉の後にヴァイスの悲鳴が六課に響いた…

翌朝、ヘリポートにてズタボロのヴァイスが発見された

EP08：レッツゴー！海鳴市！！（準備編）（後書き）

どうも、えのきです

出張任務編であります、前書きにありましたが二分割しました最初
は海鳴市でサーチャーを設置するまでやる予定でしたが明らかに長
くなるなと思いわけました

それぐらい良いじゃないかと言われても仕方ありませんがすみませ
んが納得をお願いします

では次回はレッツゴー！海鳴市！！（到着編）をお楽しみに待つ
て下さい！

キャラ説明（レキ編）

名前…レキ・アーベント

年齢…12歳

身長…142?

体重…47?

性別…男

イメージCV…折笠愛

髪の色…黒

髪の長さ…耳にかかる程度

目の色…青

性格…几帳面で苦労性

年齢に比べて達観している

魔力ランク…陸戦B

レアスキル…魔力変換資質「重力」

ポジション…ガードウイング

階級…一等陸士

趣味…パズル

好きなこと…計画通りに進むこと、工作

嫌いなこと…サボり、居眠り、働かない上司

詳細

2年前からアルフィリオスの部下となった少年

レキには姉が一人いて彼が5歳の時に亡くなっている、亡くなった詳細を聞かされなかったため管理局に入局した

姉に習った射撃の基礎とアルフィリオスに習った近接を合わせたスタイルで戦闘を行う

また彼の魔力変換資質「重力」は本来は引力と斥力の二つを使えるがレキが未熟なため引力しか使えない上に制御が難しいためよほど事が無ければ使用しない

コールサインはライトニング5

エリオやキャロとは仲間としてもプライベートでも仲が良い

デバイス名…ファフニール

待機状態…十字架型のロザリオ

戦闘状態…双刃剣

カートリッジ…マガジン式

電子音声…男性

形態

シフトS…双刃剣

シフトD…双剣

シフトA…弓

シフトB…双銃

詳細

アルフィリオスがレキに作ったデバイス

カートリッジを使用せずに変形というコンセプトで分離と組み換えにより形態を変える

シフトSは基本形態、クロスレンジに強いが取り回しが効きづらいため多対一を目的としている

シフトDはシフトSを分離させたスピード重視の形態
手数は多くなるが一撃の威力が無い

シフトAはシフトSを弓の様にした形態
一撃の砲撃は高く多重弾核のようになっていたためAMFが効きづらいが砲撃のタメと連射ができない

シフトBはシフトDを銃のように変形させた形態
レキが愛用する形態、連射能力があり敵を蜂の巣のように打ち込む事ができる

本来は量産試作機として設計したが取り扱うものの器用さが問われるため、計画は凍結し今ではレキ以外使う人間はいない

キャラ説明（セレス編）

名前…疾風の舞姫セレス

愛称…セレス

身長…135?

体重…38?

性別…女

イメージCV…阿澄佳奈

髪の色…緑

髪長さ…腰くらいまでのポニーテール

目の色…茶色

性格…無邪気で天然な勉強家

魔力ランク…A

レアスキル…ユニゾン

術式…古代ベルカ

階級…無し

趣味…調べもの、探検、解析

好きなこと…読書、知識を得ること

嫌いなこと…黙ってること、うごかないこと

詳細

ファーストアラートが解決した時にリニアレールから発見された融合騎

魔力の相性が良ければたとえ使用者に適正がなくともユニゾンすることが出来る

通常のユニゾンと違い使用者と融合騎の心の一致具合で能力が変動する

互いに思いあえば力は際限無く上がるという

セレスは目覚めたばかりで知識があまり無く六課の隊員にいつも聞きまわっている、たまにおかしな事を教える隊員がいるがその後、必ずアルフィリオスに粛正される

無邪気で活発なのは使用者の魔力から読み取った情報の影響で違う人間ならまた違った性格になるという

リインフォースのような縮小が苦手なため常にフルサイズで行動している

そのため魔力消費が激しいのでたくさん食べるカロリーは魔力消費に使われるため太る事はない

EP09：レッツゴー！海鳴市！！（到着編）（前書き）

ようやく仕上がりました

EP09、楽しんでもらえたなら嬉しいです

EP09：レッツゴー！海鳴市！！（到着編）

機動六課 ヘリポート

管理外世界「地球」に向かうためにフォワードはヘリポートに集まっていた

いつもの制服とは違いそれぞれが私服であった

「皆、もう来てたんだゆっくりしても良かったのに」

「なのはさん！実は、待ちきれなくて」

「遅れないよりはマシかなと思ひまして」

フォワードメンバーが話しをしている時に私服に着替えたなのはがヘリポートにやってきて驚いたように声をだすとまだ時間じゃないと言うと、スバルが苦笑してから言うと言と補足するようにレキが付け加える

レキの私服は魔力光と似たような水色の上着に青色のジーンズであった

「もう皆そろっとるようやな」

レキが補足を加えた時にはやてやフェイトといった残りの隊長陣がやってきた

しかしアルフィリオスとセレス、ヴィータの姿がなかった

「あの、アルさんとセレス、それにヴィータ副隊長は？」

「まあいつもの通りや…直ぐに来ると思うで」

「わりいな、待たせちゃったか」

エリオがこの場にいない三人について隊長陣に質問をするとはやてがやれやれとため息をついたように答えると、ヴィータがヘリポトにやってくる、その手にはまるでボロ雑巾のようなアルフィリオスが引きずっていた、その後を少し眠そうなセレスがついて来ていた

「あのアルさんに何が？」

「ティアナ、世の中には気にしなくて良いことがある、コレは気にしなくて良いことだ」

「わ、わかりました…」

アルフィリオスを引きずるヴィータにティアナが質問すると怒気の籠った視線に頷くしかなかった
ヴィータはフォワードメンバーの前にアルフィリオスを放置するとはやての所に歩いていく、するとアルフィリオスがむくりと起き上がった

「あゝ、いたたた…ヴィータの奴、頭が割れたらどうすんだよ」

「むしろ、割る気だったと思いますが…それで何をしたんですか？」

「俺が悪い事前提かよ！？…って言っても何がなんだかさっぱりでな」

「私、知ってるよ…ふわぁ…」

頭を抑えながらアルフィリオスは言うのとレキはため息まじりに質問を投げ掛ける

明らかに疑われている事に、アルフィリオスはショックを受けながら何故ヴィータに殴られたか検討がつかずに首を傾げる

すると眠そうにしていたセレスが欠伸をしながら訳を知っていると答えてから話しはじめる

S I D E ..セレス

アレは数時間前かな？朝ごはんを食べてからアルの部屋に戻るとアルがお昼寝してたの

「イーグル、なんでアルは寝てるの？」

「レキに書類の処理をさせられて疲れたからだそうですよ」

「それってサボってたからだよね…ふわぁ…朝ごはん食べたからかな…眠いや…イーグル、アルと一緒に起こしてくれる？私も寝たいから」

「わかりました、では出発前に起こしますね」

「お願いねえ…」

イーグルにアルが寝ている理由を聞いてから私も眠くなってね
アルと一緒に寝る事にしたの

—————

「アル？…いねえのか？」

「ヴィータさん？アルは寝てますよ、どうぞ入って下さい」

セレスがアルフィリオスと一緒に寝始めた頃にインターホンが鳴る
とヴィータの声が聞こえてきた

アルフィリオスの首にかかっているイーグルライダーは声の主に対
して入室を許可する

「つたく、もう少しで出発なのにノンキだ…な…」

「どうかしましたか？」

「なんで…セレスと一緒に寝てんだよ、しかもだ、抱き合いながら
…」

中に入ったヴィータは目の前に広がる光景に言葉を無くした
そこにはアルフィリオスがセレスを抱きしめながら寝ていた

実際は寝返りをうった時に手がセレスに乗っただけだがヴィータに
ってはそう思うしかなかった

「ヴィータさん、これには訳がありました」

「理由なんて知る気はねえ…けど見ててなんかムカつくいつも通りに起こすか」

イーグルレイダーの言葉にヴィータは耳を傾けずに寝ているアルフィリオスを睨み付けながら呟くと愛機グラーフアイゼンを起動させる

「いつまで寝てんだ、こんのロリコンがつ!!」

「ぐぼあっ!?!」

怒号にも聞こえるヴィータの叫び声とともにグラーフアイゼンはアルフィリオスの顔に叩きこまれた

「…って事があったんだよ」

「それを見てたのはイーグルの方だよな?なんで自分が見たように話せるんだよ」

「まあまあ、気にしない気にしない…」

セレスはヴィータが怒ってた理由を説明するとアルフィリオスは疑問に思った事を投げ掛ける

セレスは笑いながら手をパタパタと動かしながら答える

「とりあえず、またアルさんが悪かったって訳ですか」

「ちよいと待て、セレスと昼寝してたのがなんで悪いんだよ
時間が空いてたから寝てただけだぜ？」

「それは…ねえ？」

話を聞いていたレキはやっぱりかため息を吐くとアルフィリオ
スは意味がわからなさそうに答える

そんなアルフィリオスの問いにレキは言葉を濁しながらスバル達に
同意を求めるとスバル達はそれぞれに頷いた

「みんなー！そろそろ出発だよー！」

「「「「わかりました」「」「」」」」

「…何？何がなんなんだよ…」

ヘリの中からなのはがフォワードメンバーに呼びかけるとフォワー
ドは一斉に返事をしてからヘリに向かった

残されたアルフィリオスはレキ達の行動の真意がわからずに立ち尽
くしていた

フォワードメンバーがヘリに乗り込むとシャマルがリインフォースに荷物を渡していた

「これがリインちゃんのお洋服よ」

「ありがとうございます！シャマル」

「リイン曹長のってそれ普通の子供服ですよね？」

「ああフォワードのみんなには見せてなかったですね…システムスイッチ、アウトフリュームフルサイズ！」

リインフォースが受け取った洋服を見てエリオが不思議そうに質問をするとリインフォースは思い出したように言う

そして目を閉じて集中すると彼女の身体が白く光りだすとエリオやキャロと同じくらいのサイズに変わっていた

「でかっ!？」

「…それでも小さいけど…」

「皆、どうかしたの？」

「セレス、実はリイン曹長がおっきくなったんです！」

大きくなったリインフォースに、スバルとティアナが感想をもらすとセレスがヘリの中に入ってきて何かあったのかと聞く

キャロは少し興奮まじりにセレスに教えるとセレスは奥にいるリインフォースに目を向ける

「システムスイッチで大きさを調整しただけだよね？
そんなにびっくりしたの？」

「ふえ、セレスは知ってたの？」

「スバルさん、私も融合騎なんですよ？
それくらいわからないとマズイですから…」

「じゃあセレスもリイン曹長みたく小さくなれるの？」

セレスは特に驚く事はせずに言うとなスバルが不思議そうに、質問を
するとやれやれといった感じに答え

自分も融合騎だと改めて言うとなキャラが小さくなれるのかと質問を
投げ掛けてくる

「私のシステムスイッチは一度発動すると中々、再起動はしないの
だから普段からフルサイズな訳…まだ本調子じゃないからかな？」

「ところでアルさんは？
一緒に来なかったのかい？」

セレスは自分の胸元に手を当てながら、説明をし呟くように言うとな
レキがアルフィリオスがいらない事に気付くとセレスに聞いてくる

「アルならさっきはやてさんが連れていったよ、なんでも向こうで
会わせたい人がいるって…置いていかれたの」

「そうなんだ、ごめん…余計な事を聞いて、にしてもはやてが会わ
せたい人って誰なんだろ」

アルフィリオスがいらないことを説明すると、ハアと深いため息を吐いてセレスは肩を落とす

レキはマズイと思い素直に謝罪すると疑問に思った事を口に出す

――――

S I D E ..アルフィリオス

レキ達がヘリに乗ったところで俺ははやてに呼び止められた、訳を聞いたらなんでもはやて達は別の場所から地球に行くらしい

「それでな、先輩に会わせたい人がいるんや、私の友達で先輩の事をよく聞いて貰ってたんよ」

「別に構わないがどんな話を話しているのか、気になるんだけど聞いていいか？」

「ほな行こうか、待たせたら悪いもん」

「答えろよ！お前、俺について何を話してんだよ！？」

はやては俺に友達の所に一緒について来てほしいとたのみ込んできた俺ははやてが自分の事をどんな風に教えているかと質問を投げ掛ける

はやては質問には答えずにスタスタと歩いていつてしまった
こいつ、いったいどんな話をしてんだよ…

なのは達とは違う転送ポートにつくと俺達は地球の海鳴市へむけて
転送を開始した

「…転送完了だ「ミギヤアアーっ!」? おうわ!?! なんだ、猫
か?」

「ああっ!?! ゴメンな? 猫ちゃん、にしても久しぶりやな…」

「なあ、はやて…ここって個人の家なのか? ずいぶんと豪勢に見える
んだが…」

転送が完了して地面に降りた瞬間、甲高い鳴き声が耳に入ると足元
に二匹の猫がいるのに気がつく

はやては慌ててしゃがみこんでから猫に謝ると二匹を抱き上げて呟く

俺はと言うと目の前にある家に驚いていた、はやてにここについて
教えて貰おうと質問をした時に足音が聞こえてそちらを向くと紫色
でロングヘヤー、年齢ははやてと同じくらいの女性がこちらに歩い
てきていた

「はやてちゃん!」

「すずかちゃん！久しぶりやな！」

「本当だね！元氣そうで良かった！」

はやてはすずかと呼んだ少女と手を合わせて再会を喜びあっていた俺は邪魔するのも忍びないと思い近くのヴィータに身体を傾けて聞いてみる事にした

「なあ、ヴィータ：あの子がはやての友達なのか？」

「ああ、月村すずかかって言ってよ
多分なのは達より先にはやての友達になってくれたんだよ、変な事すんなよ？」

「しないから：少しは信用してくれよ」

少し小声で話しかけるとヴィータも同じように返答をすると睨み付けながら俺に言ってくる：酷い：

「皆さん、お久しぶりです」

「ご無沙汰でした」

「元氣だった？すずかちゃん」

「お久しぶり、です」

はやてとの再会を終えた月村は俺達の所に来ると優しく笑うとシグナム達に挨拶をする、ヴィータの敬語に笑いそうになるのをこらえてると月村は俺をジッと見ていた

シグナム達は早く挨拶しろと視線で命令をしてくる

「はじめまして、アルフィリオス・ラーゼンハルグです
今回転送ポートの到着地点に場所を提供してくれてありがとうございます」

「あ…いっ、いえお役に立てたなら光栄です
あの…少し良いですか？」

「ええ、遠慮なくどうぞ」

「アルフィリオスって事は、はやてちゃんの先輩なんですよ？
すみません、余りにも話しから聞いていた人とは違うから」

視線で俺に命令してくるシグナム達に、俺は半ば自棄になりながら
普段ならしない敬語で自己紹介をする

俺の猫かぶりに驚いたのかはやて達は俺に疑いの眼差しを向けてくる

月村は意外そうにしながら俺に質問を続けるそして話すと違って
いると言ってくれた…はやて、なんて説明をしてんだよ…

「…ああなんだ、どんな感じに説明してるか聞きたいが俺は丁寧語
は使わないぜ
さっきまでは人に自己紹介を強要してきた奴等に向けて言っただ
けだからな」

「なるほど、やっぱり
はやてちゃんから敬語とかは必要ない気さくな人って聞いてたから
少し戸惑っちゃいました、それじゃあはやてちゃん達が使うコテ

ジに案内しますから車を用意しますね」

俺は頭をかきながら月村に説明をすると近くにいたシグナム達に視線を向ける

月村は手を軽く合わせると微笑して答えると車をとってくるとその場を後にした

なんかああいうタイプはいなかったから珍しく緊張するな…

「先輩…何をにやついているんや？」

「はやて、さん…いかなされました？」

後ろを振り向くとはやてがジト目で俺を睨み付けていた
しかも黒いオーラを纏いながら…俺は軽く後退りをする

「いやな、すずかちゃんにはずいぶん態度が違うやん
どうしてかなと思うてな」

「それはアレだ、俺の周りには凶暴な奴等しかいないわけだから、
あんなおしとやかな子には緊張が…すみません、本当に！」

「ほう、私らが凶暴…ねえ…」

「いや…今のは言葉のあやでして本心ではないのです！だからごめん！」

黒いオーラを纏いはやては笑顔のまま俺に質問を投げ掛けてくる

俺は指を立てて説明をしていくとオーラの高まりを肌で感じた、やばいなど：

だんだん口数が減っていくはやてと口数が増える俺、面白いくらいに对象的で第三者から見れば笑えるものだった

まあ本人は笑えないけどな、次の瞬間白い閃光が視線覆った：

まあそれがはやての砲撃だと気づいたのは俺が空に飛ばされていた

「あれ？アルフィリオスさんは？」

「つい先ほど、星になったわ」

車を用意して戻ってきたすずかは一人減った事に気がついてはやてに質問をするとはやては少し満足したように空を見上げていた

EP09…レッツゴー!海鳴市!! (到着編) (後書き)

仕事を立て込んだりさらに夏バテになったりといろいろな事があつてようやく仕上がりしました

次回はEP10…レッツゴー!海鳴市!! (搜索編) になります
が次は早く仕上げるように頑張ります

EP10：レッツゴー！海鳴市！！（捜索編）（前書き）

レッツゴー！海鳴市！！の最後です

予定では二部編成でしたが三部になっちゃいましたけど読んで楽しんで貰えたら嬉しいです

EP10：レッツゴー！海鳴市！！（捜索編）

はやての砲撃で吹き飛ばされたアルフィリオスはなんとか回収をしてもらい、今回の出張任務で使わせてもらうコテージにたどり着いた

「なのは達はもう行ったみたいだな…セレスは？」

「セレスは自分も手伝いたいとかでスターズについていったそうよ」

「一人で出かけてないからまだ良いか…んで俺は何をすればいいんだ？」

コテージの周りを見渡してからなのは達がいない事を理解するとふとセレスもない事に気付く

するとシャルがセレスについて教えアルフィリオスはほっと胸を撫で下ろしてから自分は何をするのかと聞く事にする

「アルさんは夕食の準備を手伝って欲しいってはやてちゃんが言ってたわ」

「良いけど夕食って何をする気だ？」

「コテージで食べる料理、そんなのバーベキューに決まってるでしょ！」

シャルはアルフィリオスに夕食の手伝いをして欲しいと答える

アルフィリオスは夕食の内容を聞いてないためシャルに質問をす

ると答えは後ろから聞こえてきた

振り返るとそこには金髪でショートカットの少女が立っていた

「久しぶりねアリサちゃん！」

「シャルも元気みたいね…さて私はアリサ・バニングス、なのは達の幼なじみよ

あんたがはやての言ってたアルフィリオスって事で良いのよね？」

「ああ、そうだ…もしかしてそれだけを聞きにきたのか？」

「んなわけないでしょ！！」

買い出しよ、足りないものがあるし多いからあんたに手伝って欲しいんだけど」

ショートカットの少女、アリサにシャルはにこやかに挨拶をする
とアリサは少し嬉しそうに話す

アルフィリオスを見ながら自己紹介をするとアルフィリオス本人か
聞いてくる、特に考える事なくアルフィリオスは答えるとアリサに
質問を投げ掛ける

名前を聞きにきただけかと聞かれて、アリサは少し声を荒げて答える
とアルフィリオスに買い出しの手伝いをしてくれと言ってきた

「わかった、車を出すからナビゲーターを頼むぜ、バニングス」

「アリサで良いわ、あたしもアンタの事アルフィリオスって呼んでるし」

「了解だ、んじゃちゃちゃと終わらせるか」

片手を上げてからアルフィリオスはアリサに答えるとアリサは名前で構わないと返す

アルフィリオスはその言葉に頷くと車を用意するためにその場を後にした

――コテージ内――

トントンと景気の良い音を奏でながらはやてとすずかは夕食の準備を進めていた

「ねえはやてちゃん、少し聞いて良いかな？」

「ん？急にどないしたん、すずかちゃん」

切り揃えられた野菜を籠に移しながらすずかは包丁を動かしているはやてに質問をする

はやては包丁の扱いには慣れているため切る動作を止める事なく続けていた

「はやてちゃんはアルフィリオスさんの事をどうおもってるの？」

「っ！？い、いきなり何を言うとの！！別に私は先輩の事なんか…なんとも…／／／」

ザン！と大きな音を立ててはやては包丁を止めてすずかに視線を向ける

すずかはと言うと少し期待をしながらはやてを見ていた

「だってはやてちゃん、メールに先輩はどうしたとか相変わらず先輩はとか書いてるんだもん
もしかしたらって思っちゃうよ」

「いや、アレは先輩がアホな事をしてるだけで…私としては…その
／／／」

すずかは良くはやてから受け取るメールの内容から推理した事を、
はやてにいうと包丁を置いて人差し指同士を軽く付き合わせながら
言葉を濁す

「はやてちゃんの立場が重要なのはわかるけど自分の気持ちを押し
込めてると持たないよ？」

「すずかちゃん…心配してくれてありがとうな…せやけどこういう
の初めてやからわからないねん…
異性を好きになるいうんが…だからはつきりさせたいねん」

すずかの言葉にはやては俯きながら答えていくとグツと拳を握りし
めてから静かに言い放った

「はやてをどう思ってるかだっけ？」

「そうよ、はやてからアンタについては聞いてるけど、アルフィリオス自身がはやてをどう思ってるか気になってね」

海鳴市にあるスーパーにてアリサとアルフィリオスは食材を選びながら話していた

最初はアリサがはやてについて聞いてきたのがはじまりであった

「むう：頼りになる後輩、だな：」

「それだけ？私が言うのもなんだけどはやてやなのは結構可愛いわよ？」

男としてほっておくほうがどうかしてるわ！！」

アルフィリオスは飲み物を片手に確認するように呟くとアリサは呆れたような顔で言うのと2リットルのペットボトルを買い物籠に入れる

「確かにあいつらは美人だけど一般士官からすれば高値の花もいとこなんだよ、なんせエースだからな」

「それを聞くと管理局の男が情けなく見えるわね、アンタも同じなの？」

「いや、俺はそういう恋愛対象に見てないただけだ
気の合う同僚や後輩にしか見てねえよ」

アルフィリオスの言葉にアリサはやれやれといった感じに、ため息をつくると当のアルフィリオスはどうなのかと質問をする

会計を終えて買い物袋に詰めてながらアルフィリオスは答えると軽いものをアリサに渡してたくさん入った買い物袋を両手に持つ

「アンタ、もしかして恋人とかいるの？」

「……いないな：俺と付き合える女がいるとは思えねえよ：」

車までたどり着くとアリサは買い物袋をアルフィリオスに渡してから質問を投げ掛ける

買い物袋をトランクに入れるとアルフィリオスは少し黙ってから微笑をして言うと車に乗り込む

アリサは微笑したアルフィリオスの顔がどことなく暗いものだと思いながら車に乗り込む

車が走りだした時にイーグルレイダーに通信が入る、アルフィリオスは運転をしながら繋ぐ

「どうかしたのか？」

《アルさん、まだ街にいる？》

少し向かって欲しい場所があるんだけど良いかしら、フェイトちゃんかフォワードメンバーを車で迎えに行ったんだけど人数が多くて乗りきれないらしいの》

「シャマルか、わかった何処に向かえば良いんだ？」

《なのはちゃんの実家で翠屋って言うの、アリサちゃんに聞けばわかるわ》

通信を入れてきたのはシャルだった、彼女は申し訳なさそうにアルフィリオスに頼み込んでくる

アルフィリオスは車の速度を緩めると向かう場所を確認するために質問をする

シャルはアリサに聞けば場所はわかると言って通信を切ってしまう

「アリサ、翠屋って場所に案内してくれないか？
フォワードを拾ってかないといけないみたいでな」

「わかったわ……そのさっきの事、謝るわ……なんか聞いちゃいけないみたいだったから……」

「気にすんなよ、いろいろあるんだよ
お前に悪気がねえのもわかってる
だから気にすんな、いいな？」

アリサに事情を説明すると少し沈んだ口調で返すとアリサは謝罪の言葉を口にした

どうやらアルフィリオスが先ほど表情を暗くした事を気にしていたらしく勝気な口調ではなくなつたどかしい喋り方と言うと、アルフィリオスはため息を大きくつくと気にするなと言ってアリサにナビゲートを頼み、車を走らせた

アルフィリオスの操縦する車はなのはの両親が経営する翠屋の前に
停車をした

「へえ…結構綺麗な店だな、人気なのは頷けるってもんだな」

「見た目だけで無く味も良いのよ、ケーキが好きな人には最高のみ
せなのよ」

「甘いものが苦手な人間には結構キツイよ？それ…にしてもなんか
騒いでないか？」

「そうね、まあ入ってみましょうか
まずはそれからよ」

翠屋の扉に近づいた時に何やら騒ぎたてる声が聞こえアルフィリオ
スとアリサは互いに顔を見合わせた

アルフィリオスはいつでもデバイスを起動できるようにしてから翠
屋の扉に手をかけて開け放つ

「いらっしやいませ！喫茶翠屋にようこそ！！」

「…何名様で…いらっしやいますか？」

「何してんだ？セレス、レキ」

扉を開けた瞬間、元氣いっぱいセレスの声と少し声の小さいレキ声が入った

そして目の前にはウェイトレス姿のセレスと同じくウェイトレス姿のレキが立っていた

セレスはミニスカートで満開の笑顔を浮かべレキはロングスカートを履き顔をうつ向かせながら接客をしていた

あっけにと取られたアルフィリオスはとりあえず何をしているかと質問を投げ掛けた

「げえっ！？アルさん！」

「あ、アルだ！ねえ、アル見て見て！ウェイトレスさんだよ、似合ってる？」

「感想を言う前になんでこうなったか説明をしてくれないか？」

「えっと…実は…」

入ってきた客がアルフィリオスだと気づいてレキはあからさまな声を出す

アルフィリオスだと気づいたセレスは近くまで走りよると自分の服装をアピールする

アルフィリオスは手を前に出してセレスを静止させるとレキに事情を説明してほしいと頼む

レキは何から話せば良いか迷いながらも話しはじめる

――数分前――

街にサーチャーを設置しおえた時になのはからフェイトが迎えにくるまで、実家である喫茶翠屋で休憩しようと提案したのはの家族と談笑していた時だった

「桃子さんや美由希さんが着てるのは翠屋での仕事着なんだよね？」

「そうよ、これが翠屋の制服なの
どこか変な所があった？セレスちゃん」

「変なところは無いよ、お店の感じとあってるから、私も着てみたい
な、なんて思ってた」

出されたミルクティーを飲みながらセレスはなのはの母、桃子と姉の美由希を見て質問を投げ掛ける

桃子は自分の服装を見てからおかしい所があるのかと聞くと、セレスはミルクティーを両手で支えながら首を振ると自分も着てみたい
と言いだす

「セレス、さすがにそれはマズイよ
僕らは遊びに来た訳じゃないし迷惑がかかるよ」

「あたしは良いと思うよ、セレスちゃんなら似合う気がするし」

「確かなのは小さい時のお手伝い用があったからそれを貸してあ

げましょうか」

「まだ、あったんだ…」

セレスの頼みにレキはため息まじりに反論をすると美由希は面白そうに答える

それに便乗するように桃子がなのはが昔着ていたものがあると言うと苦笑をしながらのはが呟く

「じゃーん！どうかな？似合ってる？」

「うわぁ、セレスすんごい可愛いよ！」

「本当ね、似合ってるわよ」

美由希と桃子と共に奥に行ったセレスは少ししてから桃子達が着ているような白地のシャツに黒いエプロンで黒いミニスカートに着替えてきた

スバルとティアナは着替えてきたセレスを誉める

セレスは誉められると嬉しそうにしながらレキに近づく

「レキ、どうかな？ウェイトレスさんに見えるかな？」

「似合ってはいるけど仕事をしてないからウェイトレスとは言えないよ」

「なるほど…ならレキの紅茶のおかわりを持ってくるね！」

レキの反応につまらなさそうに答えると、セレスは空になっているカップを持つとおかわりを持ってくると言ってカウンターに向かう「マスター！紅茶のおかわりお願いします！！」

「かしこまりました、ずいぶんと元気の良いウェイトレスさんだな…」

カウンターにいたなのは父、士郎はセレスから注文を受け取ると、紅茶の準備をしながらセレスの元気の良さに微笑を浮かべる

カップに紅茶を注ぐとトレイに乗せてセレスに差し出す

「はい、気をつけてゆっくりといくんだよ」

「了解です！…これはかなり難しいかも…」

トレイを持つとカップの紅茶を見ながらフラフラと歩きながらレキの方に歩いていく

「セレス…ゆっくりで良いからね？絶対に急がなくて良いからね」

「わかってる、よっ…あっ…」

レキはふらつきながら近づいてくるセレスにゆっくりで良いと指示をする

セレスは冷や汗を流しながら進むために一歩踏み出した瞬間床につまづき紅茶の入ったカップが空中に投げ出される

「紅茶を被った僕は服が乾くまでの間だけこの格好をするはめになったんですよ」

「いやあ、レキごめんね？」

私もまさかそこでつまづくとは思わなくてさ」

ウェイトレス姿のレキは腰に手を当てながら言う。とセレスが乾いた笑みを浮かべながら謝る

今までの経緯を聞いていたアルフィリオスは何かを考えるようにうつむいているとスツと顔をあげる

「レキ、一つ聞いていいか？」

紅茶を被ったのならお前はいい、ぶおばあ!？」

「何を言おうとしてんだ!？あんたは!!！」

真剣な表情のアルフィリオスにその場にいる全員が、息を飲むが、いざ放たれた言葉にレキは渾身の右ストレートをアルフィリオスの頬に打ち込む

端から見たら美少女ウェイトレスに殴り飛ばされる成人男性という間抜けな光景だった

「いや、気になるじゃないか!？」

…うん…ごめん…」

殴り飛ばされたアルフィリオスは起き上がりながら言い訳をすると、
今にも爆発しそうなくらいの怒りのオーラを放つレキに謝るしかなかった

EP10..レッツゴー!海鳴市!! (捜索編) (後書き)

どうもえのきです

いかがでしたか? ウェイトレスバージョンのレキとセレスは、絵が書ければ挿絵を出したかったんですが絵が書けないのがくやしいです、それでは次回予告にうつります

セレス「見れないものを見たい、それが男のロマンだってさ、よくわからないけどそれはしちゃんいけない事だと思うよ?

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS 〓 夜天に舞い踊る荒鷲 EP11..それは男のロマンなんだ!! にテイクオフ!

ロマンってなんなのかな?」

それでは次回の更新をお待ち下さい

EP11..それは男のロマンなんだ!! (前書き)

今回は少しイチャつきをメインにしてみました

まあ砂を吐くほどの技量では無いのでいつも通りに見てください

EP11…それは男のロマンなんだ!!

紅茶にまみれたレキの服が乾いたところでアルフィリオスとアリサ、セレス、レキの四人はコテージにむけて車を走らせた

コテージにつくとそこではバーベキューの準備がちゃくちゃくと行われていた、準備を見ていたらアルフィリオスは見知った後ろ姿を見つけると足を運んだ

「やっぱり、エイミーさんとアルフ！こっちに來てたのか」

「アル、お久しぶり

クロノ君から六課配属は聞いてたけど実際に見ると驚くよ」

「サボってないよな？アルはいつもサボりばかりだからな」

アルフィリオスに声をかけられて茶色の髪的女性と犬耳と尻尾のついた少女は振り返る

エイミー・ハラオウン、クロノ提督の妻である犬耳の少女はフェイトの使い魔のアルフ、クロノと何かと交流のあるアルフィリオスは二人とも知り合いだったのである

「エイミーとアルフはアルフィリオスと知り合いだったんだ」

「うん、良くクロノ君と飲み出掛けたりして送ってきて貰ってるんだよね」

「クロノの奴も仕事のストレスが溜まってるからアルフィリオスに

愚痴を言ってるんだぞ」

「そうなの？アルフィリオス、ごめんね…お兄ちゃんが迷惑かけて」
準備をしていたフェイトはアルフィリオスと自分の家族が知り合いなのに少し驚いていた

エイミィとアルフはアルフィリオスと知り合った経緯を話すとフェイトは申し訳なさそうに頭を下げた

「気にすんなよ、クロスケが大変なのはわかるし、家族に心配をかけたくないだけだからフェイトが気にする事じゃねえよ」

「ありがとうね、アルフィリオス…」

「お礼より俺の事はアルと呼びな！
お前だけだぜ？六課で呼んでないのは」

「うん、わかったアル」

頭を下げられてアルフィリオスは手を軽く振るとにこやかに笑いながら言う、フェイトもつられて笑顔を浮かべる

アルフィリオスはビシッと指をフェイトに向けると自分の事は愛称で呼んで欲しいと言いさらに六課では皆、愛称で呼んでいると伝え、フェイトは苦笑を浮かべながらアルフィリオスを愛称で呼ぶ

「ほおら！その二人イチャコラしてないでちゃんと手伝いなさいよ！！」

「アリサっ！？　べ、別にイチャついてなんてないよ？　／＼／＼」

アルフィリオスとフェイトが笑顔を浮かべていると遠くからアリサが二人に呼びかける

フェイトは突然の事にあたふたしながら弁明をする

「弁明ならあたしよりあっちにしたほうが良いわよ？」

アリサは意地悪い笑みを浮かべて自分の後ろを指で指すとそこでは黒いオーラを背負いながらはやてが焼きそばを作っていた

「嫌やわぁ：アリサちゃん、それやとまるで私が怒ってるみたいやん、私は別になぁんも怒ってへんよ？」

遅れたばかりか仕事もせえへん先輩にちいっとも怒ってへんよ…」

「：すみません、直ぐに作業に移ります！！」

こちらには背を向けているが明らかに怒っているという雰囲気を出しているはやて、焼きそばをつくる小手は心なしか苛立ちを表すかのように振るわれていた

アルフィリオスは敬礼をするように夕食の手伝いをはじめ、といっても残ってるのははやての焼きそばだけでありアルフィリオスははやての憤怒のオーラに当てられながら手伝いをしていった

「なぁ：はやて？」

「なんや？　先輩…」

「…ヘソを曲げてんのはどうしてだ？」

焼きそばが焼ける音がするなかでアルフィリオスは不機嫌そうなはやてに声をかける

「別に先輩には関係ないやろ？」

私は六課メンバーやないんやからな」

「何を言って…なるほど、はやて…拗ねてるな？自分だけ俺の呼び方が違う事に」

「そ、そんな訳、ないやん…そないな子供じみた理由…絶対、ない」

アルフィリオスの問いかけにははやてはわざとらしい言い方で答えるはやての言葉に何かを思いついたアルフィリオスは質問を変えて問いかけると、はやては明らかに凶星という感じに動揺をするとうつむいてしまう

それでも焼きそばが焦げないようにするのは料理をする人間のプライドだからだろうか小手の動きは止まらなかった

「まったく、わかりやすすぎだ…」

はやて、俺の愛称を呼ぶやつは知り合いなら誰でもいるだけだな、先輩って呼ぶのはお前だけだよ…試しに愛称で呼んでみるか？」

「う、うん…ア、ア、…先輩…」

「ぷっ…くくく…結局先輩じゃないか…」

拗ねてるはやてにアルフィリオスは愛称で呼んで見ろと言うと、はやては言葉を詰まらせながら結局アルフィリオスの愛称は呼べずに先輩と呼んでしまう

アルフィリオスは口元を隠しながら笑いを堪える

「なっ！？そんなに笑う事ないやん！！／／／
先輩って呼び方が染みついとるんや！

うあゝ、そのニヤケ面が腹立たしいわ！！／／／

「すまん、すまん：だけどこうも言えないと：笑いが、止まらなくてな：くくく、さあて逃げないとこわあい後輩がくるからな！」

「ちょっと待てや！アホ先輩！！」

はやては手早く焼きそばを皿に盛り付けると、アルフィリオスが笑っているのを見て顔を赤くしながら怒鳴りつけて噛みつくように反論をする

それでもアルフィリオスがニヤケ顔を止めないので止めさせようと小手を振り上げる

アルフィリオスは流石にマズイと思ったのか笑いを堪えながら逃げ出す

それを遠くから見守っていたシグナムとシャマルは一息つく

「全く、一時はどうなるかと思ったな：アルの奴、主はやてを泣かせたらレヴァンティンの錆びにしようとおもったんだがな」

「まあそうならないようにするのがアルさんよね…はやてちゃんがあんなに笑うのは久しぶりね…」

それにしてもアルさんが好きなら早く告白すれば良いのに…」

「あまり主はやての恋愛に口を出したりするなあれでも精一杯なんだろうさ」

「意外ね、シグナムが恋愛について語るなんて」

遠くでじゃれ合うアルフィリオスとはやてを見ながらシグナムは安堵の息を漏らすとシャルがにこやかに言う

しかしにこやかな笑みを曇らせるようにため息をつきながら言う

ちなみにアルフィリオスは頭に当たるかわからないギリギリ所ではやての小手を真剣白羽取りで抑えていた

「悪いかな？少しくらいはわかるさ…しかし…」

「何か気になる事でもあるの？」

「アルはどうも人の好意をはぐらかせているように見えるな」

「うーん…気のせいだと思うけど…ねえ」

シグナムは少し疑うような目で言うとシャルは気のせいだと言い、アルフィリオスの方に顔を向けるとそこにはボロ雑巾になったアルフィリオスが転がっていてシャルは苦笑を浮かべた

SIDE…アルフィリオス

夕食を食べ始めたが…うん、地獄絵図ってのはこの事だな…

「スバル！てめえ、あたしの肉だぞ！！」

「これはあたしが先に取りました！早いもの勝ちです！！」

「なら私も貰うね！いったき！！」

「なっ！私の皿から取るとはええ度胸やな、セレス！！」

そこで行われていたのは肉争奪戦が繰り広げられていた…

網の上の肉をヴィータが取ろうとするとスバルがそれをかっさらう
それとは別の場所ではやての皿からセレスが肉を奪い取っていた…
お前ら野菜を食えよ

「アルさん…無駄ですよ、聞く耳を持ってないんですから」

「まあ自分の分を取られないようにするんだな…今の主たちは獣以上だ…」

俺の呟きに隣にいたティアナとシグナムは呆れたように言ってくる
ちなみに残りのメンツは平和そうにバーベキューを食べていた
にしてもすげえな…スバルやヴィータもだがセレスがそれについて
いってるんだからな

「アル！ボサツとしてないで次のお肉を焼いてよ！！」

「お前な…一応俺の融合騎だろうが…わかったよ…」

セレスの余りの剣幕に俺は従うしかなかった、だってあいつ言うことか聞かないと噛みつくって目をしてたんだよ…従うしかないだろう…

まあそんなこんなで殺伐とした夕食は終わり、俺たちはサーチャーの反応が出る前に入浴する事になった

「これだけの大人数やと行くところは一つしかないな」

「あそこだね」

「おいこら、地元民ちゃんと説明をしてほしいんだがな」

「にやははは、大丈夫だよ別にへんな所じゃないから、それじゃあ入浴道具をもって銭湯にいこうか」

センター？また聞いた事がねえ名前だな…

それからはやて達に案内をされて俺達は一つの施設にたどり着いた名前はスーパー銭湯…ハイパーもあんのか？

「いらっしやいませ、何名さまでですか？」

「えっと大人13人に子供6人です」

「子供は僕とセレス、キャロとエリオ、アルフさんにリインさんですよね」

「あれ？ヴィータ副隊長は？」

番台と呼ばれる受付にいた人が挨拶をするとはやてが人数を述べていく

子供の数をレキが確認した時にスバルがヴィータを見ながら質問を投げ掛ける

「あたしは大人だ…」

「その体型でか？いたい、です！ごめんなさい！！」

子供のくくりに入れられてヴィータは不機嫌そうに答える、それに便乗して言ったら思いっきり足を踏まれた：

「大きいお風呂だって楽しみだね、エリオ君」

「う、うん…スバルさん達と楽しんで来てよ」

「えっ？一緒に入らないの？」

「ええっ！？だって僕は男子だし…／／／」

足の痛さに涙を流しているとキャラが嬉しそうにエリオと話していた
何やらキャラはエリオと入りたがってるようだ、積極的なのは良い
が大胆だな、キャラよ

「大丈夫だよ、10歳以下の児童ならどっちでも入れるって書いてあるから」

「そうだよ、久しぶりに入ろうがエリオ」

おおっとキャロがここでセントーの規則を持ち出した！

さらにフェイトも加わったぞ！！

エリオ、どうする！？

「助けないんですか？エリオ」

「なんか憎らしいから嫌だ」

「それにしても10歳以下ですか…アルさん？よもや変身魔法を使
って入ったりしませんよね？」

「レキ：お前にはがっかりしたぞ！！！」

実況中継をしていた俺にレキが話しかけてきたが俺はケラケラと笑
いながら見捨てる

規則を見ていたレキはジト目で俺を睨んできた、その時のレキの発
言に俺は怒りを露にしながら言う、今までエリオにかかりつきり
だった全員がこちらに視線を投げ掛ける

「変身魔法を使って覗きをするなんて俺がすると思ってるのか？そ
うならがっかりだぞ！」

「すみません、そうですよね…アルさんも大人」「それじゃあ…ロマ
ンが無いだろ？」…あ？」

俺の怒りに満ちた意見にレキも間違っていたと笑みをうかべるが続

けられた一言で言葉が変わるが、俺は構わずに続けた

「良いか！？覗きとはバレるかバレないかの瀬戸際が重要なんだ！！
困難な道を歩み、そしてたどり着いた桃源郷：その時に人は達成感
と優越感に浸れる：

合法で見た以上の楽園、それは男のロマンなんだ！！」
エデン

「へえ：なら後ろの方々にも説明してあげたらどうです？」

まるで演説をするかの様に語っていく俺に対してレキは凄くどうでも良さそうな感じに見ていた

そして呆れながら後ろを指でさした時に俺は後ろから放たれる殺気に気付いた

「いやあ、これはあくまで一般的な理想であって私個人はそこまで
：すみませんでした！！」

俺は出来るだけ後ろを見ない様にしながら語るが殺気が増した所で
後ろを振り向くと、そこにはまるで女神のような笑みを浮かべたは
やてが、まるで首を斬るようなサインを出した
その後？言うまでもない、ボロ雑巾だよ：

ボロ雑巾となったアルフィリオスはなんとか男湯に入るとエリオと
レキが待っていた

「エリオに感謝してくださいよ？せつかくなら三人で入りたいって
言ってたんですから」

「エリオ、サンキューな…ムツツリーニって呼ぶのは止めるよ」

「そんな風に思ったんですか！？」

腰にタオルをまいたレキが呆れたようにいうとアルフィリオスは服
を脱ぎながらエリオに笑いかける

エリオはアルフィリオスの軽口に驚いていると番台のおばさんの声
が耳に入った

「はい、毎度あり」

「ありがとうございます、あっ！レキ君、エリオ君、アルさん」

「「はいっ！？」」「」

聞きなれた声が男湯の脱衣所に響くと三人は一斉に振り返るとそこ
には、バスタオルをまいたキャラが笑顔で呼びかけていた

「キャラ、キャラ、キャラ！？こっちは男性用だよ！！」

「うん、でも10歳以下ならどっちでも入って良いんだよ」

「確かに書いてあったけどまさか本当に来るとは…」

「キャラ…その積極的な感じなんて恐ろしい娘…」

慌てながらエリオが説明をするとキャロはにこやかに笑いながら答える

規則は破っていないから確かに大丈夫ではあるが納得のいかないレキとその積極性にアルフィリオスは驚いていた

「それにちゃんとバスタオルは巻いてるよ？」

「キャロ：わかったからバスタオルに手をかけるのは止めるんだ」
にこやかに笑いながらキャロはバスタオルを強調するように手をかけるとレキはすかさずそれを止めさせる

それから急遽キャロを交えた男達は浴場に足に向けた

「エリオ：痒いところはねえか？」

「今の所は無いですよ」

「よし、なら流すぞ？」

浴場についた四人は二組に別れて身体を洗い始めるエリオはアルフィリオスがキャロはレキという組み合わせだった

アルフィリオスはエリオの頭を洗いながら定番の事を聞くとエリオは笑みを浮かべながら答える

「そういえばアルさんに髪を洗って貰ったのははじめてかもしれませんがね…」

「そーういやいつもいなかったな…どうだ、良いもんか？」

「はい！…お父さんって、こんな感じなんでしょうか？」

「俺もそれはわからんが…俺はまだそこまで老けて、ない！」

「あいだだだだっ！！痛いですよ…」

髪を洗い流しているとエリオは思い出したように話しだす
アルフィリオスも思い返してからエリオに聞くと元気の良い声でエリオが返事をする

そして呟くようにアルフィリオスに質問を投げ掛ける

エリオの言い方から何かあると感じたアルフィリオスは特に答えずに話題をすり替えるようにエリオの頭をわしづかみにする

いきなりわしづかみされた事でエリオは慌てて手を退けると頭を軽く撫でる

「エリオ君…なんか楽しそうだね」

「アルさんがバカをやってるからだよ…まったく風呂くらい静かに入れば良いのに」

「そうだね…ねえレキ君…私、一つレキ君に言いたい事があるんだ」

「どうしたの？改まって」

エリオが恥ずかしいとのことと壁を挟んだ感じに別れたレキとキャロは壁の向こうから聞こえるエリオの声に苦笑を浮かべていた

頭を洗っているレキにキャロは少し恥ずかしそうにうつむきながら話しかける

「最初の出勤の時：励ましてくれてありがとう、あの後からずっとお礼を言いたかったんだけど、なんて言えばいいかわからなくて遅くなっちゃったんだよね」

「キャロ：それは僕も同じだよ、フリードとキャロの力がなかったら多分ダメだった、だからお礼よりこれから先を頑張ろう！」

「うん！よろしくねレキ君」

初出勤の時の事をキャロは思い返すようにいうと、レキは苦笑を浮かべながら自分も礼を言わないといけないと言い

これから先も頑張ろうと言葉をかけるとキャロは首だけを後ろに向けて笑顔を浮かべて答える

S I D E…アルフィリオス

身体を洗い終わった俺達は湯船に使った、途中でキャロがエリオを

やはり女湯に連れていくと言い出し

エリオはそのまま女湯に連行された、レキはゆったりとつかるといつて俺から離れていき俺は一人となった

「…露天、風呂？外に風呂があんのか…いつてみるかな？」

風呂にもたれかかっていると露天風呂という案内表札が出ており、俺は何を考えたかいつてみようと思った

「うはー…これが露天風呂か…やっぱりさみいな…早く入ろつと」
露天風呂に出てみると冷たい風が肌に当たる、身震いをしながら湯につかると俺はもう少し奥の方に行くことにしたせっかくの外風呂なので景色を見るためだ

「にしても湯煙が酷いな…前が見えない「きやうっ!？」ってわりい、ぶつかったかわざとじゃねえんだ許してくれないか？」

「いや、こっちも同じやからお互いさまや…堪忍な…」

「そう言つて貰えるとたす…かる…はやて？」

「せ、先輩？」

湯の中を移動していた時に柔らかいものにぶつかりさらに短い悲鳴が聞こえて、人がいたことに気付いた俺は慌てて謝るとぶつかった本人も謝つてきて気がついた、今のは女の声じゃないかもしかかも

なり見知ったやつの声だ

そしてちょうど良く風が吹いて湯煙を散らすとそこには驚愕の表情を浮かべるはやてがいた

しかしながら人間いや男とは思議なもので相手が女とわかると、例え見知った奴であろうとこれから撲殺されようと目線は下にいつてしまう訳でして

「み、見るなあーっ!!!／／／」

「ぶげふうっ!？」

当然こうなるわな、はやての左ストレートが俺の頬にめり込むだが怒りの乙女はまだ終わらなかった

「いつかやるとは思ってたけどほんまにやるとは思わなかったで!／

／／
このエロ先輩!!／／／」

「ちょっと待、げほおっ!？」

話を聞き、ごふぁ!!」

まあそのままはやての気がすむまで俺は殴られ続けていた

――数分間後――

「…なんか言うことはあるか?…」

「やり過ぎました…ごめんなさい…」

俺とはやては背中合わせになるように湯につかっていた

まあ容疑は晴れたのだが、代償は大きかった…とりあえず顔が痛い…

「だって先輩が胸の方を見るからいけないんや！／＼／＼…そしたらそないになんですんだんや」

「しっかりタオルまいてたから良いじゃねえか…ていうか混浴なのは知らなかったのかよ…」

「久しぶりやから変わってたのに気づかなかった…」

はやては胸を隠すように手を動かしてから恨めしそうに睨む
俺はやれやれと言った感じに聞くと少しだけ静かになって呟くように説明してくれた

「……………」

気まずい…俺達は互いに喋る事も出来ずにただ背中合わせで湯につかる、しかし黙っていると他の所が敏感になってくるもので、背中合わせになってるはやての体温や息遣いがだんだんと鮮明になってきた

「…なあ、先輩？少し話をしてもらええかな？」

「肩がこる話しか？なら遠慮し「あのな、私」…許可をとる必要あったのか？」

黙っていたのをはやてが破った、少しだけ恥ずかしそうにしながら聞いてきたので俺はいつもの調子で返すとスルーされた

「先輩が六課に来てくれてホンマに嬉しいねん、不安があった私の背中を押してくれた人に見せられるからや、これが私の夢ですって」

「はやて…」

「先輩だけやない、クロノ君やカリム…いろんな人が支えてくれただから私はこの機動六課を絶対に続ける…命に変えてもや…」

「…こんのバカすけ!!」

はやてはポツリポツリと呟いていく中で俺は少し眉を潜めるとはやての後頭部に頭突きをする

「いたっ!?! いきなり何する気や!!」

「命とか、簡単にかけんなよ…」

お前がそれだけ熱意があんのはわかるけどな、それだけはすんな…」

「せやかて、先輩も知つとるやろ？」

私には罪がある…夜天の魔導書が闇の書として犯してきた罪…それは最後の夜天の主である私が償ないとあかん事や…だから」

「罪ってのはどんな事をしても無くならねえよ…どれだけ償ってもどれだけ後悔しても…」

本当に世話になった奴等に恩を返したいって思うなら生き続けてやり遂げろよ…」

頭突きを食らったはやては頭を抑えながらこちらを睨み付けた
俺ははやてに構うことなく言葉を続ける、はやてはそれを反論する
ように言葉を放つ

俺は湯船から手を出して固く握りしめて呟くようにはやてに言う

それは俺自身が過去に犯してきた事に対しての経験に基づく答えだ
った…それよりもはやてに対しての説教が先だと思い言葉を続けた

「はやて…一つ約束してくれないか？」

自分でどうしようもねえ時に必ず俺を呼べ、そしたら世界の果てだ
ろうが次元の果てだろうが飛んできてやるよ…」

「なんやそれ…どこのスーパーマンや？」

…覚えておくで、先輩の言葉…でも一度決めた事や…そう簡単に変
える事は無理や」

「だろうな…まあ少しくらい自分を大切にしろ、お前ら隊長陣を見
てると過労死つてのが頭に浮かぶからな」

俺の出てきた約束にはやては笑いながら返すとゆっくりと頷くが
それでも首を横に振ってから言葉を紡ぐ

俺は苦笑をすると今までの雰囲気崩すようにおどけた態度をとる
と、はやてに背中合わせのまま耳を引っ張られた

「それこそ余計なお世話や！！…もうせっかくの雰囲気が台無しや
…かつこよかったのに…」

「あたた…なんか言ったか？」

「なんもない！こんのバカ先輩！！」

「引っ張ろうとすんなよ、んじゃ先に上がるぞ？」

はやては耳から手を離すとブツブツと呟きだす

俺が質問を投げ掛けると噛みつかんばかりに言われてしまう、これ以上はのぼせるかもしれないので俺は先に風呂を出た

はやてが逃げたなんて言ってたけど気にしないでおう

――――

「まったく先輩は…」

アルフィリオスが風呂を出たあとはやては呟くように言うが直ぐに笑みを浮かべた

「どこでも、か…先輩やったらホンマにやりそうやな…：先輩…」

先ほどのアルフィリオスの約束を思い出してはやては耳を引っ張った手を軽く包むと呟いた、その顔は湯気のせいかほんのり赤くなっていた

EP11..それは男のロマンなんだ!! (後書き)

どうも、えのきです！

今回のはいかがでしたか？

楽しんで貰えたなら嬉しいかと思います

ちなみに少しネタバレになりますが、レキのお相手はキャラです
だから今回、エリオの台詞をかつぱりました
これからレキの活躍が増えたら良いと思います

では次回からはいよいよ戦闘に入ります、楽しみして下さい

レキ「いよいよロストログアとの交戦、しかし意外にも苦戦をする
僕たちに救いの手が

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP12..重なる力 にテイクオフ! : 敵がまともなら良かったのにな…」

EP12..重なる力(前書き)

久しぶりに時間がかかりました：

今回は前に指摘を貰った名前を書き方を変えてみました、良かったら意見を下さい

今回の戦闘の際にノリの良い曲をかけると更に良くなるんじゃないかなと作者は考えてます

最後にアンケートみたいなのがあるので良かったら答えて下さい

EP12..重なる力

全員が風呂から出て一息をついていた時、キャロのケリュケイオンとシャマルのクラールヴィントが鳴り出した

「どうやら、目標が見つかったみたいね」

「ほな皆、じっくり休んだやろ？
さっそくお仕事や、準備はええな？」

「」「」「了解！！」「」

「ちよい待て、せめて風呂上がりのコーヒ―牛乳を飲みたい！！」

シャマルの報告を聞いてからはやてはスバル達の方を向いて真剣な表情になり気持ちを切り替える

スバル達も同じように先ほどのなごやかな雰囲気は無く全員が真面目な表情をとる中でまるでお約束の如くボケをかます奴がいたはやて達は声がした方を向くと湯上がりだからか髪を上で留めたアルが腰に手を当てて、今まさにコーヒ―牛乳を飲もうとしていた

「先輩、そのコーヒ―牛乳を真っ赤なトマトジュースに変えてもええんやで？」

「：はやてさん、目がマジだよ？お兄さんを酷使するなよ：さっきの事を根に持ってたのか？」

「んなっ！？何を言うてるんや！！／／／／

まったく…緊張感を持って欲しい言うとりんや!!」

こめかみを抑えながらはやては言うのと、アルは少し引きぎみ言うため息について先ほどの露天風呂での事を口に出す

アルの話しにはやて以外のメンバーは不思議そうに首を傾げると顔を赤くしながらはやてが遮ると一回、咳払いをしてから責任感が足りないと言う

「まあ、気を張るなよ…ポカやらかすぞ？
んじゃま…行きますか」

アルははやてが説教するなかでコーヒー牛乳を一気に飲み干し、留めておいた髪を解いていつも通りのスタイルに戻すと軽い口調のままいい放つ

――――

アルを加えたフォワードメンバーは反応があった海鳴市の河川敷に向かって走っていた

《今回だけアルさんはロングアーチからスターズにコールサインを変更するです》

「了解、それじゃあ指揮はティアナに任せっからな？」

「えっ!?! でもアルさんの方が階級も指揮能力も高いです、あたしに任すより断然に良いです」

「だあほっ！お前はセンターだろうが指揮をフロントに任せんな
戦況を確認し、冷静に的確な指示を出す、それがお前のポジション
だ…やってみろお前なら出来る」

移動している最中にリインからアルに通信が入る

アルは足を止めて変更内容を確認すると後ろを走っていたティアナ
に指をさして指令を出す

突然の事に驚きを隠せずにティアナはアルに出来ないと返答すれば、
アルはティアナの頭を小突いてから少し呆れたように言う

「でも…自信が無いです、あたしじゃアルさんや隊長達のような指揮
は出来ません…」

「自信ねえのはわかるが、一つ間違いがあるな…ティアナ」

「間違い？」

アルに励ましを貰ってもティアナは自信を持てずに諦めたように言
うと、アルはティアナの頭に手を乗せると少し真面目な表情で言葉
を続ける

間違いがあると言われてティアナはアルの顔を見るように見上げる

「誰が俺達みたいな指揮をしろって言った？」

指揮のやり方は人それぞれのだ、今出来る自分のベストを尽くせ
それに俺やスバル達はティアナを信頼してる、だから頼んでいるん
だよ」

「アルさん…」

「ならこの方が良いか？」

お前が必要だ、この任務…いや、これから先の戦いでもティアナに指揮を頼みたい
だから今やってくれ」

――――

S I D E .. ティアナ

その言葉を言われたのは初めてだった…

機動六課に来てからあたしの頭にあった不安…それは自分に何の取り柄が無く、いつか皆から必要とされなくなるんじゃないかという不安だった

だけど今、目の前にいる人は私が必要だとはっきりと言った

魔力ランクはあたしより上でなおかつ実戦経験が豊富…確かな実力があるのにどうしてだろう？

そしてこの人の言葉はどうしてこんなに響くんだろうか？

考えても答えは出ないそれに求めていた答えを言っただけであたしは動揺をしていた

だけど早く答えなきゃ、何を？ そんなのは決まっている

「あたし、やります！サポートをお願いしても良いですか？」

「ああ、お安い御用だ…行こうぜ、ティアナ」

フォワードメンバーの指揮を承る事だ

でもまだ不慣れなあたしはアルさんにサポートを頼むと、アルさんは心良く引き受けてくれた

「ロングアーチ、フォワードの指揮はティアナが一任する指示を頼むな」

《こちらロングアーチ、了解や！

ティアナ、無理せんようにな？》

「はい！頑張ります…それじゃあ配置を確認するわね？

前衛はアルさん、スバル、エリオで後衛はあたしにレキとキャロ前衛組にはロストログアの移動を制限して貰うわね？」

「「おう！」」

「「はい！」」

ティアナが指揮をやると決断しアルはロングアーチに通信を送るとはやてがそれに答える

はやてからの激励を聞くとティアナは意気込むと作戦の配置を確認するとスバルとアル、レキとエリオ、キャロがそれぞれに答える

「目標は反撃無しの逃走型って情報がある
なら足の早いスバルが先行して、アルさんとエリオが目標のサイド
に回る
動きが止まった所でレキかあたしがキャロにシーリングをかけても
らい狙撃する
皆質問は？」

「下手に近づけばかえって動きまわるからな、上出来だ…さて行く
か!!」

「「「「了解っ!!」」」」

ティアナが作戦を確認してから全員に聞くと皆も賛成したらしく頷く
アルが作戦の出来を評価すると全員に呼びかけてから河川敷のほう
に再び移動を開始した
河川敷が見えた時にアルとスバル、エリオの三人は待機状態のデバ
イスに手をかける
そして土手の上から一気に飛び上がると三人の身体を魔力光が包む
「イーグルレイダー！」

「マツハキャリバー！」

「ストラーダ！」

「「「セットアップ!!」」」

空中でデバイスを展開して三人は河川敷に降り立ちいざロストロギ
アに向かって走りだした

ボヨヨーン、ボヨヨーン

ズサア！！

聞こえてきた擬音に一人ずつこけた、それは今先ほど良いことを言っていたアルだった

彼がこけるのは無理もなかった、着地した目の前に大量の青い物体状のロストロギアが跳び跳ねまくっていたのだから

「珍しくでた俺のやる気返せや！ゴォラァ！！」

「なんですか？これ…」

「ねえ、これが今回のロストロギアなの？」

目の前を跳び跳ねるロストロギアを目にして三人は少し唾然としていた

それにそんなアル達に構わずロストロギアは一目散に逃げ出した

《皆さん、ロストロギアは身の危険を感じると分裂していくみたいです！》

「つまりこんなから探せと？ふんじばってまとめて依頼人ここに送れば良いんじゃないか？」

《さすがに数が多すぎですから地道に探して欲しいのです》

「せめて特徴くらい無いのかよ？赤いとか角ついているとか動きが他より三倍とかさ」

やる気の削がれたアルのところにリインが通信を入れてくる
それを聞いたアルは探したく無いと言う目でリインを見ながら提案
をすると苦笑をして地道に探して欲しいと返す

提案を却下されてアルは地面にしゃがみながらやる気無さげに呟く
が、そんな彼の頬を一筋の魔力弾が通過する振り返って見ればそこ
にはファフニールを展開したレキが明らかに不機嫌そうな目で狙い
をつけていた

「早くやれ」ボディランゲージでメッセージを送るとアルはしかた
なさそうに立ち上がりロストログアの群れに突っ込む

「うおりゃあああっ!!」

ボヨン!

「手応え無し!? 打撃無効がついてるの?」

「でえりゃあああっ!!」

ボヨヨン!

「斬撃も無効化されてます!」

「往生せいやあ!!」

ボンボン、ボン!!

「きもっ! 派手に動くな、軟体生物!!」

スバル達はロストロギアに攻撃するが打撃、斬撃、更にはステークでの一点突破も効果が出ずに更に逃走範囲を広げるだけであった

《アルさん！こちらも効果はないです

銃撃やフリードの火炎、レキのシフトAもダメです！》

「見た目がアレでもロストロギアって訳か…」

《可愛いのに侮れません…》

《そうだね…ちょっとマズイかも》

「その天然コンビ…のほほんとすんな」

少し離れた場所でロストロギアに攻撃をしかけていたティアナから報告が入りアルは苦虫を噛み潰した様に呟く

難しい顔をしながらキャロが言うのとレキがそれに同意しているがその雰囲気は何処か緩やかなものだった

「でもなんとかまとめないと、確認した奴と混じって本体の見分けが更につかなくなります！」

《アルさん…スキルリミッターの解除許可を申請します、僕の力なら奴等を集めれると思います》

「…ダメだ、無傷で捕らえられる保証が無い…それはお前自身がわかってんじゃないか？」

動きまくるロストロギアにエリオは焦りながら言う

するとレキがアルにスキルの使用許可を申請してきた、レキの言葉にスバル達は不思議そうにする中でアルはそれを却下した

先ほどのまでのだらけた表情ではなく真剣な表情にスバル達は息を飲んだ

《アルさん、レキのリミッターってどういうことなんですか？》

「レキにはレアスキルとして魔力変換資質がある、その名は重力変換資質：簡単に言えば引力と斥力が使えるんだ」

「でも引力ならロストログアを集めるのは楽ですよ？」

「そこまで緻密な制御が出来るとは思えない、下手すれば際限無く引き寄せてしまうブラックホールを作りかねないんだぞ？」

そんなの市街地、ましてやロストログアの確保には使えない…わかるな？」

リミッターについてティアナが問いかけるとアルはロストログアの逃走に先回りをしながら説明をしていく

アルの説明を聞いて同じように進路を塞いでいたスバルが言うところアルはきっぱりと出来ないと言い、仮に出来たとしてもロストログアの確保には向かないと断言する

《出過ぎた事を言いました…すみません》

「わかれば良い、だけどやっぱなんとか手を打たないとまずいのは確かだな…」

《アル！聞こえる？何とか出来る方法が多分あるかもしれない！！》

アルの言い分にレキは声を落として謝るとアルは少し投げやりに答えると苦い顔をして呟く

いきなり通信画面が開きセレスの声がアルの耳に入った

――――

数分前、コテージ

作戦指揮のために戻ってきたはやてとリインそれとシャルとセレスはアル達が相手をしているロストログアの情報を集めていた

「物理ダメージや魔力ダメージも無効化するなんてずいぶんとやっかいやな…」

「なんとか本体を識別出来ればいいんですが、ダミーの数が多すぎるです…」

「動かないように固めるのはどうかしら？」

「いやリインみたいな凍結系ならなんとかなるけど普通のバインドやとあかんやろ」

アル達の戦闘状況からロストログアの状態をまとめるはやてとリイン状況を聞いていたシャルが提案をするがはやては難しいと答えて唸る

「あの！アルに通信を繋いでもらえますか？もしかしたら無傷で集める事が出来るかもしれません」

「ホンマに！？それはええけど
けどどうやってや？」

「それについてはアルに伝える時に話します
アル！聞こえる？何とか出来る方法が多分あるかも知れない！」

はやて達の話を聞いていたセレスは難しい顔をしていたが直ぐ様顔を上げるとはやてにアルに通信を繋いで欲しいと頼む

いきなりの事にははやては驚きつつもセレスに問いかけるとアルに話すついでに言う彼女が答えて教えてくれなかった

《セレス！？何をする気なんだ？》

「私の使用できる魔法に竜巻を巻き起こすものがあるの、それを使えば多分」

《無傷での捕獲が出来る…って訳だな？》

「うん…だけどそのためにはユニゾンしないといけないの」

いきなりセレスから通信が入った事にアルは驚いていたが直ぐ様セレスの思いついた方法問いかける

セレスは自分の魔法を使えば無傷で集める事が出来ると言うと最後

にユニゾンをしなければ使えないと補足する

アルは以前セレスにユニゾンはしないと言った事がある、それは戦う理由が無いものを戦わせたくないという考えもあったが、他にも彼女を思ってたの事もあった

一度でもユニゾンをすれば彼女はアルの保有戦力として認識されてしまう、そうなればもし姉が見つかったても管理局から簡単に抜け出す事が出来ない

だからセレスは悩んでいた、アルもまた答えに迷っていた、しかしセレスの決意は堅かった

「アル、私なら大丈夫…」

それに力があるのに何もしないなんて我慢出来ないよ、皆の力になりたい…そのためなら戦う覚悟なんて簡単にできる!」

《はっ…お前って奴は…》

反対なんてしねえよ、言ったら？戦う理由を見つけたら俺は受け入れるってな

来いよ、緊張感に欠ける面をした奴等が相手だけどやるぞ、俺とお前のユニゾンをな!!」

「うん!行くよ、アル!!」

セレスは迷い無くアルに自分の意思を伝えると帰ってきたのはアルの微笑する声だった

アルはセレスとユニゾンをすると言うときセレスは笑顔で答えて騎士甲冑を身にまとう

セレスの騎士甲冑ははやての騎士甲冑の色違いで、彼女の髪と同じ緑色の騎士甲冑に白いコートを纏うとセレスの周りに緩やかな風が吹き始める

「今からアルの所に行くね」

「待って、河川敷まで距離があるわいくら飛んでも直ぐには着かないわよ？」

「大丈夫だよ：私だけに備わってる移動手段があるから：我と共にある風よ、私の願いを聞け、我を彼の地に運べ！ウィンド：ジャンプ！！」

騎士甲冑を展開してセレスは目を閉じて呟くように言うと、シャマルがここからだとすぐにはいけないと言うがセレスは特に焦る事もなく告げると、彼女の周りに吹いていた風がだんだんと勢いを増していく

そしてセレスの詠唱とともに彼女の身体は風が包み込んでいき魔法名と共にセレスはその場からいなくなっていた

《ウィンド：ジャンプ！！》

河川敷で通信をしていたアルの耳にセレスの声が入る、その瞬間さまざまい突風が吹くと目の前に騎士甲冑を身にとったセレスが立っていた

「話しては聞いていたが凄いもんだな…それ」

「マスターの所に緊急で向かうための魔法だから大して凄くないよ？
アルが離れてないと使えないからね」

いきなり目の前に現れたセレスに苦笑をしながらアルは言う。セレスは大した事無いと答える

セレスが現れた事でロストロギア達はいつでも逃げられるようにしていた

「練習なしだけど…いけるよな？」

「もちろん、私はアル専用の融合騎だよ？問題は無し！」

ロストロギアを視界に入れながらアルはセレスに確認を取ると、当たり前なことは聞かないで欲しいとセレスは答える

その言葉と共に二人に引き寄せられるかのように風が吹き始める

「それじゃあ、行くよアル…我は疾風の舞姫セレス…これより我は主アルフィリオス・ラーゼンハルグの刃となる、我らが絆が精強ならばいかなるもの貫ける、脆弱ならば刃は砕けよう！」

されど我は主を信じこの身を主と共に戦地に置く、我らが戦刮目せんかくめせよ！ユニゾン、イン！！」

セレスの凜とした声は河川敷に広がる、そして祝詞の如き声と共に風が吹き荒れていく

ユニゾンの掛け声と共にセレスは緑色の光となりアルの身体の中に入り込む、その瞬間爆発するような衝撃が当たりを包む、まるで新しい力の誕生を祝うかのように融合騎として真価を発揮した彼女を賞賛するように風は河川敷、一帯に拡散した

「凄い衝撃…レキ君ありがとう」

「大丈夫なら良いんだ…これがセレスのユニゾン？…あれはっ!？」

いきなり起こった衝撃に吹き飛ばされそうになったキャロをレキは抱き抱えるように掴むと冷や汗を流しながらアルの方を向いて驚いた

そこには鮮やかな橙色のロングヘヤーに深緑色のロングコートを着たアルがいて、閉じていたまぶたをゆっくり開けると瞳は黄緑色に変わっていた

――――
SIDE…アルフィリオス

「成功したのか？」

セレスが中に入って着て少ししてから目を開けて俺は呟く
いまいち実感がわかなかった、確かに身体は軽くなってるが本当にユニゾン出来てるか不思議だったからだ

「失礼だなあ…ちゃんと成功してるよ？
今のところは順調だよ」

「頭の中からセレスの声が聞こえてら、すげえ違和感あるけどさっそくお仕事をするか」

〈了解だよ！それじゃあ魔法の情報を教えるから合わせてね？〉

不安そうになるとエコーがかかったセレスの声が頭に響く、それを聞いて初めて成功したなと思った

俺達がユニゾンを成功させたのに気付いたロストログア達は一目散に逃げ出した、恐らく今の怖さを理解したからだと思う…まあ

「そう問屋は下ろさないがな！」

〈術式転送、良いよ！アル！！〉

「彼の者を風縛の檻に閉じ込めろ…唸れ！烈風！！」

「ヘゲイルオブサンクチュアリ！！！！」

俺はイーグルレイダーを腰にあるホルダーにしまうと右手をつき出すように構える、セレスの声と共に魔法の情報が頭に入ってくる

完全に頭に入った時には身体は自然と詠唱を初めていた、セレスと声を重ねて魔法を発動させると5メートルくらいの竜巻がロストログア達を巻き込んでいく

本体ではない奴等を巻き込んだ様で回転している最中に増える事はなかった

「スバル、エリオ！確認が出来た奴は片っ端に投げ込んでいけ！」

「了解!!」

問題が無さそうなのを確認するとスバルとエリオにダミーを投げ込む様に指示をだす

――

「アルさんとセレス：凄いです」

「そうだね、こっちも負けないように頑張ろうか！」
「うん！」

アルとセレスが巻き起こす竜巻を見てキャロは関心するように言う
とレキはそれに負けないようにしようと激励すれば、キャロは笑顔を浮かべて答える

〈皆！本体を見つけたわ、一気に封印をするわよ!!〉

〈おう!〉

〈わかりました〉

「キャロ！」

「うん、私たちも行こう！」

念話を通してティアナが全員に報告をするとスバルとエリオがそれに答える

アルは竜巻を維持する為にその場から動けなかった

レキはキャロに目線を配らせると真剣な眼差しでキャロは返すとティアナの方に走りだす

ティアナの所にたどり着くとそこではスバルとエリオが先に来ており目の前には薄い防御壁を張ったロストロギアがいた

「レキ、キャロ！本体が防御壁を展開してるわ、スバルとエリオが破碎するから隙を見て封印してくれる？」

「了解！」

レキとキャロがきた事でティアナはロストロギアの防御壁を破碎するようにスバルとエリオに指示を出す

「エリオ！コンビネーションで行くよ！！」

「はい！頑張ります！！」

「「うおりゃあああっ！アサルト、ストライク！！」」

スバルがマツハキャリバーで移動を開始しながらエリオに呼びかける

エリオも少し後ろを移動しながら答えるとロストロギアに攻撃を仕掛ける

最初にスバルがナツクルで一撃をいれてすり抜けるように移動するとエリオがスバルの軌道に交差するようにストラーダで切り抜ける魔力が交差した事により爆発が発生したがロストロギアの防御壁にヒビを入れるだけで破碎は出来なかった

「キャロ！」

「わかった、レキ君！」

防御壁のヒビが入るのを見たレキは直ぐ様キャロに声をかけるとフアフニールをシフトAにしてカートリッジを二発ロードする

「レキ！？まだ防御壁があるから、もう少し待って、キャロも！」

「大丈夫です、いけます！！！」

「私はレキ君を信じてますだからやれます…封印の力、彼の者の矢に宿れ…いくよ！レキ君！」

「うん、わかった！一矢封縛！」

「「シーリングバニッシャー！！！」」

レキが封印作業に入りだした時にティアナは静止をかけるが、レキとキャロは構わずに作業を続行する

キャロのケリユケイオンから放たれた光がフアフニールの矢に付加されたのを確認するとレキはキャロと声を揃えて撃ち放った

矢は流星の様なスピードでロストログアに命中するとロストログアは動きを止めた、そして辺りにいた大量のダミーもどんどん消えていく、封印が成功した証だった

「レキ君、やったね！」

「そうだね、キャロ」

「まったく、あんたら成功しなかったらどうしてたのよ…」

「その時はその時ですよ、でも決めるつもりでやりましたから」

封印に成功した事にキャロは嬉しいそうにしながらレキに手を上げてハイタッチを求めると、レキも同じように笑顔を浮かべながら手を合わせる

封印したロストロギアを見ながらティアナは呆れたように言う
レキは微笑をしながら答える

――

〈どうやら成功したみたいだね、アル〉

「そうだな…セレス…少し良いか？」

〈何？アル〉

「改めてこれからもよろしくな？」

〈えと…うん、わかった！〉

竜巻を解除するとセレスがアルに話しかけてくる
アルは少し考えてから頷くとセレスに呼びかける

いきなり呼ばれてセレスは少し驚きながら返事をする、アルの改
めての挨拶に笑いをこぼしながら答えた

EP12..重なる力(後書き)

どうもえのきです！

いかななものでしたか？セレスの初のユニゾンとレキキャロの無自覚な信頼関係は

もし変わりすぎじゃないかなと思ったなら遠慮なく言って下さい

そして前書きであったアンケートですが昨日をもって5万PVを達成しました！

前回の記念で5万あたりでまたラジオ番組をすると言いましたが少し間がそんなに空いてないなと思ってます

そこで記念小説のお題を提供して貰えますか？

もちろんラジオ番組ネタでも構いません

良かったら協力をお願いします

そんな訳で次回の夜天に舞い踊る荒鷲は記念小説になります

それではまた！

S. EP: 夏は海に行くってのが相場だろうが!! (前書き)

間違いがあり修正しました

S. EP..夏は海に行くってのが相場だろうが!!

暑い…

それは誰かが言った言葉だった、ここ数日のミッドチルダは例年を超える猛暑が続いた

当然、機動六課にも影響は出ていた
猛暑が続いたせいで六課のエアコンがご臨終し外界とほぼ同じ気温になっていた

「…暑い…」

「スバル、皆同じなんだから頑張りなさい…」

「だってこんだけ暑いのに仕事なんてやる気起きないよ…」

スバルの項垂れるような言葉がムシムシとした部屋に響く

それによって他の隊員達も次第にだらけだした

「これだけ猛暑の中で見返りもなく人は動けませんよ…」

「確かにフラフラしてきました…」

「キャラ、水分はしっかりとった方が良いよ…」

デスクワークが不慣れなライトニングの手伝いをしていたレキが呟くとキャラが頭に軽く手を当ててよろめく

レキはキャロの身体を支えるとエリオが注意をする

「あうゝ…休みが欲しいかも…」

「同感だわ…作業をする環境にしちゃ最悪だしね…いつそ休みたいわ…」

体力があるスバルも真面目なティアナもこの暑さではどうしようもなかった

そして全員が口を揃えて言った

暑い…

「案の定全員がへばってるぜ」

「まあ当然やな、私らも気を抜けば倒れそうな暑さやからな」

「なあはやて、エアコンを直す業者きたらさ…皆に休みやらないか？」

オフィスの状況を簡潔にアルは報告をすると、上着を脱いでYシャツ姿のはやてが少し疲れたように答える

はやてのいる部隊長室は日の光が入りやすく窓を開けていても大し変わらなかった、そんな中でアルが一つの提案をする

「せやな：作業効率を考えるとそうした方がええかもしれへんな、業者の方は今日の午後から入るようやから休みをとるなら、今日から明日の夕方までやな」

「それだけ時間あるなら行けるかもな：」

「？一応聞くけど何処にいく気や？先輩」

はやてはモニターを表示すると業者のくる時間帯と修理に必要な時間を計算してから答えるとアルはまるで悪巧みをするような表情をする

アルの表情に不安を覚えながらも一応質問をするはやて

「そんなの決まってるだろ？

むし暑い夏は海って相場が決まってるんだよ！ってな訳で海に行こうと思う」

アルは握り拳をつくって力説をする、はやては暑さのためかいつものツツコミをせずにハアとため息をつくだけであった

「なんでこんなに暑いのに、そんなに元気やの？先輩は：」

「あえて言うなら休みがあるからだな！」

ダルそうにアルに元気が良いのかとはやては言うところアルはよくぞ聞いてくれましたと、言わんばかりに答える

氷づけにすれば少しは静かになるんじゃないかとはやては本気でそ

う思いながら、アナウンスマイクのスイッチを入れて今日から明日の昼まで全体休暇だと伝えた

――――

それから六課前線メンバー十シヤマル、ザファイーラ加えた一行は海に向かうために準備をしていた

「ねえ、アル：私泳げるかわかんないんだけど…」

「まあ心配するな、泳げない奴には浮き輪があるからな」

荷物を用意していたセレスは手を止めて真剣な表情で言うところアルは頭に軽く手を乗せてからフォローをする

「そっか、なら安心だね

よし！準備OKだよ！！」

「セレス、着替えような？さすがにその姿の奴をつれ回す気はない」

「ええーメンドイよ…」

アルの指摘で明らかに嫌そうにセレスは答える、ちなみにセレスはTシャツ、短パンさらに頭に冷●ピタをつけた姿だった

本人曰く暑いのはダメなんだそうで、自分なりの工夫をしたらしい
「着替えないと連れてかないからな？」

「うあー！了解、着替えます、直ぐに着替えますとも！！」

「んじゃ車を用意してくるからちゃんとした格好で来いよ」

駄々をこねているセレスにアルはすっぱりといい放つと、セレスは慌てて敬礼をしてから自分の衣服がしまつてある棚に向かって走りだす

アルはやれやれといった感じに立ち上がると服を選んでいるセレスに一言いつてから荷物をもって外へと歩いていく

玄関から出てガレージに車を取りにいくアル、今回使う車はいつもの乗用車では無く人数を乗せられるワゴン車にした

車を玄関先に移動させるとそこにはフェイトが乗った車が止まっていた、フェイトの車の後ろに停車をさせたアルは他のメンバーを待たため車外に出ていく

実のところ、目的地と移動手段が決まっているが誰がどの車に乗るかは決まっていなかった

その事を打ち合わせするためにアルはむし暑い車外に出たのである、本来なら冷房が効いたなかで待つ予定だったが狂ってしまったなどアルは内心後悔をしていた

「あちい…フェイト…その服で良く平気、だな…」

「黒が好きなんだ…でも少し後悔してる…」

アルが車を降りたと同じくらいにフェイトも降りてくる、フェイトは薄手の上着にロングスカートなのだが、上着の色が黒ということ

もあり、かなり暑そうだった

「フェイト、これを使っとけ…少し涼しいから」

「ありがとう…でもよく団扇なんてあったね…」

「この前の主張任務で見つけてな、帰りがけに買っておいただよ」

アルは自分の荷物の中から団扇を取り出すとフェイトに渡す

渡された団扇で扇ぎながらフェイトはどうして団扇をもっているのかと聞くとアルは主張任務の時に見つけたと答える、それと同時に玄関の自動ドアが開かれた

「二人共、お待たせや」

「みんな、準備出来たからさっそく行こうか」

「海に行くなんて久しぶりだな、まあ羽休めには良いかもな」

はやてを先頭に六課の前線メンバーが玄関から出てくる

後ろにいたなのはヴィータが言う後ろでフォワードメンバーが和気あいあいと話していた

「んで誰がどっちに乗るんだ？早く決めてくれないと溶けるぞ…俺が」

「ほなら、適当でええか

各自乗りたい車にのることええか？」

「「「「はい!!」「」「」」

話し込んでいるフォワードメンバーを見て早く移動しないかとアルは言うとはやては少し考えてから好きな方に乗るようと言う

先ほどまで話していたフォワードメンバーは元氣良く返事をして返した

――――

S I D E ..アルフィリオス

「ああ、ようやく出発した…
にしても…好きにしろって言われてもお前らは固まるんだな…」

眩くように言ってから俺は横とバックミラーを見る
隣にはやて、後ろの前列にリイン、セレス、ヴィータ
さらにその後ろに人型のザフィーラ、シャマル、シグナムがいた
そうこの車には八神家が勢ぞろいしていた

「なんや、先輩は私らと一緒にいるのがそんなに嫌なん?」

「そこまでは言っていない…仲が良いんだなって思ってたよ」

「当たり前やろ? 八神家の絆は鋼より硬いんやで?」

横にいたはやてがジロリと睨み付けるように俺に言ってくる

俺はハフゥと欠伸をしてから答えるとはやては自慢をするように言う

「休みを取れたのは良かったな：実験部隊だからそう簡単に休みは取れないから取れて良かったと思うな、お前らほっとくといつまでも仕事してそうだからな」

「むう、人をワーカーホリックみたいな言い方はやめてくれへんか？」

「違うのか？てっきりそうだと思ったんだがな：いやぁ意外だなあ」

「なんやとぅっ！！そのあからさまな言い方が腹がたつ！」

俺は機動六課についてを思い返しながらはやて達が仕事から解放されて良かったと言うとはやてが明らかに不機嫌そうな顔をして言うてくる

はやてをちやかすように言うと言みつきそうな感じにはやてが怒ってくる

だけどそれは本当に怒ってるわけじゃない、ある程度一緒にいたんだそれくらいわかる

アルとはやての会話を聞いていたヴィータ、リイン、セレスの三人はハアとため息をついた

「二人とも、凄く仲がいいのです…」

「本人達はただ話してるだけだけど、私にはイチャついてるようにしか見えない…」

「前の空気だけ暑くなってるじゃないか？」

三人は出来るだけ前の二人を見ないように言うのと再びハアとため息をついた

八神家とアル、セレスが乗った車はクラナガン郊外の海水浴場に到着した

「うーみーだーっ!!」

「わーいですー!!」

車から真っ先に飛び出したのはセレスとリインだった

それを見ながらシグナムやシャマルたちも続々と降りていく
フェイト達の車も着いたようでスバルを筆頭に皆が降りてくる

「んじゃ、荷物の置き場確保しとくから
着替えてこいよ」

「せやね、ほなら皆行こうか」

「……………」

「どうかしたんですか？アルさん黙りこんで」

浜辺ではしゃぐ奴等をよそにアルは荷物とかパラソルを用意すると
言う

それを承諾したはやては女子メンバーに声をかけて更衣室に向かう
はやて達がいなくなつてすぐにアルが考え込むように難しい顔をし
ていると、エリオが不思議そうに質問を投げ掛ける

「いやな…改めて女子の比率が多い舞台だなと痛感してな、あれだ
けいたのに今はこんだけだ」

「まあ確かにそうですね、それより早く用意しないとどやされます
よ？」

「へーい…」

質問をされたアルはフムと一息ついてから考えていたことを言つて
から今いるメンバーに目をむける

ここにはアル、レキ、エリオに獣型のザフィーラしかいなかった

レキもそれに同意はするが荷物を早く置こうとアルを急かす

「よつと…これで良いな、はやて達はまだか？」

「女性の着替えは長いものだ、我が荷物の番をしていよう
お前達は先に遊んでこい」

「ありがたいがさすがに先に遊んでたらなんか悪いだろ？
待っておくさ」

パラソルを立てたアルが汗を拭ってからはやて達が来たかザフィーラに聞くとザフィーラは首を横に振ってから答える

ビニールマットの上に寝てからアル達に海に先に入るといいと薦める

アルは苦笑をしながらマットに座ると抜け駆けは出来ないと答える、エリオとレキも同じなのかマットに腰をおろしていく

数分後

「やー、お待たせや！着替え終わったで？」

「ようやく来たか：危うく日干しになるとこだったぜ」

「先に入っても良かったんだよ？」

四人がうとうとしはじめた時にはやての声が耳に入る、四人は起き上がって見るとそこには水着に着替えた女性陣がいた

ようやく来たことにアルは待ちくたびれかのように言うとなのはが苦笑をしながら答える

「アルさんが皆さんより入るのは悪いって言ってたんですよ」

「レキ、余計な事はいふな…」

「へえ、先輩がね」

「ありがとうね、アル」

待ちくたびれたようにしているアルを見てレキは先ほどまでの事を教える

アルは不機嫌そうに言うとはやてが良いことを聞いたという表情を浮かべて言い、フェイトが申し訳なさに礼をする

「だあああっ！さっさと遊んでこい！！
でも準備運動はしっかりやれよ？」

「…行っちゃいましたね…アルさん」

「ほな皆、明日までの休暇を楽しんでな？」

では解散！！」

フェイト達の反応をみたアルはごまかすように言っていると海の方に走っていく

走りだしたアルを見てティアナが呟くとなのは達は苦笑した

そしてはやてがアル以外のメンバーに連絡を伝え機動六課の休暇が始まった

――
照りつける太陽の中、様々な場所で各々がゆったりと過ごしていた

「さてと、どうするか」

海を一通り泳いだアルはこの後の予定を考えていた

「一人で行動してたから、他の奴等を見てくるとするか、イーグル皆の位置はわかるか？」

「現在、海、浜辺、入り江、海の家それぞれの反応があります、どうやら何人かで固まっているかと」

「なるほどなあ…さあて何処から行くか」

イーグルに位置を教えて貰ったアルは誰の様子を見に行くか考える
と決めた目的地に向けて海の中を泳ぎだす

——海——

「確か、ここら辺に誰かいたはずなんだがな…誰もいねえや…帰
ぷはあっ!!」おうわっ!？ス、スバル？」

反応があった地点に来たのだがそこには海が広がってるだけで何も
なかった

今日はイーグルも休暇のようなもので機能も最低限のものしか起動
してなかったから誤差も考えられる

そう考えたアルは移動しようとした時いきなり海中から現れたスバ
ルに奇声を上げた

「むう、ティア酷いよ…あんな手を使うなんて…」

「しかも無視か!？」

「あれ？アルさん、いつからそこに？」

「ついさっきだよ、何をしてたんだ？」

水の中で腰を擦りながらスバルは落ち込みながら言う

アルは無視された事に驚きながらツツコミをいれるとスバルは不思議そうにしながらアルの方を向く

「素潜りですよ、ティアと競争してたんですけどティアったらキックして邪魔するんですよ」

「そうなのか？ティアナが妨害するなんて珍しいな「ぷはっ!!」あっ…出てきた」

「ティーアー、酷いよ!キックするなんて」

「アンタが最初に胸を触ってきたからでしょ!自業自得よ!!」

水から顔を出したティアナにスバルは文句を言うと、ティアナは睨み付けて噛みつきそうな勢いで反論をする

「スバルもそうだが、ティアナもあまりやり過ぎるなよ？」

下手したら溺れるからよ」

「ア、アルさん!？いつの間に…すみません…心配をかけてしまつて」

「ついさっきだ、わかってくれたなら良い具合とか悪くないよな？」

「は、はい！／＼大丈夫です／＼」

二人の間に入るように割り込むとティアナは驚くとシュンと落ち込む頭を下げてるティアナに微笑するように言うのと体調の方を聞くと、ティアナは顔を赤くして少し嬉しそうに返事をする

主張任務の終わり辺りからティアナはアルに対して態度を変えていただが明らかに態度が変わってもアルは気づく事はなかった

「どした？顔が赤いけど…」

「嬉しいんですよ、アルさんに気にして貰って「スバルっ！！」／＼」
「やばっ！？それじゃアルさん、あたし、逃げます！！」

「あ、待ちなさい！スバル！！」

顔を赤くしてるティアナにアルは不思議そうに聞くとスバルがからかうように教えるとティアナは怒鳴り声を上げる

スバルはまずそうな顔をしてから凄い勢いで泳いで逃げていく

「いっちゃまった…仕方ない、他の所に行くか…」

その場からいなくなった二人にアルはハアとため息をつくると別な場所に移動するために浜に向かって泳ぎだす

———浜辺———

「さてと、ここからなら海の家か浜辺が近いな…」

浜辺に到着したアルは右に見える海の家と左に見える自分達のパラソルがあった

どちらに行くかと迷っていると、海水浴に来てた人たちが次々と海の家に集まっていくなのが見えたので先に海の家から行く事にした

「なんかあるのか？行ってみるか」

アルは人だかりが気になり海の家に向けて足を進めた

——海の家——

「ハグハグ！」

「アグアグ！！」

「ガブガブ！！！！」

そこではすさまじい光景が広がっていた、海水浴に来てた人たちは一つのテーブルに視線を集めていた

そこでは三人の少女がまるで吸い込むようにかき氷を食べていた

「ヴィータにリイン、セレスまで、何をしてんだ？」

「アル！？悪いけど今は構ってる暇はねえからまた後だ！！」

「見ていて！アル、私優勝するからね！！」

「リインも負けないのです！！」

人混みを掻き分けて入ったアルは、凄まじい勢いでかき氷を食べている少女たちに質問を投げ掛ける

よほど食べるのに集中しているのか、アルに対してぞんざいな言い方で返すとヴィータ達は食べるのに集中した
アルはヴィータ達の近くで見守っているシャルルを発見しそちらに向かった

「シャルル、これはなんの騒ぎだ？」

「実はアレが原因なの、もう三人とも止まらなくて」

アルに質問されたシャルルは壁のポスターを指でさす、そこにはかき氷早食い対決、優勝者にはサマーフェスタペア招待券！

「サマーフェスタ？…聞いた事ないな」

「クラナガンのホテルでやる予定の行事よ、ペア招待券って聞いて三人はこうなったの」

「いきたい奴がいるんだな…まあ良いや、んじゃ俺は浜辺の方に戻るな」

三人に腹を壊すなって伝えてくれ」

「ええ、わかったわ」

ポスターの内容をシャルに聞くと、シャルは簡潔に説明すると三人がやる気をだしたと補足をする

アルはハアとため息をついてから浜辺に戻ると伝えたと海の家を後にした、アルが外に出た時に中で歓声が上がった、どうやら優勝者が出たようだ

アルは特に気にする事なくパラソルの方に向かった

——浜辺——

「たあっ!!」

「フェイトちゃん!!」

「任せて、はやて!!」

「よっし! もろた!!」

パラソルの所にたどり着いた先では熱戦が繰り広げられていた

砂浜に線でコートを作ってはやてとフェイト、シグナムとなのはのビーチバレーが行われていた

「凄い迫力のある試合だな…遊びじゃないだろ…」

「アルか、何かようでもあるのか？」

アルは繰り広げられてる戦いに苦笑をもらした時に、パラソルの下にいたザフィーラに呼びかけられる

「少し寄っただけだ…珍しい組み合わせだな、なのはとフェイトが別れるなんて」

「主はやてがたまには別れて見ればどうだと提案してな」

「なるほどね…」

ビーチバレーをしている組み合わせにアルは珍しげにしながら言う
とザフィーラがそれに答える

その間にも攻防戦は激しさを増していく、それでもラリーが切れな
いのが凄いとアルは関心をしていた

「少し別な所を見てくるか…ザフィーラ、またな」

「そうか、わかった」

ここに居ても暇だと思ったアルは残った入り江に向けて足を進めた

——入り江——

反応があった入り江に来たアルは周りを見渡して人を探した

「と言っても残ってんのはライトニング小隊の奴等だけだがな」

誰に聞いてるわけでもないのにアルは呟く、自分の行動に虚しさを覚えながらもレキ達を探した

そして日陰で座って休んでいるエリオを見つけた

「エリオ、休憩中か？」

「アルさん：はい、少し疲れちゃって」

「なんかそれだけには見えなかったけどな
間違いならいいけど、少し寂しそうだったからな」

日陰まで歩いて移動しエリオに声をかけると苦笑しながらエリオは答えた

遠くから近くまでくるまでエリオの表情が沈んでいることに気がついたアルはエリオに聞いて見ることにした

「僕は別にそんな事は…」

「お前らちびっこ組はどうも人に頼らないよな、少し頼れお兄さん
はいつでも空いてるんだからな？」

なかなか訳を話さないエリオにアルはやれやれといった感じにため息をつくと軽くエリオの頭を小突いてニツと笑う

「アルさん、なら聞いて貰えますか？」

：実は最近、レキとキャロの仲が良いなあって思ってるんです…」

「確かにあいつらは仲が良くなってるな…嫉妬か？キャロをとられ

たって」

小突かれてからエリオは少し嬉しそうにするとポツリポツリと語りだした

話しの内容を聞いたアルはふうむと顎に手を当ててから指を立ててエリオに聞く

エリオは首を少し大きく横に振ってから言葉をだす

「違います、僕とキャラはそんな関係じゃないです…でもキャラがレキとそういう関係になりたいなら僕は邪魔じゃないかなって思ってます」

「ハア：お前って奴はんな事はお前が気にする事じゃねえんだよ
大体恋愛は本人と相手の問題だ

第三者がいようがいまいが関係ねえよ

別にあいづらがお前をはぶいてるわけじゃないんだろ？」

遠くの方で遊んでるレキとキャラを見てエリオは言うところアルは深く息を吐いてから二、三回頭を小突いてから言う

「そんな事はしませんよ！二人とも気にかけてくれます…だけど…
やっぱり」

「それでお前が断ったりしてたら余計にあいづらは心配すんぞ？
何があったかなってそしたらお前がいなくなった意味がねえだろ」

アルの言葉にエリオは直ぐ様反論をするとだんだんと声は小さくなっていく

アルはレキ達に視線を向けながら言う「今度は頭を小突く事なく優しく撫でる」

「優しさで身を引くのは良いけどそれがかえって傷つけることになる、それがわかんないわけじゃないだろ？」

お前ら似てるからな、まあイチヤつかれんのが見たくないならお前も彼女を作れよ、いい子がいるかもな？」

「ア、アルさん！？」

「ハッハッハ、またな！」

アルは立ち上がってエリオに背を向けたまま話し、指をエリオに向けてニツと笑いながら言う「エリオは慌てふためながら何を返せば良いか迷っているとアルは手をヒラヒラと動かしながらその場を後にする」

入り江の近くまで来たアルは後ろを軽く振り返ると座っていたエリオをレキとキャロが立たせて海に向けて手を引いていく姿が見えて少し安心したように笑顔を向けた

日も落ちて全員が集合した時だった

「明日までの休暇や、シャマルが近くの旅館に部屋を取ってくれたみたいやから移動しよか」

「あ、はやてちゃんそれについてなんだけど部屋割で一人の人がでちゃうの、取れた部屋は大部屋と三人の中部屋、個室しか取れなかったのよ」

はやては浜辺から見える旅館を指でさしてから言うと言とシャルが少し申し訳なさそうに割り込んできて説明をする
誰が一人になるかと皆が考えているとアルが手をあげた

「俺は一人でいいぞ、わざわざ大部屋にいく奴等から出すより人数少ない野郎が良いだろ？」
それとエリオとレキはザフィーラと交流しとけ、普段から喋らないんだからな」

アルの言い分に皆は一理あると思い個室はアルに決まった

———旅館———

「ふいゝさっぱり、さっぱりと…明日も休暇、ゆっくりと休むかな」

個室のシャワーを浴びて砂を流したアルは窓際の椅子に座り込むと明日の事を考えているとふと控えめなノック音が部屋に響いた

EP13..言葉にしなきゃわからない時がある(前書き)

今回はフラグ破壊とフラグ立てです

場面がコロコロ変わって見にくいかもしれませんがなので注意を

EP13…言葉にしなきゃわからない時がある

出張任務が終わりアル達は機動六課に戻ってきていた
小休暇のような出張任務を堪能したメンバーは再び出撃に向けて訓練に励んでいた

「ふうむ…少し、いや大分だよな…」

「どうかしたんですか？アル」

訓練スペースの近くにある階段で訓練を見学していたアルはなのはの訓練内容を見て難しい声を上げるとモニターを展開してデータを表示していく

イーグルは突然のアルの行動に怪訝そうな声で聞くとアルはやっぱりと呟やいて手を止めた

「なのはの訓練はどうにも基礎を重視してるな…」

「悪い事ですか？新人なら基礎を重視するのは当たり前かと」

アルの弾きだしたデータにイーグルは何を言いたいのかと思いがながら言うといーグルの考えを察したアルは説明を始めた

「訓練を始めて2ヶ月くらいはたってるけど、一般的な訓練密度なら特に問題はねえだけど…このデータを見る限りかなり密度が濃いなだよ、だからそこらの新人と対戦させたら圧勝できるくらいあいつらの実力がついてんだ」

「確かにそれならば個人技を高めた方が良いですね」

アルの説明でイーグルは理解をする、アルはそのままフォワードの方に目を向ける

朝の訓練が終了したフォワードはこちらに向かって歩いてきていた

「まあここまでは推測だから間違いがあるかも知れない、今度は実証だな」

「何をする気なんですか？」

「少し話を聞くだけだ、聞く相手はティアナにしとくか」

階段から飛び降りながらアルは言うのと少し駆け足でフォワードの所に向かった

「みんな、お疲れさん」

「アルさん、何かありましたか？」

「ちよいとティアナに話しがしたくてな、悪いけど先に行ってくれないか？」

フォワードメンバーの姿が見えるとアルは速度を緩めて片手を上げて呼びかける

フォワードメンバーは何事かと首を傾げるとレキがアルに質問を投げ掛ける

アルは人差し指と親指で隙間をティアナに手招きをする、ティアナは少し不安そうにアルの側に来るとレキ達は言われた通りに先に行き、その場にはアルとティアナしかいなかった

「あの、話してなんですか？」

「そうだな、なのはの訓練についてかな？
ティアナ、お前は今の訓練で十分だと思うか？」

「そ、それは…満足しています、あれだけ手の込んだ訓練なんてありませんから」

「そうか？ティアナ、お前さ自分が強くなった自覚がねえんじゃないか？」

不安を表情に出しながらティアナはアルに質問をすると、アルは人差し指を立ててから用件を言う

いきなりの質問にティアナは戸惑いを隠せなかった、けど少し息を飲んでから質問に答える

アルはティアナの回答に不満があるのか怪訝そうな目をしながら、ティアナに指をさして言うティアナは凶星をつかれた表情を浮かべた

それを見てアルはやっぱりなと呟いてから手をおろす

「アルさんはなのはさんの訓練に間違いがあると思うんですか？」

「いや、間違いはねえよ…というか訓練の内容に間違いなんてねえな、何かしら意図があればそれでそいつの経験になる…だけどなのはの意図がどうにも見えなくてな…」

「意図、ですか？」

「そういう事、まあちいとかするから訓練時間以外で自主トレとかすんなよ？身体を壊すからな」

アルの呟きにティアナは何故そんなことを聞くのかと思ひ質問を投げ掛ける、アルは少し難しそうに頭をかきながら説明すると少し真剣な表情で呟く

アルの表情にティアナは表情を強ばらせる、それを見たアルはニツと笑いティアナの頭を軽く撫でると釘を刺してから、なのはがいるであろう訓練スペースに歩いていく

——訓練スペース——

フォワードメンバーがいなくなったその場所でののはがモニターを開いて今日の訓練のデータをまとめていた

なのはの後ろ姿を確認したアルは意を決して近づいた

「あれ？アルさん、どうかしたの？」

「ちょっと、用があつてな…まあ作業しながら聞いてくれや…」

アルの足音に気づいたなのは笑顔を浮かべながら言うと、アルは少し言葉を選びながら答えて手を軽く動かす

「うん：いいけど、用ってなに？」

「なあに：訓練で基礎を重視する理由を、聞かせてくれないか？
なんで個人技よりも基礎を重視しているかをさ」

モニターに目を移しながらなのは不思議そうに頷くと、アルはなのはの方は見ずに本題に入った

突然の事にモニターの操作を中断したなのは苦笑をしてアルの方を向く

「いきなり、何を聞くの？基礎は重要なのは当たり前でしょ？」

「普通の教導官がするならこんな質問はしねえ：だけどお前の訓練の密度の濃さを知ってるからこそ聞きたいんだよ：なんで基礎を重視するのかってな」

「：もうアルさんは大げさだよう：エリオ達もいるから基礎は念入りにしたかっただけだよ？」

本当にそれだけだから：ほら早く戻ろ？皆が心配するから」

モニターを閉じるとなのははははと苦笑しながら説明をする

アルは自分が抱いている疑問をなのはにぶつけると一息ついてから改めてなのはに質問をする

なのははよほど話を切り上げたいのか少し早口で言いながら訓練

スペースを出ようと歩き出す

「今のまま、続けりゃ近いうちに取り返しのつかないことになるぞ？
あいつらの中には強くなったか自信がねえやつがいるからな」

「だ、大丈夫だよ！皆ちゃんとわかってくれるよ、自分達は強くな
ってるって」

「都合の良い解釈をするな…自分の本音を聞かせない奴の訓練の意
味がわかるほど、お前らの関係は深くねえだろ」

歩き出したなのはがアルの横を通りすぎた時にアルは普段の口調と
は違い無感情に近い口調で話すとなのはは足を止めた、それに構う
事なくアルはいい続ける

いい続けるアルに焦りながらものはは答えると切り捨てるかのよ
うに言葉を放つ

「なら…私の訓練は間違っているって言いたいんですか？」

「別に間違ってるなんて言っちゃいねえ、けどな…何事にも理由
がある…俺にはそれが見えない、なんで入れ込むかどうしてそこま
で出来るか、話してくれないか？」

背中を向けたままなのはは拳を握りしめてから絞り出すように言う
とアルは腰に手を当てながら答えるとなのはの方を向く

なのはは少しうつむいてから考えると顔を上げてアルの方を向く

「わかった…話すよ、私が教導する理由を…」

S I D E…アルフィリオス

俺の方を向いたなのははゆっくりだけど話してくれた、自分の過去を…

魔力とまったく関係の無い世界で育ったなのはは9歳の時にユーノと言う魔法使いに出会った、それが魔法との最初の出会いそしてロストログア事件の一つジュエルシード事件の始まりだった

その時にフェイトと出会ったのははフェイトとわかりあうために魔法使いとしての技量を高める…若干9歳にして並の魔導士以上の魔力を発揮していったなのは

正直に言えば有り得ないと思った、いくら才能があってもそれだけの魔力に子供の肉体はついていけない…無事に事件を解決したのは運が良かったとしか言えなかった

それでもものには更なる事件が待ち受けていた、ヴィータ達が起こした闇の書事件：圧倒的な実力差になのはとフェイトは一つの手段に出る、当時は安全性に欠けていたカートリッジシステムの導入だ

力には力、カートリッジシステムを最大限に活用してなのは達は闇の書の闇を撃破した、だけどそれが問題だった…

度重なる事件と魔力の反動はなのはの身体にだんだんと溜まってい

きついにそれは起こった

管理局の任務で次元世界で戦闘していたのはは、長い戦いのかで溜まった疲労により撃墜…重体となった、二度と飛べないと言われたそうだがなのは諦める事なくリハビリを続け、再び飛べるようになった

「長いリハビリを終えた私は自分と同じ目を他の人にも、味あわせたくないって思って教導に力を入れるようにしたの…これが私の教導をする理由だよ…」

「そうか…よく話してくれたな、おかげで良くわかった…」

なのはは俺を見ながらそう告げた、その瞳には確かな決意があつて嘘はついてないのはわかった…辛かったんだな、だけど

「お前がアホなのが、良くわかったわっ!!」

それはそれ、これはこれだ

俺は手を振り上げると勢い良くなのはの頭にチョップを叩き落とす

ドゴス!という鈍い音が訓練スペースに響いた、いきなりのチョップになのはは反応出来ずに直撃を貰いあまりの痛さに頭を抑えた

「い、痛い!?!何するの!」

「それだけの理由があるならなんで言わねえ、通じないと思ったか？ 見損なわれると思ったのか？
なんにせよ、それだけ大事な事ならちゃんと言葉にしろよ…」

「アルさん…」

「間違いだとかじゃない、自分の気持ちは言葉じゃないとわからない…：つうわけでお前は今日の午後にでもアイツラに話せ」

痛がるなのはにアルは鼻先に指を突きつけると言葉を放つと仕方ないと言った表情を浮かべる

アルのその表情を見て意外そうな表情を浮かべる

ハアとアルはため息をついて視線を落としてからなのはの方を向き直すと再び指をさす

「えっ！？ 午後？ しかも今日の！？」

「そういうこと、思ったら吉日っていうだろ？」

だから今のうちに話しとけ、無くしてからじゃおせえからなんじゃな…」

アルの言葉に上手くまとまらないのかオウム返しのように返すのは驚き戸惑ってるなのはの横を通りすぎながら軽く手を上げて訓練スペースを後にする

「あん？なにをまってんだ？あいつ…」

訓練スペースを出てきたアルは隊舎の玄関先で車に寄りかかっているはやてを見つけた、腕時計を見ながら少し不満そうにしていたが、アルを見つけるとズカズカとアルの方に歩いて来てくる

「遅い！！いったい何をしてたんや？」

連絡いれてもイーグルは全然つないでくれへんし」

「本当なのか？イーグル…」

「すみません、話しの最中でしたので邪魔をしたらマズイかと思いまして」

「悪い…気を使わせたか」

はやての言葉にアルは気まずそうな顔をしてから、イーグルに問いかけると申し訳なさそうにイーグルは言い訳をするとアルはすまそうに目を閉じる

「話して誰としてたん？」

「少しなのはとな…んで何かあったのか？」

二人の会話を聞いてはやては少し不思議そうに首を傾げて入ると、アルは苦笑をしながら簡単に説明すると逆にはやてに質問をする

「せや、実はナカジマ三佐に頼み事があるやけど、ちょうどナカジマ三佐からアルさんを連れてきて欲しいと頼まれたんよ」

「ゲンヤさんから…なんだろう？借金…返したよな？」

「そんな事してたんか…あんたは…」

「まあ行ってみりゃわかるか、んじゃ詫びに運転するから乗ってくれ」

はやての用事を聞いて顎に手を当てながら考え込むとはやて呆れながら握り拳をつくる

特に思いつかなかったアルは軽くはやての頭を撫でると車に乗り込む、ため息をつきながらもはやては車に乗るとアルは陸士108番隊に向かって車を走らせた

――――

それから数分後、陸士108番隊についたアルは隊舎を見上げる

「いやはや、久しぶりに帰ってきたな…にしても変わってないな」

「数ヶ月で変わってたら凄いですよ？」

「リイン…いたのか、鞆の中だから気付かったぞ」

「確かに何も言わなかったのはわかりますが、何かどうでもよさそうだと思ってませんか!？」

隊舎を見ながらうんうんと頷くアルにはやての肩掛け鞆に入ってた
リインがひょっこり顔を出してから言う

いきなり聞こえたリインの声にアルは投げやり気味に答えるとリイン
はかみつくような感じに反論をする

「ほらほら、二人とも早くナカジマ三佐のところにいかなアカンよ」

「へーい」

「はいです」

二人のやりとりを聞いていたはやては手をパンパンと叩いて止めさ
せると目的を確認させると隊舎にむけて歩き出す

陸士108番隊 部隊長室

「オッス！ゲンヤさん、久しぶり！元気か！？」

「そういうお前さんは相変わらずうるさいな…」

部隊長室に入るなりアルは大声で言う「と陸士108番隊の部隊長に
してアルの上司であるゲンヤ・ナカジマはため息をついた

「あつたり前だろ？俺が静かだと調子狂わないと思うっしょ？」

「いやそれが一番だと俺は考えるがな」

「ゲンヤさん、ヒドイ…」

「先輩：その辺で話しがすすまへんから」

ゲンヤに文句を言われてアルはビシツとにこやかに決めるとゲンヤはすっぱり切り捨てる

アルが肩を落としているとはやてが苦笑をしながらツツコミをいれる

「おう、久しぶりだな八神、悪かったなこのバカをつれてきて貰ってな」

「いえいえ、私も用がありましたから先にナカジマ三佐の方からで良いですよ」

「そうか？なら先に済ませるか、まあ座ってくれ
ついさっきギンガに茶を頼んだから直ぐにくると思うぞ」

ゲンヤは入ってきたはやてに挨拶をすると敬語を使いながらはやては言う、ゲンヤはソファアの反対側をさすと二人はソファアに座る

「そんで用ってなんだよ、大体俺が必要な理由がわからん」

「それについてはこれから話す、実はな：お前さん達が主張任務に行った翌日に管理局の施設が何者かに襲撃されてな、その際にデバイスが一つ盗まれたんだ」

「ハッ、管理局の施設から盗みを働く奴がいるとはな：大それた事しやがる」

「つか何を盗んだんだ」「盗まれたのはTBシリーズの二号機だ」：「なんだと？」

ソファーに座ったアルは面倒そうに返すと神妙な顔をしてゲンヤは答える

告げられた内容にアルは膝を組んでから鼻で笑うと盗まれた代物の名前を聞いて表情を変えた

「なんなんですか？TBシリーズって…」

「正式名称はトライアルバードシリーズ…作られたものに鳥の名前が入ってるから名付けられたプロジェクト名、次世代量産型デバイスの試作品を作るプロジェクトだ
そしてイーグルを作ったプロジェクト…でも凍結したんじゃないかったのか？」

「確かに、プロジェクトは凍結はされた
だけどTBシリーズは三号機まで開発されていたらしくてな
今回襲撃を受けた施設は二号機の保管をしていたそうだ」

聞きなれない単語にはやては質問をするとアルがそれに答える首元にあるイーグルを手にとって見せて語る

ゲンヤは更に補足を加えるように説明を加える、話を聞いていたはやてはふと気づいた事があり二人に聞いて見ることにした

「先輩が一号機、盗まれたのは二号機…三号機は何処にあるんですか？」

「三号機は開発者ガドルフ・ザイチェが持っているそうだ、昨日本局から連絡が入ってイーグルレイダーはあるかと聞かれてな、そのついでに聞いた」

「ガドルフのじいさん相変わらずだな…んでゲンヤさん、犯人の特徴とかわかんないのか？」

「…いくつかわかってる事がある」

問いかけられた内容にゲンヤは答えると昨日の出来事を話す

開発者の名前が出るとアルは苦笑を浮かべた後、真面目な顔をしてゲンヤに問いかける

ゲンヤは少し考えてから口を開き犯人について語っていく

「まずは人数だが三人で犯行は一人でやっている

こいつは映像だけでしかわからなかったが一人は長身、体型から男だとわかってる

もう一人は少し低めの女だ…どっちも顔はわからなかった、最後に…」

「ゲンヤさん？どうかしたのか？」

「何か不味い事でも？」

犯人について語っていくゲンヤだったが突然、言葉を濁し言いにくそうな表情をした

ゲンヤの変化にアルとはやては心配そうに聞く

「いや、最後の一人は融合騎だ…しかも雷の能力を持ってるって事がわかってる」

「融合騎…しかも雷だと…まさか」

「迅雷の戦姫ライナ…」

ゲンヤの言葉を聞いて二人は思いわたる事があった

それは以前セレスが言っていた姉妹騎の事だった

融合騎自体が少ないミッドチルダで同じ能力を持った融合騎がいるとは思えなかった、だがそれを認めると言うことはセレスの姉は犯罪者と共にいるという事になる

「まだ確定した訳じゃない、気休めかもしれないがそうじゃない可能性がある、それを忘れるな」

「わかった…セレスにはまだ伝えることにする、ゲンヤさん悪いけど」

「心配すんな、少し調べるつもりだからな」

二人の表情を見てからゲンヤは言葉を選びながら話すとアルは決めた様に頷くとゲンヤに頼もうとしたがお見通しだった言わんばかりにゲンヤは返答する

「ありがとうございます、ゲンヤさん」

「よせ、普段言わない言葉づかいをすんな」

「これはさすがにちゃんとしないとまずいだろ…んじゃ話しはもう良いよな？少しその辺ぶらついてくるから」

アルは素直に頭を下げるとゲンヤは困ったように言う

アルは苦笑をしながら答えると立ち上がり部隊長室を出ていく

「リイン、悪いけど先輩と一緒にいてくれへんか？」

「わかったです、それでは失礼します」

「…多分大丈夫だとは思うけどな、それで次はお前さんの話しか」

「はい、実は…」

部屋を出ていくアルに少し不安を覚えたはやてはリインに言うところ配そうに見つめていた

ゲンヤは一息ついてから言うところ改めてはやてに向き直す、はやてもアルを心配しながらも自分の目的を話す為に口を開いた

「アルさーん！待って下さいですー！！」

「リイン…どした？なんか用か？」

「はやてちゃんが心配してたから追いかけてきたです！だけどそれでも無さそうですね…」

廊下を歩いているアルの後ろからリインの声が聞こえ、アルは振り返ると全速力で飛んでくるリインが見えた

アルは不思議そうに質問をするとリインは急ブレーキをかけながら止まると首を傾げながら訳を話す

「まあな、考えても今はどうにかなる訳じゃねえからなま、なんとかなるしょ」

「ハア：はやてちゃんの思い過ごしだったみたいですね…」

アルは腕を頭の後ろで組みつつ歩き出すとリインは疲れた様にため息をついた

「というわけなんですがお願ひ出来るでしょうか？」

「確かにそれならうちに頼むのが筋だな…」

ゲンヤと向きあったはやては一つの頼みをした、それは陸士108番隊によるレリックの密輸ルート of 捜査であった、地上の事は地上の部隊がよく知っているからだ

「こちらからはハラオウン執務官が協力します」

「わかった、ウチからはギンガとラッドを貸し出すか、ハラオウンのお嬢ちゃんならギンガもやりやすいからな」

「すみません、スバルや先輩だけでなくギンガもお借りしてしまつて」

はやては調査の人員について説明をするとゲンヤも人員を選別する協力してくれたことを喜びながらも申し訳なさそうに頭を下げるはやて

「気にすんな、スバルが自分で選んだ道でギンガも納得してる…：そしてお前さんにはアイツが必要だろ？」

「う…：それは、その…：はい…：」

「なんだ、まだアイツに言ってねえのか…：お前は端から見たらバレバレなんだよ
勢いつけていっちまったらどうだ？」

「む、無理です！言える訳ない…：って先輩に対しては憧れでしか無いんですよ！

だいたい私があんなちゃんぽらんを好きになりませんから！！」

「そうか？なら良いけどな…：そうだ、この後ギンガとアルを誘って飯でも食いに行くか？詳しい話もしときたいからな」

ゲンヤはからかうように言うとはやては言葉を詰まらせながら答える

ハアと深いため息をついてからゲンヤは言うど、はやては手遊びをしながら考えているとはやては噛みつく様に反論をすると、ゲンヤはその様子を見て微笑してからはやてに提案をしていく

「わかりました、では先輩に伝えてきますね？」

「ああ…：それとアイツ…：ちゃんとやってるか？」

「先輩ですか？はい！六課の皆の世話してくれて今では私達を支えてくれます！それじゃあいきますね」

「…いっちゃったか、しかしよ…八神、少し違うぞ
アイツはお前らを支えてんじゃねえ…お前らが逆にアイツを支えてんだよ、いつまで引きずる気なんだかな」

立ち上がってはやては外に行こうとした時にゲンヤに呼び止められると質問をされた

ゲンヤの唐突に聞かれた事にはやては少し嬉しそうに答えるとアルに会うために外に出ていく

はやてが出ていってからゲンヤはため息をついてから呟くと立ち上がり、デスクに立てかけてあった写真立てを手にとった

そこには今より若いゲンヤとにこやかに笑う毛先の白い赤髪の少年と黒髪の少女が写っていた

――

「あ、先輩！ここにいたんか…これからゲンヤさんがギンガと一緒に食事に行くって言うてるやけど先輩はどうするん？」

「むう…悪いが先に帰る、少しだけ調べたい事があってな…」

「そか、なら仕方ないやな
うん…わかった、ところでリインは？」

「リインならギングの所だ、話があるそうだから」

休憩室で休んでいたアルを見つけたはやてはゲンヤから誘われた内容を教えると、アルは少し気まずそうに返す

はやては残念そうに肩を落としてからここにいないリインについて聞くと、アルは短く答えてから立ち上がりはやての頭を軽く撫でると休憩室の入り口に歩いていく

「車は置いていくからな？一応こっちにバイクがあるからそれで帰るんじゃ楽しんで来いよ？」

休憩室を出ようとした時にはやてに伝えたとアルは手をブラブラと動かしながら外へと出ていく

陸士108番隊からバイクで帰ってきたアルはガレージにバイクを止めると、被っていたメットを脱いで隊舎入り口に向けて歩きだした
「ん？誰か待ってら：なんかデジャヴ感じるけど行くか」

辺りが暗い事と玄関の明かりで人の顔は見えないがシルエットが見えたアルは、昼間の事を思い出しながら歩をすすめる

「あ、アルさん、おかえりなさい」

「ただいま、誰か待ってるのか？なのは」

見知った声を聞いて誰かを判断したアルは相手の名前を言うのと近くまで歩いていく

「うん、アルさんを待ってたんだ」

「なんでまた？」

「今日…皆に話した結果報告かな…ちゃんとわかってくれて、ティアナなんて生意気な事考えてましたなんて言われちゃった…」

「そうか…どうだった？」

壁に寄りかかっていたなのはアルと向き合うように話すと用件を話し出した

なのはの言葉を聞いてからアルは今のなのはの心境を聞いて見ることにした

「アルさんの言う通り…ちゃんと伝えた方が良かったっておもった」

「ならそれで良いな、後は特にねえだろ？」

なのはは一旦うつむいてから顔を上げると今の気持ちに言葉にするアルはそれを聞くと短く答えてからなのはの横を通り過ぎていく

「ねえ、アルさん…聞いても良いかな？」

「ある程度ならな」

「物事には理由があるって言ったよね？」

ならアルさんも何か理由があって私達の間違いを正しているの？」

「…んなもん、ただの気まぐれだ…気にすんな…それじゃあもう寝るから」

アルが通り過ぎた時になのはアルを呼び止める、そしてゆっくりと語っていく

なのはから問いかけられたアルは黙っていたが光を背にしてなのはに答えると微笑を浮かべてから隊舎に入っていく

質問をしたなのはそこから動けずにいた、それは逆光を背にして笑った時のアルが、どことなく寂しそうに見えたからである

見間違いかもしれないそう思うのはには誰も答える事はなかった

EP13…言葉にしなきゃわからない時がある（後書き）

どうも、えのきです！

ようやく本編を進めることが出来ました

いかがでしたか？今回やったことはティアナ撃墜フラグの破壊です

正直な話しティアナ撃墜編はオリジナルでシナリオを作ってるので
ティアナをかまってる暇がないのです！

だから今回、破壊をしました、そして深まっていくアルの謎、それは
ホテルアグスタ編でわかります

それでは次回の更新を楽しみして下さい下さい

S. EP..やっぴりベストパートナー（前書き）

5万PV記念小説の続きです！

楽しんでもらえたら嬉しいです!!

S. EP.. やっぱりベストパートナー

アルが部屋で明日の事を考えていた時、ノック音が部屋に響いた

「誰だ？まあでりゃわかるよな」

シャワーあがりの頭を乾かしながらアルは扉の前まで行くとドアに手をかけて開けた

「はいよう、なんかご用っすか？」

「あっ！先輩、ちよつとええかな？」

「はやてか、構わないけど中にはいるか？」

ドアの向こうにいたのははやてだった、アルと同じく湯上がりなのか髪はしんなりしていた

とりあえず立ち話もなんだと思ったアルはクイツと指を部屋にさし言う

「んゝ…せやな、ならちよつと失礼させてもらうで」

少し顎に手を当てながらはやては答えるとアルの部屋の中に入ると部屋の中央に座る、アルはそれと向かい合うように座るとはやての言葉を待つ

しかしいつまで経ってもはやては喋ろうとしなかった

「はやて、用があつたんじゃないか？」

「えっ！？ いや…なんや緊張してな…何を伝えにきたか忘れてもうた」

「おいおい、大丈夫か？ 俺相手に緊張することなんか無いだろ」

話を始めないはやてにアルは首を傾げながら言うとはやてはしどろもどろしながら話しだす

アルは苦笑を浮かべながら手をパタパタと動かして言う

「せやけど、なんやろ？ 普段よりなんか雰囲気が違うからかな？」

「シャワー、浴びただけだがなあ…」

はやては目を細めながらアルの身体を見てるとため息まじりにアルは答える

「ああなるほど！ そうとわかったら、気にもならんくなったわ」

「お前なあ…んでなんか思いだしたか？」

「えっと、そや先輩に明日の予定を聞きたくてここにきたんや」

はやてはポンと手を叩いて納得をして笑いながら言うとアルはハアと疲れたようにため息をつくと投げやり気味に言う、顎に手を当てながらはやては考えると思いだしたように人差し指を立てて用件を話し

「明日？…特にねえな、なんだデートのお誘いか？」

「っな！？そんな訳ない：事もない、明日：帰るまで一緒にいてもええかなって聞いたかったんや：」

明日の事を聞かれるとアルはアハハと笑いながらちやかすように言う、はやては反論するように言うが途中で言葉を止めると少し手遊びをしながら気まずそうに言ってくる

意外な内容にアルは思わず言葉が出なくなり苦笑いを浮かべて黙ってしまう

「黙っとらんではつきりしてな！／／／
行くか行かないか！さあ！さあ！！さあ！！！」

「わかった！行くからオトモするから、離れてくれ！！」

気まずい空気が流れる中ではやては顔を赤くしながらアルに返事を迫ってくる

床を叩きながら迫ってくるはやてにアルは後退りをしていく、そのうち壁に追い詰められてしまうがそれでもはやては迫ってくるので、アルは思わず叫ぶように返答しながらはやてを手で静止する

「ならええんや！：って、うわわわっ！！」

：ア、アハハ：」

アルの返答を聞くとはやては迫るのを止めてふと、自分の体勢に気づくと脱兎の如く引き下がり苦笑いを浮かべて勢いよく立ち上がる

「と、ともかく伝えたで？明日は一緒にいる、ええな？ほな！！」

はやてはシュタつと勢いよく手を上げてからアルの部屋を後にする
はやてが去った後、アルは深いため息をつくと自分の顔を片手で覆う
だ…」

先ほどのはやてが迫ってきた事を思い出して顔を赤くして呟くと再びため息をつく

——次の日——

「寝不足DEATH…」

「早朝の挨拶からそれかいな…」

日が上がって朝食に降りてきたアルは目に隈を作って欠伸をしながら言う、はやては呆れたように返す
昨日の夕食は全員バラバラであったが今朝は全員、一緒にとることにした

アルは少し寝ぼけながら席につくとフラフラしながら箸を手にとる
「むう…眠い…この魚、味がしない…」

「なんでそんなに眠そうなん？ちなみに魚ちゃんからな、それ」

「昨日、どこぞの誰かさんが俺に詰め寄ってきたからな…頭に残って寝れなかった」

「んなっ!?! ずいぶんと根に持ってるんやな…もうええやろ…」

オカズを取ろうとしたアルはおしぼりを箸でつまむと口に含みながら不思議そうに言う

はやてはジト目でアルを見ながら呆れたように言うと言薄目を開けて明らかに不機嫌そうに返す

昨日の話を蒸し返しされてはやては拗ねたように答える

――

朝食を終えたアルとはやては水着に着替えて砂浜にやってきた

「水着に着替えてきたのは良いけど、なんで上着を着てんだ？」

「ひ、日焼け防止や…あんまジロジロ見んといてな…」

旅館から出てきたはやては上に少し大きめな上着を着こんでおり、アルの質問に身体を手で隠すようにしながら答える

「いやいや、はやてさんよ…水着を見られたくないって乙女心はわかるがそれは逆にエロチックだぞ? その上着から覗くあ、しゃぐう
!!」

「わかってるなら、それを堂々と言うな!!」
／／／

アルは苦笑を浮かべながら手をパタパタと動かしてはやての太ももを指でさして言おうとした時、はやてのアップーが顎に決まり言葉は途中で切れた

はやては肩で息をしながら何か言えば殴れるように身構える

「すみません、何も言わないです…だからその手を下ろして下さい」

「まったくせっかく誘ったんやから、ふざけるのも大概にしいや…私だけ緊張してるみたいやん…」

「あたた…はやて？どうかしたか？」

「なんでもない、ほな行こうか！」

はやての握り拳を見てアルは素直に頭を下げるとはやてはため息をついてからボソリと呟く

顎を擦っていたアルは頭に？を浮かべながら聞くとはやては問いかけに答えずにアルの手を取って浜辺へと走り出す

「海ときたら水泳！沖のブイまで競争や！！ちなみに負けたら海の家でなんかおごるってのはどうや？」

「良いけど、体力の差があるだろ
ハンデ…いるか？」

「そんなのは必要ない！真っ向勝負でいかせてもらうで！！」

浜辺にたどり着いたはやては周りを見渡してから海の沖に浮いてるブイを指して言う

浜辺とブイの距離を目算で測るとむうと一息ついてから、はやてに提案するとはやてはビシッと指をさして宣言をする

「…仕方ないな…後悔すんなよ？俺は加減しないからな」

「そっちこそ、負けた時の言い訳はそれでええんか？」

「ぬかせ、行くぜ…レディ…」

「GOーっ！！」

軽く準備運動をしながらアルは言うとはやては挑発するように答える
アルは短く返すと走り出す体勢をとる、はやても同じ体勢を取り二人は同時に海へと駆け出す

「「だありゃあああっ！！」」

さながら魚雷のようなスピードで二人はクロールで泳いでいく

時にはやてが抜かすとアルがそれを追い越す、そしてはやてがまた
追い越すその繰り返しだった

（はやてがここまで食らいつくなんてな…）「だが負けてらんねえ、
オウリヤアアアっ！！」

並走するように泳いでいるはやてにアルは苦悶の表情を浮かべると
帰り分の体力も無くするような勢いで加速をしていく

（なっ！？まだ余力があったんか！だけど私も負けていられへんな、
よっしゃ！）「行く、あうっ！？」

どんどん離されていくはやては自分も加速しようとした時に足に激
痛が走る
それが足がつったのだと気づいた時には、はやての身体は海の中に
沈んでいった

「はやて？…まさか、っ！」

ブイの間近までできたアルはスピードを落とすと、後ろにはやてがい
ない事に気付く、嫌な予感が頭をよぎると勢いをつけて海の中に潜
っていく

海中は昼間の日当たりのおかげで澄んで見えいた、アルは来た道を
戻るように泳いでいく、そして力なく沈んでいくはやてを見つける

と抱きかかえて浮上する

「ぷは！？はやて、しっかりしろ！おい！！」

「っ、げほ！げほ、げほ…ん、先輩？」

浮上して直ぐにアルははやての背中を叩いて意識を戻そうとする

二、三度叩くとはやては咳込みながら目を覚ます、アルははやての声を聞くとハアと安堵の息をもらした

「心配させやがって…ったく、戻るけど良いよな？」

「…うん、ごめんな？心配かけて…」

「アホ、命がかかってたんだ…んな言い方するな、次言ったら置いてくからな？」

はやてを背中に担ぐとアルはゆっくりと浜辺に向かって泳ぎだす

アルの背中に揺られながらはやては少し気弱そうに言う「アルははやてを叱りつけてから担いでいた手を少し強めに握る」

はやては苦笑を浮かべながらアルの背に寄りかかった

浜辺についたアルは一息ついてからはやてを下ろした

「その様子じゃ泳ぐのは無理だな…そうだな、着替えて来いよ散歩でもしようぜ？」

はやては返事をする元氣も無いのか肩で息をしながら頷くとよろけながら立ち上がり旅館に向けて歩きだした

はやてを見送ったアルは軽く辺りを見渡してから何かを見つけたのかはやてとは違う方に歩きだした

――数分後――

私服に着替えたはやては防波堤に寄りかかっているアルを見つけそちらに歩き出した

「着替え、完了や！待たせてしもうたかな？」

「特に気にしてねえよ、少しは元氣になったみたいだな」

「シヤマルにヒーリングをして貰ったんや…説教付きで…」

「ハハ、そいつは運がなかったな…とりあえずゆっくりできる場所見つけておいたから昼飯がてら行こうぜ」

はやては先ほどより元氣な声でアルに話しかけると防波堤に寄りかかっていたアルははやての顔色を見てから微笑し言う

はやては元氣になった時の事を話すと少しだけため息をついた、ずいぶんこつてり絞らたんだとアルは苦笑をして、足元にある買い物袋を指でさして提案をする

「そやな、それでええよ」

「んじゃついてこい」

時間を確認したはやては頷く、それを見たアルはニツと笑い袋を持つて歩き出す

――――

アルが案内をしたのは昨日レキ達が遊んでいた入り江だった

近くある流木に座りはやてに手招きをするとはやてはアルの横に座る

「ほいっと昼飯、って言っても適当に見繕ってきたやつだけだな」

「いや、ありがとうな…先輩…」

アルは手に持った袋を下に下ろすと中から入れ物に入った焼きおにぎりを取り出すとはやてに差し出す

はやては少し沈んだ口調で受け取ると中々、口をつけようとはしなかった

「どした？嫌いだっただか？」

「そうじゃないんよ、ただ私は先輩に迷惑をかけてるだけやなって思ってたんや」

せっかく誘ったのに大した事できへんし今だって何も気のきいた会

話できへん…こんなダメダメや…」

「はやて……とおりゃっ!!」

「あいった!! 何するんや」

顔をうつむかせながらはやては語っていく、苦笑をしながら自身を非難するとアルがはやての頭にチョップを降り下ろす

チョップはそのままはやての頭部に吸い込まれるように決まると、はやてはいきなり事にパニックになるが犯人がアルだとわかると恨めしそうに睨む

「まったく何を言ってるんだか…はやて、俺はお前に大した事しろとか気のきいた会話しろって言ったか? つうか俺には必要ねえよ…」

「せやけど、して貰ってばかりはイヤや

私も先輩に何かしてあげたいんや」

「なら普通にしろ、俺にとっちゃその方が良い

なんつうか…あれだ、俺はお前というだけでそれで十分だ

気を使わない普段通りの会話とか何気ないやりとり、それが良いな」

「ホンマにそんなんでええの?」

アルは呆れたようにはやての頭を小突きながら言うとすっぱりと答える

はやてはそれでも食い下がるようにするとアルは断言するように答えてから少し言葉を詰まらせながら答える、アルの答えにははやては

目を丸くしながら質問をする

「ああ、俺はお前と波長つうか相性が良いのか…気兼ねしないんだ、言っちゃえばベストパートナーなんだよ、誰かと組んだり一緒にいたりしてからお前と一緒にいると改めて思うんだよ
ああ俺にはコイツが一番合うんだなってな
だから下手に気取るのはかえって嫌なんだよ」

「うえっ！？そんなのはじめてや！一度も聞いた事あらへんよ！！」

「いってねえからな…んで、俺の言葉はわかったか？
だから普通にしろよ」

「あう…／＼卑怯や、そないな言い方…／＼」

アルは少し恥ずかしそうにしながら答えていく、今までまったく聞いた事ない答えにはやては驚きを隠せなかった

対してアルは開き直ったかのように答えると、はやての頭にポムっと手を置いてから言うとはやてはあまりの恥ずかしさに押し黙ってしまう

それから二人の間に沈黙が流れた、しかしそれは直ぐに破られた

「なら…普通に先輩に話しかけたりすればええんやな？
ふざけてたら砲撃とか撃ち込んでええんやな？」

「さすがに砲撃は勘弁して欲しいがそれで良いぞ」

「わかった…フウ、なんや必死に恩返ししようとした自分がアホみ

たいやな…ハフウ…気が抜けたら眠くなってきたわ」

うつむきつつアルの服の裾を掴むとはやては質問をする

砲撃の単語に苦笑を浮かべながらアルは答えると、はやては手を離してから一息つくと自傷するように言ってから欠伸をする

「寝ていいぞ？ 帰りくらいには起こすから」

「ならお言葉に…甘えさせてもらう…わ…」

うつらうつらとするはやてにアルは言うとはやてはそのままアルの身体に身を預ける

少ししてから静かな寝息が聞こえてきた

「必死に今日のプランでも考えてたのかねえ…寝る時間とか削ってさ」

「見事にアルが壊しましたがね」

「仕方ないだろ？ はやてらしくないのは見てたくないからな」

「わがままかと思います」

「承知の上だ…それにこの方がらしくて良いだろ？」

直ぐに寝たはやてに微笑気味に言うといーグルがツツコミをいれるアルはそれに苦笑をしながら答えると文句を言うようにいーグルは呟くと聞こえていたのかアルが答えるといーグルは黙ってしまったアルははやてを起こさない様に昼飯を食べると特に何をするわけも

なく海を眺めていた

はやてと過ごす何気ない一時が少しでも長く続けば良いと思いながら…

——おまけ——

「帰ってこないと心配して探してみればこれかよ…」

「まあまあ、二人とも幸せに寝てるから起こさないようにしようよ」

日がくれたした時、いつまでも帰ってこない二人を探していた六課メンバーは、入り江の流木に寄りかかって寝てる二人を発見した

アルに寄りかかって寝てるはやてと寄りかかられたまま器用に寝るアルを見て、ヴィータは苛立ちながら呟くとなのはがそれを抑える

「とりあえずどうやって運ぼうか…ザフィーラ、頼めるか？」

「承知した…」

ため息をつきながらシグナムはザフィーラに二人の運搬を頼むと同じようにザフィーラは頷く

「それにしても八神部隊長もアルさんも本当に幸せそうに寝てますね」

「アルの寝顔見てたらぶっ飛ばしたくなるけどな」

二人の寝顔を見てキャロが呟くとヴィータが腰に手を当てて言う
と全員が失笑した

S. EP..やっぱりベストパートナー（後書き）

どうも、えのきです！

いかがなものでしたか？

本編がシリ阿斯入る前にラブ成分とギャグ成分の補充が出来たら嬉しいかと

とりあえず5万PVが達成した事は本当に嬉しいです！

これの投稿時にはおそらく7万は越えてるんですけどね：

ともかくここまで夜天に舞い踊る荒鷲を見ていただきありがとうございます
ざいます

これからおそらく物語のターニングポイントに入ります、加速していく物語をお見逃しなく、そしてえのき作者の応援よろしく願います

次の記念は10万ですかね？：少し調子に乗りましたがそれくらいを達成出来るように励みます！

それではこれからもよろしく願います
では！！

EP14：予期せぬ邂逅（前書き）

いよいよ、ホテルアグスタ編でございます！

ギャグ中心な作品が一変するように頑張りますのでよろしくお願い
します

EP14..予期せぬ邂逅

そこは薄暗い空間で無機質な通路にカプセル型の水槽がいくつも並んでいた、その中には人らしきものが入っているのもいくつかあった

その通路の先にある広めな空間にその男はいた

紫色の髪の毛に白衣をまとった男は部屋全体に展開されたモニターを眺めて興味深そうに見ていた

「ふふふ、やはりこの部隊は素晴らしいな…プロジェクトFの遺産、タイプゼロ、エースオブエース…他にも有能な魔導士…」

そこに映されていたのはリニアレールで戦闘を行う機動六課の姿だった

「更に彼までいるとはね…ふふふ、中々興味深いサンプルが取れそうだよ」

「ドクタースカリエッティ…少しよろしいでしょうか？」

「おや君か…どうかしたのかい？」

白衣の男はモニターに映されたアルの姿を見て意外そうに言葉をもたず、するとカツカツと音を立てながら彼の後ろの通路から足音が聞こえる

そして彼の背後で足が止まった時、男に声かけられたスカリエッティと呼ばれた男は振り返って相手を確認すると友好的

な対応をする

そこにいたのは金色のショートカットで黒いベルカの騎士甲冑に身を包んだ少女だった、あどけない容姿とは裏腹の鋭い眼光は気弱なものなら萎縮するほどのものだった

「マスターからの伝言を預かってきました、用事があるから出るとの事です」

「ああわかった、しかし君たちが探しているものは今機動六課と言う場所にあると判明したんだがね」

「管理局の新部隊…それは本当なのですか？…」

「間違いないよ…目覚めているかは別だがね…」

スカリエッティの言葉を聞くと少女は握り拳をつくり力の限り握り締める

その瞳は怒りに満ちていた、そして少女はスカリエッティに背を向ける

「機動六課がどこにあるか教えて貰えますか？

私が貴方たちのアジトにくるのはあの子を探すためにすぎないのだから…」

「そうだったね、彼らは今ホテルアグスタに向かうそうだよ、クライアントからの情報だから間違いない」

「クライアント、ねえ…聞けば管理局の重役とか管理局の話しは信

じたくないけど仕方ないわね」

少女はスカリエッティを睨み付けるように言う。スカリエッティは仕方ないと言ったように答えると、少女の目がさらにきつくなる。

苛立ちを隠さずに答えるとスカリエッティに背を向けて歩きだす、それを見てスカリエッティは興味深そうに笑いだす。

「風と雷の戦いか：どうなるか楽しみだよ」

独り言を呟くとスカリエッティは笑い始める、その笑いは通路に不気味に響き渡った。

ミッドチルダ・ホテルアグスタ

自然に囲まれたそのホテルのロビーで柱に寄りかかる男性がいた、アルフィリオス・ラーゼンハルグである。

彼の服装は普段の六課の制服ではなくピシッとした群青色のスーツで髪は普段のぼさついた感じではなく綺麗にとか根元でまとめられていた。

そしてロビーにある時計を眺めると退屈そうにため息をついた。なぜ彼がこのような恰好をしているか、それは少し前にさかのぼる…

――数分前――

六課からヘリにて飛び立ったときになのはが今回の任務について詳細を説明しはじめる

「今回の任務はホテルアグスタの警備が任務だよ、アグスタではオークション行われてるから警備を厳重にして欲しいんだよね」

「まあ問題なきや楽なもんだ、気張らずにやれよ？」

「「「「はいっ!!」「」「」」」」

なのはの説明の後アルが手をプラプラと動かしてだらけた感じに言う
とフォワードメンバーは元氣良く答える

「それで、皆にちょっと報告があるんだ
ガジェットの背後にいる製作者が少しわかったから聞いて欲しいんだ」

「ガジェットの…」

「製作者…」

話しを終えた時にフェイトが軽く挙手をして全員にアピールをする
フェイトから話された内容にスバルとティアナは息を飲んで呟く

フェイトは少し大きめなモニターを展開すると一人の男性を映し出す、その男は紫の髪に白衣姿で医者か研究者のように見えた

「この男はジェイル・スカリエッティ、数年前から私はこの男を追ってるんだ」

違法研究で広域指名手配を受けてる、レリック収集やガジェット製作はこの男を線に入れて捜査を進めてる…これは私がやるから皆は頭にいれておく程度でいいから今回の任務に集中してね」

「「「「了解です!!」」」」」

フエイトは説明を終えると微笑みを浮かべて言う

アルは退屈そうに横目でモニターを眺めていると不意に袖を引かれた、引かれた方に目を向けるとセレスが少しだけ不安そうにしていた

「アル、私っていても大丈夫なのかな？」

「まだ正式に決まってるじゃないがお前も管理局員に登録は申請されてるから大丈夫だ、まあ基本はシャルとお留守番だ」

「うん、わかった

ちよっと退屈だけど私頑張るね!!」

不安気に聞いてくるセレスにアルは優しく頭を撫でながら答えると、反対側に座ってるシャルを見て言う「セレスは満開の笑みを浮かべて答える

「所でシャル先生の足元の箱ってなんなの？」

「あ、それ私も気になってました」

シャルの方に目を向けたセレスはシャルの足元に置いてある箱を指でさすと不思議そうにする

それを聞いて近くにいたキャロも同じように言う

「気になる？これは、はやてちゃん達とアルさんのお仕事着よ」

箱を持ち上げてシャマルは答えるとヘリの中にいた全員は首を一斉に傾げた

「内部警備でこんなの着ることになるとはなあ……うう息がつまる」

「フフ、先輩つらそうやな

居心地が悪いって顔に出とるで？」

「わかってんなら俺を外の警備に置いてくれよ……」

アルは襟元に手を当てながらため息をつくと後ろからはやての笑い声が聞こえる

その笑い声にアルは目を細めながら振り返るとそこにはドレス姿のはやて、なのは、フェイトの三人がいた

本来ならその姿に男性は見惚れるものだがそれを見ているのはアルである、特に気にする様子もなく肩を落とすとさすがにその態度に女としてのプライドが許せないのかはやてが噛みつくように詰め寄る

「って、この恰好に対して何もいわへんのかい!？」

「まあまあ、はやてちゃん何もそんなに怒らなくても」

「んー？似合ってるものに他にかける言葉があんのか？

あいにくと誉め言葉のストックがねえんでな：そうだな、強いて言うなら」

「言うなら？」

アルの目の前に立ったはやては自分の胸元に手を当てながら言うと、後から追いついたなのはがそれを宥める

アルは面倒そうに爪先から顔まではやての姿を見始める、まじまじと見られるのが緊張しているらしくはやては少しだけ後退りをした見終えたアルはお手上げのようなポーズを取りながら言うともう一度、見直して顎に手を当てて呟く

アルの呟きが聞こえたフェイトは小首を傾げて言葉を待った

「お前ら、化粧濃すぎだな：そんなのは、肌年齢が隠居した奴のやることだ

ナチュラルメイクが良いかもな：ほれ、さっさとついてこんかい今回はツーマンセルだろ、誰が来るんだ？」

「うあ、今いく、ちょい待ってな！！」

アルはビシッとなのは達を指でさすと背を向けて歩き出す、途中で止まると手招きをして呼び出すとはやてが慌てて、アルについていく

「…少し落として来ようか、フェイトちゃん」

「…そうだね、なのは」

二人がいなくなった事を確認したなのはとフェイトは先ほどアルに言われた所を直すために化粧室に小走りで向かった

――

フォワードメンバーは各自別れて警備についていた
ティアナは正面入り口、スバルはリインと外周、ライトニングはザ
フィーラと共に地下駐車場といった組み合わせで配置についた

地下駐車場のライトニングは不審な車や不審物が無いか探していた

「フェイトさんたちのドレス姿、凄く綺麗だったねレキ君」

「そうだね、それにしてもアルさんがちゃんとするか心配だな…」

「それって警備に慣れてないって事？」

「違うよ、逆に警備に慣れすぎてるからサボるかもしれないって事だよ、エリオ」

地下駐車場を歩いていたキャロは隣にいたレキに先ほど見たフェイト達のドレス姿の感想を言うと、レキは肯定をしながら少し不安気に呟く

その呟きにレキの横にいたエリオが不思議そうに聞くと、首を横に振ってからレキが説明をする

「レキ君はアルさんと警備任務をたくさんしたことがあるの？」

「僕じゃないよ、その時のアルさんのパートナーは姉さんがしてたんだ」

「お姉さん？レキ、お姉さんがいたんだ」

「7年前に事件で死んじゃったけどね……あ、でも大丈夫だから、寂しいってのはあるけど姉さんが信頼してるアルさんと一緒にいたらそんな気持ちにはならないし、ほとんど吹っ切れてるから」

キャロの質問にレキは少しだけ懐かしそうに答えると直ぐに肩を落としてしまう

エリオとキャロは質問をしたことに後悔をしていると、レキは慌てて訂正を入れて微笑を言う

先ほどとは違った表情にエリオとキャロは安堵の息をもらした

「レキはアルさんの事を信用しているんだね」

「うん、サボり癖のある上司だけど一番信頼してるよ、あの誰よりも強い意思とか……」

エリオの質問にレキは笑顔を浮かべて答えると別な所で警備をしているアルを思い描く

「へ、へ、ペブシっ!!…だれか噂してんのかね？」

「くしゃみ一回やからきつと悪口やね」

「あの地味に傷つく一言は勘弁して…」

アグスタの通路にいたアルはいきなりのくしゃみをしてから、不思議そうに首を傾げると隣にいたはやてが笑顔で言う「アルは肩を落としてため息をつく」

「つうか、風邪とかって心配はないのかよ？」

「なんとかは風邪を引かないいうからなあ…特に心配はしてへんよ」

「これは怒っていいとこだよな?…そうだろ？」

「暴力、はんたうい!それにしても何事も起こらんとええんやけどな…」

肩を落としていたアルは少し恨めしそうにはやてを見ると少し考えてからにこやかにはやてはいい放つ

アルはため息をつく「と手刀を作るとはやては少し小馬鹿にするように言う」と少しだけ不安そうに呟く、その瞬間イーグルが緊急通信を受け取った

《機動六課、各員へ南西からガジェットの反応あり！まっすぐホテルアグスタに向かってきます》

「口は災いの元だな…」

「言わんといてな…ともかく機動六課、内部警備の隊長陣以外は迎撃準備や！

シャル！前線のモニター、よろしくや」

《了解です！それとアルさん、セレスがアルさんに伝えたい事があるみたい》

緊急通信を繋げてきたシャーリーの報告を聞いたアルはやれやれといった感じにはやてに言う気まずそうな表情を浮かべながらはやては返答する

気を取り直したはやては前線メンバーに指示を出すとはりポートにいたシャルに管制を頼むと指示すると、通信モニターが開きシャルが答えるとアルに呼びかける

《アル、今ガジェット反応と同時に南東方向に融合騎の反応をキャッチしたの、もしかしたらお姉ちゃんかもしれないの…》

「本当か？…南東か…それだと俺はここを離れないといけない…はやて」

セレスの言葉にアルの表情は曇るが意を決したようにアルははやての方を見る

「うん、行ってもええよ、本当にライナなら保護をしないとアカン

からな」

「すまん…セレス、南東に向けて飛ぶぞ！

フォワードメンバー、俺はこれからホテルアグスタを離れる、いつ戻れるかわからん…無理すんな、以上だ」

《《《《《了解！！》》》》》

アルの決意を受け取ったはやては別行動を許可した

アルはセレスに指示を出して緊急通信を閉じるとフォワードメンバーに通信をつなぐ

そして簡潔に用件を伝えろと言葉をかける

その言葉に答えるようにフォワードメンバーは自信のある返事をするとアルは外に向けて走り出す

――――

屋外に出たアルの視界に屋上から飛び立つ緑の閃光が見えた、セレスであると確認をするとアルはイーグルに手をかける

「イーグルレイダー…セットアップ！！」

「スタンバイ！！」

赤き閃光となったアルはバリアジャケットと複合機関銃のイーグル

を手に空中に飛び上がり、セレスと平行するように飛行していく

「時間がおしい、セレス!!」

「わかった!行くよ、アル!!」

「「ユニゾン、イン!!!」」

「加速魔法で急行する!」

〈了解!我らに風よ、ウィンドブースト!!〉

平行していた緑色の閃光と赤色の閃光は一つになる、ユニゾンが成功した証にアルの髪の色は橙色になり目の色も黄緑になっていた

アルの指示にセレスは魔法を発動させる、発動した瞬間アルの足に風が渦巻きスピードがどんどん増していった

アグスタでの戦闘が始まりだした時、アグスタ南部にある崖の上に人の姿があった、マント姿で大柄の男性と男性のその手を握る子供がいた、男性のマントと同じマントを羽織り顔はフードで隠れていて見えなかった

二人はアグスタを見ていると目の前にモニターが突然、展開した
《やあ、騎士ゼストにルーテシア、少し良いかな?》

「…ドクター…どうかしたの？」

通信を繋げてきたのはジェイル・スカリエッティだった、ルーテシアと呼ばれた子供はフードを被ったまま顔を上げる

《実は少々欲しいものがあってね、良かったら手伝って欲しいんだが良いだろうか？》

「…わかった…ドクターの頼みなら、聞く」

《ありがとう、欲しいものは君のアスクレピオスに送っておくよ、それでは健闘を祈ってる》

スカリエッティが用件を話すとルーテシアは小さく頷いてから答える

微笑を浮かべながらスカリエッティは礼を述べると通信を切る、それと同時に彼女の手にはめられたグローブのクリスタルが輝きだす

「良いのか？ルーテシア、今回はレリックでは無いのだぞ？」

「良い…ドクターの研究の手伝いをすればレリックが集めやすくなるから」

「そうか…」

隣にいた男性、ゼストはルーテシアに確認をとるとルーテシアは短く返答する

そして彼女の足元に召喚魔法の陣が展開した

S I D E ..レキ

それはいきなりの事だった、副隊長とザフィーラがガジェットを迎撃しているときに僕らが守っている防衛ラインの前に紫色の召喚魔法の反応が出た

「これは召喚魔法!?!」

キャロの言葉とともに魔法陣からガジェット一型と三型が姿を表した、数こそ5／6機程だが魔法陣が消えて無いことから増援が来ることは明白だった

「エリオと僕でガジェットの迎撃、キャロはティアナさん達を呼んで!」

「任せて!行くよ、レキ」

「うん、直ぐに呼ぶから二人とも頑張っ!」

エリオとキャロに指示を出すと僕はファフニールをシフトSでガジェットの群れにエリオと共に突っ込む

「ソードダンス!!」

「スピアアングリフ!!」

僕は双刃剣で踊るように切り払うその後ろで、エリオがストラーダ

でガジェット2体を貫通させていた

攻撃を終えて背中合わせになりながら構えていると上からガジェット三型のアームが降り下ろされた

「エリオ！二回目の交戦だけどやれるよね？」

「うん！あの時より僕たちは強くなってる！だから今度は楽勝だよ！」

「その意気、コンビネーションで仕掛けるよ！」

三型のアームをかわした僕はデバイスを構え直してから、エリオに聞くと自信のある返答に僕は微笑した

そしてエリオに指示を出してガジェット三型に向かって大地を蹴る

「わかった！ストラダー！！」

「行くよ、ファフニール！！」

「いけえええっ！クロス、グレイブ！！」

エリオは首を縦にふるとカートリッジを二発ロードする、僕も同じようにカートリッジをロードするとガジェット三型にコンビネーション名を叫びながら仕掛ける

最初にエリオが雷を刃に纏わせてガジェット三型を真っ正面から下から上に向けて切り上げる、エリオをそのままソニックムーブでガジェット三型から離れる

それに続くように僕がファフニールで右から一閃するとシフトSからシフトAに切り替えてエリオと僕の切口の交わってる部分に向けてシフトAの砲撃を打ち込む

ガジェット三型は大きな風穴を空けて爆散した

「よし、じゃあ次は一型を「ディバイーン、バスター!!」スバルさん!？」

《あんたら怪我とかない!?!》

「大丈夫です! ティアナさん! !」

自分達の背後にいる一型を片付けようとした時、ガジェット一型の一団を飲み込むように青い色の砲撃魔法が放たれる、ガジェットが爆散したと同時にスバルさんが到着しティアナさんから連絡が入るティアナさんの連絡はエリオが答え、僕たちの間に安堵の空気が流れたがそれは直ぐ様破られた

《召喚魔法の反応が三つ!! みんな、気をつけて次のガジェットが来るわ!》

シャル先生の言葉と共に地面に三つの召喚魔法の陣が展開する

スバルさんとエリオが身構えると僕は一步離れてファフニールをシフトBに切り替える

魔法陣が強く輝いた時、先ほどと同じ編成のガジェットが三つの魔法陣から現れた

「こんなに出さなくて良いのになあ…エリオ、レキ行けるよね？」

「はい！」

「もちろん！！」

《三人とも！ヴィータ副隊長がこっちに向かってきてる、それまで何とか持たせて！！》

スバルさんのうんざりした口調に微笑を浮かべながら、僕とエリオは返答するとティアナさんが通信を入れてきた

だけど、このまま続けるのは不味いと悟った

ガジェットは倒したそばから次々と出現していく、減らすより増えるスピードが早くこのままじゃ突破される

（アルさんの魔法なら閉じ込められたんだけどな…）

ガジェットを倒しながら僕はそう考えた、だけどあの人は僕らに任せたんだ、呼び戻す真似はしたくない

そんな時に僕はふと昔の事を思い出した、アルさんの部下になって間もないころの話だ…

次元犯罪者を捕縛する任務を請け負っていたアルさんと僕、当時は今のような信頼関係はなかった姉さんから話しは、聞いていたがこんな不真面目な人が姉さんのパートナーな訳がない

そう思い手柄を立ててさっさと離れたかった僕は罨の有無を確認せず
に次元犯罪者に突撃した

その結果、簡易的な転移魔法で呼び出された魔獣に囲まれてしまった
焦りと死の恐怖から僕は自分の魔力変換資質を発動させた、重力変
換資質：それが僕のスキル、炎や雷とは違い扱いにくく威力が強
すぎて管理局でも使えたものはいないその事はアルさんに言われて
いて理解はしていた、だけど…生き残りたい…そう考えた時、スキ
ルは暴走した

気がついたら僕は病院のベッドの上に寝ていた、隣にはアルさんが
いた

『まったく、無茶しやがって…苦勞したぜ、助けるのにさ』

『ごめんなさい…今度は上手くやります』

『いや、次も失敗するな…今のままじゃな…』

ため息まじり言いながらもどこか安心したようなアルさんに僕は素
直に頭を下げた

アルさんは僕の頭を撫でるとはっきりとした口調でいい放つ

『封印、ですか？』

『まあな、ただどリミッターをかけるだけでお前がちゃんと扱える
くらいになったら外す…』

『扱えるようになったら、ですか…自信ないです』

『自分の背中に乗っかってるもんがわかれば使えるようになるさ、まあなんとかなるから頑張れ』

アルさんの下された処置に僕は肩をおとしながら言うところアルさんは席を立ち病室の入り口に向かいながら僕に笑いかけてくれた

――――

あの時の言葉…少しだけわかる

今自分の背中にあるのはキャロやフォワードのみんな、守りたい人達がいる

あの時は一人で不安で信じられるものなんてなかった…だけどいまは違う！

「ファフニール…アルさんには言っていないけどスキルリミッターを外してくれないか？皆を守りたいんだ」

「レキ、俺にはじめからリミッターなんてついちゃいねえよ」

「どういう事？」

「アルフィリオスが言ってたんだよ

スキルだけ封じるなんてリミッターは存在はしねえ、嘘でも言っておけばお前は使わないだろうってさ

んで言い付けを破るくらいの決心がついたら話してくれって言われてたのよ」

ファフニールの言葉に僕は驚いた、アルさんは僕がそこまでやると

信じていてくれていたのだから、同時にあの人に見抜かれてた事に可笑しく思えた

そして僕は双銃形態のファフニールのグリップを握りしめて目の前のガジェットを睨み付ける

――――

「スバルさん！エリオ！…少し考えがあるから下がってもらえる？」

「レキ、でも今下がったら…」

「大丈夫、上手く行けばここから先にはいけないから」

「信じていいんだね？」

「もちろん、任せて下さい」

レキの突然の提案に二人は目を丸くするがレキの表情を見て後ろに下がる

レキは双銃の銃口を地面に向けて身体前でクロスさせると精神集中を始める

「ファフニール…重力レベルは＋…相手を引き寄せる、カートリッジは二つ…」

「了解、演算開始…ツインロードカートリッジ…重力レベル＋に固

定…演算終了、発射スタンバイ」

レキの眩きと共に彼の身体から紫色の雷が発生し足元の小石や土が浮かび出す

フアフニールの銃口に黒い色の魔力が収束していき拳より一回り大きい魔力スフィアを作り出す

準備が完了したのかレキはゆっくりと銃口をガジェット達に突きつける

「グラビティバレット…シュート!!」

レキは魔法名と共に引金を引く

勢い良く撃ち出された魔力スフィアはちょうどガジェット達にいる真ん中に到達すると停止してだんだんと大きさを増していく、それと同時にガジェット達は魔力スフィアに引き寄せられていく

レキが撃ち出したグラビティバレットは予め指定した物体を引き寄せる能力がある、指定してないものでも近づけば引力によって引き寄せられてしまう

引き寄せられたガジェット達はまるで団子のようにまとまっていく

「フアフニール！重力レベルー

グラビティバレットもろとも破壊する!!」

「了解!! 重力レベル十から一に変換、ツインロードカートリッジ!!」

レキは再びファフニールを構える、グラビティバレットには欠点がある

それは一度、発動すると消失するまで時間がかかりその間も範囲が拡大していくという欠点であった

レキは範囲が拡大しアグスタに被害を出す前に反対の属性を拡大するグラビティバレットと同じ威力で相殺するためにファフニールを構えたのであった

カートリッジをロードしたファフニールの銃口には白い魔力スフィアが形成されていく

「碎け！グラビティバスター！！」

魔法名と共にファフニールの銃口から白い砲撃が放たれる、一重力つまり斥力が付加された砲撃はグラビティバレットの中に吸い込まれるように入ると白い閃光が辺りを包み激しい爆発を巻き起こす

少し離れた所で見ていたスバルとエリオは慌ててレキの所に走り出す

スバル達が到着するとレキは地面に片膝をついて息を荒くしながら呼吸をしていた

「レキ、大丈夫？」

「少し魔力の負荷が大きかったただだよ…なんとか成功したみたいだ…」

かけよったエリオはレキに寄り添うと安否を確認するとレキは微笑を浮かべながら正面を見る

そこには爆発したような後とガジェットの残骸が散らばっていた、今度は失敗をしなかったレキはそう思いながら安堵の息をもらした

「まだ戦闘は終わってない、二人とも頑張ろう！」

「うん!!」

エリオに支えられてレキは立ち上がると息を整えてから掛け声をする

――

アグスタから飛び出したアルは反応のあった地点に降り立つとユニゾンを解除した

アルの胸から緑の閃光が出てくると光は人の形となり弾けて消え騎士甲冑をまとったセレスが現れる

「この辺で良いのか？」

「うん、確かこの辺だと思うの」

二人が辺りを見回していると物音が茂みから響いた、アルはイーグルを構えセレスはいつでもユニゾン出来るようにし茂みに視線を注目した

「セレ、ス？セレスよね？貴女：」

「お、姉ちゃん：ライナお姉ちゃんっ！！」

茂みから出てきたのは修道服のような服を着た金髪の少女だった、セレスを見て驚いた口調で言うと、セレスは涙ぐみながら少女の名前を言いながら抱きつく

「良かった：無事だったんだ、私凄く心配したんだよ？」

「私もよ、ごめんね：直ぐに見つけようと思ったんだけど目が覚めて遺跡にいったら既に誰かに運び出された後だったから：無事で良かったわ、所であの人がセレスの主？」

「そうだよ、アルフィリオス・ラーゼンハルグって言うの！ちゃらんぽらんだけどいい人だよ」

「そう：はじめまして、迅雷の戦姫ライナです、セレスの保護ありがとうございます」

泣きつくセレスを優しく抱きしめながらライナはアルの方を見て聞くとセレスは満開の笑みを浮かべて答える

ライナは短く返すとアルの所にいき軽く頭を下げる

「いや、こちらも助けられてるから気にするな：それよりここは危ない、ついて来てくれないか？」

「いえ私はセレスに言わなければならぬことがあります：だから

…」

「お姉ちゃん？どうしたの？」

アルは軽く手をあげて答えるとライナにアグスタに戻ると告げるがライナはその場から動こうとせずうつむいてしまう

セレスは心配そうにライナの側にいき不思議そうに質問をするというイナはゆっくりと顔を上げてすがすがしい程の笑みを浮かべた

「貴方は、ここで死んでください…アルフィリオス・ラーゼンハルグ」

「何を、っが！？」

ライナの突然の言葉にアルはイーグルを構えようとした時、腹部に激痛が走った

突然の事に混乱しながらも腹部に目を向けると鋼色の刃が腹部を貫通していた、その証拠に刃には鮮血が滴り落ちて地面に染み込んでいた

「てめえ…いつの間に…」

「ふん…」

気が飛びそうなのを耐えながら後ろをみると仮面をつけた男が長剣を手に立っていた

男は答える事なく剣を引きぬくとアルを背中を蹴り飛ばす

立つのもやっとなったアルは重力に任せるまま倒れ込む

「ア、アルっ!!?」

突然の事に思考が追いつていなかったセレスはアルが倒された事により意識を覚醒させ力の限りアルの名前を叫んだ

EP14…予期せぬ邂逅（後書き）

どうもえのきです！

いかがでしたか？中途半端じゃないかって思うかたがいますがそれは次回を楽しみしてほしいという作者のわがままです

では久しぶりに次回予告まいります！！

レキ「僕は貴方を信じていた、だけど貴方のしたことが本当なら僕は何を信じればいいんですか！？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP15…碎ける絆
にテイクオフ…お願いだから嘘だと言って下さい」

次はギャグ無しのシリアス小説です、お楽しみ

EP15.. 碎ける絆（前書き）

シリアス第二回目でございます！

作者も少しギリギリで作ったので読んで貰えたら嬉しいです

EP15.. 碎ける絆

SIDE.. アルフィリオス

ライナの笑みを見た時言い表せない悪寒が走った、しかしそれより早く俺の身体を激痛が貫いた

「てめえ…いつの間に…」

「ふん…」

突き刺さる長剣は後ろから刺されたものだとかわりそちらを向くと、黒いマントを羽織り仮面をつけた赤髪の男が鋼色の長剣を手にしていた

剣を引き抜くと俺の背中を蹴り飛ばす

突然の事に俺は身動きが出来ずに地面に倒れこむ

「アル！しっかりしてアル！！」

セレスの叫び声が耳に木霊する、なんとか立とうとするが痛みで起き上がれなかった

「ダメよ、貴女は私と一緒にいましょ」

「ふざけないで！アルに何するの！？」

アルに駆け寄ろうとしたセレスは急に手を捕まれる、振り返るとライナがセレスの手を掴んでいた

セレスは手を振り払うと怒りをあらわにしながらかぶ

「私としては即死を希望したのだけど…マスター…何故殺さなかったのですか？」

「殺したらセレスが眠りについてしまっただろ、お前達はマスターが力尽きれば眠りにつく…それは避けたかったのだな」

「そのような心づかいを…ありがとうございます」

「…人の目の前で物騒な話をしてんじゃ、ねえよ…」

ライナは残念そうにいうとセレスの背後からアルを蹴り飛ばした仮面の男の声が聞こえ、セレスは思わず身構える

「ほう、まだ意識があったか…しぶといな」

「あいにくと、頑丈さはフロントアタッカーの売りなんで…」

「どうやらもう少し痛めつけないといけないらしいな、しかしそれは俺の役目じゃないんでな」

「何を言って、っ！？」

アルは体を起こしてイーグルを構えると仮面の男は意外そうに言う

がハッと笑い飛ばす、言葉の真意を問おうとした時アルの足元に魔力弾が撃ち込まれる

慌ててかわしアルは魔力弾を放たれた位置を見るとマントを羽織った魔導士が立っていた、構えた黒い双銃をアルに向けると魔力弾を連続で発射していく

アルは腹の傷を気にしながらも魔力弾を回避していきイーグルを向けて反撃をする

魔力弾同士がぶつかり小規模ではあるが爆発が起こりアルの視界は爆風によって封じられた

「ハアアアっ!!」

「ぐっ!? うぐあっ!」

「アル!? つく、離して!」

視界を包む爆風を纏いながら魔導士をアルに接近すると傷口に魔力で強化した鋭い蹴りを打ち込みアルを弾き飛ばす

木に叩きつけられたアルにセレスは駆け寄ろうとしたが仮面の男に腕を捕まれ抵抗するが力の差でどうしようもなかった

「セレス、マスターの手を煩わせてはダメよ、大人しくしなさい」

「お姉ちゃん! どうしてアルにヒドイ事をするの!? アルがお姉ちゃん達に何をしたって言うのさ!」

「理由ならあるわ…その男、いえ管理局は私にとって悪しき存在で

しか無いの…セレス、私はね…貴女に出会うまで管理局の施設で実験動物のように扱われてきたの」

「え…そんな…事って」

やれやれと言った感じにライナは言うのとセレスは抵抗をしながら叫ぶ
ライナは厳しい眼差しでアルを睨み付けながら答えると自分にされてきた事を話す、聞かされた内容にセレスは信じがたいという表情を浮かべた

「残念ながら本当よ、セレス…私達の機能は魔導士にしてとても理想的なの

魔力の波長さえあれば誰でもユニゾンが出来るまさに夢みたいな機能…管理局はその機能をフルに活用するために私に様々な仕打ちをしてきたわ…

いっそ壊れてしまえば楽だと思うくらいにね…だから私は管理局を破壊するためにマスターと一緒にいるの！」

「お姉ちゃん…そんな事があったなんて」

「セレス、私は管理局を破壊したいのと同時に貴女を助きたいの…貴女がこのまま機動六課にいれば私と同じ目にあうわ…そんなのは我慢出来ない…だから、さあ」

ライナの言葉にセレスは力なく地面に座り込む、ライナの瞳には恨みと怒りの色が浮かんでいたからだ

ライナは優しそうに微笑みを浮かべるとスッと手を差しのべる、しかしセレスはそれを握るのに躊躇っていた

「お姉ちゃんの言うことは本当なのかもしれない…だけど私はアルやはやてさんを信じたい!!」

「そう、だけどセレス…あの男は貴方が思うような男では無いわ、ねえ…レナ」

「レナ…だと?」

「気安く名前で呼ばないで欲しいわ…アルフィリオス…貴方は私を殺したんだからね」

セレスは自分に向けられた誘いを振り払うように答えるがライナは落胆したように答えマント姿の魔導士に視線を向けて呼びかける

レナと呼ばれた魔導士にアルはまるであり得ないといった表情を浮かべると魔導士は冷たくいい放ちフードを取り払う

フードから見せた顔は女性で夜のような色をした黒い長髪に血のように赤い目は戦慄を覚えそうな視線だった、その場がシンと静まり返ったようになる

しかし静まり返ったその空気を破ったのはアルでもセレスでもなかった

「姉さ、ん?…なんで姉さんがいるんだ?それに今の言葉はどういう意味なんだ!?!」

「レキ…なんでここに」

アルの支援の為に駆けつけたレキだった

アルの呼びかけにレキは答える事はなくレナに視線を向けていた

レナの本名はレナ・アーベント、レキの実の姉で七年前に事件によって死去していた

死んだはずの人間がいることとその死んだ原因にレキはただ力なく腕を下ろすと握り拳を作り出す

「姉さんが死んだのは事件での不慮の事故…なんでアルさんが殺した事になっているんだ!!」

「レキ、私は不慮の事故では無く殺されたのよ…アルフィリオスの手によってね…っ!?!」

「でえらあっ!!イーグル!」

「ソニックムーブ!!」

レキの問いに銃をアルに突きつけながらレナは答えると隙についてアルはレナの顔面目掛けて蹴りを放つ

レナは寸での所でかわすと銃の引金を引くがアルはソニックムーブで仮面の男のどこまで移動をするとセレスを奪還してレキの側に移動をする、突然現れたアルにレキはファフニールを突きつける

「答えてください!?!今の言葉の真意を!貴方は姉さんを殺したんですか!!!」

「……そうだ、俺はレナを殺した…」

「「っ!？」」

突きつけるファフニールの刃は怒りと戸惑いで震えていた、アルはそれを見てからセレスを地面に下ろすとレナの言葉を認めた、予想外の回答にレキとセレスは言葉を無くしたが我に返ったレキはアルに掴みかかる

「貴方と言う人は!？」

「今お前がするのは俺を斬る事じゃない…セレスをつれて逃げる事だ…」

「っ誰がアンタの言うことを聞くか!！」

「俺の言うことより仲間の事を優先しろ、アイツらはセレスを狙ってる…それだけはさけなくちゃならねえ、ちゃんと戻るから斬るなりなんなりはそっからにしろ」

掴みかかるレキをアルは片手で静止をすると撤退するように指示を出す

謝罪や反省の色が無いアルにレキは怒りをぶちまけるように返すとアルは目の前のライナ達に視線を向けながら答える

「……ファフニール、ソニックムーブ…」

「……行ったか…さてとやるか」

「一人で私たちの相手をする気なの? 只の犬死にでしかないわね」

「…レナ、お前も引け」

レキはセレスの腕を肩に担ぐとアグスタに向けて移動をした

レナはイーグルを構えるアルに冷笑を浮かべれば銃口をアルに向けるが後ろにいた仮面の男が突然、レナに指示を出す

「アルファ！ どういうつもり！？ 私はまだやれるわ！！」

「お前の体は動いてから日数が経過していない、以前のように動けば再起不能になるぞ…」

「つく…わかったわ、アルファ」

アルフィリオス…お前は必ず私が殺してやる」

突然の事にレナは慌てながら聞くとアルファと呼ばれた仮面の男は、撤退の訳を説明しはじめる

理由を聞いて悔しそうに唇を噛むと、レナはアルに指をさしてから宣告をするとアグスタとは逆方向に飛翔しいなくなる

その場にはアルとアルファ、そしてライナが残った、アルファは手首をならすとアルに視線を向ける

「さあ、やろうか…っ！」

「イーグル、リッパーだ！！」

言葉をいい終えると共にアルファは地面を蹴ってアルの懷に飛び込むように接近をする、アルはイーグルのブレードを展開するとそれに受けてたつように構える

その瞬間、鈍い金属音が辺りに響いた

アルファが手に持っていた片刃のロングブレードで縦に一閃すると、アルはイーグルのブレードの根元を引きグリップを出すとトンファーのようにイーグルを構えてブレードを受け止める

一撃が重かったのかアルの足は地面にめり込む、ギリギリと金属音が響く中アルファはロングブレードを引くとアルの傷口を狙い蹴りを放つ

「ぐあっ!?! っならう!?!」

止血魔法で辛うじて止めていた傷口は再び開き鮮血が宙を舞う

アルは踏みとどまると反撃をするために地面を蹴る

空中に踊り出たアルはイーグルのブレードで右から風ぎ払うように振るう、アルファはそれをなんなくかわすと打ってこいといわんばかりに片手で手招きをする

「なめるなっ!?!」

アルはまるで嵐をも彷彿とさせるくらいに連続で攻撃をアルファに放っていく、ブレード、蹴り、拳、射撃、ありとあらゆる攻撃と様々なバリエーションで放っていくがアルファは最初からわかってるかのようにかわしていく

「ならコイツはどうだ!?!」

「バカの一つ覚えだな」

「そいつはどうか？イーグル！！」

中々当たらないアルファに苛立ちを隠しながらもアルはもう一度、初撃のように右から一閃をする

アルファは余裕でかわすがアルの攻撃はまだ終わりではなかった、かわしたアルファの腹部、目掛けて肘うちのように腕の位置を変えるとそのまま懷に飛び込むように前進するとイーグルのステーキが打ち出される

「つく！…ふふ、まさかそんな手を使うとはな」

「ステーキはイーグルの意思でも打てる、カートリッジはロード出
来ないけどな…」

「なんでか知らないがてめえにはパターン知られてるみたいだな…」

「ふ…やはり生身での戦闘はこれくらいが限界か…使わせてもら
うか、なあアサルトホーク！」

ステーキを腹部に食らったアルファは軽く笑みを浮かべると立ち上
がるとポケットから指輪を取り出すと右手の中指にはめると血の色
に似た真紅の魔力光が辺りを包んだ

「アサルトホーク、セットアップ！」

「イエス、マイマスター」

無機質な電子音声とともにアサルトホークは待機状態から戦闘状態に移行する、アルファの体はアルと同じような黒いロングコート型のバリアジャケットに身を包むと右手にひし形の赤い楯が展開され腰には鋼色の鞘が展開する

魔力光を切り払うとアルファはロングブレードをアルに向ける

「さあ、ここからが本番だ」

その言葉と共にアルファはロングブレードを振りかぶりアルに飛びかかる

――

ホテルアグスタまで移動していたレキの頭の中は処理しきれない量の情報にパンクしかけていた

何故、レナが生きているか

何故、レナが死んだ原因がアルなのか

何故、アルはそれを認めたのか

考えてもわからない情報にレキは足を止めてセレスを下ろすと地面を思いつき殴りつける

信じていた、いい加減だけど仲間思いなアルを

信じていた、いつも話題の中心になり皆を笑顔にしていたアルを

信じていた、レナが想いを寄せていたアルを

だけどそれは突然の事実により揺らぎだした、やりきれない思いと何も出来ない自分に嫌悪したレキは

「うわああああああっ!!!」

力の限り叫んだ、すべてを忘れるように只の一時しのぎでしかないが今のレキにはそれしかなかった

隣にいたセレスも同じだった、ライナが受けてきた仕打ち、行ってきた管理局、そしてアルのした事…すべてが信じられないセレスはただ力なく項垂れるしかなかった

二人はヴィータ達が来るまでずっとそのままだった

その戦いは熾烈を極めていた

デバイスをセットアップしたアルファはソニックムーブによりアルを何度も強襲していく、アルも同じようにソニックムーブで応戦する

「だああああっ!!!」

「うおおおおっ!!!」

激しい金属音が辺りに響く、刃と刃がぶつかるたびに火花を散る

アルファの降り下ろされる刃に躊躇いはなくアルの命を奪おうとする

アルはイーグルのブレードでアルファの一撃を防いでいくが徐々に押されていく

「本当にしぶとい奴だっ！とつとくたばれっ！！」

「生憎と簡単にやられんのはごめんなんで、なっ！！」

「ぐあっ！？」

中々倒れないアルに苛立ちを覚えたアルファは楯で体勢を崩しロングブレードにて一閃しようとするが、アルはイーグルの銃身で楯の軌道を反らすとアルファの顔面に向けて足を蹴りあげる

その瞬間アルファの仮面が外れ地面に叩きつけられ砕け散る

「仮面が取れたみたいだな…さあ、てめえの面を拝ませてもらうか」

「くく…良いだろう、なら見るが良い…俺の素顔をな」

「っな！？…そんな、バカな…俺と…同じ…顔だと」

地面に落ちた仮面を見ながらアルはイーグルの銃口を突きつけながらアルファに言う

アルファは薄気味悪く笑うと手で覆っていた顔をアルに晒す、隠された顔を見てアルは驚愕の表情を浮かべた

仮面で隠れていたアルファの顔はアルと瓜二つであった

「不思議そうだな…それもそうだ、同じ顔が二つも有るわけ無いのだから…だがこれは貴様のせいだ」

「俺のせい!？」

「ライナの話しを聞いてなかったか？」

ライナは管理局の施設で実験動物のような扱いを受けていたとな…貴様は疑問を感じなかったか？

ライナはセレスと同じ融合騎、波長が合うものがいなければ目覚める事は無い…ならば何故目を覚ましたか…」

アルファは指をアルに向けながら言い放つとアルは身構えながら聞く

アルファはライナの話しを語っていくとアルは一つの仮定にたどり着いた

「波長が合うものがいた…まさか」

「そうお前だ…管理局の奴らはデータベースにある魔力の波長をライナに浴びせ、起動を試みた

その結果、貴様の魔力はライナの波長に合うものだった

ライナの能力を解析し詳しく調べるにはモルモットが必要だったそれが俺だ、わかるか？俺はお前のクローンなのさ」

「クローン…バカな今の技術でクローンなんて出来るわけないだろ!？」

語られていくアルファの言葉にアルは否定をするしかなかった

それでもアルファの言葉は終わる事はなかった

「プロジェクトF：まあ名前をしまったところで貴様には関係ないな…俺は貴様に復讐をする

貴様さえいなければ俺はアルファという不名誉な名前やあんな地獄を味わう事はなかったのだからな…

だが同時に感謝はするさ、ライナに引き合わせてくれた上でこの手で葬る事が出来るのだからな!!」

「マスター、遊びはもう終わらせましょうか」

「ああ、そうだな…行くぞライナ…」

「了解です…」

アルファが語り終えたところでライナが彼の前に立つ、アルファは頷くと顔に狂気が宿らせた

ライナの身体が黄色い閃光に包まれるとアルファの身体に入っていく、ユニゾンである

「「ユニゾン、イン!!」」

閃光が身体の中に入ると魔力が爆発するように膨れ上がり、アルの目の前にはユニゾンし髪の毛が金色になったアルファが立っていた
ユニゾンしたアルファはロングブレードを真上に掲げると辺りが曇り出し雷が落ち始めた

「見るがいい!俺たちの恨みの一撃を!迅雷の戦姫ライナとユニゾ

ンしたアルファの力をな!!」

「つく…!？」

「受ける! 狂雷!!」

アルファの言葉と共に雷の音が増していく、彼らの怒りに呼応するかの様だった

そして青色の雷撃がロングブレードに落ちると魔力と融合し力を上げていく、魔法名と共にアルファはロングブレードにまとった雷撃をアルに向けて撃ち放つ

砲撃魔法とは比べる事の出来ない威力の魔法、まるで空間攻撃クラスの魔力波にアルはなすすべもなく飲み込まれた

轟音と衝撃が辺りを包み込む、戦いが行われていた場所にはアルファしかおらず、目の前にはまるで削り取られたような後が出来ていた

「死んだのでしょうか?」

「いや…生きているだろうな…勘だがな、アルフィリオス・ラーゼンハルグ! 今日はここまでだ、次に合間みえる時には貴様を殺す…せいぜい生き長らえると良い!!」

身体の中にいるライナにアルファは答えると何処かに隠れているであろう、アルに宣言をするとその場を去っていく

アルファがいなくなった後消し飛ばされ、黒ずんだ大地からアルが這い出てくる、寸での所でソニックムーブを使い地上に降りたアル

はステーキを使い地中に隠れた

そしてアルファがいなくなった時に出てきたのである、しかし完全に避けきれなかったのかアルの右肩のバリアジャケットは消しとんでいた、さらに傷口から溢れる血のせいで意識は朦朧としはじめていた

アルは膝をつくとそこには砕かれたアルファの仮面があった、そしてアルファの自分への恨み、管理局への恨みが頭に再生されるとアルは仮面の破片を更に砕く

「ちくしょう…血を流し過ぎたか…セレス達…ちゃんとアグスタに、ついたよな？」

アルは倒れ込むと悪態をつきながら撤退したセレス達の心配をする
と意識を手放した

そしてアルファの作り出した雷雲から雨が降り始めアルの傷だらけの身体を容赦なく雨は打ち付けていた

EP15..砕ける絆(後書き)

どうもえのきです！

ぶっちゃけテンションが上がらずに書き上げが遅くなりました、シリアスが苦手なのででもストーリーの起伏には重要なので次回も頑張りたいと思います

次回予告

セレス「奏でる音がずれる時、それは酷く不快な音となる…ずれた音は簡単には直らない
わからないよ、私はこれからどうすれば良いのかな？

次回、魔法少女リリカルなのはStrikeS(夜天に舞い踊る
荒鷲)

EP16..不協和音

今、歯車が狂い出す」

EP16：不協和音（前書き）

シリアス全開な感じでお送りします

今回の話でアルさんの株が暴落するかとされます

最後にお知らせがあるのでしつかり最後まで見てください

EP16…不協和音

ホテルアグスタでの戦闘から三日が過ぎた、機動六課にいつもの賑わいは無く何処か重苦しい雰囲気があったよっていた

「ハア…何か気が滅入るよね…」

「スバル、気持ちはわかるけどシャンとしなさい」

「だってさ、こんなに雨が振る中でデスクワークなんて出来ないよ」

スバルは外を見ながら退屈そうにため息をつく、横にいたティアナはそれを注意をすればスバルは窓を指でさしながら答える

スバルの言葉どおり外では大粒の雨が降り、もう三日も続いていた

「アグスタからずっとね…わかる気もするけどやるべき事はしなさい」

「わかったよ…あ、エリオ、キャロ！」

「ってスバル！？…もう…あんたってやつは…」

注意した側からいなくなるスバルにティアナはため息をつくと後を追った

「スバルさん…」

「レキの様子はどうだった？」

「相変わらず部屋から出てきませんでしたけど少しは返答をしてくれました」

「ご飯の方も少しはとってるみたいです……もう少しだけそっとしておいて欲しいそうです」

スバルの呼びかけに顔をうつむかせていたキャロは顔を上げると報告をはじめめる

アグスタの一件以来レキとセレスは自室から出てきていなかった、ファフニールからの報告を聞いてはやては気持ちが落ち着くまで休むように指示を出した

それから三日の間、フォワードメンバーは二人の姿を見ていなかった、そしてもう一人この場にいない人物も同じであった

「でも本当なのかな？アルさんの事って」

「わからないわ……正直に言えば信じたくはないけど」

ここにいない人物、アルフィリオス・ラーゼンハルグも三日前から自室から出てきていなかった、デスクワークや報告等はイーグルレイダーから送られてくるだけだった、アルやレキがいない六課は何処か寂しく思うスバル達だった

SIDE…アルフィリオス

目に入る光景はあの日の事…あの時ほど悲しんだ事はない、あの時ほど感情が爆発した事はない…あの時ほど自分に憎しみを覚えた事はない

腕の中で冷たくなるパートナーを抱きしめ俺は世界を恨むように叫んだ、壊れてしまえば良いと思うくらいに…

「…ここは…イーグル、どのくらい寝てた？」

「一時間程…まだ寝てた方が良いかと」

「一時間も寝りゃ十分だ…続きをすんぞ」

ふと俺は目を開けた、ずいぶん懐かしい夢を見ていた気がする…

おそらく見るきっかけはアグスタでの一件のせいだろうな…死んだはずのレナ、クローンのアルファ…そして恨みを抱くライナどれをとっても一筋縄ではいかない相手だ…ならばどうするか、決まってる勝つために対策を練ることだ

そう考えた俺は帰ってきてから戦闘データと睨み合いをしていた、本当なら製作者であるガドルフのじいさんに話を聞く所だがあいにくと連絡がつかなかった

あてになるのは自身が交戦した時のデータのみ何度も見直していき、一つの結果がわかった

それはアルファとは直接対決では敵わないという事実であった、当然と言えば当然だ

向こうはリミッター無しのユニゾン有り、こちらはリミッター有りのユニゾン無し：明白すぎるものだ、更に言えばイーグルレイダーとアサルトホークのコンセプトの違いも関係してくる

イーグルレイダーはクロスとロングの両方に対応し一撃で相手を落とす、強襲型

アサルトホークはロングを捨てクロスのみに対応し防御性能も高い近接型

正面からぶつかりあえば負けるのは目に見えている、ここまで負けるとわかる相手は会った事が無い：それがまさかの自分自身だという事に自傷の笑みを浮かべてしまいそうだ

しかしまったく希望が無いわけではない、イーグルレイダーの分野である強襲だ

相手が認知する前に致命傷を与えればいい：簡単には言えるが勝率はかなり低い、一番有効な手ではあるがこれ以外に方法が無いと言った方が正しいのかもしれない

「なににせよ：お前に負担をかけるな：イーグル」

「私は貴方が死ぬより良いと思います：貴方は生きなければならぬのだから」

「罪を償うためにか？」

「アル！いくらなんでも怒りますよ！！」

デスクの脇に置いてあるイーグルを撫でながら言う「イーグルは真剣な口調で返してくれる」

それを俺は聞いてからかうように言う「イーグルは不機嫌そうに返す、すまないな…」どうにも前向きには考えることが出来なくてな

「冗談だ…ハッ、罪はどんな事をしても無くならない、どれだけ償いをしようが後悔をしようがな…アイツに言っという俺自身が出来てないんだから笑えるな…」

「アル…」

「少し休む…誰かきたら教えてくれ」

「わかりました」

俺は席から立ち上がると前にはやてに話した事を思い出しながらイーグルに返答をしてからベッドに倒れ込み、イーグルに言う「目を閉じる…」

S I D E ..レキ

たくさん考えた、どうしてあの人が姉さんに手をかけたのかと…

時間をたくさん使ったけど答えは出ずに僕はただ重いため息をつく、

自室のデスクにかけて窓の外を見ると止むことのない雨は降り続けている

まるで誰かの気持ちを表しているように思えたが、僕は考えるの止めて部屋から出ることにした…：いつぶりだろうか、キャロやエリオ達は心配してるだろうな…

「きゃっ!？レ、レキくん？」

扉を開けて外に出た時に短い悲鳴が聞こえた、考えすぎて疲れていて無意識だったためか声を聞いた瞬間、僕は少し驚いてしまった

声を上げたのはキャロだった

三日、会わないでいただけなのにひどく懐かしく思えてしまう、そう考えながらキャロに声をかけようとする前にキャロは僕の身体に抱きついてくる、そして少しだけ強く抱きしめてくる

「キャロ?…どうしたの？」

「凄く、心配したんだよ…レキくんが部屋から出てこなくて…」

僕の身体に顔を埋めて声を震わせながらキャロは僕にポツリポツリと話したず

「レキくんにそっとしといて欲しいって言われたけどやっぱりほっておく事が出来なくて…私…」

「良いよ、ごめんね…心配をかけてもう大丈夫だよ」

「レキくん…本当に？」

泣くのを堪えながらキャラは僕に語りかけていく、途中で詰まってしまうけどキャラの気持ちはちゃんと伝わっていた

キャラに応えるように優しく抱きしめると出来るだけはつきりとした口調で言うとうと、顔を埋めていたキャラは不安そうに僕を見上げて聞いてくる

「うん…大丈夫だよ

キャラ、少しだけ僕の考えを聞いてくれるかな？」

「うん、いいよ」

「ありがとう、はじめは…僕はアルさんを憎んだんだ、姉さんのパートナーなのに死なせたんだろうって」

僕は笑顔を浮かべて返すと三日の間に考えた事をキャラに話す事にした

キャラは快く頷いてくれて僕はゆっくりと語り出す

「でもおかしいな所があるのに気付いたんだ…アルさんが姉さんを殺したと認めた時、まるで苦しみながら出した答えのように聞こえたんだ…だから僕はもう一度アルさんと話して見ることにするよ、真実を聞くために」

「本当だったら、レキくんはどうするの？」

「わからない…だけど何か理由があると思うんだ、それを知らずにあの人から離れるのは間違いだと思う…」

僕が話す内容をキャラは黙って聞いていたが聞き終えてから不安そうに質問をしてくる

それは最初に考えた事だけど、僕の意味は変わらない事を伝えるときキャラは安心したような笑顔を浮かべてくれた

「それじゃあまずはセレスの所に行かないとね…セレスも今回の事に関わっているから」

「リイン曹長から聞いたんだけどセレスは今、シャル先生の所にいるみたいだよ」

「なら医務室だね、よしさっそく行こう」

「うん！」

キャラから身体を離れたレキはこれからの事を考えだす
そして自分と同じように自室から出てこないセレスに話をして一緒に、アルから真実を聞く事をキャラに告げるとキャラは笑顔を浮かべて頷く、ようやく彼らしさが戻った事にキャラは本当に嬉しかったからである

「はい、ココアよ飲むと良いわ、セレス」

「ありがとうございます、シャル先生」

医務室に来ていたセレスはシャルから渡されたココアを手になく笑う

「その様子だとまだ気持ちの整理がついてないみたいね…」

「すみません：一人でいると不安しかなくて邪魔にならないようにします、だからここに居ても良いですか？」

「別にそんな事は思っていないわ、気がすむまでここに居ても良いわよ
隊員のメンタルケアも私の仕事だから」

セレスの様子にシャルは苦笑をしながら言うと、セレスは頭を下げて謝ると不安そうにしながら頼むと、シャルは優しく微笑むとセレスの頭を撫でて答える

セレスは嬉しそうに表情を明るくするとふと何かに気付いたのか直ぐに表情を暗くした

「：シャル先生はアルのしたことどう思ってますか？」

「フアフニールから報告されたことよね：そうね、私はアルさんとずつとした訳じゃないからわからないけど、私はアルさんを信じているわ、何か理由があったんじゃないかって」

「理由？」

「そうでなきゃ、アルさんが人を手にかける真似はしないと思うの、もしアルさんが人の事を何とも思っていないなら、みんなを励ましたりするかしら？」

セレスは顔をうつむかせながらシャルに問いかける、自分以外の人はどう思っているのか知りたくなったからである

シャルは少し難しい顔をしてからセレスの問いに答える、その答えにセレスは首を傾げて聞き返す

シャルは続けて話していき最後にセレスに確認するように聞くと、セレスは今までの事を思い出す

出会ってから少ししか経っていないセレスでもわかるくらい、アルは面倒見が良くそして優しさがあつた

「不安ならアルさんと話したらどうかしら？今のセレスの気持ちとかぶつけてみるの」

「でも怖いです、それで話を聞いて貰えなかったらって思うと」

「言葉はちゃんと言わなきゃ伝わらないわ、でも怖いって気持ちもわかる…だから一人じゃなく誰かについて来てもらえば良いんじゃないかしら？例えば…レキとか」

「…レキが話を聞きたいって言うのでしょうか？」

「それは本人に聞いて見ると良いわ、ちょうど来たみたいだからね」

シャルの提案にセレスは自信無く答えると、シャルは肩に手を置いてアルとちゃんと向き合うように説得をしそのためにレキの力を借りるように言う

レキは難しいんじゃないかと答えるとシャルは扉の方を見ながら

言うと、タイミング良く扉が開かれレキが医務室に入ってきた

「アル、起きてください」

「…どうした？イーグル」

「はやてさんが話があると行ってきています」

「はやてが？…わかった」

ベッドで横になっていたアルにイーグルが呼びかけてくる、目を開けて用件を聞いたアルは身体を起こし扉に向かって歩きだすと扉のロックを外すると直ぐに扉が開く

「えっと、三日ぶりだな…」

「せやな…私がここに來た理由、先輩はわかるやろか？」

「いや皆目、検討がつかないな」

アルは出来る限りいつも通りに挨拶をするとはやてはそれが気に入らないのか、目を細めてから質問をする

アルはわざとらしく知らないフリを装いながら答える

「ロクに連絡せずに三日も皆に心配をかけたんや！その事について

何か言うことはないんか!？」

「それについては悪かった…アルファとの再戦を想定した戦術を練っていたから…」

「アルファ?…ファフニールが報告した仮面の男の名前なんか?」

とぼけるアルに少し怒りを滲ませながらはやては怒鳴ると、アルは今まで連絡しなかった理由を話すとはやては不思議そうに聞いてくる

(なるほど、アルファについてはまだ仮面の男でしか報告されてないみたいだな…なら) 「ああ、それ以外は何にもわからなかったけどな…」

「なら次の交戦した時はヴィータやなのはちゃん達と連携をして」
その必要はない」…え?」

「奴とは俺がケリをつける、お前らは手を出すな…レナについても同じだ」

「な、何を言うとりんや…そないな事したら今度こそただではすまないんやで!?! それなのに一人で戦わせろ言うんか!?!」

アルファについてははやて達は何も知らないとわかったアルはアルファ達とは関わるなどはやてに言う

突然の申し出にはやては戸惑いを隠せずに聞き返しながら言う

「ああ、そういったつもりなんだがな…

それに六課には関係の無いことだ、お前達はレリックを回収するの

が任務だろ？

余計ないざこざに首を突っ込んで被害をだしてどうする気だ？」

「そのいざこざの中心にいるのが六課のメンバーなんやで！？いきなりどうしたんや、いつもの先輩らしくないで？」

「勘違いすんな、俺はあくまで出向命令で来てるに過ぎないてか、いつもってなんだよ？俺は最適な判断をしてるだけだ…十分いつも通りだ」

「っ！！」

アルはわざとらしく言いながらはやてに返すと、はやては頭の中が混乱しながらもアルに問い続ける

しかしアルはそれをハッと笑い飛ばすと何か間違っているかと答える、それを聞いた瞬間はやてはアルの頬を思いつきり平手打ちをする

「何処がいつも通りなんや！そんな人を危険にさらす事を先輩が考えるはずない！！」

「お前は俺に夢を見すぎだ…はつきり言うが今の俺に構うな…迷惑なんだよ」

堤防が決壊したかのようにはやては感情を露にしながらアルに言う
とアルはそれを嘲笑うかのように言い捨てると部屋に入り、ドアをロックした

はやては扉を叩こうとしたが手は震え先ほどのアルの言葉が頭の中でリピートされだす

いたたまれ無くなったはやてはアルの部屋の前から逃げるように駆け出した

部屋に入ったアルは扉に寄りかかりはやてが立ち去るのを黙って聞いていた、そして殴られた頬に手を当てる

「後悔しているのですか？」

「ノーコメントだな…怒ってるか？イーグル」

「デバイスとしては何とも言いません…だけど女性としては最低と思ってます」

「それで良い…」

デスクに置かれたイーグルがアルに問いかけると、身体を扉から離してデスクに近づくと苦笑して答える

逆にアルはイーグルに問いかけるとイーグルはきっぱりと答えた

— — —
SIDE..はやて

嘘だと思ったかった、先輩からの言葉が

聞きたくなかった、迷惑だと言う言葉

頭の中がグシャグシャになった、それ以上に胸が痛い…はつきりとした拒絶を受けたから？

それもあるけど何より先輩にそれをされた事だった

まるで他人事のように私は考えながら足を歩くスピードまで落とす…胸の痛みはどんどん痛くなっていく、押さえても痛みは鎮まらない

「っわ！はやて？危ないよ？ちゃんと前を向かなきゃ」

何かにぶつかる感触があり前を向くとそこには心配そうにするフェイトちゃんがいた

「はやて？どうしたの、涙を流して何かあったの！？」

「え？…私、なんで泣いて…」

フェイトちゃんに言われてから気付いた自分の頬を流れる涙に

「ともかくこれで拭いて！はい、ハンカチ…何があったの？」

「ありがと…先輩に話を聞きに言ったんやけど…そしたら構うなって…そしたら凄く胸が痛くなってるな」

「そっか、はやてはアルに突き放されたから泣いたんだね…アルの事が本当に好きだから」

フェイトちゃんは私にハンカチを渡してから事情を聞いてきた、私はなんとか説明をするとフェイトちゃんはわかったかの様に言う私に言葉を投げ掛ける

先輩の事が好き…フェイトちゃんは確かにそう言った、いつもなら違うって言う所なのにその言葉を聞くと少しだけ痛みが和らいだ

多分、この痛みの正体がわかったからだと思う…だけどわかると同時に涙が込み上げてきた、泣きたくないそうおもいながらも涙は溢れてくる

「フェイトちゃん…少し頼みがあるんや…」

「うん、気のすむまで泣いて良いよ…それから先は後で考えようか」

「うん…ありがとう…」

耐えきれなくなった私はフェイトちゃんに言うどフェイトちゃんは快く受け入れてくれた、そして私は声を押し殺して泣いた…
今の気持ちを吐き出すために

EP16：不協和音（後書き）

どうも、えのきです！

はい、はやてのファンの皆様には申し訳ないです、泣かせました：皆様の怒りは分かる、私も怒ってるから！

じゃあなんで書いたって事になりますが、それははやての気持ちをはっきりさせるためです！

さてさて次回からはようやくシリアスも折り返し地点に入ります
楽しみにしてください

アルさんはいつもより三割増しでズタボロにする予定です

それでは予告にうつります

アルフィリオス「真実を求めてレキとセレスはアルフィリオスの元に向かう、しかしそれを阻止するかにようにアルファから宣戦布告が出される

自身の信頼関係を破壊してまで出撃するアルフィリオス、そして今すべてが語られる

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP17～過去の真相 にテイクオフ

俺はあの時から何一つ変わっちゃいない」

そして昨日でこの小説が10万PVを越えました！さらにユニークも1万を越えてました、見てくれた皆様に感謝をしながら記念小説を書こうと思います

直ぐには書けませんアンケートに答えてくれると嬉しいです

1..読者様からのリクエスト

2..現代パロディ

3..季節もの

の三つを候補に上げます良ければえらんで下さい

EP17..過去の真相(前書き)

お久しぶりというくらい遅れました…

シリーズは本当に時間がかかります、そしておそらく今回ののは今までで一番長いです

間違っていたりしたら指摘をよろしくお願いします

最後にアルとアルファの対決するシーンがありますがそのイメージとして「Regret nothing Tighten Up」(渡部 秀)と推奨します

名前でわからない人は仮面ライダーオーズのタトバで探してみてください
さい

EP17..過去の真相

医務室の前まで来たレキは深呼吸をしてから中に入る

「失礼します、セレスはいますか？」

「レキ、もう大丈夫なの？」

「完全にまではいかないけどね：セレス、アルさんについて話があるんだ」

「うん、わかった：聞くよ」

入ってきたレキにセレスはココアを置いて近くに寄り心配そうに話しかける

レキは苦笑をして答えてから本題に入る、レキの用件を聞いたセレスは息を飲んで頷く

「僕はもう一度アルさんから姉さんが死んだ時の話を聞こうと思うんだ」

セレス、君にも来てほしい：アルのパートナーである君に」

「私もおんなじ事を考えてた行こう、レキ！アルの所に！」

レキは自分の決めたことを話してセレスに手を差し出す、セレスもそれに応えるように手を握ってから返す

二人はアルの元に向かおうと医務室を出ようとすると突然、第一級

警戒体勢のアラートが鳴り出した

「どうした！？　いったい何が起きているんだ！？」

「外部から六課にハッキングがかけられている模様！

通信システムが完全にダウン、これじゃあ外部との連絡が！！」

指令室にいたグリフィスは突然の事に焦りつつも状況を確認する

オペレーターの一人であるルキノは機動六課に起きている状況を説明していき新たな異常に驚愕の声を上げる

「グリフィス君！　状況はどんな感じや！？」

「八神部隊長！　現在、機動六課はハッキングを受け通信システムがダウン、外部との連絡が完全に遮断されました」

「犯人から要求とかはきたの？」

「いえ、今の所は何もありません、ハラオウン執務官」

廊下にいたはやとフェイトは指令室に駆け込みグリフィスに状況を聞く

グリフィスは敬礼をしてから現在の状況を伝える、報告を聞いたフェイトはグリフィスに他には無いかと聞くがグリフィスは首を横に振った

「どう思う？はやて」

「十中八九これだけやない…皆、相手の目的わからん以上、警戒だけは怠らんといてな」

「「「了解！！」」」

はやてはフェイトの問いに答えてから指令部にいるメンバーに指示を出す

それと同時に扉が開きなのは、ヴィータ、シグナムの三人が指令室に入ってくる

「はやてちゃん！状況は？」

「今の所はハッキングのみや

四人はいつでも出られるようにしててな？」

「「「了解！！」」」

入ってきたのはがはやてに尋ねると一通りの状況と何かあった場合の対処についてははやては指示をだす

その瞬間、アナウンススピーカーからノイズが出始める

いきなりの音にはやて達は耳を塞ぐと突然通信モニターが展開されるとそこには仮面をつけた男性が映された

《機動六課の者たちよ、俺はアルファ！愚かな管理局を妥当するために存在するものだ！！》

「アルファ…」

「コイツがアグスタでアルが交戦した奴か…」

モニターに映し出された男性は演説をするかのように宣言をしてくる、アルファという名前にはやてはつぶやくように復唱をしヴィータがモニターを睨みながら言う

《俺が通信を入れた目的は二つ、融合騎セレスとアルフィリオス・ラーゼンハルグの引き渡しを要求するためだ》

「アルとセレスの引き渡し!?!」

「こちらは機動六課、部隊長の八神はやてや、そないな言い分通せるはずないやろ!!!」

《お前が八神はやてか…部隊長ならもう少し合理的に対処したらどうだ?》

犯罪者まがいの隊員と協力者でしかない融合騎を差し出せば隊は無事なんだからな》

アルファの言葉に指令室に緊張が走る

その中ではやては平静を保ちながらはっきり返答をする

返答を聞いたアルファは呆れ果てた口調でいい放つ

「たえ隊が無事でもそんなの全然嬉しくない、この機動六課は二人も入れての機動六課や

だから私は誰も見捨てたりせえへん!!!」

《大した意思だ…しかしアルフィリオスがそれほどの価値があるやつか？

自分の部下に手をかける男だぞ》

「その真意はわからへん…

だけど私は信じてる、あの人が望んでやった訳やないって!!」

《気丈だな…なら一時間の猶予をやる、アルフィリオスを差し出さなければ貴様らも葬ってやる》

未だにアルの事を信じているはやてに対してアルファは彼の犯した事を告げる

それを聞いたはやては少し迷いはしたがそれでも信じると答える

アルファは鼻で笑いはやてに指を突きつけてから宣言をする

一時間…誰もがその言葉に息を飲んだがその硬直は直ぐに解けた

「一時間もいらねえ…てめえは何処にいるアルファ」

その場にいた全員が後ろを見るとそこにはアルの姿があった

ヴィータやなのは達は安堵の息をもらすがはやてやフェイトは先ほどの事を思い出して顔をしかめた

《ようやく出てきたか…

そんなに死にたいのなら相手をしてやる、俺は廃虚都市郡にいる、来る気があるなら来い無論、一人だな》

「ああ、良いぜ…俺はサシでてめえと勝負をつける気だったからな、ちょうど良い」

《その強がり絶望に変わるのを今から楽しみにしているか…》

アルの姿を確認したアルファは獲物を見つけたかのような目をしてから言う、アルはそれを腕組みをしながら答える

余裕のある言い方をしているアルにアルファは含み笑いをこぼすと通信を切る

通信が切れた後、指令室には沈黙が流れた
アルは何も言わずに出ていこうとした

「待てよ、本気で行くつもりなのかよ…アル」

指令室から出ようとした時、ヴィータに呼び止められた
アルが振り返るとヴィータの表情は不安の色しかなかった

「当然だ…これは俺にしか出来ない事だからな、お前らの力は借りない」

「なんだよそれ！？あたしら役立たないって言うのかよ！！」

「そうだ、邪魔だから来るな」

「っ！？てめえ！！」

アルは一度はヴィータの顔を見たが直ぐに背を向けてから答える
不安から苛立ちに変わりだしたヴィータは感情を滲ませながら聞く、
アルはそれを冷たく切り捨てるように返す

その言葉に我慢の限界がきたヴィータはアルに殴りかかろうとするがシグナムがそれを静止させる

「落ち着け、ヴィータ」

「これが落ち着いてられるか！
ふざけんなよ！あたしらは仲間だろ？なんでそんな言い方ができるだよ！！」

「……悪いが話す事はもうない」

「待てよ！？アル！おい！！……なんでだよ……」

シグナムの静止にもヴィータは止まらずアルに食いかかるがアルは短く返し、指令室を後にする

アルがいなくなった後の指令室にヴィータの声だけが響いた

――――

アルがいなくなって数分後にフォワードメンバーとセレスが指令室に入ってくる

「八神部隊長！アルさんが一人で出撃したんですけど、どうしたんですか？」

「…アルファっていう魔導士からの要求や…」

「この間の仮面の魔導士か…でもどうして一人でアルさんらしくない…」

「ロングアーチ7が目標地点に到着しました、っ！
イーグルレイダーから映像が送られてきます」

スバルの報告を聞いたはやては短く返答する、フォワードメンバーが動揺するなかレキはアルの行動に疑問を覚えた

そんな中でシャーリーが状況報告をするとモニターが展開し映像が映し出された

そこにはサーチャーからの映像だろうかアルとアルファのにらみ合う姿が映し出されていた

――――

「逃げずによく来たな、アルフィリオス」

「まあな…どうせ相手をするんだ早い方が良いだろ？」

それに戦えんのは俺だけだからな…てめえはなのは達が来たらその仮面を外す気だろ？」

「やはり気づくか…勘が良いな、この顔を見ればアイツらは手出し出来ないからな」

向かい合うアルファは腕組みをして関心するようにアルに言う、対

してアルは辺りを見ながら答えるとアルファの仮面を指でさす

指摘されたアルファは含み笑いを浮かべると仮面を外し投げ捨てる、暗雲の隙間からもれた月明かりがアルファを照らし顔を露にさせるのだから…

そんなはやて達を知らずにアルは話を続ける

「ずいぶんエグい手を使うな…
確かにアイツラには効果的だけどな」

「だから貴様は一人で来たのだろ？ 仲間を危険に晒したくないからわざと小芝居をうってな」

「おいおい、そこまでわかんのかよ…よくわかったな」

「俺はプロジェクトFで作り出された貴様のクローンだ…
作った奴らはお前に似せるように思考パターンも同じに調整したらしくてな
だからわかるんだよ、心を許した相手を戦場に出さないために貴様が何をするか」

仮面を脱ぎ捨てたアルファにやれやれとため息まじりにアルは言い肩で笑う、アルファは何故アルが一人で来たかわかっているかの様に話しだす

正解だった事にアルは驚きながらも薄気味悪そうに言う、アルファは何故わかったかまるで他人事のように言いアルに指を向けて言う

「思考パターンねえ…面倒な事だな、どこまで似せてるかは知らないが戦う前にレナと話をさせてくれないか？
アイツもいるんだろ？」

「…まあな、しかし今さら命乞いか？それとも謝罪か？どちらにせよ冥土の土産だ、好きに話せば良い…レナ」

アルは面倒そうにつぶやくと突然、レナと話しがしたいと提案をする
アルファは少し驚いた顔をするが鼻で笑い、自分の後ろに目を向けてから呼びかけるとマント姿のレナが現れた

「良く私がいることに気付いたわね…」

「局入りして三年間、一緒にいたんだぜ？わからなかったらダメだろ」

「っ！そのパートナーを殺した理由…聞かせてもらおうかしら！？
お前の用件はそれのはず！！」

「話す内容がそれだけど聞く事は違う、俺が聞きたいのはお前がどうやって死んだかだ、正確には俺の殺し方だな」

レナの口調は変わらず憎悪に満ちているのに対しアルの口調は、涼やかなものでまるで談笑するかのようなだった

そんな態度をとるアルにレナは苛立ちを覚え話しの内容を指摘して

から早く話せと催促をする

アルは苦笑を浮かべてから答えるとレナに自分の死因を問いかける
それを聞いたレナは怒りのあまり銃口をアルに向ける

「貴様がそれを聞くか!？」

自分の手でした事すら忘れるとはどういうつもりだ!!」

「俺の知っている事とお前の知っている事…どう違うのか確かめた
いのさ」

「自分は殺してないと言っても言う気？」

良いわ!なら話してあげる、7年前に起きた事をね!!」

怒りのこもった口調でレナは答えるがアルは平静のまま返答をする
レナはアルの言葉を笑い飛ばすと罪を確認させるために語り出す

――
SIDE…レナ

7年前、私達はある犯罪者を追っていた

何人もの局員が返り討ちに合う程の手練れだという話だった

そこで数より質を重視し実績を残している、私達に白羽の矢がたった

正直な話し私も不安だったけどアルフィリオスを信頼しているからこそなんとかなると思った、あの時まで：

「捕縛完了…本当になんとかなったね、アル」

「まあ俺とお前なら出来るって思ってたからな」

「そうだね…うん、私達は無敵のコンビだ！」

犯人の捕縛して私は息をついてから隣にいたアルに呼びかける、私と同じように肩で息をしながらアルは返答した

にこやかに笑うアルに私もつられて笑うとグッと握り拳を作ってからアルの呼びかける

「ああ、そうだな…でもそれは今日で終わりだ…」

「アル？なに、あぐっ!？」

アルの口調が低くなり発せられた言葉の意味がわからず聞こうとした時、私の胸をイーグルレイダーのリップパーが貫いた、最初はわけがわからなかったけど飛び散る血で意識が戻された

「ど、どうして…アル…」

「悪いな…だけど仕方ないんだよ…だからあばよ、レナ」

鮮血が滴り落ちるリップパーの刃に手をかけながら、アルを見るとその顔は狂気に満ちていた
そしてアルは私の身体を引き裂くようにリップパーを振るい、私は絶

命した

「これが私の死んだ時の事よ！
すべてこの子【シュバルツファルケン】が教えてくれたわ」

「そうか…よくわかった…」

「どうやら思い出したみたいね…私はお前を信じていた…なのに手の平を返して裏切るお前に失望した！
理由があるうと関係ない、私はお前を討つ！！」

「勘違いすんなよ、別に忘れてた訳じゃない…お前が死んだ時の事を忘れられるわけないだろ
俺がわかったのはお前が記憶操作を受けたって事だ」

語り終えたレナは黒い銃を見せつけるようにいう、話を聞いていたアルはため息をついて下を向いてから納得をする

レナは鼻で笑うとギリッと歯を食いしばってから銃口に魔力弾を生
成しながら宣言をする

下を向いていたアルは顔を上げると真剣な表情で返答をしてから指
をレナに向けて言う

「っな！？何を根拠にそんな事が言えるの！！
私は確かにこの目で見てシュバルツファルケンの映像でそれを知った！間違いであるはずがないわ！！」

「いや間違いだ、一件正しいように見えて間違いがある…さあ真相を説明しようか」

突然の事にレナは魔力弾の生成を止めてから反論するように言い自分が正しいと答える

アルはそれでも戸惑う事なく答えるとレナを見ながら語り出す

「まずはお前のデバイスシュバルツファルケンについてだな…そいつはヴァイスファルケンって名前のはずだろ？」

「そうよ、復讐を誓った日から変えたのよ！それがどうしたの？まさかそれが間違いとでも言う気？」

「いや本題はここからだ…ソイツの待機フォルムはなんだ？」

「待機、フォルム…」

今までとは違う雰囲気を押されながらもレナは答えると馬鹿らしいと笑い飛ばすが、次に出されたアルの言葉に言葉を無くした

「どうした？自分のデバイスだろ…なんで直ぐに出ない？」

「当たり前だよな…ソイツは偽物だからな」

「っ！？そんな筈はない！」

ずっと使ってきたデバイスよ、間違えるはずはない！戻さないのは戻す必要が無いからよ」

「…ッハ、あり得ないな…教えてやるよ、お前のヴァイスファルケ

ンの待機フォルムはコレだ」

「…ハーモニカ、？」

言葉を無くしたレナにアルは畳み掛けるように言葉を言っていく

それでも間違いを認めないレナは反論をし始める、レナの話しを聞いていたアルは発言を否定するように笑い飛ばすと自分のバリアジヤケットに手を入れると何かを取り出しはじめる

それはアルが良く吹いていたハーモニカであった

「そう、ヴァイスファルケンの待機フォルムはハーモニカだ…コイツはレナ、お前自身から受け取ったものだ」

「嘘…そんなはずない…信じられない」

「なら、その目を見開いて良く見やがれ！

お前の相棒の姿をな！ヴァイスファルケン！セットアップ！！」

語られていく事に目を背けるかのようにレナは耳や目を塞ぐがアルはそれを打ち破るように叫ぶ

アルの声と共にハーモニカが輝くと純白に金色のラインが入り銃身が翼ようなデザインの拳銃に形を変えた

「ヴァイスファルケンの待機フォルムがハーモニカなのは、このハーモニカがレキとの思い出だから持つてる事でいつでもレキつながってる証って言ってたんだよ」

「なら、私の記憶は一体…」

「まだ話しは終わってねえ

シュバルツファルケンが教えた間違いを正す真実を今から話す」

ヴァイスファルケンをレナに向けながらアルは待機フォルムの理由を説明する

自分の信じている事が違った事でレナは困惑しはじめていた、アルは困惑するレナを見つめながら語り出す

――

S I D E ..アルフィリオス

7年前の事件についてレナが話した事はほぼ正解だった
違っているのはレナが無敵のコンビといったあたりだった

「ふざけるな！管理局の犬どもが！！」

「てめえ、ぐあっ！？」

「アル！？そんなバインドを破るなんて…」

意識を取り戻した犯罪者がバインドを破り俺に体当たりをしてきた
のだった

突然の事に対処できなかった俺は壁に叩きつけられ形勢は一気にひっくり返された

犯罪者は武器に使っていたアームドデバイスである槍を持つとダメージで動けない俺に向けてくる

レナは牽制のためにヴァイスファルケンを構えるという三竦みになってしまった、しかしその中でも一番危険なのは俺であった

叩きつけられた衝撃によりイーグルを手離してしまっていたからである

「おいおい、コイツを見捨てたるのか？大切なパートナーなんだろう？」

「つく…わかったわ…」

「よせ！！構う事なく撃て！！！！」

「だとさ…出来るかい？お嬢ちゃん」

槍を俺の喉元に押しつけながら犯罪者はレナを見て不気味に笑いかけてくる

レナは仕方なくヴァイスファルケンを下ろす、俺は構わず撃てと言うがレナは首を振って否定をするとヴァイスファルケンを床に置いて下がる

「へへっ…良い子だ…お嬢ちゃんには人質になってもらうとして坊主には死んで貰うか！」

「アル!!」

喉元に突き付けられた刃が引かれ勢い良く放たれ自分に突き刺さりそうになった時、目の前にレナが割り込んできたのが見えた

それはやけにスローで手を伸ばせば止められそうだった、けど手は伸ばせずに刃はレナの身体に深く突き刺さり俺の身体には鮮血が飛び散った

生暖かい血はだんだんと冷えていきレナが死んでいくのが手にとるようにわかった

気がつけば俺の前には死にかけのレナと肉片となった犯罪者…そして手には血に染まったヴァイスファルケンが握られていた

「レナ、レナ!! おきろ、起きてくれ!!!」

「…ハア…アル? 良かった…無事だったんだ…」

「俺より自分の心配をしろ!! 死にかけてるんだぞ!!!」

「本当だ…やばい、なあ…ドジっちゃったよ」

我に返った俺はレナに駆け寄り必死に呼びかけ、なけなしの回復魔法をかける

呼びかけで薄く目を開けたレナは力なく笑うと息をもらした、自分の心配をしないレナを叱りつける、そこでようやく自分の状態に氣付いたレナは苦笑をもらして答えた

「なんで俺をかばったあの時、お前なら槍を撃ち落とせたはずだ」

「なんで、だろ？…アルが危ないって考えたら勝手に動いてた、ごめんね…」

「謝るな！直ぐに救助がくる、だからもう少し起きてろ！！」

「うん…アル…ちょっとだけ約束してくれる？」

傷に魔法をかけながら俺はレナに問いかけるとやんわりとした口調でレナは返答をしてから謝ってきた

俺は怒鳴りながら傷に魔法をかけ続けるがだんだんと無意味だと言う言葉が頭に浮かんでくる

必死に振り払っている時にレナはかすれそうな声で話しかけてきた

「後で聞く！だから頑張れ！！」

「無理だよ…自分でもわかる…もう後が無いことが…だから今、言うね」

自分を責めたりしないでね？これは私が勝手にしたんだから…あとね…好きだよ…ア、ル…」

「レナ？…嘘だろ…レナっ！！」

レナはそれだけを言う俺の腕の中で息を引き取った

これが7年前に起きた本当の出来事だ…

「そんな…なら私の記憶はなんなの…アルフィリオスの話を嘘だと思えない…違う、あれは嘘だ…でも私は…」

「お前が恨むのは構わない…俺のせいで死ぬ事になった…俺が殺したものだ、否定はしない
だけど、事実を見失うな！お前のしてきた事を他人の横槍で汚したままにするな！！」

「ア、ル…私は…」

《いけませんわ、レナお嬢様》

支離滅裂な言葉をつむぎながらレナは平静を保とうとしているが、アルは訴える様に言葉を投げ掛けると、レナは瞳にうつすら涙を浮かべて手を伸ばそうとする

しかしそれを遮るかのように通信モニターが表示され眼鏡をかけた女性が映された

「クアットロ？…どう、したの」

《お嬢様のバイタルに異常が発生しましたの、至急お戻りくださいな…》

「でも、私は《ルーお嬢様、よろしく願いますわ》これは召喚

陣!？」

「レナ!！」

眼鏡の女性、クアットロにレナは問いかけるとクアットロはわざとらしい態度で言い返るように提案をする

しかしレナは何かを言おうとした時、クアットロは話を聞かずに指示を出すとレナの足元に紫色の召喚陣が展開され、光に包まれたすアルは慌てて手を伸ばすが届く前にレナの身体は光となりその場から消えた

《残念でしたわね、アルフィリオス・ラーゼンハルグ
それではアルファさん?後始末をお願い出来ますか?》

「ああ、良いだろう…邪魔をするなよ?」

《承知しましたわ、では》

クアットロは手を伸ばすアルを嘲笑うように言い、アルファに残りを任せる

近くで見ていたアルファはクアットロに念を入れるとアルに視線を向ける

クアットロはそれを見て愉快そうに笑いながら通信モニターを閉じる

「気はすんだか?まあその様子じゃ、まだまだ納得は出来てなさそうだな」

「そうだな…納得は出来ない、だけどお前から先に片付ける…」

「ほお…少しはやる気が出ているみたいだな…それで何処までやるか、見せて貰うか」

「構わないが、加減なんざ期待すんなよ!!」

通信を切られ行き場のない手を握りしめているアルを見て、わざとらしく言葉を放つアルファ

握りしめていた手を解いてからアルは、目の前にいるアルファに目を向ける

その瞳にはやり場の無い怒りがこもっていた

それを感じ取ったアルファは笑みを浮かべて挑発するような、言い方をする。アルはヴァイスファルケンを待機フォルムに戻してアルファに斬りかかる

アルファは素早くアサルトホークを展開するとロングブレードでイーグルのリップパーを防ぐ、その瞬間辺りに凄まじい衝撃が伝わる

「…やるじゃないか、さあやるぞ!アルフィリオス!!」

「アルファ!!」

リップパーを受け止めながら心底楽しそうに返すアルファに、アルは感情を爆発させるように叫ぶと斬りかかった体勢から、後ろに飛んでイーグルの魔力弾をアルファに向けて連射する

辺り弾幕が巻き上がるがアルファはそれを纏いながらロングブレードを振りかぶりアルに向けて飛びかかる

指令室にて先ほどのやり取りを見ていたはやて達は言葉を無くしていた

アルが自分達を遠ざけた理由、それはなのは達では自分のクローンであるアルファと本気で対峙する事が出来ないという事だったからだ

「全部、あたしらのためだったのかよ…わざと突き放したりしとか…あたしらを守るためにやってたのかよ」

「嘘だったんだ…姉さんを殺したなんてのは、でもそれをアルさんはずっと抱えてたのか…」

「でも…」

「セレス？どうしたの？」

ヴィータやレキは知らされた事実に戻しているなかで、セレスはモニターのアルに目を向けたままつぶやくと近くにいたフェイトが首を傾げて聞く

「そんな事があってもアルはどうして管理局に残っているんだろ？
凄く苦しいのになんてして…」

「セレス…」

アルの話を聞いていたセレスは凄く辛そうな顔をしながら言いフ
ェイトは落ち着かせるように声をかけようとした瞬間、凄まじい轟
音がモニターに響いた

全員がモニターの方に目を向ける、そこには廃虚ビルの屋上に叩き
つけられ起き上がろうとするアルの姿があった

アルファはそれを見下すように見ながら口を開いた

《貴様は何故戦う？》

「唐突になんだよ？」

「当然の疑問だろ、俺との力の差は歴然：俺はユニゾンを使ってい
ないのに貴様は膝についている、明白な事実だろ」

「はっきりと言ってくれるな…」

「リミッター、非殺傷設定、管理局が定めただらん枷がついてる、
籠の中にいる鳥のようにな：だから聞くんだ、そんな状況でなお戦
うとするのはどうしてかとな
俺ならしないな、そんな事」

膝をつき肩で息をするアルは顔だけアルファに向けて聞き返すとア
ルフアは鼻で笑い説明をしていく

わかってはいたが事実の述べられてアルは苦笑を浮かべていた、アルファはそれを無視して言葉を続けた

アルファがいい終えた時辺りを静寂が支配した、数分であったそれはアルの笑い声によって無くなった

「ふははっ：戦う理由ね：簡単なものだ、夢を守るためだよ」

「夢、だと？」

「ああ、お前の言う通り管理局は鳥籠みたいなところさ、自由に飛べない窮屈な場所：レナが死んでから俺は抜けようとも考えた、だけどその窮屈な鳥籠の中でちっちゃい雛を見つけたんだよ」

アルの戦う理由を聞いたアルファは怪訝な表情を浮かべる、それを視界にいれながらアルはそのまま語り出す

「そいつは昔に大きな罪を犯して、管理局の世話になったそうだし、そしてそいつは言ったのさ、自分の力を誰かの為に役立てたいってよ程度の違いはあるけど、なんか俺と似てると思ってな
そのちっちゃい雛が作り出す明日がみたいから俺は戦ってたんだよ」

「誰かの作り出す明日か：ふん、くだらん：」

「ならお前何のために戦う？アルファ」

「俺は俺を確立するために戦う
誰かのコピーではない、俺という存在をこの世に刻むために戦っている！」

アルの戦う理由を語り終えると聞いていたアルファは馬鹿にするように言う

それに対してアルは逆にアルファの戦う理由を問いかける、自分の手を見つめながらアルファは答えると握り拳を作り天、高々と振る上げる

「ならなおさら決着をつけないとな、てめえのためと他人のためどちらが強いかな」

「話しにならない勝負だな…本気で勝てるとも思っている気か？」

「奥の手があるんでな、イーグル！」

「了解、シリンダーを排出します」

イーグルの銃口をアルファに向けながらアルは言うとなんな事は無理だと笑い飛ばす

しかしアルの表情から自信の色は消えずイーグルを銃口を上に向け、すると短い空気音と共にステーク用のカートリッジシリンダーが排出される

アルは腰に手を伸ばしリロード用カートリッジを取りステークに装填する

「コイツは俺が今できる最高の攻撃だ…ステーク六連発…食らった風穴が空くかもな」

「当たればな…そんな単調な攻撃かわせばすむことだ」

「なら試してみろ：回避できるならな」

アルはイーグルを構えながら今からする攻撃を説明する
自分の手の内をさらすアルに怪訝な表情を浮かべながらアルファは
回避できるように身構える

回避するといったアルファに不敵な笑みを浮かべてアルは足元に魔法陣を展開する

「行くぜ：ソニック、バースト！！」

「ソニックムーブより早い！！ごはっ！？」

足に力を入れて一気に魔法陣を蹴ったアルの姿は一瞬だけアルファの視界から消える、そして次にアルファの前に現れた時にはその体にステークを打ち込んだ後だった

ソニックバースト、それはソニックムーブのように自在に高速で動けるものでは無く、一つの方向に高速移動するものである
しかし自在に動けない分、加速するスピードはソニックムーブの二倍となる

「ただし身体にかかる負担もデカイがな：さあてお待ちかねの、受けてもらうか！ワンシリンダーロード、カートリッジ！！
フルシリンダーステーク！！！」

身体が軋む音を耳にしながらアルはイーグルのトリガーを引く
一発、また一発と凄まじい轟音をたてながらアルファの身体にステークが打ち込まれていく、アルファの身体が衝撃で吹き飛ばされてもソニックバーストの効果で直ぐに次のステークが放たれる
そして最後の六発目が打ち込まれた瞬間、アルファの身体は廃虚ビ

ルに叩きつけられた

アルはそのビルに向かいに降り立つと膝をつく、イーグルも本体のいたる所からスパークがはなたれていた

術者とデバイスの耐久力を無視するフルシリンドーステーク、アルの言葉通り一回しか使えない切り札であった

（これで倒れれば御の字…）「倒れないなら…死があるのみだな」
なに！？ぐあ！！」

アルファが落ちたビルに目を向けながらゆっくりと立ち上がり眺めてつぶやく、その瞬間自分じゃない誰かの声が聞こえそちらを向こうとするがアルの腹部から鈍い音が響く

そこにはビルに叩きつけたはずのアルファの姿があった、先ほどの衝撃はアルファの蹴りがアルの腹部に入った衝撃だった

「がは、げほげほ！なんで、いつの間にユニゾンを…」

「最初からだ、バレないように変身魔法を使ってな…

ライナがいない事に気づくべきだったな、アルフィリオス

さて景気のよい一撃のお返しをしないといけないか…見せてやるよ、アサルトホークの真の姿を！！」

目の前にいるアルファはライナとユニゾンした時と同じ外見をしており、先ほどの戦闘ではユニゾンなんて一度もしていなかったのを思い出しながらアルは言葉を吐き出す

アルファは引っかけたと言わんばかりにアルに説明をしていきステークの札をすると自分の右手の盾を構える

魔力が込められ赤く光る盾はまるで鍬形虫の顎の形に形状を変えた

「ビークシザーズクラッシャー：アサルトホークの嘴だ

その威力は身を持って知るが良い！！

ボルトバニッシャー！！！！」

「しまっ、ぐああああっ！！！！」

右腕の鋏を見せびらかしながら言うところアルファはクラッシャーを引きアルの腹部、目掛けてボディブローをはなつがそれだけではなかった

鋏がアルの身体をきつく固定をすると鋏から凄まじい電流が放たれアルの身体を駆け巡る

「どうだ？ライナの電撃は

このクラッシャーとは相性が良くてな、こんな風に電流を流し続けられるのさ」

「おおあああっ！！ぐううあああ！！！！」

アルファは嬉々として説明をしていき再びアルの身体に電流を流していく

最初は引き剥がそうとしていたアルであったが幾度となく繰り返される電流に抵抗する力を奪われていく

そしてクラッシャーから解放された時には自分の足で立てないほど消耗していた、アルファは倒れているアルの頭を踏みつけて勝ち誇った表情を浮かべた

「ステーキには驚いた、ライナがフィールドの出力と重ねがけをしなければ危なかったな、賞賛に値する…だがお前にユニゾンを使わされたのは同時にそれが一番腹立たしい事だ！」

「あぐう…くう…」

「悲鳴も上げなくなったか…このまま殺しても良いが、それじゃ気がすまない

そうだ、面白い方法がある」

アルファは笑みを浮かべながら話すが急に目の色を変えてアルの頭を踏みにじる

アルは電撃のダメージでただ呻く事しか出来ずにいた、アルの反応がつまりなかったのかアルファはロングブレードを引き抜くが何かを思いついたのか空中に飛び上がっていく

そしてビルを見下ろせる位置まで上昇したアルファはロングブレードを空にむける

夜空を覆っていた雨雲は一斉に雷を落とした、そして落ちる先はすべてアルファのブレードだった、まるで雷を吸いとるかのように落雷が落ちる度にブレードは帯電をしていく

「ライナとセレスは天候を味方につけてその威力を増す…ああいまから死ぬ貴様には関係ないな、さあ…受ける！天雷狂刃！！！」

帯電しているブレードを見ながらアルファは説明するとわざとらしく思い出してから言い、そしてアル目掛けてブレードに蓄積された雷を撃ち放った

いくつもの雷が収束された砲撃は蒼白い閃光となってアルのいるビルを飲み込み爆発を巻き起こした

EP17..過去の真相（後書き）

どうもえのきです…ようやく終わりました

仕事の関係でこんな時間帯で申し訳ないでしたが楽しんで貰えたら嬉しいです

ようやくアルのシリアス編も残すところあと一つです、先にネタばらしですがアルはちゃんと生きてます

主人公ですから更に言えば次回はこの小説はじめての無双でやります、今回の敗けを無くすくらいにしたいと考えますよ

それでは楽しみにしてください

次回は早く上げるように頑張ります

EP18..すべてを吹き飛ばす風（前書き）

シリアス編、ラストでございます！

ここでもBGMの推奨があります

アルとセレスのユニゾンの際に「トライアル」（仮面ライダーW、オリジナルサウンドトラックから）

アルとアルファの戦闘で

「Cyclone Effect」（仮面ライダーW、挿入歌）

を推奨します

EP18..すべてを吹き飛ばす風

SIDE..セレス

アルの滅多に聞かない口調で放たれた言葉が私の耳に届いた

夢を守りたい、無くす痛みを知っているからもう誰にも味わってほしく無いからアルは戦っている

でも私は思う、皆を守るアルは誰が守るの？

傷ついても嫌われても気付いてくれなきゃ誰もわからない、アルはそのまま痛みを受け続けるの？

アルが今までみんなに励ましてきた言葉は全部、自分が出来てない事ばかりだよ…それって自分の様になって欲しくないから？

私の中にはいろんな感情が渦巻いていた

そして突然聞こえた音に慌ててモニターに目を向けた

「アルさん、凄い…あんな攻撃をするなんて」

「これならアルファって奴は倒せたはずだね！」

モニターを見続けていたティアナさんとスバルさんの言葉が耳に入る、膝について辛そうにしているアルは少しだけ緊張を解いた顔をしていた

だけど私はこの戦闘が始まってからお姉ちゃんの姿を見てないことに気付いた、お姉ちゃんは私と違いマスターの側を離れる事は滅多

にないだから姿が無いことは異常だった

マスターの指示かそれとも…っ!!

「アル!ダメ、逃げて!!」

私は皆が喜ぶ中で叫んだ、その瞬間モニターから鈍い音とアルの悲鳴が聞こえた

それはユニゾンをしたアルファが魔力で強化した足でアルのお腹を蹴り飛ばした音だった

「ユニゾン!? いつの間に…」

「最初っからだよ、お姉ちゃんの魔力が全然感じなかったのはアルファの中で休眠していたからだだったんだ」

なのはさんの疑問に私は自分を叱りつけるように言う、再びモニターに目を向けた時にはアルはアルファの攻撃を受けていた

まるで鉄のように展開したアルファの盾はアルの身体を締め付けるように固定をするとアルファはアル自分の頭上に持ち上げる

ユニゾンして筋力が上がっているからかアルの身体は簡単に持ち上がる、抵抗するアルを見ながらまるで楽しみがあるかのような笑みをアルファは浮かべていた

――
《威力をその身を持って知るが良い!!》

ボルトバニツシャー！！！！》

《ぐあああああ！！》

アルの身体を固定した鋏は蒼白い稲妻をちらつかせると電撃となつてアルの身体を駆け巡る

その威力は響き渡るアルの悲鳴が物語っていた
発生していた電流が突然止みアルは息絶え絶えになりながらも電撃から解放される

《ふ、この程度で根を上げて貰っては困るな、そら！！》

《おあああああっ！！ぐううう！！》

息を荒げているアルを見ながら、アルファは期待外れのような表情をしてから再び電流を発生させる

モニターからは再びアルの悲痛な声が聞こえだすスバルやティアナは目を背け、キャロはレキにしがみつく

なのはとフェイト達は何も出来ない悔しさをただ噛み締めるしかなかった

《あっ…ぐ…ハア、ハア…》

《まだ抵抗を続けるか…それでこそ面白い！！》

《おあああああっ！！ああ、あああああっ！！》

鉄を引き剥がそうと抵抗をするアルに、アルファは愉快そうに笑いアルの身体に電撃を走らせる

度重なる電撃によってアルの腕はとうとう力を失い垂れ下がる
アルファは鼻で笑いビルの屋上に叩きつけアルの頭を踏みつける
アルは電撃のダメージで抵抗することは出来ず呻くだけだった

アルファはつまらなそうに吐き捨てるように踏みながら、腰の鞘にあるロングブレードを抜き放つと上空に飛び上がる
そしてロングブレードを空に向けると雨雲が唸りだし次々と落雷がロングブレードに落ちていく

（あの技は！アルに逃げて！！）

セレスは祈るように手を合わせるがアルは起き上がる事が出来ずにいた

このままではアルが死ぬ

（そんなのは嫌だ、誰か助けて！）

しかし誰も動けずにいた、今からでは間に合わないとわかっているから

（何か方法があるはず、アルを助ける方法があるはず！！）

しかし考えるよりも先にアルファのロングブレードはチャージを終えた

そして稲妻がほとばしるロングブレードをゆっくりと振り上げる

その光景を目にした時、セレスはアルの言葉を思い出した

【絶対に譲れないものがあるなら俺は反対しない、融合騎としてではなくセレスとして考えてくれ】

自分にとって譲れないものとは何か…姉を探す事？

(…違う…)

姉と戦うのから逃げる事？

(…違う！)

何が譲れないのかセレスは考えた、そしてその答えは直ぐに出た…

(私の譲れない事…マスターに仕える融合騎としてではなく、アルと一緒にいるパートナーとして譲れない事！それは！！) 「アルは死なせない！！ウィンド、ジャンプ！！！！」

ロングブレードが降り下ろされようとした時、指令室にセレスの声が響き渡る

皆が一斉にセレスに視線を向ける、そこには騎士甲冑を纏い決意を決めた表情のセレスがいた

そしてセレスの身体が緑色の光に包まれ一瞬にしていなくなった

SIDE…アルフィリオス

「さあ…受けろ！！天雷狂刃！！！」

そう言ってアルファは俺に向けて蒼白い稲妻が付加された砲撃を撃ち放つ

マズイな…あんなの受ければひとたまりもない…ここで終わりか？

「…なんて甘い事を考えてる場合じゃねえっ！なんとかする、死ぬ時は全部やってからだ！！」

しびれている身体に力を入れる、ふらつきながらも立ち上がる事に出来たが砲撃は目の前に迫っていた

俺は反射的に腕を盾代わりする、凄まじい轟音が耳に入るが砲撃はいつまで経っても俺の身体を貫く事はなかった

「…っな！？これは…」

恐る恐る目を開けると目の前には巨大な風の壁があった

その風のおかげで砲撃は俺の身体に当たることはなかった

風の壁はだんだんと薄くなっていくと俺の目の前に騎士甲冑を纏ったセレスが現れる

防御魔法をしようするように右手を突き出していたセレスはゆっくりと手を下げると俺の方に顔をむける

「ごめん、遅れちゃった…大丈夫だった？アル」

「ああ、お前の防御魔法のおかげだよ…」

「アレは転移地点を固定するためのエネルギー領域だよ、まあ防御魔法も混ぜたから間違っていないかな」

申し訳なさそうに笑うセレスに俺は思わず顔が緩みながらも返事をする

セレスは指を立てて詳細を説明してくる…数日間だけだが顔も全く見てないのに、普通に会話のやりとりを出来ることに驚きながら俺はセレスの頭をゆっくりと撫でる

「何はともあれ、ありがとうな
正直危なかった…」

「っ！…アル、私…決めたよ…お姉ちゃんを止める、本当は戦いたくないけどアルが死んじゃうのは嫌だから…」

言ったよね？譲れない事があれば反対はしないって…私はアルと一緒に戦ってお姉ちゃんを止める！

それが私の譲れない戦う理由だよ！！」

俺が礼を言うときセレスは俺の身体に抱きついてくる、そして涙を堪えるように言葉を紡いでいき俺を見上げながらいい放つ

見上げるセレスの目は本気で、迷いはなかった…

それを見て俺は思わず笑みを浮かべた

（全部、俺が守る気でいたけどソイツはいらん節介だったか…こい

つはもういっちょ前に考えてんだからな」「にしてもなんで俺が戦っていることがわかったんだ？」

「アルが出撃した時にイーグルから映像通信がきたの、皆もアルの話し全部聞いてたよ」

「イーグル：お前：」

「すみません、しかしアルの事を皆にわかってもらうためです、貴方は言葉をかける事はしないですから」

「：わかった、すまん：気を使わせたか、っ！？」

セレスの決意に関心をしていたら俺は一つの疑問が浮かんた俺が出てきた時にはセレスはいなかった、なのにどうしてセレスがここに来たのかという事だった

セレスから返ってきた答えは意外なもので俺は手にあるイーグルに恨めしそうな声をかけるとイーグルは素直に謝った

イーグルの言い分を聞いて怒る気力もなくなった時、上から雷撃が降り注いできた

セレスを抱えて俺はバックステップをとる、雷撃は俺達がいた場所に落ちてビルの屋上に穴をあけた

上を見上げるとロングブレードを俺達に向けているアルファの姿があり、その表情は怒りで満ちていた

「本当にしぶとい奴だな、貴様は!!」

>セレス、どうして私の邪魔をするの!? 貴方まで私を傷つける気なの? <

「ご期待に添えなくて悪かったな、しぶといのが売りだからな」

「お姉ちゃん、私はお姉ちゃんと倒す戦うんじゃない、お姉ちゃんを止める為に戦うの!」

向かい合う二人の魔導士と二つの融合騎…その想いは決して交わる事なく今、決戦の火蓋が切られようとしていた

「ユニゾンが出来ようが関係ない! 貴様を殺し破壊し尽くしてやる!!」

>立ちはだかるのならセレス、その機能を停止させてでも連れて帰るわ! <

「お姉ちゃんの言ってる事が過激になっている」

「確かに精神が安定してない…セレス、いけるか?」

聞こえてくるアルファとライナの言葉にセレスは怪訝そうになるとアルも同じようにうなずきセレスに問いかける

「もちろん、私もやるよ! ユニゾンをね!」

「わかってるか、セレス：行くぞ！！」

セレスはアルから離れると快く頷き精神を集中させるために目を閉じると自分の身体を包むように魔力を発生させる

アルも同じように目を閉じてセレスと同じように自身の周りに魔力を纏わせていく、すると二人の放出した魔力がだんだんと結びついていく

（なんだろ：前のユニゾンをする時と感覚が違う：）

（力の際限が無くて何処までも飛べそうな気がする：）

「「ユニゾン、イン！！！」」

二人は何時もと違う違和感に戸惑いつつもどこか確信があるように飛び上がり閃光となる、そして掛け声とともに閃光は一つとなると爆発的な魔力が溢れだした

「ぐうううっ！？なんだ、この魔力値は？」

＞アグスタの時とは比べられないくらい魔力反応！まさかあの子！
＜

空中にいたアルファは巻き上がった魔力の衝撃波に耐えながら叫ぶライナは異常とも言える上昇に驚いていると一つ思いあたる事が頭に浮かぶと魔力の発生源である二人を睨み付ける

爆風の如く広がる魔力の衝撃波は空を包んでいた重たい雲を吹き飛ばす、そして払われた空からは月の光が差し込んでいた

「なんだ、あれは…あれがアイツのユニゾンなのか」

月の光を浴びるように空中に佇むアルの姿がアルファの目に写りこむ
アルの漆黒のコートは真紅に赤い髪は鮮やかなエメラルドグリーン
に変わっていた
腰に収納されたイーグルレイダーはひび割れが全くなく新品のよう
に復元されていた
そして閉じていた目を開ける、その瞳は茶色と緑のオッドアイに変
化していた

「奴のユニゾンはあのようなものでは無い！一体何が起きている！
」

フルシンクロ
＞完全同調…壁を越えたって言うの？＜

「完全同調？なんだそれは」

＞私達はマスターとの心のシンクロによって強さが変化します、し
かし扱いを間違えればそれは自滅の力ともなりうる

だからマイスターは私達にリミッターをつけた、それが壁です
マスターと融合騎の心が深く重なった時のみ発動できるユニゾン…
それが完全同調です＜

アルファはアル達のユニゾンに驚愕の声を上げる
そしてライナはアル達の状態について説明をしていく

アルは最初は呆けていたがだんだんと意識を取り戻したのか、自分の手を開いたり閉じたりを二、三回繰り返す

「完全同調：凄い力だな、感覚の強化までされてるなんてな」

＞私の場合は聴覚の強化だけだよ、音が聞こえるのは空気の振動が耳に届くから私は風を使ってその振動を導いているの：魔法の威力や身体も強化されてるみたいく

「なるほどな：力に吞まれたらたじやすまなそうだよな：セレス頼む、俺はお前を信じて戦う」

＞うん、わかった私もアルを信じて戦う
だから一緒に頑張ろう！！く

先ほどのライナの説明が聞こえていたのかアルは完全同調の凄さを噛み締めているとセレスの声が響く

いつもより澄んだ声でセレスは補足をしていくアルは自分の力の上がり具合に背筋が冷たくなり確認するようにセレスに呼びかける
アルの言葉を聞いたセレスは声を弾ませて返答をする

「さあ、ケリをつけるか：アルファ！！」

「うぐ：アルフィリオス！！」

セレスの声にアルは笑みを浮かべるとアルファに目を向けてからいい放つ

アルの感情と共に荒れる魔力の波にアルファは吞まれるのを振り払うように叫ぶと、ロングブレードを振りかぶりアルに向かってソニ

ツクムーブで迫る

「でえりあああっ!!」

「っ! イーグル!!」 「ソニックムーブ!」

迫りくるアルファの一撃をアルはソニックムーブで山なりの軌道を描くように移動すると無防備なアルファの背中に回り込む

「はあああっ!!」

「ぐあっ!?! 貴様!!」

魔力で強化した足でアルの背中を蹴り飛ばすしかしアルの攻撃はまだ終わりではなかった、蹴り飛ばしたアルファを追い越すように移動して今度は近くにあるビルの上に着きつける様に殴り飛ばす

休む事なく浴びせられる連撃にアルファは動く事が出来ずにビルに着きつけられる

「ぐはっ!...うう、アルフィリオス...アルフィリオス!!」

「んな呼ばなくても聞こえてる! セレス!
決めるぞ!!」

>わかった!...: 大気に散らばる、数多の風よ
我が手の内に集まれ:<

叩きつけられたアルファをロングブレードを杖がわりして立ち上がり、アルの名前を叫び散らす

アルも怒鳴るように言い返すとセレスに呼びかける

魔力制御を行っていたセレスは頷くと右手は空に掲げて詠唱を始める

セレスの詠唱とともにアルも右手を掲げると手の平の上に風が集中していき野球ボールのような大きさに玉状に形作っていく

「受ける！エアリアル、スフィア！！」

形成が完了した風の玉をアルはビルの屋上にいるアルファ目掛けて勢い良く投げ飛ばす

最初は野球ボールの大きさだった風の玉は放たれて移動するたびに大気を吸収しだんだんとその面積を広げていきアルファの元に辿りついた時には鉄球程の大きさになっていた

「マスター！回避を！！」

「この程度で回避などするか！…だあああっ！！」

迫りくる風の玉にライナは回避を提案するかまアルファはそれを聞き入れずにロングブレードに電撃を纏わせると風の玉を待ち構えるそして自分の射程範囲に入った瞬間、躊躇う事なく刃を降り下ろす、風の玉は呆気なく両断されると中に圧縮されていた空気が舞い上がり砂埃を巻き上げる

「ハハハっ！この程度か！？貴様の技も大したものではないな！」

アルファは勝ち誇った様に笑いだすが笑いを直ぐに止めて辺りを見回した

> どうしました？ マスター？ <

「風がおかしい…爆風の影響で向かい風だったのが今は追い風だと…っ！まさか、しまった…！」

周囲を確認しているアルファにライナは質問を投げ掛けると、アルファは自分の周りに吹いている風について怪訝な顔をするとかかに気付き上を見上げる、そこにはリップパーの刃を掲げたアルの姿があった

アルファが追い風と感じていたのはリップパーの刃に集まっていく風だった、エネルギーを刀身に集める砲撃魔法それはアルファが先程した事であった

「風の玉はソイツを作る為の布石だったんだな！？」

「そう、お前なら必ず切り裂くと思ったからな…お前が俺の思考パターンを読んだのと同じさ」

> 風の子らよ、我が声を聞け…我が魔力を導として刃に集え
暗く閉ざされた闇を払う力を我々に与えよ！、アル！！ <

アルファは自分が嵌められた事を言うのとアルは微笑を浮かべてから答える

その間にもセレスは詠唱をしていき、アルに呼びかける

「ああ、アルファ…これが俺達の切り札だ！！^{ジョーカー}シルフィ！」

> ソード！！ <

「>ブレイカー!!!<」

セレスの呼びかけにアルは頷くとリッパ―を横に振りかぶってからアルファを睨み付けていい放つ

アルとセレスの声と共にリッパ―が纏う風は勢いを増していく、そして魔法名とともにその刃は振り抜かれた

螺旋軌道を描いた砲撃は当たるものの全てを抉り取るように放たれ、アルファ目掛けて一直線に進んでいた

「アルフィリオス!…貴様をかなら、うぐああああっ!!」

>マスター!!、っ!<

砲撃に呑みこまれたアルファをみながらアルは一息をつく
目の前にあったビルはまるで大きな獣が食べたかのように一部分だけ消失していた

「…どう思う?セレス」

>多分、転移したと思う…一瞬だけ魔力反応があったから<

「そうか…なら良いさ…さてとどうするかな」

ビルの上に降り立つアルはアルファの姿を探したがビルの屋上にアルファ姿はなかった

セレスに意見を求めると少し考えてから返答を貰う、アルは腰に手

を当ててこれからの事を考える

＞そんなの六課に帰るんじゃないの？＜

「あれだけの事をしたから今さらながら帰るのが…ちよつと、な」
＞もう…「だったらはじめからしなきゃ良いでしょ！みんな知って
いるんだから早く帰ろうよ！」

「いやどんな顔していいかわからなくてな…まあもうちよつと時間
を……わかった、帰るよ」

「よろしい、ほら行こ」

アルは皆に合わせる顔が無いなど苦笑して言う、セレスがユニゾンを
解除してから腰に手を当ててむくれつつ怒鳴る

それでもアルはいまいち乗り気にはならずにもう少し時間を潰そう
と提案を持ちかけようとするが、目を細めて殺気に近い視線を送っ
ているセレスに降参し六課に帰る事にした

――

六課のヘリポートに降り立ったアルはバリアジャケットを解除する
それと同時にドアの開閉音と共に足音が聞こえてきた
凄く気まずそうにアルは振り返ると案の定はやて達だった

（どうする？ここはスタンダードでいくか？変化をつけるか？…普
通に挨拶にしとくか）「た、ただいま」

向かい合って気まずい空気が辺りを包み込むアルは試行錯誤した結果、笑顔で挨拶すると言う結果に辿り着き実行する

しかし誰も一言も喋らずに微妙な空気がながれアルは笑顔のまま硬直した

「「アル、さーん!!」」

「んあ?ぐほおっ!?!」

顔をひくつかせているアルに大声で呼びかけながら向かってくる影が見えた、その次の瞬間アルの顔と腹に衝撃が走った

「身体は大丈夫何ですか?」

「凄く心配しましたよ!」

「です、ですゝ!!」

アルの腹に飛び付いてきたのはエリオ、キャロだった、その後リインが勢いをつけてアルの顔に激突してくる

「お前らの突撃の方が何倍もいてえよ…大丈夫だから離れろって」

三人が言葉を投げ掛ける中アルはそれどころではなかった
主に顔面にとりついたリインが痛かったらしく引き剥がしながらつぶやくと三人に落ち着かせる

「アルさん…おかえりなさい」

「レキか：おう、煮るか焼くか決まったか？」

「そんな事はしません、大体アルさんは姉さんを殺していなかったじゃないですか：そんなことは出来ません」

「いやどういう事情であれ俺はレナを死なせる原因を作った、殺したも同じだ：ちゃんと話せなくてごめんな
後、これも渡しとく」

三人を落ち着かせた時に今度はスバルとティアナ、そしてレキの三人がアルの元に歩いてくる

レキに声をかけられるとアルは少しからかうような口調で言う、レキは少しイラついた口調で返してからアルに謝ろうとする

しかしアルはレキが謝罪する前に少し沈んだ口調で話し、懐から待機状態のヴァイスファルケンを取り出してレキの手に乗せる

「アルさん！これは：」

「元々はお前に渡すように言われてたんだ、だけど事情を説明するのを躊躇ってな：遅れたけどお前が受けとるべきだ」

「はい、わかりました：ありがとうございます：」

渡されたヴァイスファルケンを包むように握ってレキは答えるとアルは頭を軽く叩いてからなのは達の元に歩きだす

「よお：怒ってるか？」

「当然」

「当たり前だよ」

「無論だ…」

「怒らない訳がねえ」

苦笑を浮かべながら聞くとなのは、フェイト、シグナム、ヴィータの順できっぱり言われていきアルは肩を落とす

「私達に謝るより先に行かなきゃいけない人がいるよ？」

「ほら早く行ってあげないとね」

「安心しろ、骨は拾ってやる」

「とっとと逝ってこい」

笑顔を浮かべながらなのはとフェイトはアルの背中を押してはやての所に行かせようとするなか、シグナムとヴィータの言葉にアルの背筋は冷たくなった

「……………」

「は、はやてさん？なんで黙ってるの？お願いだから反応してくれない？」

はやての前まで連れて来られたアルは恐る恐るはやてに呼びかける、

しかしはやては腕組みをしたまま黙っておりアルは乾いた笑みを浮かべるしかなかった

何か考えていたのかはやては一回頷いてから腕組みを解くと目を細めてアルを睨み付ける

「今回、私は出撃の命令は出してないんよ…だから今回アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉の無断出撃ということやけど間違いないんか？」

「ああ、それで構わない…処罰の方は？」

「今後、アルフィリオス・ラーゼンハルグ一等陸尉には…一人で抱え込む事を禁止します」

丁寧な口調で話していくはやてにアルは肩身を狭くなるような感覚に支配される

動揺を抑えて出来る限り平静を装いはやてに聞く

はやては処罰を言うときに黙り込む、皆が固唾を飲むなかで言い渡された処罰に全員が首を傾げた

「ちょっと待て、どういう事だ？」

「言うた通りや、先輩はこれからなんでも一人で抱え込む事をせずに私らに話して欲しいってゆうことや、断るなら私は先輩を許さへんからな？」

「はは…わかったよ、アルフィリオス・ラーゼンハルグ…これから一人で抱え込まずにお前らに話すよ」

呆氣に取られたアルははやてに聞くとムスツとした表情のままはやては説明をしていく

アルは他の皆もそれで良いのかと振り返ると皆も同じようなのか、ゆっくりと頷いて返す

軽く微笑を浮かべるとアルは敬礼をしてから復唱をする、その途端はやてはアルに抱きついてきた

「了解や…それと無事でホンマに良かった…」

「わりいな…もう大丈夫だ…だから泣くのは勘弁な？」

本当に心配をしていたらしくはやては肩を震わせながらつぶやく、アルは優しくはやての頭を撫でてあやす

そんな時、アルは後ろから放たれる殺気に気付いた

「主はやてを泣かすとはいい度胸だ…」

「さすがにこれは見逃せないよな…」

「あの…今日は勘弁してください…俺、立ってるのが精一杯なんだからさ!! ねえ!？」

「「問答無用!!」」

チャキリと何かを構える音ともにカートリッジの排出音がアルの耳に届く

アルははやてを庇う様に振り返るとそこには騎士甲冑を纏ったシグナムとヴィータの姿があり慌てて言い訳をして自分の状態を説明する

だが怒りがMAXな夜天の守護騎士にそれが通じる訳なく綺麗な満月が浮かぶ夜空の元、機動六課にいつも通りの断末魔が響き渡った

EP18..すべてを吹き飛ばす風（後書き）

どうもえのきです！いかがでしたか？

シリアス編のラストはアルらしさが出したいと考えたらやっぱり最後は断末魔かと思い、最後はギャグをいれてみました

気に入ってくれると嬉しいです

次回からはA・EPとS・EPをメインにするので本編の更新はそれが終わってからにします

A・EPとS・EPも全力でやるので是非見てください

では本編の次回予告をして終了します

セレス「あの事件から一週間、六課には笑顔が戻り皆が楽しくやってます

そんな中ではじめての休暇が訪れました、私？私はお留守番だよ、アルもレキもデートみたいだからね

別に怒ってないよ、やだな～…とりあえず次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～EP19…リア充は爆発しろ！！byセレス にテイクオフ！
だから怒ってないってやだな～アハハ～」

それでは！

A. EP:少し先の未来の約束 一番近くで、もっとも遠い場所(前書き)

拓也||どえんジョーカーさんからのリクエストです！

5万S. EP後半、ヴィータ&イーグルバージョンです

A. EP..少し先の未来の約束 一番近くで、もっとも遠い場所

そのノックは小さかったが確かに耳に届く音だった

「誰だ？まあ出てみればわかるか」

明日の事を考えていたアルは立ち上がり扉に近寄るとゆっくりと扉を開けた

「よ、よう…今大丈夫か？」

「ヴィータ、大丈夫だぞ…何かあったか？」

扉の前にはヴィータが立っていた、風呂上がりだからかいつもねみっあみではなくストレートに下ろしていた

アルが出てきた事にヴィータは言葉をつまらせながら挨拶をする
意外な訪問にアルは首を傾げつつヴィータに聞く

「あ、えっと…急ぎじねえよ…用事があるのは確かだけど」

「なら立ち話もなんだし、あがれよ」

「う…わかった…そうする」

何故か途切れ途切れに話すヴィータにアルは不思議そうにしながら部屋に招き入れる

部屋に入ったヴィータだったがどこか落ち着きが無く挙動不審であった

「それで何か用なのか？」

「えっと、な…今日は一人でいたのか？」

「ん？まあな、あちこちで話はしたが一人だったな」

用件を問いかけると逆にヴィータに質問を受けるアル

とりあえず今日の事を思い出して答える、ヴィータは小さく「よし」と言いアルに目を向ける

「なら、明日…誰かと一緒にいるのか？」

「いや…特に予定はねえけど一緒にいたいのか？」

「なっ！？／＼／＼そんなわけねえだろ！お前が一人でいんのか聞いて笑うだけだ！！／＼／＼

…まあ、どうしてもって言うなら一緒にいてやらねえ事はねえけどな…」

少し不安そうに聞いてくるヴィータに考え込むようにしながらアルは答えてから、質問を投げ掛ける

ヴィータは噛みつかんばかりの迫力でアルに怒鳴りつけるが、人差し指同士を付き合わせながら照れくさそうに呟きだす

わかりやすいごまかし方にアルは笑いをもらすのにこやかに笑いつつヴィータを見る

「ならどうしても一緒にいてほしいな」

「し、仕方ねえ奴だな／＼／＼…なら明日の飯が済んでから浜に来いよ？」

ドタキャンしたらぶっ飛ばすからな？」

嬉しさを隠すため、わざとらしくヴィータは言うと言をアルにむけて集合場所を指定すると部屋を出るために扉に近づくが、何かを思い出しアルの方をもう一度だけ向き少し不機嫌そうに忠告して部屋を出ていく

まるで嵐が去ったかのように静まり返った部屋で、アルは一息つく
と明日のために早く寝ようと横になる

「アル、少し良いですか？」

「ん？起きたのか？イーグル」

突然、首元のイーグルが光りだし話しかけてきた、アルは閉じかけていた目を開けてから答える

「ええ…少々聞いておきたい事がありました」

「珍しいな、なんだよ言ってくれ」

「…今日一日私がいなくてどうでしたか？」

「はい？」

いつも通りの単調な口調のイーグルだけど話しの内容は違って

アルは不思議そうにしながらも頷く

どんな質問かと楽しみにしながら返すと聞かれた内容に首を傾げた、
どうしてイーグルがそんな事を聞くのか？そもそも聞く利点はある
のか？

アルの頭はそう考えていたが余り黙っていると余計にわからなくな
りそうに思い答える事にした

「そうだな、違和感があったな：イーグルに話しかけても反応ない
し、いつも通りじゃなかったな」

「そうですか…」

「なんでまた、そんな事を？今日は休日だから休ませたつもりなん
だがな」

「機械的に言えば動作しない事は休みになります、が私としては嫌
でした…」

今日の事を思い出して苦笑を浮かべてアルは言うとそのけなく返答
をするイーグル

アルは不満があったんじゃないかと思い質問を投げ掛ける、すると
返ってきた答えはあまりにも意外だった

「むう、言葉にしにくいのですが寂しかったというのでしょうか、
そんな感じでした…」

「なんていうか意外すぎる回答だな、デバイスでも思考はあるがそ

んなに豊かになってるなんてな」

「マスターたるアルが感情の変化が激しいから影響されたのかと……つまり貴方のせいです」

「ずいぶんな言いぐさだな……もう少し戸惑っても良いだろ？ 弄りがいないやつだ」

イーグルは言葉を選びながら話していくがそれはどこか不安気だった横になっていたアルは身体を起こしイーグルに話しかけるその言葉は驚いていたが表情は喜んでいた

アルに言葉をかけられたイーグルは別に嬉しくないといった感じに返答をする

喜んでいないイーグルにアルはつまらなさそうに言ってからため息をつく

「ではアルは……わかってる事、わざわざ言わないでよく、バカバカしくとも言えば良かったですか？」

「すまん……」

「賢明です、というか私も若干虫酸が走りました」

弄りがいないと言われたイーグルは少し考えてから猫なで声で返答をしてから普通の口調に戻して質問をする

長年一緒にいた分、イーグルの猫なで声を聞いたアルは鳥肌をたて

て謝る

イーグルも同じなのか声を低くして同意した

「アル：私は人間らしい感情はありますが人間ではありません」

「ああ、そうだな」

「ですが私にも願望があります：いつか自由に動ける身体を手に入れる事です、そしてアルに：」

「俺に：なんだよ？早く言ってくれ」

同意したイーグルはまた唐突に喋りはじめる、明らかにおかしいとアルは思ったが真剣に話すイーグルに何も聞けず、ただ相づちを打つしかなかった

そんなアルに気にも止めないイーグルは話を続けていく、そして夢を話した辺りで言葉を止めた

言葉の続きが気になるアルは少し焦れながら催促をする

「：アルに：思いっきりツツコミを入れたいです」

「なんでだよ！？」

イーグルの言葉を溜めに溜めいざ言われた言葉にアルは全力でツツコミを入れた

「何故ですか？喜んでくれると思ったんですが：」

「やめろよ！その超意外みたいな発言！！
俺はMじゃないからな！？」

「なら今からでも開花したら良いのでは？」

「しない！！てか自分のマスターがMになってお前は良いのかよ！！」

全力のツツコミにイーグルは驚いたように言ってから声を沈める

アルは額に手を当てて自分にかけてる疑いを晴らす為に否定を
すると、イーグルは声を弾ませて提案をしてくる

提案を却下すると逆に提案をしてきた本人に聞き返す

「まあ、アルですからね」

「俺の事、ぞんざいに扱ってないか！？」

「まあ、アルですし」

「それで全部済ますな！！」

自分の扱いが酷い事に腹を立てたアルはイーグルを枕元に置くと眠
る為に横になる

イーグルに抱いていた疑問は苛立ちからか聞く気が失せていた

「アル、眠る前に一つ良いですか？」

「今度はなんだよ…」

「私がもし人型になったら…どう、思いますか？」

「どうもしねえよ…お前が何の形になろうが俺の大事な相棒だからな」

目を閉じたアルにイーグルは再び話しかけてくる

今度は面倒臭そうに返す、しかし投げ掛けられた質問に目を開けたそしてため息をつくといつも通りの口調だがはつきりと宣言をする

「わかりました」

「おう…わかれば「アルが凄い見境が無いことがわかりました」ちよい待て!!…なんでそうなる!？」

「わからないなんて天然つもりですか?…ならなおさら質が悪い…」

「理不尽だ…凄い理不尽な発言だぞ!!…」

イーグルは言葉無くしていたが短くつぶやく、アルはにこやかに笑っていると予想外の言葉がイーグルから発せられた

アルは慌てて聞き返すと失望したような口調でイーグルは喋っている、デバイスの暴言にアルは肩を落として落ち込む

「まあアルを弄るのもこの辺にしておきますか…明日は何やら予定があるみたいですし」

「本当にお前は何がしたいんだよ」

「寂しかったといったでしょ？故に八つ当たりです」

「はぁ…もう疲れた…」

落ち込んでいるアルをしり目にイーグルはわざとらしく言えばアルは恨めしそうに聞く

イーグルはすっぱりと言い切る、もはやツツコミきれなくなったのかアルは欠伸をしてから寝始める

寝付きが良いのか直ぐに寝息が聞こえてきた

「アル…先ほどの言葉は嬉しかったです…私の夢、出来れば叶わな
いで欲しい気がします、だってデバイスであるから気持ちを片付け
やすい…」

そうで無いならこの気持ちを抑えきれませんから…一番近くでもつ
とも遠い場所…

この場所にいることに感謝します…アル」

寝ているアルにイーグルは優しく語りかけていくとまるで祈るよう
な言い方をしてからスリープモードに移行した

翌朝

「おはよう…さん」

「ずいぶんと眠そうだな…」

大きな欠伸をしながら挨拶をしてくるアルに目を細めながら返事をするヴィータ

「昨日はアレからいろいろあつてな…」

「そんなに大丈夫なのかよ？」

「心配すんな、ちゃあんと一緒にいてやるからよ」

「そっか…って逆だろ！？あたしがいてやるんだよ！間違えんな！
！／／／」

欠伸をしながら寝不足の理由を大雑把に話す、ヴィータは少し不安そうな口調で聞く

アルは微笑を浮かべて頭を撫でるとヴィータは安堵の息をもらすが直ぐ様、強気な口調で訂正をしてくる

ヴィータの表情の変わり具合を楽しみながらアルは浜にやってくる
と人だかりが出来てる事に気づく

「なあ、ちょっと見てかないか？」

何かやってるみたいだからよ」

「えっ…まあ良いか、なら行くぞ」

人だかりを指でさしながらアルはヴィータに聞くと、少し不満な表

情をヴィータは浮かべるがため息まじり了承すると人だかりにむけて歩きだし

— — — — —
SIDE…ヴィータ

「さあさあ、みてらっしゃい！寄ってらっしゃい！我こそと思うものは名乗りでな！！」

あたし達が人だかりに近づくときデカイ声が耳に入る、人混みをかきわけてみるとそこには日傘の下で声を張り上げるオッサンとスイカが一つ置いてあった

「このスイカはとてつもなく堅いスイカ！しかしその中身は高級食材にも劣らない味！！もしも割れたのならスイカ丸ごとと金一封をあげちゃうよ！！！！」

「その話し本当だな！？なら俺様が試してやるぜ！！」

オッサンの口上を聞いていた奴らは歓声を上げた、そして筋肉質の身体を見せつけるような水着をきたオッサンが人混みをかきわけて名乗りでる

「おっ！旦那、良い身体してますな！ではこんなから割るのに使うもんを選んでくれ、あちなみに前料金があるから払ってくれるかい？」

「フン、そんなちやなもんより俺様の剛腕で十分だ！どっせえい

「!!」

筋肉質のオッサンは前料金を払うと指を鳴らしながら瓦を割るような姿勢をとり、勢い良くスイカを殴った

誰もが割れたと思った瞬間、衝撃的な事が起きた

「うぐおおっ！俺様の腕がっ！！」

「残念～：コイツは人を選ぶみたいだね
アンタは嫌われたみたいだよ」

「ちくしょーっ！！」

筋肉質のオッサンは自分の腕を押さえながら喚いた

スイカのオッサンは大げさなりアクションをして笑いながら言う
と筋肉質のオッサンは何処かに走り出した

こんときあたしは違和感を覚えた、筋肉質のオッサンが殴った時に
スイカに薄い膜が出来ていた
スイカが防御魔法を使う訳がない、かといってオッサンが何かした
わけじゃない：なら

「多分ロストログアだな：ありや、海鳴市で相手した奴と似たよう
なもんだろう」

「でもまだ確証は無いんじゃないか？」

「大丈夫だ：イーグル」

「全くデバイス使いが荒い人です…スキヤニングは完了しました
間違いなくロストログアです」

あたしが言おうとした事をアルが先に言ってきた、あたしはまだ早
いと答えるとアルは首元のイーグルレイダーを軽く小突く

不満気に言葉を発してからいつの間にか行っていた解析の結果を報
告する、それを聞いたアルはまるで獲物を仕留めたかのような勝ち
誇った顔をしていた、それは事件を担当して解決の糸口が掴めた時
に見せる表情…

絶対的な自信があるその表情はアルが見せる表情の中で一番好きだ
ったりする

「さてとセコい商売は幕引きをしてもらうか」

「さて次に挑戦する奴はいるかい!？」

「はーい! 挑戦しまーす!」

スイカのオッサンは人混みに声をかけていくとアルがふざけたよう
な口調で返事をして人混みを出ていく、あたしもそれについていく
様に移動をする

「お、兄さんみたいな腕じゃ無理じゃないか? ハッハッハ」

「確かに無理だよな：ロストログアの防御壁を木の棒で壊すなんて、な？」

「何が言いたいんだい？ロストログアってなんの事だ？」

「簡単に言えばあんたのセコい商売はもう終わりって事だよ：ロストログアの違法所持でな」

アルを見たオッサンは笑いながら言う「アルは特に気にせずにスイカに目を向けながらいい放つ」

笑っていたオッサンの表情が止まると睨みを飛ばしながらアルに返す、アルは視線をオッサンにむけると指をさしながらきっぱりと宣言をする

アルの突然の行動に周りは騒然としていた、そんな中でオッサンは余裕を見せていた

「冗談はよしなよ？ロストログアってのが何処にあるんだい？目の前にはスイカしかないじゃ、ないか？」

「そんなだよな？わざわざ下を切り抜いて中に仕込んだ、違うか？」

「そ、そこまで言うなら証拠を見せな！話しはそれからだ」

あくまで白を切るようにオッサンは言っていくとアルの射殺すような視線に言葉が止まる

アルは視線をオッサンにむけたまま淡々と追い詰める様に言っていく、それに対してオッサンは強引に話を変えだした

「証拠ならそんなにあるさ…
叩き割ればいい」

「ハッ！そこまでいうならやってみろ、どうせ割れやしないんだからな」

「だそうだ…行くぜ？ヴィータ」

オッサンに問い詰められたアルは特に難しくもなく返す、簡単にいい放つアルにオッサンは挑発のような言い方をしてきた、そしてアルはあたしの方を向いてしてやったりといった顔で向く

自分からじゃなくあくまで相手がけしかけさせるようなやり方をする、本当に管理局員なのかよ…お前は

だけどそれに同感をするあたしも人の事は言えないよな、あたしは苦笑をすると待機状態のアイゼンに手をかける

「ああわかったよ、アル！アイゼン！！」

「やれるもんならやってみるか…良いぜ、やってやるよイーグル！」

「「セットアップ！！」」

あたしとアルは自分の愛機を掲げるようにすると待機状態からデバイス状態に変形させた

まばゆい光のあとスイカの男の目には、バリアジャケットを纏ったアルとヴィータの姿が映った

「ほんじゃ、いっちょ行くぜ!!」

デバイスを構えたアルはスイカを思いっきり真上に蹴り飛ばす、自身が危険に迫った事によりスイカは自身より二周りほど大きな防御を張った

「リボルビング、ビークストライカー!!」

アルは重力に従って落下してくるスイカを狙い撃つようにステークを発射する、衝撃音と共にスイカは再び真上に高々と打ち上げられるステークが直撃したスイカの防御壁はヒビが入りだし、あと一撃を入れれば砕けそうだった

「こりゃ俺のアシストはいらんかったかもな…」

「全くだ、あたしを誰だと思ってんだよ

破壊と突破はあたしの十八番なの忘れたか、よ!!」

ヒビが入った防御壁を見てアルはわざとらしく言うと、隣にいたヴィータは肩に担いだグラーフアイゼンを構えて楽しそうに言いながらグラーフアイゼンを思いっきり振り抜く

豪快な音ともにスイカの防御壁が砕け散りアイゼンはそのままスイカも打ち砕く

砕かれたスイカの中から黄色の菱形の宝石が姿を見せるとアルはそれをキャッチして男に見せつける

「あいよ、確かに割ってやったぜ？」

「何もんだ！？あんたら！」

「時空管理局の魔導士だ…ロストログア違法所持で逮捕させてもらうぜ」

「あ…が…」

ロストログアを見せつけるアルに男は焦りながら問いかけるとアルはきっぱりといい放った後、バリアジャケットを解除する

「く…なめんじゃねえぞ…！」

「っ！てめえ…！」

「おうらああああっ…！」

男は急に立ち上がると懷からナイフを取り出して構えるとアル達にむけて走り出す、男の狙いはアルではなくヴィータにむけられていたバリアジャケットを解いて油断していたヴィータは不意をつかれ避ける事は出来ずに目を閉じた、だがヴィータにナイフが襲うことはなかった、恐る恐る目を開けたヴィータは驚いた

「まったく…セコい商売の上に悪あがきの仕方もセコいとはな…」

「アル!! お前…」

「怪我はねえな? ひとの大事なお嬢様になにしてやがんだ! このドサンピン!!」

男とヴィータの間にアルが割って入り突き出されだナイフを素手で握りしめていた

滴り落ちる鮮血を気にも止めずにアルは、男を睨み付けるとその腹部に思いっきり膝蹴りを打ち込み昏倒させた

— — — — —
SIDE…アルフィリオス

まあその後はイーグルが招集したはやて達にロストログアの封印とオッサンを任せ俺は傷の治療を始めた

オッサンの事情聴衆はフェイトとシグナムが担当していたが、休みを邪魔されて相当ご立腹の様子だった

正直触らぬなんとかだろう、ロストログア発見もあり俺達は六課に戻る事になり休みは一日半で終了した

俺はというと皆が帰りの準備をするなか一人入り江でスイカを食べていた

サボりではない、荷物が少ないし怪我しているから作業はいいとの

事だった

「ここにいたのか、アル」

自分のしている事を正当化している時に後ろから声を掛けられた、振り返るとそこには私服に着替えたヴィータが立っていた

「おう、なんかやることなくてな」

「わりい…それはあたしのせいだ…」

「あゝ、気にすんなくて！
んでなんかあったか？」

「えっと…休み、終わったよな」

苦笑しながら俺はヴィータに返答をすると申し訳なさそうな声をヴィータは出した

アホか、俺は…

大げさに笑いながらヴィータに質問をするとどこか恥ずかしそうに確認してきた

「まあな…また何処かに行けたら良いんだけどな」

「…だったら、これ！…一緒にいかないか？」

「『スノーフェスタ、ペアご招待チケット』これ…昨日海の家でやってたやつだよな？」

「ああ昨日優勝したから貰ったんだ：良かったらで良いんだ：あたしと行かないか？」

軽く冗談のつもりで話したらヴィータは一枚のチケットを見せてきた内容を見てから昨日の事を思い出して確認をするとヴィータは小さく頷き、少し自信無さげに聞いてくる

もちろんイエスと答えたかったが俺は一つおかしい点を見つけた

「ヴィータ：これさ：使えるのクリスマスなんだけど」

「はあ！？んな訳：本当だ：」

俺の投げ掛けた事実にはヴィータはチケットを手にとって見直すと落胆をした

「まあ少し早いけどクリスマスの予定が決まったな：忘れんなよ？」

「アル：お前こそ忘れんなよ？」

ヴィータの手からチケットを取ってからにこやかにいう、するとヴィータも俺に釘を刺してから笑顔を浮かべた

「なあ手、本当に大丈夫か？」

「ん？なら叩いてみるか？：なんて「おらっ！！」イタァーっ！本当にするか！？」

笑っていたヴィータは俺の手に巻いている包帯を見ながら聞いてくる、俺は心配させないように手を出してからいったらヴィータは本当に叩いてきやがった

ヒドイです…

「つたく…やっぱり痩せ我慢じゃねえか…早く治せよ？…それと…これは、助けてくれた礼だ…」

俺は手を押さえながら痛がっているとヴィータはわかっていたかのように言ってくるその瞬間、自分の頬に柔らかいモノが当たる感じがした

慌てて振り返ると耳まで真っ赤にしたヴィータがそっぽを向いていた

「あくまで礼だからな？／／／
勘違いしたらぶっ飛ばすから／／／
はやく来いよ？…はやて達が待ってるから」

「…ワツツ？」

顔が赤いままのヴィータは早口で言っていくと走ってその場を後にした

ちよい待て…今のは？お礼？アイツが顔を赤くするくらいって…ええっ！？

未だ事情が把握出来てない俺はスイカを片手に硬直していた

おまけ

「ヴィータ、どないしたん？顔が真っ赤やで？」

「はやて…悪いあたしはフェイト達と帰るから／／／」

「？それはええけどホンマに大丈夫なん？」

「うん大丈夫：／／／」（自分のしたことが今さらになって後悔してアルと顔が合わせられないなんて言えない…）

A. EP：少し先の未来の約束 一番近くで、もっとも遠い場所（後書き）

どうもえのきです！

今日から三回の更新はヴィータメインのヴィータ祭でやりたいと思います！

楽しんでくれたら嬉しいです…まあ今回はもげろという声が多そうですがね（笑）

ちなみにこのA・EPは続編となります、クリスマスのネタとイーグル擬人化のネタにつながる予定です

見てみたいという人はリクエストしてくれたら嬉しいです

さてさて次回はいいいよ10万PV記念小説です！

楽しみしてください、ではでは

S. EP..不良少年とハンマー娘（前書き）

ヴィータ祭&10万PV記念小説でございます!!

楽しんで貰えたら嬉しいです

S. EP..不良少年とハンマー娘

ミッドチルダにある学園、『リリカル学園』そこでは今現代では珍しいヤンキーが我が物顔ではびこっていた

「オラオラーっ！」

「ヒヤッホーイ！最高だぜ！！」

「どけどけー！！」

学生達の声が賑わう通学路にけたたましいエンジン音が響き、三人乗りのバイクが猛スピードで駆け抜けていく、通学路を歩いていた生徒達は目を合わせないようにしながら歩いていた

「兄弟！今朝のバイクは調子が良いな！」

「おうよ！チューンは完璧だからな！
このまま校門まで最速で行くぜ！！」

「いけいけー！！」

三人はバイクを飛ばしながら校門へと移動していた、校門が見えだすと不良の一人が目をこらした

「おい、校門の前にガキが立ってんぞ」

「ああ？構うかよ、オラオラお嬢ちゃん、どかねえとひいちまうぞ
！」

「まうぞー!!」

校門の前にいた少女は不良を視界に入れると面倒臭そうにため息をついてからポケットに手を入れハンマーの形をしたキーホルダーを取り出す

不良達は少女に構うことなくバイクのアクセルを上げて突っ込むその瞬間、凄まじい轟音が辺りを包み何かが落ちる音が辺りに響いた

「副委員長！お怪我はありませんか？」

「グリフィスか？そんなのねえよ…だいたいこんな奴らにどう間違えれば怪我すんだよ」

腕章をつけ眼鏡をかけた学生が土煙を確認し走り寄りながら呼びかけると土煙の中から不機嫌そうな声が聞こえ土煙が晴れると校門の前に立っていた少女が肩にハンマーを担いでいた

少女の前には地面に転がる不良とひしゃげたバイクがあった、先程の轟音と落下音はこれであった

「あんな止め方すれば心配をするに決まっているでしょ、学園の秩序を守る風紀委員にしかも副委員長である貴方になにかあれば「周りの不良が調子に乗る、だろ？」…そうです」

「わかってる、けどあの手のバカにはこれしか方法がねえんだよ…なんかあったら呼べ」

眼鏡をかけ直しながらグリフィスは少女に説明をしていくと少女は

面倒そうに返してからハンマーを担ぎ直して学校へと向かった

増大する不良に対抗するため一つの組織が結成された、その名は『風紀委員』：学園の秩序を守るために日夜、不良達と戦うために選ばれた者達だ

少女の名前はヴィータ、リリカル学園の風紀副委員長

手に持たれたハンマーで不良を倒す様から『紅の鉄姫』との異名で恐れられていた

「これで朝の登校者は終わり、後は全員遅刻扱いだな？」

「はい、現在学園の生徒の九割は登校しています」

「中々、遅刻者は減らないもんだな…」

「こればかりはどうしようもないですからね残りは不良たちですか」

登校時間が過ぎてヴィータは風紀委員と共に今朝の結果報告を聞いていた

グリフィスから聞かされる報告にヴィータは頭を抱えるようにため息をつく、グリフィスも疲れた様に話す

「まあ良い：後はあたしが委員長に報告を渡しとくからお前ら戻って良いぞ」

「はいお疲れ様でした」

「「お疲れ様でした」」

「おっつゝ♪」

ヴィータは肩を自分で揉みながら委員に伝えるとグリフィスを始めに委員から挨拶が聞こえる中で明らかに違う声が混じっていた

ヴィータや委員が目を向けるとそこには制服をだらしく着て髪がボッサボサの生徒が片手を上げていた

ヴィータはその生徒が目に入ると憤怒のオーラを噴出させると愛鎚『グラーフアイゼン』を取り出してボッサボサ頭にむける

「なんででめえがここにいんだよ！？アルフィリオス！！」

「いやあ：おばあちゃんが重そうな荷物持ってたもんでさ」

ヴィータはグラーフアイゼンを突きつけてアルフィリオスと呼ばれたボッサボサ頭に怒鳴りつけると、アルフィリオスはヘラヘラ笑いながら答える

その瞬間、ブチッと言う音が委員達の耳に聞こえた

「この前は出産直前の妊婦さん、更に前は車に引かれそうな子供：

そして今日はばあちゃん：お前の家の近くにはそんなのしかいねえのかよ！！」

「後はリストラされたサラリーマンとか老人ホームから迷い出たじいちゃんもあ「死ねやー！ーっ！！」おうわ！あぶねえっ！？」

「今日という今日は許さねえ：いい加減にしやがれ！」

「やばっ！秘技、戦略的撤退！」

手をワナワナと震わせながら、ヴィータは今までアルフィリオスがしてきた言い訳を並べると我慢の限界がきたのか、思いつきり怒鳴る

対してアルフィリオスは特に焦る事なく他の理由候補をあげると彼の額、目掛けてグラーフアイゼンが降り下ろされた

間一髪で避けるがグラーフアイゼンが当たったアスファルトは砕け散り、その威力の高さを物語っていた

そしてヴィータはグラーフアイゼンを掲げると再びアルフィリオスを狙いだす、命の危険を感じて学園に向けて全力で逃走を開始した

「まちやがれ！、この万年遅刻男！！」

「待てと言われて待つわけないだろ？チビスケ」

「誰がチビスケだ！クオラッ！！」

逃走したアルフィリオスを追いかけるようにヴィータは走り出す、逃走しながらアルフィリオスは挑発するような言い方をするとヴィ

ータは更に怒りを燃やして速度を上げた

アルフィリオス、本名はアルフィリオス・ラーゼンハルグ：リリカル学園の三年一組に所属

授業は寝るかサボり、早退欠席は日常茶飯事の不良生徒
しかし他の不良とは違い傷害を起こさない不思議な不良
ヴィータとの追いかっこが日課

「んでいつも通り取り逃がした訳やな？」

「ごめん…はやて」

「奴にこだわるなどは言わんがあまり熱くなるな」

「わかってる…でもアイツはあたしが取締りたいんだよ、シグナム」

風紀委員に割り振られた部屋にてヴィータは肩を落としていた、彼女の前にいる栗色の髪で関西弁の少女、はやては微笑をしながら言う

ヴィータは更に肩を落として謝ると関西弁の少女の隣にいるピンクのポニーテールの女性、シグナムがため息まじりに話す

はやて…本名は八神はやて、風紀委員長

穏和な人柄だが風紀委員をまとめあげる器がある

ヴィータが心を許す数少ない人

シグナム：風紀副委員長

風紀委員であると同時に剣道部主将、ヴィータと共に不良達からは恐れられている

「何故そこまでアルフィリオスにこだわる？ 奴は確かに不良の類には入るが他の奴らと違って実害を出してる訳じゃない」

「なんか理由があるんか？」

「似てるから…」

「「似てる？」」

いつもは不良を取り逃がしたら悔しがった後は普通にしているヴィータがここまでこだわる事に疑問を抱いたシグナムはヴィータに問いかける

はやてもそれは知りたいらしく便乗して聞くとヴィータは一言だけ呟いた

「変な事言ってごめんな…」

考えてみりゃあんな奴にこだわんのがおかしいよな、不良はまだまだぶっ飛ばさなきゃならないんだ！

構うだけ時間の無駄無駄、あたし見回りに行ってくる！」

何かを話そうとしたヴィータであったが一瞬だけ躊躇い話題を強引

に終わらせ廊下のほうにそそくさと出ていく

残されたはやてとシグナムは顔を見合わせた後ヴィータの出でいった扉を見る

「昔の事になるとあの調子やな…」

「アイツは昔、自分のしてきた事を今でも後悔していると思います、出来ればそつとしてあげて下さい
私も一部は知ってますがアイツのため話しはしません」

「うん、私も無理矢理は聞きとうない
だからヴィータが話してくれるまで待つつもりや」

「ありがとうございます、八神委員長」

話しをごまかしたヴィータにはやては心配するように呟くと、隣にいたシグナムがすまなそうに頭を下げてから頼みこむ

はやては優しく笑いかけながら答えるとシグナムは自分の事のように礼を言った

部屋から出たヴィータは廊下をフラフラと歩いていた
見回りという名義ではあったけどそんな気にもならず、ヴィータは深くため息をついた

「あら？ ヴィータちゃん、どうしたの？ 元気なさそうだけど」

「シャルカ…ちよつとな…」

ふと後ろから声をかけられて振り返ると白衣を纏った女性、シャルカが立っていた

シャルカ…三年二組に所属しているシグナムのクラスメイトで保健委員

その笑顔で養護教諭、顔負けの人気があるが料理が殺人クラス、あの意味人を生かすも殺すも出来る人

話し掛けられたヴィータは罰の悪そうな表情をする、それを見たシャルカはあまり深く追求しないようにし、ポンと手を叩く

「そういえば、ヴィータちゃんはやてちゃん達に報告することがあったんだったわ」

「報告？ なんだよ」

「最近、怪我をしてくる生徒が増えてるの
他校でも風紀委員が怪我をしたりとかあるみたいだから気をつけて欲しいの」

「そうか…はやて達に報告しといてくれないか？
あたしは見回りあるからさ」

シャルカから伝えられた情報を聞いたヴィータは難しい表情をする

とシャマルに報告を頼むとそのまま歩いていく

（生徒が怪我か…なんとかしねえとな…）

歩きながらヴィータは思考を巡らせたがいい案が浮かぶ事はなかった

――昼休み――

「いやあ…大量、大量！」

両手に大量のパンを抱えたアルフィリオスは意気揚々と食堂にきていた

リリカル学園は食堂と購買があり財布状況が厳しい人には購買がオススメらしい

「にしても、混んでんな…慣れてない奴等はこれに戸惑うだろうな」

アルフィリオスの目に混雑する人混みが映っていた、リリカル学園の生徒数はかなりのものでいわゆるマンモス校である、なので食堂の込み具合は半端なものではない

たまに慣れていない生徒がいれば何をしていいかわからずワタワタしている事がある

「まあ絵に書いたようにオロオロしている奴はそうそう…いた」

近くにある自販機から飲み物を買いながらアルフィリオスは呟いて

いると、一人の生徒がまるで迷子のように辺りをしきりに見回して歩いていた

明らかに慣れてませんといった感じの生徒にアルフィリオスはため息をついてからその生徒に近づいた

近づいていくとその後ろ姿がはっきりしていきアルフィリオスは思わず苦笑をした

「よお、副委員長：今日は学食か？」

「アルフィリオス！？なんでお前がここに！」

「まあ待て身構えんなよ、俺は見ての通り購買でパンを買ってきたんだよ、いつも見ないけどどうした、弁当でも忘れたか？」

オロオロしていた生徒もといヴィータにアルフィリオスは気さくに話しかけると、ヴィータは一目でわかるくらいに敵意を向ける

さすがに飯時まで追いかけてはしたくないアルフィリオスは手を動かして少し冗談まじりでヴィータに問いかける

「う…」

「おいおい…マジかよ」

「うるせえ！わすれちゃったんだから仕方ないだろ！！」

アルフィリオスの問いかけにヴィータは気まずそうに視線をずらす、乾いた笑みを浮かべながらアルフィリオスはヴィータを見るとヴィ

「タは当たり散らすように言い

「逆ギレすんなよ…んじゃいるか？

俺のパン余ってるからよ」

「えっ！？良いのかよ？」

「ああ、いらないうってなら話しは別だけど」

アルフィリオスからの提案に驚くヴィータ、思わず聞き返すけどアルフィリオスの答えは変わらなかった

顎に手を当ててヴィータは悩むが空腹には勝てなかった

「わかった、お前のパン…分けてくれ」

「おう、なら屋上にでも行くか
多分人いないし」

腹の虫がなる音を聞きながらヴィータはアルフィリオスの提案を受ける

アルフィリオスはパンを持って上をさすと先導するように歩き出す

「にしても意外だな」

「何がだよ…」

屋上のベンチに座ったアルフィリオスは若干隙間を開けて座るヴィータにパンを渡すと少し楽しげに話す

いきなりの話題に目を細めながらヴィータは返答をする

「いやな、お前は俺の事を目の敵にしてるからよ
あつさり聞き入れたのが驚いてな」

「自覚あんなら、遅刻とかすんな
その、目の敵にしたのは悪かった、あれはあたしの個人的なもんだからさ」

アルフィリオスは苦笑をしながら言うのと、呆れたような声を出してから気まずそうに謝るヴィータ

「個人的なもん？良かったら聞かせてくれないか？なんか気になつてな」

「…わかった、お前になら話してもいいかもな」

ヴィータの言葉を聞いて不躰ながらも問いかけるとヴィータは少し考えてからアルフィリオスに話す事にした

SIDE…ヴィータ

この学園に入るまであたしは不良だったんだ、今は更生したけど昔は自分で言うのもなんだけど、最悪な奴だった

とにかく手当たり次第に暴れまくって、理由なんてムシヤクシヤしたからとか凄く勝手だったんだ

そんなあたしには誰も近寄らず来るのは名を上げようとする不良のみだった、そんな時にあたしはその人と出会ったんだ

あたしはいつも通りのケンカをしてたんだ、そしたら不良の一人に不意打ちを食らってなしかも打ち所が悪かったのか気絶しちまったんだ

だんだん見えなくなる視界に不良達がいてあたしはここまでなんだったって思った

次に気がついた時には不良達はいなくて代わりにオールバックのヘヤースタイルの赤髪がいたんだ

「お前…あいつらの仲間か？」

「いや、ただの通りすがりだ」

「はぁ！？通りすがりがなんで赤の他人を助けんだよ」

「通りすがりが人を助けちゃいけないなんていつ決まったんだ？」

意識を取り戻したあたしは目の前の赤髪を睨み付ける、それに対して赤髪はすっぱりと答えた

想定していた答えとは違うことにあたしは赤髪の言うことが信じられず反論すると、赤髪は不思議そうな声を出して聞いてきた

あまりにも不可思議な奴にあたしは何も言えずに黙っていたら、赤髪の方から話しかけてきたんだ

「お前さ、なんでそんなにつまんない顔してんだ？」

「いきなりなんだよ？ケンカ売ってんのか？」

「いやいや、ケンカしてる時も気絶してる時もなんかつまんなそうにしてるからさ、どうすれば満足するかなって思ってたよ」

「んなのわかんねえよ！あたしだって何がしたいのか、何が楽しいのか、わかんねえんだよ！！」

いきなりの言い方にムカついたあたしは赤髪に怒鳴り付けると赤髪の奴は思い返すような声で言い出す

昔の事だから覚えてねえんだけど、確かにあたしは何かがつまらなくてケンカに明け暮れてたんだ

やりたい事も見つからない、そんなどうしようもない思いをケンカで発散してたんだ

赤髪に指摘されたあたしはそんなときはじめて自分の気持ちを他人にぶつけたんだ、赤髪なら答えを出してくれるそんな気がしたから

「ならさ、今度は人のために動いたらどうだ？」

「人の…ため…？」

「他人を助ける、自分に出来る範囲でな

お前は今迷路にいるみたいなんもんだ、だから抜け出すために少しだけ違う角度から見てみるんだよ、そしたら出口が見つかるかもしれないだろ？」

「そんなの無理に決まってる…あたしがどんだけ暴れたか知らないだろ？誰もあたしを見ない、できっこない」

赤髪という提案を聞いたあたしは即座に否定した、人を助けただけでなにかが変わるわけじゃない

それ以前にあたしはみんなに知られる程の悪党だ

簡単にいくわけない、そう思ってあたしは赤髪の提案を否定した

「最初からあきらめてりゃなんもできねえぞ？

確かに不良が人助けなんざおかしいし、訳がわからねえな…だけどそっから変わるかもしれないだろ？

俺が信じてやるよ、お前が変わるってよ」

「…なんで、そこまでするんだよ…」

赤髪の言葉はとても力強くあたしの不安は吹き飛ばされいく、けどまだ信じきれないあたしは赤髪に質問を投げ掛けた

「もしお前が変わる事が出来てもう一度会えたら教えてやるよ」

それだけ言うのと赤髪はどこかへと走りさった、後から聞いた話しだけどあいつは『荒鷲』って異名で通る程の有名人みたいだよ

不良から誰かを守る為にケンカするっていう変わり者、でもあたしをはじめて励ましてくれた人なんだ

それからはやて達と会って今はこの学園で風紀委員をやってたんだ

――――

「それでな、お前も赤髪だからさ…その」

「初恋の人に似てる奴ががちゃらんぽらんなのが嫌で目の敵になって訳か…」

「初恋とかじゃねえ！！／＼／＼

荒鷲には憧れてるけどそんなじゃないからな！？」

まあちゃらんぽらんが嫌なのは確かだけだよ」

話しを終えたヴィータは少し気まずそうに言っていくとアルフィリオスが代わりに答えるが、その答えに顔を真っ赤にしながらヴィータは訂正をする

「なるほどねえ…なあ副委員長？明日からさ遅刻しないって嬉しいか？」

「？なんだよ…いきなり、そりゃ面倒事が無くなるのは嬉しいけどよ」

「なら一つ条件を呑んでもらえるか？」

「条件？…変な事じゃないだろうな」

話しを聞いていたアルフィリオスはヴィータの方に視線を移すといきなり質問を投げ掛けてきた

突然の事にヴィータは怪訝そうに目を細める、アルフィリオスはそれに気にする言葉が続けるとヴィータは殺意に近い視線を送る

「変な事じゃねえよ、んで条件ってのは…」

「そんな事で本当に遅刻しないで来んのかよ？信用ならないな」

「まあそれは明日になってからのお楽しみだな…ああそれと俺の事はアルで良いぞ？長いだろ、名前」

「考えとく…」

アルフィリオスから出された条件にヴィータは驚愕すると本当に大丈夫かと疑いだす

アルフィリオスは軽く笑いながら言うと自分の愛称を教えるからいつの間にか食べた昼飯の空をゴミ箱に入れる

ヴィータは呟くように答えるとアルは振り返ってから笑いかける

「いい答えを待ってるぜ、ヴィータ
んじやな」

「勝手に名前を呼ぶんじゃねえ！！…まったく変な奴…」

ヴィータにそれだけ言うのとアルは屋上を後にする
アルの背中に向けてヴィータは怒鳴りつけるとポソッと呟くがその
表情はどこか嬉しそうであった

――放課後――

風紀委員の仕事を終えたヴィータは自宅に向けて一人で歩いていた

「明日か…あたしははやて達以外にしたことないからな
呼びに行けば良いのか？てかあたし、アイツのクラス知らないし」

昼間に出されだアルの条件を考えていた
時に恥ずかしそうに時に怒りながら歩くヴィータは後ろから近寄る
影に気付いていなかった

「まあ明日、校門で待ち伏せてから聞いてみるか…っ!？」

確実な方法を決めた時に背後に人の気配を感じたヴィータは振り返
る、しかしその時には既に遅く夜道に鈍い音が響き、ドサッと倒れ
る音が辺りに伝わった

――翌朝――

「ふわぁ…ねみい…」

学園の生徒が歩く通学路でだらしない制服姿の生徒、アルが欠伸をした

彼は約束通り、遅刻をせずに学園に向かって歩いてきた
緩やかな坂道になっている通学路を上りきると校門に人だかりが出来ていた

「なんだ？…っ！！」

人だかりをかきわけた先には、落書きされた壁があった

そして落書きは赤いペンキでこう書かれていた

《紅の鉄姫は預かった返してほしければ俺達を探してみな！早くしないとリンチしちまうぞ！！》

誘拐文の前には風紀委員が勢ぞろいしていた

「副委員長が誘拐されるなんて…」

「探しましょう！」

「だが探すと言っても我々では手は足りんぞ」

「副委員長は敵を作る人だからな、どこの奴等に狙われてもおかしくはない」

風紀委員がそれぞれに意見を言うなか、一人の少女がそれを落ちつける

「皆、聞いて！風紀委員は2班にわけて行動するんや！

1班はシグナム副委員長と共に市内を搜索、1班はグリフィス君を中心に学園内を搜索、私は先生に報告してから他の学校の風紀委員にも応援を要請する

落ち着いて行動するように、以上！！」

「「「了解！！」」」

（ヴィータ、待ってな

必ず助けるから！！）

はやてから出された指示に全員は声を揃えて応えると即座に行動を開始した

それを見ていたアルは面倒そうに欠伸をしてから頭を軽くかき

「さてと、行きますか」

一息ついてから学園では無く街の方に足を向けて歩き出した

「…ん、ここは、？」

身体に走る痛みからヴィータは目を覚ました、そこは工場らしく下は砂利で上に見える天井には所々、穴があいていた
身体を起こそうとしてヴィータは自分がロープで縛られている事に気がつく

「なんだよ！？これ…っ！っ！…とれねえ」

「目が覚めたかい？おチビちゃん」

「っ！てめえらは昨日の！」

ヴィータがロープをほどこうとしていると妙に苛立ちを覚えるような声が耳に入る

それは昨日ヴィータが捕まえた三人組の一人であった、リーゼント頭の男はヴィータの前までいくと髪の毛を思いっきり掴む

突然の行動にヴィータは顔を歪めながらも不良を睨み付ける

「おう、こわ…こいつ大人しくなるところか更に凶暴になってんじやないか？」

「そりゃそうっすよ、なんせ元不良なんスからね」

「てめえ、なんでそれを！？」

睨み付けるヴィータを見て髪を掴んでる不良はわざとらしく言うど、取り巻きの一人がケタケタ笑いながら話す

話してもいないことを知られていた事にヴィータは驚愕しながら怒鳴る

「俺らの情報網を甘く見ない方が良いぜ？その気なりや簡単なのよ」

「つく…」

「にしても天下の風紀委員も落ちぶれたな、元不良を自分の懐に入れてんだからな
しかもやってる事は不良と変わらないんだからな」

「あんだとっ!？」

髪を掴んでいた不良は乱暴に離すとてを広げて自慢するように言い出す

そしてヴィータを見ながらやれやれと言った感じに首を振りながら言う、ヴィータはそれに対して感情のままに怒鳴る

「そうだろ? どんだけ秩序とか言ってもお前のしてることはケンカなんだよ

人のためだとか言っても結局お前は俺ら不良と何一つ変わっちゃいないんだよ!」

「あたしが変わってない…」

不良の一人に言われた時にヴィータはある事を思った、荒鷲は自分が変わればそんな時に助けた理由を教えると、しかしヴィータはあれから一度も荒鷲に会っていない

つまり自分は何一つ変わっていないから荒鷲と会えないのでは無いか? 違うと思いたいのに先ほどの不良の言葉が頭から離れずにいた

「なんだあ? 放心かよ?」

「兄弟、早いところこいつリンチしようぜ？」

「しようぜ！しようぜ！」

「ハッ、血の気の多い奴等だぜ！」

なら派手にやるとすっか！！」

ショックにより黙ってしまったヴィータを見てつまらなさそうに不良は言うとり巻きの一人が近くにあった鉄パイプを手にして呼びかける

口では迷惑そうに言う不良だが同じ様に鉄パイプを持つと素振りをしてからヴィータに向けてゆっくりと歩き出す

すると微かにだがエンジン音が聞こえた、不良達は辺りを見回すと工場の入り口からこちらに向けて走る一台のバイクが見えた

「なんだ？何もんだお前は！！そのメットをとりやがれ！」

「ただの通りすがりだよ…」

バイクから降りたライダーは不良達と向き合う

リーゼント頭の不良がライダーに指をさして言うライダーはかぶっていたヘルメットを取る

ライダーの素顔が露になると不良達は怯えるかのような声を上げる、その声を聞いたヴィータは顔を上げる

そこにはいつもリリカル学園の制服をだらしなく着ているアルだった

「お前…なんで…」

「お前を探しに來たに決まってるだろ？ ヴィータ、さてとそいつを離してもらえるか？」

「いくらアンタの頼みでもそいつは出来ないな…風紀委員だぜ？ こいつは」

「そうっスよ！ 許されるわけないですぜ！！」

戸惑っているヴィータに対してアルはいつも通りの口調で言う不良達に話しかける、それに対して不良達は若干怯えながらもアルに返答をする

「そいつは俺のダチ公だ…それで納得しとけ」

「そんなんで納得出来るかよ！！」

アルの言葉に納得のいかない不良の一人が鉄パイプを振り上げて飛びかかる、アルはため息をついてから身体の軸をずらして鉄パイプを避けると勢いのついた不良の顔面にむけて拳を放つ

鈍い音と共に不良は地面に倒れたアルはそれを気にもせずにかかとでヴィータにむけて歩き出す

リーゼント頭の不良とその取り巻きの横を素通りしてヴィータの元まで行くとロープをほどき始める

「お前…どうして」

「約束したろ？昼飯、一緒に食べるって」

「ばっ、バカか！？そんなのほっとけばいいだろ、それだけでお前はケンカすんのかよ！！」

「ああ、ダチ公の為だからな
ほれ帰んぞ、皆心配してたからよ」

ロープをほどいているアルに何故ここに来たか問いかけようとする
とアルは当然のように答える

それは昨日の昼、アルはヴィータに明日も昼飯を食べるという条件
を出していた

それを果たそうとしている事に驚いたヴィータは自棄になったよう
な口調でアルに問いかける

アルは何も悩む事なく答えるとヴィータはうつむきだした

「あたし…風紀委員になれば変わるかもって考えた、でもあたし
は全然変わってなくて…もうアイツラに合わす顔がねえよ」

「そいつはちげえな…何も変わってないならお前はまだ不良でいて
誰の事も考えないだろ？今は風紀委員を思ってる、変わってるさち
やんとな」

「…ア、ル…あたし、あたし…」

「いつまでもイチャつくんじゃねえ！！いくら人質を解放しようと

手負いのガキと丸腰のアンタじゃ勝目はねえ大人しくボコられろや
！！」

座りこんだヴィータは先ほどの事を説明するとアルは優しくヴィータの頭を撫でると励ますように言ってから笑いかける

その言葉でヴィータは何故か荒鷲の事を思い出す、しかしそれを引き裂くように残ったリーゼント頭の不良と取り巻きが二人に向けて殴りかかってくる

「ほら、立てるか？ さっさと帰るぞ」

「…ああ！ わかった！！」

不良を目に入れながらアルが呼びかけるとヴィータは目元を拭うと力強く返事をする

そして次の瞬間、工場に鈍い音と金属音が鳴り金属が落ちる音が響いた、それはアルが蹴りで鉄パイプを跳ね上げた音とヴィータのグラーフアイゼンが鉄パイプを殴り飛ばした音だった

「ちっ、ちくしょう！？ 荒鷲の強さは何一つ変わってねえじゃないか！！」

「荒鷲っ！？ アルが？」

「そのあだ名好きじゃないんだけどな、とりあえず寝とけ！！」

鉄パイプを弾かれたリーゼント頭は泣き言を言いながら逃げようとするが、アルがそれを許さず取り巻きもろとも壁に叩きつけられて

気絶をした

「なあアル：お前が荒鷺なのか？」

不良達をロープで縛り上げた時にヴィータはアルに質問をした

背を向けていたアルであったが仕方ないといった感じにため息をつくと立ち上がり、ヴィータの方を向く

「ああ、昔はそう呼ばれた：今はケンカなんざしなくなったからそう言われてるか不思議だけどな」

「ならなんであん時に言わなかったんだよ！あたしはずっとお前が助けてくれた理由を知りたかったんだ」

自分の事を認めたアルにヴィータは問い詰めるとアルは苦笑をした

「理由か：簡単だ、お前を助けたかったからさ、お前は俺と似てたからな」

「あたしがお前と似てる？」

「そう、俺も最初から人助けしたわけじゃない、最初はお前と一緒にただ暴れてたんだ

それを助けて貰ったんだ、ただ俺の場合はそいつは死んじまったけどな：それからは人を助ける為にケンカしてたんだ、そんな時に」

「あたしに会ったのか？」

ヴィータに問いかけられたアルは理由を説明しはじめた、そしてヴィータの言葉にゆっくりと頷いた

「理由を説明しなかったのはその方が頑張れるかなって思ったんだが失敗だったみたいだな、余計な不安を与えてたみたいだ」

「いや、理由はわかった：アル：いや荒鷲、あたしに声を掛けてくれてありがとうな：

あたし、変わったよな？」

「ああ：前とはえらい違いだな：」

「そうか：さあ行くかはやて達も心配してるし、約束守らないとな、ほら行くぞ！」

アルは先ほどのヴィータを思い出すと申し訳なさそうに言う「ヴィータは首を振ってからアルに質問をした

アルはゆっくりと頷くとヴィータは一言呟いてから工場入り口に身体を向けて言う「と歩き出す、そしてヴィータについていく様にアルも歩き出した、学園に戻る為に：

おまけ…とある風紀委員日誌

副委員長誘拐事件は一人の生徒の活躍により終了した

この事件から副委員長は少しだけ角が取れたような態度をするようになり、昼になればいつも屋上に上がっているらしい

誰と食事をしているかはわからないがスキップのような軽い足取りからとても親しい方らしい

覗きにいった生徒がボコボコにされて保健室送りにされたのは言うまでもない事だ：

S. EP..不良少年とハンマー娘（後書き）

どうもえのきです！

ようやく更新が完了しました、一話完結はまとめるのに苦労しました
支離滅裂と感じた方がいれば申し訳ないと思います

今回は恋愛では無く友情をメインしたのですがイカンどうも恋愛要素
素が出てしまいます

少しでも良い話をします、つい最近お気に入りか90人を越え
てる事に気づきました

最近が減る一方ですけど…（泣）

とりあえずもしも100人越えするのなら何かやった方がいいか
なと考えてます

それでもし100人越えるなら人気投票やってみたいと思います
まあまだ越えてない話しをしても仕方ないと言われますが、とりあ
えず企画しているなと軽く覚えて置いてください

その前に次回の更新を頑張らないとな…

それではまた

EP. V: こねこねいっ、どいのねいっ (前書き)

注意事項

セレス「この小説は皆、キャラ崩壊しています

それと作者はノリで書いているのであまり深く考えずに楽しんで下さい：後、私の出番が無いです、作者滅殺！」

では楽しんで下さい

EP. V: こねこねいじゅ ぶいのねいぶ

SIDE: アルフィリオス

一体どうしてこうなった？

「先輩！どこや！？何処に行ったんや！！」

何処で間違えたんだ？

「テストロッサ、邪魔をするなら斬る！！」

「シグナム、それは此方のセリフだよ！邪魔するなら倒すから！！」

何故にこうなる！全ては一人いや一匹の猫の仕業というかなんというかとりあえず、まあ：俺が死にそうなのは間違いないな

「にゃ？」

本当にどうしてこうなったんだろう

俺は人の胸の中で吞気そうな顔をしている奴を見ながらため息をついた

それは約二時間くらい前まで遡る

俺とヴィータは本局の要請でとある次元世界に来ていた、内容はロストロギアの移送らしい

特に危険度は高くはないがロストロギアである以上、用心したらしい
ちなみに何故、機動六課に依頼がきたかと言うとまあ単純に人手が
足りないからだそうだ

「マジで面倒臭いな…」

「文句を言うなよ、仕方ないだろ？クロノ提督からの頼みなんだからな」

「それを聞いて余計にやる気無くした…」

「おい…まったく真面目やれよ、休みが邪魔されたからってよ」

俺の隣にはバリアジャケットを纏ったヴィータがいてその手にはキー
ースに入ったロストロギアが握られていた

駄々をこねる俺にヴィータはため息まじりに言ってくる

そう本来なら非番ではあったが皆が忙しいため俺とヴィータは駆り
出される事になった

迷惑な話だよ、全く…

「まあさつさと終わらせるに限るよな…？どした、ヴィータ」

「なんか変な音なかった？……」

「ん？別にしな…ちよつ、お前何で開けようとしてんだよ!!」

話をしているとヴィータが突然立ち止まっており何かあったかと聞いたら、ヴィータは辺りを見回しながら質問をしてきた

試しに俺も耳をすましてみるが何かが聞こえる事はなく、不思議そうに振り返るとヴィータはロストログアのケースを開けようとしていた

慌てて止めようとするがケースはカチャリと軽い音を立てて開いた、その瞬間眩い程の光が辺りを包みこんだ

光が晴れるとヴィータはその場に倒れていた、俺は慌てて駆け寄り抱き上げる

「ヴィータ！しっかりしろ、おい！返事をしてくれ!!」

「……ん…」

俺の呼び掛けに応える様にヴィータは目を開けると辺りを仕切りに見回してから俺に目を向けた

ホッとしたのも束の間ヴィータは俺を見ながら予想外の言葉を投げ掛けた

「にゃー」

「はい？」

「にー、にー」

「はいいいっ!？」

普段のキリッとした表情とはうってかわり見た目と何らかわらない目つきをして、ヴィータは俺に猫のように鳴いてきた

こんなの聞いたら叫ぶしかないでしょ？

――

「んで、原因はわかったんか？先輩」

機動六課に戻ってきた俺とヴィータはサンルームに来ていたちなみにここにはなのはやフェイトの隊長陣とフォワードメンバーがいた

目の前にいるはやては俺の膝の上で寝ているヴィータを注視しながら聞いてきた

まあ目がいつてしまうのは仕方ない、普段は可愛げすらないヴィータが本当に安らかな寝顔をして寝ているのだから

なのはやフェイトもそんなヴィータに骨抜きにされたのか子猫を見えるような表情をしていた

「ああ：一応な、問題のロストログアには猫の思念が入ってたそう
だ」

「猫の思念？」

「人や動物、思考を持つものの思いを記憶するらしいとよ
マリーが言ってたから間違いないだろ

クリスタル状の形をしていた思念が何故かヴィータに入り込んで、
この猫ヴィータになってるわけだ」

「それで戻る方法は？」

「さあ？」

俺はとりあえずヴィータに起こっていることとロストロギアについて
説明をしていく

シグナムが俺に問いかけてくる、しかしながら俺は自分でいうのも
なんだが淡白な言い方だと思う

レキは目を細めながら俺を睨み付けてくる

「わからないってどういうつもりなんですか？」

「睨むな、解析してたマリーが突然止めたんだよ、なんでも血が足
りないとかで」

「血ですか？」

「解析に血っていりましたっけ？」

睨み付けるレキを納得させる為に俺は起こった事を説明すると、キ
ヤロとエリオが不思議そうに首を傾げていた

それは俺も聞きたい事だよ、本当に…だけど事実だから仕方ない

「ねえ、アルなんでヴィータさんはアルにベツタリな訳？」

「そうだよ、うらやま…コホン、普通ならはやての所にいくはずだよね？」

「そりゃ多分、俺を最初に見たからだな

今のヴィータは生まれて間もない子猫みたいなもんだ、はじめて見た奴を親だと思う…すりこみだな、完全に」

寝ている猫ヴィータを見ていたセレスが俺に問いかけてきた

それに乗乗するようにフェイトも聞いてくるが今、本音が出てなかったか？後息が荒いぞフェイト…

俺はマリーから聞かされた情報を皆に教えるが納得の出来ない奴がいた

「いくらすりこみやからと言ってもくつつき過ぎや！私もヴィータをナデナデしたいねん！」

「はやてちゃん！私だってヴィータちゃんを撫でたいよ！！」

「それなら私はヴィータを抱きしめたい！」

「お前ら、一辺頭冷やしてこいや…」

真面目な表情のままはやては俺に言ってくる、それに乗乗してなのは、フェイトとヴィータを渡すように申し出てる

三隊長が揃いも揃って何を言うのやらしかも目が本気とかいてマジになっていた

しかし波乱はそれだけで済むことはなかった、それはある奴の一言で始まった

「あの、ヴィータさんに何か足りなくないませんか？」

「…スバル、足りないのはお前の頭と空気を読む事だ」

「アルさん、ひどい!？」

ひどくはない、当然の判断だ…

スバルの発言から興奮していた、はやて達はヴィータの身体を凝視し始める

「あ、猫なのに耳と尻尾がない」

「ティアナ！余計な事を言うんじゃない!!！」

「」「」「それだっ!!！」」「」

「あゝあ…面倒になってきた…」

スバルの隣にいたティアナが手を叩いて気がつく、そうヴィータは身なりはバリアジャケットのまま猫耳や尻尾は生えていないのであった

正直どうでも良いがな

「話しは聞かせて貰いました！その問題、このシャリオ・フィニー
ノが解決します！！」

「無駄にテンション高いやつキターーっ！！しかも呼んでねえのに」

「愚問ですよ！アルさん、こんな楽しい事混ざらなきゃ損でしょ！
？」

「誰かヴィータを治すって言うやつはいないのかよ…」

自分の眼鏡を光らせてやってきたのは六課の通信士ことシャーリー、
暇なのか？六課は…

そして俺の呟きには誰も答える事はなかった、この中で冷静を保つ
てるチビーズを見ると一斉に目を反らされたチクシヨウ…

「ヴィータさんの髪色に似合いそうな猫耳を作ってきました！！」

「「「「おお！！！！」」」」

「誰がつけんの？…なんで一斉にこっち見んの！？怖いんだけど！
！…仕方ないな…」

シャーリーは何処からかヴィータの髪の毛と同じ色の猫耳を取り出
す、そして歓喜の声を上げるはやて達…

俺は寝ているヴィータを見るとふと疑問に思った事を言うと全員が
俺の方を向くとシャーリーが猫耳を差し出してきた…正直に言おう、
もう帰りたい

だけど下手に逆らえば俺は砲撃の波に吞まれるのだろうか…

背筋が冷たくなるのを感じながら俺は猫耳をヴィータにつけようとするが予想外の出来事がおきた

「んゝ…にゃゝ？」

「あ、起きちまったか…」

周りが騒がしくしたせいかな寝ていたヴィータが起きてしまった、まだ猫状態が治っておらず不思議そうになきながら首を傾げていた

「ヴィータ、ちょっと良いか？…大丈夫だからな」

「んにー…」

作業を続行するようにという視線を浴びながら俺はヴィータの帽子を取る

さすがにトレードマークはわかるらしく凄く嫌そうな感じに鳴くが2、3回頭を撫でると機嫌を治してくれた

「ほい、さらにほい…よし良いぞ、ヴィータ」

「にゃーっ♪」

「ぶはあうっ！！！！」

手際良くヴィータに猫耳を装着させてから帽子を被せるとヴィータは嬉しそうに笑った、どうやら人間に憑依してるからか、猫でも表

情が変化が出来るみたいだ

そんな事を考えていると妙な奇声が聞こえ前を見るとフェイトが床に膝をついて鼻を押さえていた、しかし押さえた手からは真っ赤な血が滴り落ちていた

「おい！大丈夫か！？なんでそんなに鼻血出してんの！！？」

「先輩はわかってへんやな、今のにゃーにどれだけの破壊力があるか、私も気を確かにせんと鼻血がでそうや：ハア、ハア」

「お前は鼻血より息が荒いよ…」

鼻血を出すフェイトとに声をかけると隣にいたはやては息を荒くしながら説明をしてくる、本当なんで今日はこんなにもおかしいのだろうか：

ため息をつきながら俺はヴィータを見ると呑気そう欠伸をしていた、確かにこれは和むけどな

「アルさん！次は尻尾ですよ、さあ早く！！」

「お前はフェイトを失血死させる気か？このままだとまた吹くぞ」

「大丈夫だよ！私頑張るからだから私に気にせずに尻尾をつけて、アル！！」

「言ってる内容がアレだから全然、緊張感がねえな…」

シャーリーは俺にズズイと尻尾を見せてつける様に頼み出す
しかしながら先ほどの鼻血を見てこれ以上何かつけると次は誰が吹
くかわからん

サンルームが血まみれにならないか？

そんな俺の不安を他所にフェイトは鼻をおさえながら尻尾の装着を
促す

ため息をついてから俺はヴィータの腰に尻尾を近づける

「うゝ…うゝ…」

「大丈夫だから…んな顔をすんな」

やはり得体の知れないものにヴィータは怖がりだす、俺が呼びかけ
ると我慢をするように目を閉じる

少し可哀想な気もするがとりあえず早く安心させる為にヴィータの
腰に尻尾を取り付ける、尻尾はバリアジャケットとつながるため特
に痛くは無いみたいだ

しかしながらなんでこの尻尾は動いているのだろう…

俺の目線は製作者のシャーリーに向けられた、シャーリーは親指を
立てて笑みを浮かべていた

「グツジョブです！ちなみにその尻尾はヴィータさんの感情に合わ
せて動くようにしています、さながら本物の尻尾のようになります
！！」

「凄いと思うが素直に喜べないのはなんでだろうな」

恐らくそれは尻尾がついた辺りから顔に手を当ててる人間が増えたからだろうな

フェイトはもちろんスバルやティアナもノックダウンらしく肩を震わせていた

「さすがや、ここまで可愛くなるなんてヴィータ、恐ろしい娘!」

「この可愛さは犯罪級ですね…」

「それはあたしも同感よ…ハア、お持ち帰りしたい」

「っ!…にーっ!」

尻尾がついて完全に猫になったヴィータを見ながらはやては真剣な表情で話す

スバル、ティアナはそれに同意しながら息を荒くしていた、つうかティアナ…持ち帰るなよ

殺気じみた視線を感じとったヴィータは俺に隠れるようにすりよる、しかしそれが悪かった…

「アル! いつまでヴィータの側にいるの!？」

「そうだよ、ヴィータちゃんは皆のヴィータちゃんなの!!」

「我欲に走りかけてるお前らに言う資格はないだろ!」

「ならばこのヴィータを見て何も思わないのか！？お前は」

フェイトとなのはがヴィータを離すように要求をしてくる

しかしながら今こいつらにヴィータを明け渡せばもしかしたらヴィータは無事ではすまないだろう

しかし追撃をかけるようにシグナムが俺に問いかけてくる

「まあ確かに和みはするがな」

「和む所かヴィータがいれば戦争が集結するくらいの可愛さや！！」

「どんだけ！！」

「そんだけや！！」

つうか改めて思うがこいつらには話しが通じない気がする、だってまず会話が噛み合わないのだから、キャッチボールでスライダーやフォーク使うみたいなんだ…正直、俺も何を言ってるかわからなくなってきた

ちなみにチビーズは気がつくと思わなくなっただけで、喋らないと思っただけで寝たがったな？

そんな事を知らない奴等は更にヒートアップしていく

「猫耳に尻尾、なら最後は首輪でもつけませんか？」

「おい、それ完全にペットだろうが」

「スバル…それ採用!!」

「待てや! 夜天の主!!」

ヴィータは人! ペットじゃないぞ!!」

スバルのアホな発言にその場の空気が静まりかえる、さすがに目が覚めたかと思った

しかし次のはやての言葉に俺は全力でツツコミをいれた

「そんなんわかつとるで? 先輩

せやけど、こんな可愛い子猫がおったら首輪をつけるしかないやろ!!」

「知らんわ!!!!」

「八神部隊長! 鈴つき首輪の準備完了です!!」

「アホか? アホなんだよな! ? お前ら!!」

優しそうにはやては微笑みを浮かべると真剣な表情でとんでもないものをいい放ってきた

しかもシャーリーの奴はきっちり首輪を用意しやがった、俺は頭を抱えながら叫ぶが見事に無視をしやがった…てめえら…

「ほならさっそくこの首輪に装着せな、いかんとなムフフ、私がご主人様や」

「ちょっと待って、ヴィータのご主人様は私がなりたい

だって私はアルフの世話をしたことがあるから！」

「それなら私はヴィータちゃんの上司だよ！私の方が適任なの！！」

「二人共、ヴィータは私の家族やその方程式は覆る事はあらへんで！！」

はやてが薄気味悪い笑いをしながら首輪を手にした時に鼻血を止めたフェイトが割り込んできた

更になのはも便乗してくる、はやては一步も引かずに反論をする

なんか雲行きが怪しくなって来てないか？一触即発みたいな感じになって来てる…

「ならこうしよか…最初に先輩からヴィータを取り返した人が首輪をつけ、更にはご主人様って事で…」

「うん、それなら公平だね」

「問題ないよ、それじゃ始めようか」

「あれ…ちょい待て…お前らマジか!？」

真剣な表情のはやてが部屋の中にいる奴等に首輪をつける条件を述べる

だが明らかに俺は関係ない気がする…しかし気にせずに皆が頷く、そして一斉にこちらを向いた

俺が言葉を発した時には既に遅く金色の魔力刃が俺目掛けて降り下ろされる

「危ねえっ！？フェイト、落ち着け！」

「私は落ち着いてるよ？アル：ヴィータを渡してくれないと…飛ぶよ？」

「何が！？ってうおっ！！なのは！はやて！！」

間一髪でヴィータを抱えて回避をするとバリアジャケットを纏ったフェイトの舌打ちが聞こえた

なんとか説得しようとするがフェイトは聞く耳を持たずに物騒な発言をしてくる

発言と同時に顔にかする様に魔力弾が通り過ぎた、横を見ると完全戦闘状態のなのははやてがいた

「アルさん、私に味方してくれるよね」

「先輩、敵対する言うなら地獄を味わう事になるで？」

「ハハッ：お断りだっつーの！！イーグル！！」

「ようやく出番ですか、ソニックムーブ！」

言葉は丁寧だが明らかに殺意があるのはと殺意を隠す気すらないはやてに、俺は乾いた笑みを浮かべるとソニックムーブで廊下に飛び出した

「逃がさへんで!!」

後ろの方で聞こえたはやての怒号に俺は背筋が震えた

———
とりあえず廊下に出た俺は空き部屋に隠れる事にした

ともかく奴等の頭が冷えないと何も出来ない他に方法があるとするれば、ヴィータの治療だがこの状況では不可能に近かった

なら最初に考える事は対応策だ…恐らくあのメンバーで最初に仕掛けてくるのは…

「にゃー？」

「ヴィータ、鳴くのは勘弁だ…っ！来る!!」

俺が考え込んでいるとヴィータはしてしと頬を叩いてくる、苦笑を浮かべながら頭を撫でると、気配を感じて前にヴィータを抱えて駆け出すと先ほどまで俺の頭があった辺りを打ち砕いてスバルが飛び込んでくる…てか

「六課を破壊するな！スバル!!」

「八神部隊長よりヴィータさんを手に入れるなら多少の損害は気にしないと出ます!」

「ああそうかよ、ならこっちも遠慮はしねえ！ステーキ!!」

「うえっ!?! わぁぁぁあっ!?!」

壁を破壊してきたスバルに怒鳴り付けるとスバルは許可は取ってあると答えた

俺はため息をついてから思考を戦闘モードに切り替え、瞬時にイーグルを起動させるとスバルの腹部にステークを押し付けて勢い良くステークを撃ち放つ

油断をしていたスバルはステークの直撃をくらい自分の開けた穴を通って壁に叩きつけられた

「目標を目の前にして話し込む奴がいるか、行くぞヴィータ!」

「にゃ!」

気絶してるスバルに警告をすると隣にいたヴィータに呼びかけると、ヴィータは言葉がわかってるのか元気良く返事をした

ヴィータを脇に抱えて玄関から出た俺は訓練スペースに向けて歩を進めた

いくら損害を気にしないとしても出来るだけ控えたいとは思ったからだ、それと次に来る奴等を予想すると屋内より屋外の方が安全だと思ったからだ

「スバルに続いて来るのは恐らく…」

「にゃ！にゃ！」

「っ！上か！！」

やっぱりお前か！シグナム！！」

訓練スペースに向けて走っているとヴィータが上を見上げて何かを示す様に鳴き出す

俺は示された方を向くと夜空の月をバックにして一人の剣士がいた、まあ六課に剣を使うのは一人しかないけどこうも予測が的中すると嫌になる

シグナムは俺の言葉と同時に斬りかかってくる、リッパーを展開しトンファアの様にイーグルを持ち直した俺はシグナムの一撃を受け止める

激しい金属音と衝撃が辺りに響く、俺の足はシグナムの一撃により少しだけ地面にめり込む

「気づいていたか！アル！！」

「出来れば当たりたくはなかったがな！！」

自分の一撃を受け止めた上に来ることまでわかつとした事にシグナムは嬉しそうに言うと、俺は振り払う様にイーグルを振るい距離を取る

身を翻して着地したシグナムはレヴァンティンを鞘に入れて構える

（下手に突っ込めば斬られる、か…）

「アル…ヴィータを渡せ出なければ斬る！」

「いつの間にか、俺を倒す事になってないか？」

お前はそっちの方が目的だろ！俺とやり合う事は今までなかったからな」

「フ…そうだな…」

俺が様子を伺っているとシグナムが俺に警告をしてくる、しかしその表情は戦いを避ける顔では無くむしろ断って戦えと言っているようにも見えた

だからバトルマニアの相手は嫌なんだ…それに

「渡すくらいなら始めから逃げたりするかよ!!！」

「それで良い…なら行くぞ!!！」

要求を呑むなら武器なんて構えるかよ

シグナムは俺の答えに満足したのか、レヴァンティンの柄を握りしめて魔力を高める

まともにやり合えば確実にとられる…なら受けると見せかけてかわすしかない

「ダアアアアっ!!！」

「ハアアアっ!!」

俺とシグナムは同時に地面を蹴ると相手に向けて突撃した

シグナムの居合いの速度は早いならそれより早く動くしかない、言っていて不可能に近いがな…だけど、やる!!

「貰ったぞ!アル!!」

「んなくそ!!」

しかし予想より早く抜かれた刃は俺の首、目掛けて迫ってくる

やられた!そう思ったが刃は当たらず代わりに金属音が聞こえた

シグナムをすり抜けて振り返るとそこにはシグナムの刃を黒い刃で押さえるフェイトの姿があった

「テストロッサ!貴様!!」

「間に合ったみたいだね、シグナムにアルはやらせない…アルは私が討つ!」

助かった事を喜ぶべきか、敵が増えた事を悲しむべきか正直迷うけど今はありがたかった

「テストロッサ!邪魔をするなら斬る!!」

「それはこっちのセリフだよ!邪魔するなら倒す!!」

シグナムとフェイトがぶつかりあいだした時に俺はコソツと抜けて訓練スペースに向けて走り出す

「あの二人が潰しあいをするなら助かるな…次は、はやてかなのはだな」

「にゃ…にゃ!？」

まだ来る襲撃に俺とヴィータはため息をつく、ヴィータが辺りを見回しだす

本当勘弁して欲しい…

がそれも無理な話だった、上空から白い魔力弾が飛来してくる一つまた一つとかわせばかわす程、魔力弾の数は増えていく

「やっぱり、はやてが来やがったな、あんだけ遠くから攻撃出来るのははやてくらいだもんな」

雲の切れ間から白い魔力光を確認すると射ってきた人物を特定すると、雲を取り払う為に俺はイーグルを向けるしかし俺が射つより先にピンク色の砲撃が雲を吹き飛ばした

今まで優位に立っていたはやては突然の事に驚きを隠せずにいたが、直ぐ様自分に砲撃を射ったものを探し始める

「見つけたで!なのはちゃん!！」

「やっぱり見つかったちゃうか…悪いけどはやてちゃんには先にリタイヤしてもらうから!」

「かまへんよ、やれるもんやらな！」

人の事を無視して隊長とエースの戦いが始まった

流れ弾には当たりたくないの俺は来た道に戻る様に移動を開始した

「残りはティアナか：アイツの場合は待ち伏せ、だろうな：っ！」

残っている奴を確認してからスピードを早めると魔力弾が足元に直撃する

俺はヴィータを下ろしてイーグルを構える、幸いティアナは近くにいないためヴィータがさらわれる心配はないけどそれは一方的な狙撃をされるということでもあった

現に魔力弾が四方八方から飛来する、一発撃ち落としても時間差で迫るこれは肉体的にも精神的にも辛い

「つてか：たかが猫を奪う為にここまでするか!？」

そんなツツコミを入れた時に俺の顔面に向けて魔力弾が迫っていた、ツツコミを入れた事により反応が遅れたようだ

凄く他人事の様になっているが魔力弾は俺に狙いを定めていた、殺られる!そう思った時だった

「にゃー!!!」

「ヴィータ!？」

「うー、にゃー!!!」

地面に下ろしていたヴィータが突如鳴くとその手には愛機であるグラーフアイゼンが握られていた

いつの間に展開したのかわからないがヴィータは俺の前に立つとまるでバツターのるようにグラーフアイゼンを振りかぶると魔力弾を勢い良く打ち返した

「嘘ーっ!？」

打ち返された魔力弾は射った本人の元に飛ばされたらしくティアナの悲鳴が聞こえてきた、わからんでもないがな…

「にゃ〜♪」

「…良くやったな」

嬉しそうに鳴くヴィータに俺はとりあえず褒めると再びヴィータを抱えて走り出す

六課に戻ってきた俺は再びサンルームに来ていた、灯台もと暗し…出発点に戻るはずがないと思いを逆手にとった作戦だった

「しかしどうするかな…このまま聖王教会まで行くか？
いやカリムもはやて達と同じく暴走するかもしれないやめとこ…」

逃げ場無しってのはこの事だな…と思っていた時、抱えていたヴィータが何かを見つけたのか突然降りて駆け出し何かをくわえるとこちらに持ってきた

「首輪？」

「にゃ」

「つけろと？」

「にゃ！」

やばい、凄いキラキラしてる…つうか普通に会話してるし、こいつ元に戻ってんじゃないか？

でも相変わらず猫だしな…どうするよ…

「わかったよ…つけてやる…これ、ピッタリだよな…シャーリーの奴どうやってサイズを調べたんだ？」

首輪を持つと仕方なくため息をついてから俺はヴィータの首に首輪を当てる、そこで気がついたのだが首輪のサイズがジャストフィットしていたのであった

そんなどうでも良い事に俺は驚きながら首輪を留めた

「ほれ、満足したか？」

「にゃー♪」

首輪をつけ終えてから呼びかけるとヴィータの首輪についてる鈴が

チリンとなった

その瞬間、ヴィータの背中からクリスタルが一つ抜け出した
それは原因となった思念を溜めるロストロギアであった

《にゃーん♪》

嬉しそうな猫の声と共にクリスタルは消失した

「そうか、あの中に入ってた猫は飼い主がいなかったんだ
だから首輪をつけた事で満足できたんだな…」

そこで俺は一つ気がついた
今までのヴィータは猫が取りついていた、しかし今は猫はいないとい
うことは？

「あの…ヴィータ、さん？」

「…あんだよ」

（やばい、ブチキレ間近だ…） 「つかぬことを聞くがどこまで覚えて、
ぼくはあっ！！」

恐る恐る話しかけると返ってきたのはいつも声…話しかける内容間
違えれば確実に撲殺であろう

まあ軽く冗談の様に話しかけると返ってきたのはアイゼンによる一
撃、床に激しく転がりようやく止まったところで俺はヴィータに目
線を向けた

鬼がいた…頭に猫耳をつけて逆立った尻尾の鬼がいた

「どこまで？全部覚えてんだよ！！お前らが猫耳つけたり可愛い可愛い言いまくってた事もな…後、首輪を…忘れろーっ！／／／」

「おぶう！！」

「見たこと全部忘れろ！聞いた事も忘れろ！！

ていうか光になりやがれっ！！ギガント、シュラーク！！！」

「おうわああああっ！！！！」

ヴィータは全てを吐き出すように叫んでいくと首輪の所で言葉がつまり思いっきり俺を殴り飛ばす

しかし半狂乱の猫はそれだけではすまなかった

人の頭をアイゼンで必要以上に殴っていき挙げ句の果てにはギガントフォルムで止めを差しにきた

凄まじい衝撃の中で俺は顔を真っ赤にしている猫耳ヴィータを見て意識を無くした

その後目が覚めた時には医務室だった、周りを見るとやたら幸せそうな寝顔のはやて達が寝ていた事に驚いた『猫事件』と呼ばれた騒動から一週間くらい、俺はヴィータから敵意の視線が向けられていた

良く良く考えると俺は何のためにボコボコになったんだろうと少しだけ悲しくなった

余談ではあるがヴィータはたまに猫事件の首輪を嬉しに眺めている

ると、とある空曹長から教えられたのは秘密にしておこうと思う

EP. V: こねこねいっ、どいのねいっ (後書き)

どうもえのきです！

いかがでしたか？ ヴィータ祭最後の作品は…

まさかここまで長くなるとはおもいませんでした

ちなみにタイトルにあるどこのねこはアルの猫と思って下さい

キャラ崩壊をめざしたのですがどうでしたか？ 一番崩せたのはフェイトだと思います

次回は本編を書いていくので楽しみにしてください！

EP19..リア充は爆発しろ!! by セレス (前書き)

休日編でございます！

まずはセレス編からお楽しみ下さい

最後にお知らせがあるので良ければ見てください

EP19…リア充は爆発しろ!! byセレス

SIDE…セレス

アルの事件から一週間が過ぎようとしていた、ギスギスした空気も無くなって機動六課にはまたいつも通りの日常に戻っていった

あ、でも一つだけ変わった事があったかな

私ことセレスが管理局の所属になりました…と言ってもアルと1セツトみたいな扱いだけどね

正式に配属することにはなるのは陸士108番隊に戻ってからってアルは教えてくれた、それまではいつもと変わらず勉強の毎日なんだよね

まあはやてさんのお下がりから陸士制服に変わったから少しは嬉しいけど

今日は朝方の訓練を見るためにアルと一緒に訓練スペースに来ていた、でも…

「なんで早く起きてくれないかな!?!」

「ふわぁ…悪い悪い、やる気が出なくてな」

私の隣で大欠伸をしている赤い髪の人、アルことアルフィリオス・ラーゼンハルグに私は怒鳴り付けるとアルは面倒そうに返してくる

むう、一週間ずっとこうなんだよね

元々やる気が無かったけど普段しない真面目モードでいた事による反動なのかアルは前よりだらけている…それに

「アル、ちょっと悩んでいるでしょ？」

「あれ？わかつちまう？」

やっぱり…アルは悩みだすところか遠くを見るような表情をしている、出会ってからそれほど経ってない私でも気づけるんだから多分皆気づいてる

「抱え込まないって約束したんじゃないの？」

「おいおい、全部さらけ出してたらプライベートがねえだろ？…嘘、冗談だよ

まだ整理がつかないんだ、だからもうちょい待ってくれ
どうしようもないなら相談するから」

「うん…ちょっと納得いかないけど信じてるからね？」

私は目を細めながらアルに問いかけると苦笑をしながらアルは返答をしてきた、そして難しそうな表情をしながら言う私の頭を軽く撫でる

アルがそう言うなら納得するしかない本当に納得がいかないけど…

「おっ、訓練が終わったみたいだな
いくぞ、セレス」

「あ、うん！いこいこ」

アルがなのはさん達の方を見ながら言うところ、確かに訓練は終了していた私は歩き出したアルの後についていくように歩きなのはさん達の所に向かった

「はい、それじゃあ今朝の訓練はここまで、皆お疲れ様」

「はあゝ…疲れたゝ…」

「今日の訓練は一段とキツかったですね…」

「おゝおゝ、バテてんな皆」

なのはの号令でスバル達は地面に膝をついて息を整えといった、情けない声を出すスバルとエリオをみながらアルはなのは達の隣に並ぶ

「アルさん、見てた感じでどうだった？」

「おう、あれだけ動けば大丈夫だと思うぞ？」

「あの…なんの話ですか？」

アルとなのはの会話を聞いていたティアナは手を上げて質問を投げ掛けた

「ん？お前らも訓練に慣れた頃合いだからリミッターを外すか、ど

うか今日の訓練でチェックしたんだよ」

「「「「ええっ!!?」」」」」

アルが唐突に言い出した事に今までへばっていた、スバル達は声を揃えて驚いた

それを見たアルは意地悪く笑ういながら言葉を続ける

「んじゃ先ずはフェイトから発表とい「合格」早くない?」

「だって、あんまり待たせるのは悪いと思ったから」

「まあこれだけやって成果が出ない方がマズイからな、よくやったなお前ら」

「おっ? ヴィータが珍しく誉めてんな

明日は槍でも降んのかね?」

教えていたフェイト達にアルは視線を向けて話すと、いい終える前にフェイトが答えた

面白くなさそうに言うアルにフェイトは少し戸惑いながら答える

それを無視しながらヴィータはややぶっきらぼうに言うと言珍しそうな顔をしながらアルはからかう様に言う

「血の雨なら今すぐにでも降らせてやろうか?」

「ヴィータ…目が怖い、それに足踏んでる」

アルの足を踏みつけながらヴィータは怒気の込めた視線をぶつける
と、アルは目をそらしながら答える

「にやはは…それじゃあこの後でも良いからシャーリーの所に持つ
ていってリミッターを解除して貰ってね

セカンドについては明日からにするから」

「「「「はい!!」「」「」」

「えっ、明日？」

苦笑してからなのはがこれからの事を説明する
スバル達が返事をした後、キャロがなのはの言葉の中で疑問に思っ
た事を呟く

「今日までずっと訓練だったから、今日は皆にお休みあげるんだよ」

「出かけるなりなんなりして溜まった疲れを癒してこいよ」

「「「「やったっ!!」「」「」」

フェイトとヴィータの言葉によりやく理解したスバル達は嬉しそう
にはしゃぎだした

「あ、エリオ！少しいいかな？」

「？どうしたの、セレス」

通路を歩いていたエリオはセレスに声をかけられて止まり、振り返ると私服姿のセレスがそこにいた

「今から出かけるんだけど一緒に行かない？」

「えっ！？僕と？アルさんとかは？」

「頼めるのがエリオだけなんだよね、アルとレキはダメでさ…本当、腹立たしいくらいにね…」

「えっ？…いま、なんて？」

私服姿のセレスはエリオに外出しないかと誘う、いきなりの誘いにエリオは戸惑いながら返すとセレスは苦笑をしながら答える

答えた後にセレスはボソリと恨みのこもった言葉を呟き、偶然聞こえたエリオは恐る恐る聞いて見ることにした

「えっ？何か聞こえた、それじゃ出来るだけ目立たない服で来てね？」

「あの、えと…はい…」

エリオの質問に対してセレスはとぼけると早く着替えてくるようにと言いその場を後にする、何故はぐらかしたか、なんで目立たない服なのかエリオは聞こうとしたがセレスの背後に黒いオーラが見え、

ただ頷くしかなかった

「それじゃあ、キャラオをつけてね？」

「はい、フェイトさん！」

「レキ、キャラの事お願いね」

「はい、わかりましたフェイトさん」

機動六課の玄関先でフェイトは心配そうに私服に着替えたキャラに言うときゃろは笑顔で答える、隣にいたレキもまた笑顔で答えた

「よし、行こうかキャラ」

「うん！レキ君♪」

レキはキャラに目を向けてから呼びかけ、一緒に街に向けて歩き出した

「気をつけてね…大丈夫かな？…」

「フェイトちゃんは心配しすぎだよ？」

「だってデート、だよね私…経験無いから、余計に心配で」話しは聞かせて貰いました！」「…誰！？」

不安そうに二人を見送るフェイトに、同じく外出したスバル達を見送ったのはがため息をつきながら話しかける

注意を受けても心配が隠せないフェイトの後ろから声をかけられ二人は振り返るとそこには白いブラウスに緑のスカートを身に纏いサングラスをかけたアンバランスな少女が立っていた

「天が呼ぶ！地が呼ぶ！！人が呼ぶ！！！」

写真を取れと私をよぶ！私はパパラッチセレス！！通りすがりのカメラガールです！！」

「セレスじゃないの！？」

「いいえ、パパラッチセレスです」

「パパラッチも名前なんだ…」

サングラスの少女は大げさな身振り手振りで自己紹介をするとなのはが戸惑いながらも問いかける

しかしパパラッチセレスは自分は別人だと返し、なのはのその名前のおかしさに肩を落とした

「そしてこっちが助手のエリオンです！」

「…ども」

「その金髪のお姉さん！娘さんが初デートなんですよね？なら写真というメモリアル欲しいと思いますか？」

「ほ、欲しいです!!」

パパラッチセレスは自分の後ろにいるニット帽を被り同じくサングラスをかけた少年を紹介する

パパラッチセレスがフェイトに説明をする中で、なのはは助手のエリオンにそっと耳打ちをした

「何してるの？エリオ…」

「実はセレスにこれをつけろと言われただけで僕もまさかこんな事になるなんて」

「そうだね…なにがしたいのかな、セレス…後フェイトちゃんがまったく疑ってないなあ…」

「大丈夫ですよ、フェイトさんならわかると思いますから…多分」
なのはが不思議そうに聞くとエリオはサングラスを少し外して答える

苦笑を浮かべながらなのはは言いセレス達の方に目を向ける

目の前のアンバランスな格好をしているセレスにまったく疑いをかけてない親友にため息をついた

エリオは親代わりのフェイトをフォローしようとするがセレスの話しを聞き入ってるフェイトに自信がなくなりかけていた

「それじゃあお姉さんの依頼、このパパラッチセレスが請け負いました! エリオン! 行くよ!!」

「イ、イエス！パパラッチ！！」

「待ってまだ代金の方を聞いてないよ？」

「そんなのいりません、貴女の親心それだけで十分です！プライスレス！！」

話しを終えたセレスはフェイトの背を向けて歩き出し、なのはと話しているエリオに声をかける

エリオは慌ててセレスに妙な掛け声で答えると急ぎ足で後を追いかける

行こうとするセレスにフェイトが代金について話すとセレスはにこやかに笑いながら断った

「ねえ、なのは…」

「どうしたの？フェイトちゃん」

「世の中にはあんな良い人がいるんだね」

（フェイトちゃん…過保護過ぎだよ、早くなんとかしないと…）

二人を見送った後フェイトは凄く晴れやかな表情で言い切った、まったく疑う事をしない親友になのは若干呆れながら思い、もし自分に子供が出来たら優しくするのはほどにしようと思った

「あのさ、セレスどうしてレキ達を尾行すること名乗り出たの？」

「その方が合法的だから：それにさデレッデレなレキを写真に納めてから弄るのも面白くない？」

レキ達を追いかけてクラナガンまで来たセレス達はモノレールに乗っていた

しかしセレス達は座席に座る事なく乗り口にいた、理由は対象にあまり近づき過ぎると気づかれるからである

キヤロならなんとかなるが警戒心の高いレキには気づかれてしまう、だから中に入らずに外から様子を伺っていた

そんな中、エリオがセレスに質問を投げ掛けてきた
レキ達を尾行することをわざわざフェイトに知らせる必要はなかったんじゃないかと思ったからだ

セレスは特に隠す事なく理由を説明すると意地悪い笑みを浮かべながら言う、エリオはおそらくこっちが本音だと思った

「セレス、さすがにそれはマズイよ」

「私だってそんな事をする気はなかったの、だけどレキの一言が私を変えた」

あまりにも悪趣味だと考えたエリオはセレスに中止するように呼び

かける

しかしセレスは聞く耳を持たず逆にする気はなかったと言うと遠い目をして語りだした

S I D E ..セレス

あれは…訓練が終わった後だった
アルはヴァイスさんに用事があるって言っていなくなり、通路でレキと会った時だったの

「あっ！レキ、今日の休みさ、スバルさん達と出かけない？」

「ごめん、キャロと出かけるんだ」

せっかくの休みだから皆で行こうかなって誘ったらレキは申し訳なさそうにしていた、でもそこで私は一つの疑問が浮かんのだの

「いつ誘ったの？私が見た限りじゃそんな暇なかったよね？」

「これから誘うんだよ、キャロならOKしてくれるから、それじゃあね」

私の質問をレキはにこやかに笑って当然のように答えてから手を軽く上げて歩いていったの…

「え？それだけ？」

「それだけ？十分過ぎだよ！！」

なに！なに！なんですか！？そのOKが前提で話しが進んでる感じは、キャラも普通にOKしてるし、どんだけ相思相愛なの！」

話しを聞いていたエリオは不思議そうに質問をすると、セレスはまるで今までの鬱憤を晴らすかのように叫び出す

「だから私は決めたの！そんなリア充しまくりのレキに一泡吹かせるんだって！！」

「セレス、落ち着いて！レキに聞こえちゃうから」

「はっ！？危ない危ない：つい正気を忘れてた、大丈夫だよね？」

握り拳を作りながらセレスは宣言をする、エリオは慌てて注意をする

セレスははたと気づいて口を押さえてから、扉の影から覗いてみる
がレキとキャラは振り返る事なく談笑をしていた

セレスはホッとした後フェイトからの依頼をこなすためにデジカメのシャッターを切った

「ねえセレス、これって二人が六課に帰るまでなの？」

「当たり前な事を聞かないで欲しいよ、帰るまでに《…二人ともつ!?!?》」

一息ついたエリオはセレスに気まずそうに言うと、セレスは冷や汗をたらしながらも答えた時に不意にレキから念話が入れた

《キャラがまだ気づいて無いから良いけどこれ以上煩くするなら…撃ち抜くよ?》

「「つ!?!?」」

《わかったら次の降り場についてこないでね?…わかった?》

「「は、はい…」」

口調は丁寧ではあるがその内容かなりご立腹な様子で、セレスは軽く覗いて見ると話しに夢中なキャラに笑顔を向けながら細目でセレス達を睨み付けるレキがいた

それはいつになく真剣な目で邪魔をするなら本当に排除されそうであった

その後、モノレールから降りたレキ達をセレスとエリオは見送り次の駅でモノレールから降りた

そして行くあても無くとりあえず近くにあった公園で休む事にした

「怖かったね…レキ」

「あの目は殺る気満々だったよ…しかしこれからどうしようかな…」
ベンチに座るセレスとエリオはそれぞれに言葉を発してから深くた
め息をついた

「写真も結局ほとんど撮ってないから、フェイトさんになんて言お
う…」

「それならフアフニールとケリュケイオンに任せたから大丈夫だよ」

「いつの間に…でも良くOKしたね」

ここまで早くレキにバレるとは思わなかったエリオはため息をつく、
隣にいたセレスは思い出したかのように言う

エリオは用意周到の良さに驚くが一つ疑問が浮かび質問を投げ掛ける

「メンテの時に間違えてバラすかもって言ったら快くOKしてくれ
たよ」

「それは脅迫だよね!？」

「まあ良いじゃん、ちょっと喉が乾いたから何か買ってくるね、動
いたらダメだよ？」

セレスは軽く笑いながら言う、交渉の内容にエリオは思わずツツコ
ミをいれた

セレスはツツコミを適当に流すと辺りを見回してから自販機を探す

と言って歩き出した

「はあ…セレス、遅いなあ…」

動くなど言われたエリオは辺りを見回しながら呟く、何かあったんじゃないかと思いいリオは探しに行く事にした

「セレス、何処に行ったのかな？…あれ？あの子…」

セレスを探しに来たエリオはアイスクリーム屋の前で一人の少女を見つけた

その子は薄い紫色のストレートヘヤーで黒い服を身につけていた、それだけじゃ目には止まらなかったが少女の纏う雰囲気は何処か儚げで触れれば壊れてしまいそうだった

「あの？買わないの？」

エリオはセレスを探さなきゃと思いつつも少女を見入ってしまい、つい声をかけてしまった

「…別に、いらない…」

「でもさっきから見てたよね？もしかしてお金ない？」

「……関係ない…」

エリオに話しかけられて少女は少しだけ振り返る、しかし直ぐに視線を反らしてから小さな声で短く答えた

それでもエリオは少女に問いかけると凶星だったのか、少しだけ間を開けて少女は返答をした

「すみません、これ二つくれませんか？」

「かしこまりました……お待たせしました」

「はい、これ」

「…なんのつもり？」

エリオは少女の横を通り過ぎると少女が見ていたアイスを頼む、フエイトから貰った小遣いで支払いを済ませるとエリオは少女にアイスを差し出す

エリオの突然の行動に少女は訳がわからずに思わず疑問を投げ掛けた

「友達の分まで買ったんだけど、はぐれてたの忘れてたからこのままだともったいないから良かったら、貰ってくれないかな？」

「嘘が下手…」

「う…」

「…良いよ、いらぬなら貰うから…」

エリオはその場で思いついた言葉を並べていくと少女はすっぱりと
言い切る

言葉を無くしたエリオであったが少女はアイスを手にとると小さく
笑った、少女の笑みにエリオは不覚にも頬を赤らめた

二人は近くのベンチに座ってからアイスに口をつけて食べだす、そ
の時にエリオは一つの事実に気づく

「そういえば名前いってなかったね、僕はエリオ・モンディアル
良かったら、教えてくれるかな？名前…」

「…ルーテシア…アルピーノ…」

「ルーテシア、良い名前だね…ところで、っ!？」

エリオは申し訳なさそうに言うと言と自己紹介をし少女に名前を聞いた
ルーテシアと名乗った少女はアイスを食べるのを中断し、自己紹介
をすると再びアイスを食べだす

一人であったルーテシアに連れはいないのかとエリオが聞こうとし
た時に突如、後ろから殺気を感じ振り返る

「エーリッオッ♪ずいぶん楽しそうだね」

「セ、セレス…どうして怒ってるの？」

「やだなゝ怒ってないよ?…ただ私の周りにはリア充しかないの
かって、呆れてただけだよ!ふんっ!」

「十分怒ってる、ってか何を投げて、ぶふおっ!?!」

そこには笑顔のセレスが立っていた、しかしその背後からは黒いオ
ーラが出ていて一歩また一歩と近づく度にエリオは冷や汗を流した
恐る恐る質問を投げ掛けるととても楽しげな口調で返答をするが、
最後になると自分の本音をもらすと手に持った缶ジュースを野球選
手のレーザービーム並のスピードでエリオの顔面、目掛けて投げた
鈍い音と共にエリオの顔面に缶ジュースは激突した

「なあんだ、アイスをおごって貰ってただけか、早く言えば良かったのに」

「…言う前に貴女が投げていた」

「酷いよ…セレス」

エリオの顔面に缶をぶつけた後、セレスはルーテシアから事情を聞
き苦笑をしながら早とちりをしていた事を認めた

顔をさするエリオを見ながらルーテシアは冷ややかな視線をセレス
に向けていた

「それで一人でいたけどルーちゃんはお母さんと一緒じゃなかったの？」

「…お母さんって人は眠ってる…」

「眠ってる？」

「ドクターはお母さんの目が覚めるには必要なものがあるって言うてた、だから私はそれを探してるの」

唐突にだされたセレスの質問にルーテシアは顔をうつむかせてから小さく答える、その内容にエリオとセレスは首を傾げた

そんな二人を気にせずにルーテシアはポソポソと呟いていく、探し物と聞いたセレスは少し腕組みをしながら考えると小さく頷くとルーテシアの方に視線を向ける

「ならその探し物、私も手伝うよ！」

「必要ない…貴女には関係ないから…」

セレスは手をあげながらにこやかに言うと、ルーテシアはきっぱりと断りを入れる

「確かに関係無いね、でもルーちゃんと私は友達だよ！なら助けるのが当然でしょ！！」

「…知らない、それになった覚えは無い…」

セレスは断られてもめげる事なく言葉を続ける、しかしルーテシア

は頑なに拒み続ける

「ほらエリオも何か言う！自分が引っかけたんでしょ？」

「人聞きの悪い言い方しないでよ！」

僕も手伝いたい、探し物の事くわしく教えてくれないかな？」

「…エリオ達には関係の無いこと…もう行くから」

中々折れてくれないルーテシアにセレスはエリオに援護を頼む

セレスの言い方にツツコミを入れながらもエリオはルーテシアに頼むがルーテシアは立ち上がりそのまま走り去ってしまう

「行っちゃった…もうエリオは後でMAXサイダーを一気飲みね」

「なにその罰ゲーム！というかMAXサイダーってなに！？」

「レキがよく飲んでる、激！炭酸シリーズの一つでその刺激で嫌な事を全部忘れさせてくれるんだって」

「そんなの一気飲みしたくないよ！」

走り去ったルーテシアを見てセレスは肩を落としながら言う「エリオに指を向けながら言い出す」

聞いた事の名前にエリオは冷や汗を流しながら聞く、そして聞かされた説明に思いつきりツツコミを入れた

そんなセレスとのやりとりの中でもエリオはルーテシアの事を考え

ていた

もしもまた会えたらもう一度、頼んでみよう：エリオはそう考えていた

しかし、ルーテシアとは直ぐに会えることになるとはこの時、セレスとエリオは思ってもいなかった

EP19…リア充は爆発しろ!! byセレス（後書き）

どうも、えのきです！

いかがでしたか？休日セレス編は
作中でセレスのキャラが違ってるのは作者の本音が混じってるだけで本当はいい子なんです（笑）

さて今回はアル編となります、お楽しみ

さてお知らせですがこの小説のお気に入りが100件になりました！

そこで調子に乗ったえのきは人気投票なるものを作りたいと思います

ルールは簡単です

読者様が夜天に舞い踊る荒鷲と原作キャラで1位から3位までキャラを選んで教えてください

作者がそれを集計し改めてランキングとして表します

活動報告、メッセージ、感想のどれでも構いませんが作者はツイッターはしてないのでその三つのどれか一つでお願いします

言う必要は無いとは思いますが投票は一回だけです

作者の気まぐれに付き合ってくれる方をお待ちしてます

常連でも新規でも通りすがりでも構いません、気軽に参加して下さい

ではお待ちしています、ちなみに期限は明日の21時までとします
それ以降は無効となるのでお忘れ無いうように

EP20：変わる関係、深まる想い（前書き）

アルとはやてのデートでございます

今回も楽しんで貰えると嬉しいです

EP20…変わる関係、深まる想い

セレスが色々、画策するなかアルはガレージに来ていた

「ヴァイス、アルト…少し相談にのってくれないか？」

その瞬間、カラーンと物が落ちる音が響いたそれはティアナからバイクの整備を頼まれたヴァイスのスパナが地面に落ちる音だった
ヴァイスと整備を見学していたアルト・クラエツタはまるでオイルの足りない人形のように後ろにいるアルの方に顔を向けた

「今の、本気か？」

「アルさんが、相談？」

「よしお前らが俺をどう見てるかよくわかったよ…」

あり得ないものを見たような表情をしながらヴァイスとアルトはアルの方を向く

アルは一度ため息をついてから少し苛立ちを見せてから目を細めて言う

「冗談だって、んで何を相談すんだ？
また新しいサボり場所か？」

「ヴァイス陸曹そんな事を教えてたんですか？
先ほどは失礼しました、力になりますよアルさん」

「悪いな…実ははやてについてなんだ
お前から見てあいつ怒っているようにみえるか？」

アルから放たれた怒気と言葉にヴァイスとアルトは慌てて手を振り
答え、アルは二人に相談事を話した

アルの言い出した内容にヴァイスとアルトは互いの顔を見てから首
を傾げた

「部隊長はいつも通りだと思いますよ？」

「この前の事は気にしてる様子はなかったけどな」

「そうか…実は最近、妙に避けられてるんだよな…」

二人の情報をきいたアルは少し難しい顔をした後、最近の事を話し
だす

それを聞いた二人は意外そうな顔をして驚いていた

「部隊長がアルに対してそんな態度を取るなんてな…普段からだと
ありえないな」

「交際しているのかと思うくらいお二人共、仲が良いですよね？」

「別に付き合っていないぞ？」

はやては気の合う後輩にしか見てねえよ…」

ヴァイスはアルの話を聞いてはやての性格と自分の視点で話し、
アルトは日頃の二人のやりとりを思い出しながら話す

交際という言葉に対してアルは少し投げやりな口調で返答をする

「まあなんにせよ、俺達は部隊長じゃない
だから本人に聞いてくるしかないんじゃないか？」

「そうだな…ああそうする事にすつか、わりいな」

話しが止まった時、ヴァイスがお手上げだという動作をすると、アルは少しため息をついてからガレージを後にした

「ヴァイス陸曹…いいんですか？
アルさん悩んでましたよ」

「良いんだよ…つうか贅沢過ぎるから少し悩めってんだ」

「それ嫉妬ですよね、明らかに…」

居なくなったアルに対してアルトは少しだけ非難するように言うが、ヴァイスは目を細めながら答える

呆れてたようにため息をついてからアルトはヴァイスを見ながらツッコミを入れた

はやてを探しに隊舎に戻ったアルはまず、部隊長室を目指した

一番はやてがいる可能性があるとしたらそこだからだ

（いなかったらリインか誰かに聞くとするか：誰かいるだろうかな）「おっ？」

「えっ？」

部隊長室前の角を曲がった時に俺は丁度良くはやてと出くわした、俺もはやても意外だったのか最初は戸惑いを感じていたがそれは直ぐに解けた

「先輩、なんか用なんか？」

悪いんやけど私はちょい用事があるねんだから後にしてくれへんかな？」

「：後回しにしてたら次はいつになりそうかわからないな：わりいけど少しだけ話をさせてくれないか？」

はやては口調はいつもと変わらないがアルと目を合わす事なく言う
と横を通り抜けるようにして進もうとする

しかし立ち去ろうとするはやての手をアルが掴み引き止める、最初は振り払おうとしたはやてであったがアルとの力の差は明らかであり抵抗は無意味と判断し少し非難するような視線をアルに向けた

「ずいぶん、強引なやり方だな：先輩」

「自分でもそう思うな：しかしながらお前に逃げられ続けたんだ、

ちよつとくらい強引でないと無理だと思つてな」

アルに不機嫌そうな声ではやてが呟くと苦笑を浮かべてアルは返答をする

「それで何を聞きたいん？」

「言わなくてもわかるだろ？ なんであんな避け方をするんだ…」

「……そんな事…」

仕方なくため息をつくはやてはアルに短く返答するが投げ掛けられた質問に言葉を詰まらせる

「わからないとも思つたか？」

あんなあからさまなやり方で…」

「……………」

アルから投げ掛けられていく言葉にはやてはただ押し黙っていた

一つため息をついたアルははやてを見ながら言葉が続けた

「はやて…俺が何かして避けてんなら謝る…だからなんで避けてんのか教えて欲しい」

「…それは…その…」

真剣な眼差しではやてに語りかけていくアルに対して、はやては戸惑うばかりだった

「俺はお前にだけは嫌われていたくない…頼む…」

「先輩…違うんや、先輩が嫌いになって避けてた訳やない
少し考え事があったてな…出来れば一人で解決したかったんや
だけど先輩と話したらうっかり言ってしまうそうで、だから…」

「だから自然と避けてたと？」

アルの言葉にはやては頬を赤らめると俯いてしまいがゆつくりとだ
がはやてはアルに説明をしていく
そしてその言葉に繋げるようにアルが言えば首を縦に動かしてはや
ては答えた

「ごめんな…ちゃんと言えれば良かったやけど、でも安心してな
私は先輩の事は呆れる事はあっても嫌いにはならへんよ」

「呆れるはいらないだろ…」

なら良いけど…はやて、少し外に出ないか？」

「なんで外なん？」

深く頭を下げてからはやては謝ると微笑をしながらアルに言えば、
アルは肩を落として落ち込む

少し考えこんでからアルは唐突にはやてに外出を提案をする、脈絡
のない事にはやては聞き返す事しか出来ずにいた

「はやてが自分で解決するなら俺は意見は出さない、だから別な方
面で手を貸そうかと思ってな
外出たら少しは考えがすっきりするかと思ったけどダメか？」

「ええとは思うけど…それ、普通に聞いたら…デートのお誘いやと思うんやけど…」

不思議そうにしているはやてにアルは言い出した説明をすると微笑しながら質問をする

はやても良好な感じに答えるが少し言いにくいのか人差し指同士を付き合わせながら、アルに問いかける

「ああ…確かに…なら気分転換にデートしないか？はやて」

「!?!?!?!?／／／」

はやてから投げ掛けられた問いにアルは少し考え込むと言葉を言い直してから、改めてはやてに提案をする

あまりにもすがすがしい言い方にはやては顔を赤くし言葉を無くした

「んでご返答は？」

「……ええよ…準備するから先に待ってな…」

「ああ、玄関先にいるからな？」

言葉を無くしてるはやてにアルは優しく語りかけると少しだけ言葉を詰まらせたあと了承するはやて

返答をするると直ぐに後ろを向いてアルの手を払ったはやては顔を見せないまま、言い部隊長室に戻っていった

はやてが部隊長室に入る前にはつきりとした口調でアルが言う、
はやては背を向けたまま頷いた

――
SIDE..はやて

部屋に戻った私は力が抜けたかのように壁に寄りかかった：

頭がとても熱く思考が上手くまとまらない理由はわかってる、先輩
のせいや：あんな事を真顔で言うからや：

原因を作ったのが自分やからあまり強くは言えないけど：でもその
理由かて先輩の事やからやっぱり先輩のせいかもしれへん

先輩の事が好きだとわかった次の日から私は先輩を見ると、心臓が
張り裂けそうなくらい緊張するようになった

近くに入れば聞こえそうなくらいに、高鳴る鼓動を聞かせないよう
に私は距離をとったのだけどそれがまずかった：だけど

（私にだけは嫌われたくないとか：そないな事言われたら余計に意
識してしまうやろ！：まったくあの鈍感は：）

頬に手を当てながら先輩に悪態をつくと同時に、それだけ私を見て
くれてる先輩の事が好きになった：

矛盾している気持ちの変化に私はため息をつきながら、私服に着替える事にした：だけど問題が起きた

「何を着たらええんやろ：いつもやとなんかな：デートなんやしそれらしい格好、って初めてなんやからそんなあるかい！！」

私服についてだった、いつもの格好では只の買い物でしかない：だから違う服を探すのが初デートの私には皆目検討がつかなかった

――

セレス達が出かけた後の入り口前で私服に着替えたアルフィリオスが大型のバイクに寄りかかってはやてを待っていた

退屈そうに欠伸をしていた時、扉の開く音が聞こえ視線を向けると私服に着替えたはやてが辺りを見渡しながら出てきた

「はやて、こっちだ」

自分を探しているはずのはやてにアルは声をかけるとはやてはビクっとしてからアルに目を向け、駆け足で近寄った

「えっと、待たせてもうたかな？」

「ん？いや全然、それとほれ：今日はコイツだからな」

先に待っていたアルにはやては少し不安気に聞くと首を振ってからアルは答え、バイクに乗せてあったヘルメットをはやてに渡す

クラナガンに向かう道路を走行中にはやてが念話で話しかけてきた、おそろく普通に喋るより伝わりやすいからだ

＞どうした？はやて、忘れもんか？＜

＞いやいや、子供やないんやから…行きたい場所があるんやけどええかな？＜

アルも念話で返答をしながら運転を続けた、アルの言い方にツツコミを入れてから場所を要望するはやて

＞お前の気分転換だ、構わないぞ
何処に行くんだ？＜

＞ありがとな、そこは行ってからのお楽しみや♪＜

遠慮がちに話すはやてにアルは好きにしていると答えると声を弾ませながらはやては答え、バイクはクラナガンに入った

＞あっ先輩！ここでストップや！！＜

「ここは…ゲーセン？」

はやてに言われてバイクを止めると様々な音が耳に入りだし上にあ
る看板には色とりどりの蛍光ランプでゲームセンターとかかかっていた

「前から行ってみたかったんや！ほな、さっそく入ろうか」

「ああ、んじゃ行くか」

期待に目を輝かせているはやてに苦笑を浮かべながら答えるアル

そしてはやてが先導するように二人はゲーセンの中に入っていった

――

「へえ…中はこんななんやな…」

「もしかしてお前、ゲーセン初めてなのか？」

「うん、学生時代は管理局の出動がほとんどやったから遊びなんて全然いかへんかったや…我ながら枯れた青春時代やった」

物珍しそうに中を見渡すはやてにアルは質問を投げ掛けると苦笑を浮かべつつ答え最後には少し落ち込みながら言うはやて

「…そこまで卑下しなくても…なら楽しまないとな」

「せやな、ほな手始めにあっちからや！
全部制覇する気で行くで！！」

アルは苦笑をしながらフォローを做的是はやてに微笑して言う

はやてもそれに答える様に意気込むと手近な台に向かいだす

アルとはやては最初にガンシューティング、次にレースゲームとゲーセンにある様々なゲームをプレイしていった、そしてゲーセンに入って数時間が経過しほとんど遊び抜いた二人は近くにある海が見える公園に移動していた

「いやあ、こんなに遊んだのは初めてや！ありがとうな、先輩」

「気にすんな：どうやら気分転換になったみたいだな」

ベンチに座ったはやては大きく伸びをしながら言うとしり笑って答えるアル

嬉しそうに話すはやてに安堵の息をもらしながらアルは言う

「せやな、確かに良い気分転換にはなったで：あんな：先輩に聞きたい事があんな」

「なんだよ、改まって何が聞きたいんだ？」

「レナって人の事や：先輩はどう思ってたん？」

はやては思い返してから頷くと少しだけ言いづらそうにした後、アルに言う

不思議そうにしながらもアルは承諾をするがはやての口から出された問いかけに言葉を詰まらせた

最初は誤魔化そうとしたアルであったがはやての真剣な眼差しに一息ついてから、ゆっくりと話し始めた

「アイツをどう思ってるか…はつきり言えばただのパートナーにか見てない」

「でも、レナは…」

「アイツの気持ちは伝わった…だけどそれ以上に護れなかったってのが大きくてな…」

アルの言葉に驚き戸惑いながら聞き返すはやて、補足するかのよう
にアルは言うとき小さく苦笑をした

その苦笑を見てはやては思った、この人は本当にレナを大切に
していたんだと…

だけど自分のミスで死なせてしまった事を未だに後悔している…

そんな彼に何が出来るか考えた、どうすれば良いかと…そしてはやては一つの決断をした

「…先輩、もう一つ言いたい事があるんや…私は…先輩に頼る事を止める…」

「いきなりどうしたんだ？」

「今回の件で私は先輩の事をまったくわかってなかった事を思い
つた…そして先輩に依存しすぎたのもわかったんや…」

先輩が抱え込まない事を約束してくれたように私は先輩を助ける事
を約束したいんや…」

いきなり言われた事にアルは動揺をしながらも聞く

目を閉じて前回の事をはやては思い返しながら言う自分がアルをどう見てたか言い、自分に言い聞かせるように宣言をした

「お前がそう決めたのなら俺は何も言わねえよ…ちよつと残念だけどな

でもこれは忘れんなよ？

何かあれば俺は直ぐに駆けつけるってな」

「それやと意味がない気がする…」

「そんなときにはお前が俺を護れ、そうすりゃ万事解決だろ…」

「はは…なんやそれ」

少しおどけた事を言いながらアルは人差し指を立ててはやてに言う聞いていたはやては少し納得のいかない表情をしているがアルはそれに対して自分とはやてに指を向けながら説明するとはやては微笑を浮かべた

「あつ、それと呼び方なんやけど先輩って言ったら今までとおんなじやから…ア、アルって呼んでええかな？／／／」

「…良いと思うぞ？ちよつと飲み物買ってくる、いない間詰まらなように練習してろよ？」

笑っていたはやては思い出したかの様に手を叩いてから言うとし

恥ずかしそうにアルと呼ぶ

言われてから少し固まっていた、アルはやけにあっさりした口調で言ってから立ち上がりはやての頭を軽く叩いてからその場を離れた

「アル、か…ふふ♪」

アルがその場から居なくなった後、はやてはアルの名前を呟くと嬉しそうに笑った

「予想外の攻撃力の高さに驚いたぜ…」

自販機の前に立ったアルはジュースを買いながら片手を顔に当てた、指の隙間から見える頬はうつすらと赤くなっていた

「本当は嬉しいんだから素直に喜んだらどうなんですか？」

「いきなり話しかけるなよ、イーグル…」

「空気読んで黙ってたのにずいぶん言い種ですね…まあこの笑顔ならそれだけの反応を見せてもおかしくはないでしょうが」

顔を押さえていた時にイーグルが話しかけてきた、アルはムツとした表情を浮かべて返す

イーグルはため息をついた後アルの目の前に先ほど笑っていたはや

ての画像を展開する

「いつ撮ったんだよ!？」

「何を寝ぼけた事を言うんですか？」

私にかかれればこの程度の撮影など簡単なのですよ」

「威張るな…おっ…」

画像を展開するイーグルに目を細めて睨み付けると、イーグルはしれっとした言い方をしてから自慢するように言う

アルはため息をついてから何かを見つけそちらに向かった

「あれ？ずいぶんと遅かったみたいやけど、どないしたん？」

「ちょっとな…ほいっと」

「ありがとな」

ベンチに戻ってきたアルにはやては不思議そうに言うところアルは軽く笑いながら答えはやてにジュースの缶を渡した

はやては受け取って礼と共に笑顔を浮かべる、先ほどの事を思い出したアルは気恥ずかしそうに視線を反らした

はやてはその態度を不思議に思い聞こうとした時、急に首元のイーグルからけたたましい音が鳴り響いた

「これは!？」

「緊急通信です! 発信者はライトニング5からです!!」

《こちらライトニング5! 緊急用件により全体通信をしています、サードアベニューにて少女を発見! 衰弱している模様、指示をお願いします》

「はやて!!」

レキから入った通信にアルとはやての表情が変わる

通信を受け取った後アルははやてに呼びかけるとはやては力強く頷くと二人は発信地点に向かうために走り出した

EP20：変わる関係、深まる想い（後書き）

どうもえのきです！

いかがでしたか？ 今回のお話は…

次回はレキ達のお話になります

楽しみにしてください

EP21..休息と事件（前書き）

ようやく、仕上がりしました！

今回、アル達が下水で戦うシーンがあります、その時には『疾風のアクセル』（仮面ライダーW オリジナルサウンドトラックより）がイメージBGMとなります

EP 21…休息と事件

モノレールから降りたレキとキャロは街を歩きながら今日の行き先を話していた

「実はシャーリーさんから今日のスケジュールを作って貰ったんだよ」

「シャーリーさんが？どんな日程か見せてくれないかな？」

隣を歩くキャロがレキを見ながら告げると、レキは小首を傾げてキャロにスケジュールについて質問をする

「ちょっと待ってね、はい♪これが今日のプランだよ」

「えっと…」（これは…また）

（レキ：俺がいう必要はねえとは思うが、こいつはキャロには早すぎるだろ…）

（やっぱりそう思う？ファフニール…）嬉しそうにケリュケイオンからスケジュールを展開する、レキは一通り見てから言葉を詰まらせた

そして普段あまり喋らないファフニールから呆れたような言葉をレキは受けた

シャーリーが組み立てたのは一般の恋人達が行くようなデートコースで、間違っても10代しかもあまり出かけた事がないキャロには

少し無理があるプランだった

レキはキャロに違うプランが良いんじゃないかと提案しようとするが、あまりにも楽しみにしているキャロの横顔に決心が鈍ってしまう

「キャロ、今日はシャーリーさんのプランじゃなくて自由に歩いてみない？」

外を出歩く事が少ないから少し見て歩きたいんだ」

「そうだったんだ…良いよ

レキ君がしたいなら私も付き合うから」

レキは若干焦りつつキャロに言う、レキの言葉を快く了承するキャロ

シャーリーのプランを回避出来たレキはホッと一息ついた

「それじゃあ、まずはこの辺を一回りしてみようか」

「うん、あっ…あのね、レキ君」

「どうしたの？キャロ」

レキは辺りを見回してからキャロに提案をする、元氣良く頷いたキャロだったが何かを思いついたのか、少し恥ずかしそうにしながらレキに問いかける

「どうせだったら手を繋いでみたいな…なんて思ったから、あの良いかな？」

「えっ…手を…うん、良いよ」

キャラは手遊びをしながら不安気に提案をする、レキも最初は戸惑ったが自分に言い聞かせるようにうなずくと右手を差し出した

差し出された手をキャラは掴んでからレキに笑いかけるとレキも同じように笑い返した

それからレキとキャラはクラナガン市街の探索を始めた

最初は小物店に行きレキはキャラに似合いそうなリボンをチョイスした

「これなんか似合うと思うんだけど、どうかな？」

「似合うかな？私はレキの方が似合うと思うよ？」

「それは無いとおもう…」

レキは手にとった青色のリボンをキャラに見せる

リボンを見てからレキの方が似合うと判断するキャラ、さすがに女モノを似合うのどうだろうとレキは肩を落とす

その後も二人は様々な場所を歩き回った、そして一通り回り終えた時にキャラは少し立ち止まった

「どうかしたの？ キャロ」

「やっぱりフェイトさん達にお土産を買って行った方が良いかなって思ってる」

「うん、でも遠慮してたしな…そうだ！ プレゼントなら受け取って貰えるんじゃないかな？」

「あ、うん！ それならお土産じゃないもんね、それいいかも」

急に立ち止まったキャロにレキは近づいて肩を叩く、キャロは顔を上げると考えをまとめながら言葉を出していく

出かける時にお土産はいらないと話した事をレキは思い出し同じように考え込むと一つの案を閃き、キャロに提案する

お土産ではなくプレゼントまるでとんちをきかせたかの様な解答にキャロは目をきらめかせて頷いた

二人はプレゼントを探す為に来た道を引き返そうとしたがいきなりファフニールから警告音が響いた

「レキ、強い魔力反応だ！」

しかもコイツはレリックの反応だ」

「場所？」

「地下を移動してるみたいだ…反応が強い地上に近づいてる」

レリックという言葉に二人の顔つきが陰しくなる

ファフニールの警告のすぐ後に路地の方から何かが動く音が聞こえた

レキは直ぐ様、路地にむけて走り出す

キャロも同じ様に走り出す路地に到着するとそこには開けられたマ
ンホールの蓋と側にはボロボロの布を巻いた少女が倒れていた

「キャロ、ヒーリングをかなり衰弱してる

僕は全体通信で連絡を入れるから」

「うん、わかった」

側に駆け寄ったレキは少女の状態を確かめると直ぐにキャロに処置
を頼むとファフニールに全体通信の準備をさせる、その時にレキは
気がついた

少女の腕には手枷のような鎖があり近くにはレリックのケースとお
ぼしき物があった、しかしケースを巻くように巻かれた鎖の結び目
は二つあった

レキは全体通信をしながら辺りを探索したがレリックケースは見当
たらなかった

（ケースは二つあった…今は一つ…考えられるのはケースはガジェ
ットに回収されたか…地下に落ちたか…）

おそらく存在したであろう二つ目のケースの行方を思案しながらレ
キは六課メンバーの到着を待った

「この辺りだよな？レキが通信してきたのは」

「はい、間違いないかと」

「レリックと一緒にいた少女、アルはどう思うん？」

バイクで通信のあったエリアに来たアル達はレキ達を探した

その際にはやてがアルに質問を投げ掛ける、アルは顎に手を当てながら考える

「人造魔導士だな：間違はなく、なんでレリックと一緒にまでかはわかんないが無関係って事はねえだろうな」

はやての質問にアルは自分の見解を言うと言おうと面倒そうに呟く

イーグルのナビによって通信の発信された場所につくとそこにはフオワードメンバーにセレス、なのは、フェイトにシャルが来ていた

「もしかして、一番最後か？」

「そうみたいやな」

集まっているメンバーを見てアルは苦笑しながら言うとはやても同じように苦笑した

「アルさん、はやてちゃん、間に合ったみたいだね」

今からスバル達に指示を出すところだったんだ」

「そっか、んでその子がレリックを引きずってきた子なんだな？」

「うん、衰弱はしてるけどもう大丈夫だって、キャロのヒーリングのおかげだね」

アル達に気づいたのはとフェイトが二人の側に行くとなのはが決まった事を教え、フェイトがキャロの活躍を自分の事の様に喜んでいた

「それじゃあ、アルさんは皆と一緒に調査をしてもらえるかな？」

「ああ、了解だ」

《ガジェットがきました、地下に数機編成、数は25！
海上方面に12機編成が6グループ！》

なのはから指示を受けたアルは片手をあげて答える、するとシャーリーが焦った口調でメンバーに通信を入れてきた

《スターズ2からロングアーチへ

海上訓練中だったけどナカジマ三佐から許可貰ってそっちにいったら、それと》

《陸士108番隊のギンガ・ナカジマです
別件で捜査していたんですがそちらで起きてる事と関係してるかもしれない、合流してもいいですか？》

「こちら八神はやて、もちろん、手があるのにこした事はあらへん、

合流を許可します」

シャーリーの通信のすぐ後にヴィータから急行しているという通信が入ると続いて、ギンガからも通信が入る

ギンガは合流の許可をはやてに求めると快く了承をするはやて

「ギンガが合流か、コイツは地下の方は手早く済みそうだな」

「そうですね、あの指揮は誰が担当しますか？アルさん」

「そりゃもちろんお前だよ、ティアナ
セクターガードなんだしな…サポートはすっから思いつきりやれよ
？」

「はい！皆、集まって」

通信を聞いていたアルは笑いながら言うのとティアナが隣まで来て質問をする

アルは当然の様に返すとティアナの頭を軽く撫でてから言い、マンホールの上に移動する

なんとなく答えがわかっていたティアナは微笑をするとフォワードメンバーに呼びかける

「短い休暇だったけどしっかり休めた？」

「」「はい！」「」

「うん」

「まあまあかな」

「それじゃあ仕事に頭を切り替えて行くわよ！」

「「「「「おお！！」」」」」

ティアナの言葉にそれぞれが返答しティアナが最後に声をかける
それに答えるようにメンバーは力強く返答をするとそれぞれがデバ
イスを構える

「「「「「セットアップ！！」」」」」

六色の光が辺りを照らすと全員はバリアジャケットを身に纏う
スバルから順に地下に降りる中アルはセレスとはやてに近づく

「セレス、ヘリで待っていてくれないか？」

「うん、地下でユニゾンは動きにくくするだけだもんね」

「セレスの事は任しといてな
アル、気をつけてな？」

アルの提案にセレスは頷いて答える、密閉された空間では動きが早
くなるセレスのユニゾンは自分の首を絞めるだけだったのであった
一緒にヘリに乗り込むはやては笑みを浮かべてアルに言ってから少
し心配そうにする

「ああわかってる、俺を誰だと思いつてんだよ？」

苦笑をしながらアルははやての頭を撫でるとからかうように言えば
地下水道に降りていく

――――

「アルさん！前後からガジェットが六機接近してきます、注意してください」

「ガジェット、1ダースお待ちどうってか？ティアナ、どうするよ」

地下水道に降りた途端にティアナから報告が入り、アルはイーグルを構えてからティアナに指示を仰ぐ

「前方はスバル、エリオ、私が迎撃します
アルさんはレキ、キャロと共に後方をお願いします！」

「あいさ、レキキャロ、準備は良いか？」

「問題ないです！」

「同じく」「キュクッ！」

ティアナからの指示を聞いた、アルは反対方向に身体を向けると後ろにいるレキとキャロに声をかける

二人も準備は出来たらしく答えるとガジェットを待った

不気味な静けさが辺りを満たし天井から水滴が落ちた途端、水の中からガジェットが飛び出してきた

「イーグル！」

「了解！ブレードオン、刀身固定します！」

飛び出したガジェットに怯まずにアルはイーグルに指示を出すと、イーグルはブレードを展開する

相手が攻撃を放つ前にアルはソニックムーブでガジェットの懷に移動すると一閃によって斬り捨てる

「ガトリングバレット！！」

「フリード、ブラストフレア！！」

アルが動いた瞬間、レキとキャロも行動を開始していた

レキは双銃形態にし二機のガジェットを魔力弾の連射で仕留める、キャロもフリードの火炎弾によりガジェットを一機仕留める

「イーグル、カートリッジロード！ブレイズバスターだ！！」

「了解、1カートリッジロード、ブレイズバスター！」

イーグルの銃身からカートリッジが一つ排出されるとアルはイーグルの銃口を残り二機に向け赤い魔力砲を撃ち放つ

なすすべもなく呑み込まれたガジェットは爆散した

「下水にガラクタ捨てても大丈夫だったか？」

「なら木端微塵にして下さいよ、アルさん」

「アハハ…ティアナさんそっちはどうですか？」

下水に落ちていくガジェットの破片を見ながらアルは呟くとレキはため息をつきながら言葉を投げ掛ける

二人のやりとりにキャロは苦笑をしながらティアナ達の方に目を向けた

ティアナ達も同じように片付けたらしくアル達の方に走りよってくる

「結構数で向かってきますね、早くギンガさんに合流しましょう、アルさん」

「どんな編成でいく？さっきみた後方からも来るみたいだからよ」

「そうですね、先頭にアルさん、次にスバル、エリオ、あたしにキャロ、最後にレキで行こうと思います」

襲撃してきたガジェットの数を把握しながらティアナはレリックを優先しながらもギンガとの合流をすると判断する

アルはイーグルの銃身を肩に当てながらティアナに道中の隊列について聞くと、名前を呼びながら隊列を決めていくティアナ

「やれやれ、上司使いが荒いもんだな」

「いけませんか？」

「いんや、上出来だ…んじゃ先行すつからついてこいよ？」

「「「「了解！」「」「」」」」

ティアナの編成にアルは苦笑をしながら言う。ティアナは少し意地の悪い言い方をする。

微笑をしながら答え、皆に声をかけてから先行するアル。

ティアナ達もそれに答え、編成順にアルの後についていく。

――――

「GINGAさん、お久しぶりです」

「うん、ティアナ現場のリーダーは貴女なのよね？」

指示に従うから合流ポイントを教えてくれる？」

「はい！今、クロスミラージュからGINGAさんのブリッツキャリバーに送りますね」

移動をしながらGINGAに連絡を入れるティアナ。
GINGAも地下水道に入ったのか、周りは薄暗くコンクリートの壁があった。

合流ポイントについて聞かれたティアナはあらかじめ決めておいたポイントのデータをギンガのデバイスブリッツキャリバーに転送する

《受け取ったわ…それと、アルさんそこにいる？さっきから連絡入れてるんだけど繋がらなくて》

「えっ？ちゃんといいます…何してんですか？アルさん」

「私は何も知らないよ、説教魔神のギンガから連絡きたなんて知らないよ、圏外じゃないのかな？」

「違いますよ、意図的に無視してるだけですから」

データを受け取った報告をしたギンガはティアナにアルの所在を質問する

不思議な質問にティアナは目の前を走ってるアルを見るとそこにはイーグルを腰のホルダーにしまいわざとらしく耳を塞いでるアルの姿があった

耳を塞ぎながら何も知らないと言うアルに呆れたような口調で真相を話すイーグル、そしてアルが切っていた通信を繋げアルの目の前にこめかみをひくつかせるギンガが映し出された

《アルさん！！》

「なんだよ、うつせえな！？」

《なんだよ、じゃありません！連絡入れたんですから応えて下さい

！
》

「はぁ！？嫌に決まってんだろ！！お前は直ぐに説教すっからな！」
ギンガの怒号にレキを除いたフォワードメンバーは驚き足を止めそうになる

それに構う事なくギンガはアルに文句を言っていくが、アルも負けじと言い訳をしていくだがその内容は明らかに情けないものだった

《アルさんが毎回真面目にやれば私は説教なんてしません！！》

「今回は真面目にやってんだろが！！」

「普段からして下さい！！」

普段は見ないギンガの姿にスバルは咄然としいきなりケンカをしだした事によりエリオとキャロはおろおろしていた

レキとティアナに至っては呆れつつも周りを警戒していた

「お前の説教なんざ聞いてたら日がくれるっての、どうしても言いたいなら俺らと合流してから言うんだな

その前にレリックを回収して帰るからよ」

《追い付けば、少しは話を聞いてくれるんですか？》

「ああ！いくらでも説教しても構わないぜ？
やれんもんならな、プップー！」

ギンガを小馬鹿にするような言い方でアルは挑発をしていくとギンガは意外そうな顔をした

まだ追い付けないと思い込んでいたアルは高笑いをしながら答える、その瞬間アルの前方にあった壁が粉碎されバリジャケットを着たギンガが現れた

「これで話を聞いてくれますよね？」

「い、イエスマム……」

まるで聖母のような笑みを浮かべているギンガだったがその背後には怒気が満ち溢れていた

乾いた笑みを浮かべながらアルは受け答えをする

「とりあえず先ほどの任務中なのに馬鹿にするような発言と態度についてしかるべき処置が必要だと思うんですよ、ね？」

「いや、本当にすみませんでした！」

「問答無用……！」

「グベハア……？」

ローラーでゆっくりと近寄ってくるギンガにアルは引き気味になり、処置のあたりで自分の運命を悟り直ぐ様土下座しようとするがその前にギンガの拳がアルの顔面にめり込んだ

リボルバーナックルでなかったのが唯一の優しさなのかと思いつなが
らアルは地面に叩きつけられた

EP21..休息と事件（後書き）

どうもえのきです！

このお話しを書いてて思ったんですがギンガとティアナの態度がはやてとヴィータのようになってるなと思いました

ハーレムをする気は無いんですがどうにもなってしまいます

でもこの小説のヒロインははやてです！断言します！！

次回はいよいよルーテシアとの戦い

さらにアルファの意外な一面を書こうと思います

それでは

A. EP：ハロウィンそれはやり過ぎ注意！（前書き）

本編やらずに投稿します

何がやり過ぎなのかは読者様が判断して下さい

A. EP：ハロウィンそれはやり過ぎ注意！

それは機動六課にて起こった：

アルフィリオス・ラーゼンハルグが珍しく私室で仕事をしていた時の事であった

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「誰だ？」

《私だよ、アル！》

《リインもいます！！》

部屋で書類の整理をしていた時にセレスとリインがインターホンを押した、普段なら許可なく入ってくるのになと思いながらアルは返答をする

しかし、いつまで経ってもリイン達は部屋に入って来なかった

「どうした？入らないのか、鍵なら空いてるぞ？」

《ちょっと開けて欲しいんだよね》

《お願いしますです、アルさん》

アルがセレス達に質問をすると二人とも扉を開けて欲しいと言った、手でも塞がってるのかと思いつながらアルは部屋の扉の前に立ちドアを開けた

「「トリックオアトリート!!」」

「間に合ってます」

扉を開けた先には奇妙なカボチャのマスクを被りマントをつけたセレスとリインがいた

アルは一ミリも笑わずに無表情のまま扉を再び閉めて目元に手を当てながら今見たことを忘れようとした

《ちょっとー!なんで閉めんのさ!!》

《ひどいですー!アルさん!!》

「うるさいわ!おかしい恰好している子の中には入れません!!てか何してんの君たちは!？」

扉越して文句をいう二人にアルははっきりとした口調で答えて二人に問いかける

《今日はハロウィンって行事なんだよ!》

《それでお菓子をくれなきゃイタズラするぞって言ってお菓子を貰うんです!!》

「なにその、新手のものごい…つかお菓子やれば良いんだな?少し待ってろよ…」

扉越して説明をしていく二人に、アルはため息まじりにツツコミを

入れてから部屋にあった小袋いりのクッキーを二つ手に持つと扉を開けた

「ほら、これで良いよな？てかなんでそんな恰好してんだよ」

「ハロウインの時にはお化けに仮装するんだよ」

「私達はカボチャのお化けなんですよ！」

リイン達にクッキーを渡しながらアルは二人の奇抜な恰好に苦い顔をする

セレスとリインは胸を張りながら自慢をしていく、だがアルにとってさほど怖いものではなかった

――――

リイン達が違う所にお菓子を貰いに行くと言い、アルは部屋に戻ると再び書類の処理に入る

リインやセレスがやってるならキャロ達もしているのかと苦笑をしつつ作業を続けた

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「噂をしたらなんとやらだな…一応聞いておくか、誰だ？」

「アルさんですか？ティアナです」

中に入ってもいいですか？」

「ティアナ？珍しいな良いぞ、入っても」

再び鳴ったインターホンにアルは一息つくつと訪ねてきた相手に問いかけると意外な人物から返答が返ってきて首を傾げた

普段、ティアナはアルの私室まで来ることはない…何か相談したい事があるのかと思いつながら入室を許可する

「「トリックオアトリート!!」「」」

「帰れやあああ!!」

ドアが開いた瞬間、仮装をしたスバル、ティアナ、ギンガがお決まりのセリフを言いながら入ってくる

まさかの来訪者にアルは思わず声を上げてツツコミをいれた

「セレスやリインなら笑って過ごせたけどお前らは無理だ!何してんの!?!仕事はどうした!?!」

「ありませんよ」

「はい？」

「今日はハロウィンだから最低限の仕事済ませたら終わりって八神部隊長が言っていました」

長時間のデスクワークのストレスを発散するかのようにアルは文句

を言っていくが、ギンガの言葉で勢いを削がれた

更に畳み掛けるようにスバルが今日の事をアルに説明をしていく

「俺、普通に仕事を押しつけられたんだけど…なんで？」

「多分アルさんがサボり過ぎてるからだと思いま「そんな事よりお菓子下さい!!」」

自分が受けてる事に疑問を抱いたアルは呟くように言うとティアナが訂正を入れるが途中でスバルが割り込んでくる

ため息を一つ吐いてからアルはスバルの頭をがっしり掴むと徐々に力を入れていく

「いだだだっ!？」

「にしてもお前らの仮装も変わってんなティアナは吸血鬼か？」

「はい、何故かタキシードまで着てますけど…」

「ギンガは…犬か？」

「狐ですよ、八神部隊長の故郷に妖狐ってのがいるそうなので」

スバルの頭を絞めながらアルはティアナとギンガに目を向けたティアナはフェイトのようなマントを羽織っており中にはタキシードを着ていた、しかしティアナのスタイルの良さのせいかな男性型の吸血鬼には見えなかった

ギンガは藍色の和服に大きな九本の尻尾に獣耳をつけていた、また
どういう仕組みで動かしているか分からないが尻尾と耳が時折動い
ていた

「あの、そろそろ離してくれませんか!？」

「えっ? ああ悪い気がつかなかった」

「気づいてましたよねというかなんで力が上がってんですか!？」

ギンガやティアナの仮装を見ているアルにスバルは抗議するように
言うが、アルは白々しく答え指にさらに力を込める

少し経ってからスバルを解放すると相当痛かったのか頭を抱えてス
バルは黙っていた

「んでスバルの仮装は…犬だな」

「これは狼です!!」

「はっ…」

頭を抱えているスバルを見ながらアルは仮装の元を予想すると、全
然検討外れな答えにスバルは訂正をするがアルはそれを鼻で笑った

「なんで笑うんですか!？」

「犬科には変わんないだろ、あとお前のイメージじゃ犬にしか見え
ない!」

「ひどい!!」

鼻で笑うアルにスバルは情けない声を出しながら言う「アルはビシと指をさしていい放つ」

スバルはショックを受けて肩を落としてへこんでいた

「とりあえず、お前らに菓子を渡せばいいんだな? ほらよ」

「ありがとうございます、アルさん」

「頂きます」

「:~:どうもです」

スバルをいじり終えたアルはお菓子を三人の手に渡す、ギンガ、テ
イアナ、スバルのそれぞれに礼を言う

「礼を言うくらいなら仕事を手伝ってくれ:~:っていねえし!!」

礼を貰ったアルは言葉より人手が欲しいと言ったら三人はいつの間
にか部屋からきえていた

「イーグル:後どのくらいあんだよ?」

「よろしいのですか?言っても」

「ごめん、やっぱ無しで…」

ギンガ達がいなくなった後アルは再び書類の処理をしていたがまるつきり終わらない書類の山に嫌気が差し出す

残りを確認しようとイーグルに問いかけると聞いちゃなららいよ
うな言い方で返された

ピン、ポーン…ピン、ポーン…

「またかよ…開いてんぞ…」

また部屋のインターホンが押され、また菓子をつたかりに来たかとアルは思いながら返答するが誰も入って来なかった

「ん？なんで入って来ないんだ…

出てみるか……っておうわあああつ！！」

疑問に思ったアルは部屋の外に出ることにした、アルが部屋の扉を開けると目の前に頭に斧が刺さったエリオとエリオと同じくらいの大きさの布切れをかぶった何かがいた
突然の自体にアルは思わず声を上げた

「トリックオアトリートです！アルさん」

「キャラなのか？…ってかお前ら二人の違いが怖い
エリオのはガチだろ、それ…キャラなんか布切れをかぶってるだけ
じゃないか」

「えと、ダメですか？」

布切れからキャラの声が聞こえアルは胸を撫で下ろすと、二人の仮装について意見を述べる、エリオのはメイクも完璧に行い演技も上手いのだがキャラのは布切れをかぶっただけというお粗末なものだった

布から顔を出したキャラは不安そうにアルに質問をした

（多分キャラなら許されると思ったんだろうな…まあ良いか）「いや大丈夫だ、ほらお菓子やるぞ
エリオも演技はもう良いぞ」

「エリオ君は演技してませんよ、気絶してますから」

「えっ！？なんで？」

お菓子をあげようと未だに死体のフリをしているエリオにアルは話しかけるがエリオが反応することはなかった

隣にいたキャラがにこやかな笑顔で説明してきた、アルは恐る恐るキャラに問いかける事にした

「最初は演技って事だったんですけどエリオ君の演技が凄く下手だったから、ギンガさんに頼んで気絶させました」

元氣よく頷いたキャラはアルに説明していくがその内容は笑顔で語るにはいかなものだった

（キャラ、いつからそんなアグレッシブな考え方に？…）「ならエリオが目を見ましたら渡して置くんぞぞ？」

「はい！それじゃあフリード、エリオ君を部屋まで運んで置いてね？」

「キュク」

苦笑いをしながらお菓子をキャロに渡すアル

キャロは頷いた後布切れの中にいたフリードに指示をだす、まるで了解と言いたげなフリードはエリオをくわえると足が地面に引きずらせながら移動していった

アルはとりあえずため息をついてから自室に帰っていった、自分は何も見えてないと言い聞かせながら

「ようやく三分の二か…なんとか今日中に終わりそうだな」

「ですがまだ来てない人たちがいますよ、相手をしてたら遅れませんか？」

少なくなった書類の山を見ながらアルは一息をついた

しかしイーグルの呟きによって表情が強ばった、そうエリオ達以降誰も来てない…レキに連絡を取るとなのは、フェイト、シャマル、シグナムは仕事で手が離せないとの事だ

（なら残りはヴィータとはやてか…先にどっちが来るんだ？）

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「来たっ!?…誰だ?」

《あたしだ…入ってもいいか?》

噂をすればなんとやらと言ったのは本当だと思いながら、アルはこれまでと同じように呼びかける

部屋を尋ねたのはヴィータであった、しかし聞こえてきた声はいつもより沈んでいてヴィータらしくなかった

「ああ構わないぞ、遠慮なく入ってこいよ」

《なら入るぞ…》「えっと…トリックオア…トリート…なんか寄越しやがれ…／＼／＼」

ヴィータに入室を許可するとアルはお菓子がなかったか探しだす、ドアの開閉音と共にヴィータがハロウインの挨拶をしてくるが、声はどうにも弱々しいものだった

アルは探す手を止めて振り返るとそこにはかつて猫の思念が憑依した時にしていた恰好、通称…猫ヴィータがそこにいた

どこことなく落ち着きがないヴィータは視線をあちらこちらに泳がせながら、恥ずかしそうにしていた

「猫娘ってところか…はやてからか?」

「……／＼／＼（こくこく）」

ヴィータが進んでこの恰好をするはずがないならばそんな事を命令する誰か、一人しかいなかった

ヴィータは何も言わずに頷いていたがアルには十分過ぎるくらいだった

（なら手っ取り早くお菓子を渡してやってもいいが…あんなしおらしいヴィータを見てると少しいじめたくなるなるな…）

「な、なんだよ…何見てんだよ／＼／＼早く渡しやがれ…バカアル／＼」

「いやあ、それなんだがな…菓子は今切れてて無いんだ」

アルはヴィータをかわいそうと思いながらも意地の悪い考えをしていた

その間にも羞恥心により爆発しそうなくらい、顔の赤いヴィータはアルを急かすように悪態をつく

そんなヴィータにアルのイタズラ心が目を覚ました、本当はお菓子を持っているのだが無いと言い張りヴィータのリアクションを期待した

「はあ！？ねえってどういう事だよ／＼／＼嘘つくならぶっ飛ばすぞ！？／＼／＼」

「いやいや、本当なんだよ
やあこりゃイタズラ確定だな…」

「う：／／えっと、イタズラ：イタズラ：えう！？／／／」

いつものセリフを言うヴィータであったが猫耳のせいか大して怖くはなかった

アルは無いことをアピールしながらやってしまったという演技をすると、ヴィータはポケットからメモを取り出してすっとんきょうな声を出した

「どした？ヴィータ」

「な、なな何でもない、だから向こうを向いてやがれ！！／／／」

不思議そうにメモを覗こうとしたアルに、ヴィータは先ほどより赤みをました顔でアルに指示を出す

（イタズラは後ろを向いてないと出来ないみたいだな、さてさてはやてはどんなお題を出したんだろうな）

ヴィータに指令を出したであろう元凶を思い浮かべながら後ろを向いていたが、ヴィータはまだ何もしてこなかった

「：ヴィータ？」

「ちょっと待ってろ、心の準備が必要なんだよ！！／／／それで：こうして：」

不思議そうにアルはヴィータに呼びかけると焦りながらヴィータは返答をした

そんなに恥ずかしいならやらなきゃ良いのにといいながらアルはヴィータの準備を待った、ヴィータはその間もブツブツと言っていた

「そして…最後に…さい…ふ、ふ」

「ふ？」

「ふにゃーっ!!」

打ち合わせをしていたヴィータであったが途中で言葉をつまらせてしまう

チュドーン!!という効果音がしてもいいくらいの叫び声と共にヴィータは床に倒れた

「ヴィータ!? 大丈夫か？」

「ふにゃー…」

慌ててアルはヴィータを抱き起こすと目を回しながらヴィータは気絶していた、どうやら羞恥心に耐えきれずに爆発したようだった

「ん? これがイタズラか…爆発してもおかしくないな、これは」

ヴィータの手から落ちたメモをアルは拾い上げて、目を通すと乾いた笑みを浮かべてアルは呟いた、そこには…

『イタズラする人の後ろから抱きついて最高に可愛い声で「にゃー」と鳴く。byはやて』

と書かれていた、猫姿だけで爆発しそうなヴィータにはあまりにも残酷な仕打ちだと思いつながらアルは、シグナムに連絡を取り気絶したヴィータを運んで貰うように頼んだ

その際に気絶してるヴィータの手にお菓子に乗せておくアル、せめてお菓子くらいは持たせないとかわいそうだなと思ったからである

「ハァー…ようやく終わった…」

「お疲れさまです」

作業を終えたアルは椅子に持たれかかる

それを労うようにイーグルは言葉をかける、無機質ではあるが言葉をかけてくれるのは今のアルには嬉しい事だった

ピン、ポーン…ピン、ポーン

「今頃かよ…はいはい、今行きますよと…」

達成感を満喫していた時にまたも部屋のインターホンが鳴らされた、時間を見ればもう少しで日が変わるそんな中で来るのは一人しかない。アルは考え扉に向かい開けた

「お疲れさまや♪アル」

「最後の最後で来たな、諸悪の根源」

開けた先には六課の部隊長で今回の書類を押しつけた、八神 はやてが立っていた

アルはやれやれと言いながらはやてに悪態をつく

「酷い言い方やな、大体アルが悪いんやで？書類をぎょうさん溜め込んだのは」

「だからって一日で終わらせろなんざ無茶ぶりもいいところだろ
しかも断れば今月の給料カットはねえって」

「それぐらいせえへんとやる気は出ないやろ？んで終わったんか？」

「見ての通りだ、必死こいて終わらせた」

アルの悪態に不機嫌そうな感じにはやては返すと鼻先に指をむけながらいい放つ

アルは指を避けると今日の仕事の内容について文句をつける

仕方ないと頷きながら人差し指を立ててアルに言うはやて、そして仕事の結果を問いかけるとアルは指を後ろに向けて書類の山を指でさす

「やれば出来るやないか、ほな次はお楽しみのメインイベントやで！トリックオアトリート！！お菓子、ちょうだいな」

「人から労力搾っというさらにとる気か！？…ったく、少し部屋の

中で待ってる：菓子を探すから」

「はい」

アルの仕事が終わった事を意外そうにしながら言うはやて、そしてニンマリ笑いながら騎士甲冑に着替える

普段なら騎士甲冑には黒い羽がついているが今回のは上着と羽がなく、変わりに悪魔の様な羽と尻尾が生えた甲冑になってアルに両手を広げてお決まりの挨拶を言う

ニンマリするはやてに対してアルは苦虫を噛み潰したような顔をしてから指で動作をすると部屋に戻っていく

はやてもアルの後についていく様に歩いて部屋に入るとアルのベッドに腰かける

「んでお前の仮装は悪魔か？」

「ちっ、ちっち！小悪魔や

私並なら当然やろ？」

「子じゃなくて大だろ？」「あんやと！？」「何でもない、ほれ！ご所望の品だよ」

「むぐ！？」

菓子を探しながらアルははやてに質問をすると、指を動かし口で擬音をつけながら訂正をするはやて

その言葉にため息まじりに呟くアル、聞こえていたのかベッドの上からアルに怒鳴るはやて

アルは適当に流すと小袋に入ったクッキーを手につつと、はやての口に押しつける

いきなりの事にはやてはすつとんきょうな声を上げつつクッキーを食べていき飲み込むと不機嫌そうにする

「食べさせへんでも食えるちゅうに」

「いやいや、こうしねえと次に移れないんだよ」

「ほえ？」

「トリックオアトリート、何か菓子を寄越しやがれ」

アルに文句を言いながらはやてはクッキーを食べ終わると首を振りながらアルは言う

意味がわからないと首を傾げるはやてにアルは今日、もっとも言われている挨拶をする

「えっ！？そんないきなり」

「ちなみにこの部屋に菓子はないう前が食ったのが最後だ」

「でも私も持ってないで？」

「ならイタズラしかないよな」

突然の事に驚き戸惑うはやて、しかしそれを気にする事なく話を続けていくアル

はやては手ぶらだということをアピールするとアルはにこやかな笑みを浮かべた、ちなみにこの時のアルの笑みはとても悪い顔だったらしい

次にはやての視界に入ったのは天井だった、はやてはアルが自分を押し倒したということを気づくにはあまりにも展開が早すぎて思考ついていけず抵抗が出来なかった

「えっ！？何がどうなって」

「今からイタズラするんだ、大人のな…もしかしたらえらくエロい事になるかもな」

「上手い事を言ったような言い方しとるけど内容は最低や！／／／展開に追いついていないはやてはただアルに聞くだけであった

そんなはやてにアルはさわやかな笑みを浮かべながら説明をしていくエロいと言う単語でようやく事態を理解した、はやては顔を赤くしながらツツコミをいれるが時は既に遅くはやては完全にホールドされていった

「まあイタズラよりかお仕置きだな、こんな時間に押し掛けてきた悪い子の、な…」

「ひう！？／／／アル…ホンマにやめて、アカンよこんな事に…／

／＼

「なら抵抗しろよ、無抵抗だとOKみたいだろ？
それとも期待してんのか？」

「そ、そんな事…／＼／」

押し倒した状態のままアルははやての耳元で囁くといきなりの事にはやては短い悲鳴を上げる

それでも思いとどまる様にアルを説得するがまるで効果が無く逆にはやてが誘発しているんじゃないかと言われてしまう

アルの言葉にはやては言葉を濁す、確かに夜中に異性の部屋に行くことはそういう事もある

はやても期待はしなかったと言えば嘘だがまさか本当になるとは思ってもいなかった

（でもするんならせめて両想いでしたかったな…それに雰囲気ももう少し考えて欲しかったわ…でも）「アル／＼／…せめて優しくしてな？／＼／」

「えっ…はやて？」（オールOKかよ！？このままは大変！！だけど据え膳食わぬは男の恥とか言わないか！？）

《とりあえず最低だと言うのははっきりしてますね》

《イーグル！？言葉がいつもよりキツイ！》

はやてはいろいろと不満な点はあったしかし、好きな人との体験が出来るという事実により覚悟を決めると不安そうにしながらもアルに頼み込む

一方、少しは警戒心を持って欲しいため寸止めにしたアルであつたがはやてが全面的に了承したため困惑した

その中で傍観をしていたデスクの上にあるイーグルから無機質なながらも非難の声が聞こえた

《まあアルがどのような接し方をしても構いませんが、女性としては最低だと断言します》

《う…そうだな》

《ならどうします？今からネタバラしをすれば間違い無くはやてさんから嫌われますね》

《そうはさせないさ…何とかする》「はやて…」

第三者視点でイーグルは話していくが明らかに口調には怒りが滲み出ていた

アルは申し開きすることなく同意をするとイーグルは結果をアルに突きつける

それでもアルは打開しようとはやてに言葉をかけた

「ん？なんや？アル／／／」

「俺はお前にもう少し自分を大事にして欲しいんだ…好きでもない奴とこういうのはマズイだろ」

「つまり、何が言いたいんや？」

「やっぱ、無しでお願いします！」

はやてから熱を帯びた声が聞こえ危うく理性が飛びそうになるがアルは何とか耐えて言葉を続ける

アルの言葉を聞き少しだけ冷静になったはやては声を落として聞いた
アルは自分が持てる精一杯の笑顔ではやてに言う、その場の空気が冷たくなるのをアルは肌で感じた

「っ！！」

「ごほお！？」

はやては何も言わずにアルの腹部を蹴り飛ばす、突然の事にアルはなすすべもなく床に転がった

「人の…覚悟を…乙女の覚悟を無駄にしよったなあーっ！！」

「イーグル…」

「はい、なんですか？」

「やり過ぎは禁物だな、これは今日の教訓だな」

「身を持って知るようですね」

はやては消える様な声で呟く、すると騎士甲冑が戦闘形態に移行しはやての手にはシュベルトクロイツと夜天の書がそれぞれ握られ魔力が集中しはじめた：

「響け、終焉の笛」

「支払い金、高くな」「足りないくらいかと」…そうか」

「ラグナロクっ！！！」

はやてが詠唱をしてるなかアルはイーグルに問いかけるがイーグルはそれをバツサリ斬り捨てる

そしてはやての全力の砲撃が放たれた

後に惨劇のハロウィンと称されたこの出来事はミッドチルダ、また機動六課に深く刻まれた

また全力で砲撃を撃ち込まれた局員に対してはどうでも良いと言われた

後日談ではあるがアルははやてに渾身の土下座によりなんとか許されるが二週間は口を聞いて貰えなかったそうだ

A. EP…ハロウィンそれはやり過ぎ注意！（後書き）

どうもえのきです

いかがなものでしたか？大半の人の声が予測出来そうですがどれがやり過ぎか教えて下さると嬉しいです

あと誰の仮装が良かったかも教えて下されば後日発表したいと思います

ちなみに今回仮装したのは

セレス、リイン…ジャックオーランタン

エリオ…ゾンビ

キャロ…幽霊

スバル…狼女

ティアナ…吸血鬼

ギンガ…九尾の狐

ヴィータ…猫娘

はやて…小悪魔

です

ではでは

EP22..地下水道での再会（前書き）

風邪ダウンから復活し、ようやく投稿出来ました

けどあまり本調子じゃないので短いです…

EP22..地下水道での再会

《レリックの反応を元に追っていたガジェットの反応が消失しました》

薄暗いラボの中で女性の声が響いた、その部屋には白衣の男性が一人佇んでいた、ジェイル・スカリエッティ：広域次元犯罪者にしてガジェットの製作者

スカリエッティは女性の報告を聞くと「ほう」と呟いた

「破壊したのは管理局かい？それとも『当たり』の方かな？」

《確定は出来ませんが、後者かと思われます》

「素晴らしい！ではウーノ、早速追跡をかけるのでしょうか」

スカリエッティは女性、ウーノからの報告に喜びを隠さずに言うと言うと直ぐに指示を出す

ウーノは短く了承をした時に入り口から赤いショートカットにボデイスーツを纏った少女が入ってくる

「ねえドクター『当たり』が見つかったんだって？」

「耳が早いね、ノーヴェ

確かにその通りだよ」

「あたしも出たいんだけど本当に本物か確かめたいんだ」

《ダメよノーヴェ、貴女の武装はまだ調整中なのだから》

ノーヴェと呼ばれた少女はスカリエッティに尋ねた用件を話す、しかしスカリエッティが答える前にウーノが提案を却下する

もったもな理由なのだろうが納得のいかないノーヴェは不満そうにしていた

「ノーヴェ、焦らずともアレはいずれ私達の元に来る、だから今はいい子にして待っていてくれないか？」

「ドクターがそう言うなら…」

不満そうにしているノーヴェにスカリエッティは説明をするがノーヴェ、納得がいかないという空気を出しながらも答えると来た道を戻りだした

その後ろ姿にスカリエッティとウーノは仕方ないと言った感じに一息ついた

「っち！納得がいかねえ！」

ノーヴェスカリエッティの研究室から出ると不満を口に出しながら歩く

「ノーヴェ、どうかしたのか？」

「あぁん？…アルファ、わりい少し納得がいけない事があったんだよ…それで」

「そうか、何があったか話してくれないか？少しでも聞けるから」

「ならちよつとだけ…聞いてくれるか？」

ノーヴェが道が交差している所についた時に不意に声をかけられる、不機嫌そうに返すとそこには白地の病人服のようなものを着たアルファがいた

ノーヴェは一度睨むが相手がアルファがだとわかるとバツの悪そうにする

何かあったと思ったアルファは話を聞いてみる事にした

ノーヴェは少しだけ口ごもるとアルファに話すことにした

「なるほどな…確かにウーノの言葉もわからないでもないな」

「だけで局の奴らなんざ武装が無くても問題ねえよ！アルファはあたしらの事を良くわかってんだろ！？」

「ノーヴェの言い分はわかる、だけど戦いに絶対はない…一つの油断が死を招く、分からないノーヴェじゃないだろ？」

「う……だけど…」

話を聞いたアルファは腕組みをしてから頷く、しかしノーヴェは大丈夫だと言い張るがアルファは人差し指を立てながら言い聞かせるように言う

気まずそうに口ごもるノーヴェ

その様子にアルファは微笑をすると優しくノーヴェの頭を撫でる

「心配なのは必要とされてるからなんだ、だからそう気にするなな：万全の状態になってからアイツラを叩こう、な？」

「わかった：ところでアルファは何か用事があったのか？」

「ん？ いやアサルトホークとシュバルツファルケンの強化プランとライナとレナの様子を見てきたんだ」

まるで手のかかる妹をなだめるようにアルファは言うとノーヴェは仕方なく頷く、そして今さらな質問をアルファに投げ掛ける

用事について聞かれ手に握っていた端末をノーヴェに見せながら答える、アルファ

更にライナとレナについて述べるとノーヴェ、小さく声を出してから口を閉ざした

前回の戦闘でライナは魔力ダメージの大半を引き受けて昏睡、レナは中途半端な記憶の復元により精神が不安定となり、二人とも数日前から調整槽に入っていた

レナは最近だがライナはノーヴェが産まれてからの付き合いで他の姉妹達も気にしていた

「あの二人、大丈夫なのか？」

「今のところはな、今クアットロが出ているから目覚めるのは当分先だな」

「そっか…」

ノーヴェがアルファに問いかけると簡潔に答えてから状況を説明するアルファ

「さて、スカリエッティ達はまだ忙しいようだから出直すとするか、そういえばノーヴェはまだこの前の戦術応用のレポートをまだ出してなかったな」

「うあ、忘れてた…」

「やれやれ、さあて出撃したいっていう気があるならレポートを終らすのに回そうか」

「それとこれとじゃ全然、違うってアルファ！！」

アルファは思い出したように言うとなーヴェに問いかけると視線をずらしながらノーヴェは答える

大きくため息をついたアルファはノーヴェの腕を掴んで来た道を戻りだす、やりたくないと呼ぶ声が通路に響いた

下水道

「首が痛いです…」

「それはアルさんが悪いと思いますよ？人をバカにするから」

「だからって殴る事はねえだろ！？」

「こうでもしないとわからないでしょ！アルさんは！！」

下水道を複数の足音が響いていく、ギンガと合流したアル達はレリック検索のために走っていた

その途中でアルはいきなり首を抑えながら呟く、隣にいたギンガは少しむくれてからアルに当然のように答えるとアルは殴られた右頬をさしながら言う

そんなアルにギンガはふざけた事を言えば殴れるようにするために握り拳を作って言い返す

「お前、もう少し優しくくれよ！冷たくされたら凹んで落ち込んで膝抱えるぞ！！」

「……真面目にしてくれたら少し優しくする事を考えます…」

（（（（（（…考えはするんだ））））））

アルはギンガに対して文句を言うとしてもこの中で、最年長が言うようなセリフではない事を言うと言とギンガは悩んだあと考慮すると答え、非情にならないギンガにスバル達はため息をついた

「ていうか壁破壊なんて荒業、誰に教わったんだよ！？はた迷惑だ文句言わないと」「アルさんですよ」「えっ？」

「壁破壊を教えたのはアルさんです
近道するなら時には強引にいくのも重要だ、壁の一つや二つ気にすんなとか言って」

「確かに言っていましたね」

「あれえゝゝ…」

アルは先ほどギンガがやった壁破壊について抗議をしブツブツと文句を言うがギンガの言葉でマヌケな声をだす、さらに追い討ちをかけるようにイーグルも言うと言と背後から冷たい視線が飛んでくる

それがスバル達のものだとわかってるアルは顔を背けながらとぼける

「全く、ギンガさんをここまで自分色に染めという良くもぬけぬけとしてられますね」

「人聞き悪い言い方をすんな！？」

「べ、別に染められてないです／＼／＼…多分」

「お願いだからそこは自信をもって答えてギンガ！」

イーグルの茶化すような言い方のせいで後ろから刺さる冷たい視線の鋭さが増すのを感じつつ、アルは否定するがギンガは頬を染めて俯いて呟く

面倒そうにツツコミを入れるアル

その瞬間、ビームの発射音が聞こえると四本のビームがアル達に向けて迫って来ていた

「っ！ギンガ！」

「了解！トライ、シールド！！」

「この密閉空間じゃ動きづらい、俺とギンガに任せてくれ」

「わかりました、お願いします」

アルはギンガに指示を出してから下がるとギンガが防御壁を作りビームを防ぐ、後ろに移動したアルはティアナに戦法を説明するとティアナは頷いて了承する

許可を貰ったアルはイーグルレイダーを構えてガジェットに向けて走り出す

――

アル達が下水道に突入した時と同時刻、エリオとセレスが出会った少女ルーテシア・アルピーノはビルの上上にいた目を閉じて風に身を任せながら何かを感じていたルーテシア

《ルーテシアお嬢様、ヘリに回収されたマテリアルとケースは妹達が回収します

地下水道の方を任せてもよろしいですか?》

「ん…」

《騎士ゼストとアギト様は?》

「…別行動」

ルーテシアの前にモニターが展開するとウーノの顔が映し出され頼み事をしていくとルーテシアは単調な口調で答える

《ならお一人ですか?》

「一人じゃないよ…私には…ガリユーがいるから」

《失礼しました、何かあれば遠慮なく申し付けて下さい
ご協力しますから》

「……わかった…」

ウーノは確認をするように聞くとルーテシアは小さく首を振ると彼女の手にはめられたグローブの宝石が淡く光り、漆黒の玉のようなものが現れる

ルーテシアは大事そうに触りながら呟くとウーノは丁寧な頭を下げてから言う

その時、ルーテシアの脳裏には少し前に出会った二人の事が浮かんだ

（同じ言葉なのに…どうしてこんなにも違うのかな？）

ウーノからの協力という言葉は何も感じなかったがエリオやセレスの言葉には何処か温かみがあった

しかしルーテシアにははっきりとした違いがわからなかった

「行こうか…ガリユー…探し物を見つけに…」

ルーテシアは考えた事を無理矢理に振り払うと自分に言い聞かせるように言うと、足元に紫色の魔法陣を展開してその場からいなくなった

「うっし、一先ずはよしだな」

「そうですね、アルさん」

ガシャットとイーグルを肩に担いでアルは周りを確認するとリボルバーナックルのスピナーを止めてギンガは同意する

スバル達は自分達より遥かに多いガジェットを二人で相手にしたのにも関わらず、まだまだ余裕がある二人に啞然とするしかなかった

アルの一点突破力の高さはわかってはいたが、そこに同等の突破力のあるギンガを足せばどうなるか、その答えは目の前のガジェット

達が表していた

一体は真っ二つに両断され、一体は拳大の穴をあけられ、最後に一番大きい三型に至ってはステークとナックルの同じ攻撃により爆散した

「ほれ、呆けてないで先に行くぞ？」

「っ！アルさん、後ろ！？」

スバル達がアルとギンガの戦いを思い出している際に、アルはレリツク搜索に戻ると言う

その時残骸の中からガジェット一型がゆらゆらと浮き上がりアルの背後にビームを放とうとしていた

「ちっ！どいてろ！ギンガ！！」

「きやう！？」

レキの忠告にアルは素早く反応をすると近くにいたギンガをスバル達の方に突き飛ばしビームをかわして、ガジェットに向けてソニックムーブで接近しブレードで両断する

「ふう…面倒悪あがきをしやがって、皆大丈夫…あん？」

ガジェットが爆散した事を確認したアルはブレードをしまいスバル達の方に顔をむける、しかしそこにはスバル達ではなく壁があった、間違えたかと辺りを見回しても誰もいなかった

「おーい！何処にいったんだ！？」

「アルさん！聞こえますか！？」

「ティアナ！？…へ聞こえるぞ、何がどうなってるんだ？」

「アルさん、どうやらガジェットの攻撃で非常用の隔壁が作動したみたいなんです
なんとか回り込めませんか？」

嫌な予感しかない中でアルは叫ぶとティアナから念話が入る

念話がつながった事により安堵の息をもらしアルはティアナから詳しい事情を聞く

「ティアナ、お前達はレリックを搜索の続けろ

地下水道はかなりの範囲だからそのうち合流できるはずだ、ガジェットも幸い全部倒してるし危険はない」

「わかりました、アルさん…お氣をつけて」

「さてと一人っきりだけどがんばるかな」

ティアナに指示を出してからアルは念話を切ると現在地を確認してからレリック搜索を再開した

「アルさんは大丈夫だったから私達も行動再開よ」

「でもアルさん…一人で大丈夫なのかな？」

「大丈夫よ、キャロちゃん」

アルさんは殺したって死なないくらいしぶといから」

「ギン姉、それはどうかと」

ティアナは心配そうにしているスバル達に指示を出すと、キャロは
呟く様に言う

先ほど突き飛ばされたギンガは埃を払いつつ笑顔で言えばスバルは
困った様な表情で言う

「まあ実際にアルさんがしぶといのは皆さん、わかっているでしょう
なら今しなきゃいけないのはレリックの確保です」

「そういうこと皆、良いわね？」

「」「了解!!」「」

レキはギンガの意見に同意をしながら、自分達の目的を言うとティ
アナが全員に号令をかけた

「ここがレリックのあるかもしれないポイントなんですか？」

レリックが流れ着いたと思われるポイントにたどり着いた、スバル達そこは下水道の合流地点でとても広い空間だった、辺りを見渡しながらエリオはティアナに問いかける

「そうよ、それじゃあ各自散開して搜索して、何があるかわからないから注意するように」

「「「「了解!!」」」」」

ティアナは問いかけに頷いてから指示を出し、同時に注意を呼びかける

レリックは魔力に反応するため魔法での搜索は出来ない、そのため自らの足を使って搜索するしかなかった
長期になるかと思われたがそれは直ぐに覆った

「あ、ありましたー!!」

広い空間にキャロの声が響いた、全員が振り返るとキャロの手にレリックのケースが持たれていた

「…っ!? キャロ、後ろ!!」

キャロに歩き寄ろうとしたレキであったが急に足を止めた

それはキャロの背後、ちょうどレキ達と反対の位置が奇妙に歪んでいたからだ、それはまるで人の形をしておりゆっくりとであったが近づいていた

アレはマズイ、レキは直感的に悟るとキャロに向かって叫んでから走り出す

「えっ？えっ？」

いきなりのレキの行動にキャロは戸惑うだけで動けずにいたレキの声とともに歪みは走り出すように移動をしだすと空中に飛び上がり漆黒の魔力弾を四つ生成する

「きゃああああっ！？」

「キャロ！！」

歪みは生成した魔力弾をキャロに向けて発射する、魔力弾はキャロの足元に着弾すると床が爆発しキャロはその衝撃で吹き飛ばされたレキはソニックムーブでキャロを抱き止める、しかし爆発の衝撃でレリックのケースは床に転がった

「でえいやああああっ！！」

魔力弾を放った歪みにむけてエリオは即座にストライダーを振るう

確かな手応えを感じたエリオをもう一度振るおうとしたが歪みから反撃の一撃をもらい、後方に弾き飛ばされてしまう

「大丈夫っ！？エリオ」

「なんとか…あれが攻撃を仕掛けてきた正体…っ！君は…」

遠くにいるレキの問いかけにエリオは頷くが頬からは血がながれていた

受け答えをし歪みに向き合うエリオは現れたものを見て驚く

歪みは先ほどのストライダーの一撃によって正体を表した

それは人の姿をしてはいたが鎧の様な外甲に長い尻尾、兜の様な頭部そして四つある紫色の目、それによって人では無いことがわかる、だがエリオがおどろいたのはそれだけではなかった

歪みから現れたものの側に一人の少女が立っていたからだ、その少女はエリオが公園で話したルーテシアだったのだから

EP22..地下水道での再会（後書き）

どうも、えのきです

風邪を引いてすこし時間がかかりましたがようやく仕上がりました
地下水道での戦いです、本当ならヴィータ乱入まで書きたかったんですが調子がまいちなので無理でした（泣）

更に今回はアルファの意外な一面とていきましたがどういふことかな
と補足します、アルファはアルを嫌ってますが本質は一緒なんです、
だからスカリエッティ側のお兄ちゃんを目指してます
次回からそういう一面が増えるようにしたいです

次回からはルーテシア&ガリユコンビとの対戦です
エリオがどういふ動きをするかを楽しみにしてください

EP23..近道をするなら壁壊せ(前書き)

タイトルと雰囲気合わない気がします。が後半戦です

エリオが頑張ります…たぶん

EP23…近道をするなら壁壊せ

エリオは我が目を疑った、目の前にいる少女を知っているから

その少女は大人しい娘だけと何処か儚げで手を差しのべないと消えてしまいそうだった

でもなんでそんな娘が今、自分の目の前にいるのか何故キャロを攻撃したものの側にいるのかわからなかった

「……………」

「あっ！」

「待って！ルーテシア！」

ルーテシアは何も言わずにキャロの手から離れたレリックのケースを掴むと大事に抱える

我に返ったエリオはルーテシアを呼び止める、エリオの声にルーテシアは声のしたほうを向くと少しだけ悲しそうな表情をしてからまた無表情になる

「聞きたい事があるんだ、君が探していたのはレリック？」

「うん」

「…隣にいるのは誰なの？」

「ガリユー…私の召喚獣」

エリオの質問にルーテシアは淡々と答えていく、エリオは最後の質問をしようとする

もしこれにルーテシアがエリオの予想のする回答をするならエリオは覚悟を決めなくてはならない…

（それだけはしたくない…だけと言わなくちゃルーテシアはいなくなる…それだけは確実だ）「なら最後の質問…レリックを僕たちに渡す気はある？」

「……ない」

「……！」

「っ！はああああ！！」

エリオは固唾を飲んでからルーテシアに問いかけると少し間を開けてからルーテシアは答える

その瞬間、隣にいたガリユーはエリオ目掛けて飛び掛かる

まるでルーテシアの拒絶を表すようにしかしそれを阻む様にギンガがリボルバーナックルでガリユーの一撃を迎撃する

互いの魔力がぶつかりあいスパークを巻き起こす、だが互いの力が均衡しているのをチャンスにスバルがギンガの背後から飛び上がる、左手に魔力球を作っていた

スバルの必殺の砲撃、デイベインバスターであった

絶妙なタイミングでギンガは下がるとガリユーの体勢が若干崩れる

「ディー、バイン、バスター！！」

勢いの良い掛け声と共に放たれる砲撃、しかしガリューは常人ではあり得ない程の反射速度のバックステップで回避をする、だがスバル達の攻撃はまだ終わりではなかった

「アスタニツシュ、グリッツ！！」

ガリューが地面に着地しようした時に再び砲撃が放たれるそれはフアフニールをシフトAにしたレキの砲撃であった

ガリューはなんとか砲撃を腕ガードするがあまりの衝撃に地面を削ってようやく止まった

「エリオ、アレは僕たちで抑える！」

「知り合いならしっかり話し合わないかね」

「エリオなら出来るって信じてるから」

レキ、ギンガ、スバルはそれぞれにエリオに声をかけるとガリューに向かって走り出した

そんな彼等の背中を見てエリオは覚悟を決めた、必ずルーテシアを説得するという覚悟である

「ルーテシア、それは危険なものなんだ！どうしても渡して欲しいんだ！！」

「…お母さんになってくれる人が目覚めるには必要な…だから邪魔しないで」

「ロストロギアは医学に使うものじゃないよ、ルーテシアは騙されているんだ!」

「違う…ドクターは目覚めるって言ってくれた
そしたら一人ぼっちじゃない…」

決心を固めたエリオは再びルーテシアを説得しようとする、しかしルーテシアは意見を変える事なく言う「エリオに向けて手をかざすと魔力を集中させた」

これ以上言うなら撃つ、無言ではあるがそれはルーテシアからの警告であった

「ルーテシアのお母さんが目覚めるように僕たちも協力する、だから…うるさい!」っ!」?

「エリオ君! 危ない!!」

「プロテクション」

ルーテシアの忠告を気にせずにエリオは言葉を続けるとルーテシアはエリオの言葉を遮るように、波のような魔力波をエリオにむけて放つ

魔力波に吞まれそうになったエリオを庇うように、キャロはプロテクションを張り魔力波に備える

「っ、きゃああああ!？」

「キャロ!？うぐあっ!!」

予想以上の威力にキャロの小さな身体は吹き飛ばされ柱に叩きつけられてしまう

キャロに一瞬だけ注意が向いたレキにガリユーは重い一撃を放つ、ファフニールでガードしたがレキは衝撃に耐えきれずに、吹き飛ばされ地面に叩きつけられる

ルーテシアは続けざまにエリオに魔力波を放とうとするが途中で動きが止まった、それと同時にルーテシアの喉元にオレンジ色の魔力刃が現れた

「エリオ、悪いけど話はそれまでにしてくれろ?…この子達力量は正直に言えばあたしより上みたいだから」

「ティアナさん、だったら尚更話し合わない!」「あたし達の任務はレリックの確保、それを果たして無いのに勝手な事は出来るわけないでしょ?」わかりました…」

ルーテシアとガリユーの動きが止まった所で、ティアナがオプティックハインドを解除して姿を見せる

ティアナの言い分がわからない訳じゃなかったがエリオはどうしても納得出来ずに反論するが、ティアナはきっぱりといい放つと納得のいかない顔をしながら答えるエリオ

「レキ、キャロ動ける?」

「なんとか大丈夫です」

「こちら問題ないです」

「ならキャロ、レリックのケースを回収してくれる？この子に仲間がいる可能性がある以上、長居は出来ないから」

ルーテシアに魔力刃を突きつけたままティアナはレキとキャロの安否を確認すると直ぐに指示をだす、キャロは自分の手から離れたケースを抱える

スバルとギンガはルーテシアが捕まった事で大人しくしているガリユーに警戒をしながらティアナの指示を待った

「それじゃ、撤収するわ「スターレンゲホイル！！」っえ！？」

納得のいかないエリオを見てティアナはため息をついてから、撤収の指示を出す

しかしその声をかき消すかのような大声が聞こえたかと思うとまばゆい閃光と爆音がティアナ達を襲った

不運な事によりはぐれたアルは一人、地下水道を移動していた

「上じゃはやてまで出動してんのか？」

《そうみたいなんです、実機と幻術を混ぜた戦術のおかげ、なのは
さん達が苦戦してるからはやてちゃんがなんとかすると》

「ちょい待て、はやては落としてSランク魔導士だろ？戦闘なんて
…まさか許可を申請したのか？」

《はいです、ちょうどクロノ提督と騎士カリムと一緒に居たみたい
でしたので》

外にいるリインに連絡をとり状況を聞いたアルは一つの疑問を抱き
リインに聞いた

はやては高ランクの広域殲滅型の魔導士、無許可じゃ戦闘は出来ない

リインから返ってきた答えはアルの予想通りだった

Aランクオーバーの魔導士は後見人のクロノかカリムにリミットの
解除許可を貰わなくてはならない

さらに行使できるのは一人に一回のみ…つまりはやては貴重なもの
を使って戦っているという事だった

（それだけの相手ってことか…）「まあはやてがリミット解除した
なら心配はいらないな、あいつの遠距離砲撃は天下無双だからな」

《それ、はやてちゃんに聞こえたら怒られますよ？「女の子にかけ
る誉め言葉じゃないやろ！」って》

相手の面倒さにアルは嫌な顔をするが直ぐに微笑を浮かべてから軽
口を叩く

リインは呆れたような顔をするとはやての口調を真似て言う

しかしその瞬間、地下水道に轟音と振動が伝わる

《なっ、なんですか!?!》

「わからん、だがあまりいい感じには見えんな…リイン通信切るからな?」

《わかりました、リインもヴィータちゃんと早くそちらに向かうです》

画面の向こうのリインにも聞こえた轟音にアルは眉をひそめてから言う、リインは一緒にいるヴィータを見ながら答えると通信を切る

「さてとのんびりしてらんないな…イーグル…発信原はこっちだよな?」

「そうですね、アル…貴方はGINGAさんに文句をいう資格が無いのでは?」

「まあ緊急事態だ…気にすんな、なんとかなるっしょ」

アルは衝撃した方向に手を当てるそこには分厚い壁があった
アルの考えを理解したイーグルはわざとらしいため息をついてから
答える

理解をしてもらえた事にアルは声を弾ませるとイーグルのステーキを壁に押し付けた

ティアナ達は突然の閃光に何も対処が出来ずに目がくらんでしまった

その隙を逃さないものがいた、ガリユーであった

スバルとギンガのマークが無くなるとガリユーは主ルーテシアの元に向かって走り出すと、彼女を捕まえているティアナを蹴り飛ばして引き離す

「きゃあっ!？」

そしてルーテシアを抱えるとティアナ達から一旦距離を置くように移動をする

「ったくもー、勝手に出掛けたりするからだぞ？ ルーラーもガリユーも！」

「…アギト」

「ホントに心配したんだからな？」

「ごめん…」

距離を置いたルーテシアとガリユーの頭の上から声がしたかと思うとリインと同じくらいの大きさの少女が空中に浮かんでいた

アギトと呼ばれた少女は腰に手を当てながら言う「ルーテシアは素直に謝った」

「あれって…」

「リイン曹長やセレスとおんなじユニゾンデバイス？」

ルーテシアと話している少女をようやく回復した視力でスバル達は確認をするとアギトもそれに気づいてスバル達に目を向ける

「まあいいか、この烈火の剣精、アギト様が来たからにはもう安心だ！」

さあどっからでもかかってきやがれ！！」

「ティア、どうする？」

「まともにやりあったらこっちがもたないわ…あの融合騎の力量はわからないけど手が増えるのはマズイわ…
皆…引き付けながら撤収するわよ

レリックを確保した以上、下手な交戦をすれば奪われる」

「なら後から合流するアルさんと一緒に迎撃すると？」

アギトは自身の周りにきらびやかな花火を出しながら言う両手に炎を灯して、スバル達を攻撃出来るようにする

スバルはティアナに小声で問いかけるとティアナは全員に状況説明をする指示をだす

ティアナの言葉に続く様にレキが言うとティアナは黙って頷いた

へよし中々いい判断をするな、ティアナ

「ヴィータ副隊長!？」

「私もいるですよ!」

「ついでに俺も忘れんな」

突如頭に響いたヴィータの声にティアナはつい辺りを探すがその姿はなかった

更にリインとアルの声も響く、スバル達にも聞こえたのかティアナと同じように辺りを見まわした

「なんだ!？ 魔力反応?…どこからだ?…」

「うおりゃあああああっ!!」

アギトとルーテシアはヴィータとアルの魔力反応を感じると警戒した、その瞬間広場の天井と右側の壁が勢い良く砕かれギガントフォルムのヴィータとステークを構えたアルが飛び出した

「さっき、どっからでも来いとか言ってな? チビスケ!!」

「望み通り来てやったぜ? ただし真横と」

「真上からだけどな! アル!!」

「ああ! いくぜ、ヴィータ、連撃!」

「爆砕!」

「デュアル、インパクト!!」

アルはアギトに向かって悪どい笑みを浮かべながら言う。ヴィータも便乗していう、そして互いに呼びかけるとステークとハンマーを同時にガリユーに打ち込む。

凄まじい轟音と衝撃とともにガリユーは壁に叩きつけられた、アギトは慌てて寄ろうとしたがその瞬間、ルーテシア達の足元に白い魔法陣が展開する。

「凍てつけ氷の枷！フリーレンフェッセルン!!」

ヴィータと共に入ってきたリインは右手をルーテシア達にむけて氷雪系の捕縛魔法を発動させるとルーテシア達よりふたまわり大きな氷の塊が完成した。

「良いタイミングだな、ヴィータ」

「お前の考えなんざお見通しだよ、近道するために壁抜きしてくって事くらいな」

「さいですか…」

腕同士を軽く合わせてからアルはヴィータに言う。と、ギガントフォームから通常形態にアイゼンを戻して肩に担ぎながらヴィータは答える。

アルは苦笑をしながらガリユーの方に目をむけた。

（一撃で倒せなくても少しは動けないよな？） 「ってあれ？ いねえ

…」

「あ？んな訳…リイン！そっちは！？」

「…ダメです、逃げられました…」

アルはガリユーの状態を見て予測を立てたが吹き飛ばした地点にガリユーの姿はなかった、ヴィータにその事を伝えるとヴィータも自分の目で確かめてからリインに呼びかける

リインはフリーレンフェッセルンを解除するがそこにはルーテシア達の姿はなかった、地面には大きな穴が空いていてそこから逃げたようだった

「っ？なんか揺れてませんか？」

搜索に入ろうとした時にキャロが皆に問いかける、するとキャロの言葉通り辺りが振動しはじめる
その勢いはだんだんと強まっていく

「まさか、壁を壊してきたからなんじゃ…」

「「「ぎくっ！？」」「」」

レキの言葉に壁を壊してた経験のある三人は同時に反応した

「あたしは天井の一枚しか壊していないから大丈夫だ、問題ない！」

「私だってアルさん達と合流するときの壁だけだし、ちゃんと考えて壊しましたよ！」

「「となると？」」

ヴィータは自分のあけた穴をさしながら言うとギンガも同じ様に慌てながらも答えると、まだ言葉を出してないアルに目をむけた

「アル？お前は何枚壊したんだ？」

「怒らない？」

「早く言ってください、枚数によります」

「えっと存外に離れた位置から来たから…八枚くらい、かな」

目を細めてヴィータは問いかけるとアルはバツの悪い顔をしながら、言うどギンガも同じ様に目を細めている

そしてアルは指折りでかぞえていくと指で数を示して笑う

「「「「「「壊しすぎだー！ー！ー！っ！！（ですー！ー！っ！！）」」」」」」

「ともかく脱出しようか！ギンガ、スバルよろしく」

「全くもう！スバル！」

「おう！」「ウイングロード！！」

気まずそうにしながらアルはスバルとギンガに指示を出すと、ギン

ガは文句を言いながらもウイングロードを出す

何故ギンガとスバルの二人で作ったのか、それは地下に突入した人数が多いためウイングロードを二本つくり二手にわかれて脱出するためだ

「あたしとアルは最後に出るお前らは先にいけ！ギンガ、スバルお前らが先行しろ！」

「「「「「了解！！」」」」」

「俺も最初に出た「埋めるぞ…」ごめんなさい…」

ヴィータが指示を出すどギンガとスバルはローラーを使いかけあがっていき、その後ろをレキ、エリオと続き最後に何か打ち合わせをしていたティアナとキャロが続いた

アルは面倒そうに呟くとヴィータが黙らせる様に言う、その目はハイライトが消えていて確実に殺られると思ったアルは素直に頭を下げた

そしてヴィータとアルは飛翔をして崩壊しかけている地下水道から脱出した

EP23..近道をするなら壁壊せ(後書き)

どうもえのきです

いかなものでしたか？

決めてた事なんですが何度かルーテシアがエリオに説得されそうになってしまいそうになりましたが何とか拒絶出来ました

エリオ×ルーテシアが活躍すんのはVividからという展開なんですよね…というかこの小説はVividまで続けるのかという自ツツコミをすなからまずは本編を終わらせるように頑張ります

それでは次回の小説をお待ちください
では

EP24: Four Limit Release (前書き)

タイトル名はフォーリミットリリースと読みます

リミット解除ってことですね

このお話でアルがヘリを庇う場面がありますその時から砲撃を放つ
までイメージ挿入歌として『W-B-X W Boiled Ex
treme』(仮面ライダーW OP)を推奨します

更にお知らせがあるので最後まで見てください

EP24: Four Limit Release

アル達が地下で掛け合いをしている時に脱出したルーテシアとアギトは廃虚のビルの上にいた

ルーテシアは右手を前に出してから足元に召喚陣を展開するとアル達がいるであろう広場の真上に、巨大なカブトムシのような召喚獣が現れる

「地雷王…お願い」

ルーテシアが短く呟くと地雷王と呼ばれた召喚獣は身体からバチバチと放電を始める、それと同時に足元のコンクリートに亀裂が入りだした

「これはダメだってマズイよ！ルーラー！！」

ルーテシアの近くにいたアギトは慌ててルーテシアに中断を要求する今、地雷王がしているのは地下の広場を押し潰すための作業だもしこれが成功すれば地下にいるアル達は死んでしまう

殺人を望んでいないアギトはなんとか止めてもらおうと説得を続けた

「今、地雷王で地下を埋めたらケースはどうやって探すんだよ大体、あいつらだって死んじゃうかもしれないだろ？だから止めようよ、ルーラー！」

「…大丈夫だよ、エリオ達はあの程度じゃ死なないし…ケースはゼインやクアットロに任せる」

アギトの説得にルーテシアは一瞬だけエリオを思い浮かべるが直ぐに短く答える

「それこそ余計にダメだって！あんな変態科学者と訳わかんないナンバーズに任せたら！ゼストの旦那も気をつけろって言ってたし

一緒にいるアルファはそんなじゃないけどあいつらルールーやあたしらをただの実験動物にしか見てないんだ…ぞ…あゝあゝ…やっちゃったか…」

アギトは先ほどより焦った口調で話していくとアルファの名前だけは口調を落ち着けて言う

アギトはライナと面識があり一緒にいりアルファにも世話になったりしているため、そこまで邪険にはしていなかった

しかしアギトが言っている間に何かが崩れる音がすると下にいた地雷王が先ほどより沈んでいた

それは広場を完全に押し潰したということを示していた

肩を落として落ち込んでますという動作をしながらアギトは崩落した広場を眺めていた

ルーテシアは広場に目を向ける事なく自分の左側に目を向ける

そこにはガリユーが立っていたが彼の身体はヴィータとアルの連撃によって傷ついていた

「ガリユー…戻って良いよ、アギトが居てくれるから私は大丈夫だから」

ルーテシアは目を悲しそうにしてからガリューに言う。ガリューは軽く頭を下げてからその姿を消した。

「地雷王も……戻って良いよ……？」ルーテシアは地雷王にも呼びかけるが違和感を覚えて首を傾げた。

その瞬間、地雷王の真下に桃色の魔法陣が展開する。といくつもの鎖が地雷王に絡み付きその動きを止めた。

「何だ!？」

「召喚……」

アギトが驚愕の声を上げるとルーテシアは冷静に分析をする、そしてルーテシアの目にビルの上で魔法を発動させたキャロの姿が映り、さらにその後ろからはヴィータに二本のウイングロードを駆ける、スバルとギンガがルーテシア達に向けて迫っていた。

ルーテシア虚空からダガーを出しアギトは炎にて迎撃しようとするが、アギト達とキャロ達の間にあるビルからオレンジ色の魔力弾と水色の魔力弾が放たれた。

それはオプティックハイドにて姿を隠していたレキとティアナによる奇襲攻撃だった。

このまま迎撃をすれば迫るヴィータ達に捕まると考えたルーテシアとアギトは迎撃を中断してビルから飛んで、近くにある道路に着地する。

「いらっしやいませ〜、つうかチェックメイトだな」

ルーテシアが着地した時にソニックムーブにより現れたアルがイーグルのブレードを喉元に突きつける

「ルールー！のやろ！っ！！」

「そこまです」

アギトが応戦しようとしたが周りにリインのフリジットダガーが展開され、身動きが出来なくなる

「エリオ、後はよろしくな」

「わかりました…ルーテシア…」

アルが二人にバインドをかけた所でエリオが二人を見張る為に側に構えるが、その表情は何処か乗り気ではなかった

アルは仕方なさそうにため息をつきながらレリックを回収するためにヘリを要請した

「子供を虐めるみたいで嫌だが市街地での危険魔法行使、公務執行妨害で逮捕すんぞ」

「ヴィータ…お前が子供言うのはおか「ふん！」おうあああっ！！足、足がああああっ！！」

肩にグラーフアイゼンを担ぎながらヴィータは気の乗らない言い方をしつっ言う

アルはヴィータに耳打ちするように言う最中でヴィータはグラーフ
アイゼンでアルの脛を思いっきり叩く

突然の衝撃にアルは悶えながら地面に膝をついた、やられるとわか
っててなんでやるんだろう
スバル達は悶えるアルを見ながらそう思った

――

アル達がルーテシア達を拘束した時の事だ
廃虚都市群にあるビルの屋上

アルの要請を受けて移動するへりを眺める二人組がいた

一人はケープのようなマントにメガネをかけている女性でもう一人
は髪を後ろに束ねて身の丈と同じくらいの何かを抱える女性だった
二人共、同じようなボディスーツを身にまとい首もとにはそれぞれ
違うナンバーが刻印してあった

「ディエチちゃん、ちゃんと見えてる？」

「ああ、遮蔽物もないし空気も澄んでるからよく見える」

メガネをかけた女性は少しおどけたような態度を取りながら隣にい
る女性、ディエチに呼びかける

ディエチは自分達から遥かに遠いへりを視界に捉えながら答えた

「でもクアットロ、本当に撃つていいのか？ ケースはともかくアレにはマテリアルも乗っているんだろ？」

「ええ構わないわ、アレが本当に『聖王の器』なら死ぬはずがないとドクターとウーノお姉さまから聞いているから遠慮なくやっちゃっていいわ」

「ふうん…」

へりを視界に捉えながらディエチはメガネの女性、クアットロに言う。クアットロはまるで道具のような言い方をすると、ディエチに指示を出す

クアットロの言葉を特に気にする事なくディエチは着けていたマントを取り、手に持っていた何かの布を取り払う、そこからは巨大な砲身が姿を見せた

「それじゃあ派手に『クアットロ』：ウーノお姉さま、何かご用ですか？」

《ルーテシアお嬢様とアギト様が捕まったわ》

「ああ、そういえばあのチビ騎士に捕まってましたね」

クアットロが嬉しそうに指示を出そうとした時、突然モニターが開きウーノが顔を見せた

クアットロは楽しみを取られた事により、つまらなさそうに拗ねながらウーノに問いかける

ウーノは淡々とした口調で事態を説明していくがクアットロはわざとらしい口調で返し、楽しんでいた

《今、セインが近くで待機をしているわ》

「フォローしますう？」

《ええ、お願い》

「了解ですわ、ウーノお姉さま」

ウーノが現在の状況を説明するなかでクアットロは小馬鹿にするような口調で返すがその瞳には狂気が混じっていた

ルーテシアを捕まえたアル達であったがその後が難航していた、ルーテシアとアギトは口を閉ざし全く喋ろうとしなかった

「誰がレリックを集めさせてんだ？」

あれがわかっててやったのか？」

「……………」

ヴィータは強い口調でルーテシアに問いかけるがルーテシアは喋る事なく黙祷するように目を閉じていた

「ハァーイ、ルーお嬢様く

>…クアットロ？<

黙っていたルーテシアの頭の中にクアットロが念話を繋げてきた

>何やらピンチの様ですね

良ければこのクアットロがお助けしますよ？<

>わかった<

>ハァーイ、ではお嬢様？お手数をかけますが目の前の赤い騎士にクアットロの言う言葉を言ってくださるかしら<

>うん<

クアットロは楽しげな口調でルーテシアに提案をすると即答して返すルーテシア

わざとらしい口調で話すクアットロはルーテシアに自分の言葉を言うように頼んだ

「全然、口を割りやしねえな…こいつ」

「落ち着け、ヴィータヘリを呼んだから続きは六課に返ってからにしろ」

「わかったよ…んじゃヘリを待つ《大変です！！》どうした！？シャーリー！」

ルーテシアを見ながらヴィータは面倒そうにため息をつくと近くに

いた、アルは肩を軽く叩いてから言う

仕方なく納得をした所にシャーリーが悲鳴にも聞こえるような声で通信してきた

《たった今、砲撃チャージを確認！推定魔力ランク、Sです！！》

「「っな!？」」

「逮捕もいいけど…」

シャーリーの報告を聞いたアルとヴィータは絶句した、更に追い討ちをかけるかのようにルーテシアが言葉を発した

「IS発動、ヘヴィバレル…」

ビルの上にてディエチは巨大なカノンをセットして魔力をチャージした、目標はシャルマル達が乗っている六課のヘリであった

それを自分の目で確認しながらクアットロはルーテシアに言葉を言わせていく

「>逮捕もいいけど<」

まるでヴィータ達を嘲笑うかのような口調でクアットロは続けた

「＞大事なヘリを守らなくてもいいの？＜」

「発射」

その言葉をいい終えたのと同時にディエチはカノンのトリガーを引いて砲撃を放った

――

「てめえ！今すぐ止めさせろ！きいてんのか！？」

言葉をいい終えたルーテシアにヴィータは掴みかかると砲撃を中断するように迫る、しかしルーテシアに言っても無駄であった彼女はただクアットロの言葉を言っているだけに過ぎないのだから

「貴女は…」

「…あんだよ？」

「また守れないかもね」

「っ！！？」

その瞬間、ヴィータの背後で凄まじい爆発音が聞こえた

振り返ると今までヘリが飛んでいたであろう場所に爆風が漂っていた、それからわかる事は一つしかなかった

ヴィータの頭にルーテシアの言葉がリピートされる

「貴女はまた守れないかもね」「っ！言え！！てめえの仲間は何処だ！何処にいやがる！？」

「ヴィータ副隊長！落ち着いて下さい！！」

「うるせえ！！これが落ち着いてられるか！」

ルーテシアを締め上げようとするヴィータをスバルとギンガが抑える
しかし、一度キレたヴィータは止まる事はなく暴れた、しかし

「大丈夫ですよ」

不意に放たれた言葉にヴィータは手を止めた、そこには爆風を見て
いるレキがいた

「どういう事だよ、レキ」

「直撃する前にあの人任せろって言ってました
だから大丈夫です」

レキの言葉を理解出来ないヴィータは問いかけるとレキは淡々とした口調で言い切った、ヴィータはそこで初めて一人この場からいなくなっていることに気づいた

「ディエチちゃん、どう？ちゃんと撃墜できた？」

「…多分ね、でも破片が落ちてこないし…大気が変だ
まるであそこに集まっているかのよう…」

クアットロは満足気な顔をしながらディエチに問いかけるとディエチは少し納得のいかない顔をしていた、そしてその答えは直ぐにでた

「アレは…ふう、やっぱりあの男ね
アルフィリオス・ラーゼンハルグ…」

爆風の動きが徐々に変わっていきまるで小型の台風があるかのように動いていた

クアットロはその正体を感じくと舌打ちをしながら恨めしげに名前を呟やくと爆風が一気に弾け飛び、晴れた先にはアルと騎士甲冑を纏ったセレスの姿があった

――――

「やれやれ、なんとか間に合ったな」

「アル…せめてウィンドジャンプを強制発動させる前には一言、
言ってよ…心臓に悪いなあ」

アルはウィンドジャンプを自分から強制的に発動させてエネルギーの障壁をつくり、更に防御魔法を使いディエチの砲撃を防いだので

あった

しかし強制的に発動したのがセレスは嫌だったらしく、目を細めながら文句を言う

「悪い悪い、なんせ他に何かする時間が無くてな」

目を細めるセレスにアルは苦笑をしながら答えるとなのはとフェイトがこちらに向かって飛んできていた

「アルさん！大丈夫？」

「おう一応な…：しかしまあ面倒な奴らがきたもんだな」

「Sランクの砲撃なんて今の私達でなんとか出来るのかな」

「やるしかないだろ？あんなの何発も撃ち込まれてたまるかよ《ならアル、なのは、フェイト、君達のリミッターを外すしかないな》っ！クロスケ！？いきなりなんだよ」

心配そうに話しかけるなのはにアルはため息まじりに砲撃の放たれた方向を見ていた

フェイトは放たれた砲撃の威力に不安気に言うがアルはそれを一喝してから言う

その時通信モニターが開くと一人の男が映し出された

クロノ・ハラオウン…：フェイトの義兄で六課の後見人だ、そしてアルの一番苦手とする人物であった

《クロスケと言うな、今現在を打開できるにはリミッター解除しかない》

「なのはとフェイトはわかるが、俺まで解除をする必要あるのか？はやてまで解除したんだろ、上にグチグチいわれないか？」

《あれだけの高出力の魔力砲を放てる相手には足りないくらいだ、それを阻止するためなら容易いくらいだ》

クロノはアルの言葉にツツコミをいれてから断言をするとアルはなのは達の中に自分が入っている事を問いかける

更に解除した後の動きについて指摘をするがクロノはそれも仕方ない事だと答える

あまりの思いっきりの良さにアルは顔を伏せて微笑を浮かべる

「ハッ！お前も言うようになったな、堅物ならさっさと決めようぜ！！」

《お前も一言多い！

高町なのは、フェイト・テストロッサ・ハラオウン、アルフィリオス・ラーゼンハルグリミットを解除を許可する》

「「了解！！」」

言葉は乱暴ではあったがアルは楽しそうに答えるとクロノに許可を催促する

クロノが許可をするとイーグル達に「Limit Release」と表示される

「エクセリオンドライブ!!」

「ユニゾン、イン!!」

なのははレイジングハートを掲げ、アルとセレスは身体を魔力光に包ませる

なのははビスチェ型のインナーにと白いロングスカートのバリアジヤケットに変わり、槍のような形になったレイジングハートを手に持つ

アルはフルシンクロの姿ではなく通常のユニゾンである深緑色ロングコート、橙色の髪に黄緑色の瞳となった

「私が先回りする、二人はついてきてバルディッシュ!!」

「ソニックムーブ!」

「ついてくってお前についてける奴いんのかよ…」

「ニヤハハ：私達も急ごうアルさん!」

二人の準備が終えるとフェイトはクアットロ達の元へ飛翔したリミット解除により普段より格段に違う速度で飛ぶフェイトにアルはツツコミを入れる、苦笑を浮かべつつもフェイトの後を追おうというなのは

「マズイわね…こっちに向かって来てる
ディエチちゃん、早く引き上げましょ」

「わかった」

高速移動してくるフェイトにクアットロはため息をつくと早々に撤退を始めた
クアットロは情報戦特化の後方型、ディエチは狙撃、砲撃で戦う後方型
フェイトやアルとは相性が悪いためまともにやり合わない事に決めたのであった

しかし、リミット解除したフェイトには十分に追撃できる位置だった

＞フェイト、あんまり近くにいくと面倒だ
散開した上で狙撃で決めるく

＞アル：わかった、なのはも大丈夫だよな？く

＞問題無いよ、フェイトちゃんく

先の戦いで推定Sランクというのが頭に残るためアルは攻撃を狙撃にすると提案すると二人は快く了承した、三人は同時に頷くと各方向に散った

「クアットロ、追ってこないみたいだ」

「なら砲撃でしとめる気みたいね、ならこのまま移動したほうが狙い撃ちにされなくてすみそう」

後ろを軽く見てからディエチは呟くとクアットロは戦術を考えてからこのままが良いと判断し移動を続けた

「アル、目標は予定通りのポイントに向かってます」

「ならよし、セレス、イーグル行くぞ！」

「わかりました」

＜了解！…風よ吹き荒んで我が刃に留まれ！＜

クアットロ達を補足したイーグルはアルに知らせるとアルはブレードを展開して二人に呼びかける

セレスは頷いてから詠唱を始めるとイーグルのブレードに風が集まり刀身がエメラルドグリーンに輝く

＜なのは、フェイト！＜「穿て！ウィンドスラッシュ…」

＜わかったよ、アルさん＜「エクセリオン…」

＜うん、了解だよ＜「トライデント…」

「ブラスター！！」

「バスター！！」

「スマッシュー！！」

アルは念話で二人と打ち合わせをすると息を揃えて砲撃を放った
赤、桃色、黄色の三色の砲撃がクアットロ達を捉え飲み込んだ

「やったか！？」

「いえ、まだ仲間がいたようです

直撃の瞬間に高速移動で逃げられました…けれど近くはいます」

「ここでかくれんばか…骨が折れそうだな《それなら私にお任せや
！！》はやて？」

砲撃の着弾を確認したアルはイーグルに問いかけるが結果は外れで
あった

しかしまだ近くにはいるとイーグルは答える、しかし広い廃虚都市
群を細かく探すのは困難な作業であった

アルが深いため息をついた時にはやてから通信が入る、視線を上
に向けて夜天の書を片手にシュベルトクロイツを掲げるはやての姿
があった

「どうやるんだよ、任せろと言ったって相手はかなり早いぞ！」

《ちょこまか飛び回るいうならその範囲をまるごと吹き飛ばしたら
ええねん！

いくで！遠き地にて、闇に沈め》

「ちよっ、待て！！」

はやてに策があるならかけたいと思いついて、はやては単純明快な答えを出す、詠唱を開始した

だがアルはここで一つの疑問が頭に浮かんだ
今からこちら辺を吹き飛ばすはやての魔法の範囲はどのくらいだろうか？とか、少なくともこの場に居ては巻き込まれるのは明白だな、とか

なら彼が出来るのはどんな事か…それは

「ディアボリックエミッション！！」

「イーグル、上方にむけてソニックムーブ！！」

「ソニックムーブ」

全力での回避であった

はやてが空間攻撃により辺り一帯を巻き込んだがクアットロ達の姿はなかった

更に言えばアルがディエチの砲撃を受け止めたのと同時にルーシアとレリックケースは地中から現れた仲間によって奪取されてしまったらしい

しかしティアナやキャロのおかげでレリックのみだが確保は出来ていた、こうして機動六課の初休日は謎の少女と新たな敵によって終わりを告げた

機動六課 アル私室

「やっぱりこのアングルじゃないとダメだよ」

「そうですね、こちらはどうですか？お二人の笑顔が写ってます、こちらも候補にいれるべきかと」

「うん、それも良いかも！」

「お前ら、何をしてんだ？」

シャワーから戻ってきたアルはベッドの上で話し合うデバイス達に話しかける

彼女達は様々な映像や写真のデータを展開して何かを選んでいるようだった

「アル今ね、フェイトさんに渡すレキとキャロの写真データの選出してるの！」

「なにぶん長期作業なので今は話しかけないでください」

「あいよ…（いつの間に俺のデバイス達は写真に興味を持ち出したんだろうな…」

ああ、弄る材料のために撮らせたからか…納得…）あれ…メールだ、はやてから？」

青いパジャマ姿のセレスは写真を手に取りながら説明をするがイーグルは真剣そのものらしく冷たく返されてしまった

アルは自分のデスクに座るとパソコンにはやてからのメールが有ることに気づき開いた、そこにはこう書かれていた

『今日は楽しかったで、ありがとうな♪アル　はやてより』

短い感謝の気持ちがかもったメールにアルは嬉しそうに笑うと早速、返事を書くことにした

機動六課　はやて私室

「ん？メールか…ってアルから返信やん、返してくれるとは思わへんかったな…どれどれ」

メールを出して一息ついていたはやての所にアルから返信のメールが届いた

はやてははやる気持ちを抑えながらメールを開いた

『俺も楽しかった…良かった、また今度一緒にいこうな？』

アルフィリオスより』

先ほど自分が書いた文と同じくらいの長さの文であったがはやてにはとても嬉しいものだった、そして何より一緒に行きたいといってくれたのが一番嬉しかった

「よっと！アルとまた一緒にか：エヘヘ：楽しみやな」

ベッドに勢い良く飛び込んだはやては近くにあった枕を抱きしめると反芻するように言う。頬を染めてから枕に顔を埋めた。そしてそのまま眠りについた、アルとのデートを夢に見ながら：

EP24: Four Limit Release (後書き)

どうもえのきです！

勢いで書いてたらかなり早く終わりました、今日この頃！いかなものでしたか？

自分としては今回は今まで以上だと思っています！
楽しんでもらえたら嬉しいです

では次にお知らせです

最近TPPなるものが世間の話題です、私も一次に移すべきかと考えました…という戯言はしません！！

この小説は二次であるからこそ真価がある、わざわざ一次にする気はありません！！

というわけでいつ決まるかもわからないものに怯えるよりそれよりも早くに、この小説を終わらせれば良いと考えました

もちろん手抜きや妥協なくです！

無茶や無謀な感じですがねじ曲げるよりましかと思います

更に更にお知らせです

とうとう、20万PVを達成しました!!

でも実際はあと少しなんですけどね、でも投稿すれば達成は出来ます

というわけで記念小説を書こうと思います、リクエストに答えてくれるように待っています

今回は指定は無いので皆さんが見てみたいカップリングとシチュエーションをお待ちします

では！

EP25：オペレーションHND（前書き）

いよいよ、物語もターニングポイント！

頑張っていくので、今回の話を楽しんで読んで貰えると嬉しいです

EP25:オペレーションHND

機動六課 部隊長室

「査察く？」

「せやで、私達は実験部隊やから問題がないかチェックするんやと」

「いや、それは間違いなく建前だろ、あのオッサンの仕業に違いない」

「アル：いくらなんでも言い過ぎだよ…」

休日の事件から一夜が過ぎた機動六課

その部隊長の部屋からアルの声が上がった

その部屋にはアルとはやて、フェイトの三人がいた
なのはは保護した少女の様子を見るために病院に行っていていなかった

アルは悪態をつきながら答えるとフェイトはそれをなだめる

「んで、査察の方はどうすんだ？」

「大丈夫や何処から来ても抜かりなしや」

「そっか…なら良しだな」

「二人ともそろそろ出ないといけないよ
流石に遅れたらマズイからね」

アルは面倒そうにはやてに問いかけると親指を立ててはやては答える
話しの区切りがついた所でフェイトが時間を見て二人に話しかける
今日は聖王教会から三隊長とアル、セレスは呼び出しを受けていた、
理由はまだ語られていなかったが三隊長を呼び出すくらいだからよ
ほどの事だとアルは考えていた

「あれ、セレスは今何処にいるの？アル」

「アイツはスバル達とデスクワーク中だ」

「そうなんだ、レキとセレスには感謝してるよ、デスクワーク慣れ
てないキャラとエリオを教えてくれてるから」

フェイトは思い出したようにアルに聞くとアルは自分がここに来る
前に話していた事をフェイトに伝える

デスクワークという言葉でフェイトは嬉しそうに話す
まだ入って間もないから作業になれてないエリオとキャラであった
が、エリオはセレスがキャラにはレキと個別でつきデスクワークを
教えていた

「レキがキャラにべったりなのはわかるけど、セレスがエリオにつ
いてるんは意外やな」

「なんだかんだでアイツらは仲が良いんだよ、共通の話題もあるみ

「たいだからな」

「ルーテシアって娘の事だね、アルはどうしたら良いと思う？」

はやては報告から推測したが少し小首を傾げて言う「アルは手を軽く動かしながら言う」

それを聞いたフェイトは辛そうな顔をしてアルに問いかけた

話をしたい相手、戦いたくない相手は彼女も経験した事があるからだ、なら自分は何が出来るのかその答えをみつきたいからアルに質問を投げ掛けた

アルならヒントをくれる、フェイトはそう思ったからだ

「…知らん、俺に聞くな」

「えっ？ そんな…」

「大体、俺らが決めてどうすんだよ
ルーテシアとは全く接点が無いんだぞ？」

「でも私達の方が決めておけばエリオの助けになれると思わない？」

しかしアルから返ってきた返答は冷たいものだった

あまり予想外の事にフェイトは言葉を詰まらせるがアルは構うことなく続けた

あまりにも薄情だと思ったフェイトは焦りながら反論をする

「確かに、俺達が選んだ答えならエリオは助けられるだろうな
だけど、それじゃあダメだ

エリオ自身が決めた事じゃないといけない戦場にいるんだ、自分の
判断が出来なきゃ生き残れない例え未熟な子供でもな」

「それはそうだけど…」

「何もアドバイス無しとは言っていない…相談に来たらちゃんと乗る
って」

「わかった…その時にはよろしくねアル」

アルの言葉にフェイトは反論を出来ずに俯いてしまう、しかしアル
がエリオから頼ったら力になると返せば、顔を上げて喜ぶフェイト
「二人とも？エリオの事もええけど私達にはやることがあるのは忘
れてへんよな？」

「も、もちろんだよはやて」

「にしてもなのはやつ、遅いな…もう来てもいいだろうに」

はやては笑顔を浮かべて二人に注意をするがその背後にはどす黒い
オーラが滲み出していた

はやてのオーラに押されながらフェイトは苦笑をして答えるなか、
アルは特に気にする事なく、なのはが来ない事に疑問を抱いていた

「ほなら、見てみよか…えっとなのはちゃんの部屋はっと…あつ、

あったあった…いざ『やだああああっ!! いっちゃ、やだあああ
あ!!!!』 なっ、なんや!？」

「おいおい、なのははいつかから駄々を捏ねるようになったんだ？」

「それは違うでしょ…」

はやてが手元の操作パネルでなのはの部屋を映し出すといきなり割
れんばかりの音がはやて達の耳に入る

耳を抑えながらアルはモニターを睨んでいうとフェイトは苦笑をし
ながらツツコミを入れた

――
SIDE..なのは

どうしてこうなったんだろ…昨日、保護した女の子の様子を見に病
院に行った女の子が目覚ましていなくなつて、なんとか見つけ
て話し合つて名前を教えて貰ったんだよね

女の子、ヴィヴィオはママはどこ? って言つてたけど多分ヴィヴィ
オは人造魔導士…親はいない

けどどうしてもほつておけなくて六課に連れて来たは良かったけ
ど、私は聖王教会に行かないといけなかったからスバル達にお願い
したのは良かったんだけど、いざヴィヴィオに言つたら…

「やだあああああっ！！いっちゃ、やだあああああっ！！！」

って事になっちゃったんだよね…どうしよ

結局アルさんやはやてちゃん達も来ちゃってヴィヴィオは私の服を掴んだまま離れないでいた

「さてとどうする？下手に近づけば爆発すんぞ？」

「せやな…なんとか納得してもらえるとええんやけど…難しいなあ」

アルさんはヴィヴィオを見ながら困ったような顔をしていた、でもアルさん？

爆発ってヴィヴィオは危険物じゃないよ、あんまり失礼事を言ってるのはやてちゃん程じゃないけど私も砲撃を撃っちゃうよ？

私が不満そうに見るなかではやてちゃんも同じような意見なのか困り顔で言っていた

確かにそれはマズイ事だから…どうしようかな

「仕方ない、イーグル！オペレーションHNDを発動するぞ！」

「了解しました」

「オペレーション…」

「HND…」

「なんですか？それ…」

額に指を当ててからアルさんはまるで作戦指揮官のような感じでいい放つ、イーグルレイダーもおんなじ様に答える

スバルとティアナが真剣な表情で答える中でレキ君だけは凄く疑ったような視線をアルさんに向けていた

そこで私は気づいた、あつ…ロクな事じゃないんだって…はやてちゃんより短い付き合いだけど、アルさんがする事が大体ふざけてるんだとわかるようになってきた

「レキ、疑うのはわかるがお前はこの状況を打開できるか？下手すれば爆発するんだぞ…盛大に、な」

「わかりましたよ…そこまで言うなら成功させてくださいね？」

「ふっ…任せろ…」

アルさんはわざとらしい口調でレキ君に問いかける、なんだろ…アルさんはレキ君の返答がわかってるみたい…すっごいドヤ顔をしていた

レキ君もその言葉に返答できずに負け惜しみのように言うとアルさんは親指を立てて笑顔で答えた

ヴィヴィオはアルさんに警戒してか私のスカートをギュッと掴んでいた、そしてアルさんはおもむろに床に落ちていたウサギのぬいぐるみを拾い上げる

それは私が昨日ヴィヴィオにあげたものだった：アルさん、変な事をしないでね：

「やあやあ、そこのお嬢さん！何をそんなに泣いてるんだい？良かったら僕に教えてくれないかな？」

[illegible]

自分の口元にウサギのぬいぐるみを構えたアルは裏声でヴィヴィオに話しかけると少し興味深そうにウサギのぬいぐるみを見ていた

しかしオペレーションHNDはこれだけではなかった

「今のは後ろの赤毛の声だよ
本当の声はこっちなんだよ」

さてなんで泣いてたか俺と…ウサ太郎？に教えてくれないか？」

「ウサ美です」

ウサギのぬいぐるみがしゃべったというのを信じたヴィヴィオはなのはから離れてウサギのぬいぐるみに近づく、すると今度はイーグルがアルの代わりに喋るとその言葉に合わせてアルがウサギのぬいぐるみを動かす

さっきとは違う声にヴィヴィオは更に驚き泣くことを止めていた

まずは第一段階が完了した事によってアルは次の行動に移った

ヴィヴィオが泣いてる原因を本人から聞く作業である
慰めたりするのはそれからであった

「…一緒にいてほしいの、だけど…いっちゃうから…」

「そうか…でもな、ヴィヴィオ
それはやらなきゃいけない事なんだ、お仕事ってのが正しいかなのはだって本当は行きたくないんだよ」

「……………うう」

「わかってはいるんだな…ならヴィヴィオにお仕事をあげようか」

途切れ途切れではあるがヴィヴィオはアルに事情を話すとアルは優しく頭を撫でながら諭すと、意味が理解出来ているのかヴィヴィオは黙ってしまった

そこでアルは一つの仕事をヴィヴィオにあげることにした

「お仕事？」

「そう見送りとお出迎えのお仕事だ
それをすれば早く帰ってきてくれるぞ」

「本当？」

「ああ、本当だ」

不思議そうな顔をしてヴィヴィオは聞き返すと、アルは仕事の内容を説明する

すると今まで浮かない顔だったヴィヴィオは初めて笑顔を浮かべて聞いてきた

アルもそれに答えるように返す

「じゃあヴィヴィオ、頑張って待つ」

「よしい返事だ！さっそくやり方を教えようか
まずは相手を見る、そして笑顔でいつてらっしゃいだ、わかるか？」

「えっと……いつてらっしゃい」

「うん、いつてきます」

ヴィヴィオは意気込むように返すとアルはヴィヴィオを抱き上げてから仕事のやり方を教えると、さっそくなのはに向けて笑顔で言う
ヴィヴィオ

なのはも同じ様に笑顔を浮かべると返事をした

「良くできました、んで帰ってきた時にはおかえりなさいだ、いいか？」

「うん、わかった」

「んじゃウサ美と一緒に待っててな？ちゃんと早く帰ってくるからな」

「よろしくね、ヴィヴィオ」

ちゃんと出来たヴィヴィオを誉めてからアルは帰ってきたやり方を教えるとヴィヴィオは元氣良く答えた

ヴィヴィオを降ろしてからウサギのぬいぐるみことウサ美を取り出してから言うどヴィヴィオに渡した

「うん、わかった！…えっと…」

「アルフィリオス、アルで良いぞ？」

「うん、アルも行つてらっしゃい！」

「おう、いってきます…ほれ教会いく奴らは準備しろ、ヴィヴィオが待ちくたびれるだろ？」

ウサ美を受け取つたヴィヴィオはアルの方を見て見送りをしようとしたが名前がわからず言葉が詰まってしまう

それをさつしたアルは自分の名前を教えればヴィヴィオはなのはに

したのと同じ様にアルに見送りをする

見送りを受けたアルは軽く頭を撫でてから返すとスバル達に後を任せてから、はやて達に言葉をかけて部屋を後にした

「でも意外やったな…」

「何がだ？」

聖王教会に向かうためにははやて達は車検が終わって戻ってきたアルの車で聖王教会に向かっていた

その最中でははやてはアルに思い返すように言う、アルは運転をしなからそれに答えた

「アルが子供の面倒見が良いことがや」

「本当だよね、面倒くさいとか言って放置しそうなのにさ」

「お前ら、ここでドリフトすんぞ…苦手なんだよ、子供でもなんでも泣かれんのはな」

アルの問いかけにははやては指を立てて答えると後ろにいた、セレスが便乗するように言うとなのはとフェイトが納得するように頷く

アルは若干アクセルを上げながらハンドルを握りしめてから少し思

い返すように答えた

「ところでオペレーションHNDってなんの略なの？」

「H（腹話術で）ND（大作戦）の略だ」
にっこり

「実は案外単純なものなんやな…」

話をすり替えるようにセレスが質問をするとアルは指を立てながら説明をしていく

大げさな名前の割には大した事がなくはやては思わず肩を落とした

「ほい、到着っと…」

「カリムとクロノ君が待つとるはずや、はよ行こうか」

「なんか緊張してきた…」

「大丈夫？セレス」

車を止めたアルがはやて達に言うとはやては先に降りて道案内をするように待っていた

聖王教会の雰囲気_にセレスはガチガチに固まっていた、それをなのはやフェイトは心配して声をかけた

「セレス、そんなに固まるな

カリムは悪い奴じゃないしここの雰囲気にもそのうち慣れる」

「うん、わかったよ…アル」

「それじゃあ行こうか」

緊張しているセレスにアルは声をかけて落ち着かせると車の外にで
ていく

セレスは一息ついてから頷くとなのは達と共に降りてはやての後を
追った

はやては特に迷う事なくカリムの私室までたどり着くと部屋の扉を
ノックした

「カリム、はやてです入ってもええかな？」

《ええ構わずに入ってきていいわ、はやて》

扉を叩いて返ってきた答えにはやては頷くと私室のドアをあけた

はやて達が中に入るとそはまるで書斎のような部屋だった

そして窓際のテーブルには金髪に黒いドレスのような服をきた女性
とクロノ・ハラオウンの姿があった

「二人共に待たせてしまったかな？」

「問題ないわ、はやて…えっとそちらの人たちが」

「うん、なのはちゃんにフェイトちゃん、更にはアルの融合騎のセレスや」

はやては申し訳なさそうに言えばカリムは手を前にだして気にするなどジェスチャーをする

そしてカリムはなのは達に視線を向けるとはやてに問いかけた聞かれた事にははやては嬉しそうに答えていく

「高町なのはです、よろしくお願いします」

「フェイト・テストロッサ・ハラオウンです、今日は面会出来て嬉しいです」

「セレスと申します、よろしく、です」

紹介を受けた三人はそれぞれにカリム自己紹介をしていく

「カリム・グラシアです、あまり堅苦しいのは抜きにして友人のようにならうとしますか？」

「「は、はい」「」」

「直接会うのは久しぶりだな、お前達…今回は立場など気にせずにならうとしますか？」

「うん、わかったよお兄ちゃん」

カリムの丁寧な対応に三人は緊張しながら答えると、座っていたク

ロノが苦笑をしながら言えば、三人はようやく一息つく
それからフェイトが柔らかな表情で返事を言った途端クロノは思わ
ず咳き込んだ

「立場を気にするなどは言ったがお互いに良い歳だその呼び方はや
めるんだ、フェイト」

「あゝれゝ？止めていいのかい、クウウロオオノオオくゝん」

「ア、アルフィリオスしまった…こいつの存在を忘れてた」

「冷たいなあ…クロノ君はさあ酔った時には「妹がなあ…」とか自
慢してたのになあ」

クロノは咳払いをしながら答えるが狙いを済ましたかの様にアルの
声がフェイト達の後ろから聞こえた

クロノは苦虫を噛み潰したような顔をして声の方を見ると意地の悪い
笑みを浮かべたアルの姿が映った

アルはまるで首根っこを取ったかのようにクロノに畳み掛けていく、
なのはとはやては興味深そうに聞き耳を立て、カリムとセレスはア
ルの悪行にため息をつき、フェイトは恥ずかしそうに俯いていた

「あ、他には…」

「まだ何か言うのか!？」

「いや、止めとく

あんま言い過ぎると弱味の意味が無くなるからな

それよかカリム、今日はなんで呼び出したんだよ」

顎に手を当てながらアルは考え込む、クロノは冷や汗を流しながら聞くがアルは言うのを止めるとボソリと呟いてからカリムに問いかけた

「えっ！？あ…こほん実は皆さんを呼び出したのは機動六課設立に關しての理由なのです」

いきなり話を振られたカリムは少し慌てるが一回咳払いをしてから真剣な表情で話し出した

そこでなのは達は知ることになる、機動六課を作るきっかけをそして来るべき未来についてを…

EP25：オペレーションHND（後書き）

どうもえのきです！

ヴィヴィオがようやく登場しましたが口調がすんごい不安です：

後はクロノとアルの絡みは個人的には好きなんですよね

なんというかいつも以上にアルが暴れてる感じが好きなんです

では次回の更新を楽しみにしててください

20万PVのアンケートの募集はまだしています

全く来てないのでだしてくれたら嬉しいです

EP26..未来にかかる影(前書き)

前回の続きになります

カリムの予言：少しうろ覚えなので間違ってたら指摘お願いします

それではどうぞ！

EP 26.. 未来にかかる影

「機動六課設立の理由、ねえ…そいつはお前のスキルが関係してるのか？」

カリムから話が出たところでアルは面倒そうにしながらも、真面目な表情で聞いた

「察しがいいみたいねアル、そう私のレアスキル『プロフェーティン・シュリフテン』の予言よ」

「やっぱな…にしても部隊一つ立ち上げなきゃいけないってどんなのだよ？世界破滅とかか？」

「うん、正にその通りや…カリムの予言は管理局の崩壊を予言してるんや」

アルからの指摘を受けてカリムはゆっくりと頷く

アルはふうとため息をついてから、軽い冗談のつもりで言うとはやてがそれを肯定した

「マジかよ…」

「あのカリムさんのスキルって予言なんですか？」

「あ、お前らには詳しく説明してなかったな…セレスの言う通りカリムのスキルは予言だ、ただそいつは時期がいつをさしてるかわからない上に、詩文しかもベルカ文字で表記されてるっていう難解なもんなんだよ」

「言い方が凄く雑だけどあっている分なにも言えないわ」

アルが呟き頭を掻く中でセレスが手を小さく挙げて質問をすると、カリムの代わりに頭を掻いていたアルが答えた

しかし説明の仕方が投げやりな感じにカリムは呆れたようにため息をつく

「表記って事は紙か何かなのかな？」

「ええ、そうよ」

これが予言が書かれたもの」

アルの言葉で気になった点をセレスは問いかけると今度はカリムが代わりに答える

そして彼女の手には布で巻かれた紙の束が手に持たれていた、ずっとその布を取ると紙は金色の光を帯びてカリムの周りをまわりだした

その光景なのは、フェイト、セレスの三人は思わず見入ってしまった

「この予言は最短で半年、長ければ数年先の未来を予言します」

「ただし予言書の作成は月の魔力が揃わないと発動出来ないから、作成は年に一度だけらしいぜ？」

「なんでアルがそこまで知ってるの？」

「カリムから直接聞いた」

自分の周りにある紙を見つめながらカリムは説明をしていく途中で、アルが指を立てて補足を加える

フェイトはなんでそこまで詳しいのだろうと質問をすると簡単な答えが返ってきたため肩を落とした

「先ほどアルが言った中にありますが予言はすべて古代ベルカ文字、解読を間違えたら全く意味をなし得ないためあくまで占い程度にしか見られません」

「だがその僅かな情報すら貴重なものだからな、本部の上層部はこれを大事にしてる」

「だけでも、地上の方はこの手の事がお嫌いやからな特にトップがレアスキル嫌いやからな」

「レジアス・ゲイズ中将だね」

カリム、クロノ、はやての順に予言について説明をしていく中でフェイトは一人の男の名前をだした

地上の最高責任者であるレジアスは機動六課の事を良くは思っていないなかった

「そんな騎士カリムの予言だが数年前から少しずつある事件をさしているんだ」

「古い結晶と無限の欲望、集い交わる地、死せる王ともに、聖地よ

りかの翼が蘇る

死者たちが踊り、なかつ大地の法の塔は虚しく焼け落ち、それに先駆け、幾多の海を守る法の船も砕け落ちる」

「それって…」

「地上本部の壊滅により全次元世界においての管理局の崩壊か…」

真剣な表情でクロノは話していくとカリムが予言の内容を言葉にする
思いがけない内容にフェイトは言葉を無くす中でアルが冷静に予言
を解釈する

「古い結晶がレリックなら集めていけばこの予言は意味を為さない、
違ってもレリックは危険なロストログアや集めなアカン、せやから
私は機動六課の設立を決めたんや

もちろん前になのはちゃん達に話した地上で自由に動ける部隊い
うんのも視野にいれとるで？」

「六課設立には僕ら後見人だけでなく三提督も非公式だが賛成して
くれている
ただ地上部隊と次元艦隊の話が平行していてね、当分は君達だけ
で行動してもらわないといけない…っとこの話は君達には関係な
かったな」

「んじゃ、次の話に移るとするか」

「次？まだなんかあったか？アル」

機動六課が集めているレリックについてはやては推測を話しその途中で慌てて理由を加える

そのあとクロノが少し安心したように話す但途端にまずそんな顔をして言うが、はたと気付いて謝る

話しがこれで終わるかと言うところでアルが目細めながら、カリムに言うとはやてが不思議そうに首を傾げた

「これだけの話をなのは達に話すだけわかるが、なんで俺とセレスがよこしたのか気になってたんだよな、カリム…今日、話す予言はもう一つあるんだろ？」

それも俺とセレスに関係する、違うか？」

「相変わらず察しが良いのね、アルは…そう二人に関する予言が出たの…だけど」

「だけど、なんや？」

アルはカリムに視線を向けながら自分の予測を話していく

推測が的中していた事にカリムは関心をしながら答えるが途中で言葉濁す

いきなり言葉を濁したカリムにはやては少しだけ心配そうに聞く

「予言の重要な部分の解説がまだ出来てないの、特殊な文体らしくてだからセレスさんなら解るかと思ってる」

「そういやセレスって古代ベルカ式の融合騎だったな」

「自分の融合騎のことをなんで忘れられるのかな？ 殴っていい？」

カリムが言葉を濁した訳を話していき解読できる可能性について話すと、アルは思い出したかのように手を叩いてから話す

アルに怒りを覚えたセレスは拳を握りしめながらアルに言うがアルはそれを無視した

「と、ともかくこれなんだけど」

「わかりました……この文体……私のいた地方のだ……」

「どういうことだ？ セレス」

「ベルカ文字って言っても統一してた王家で文体が違ったりするの、若干だけどね

ミッドの人が知ってるのは聖王の所が中心だから……わからないのも無理はないかな、これは風帝の領土にしか伝わらない書き方」

カリムは苦笑をしながらセレスに手渡しする、アルを睨みながら受け取ったセレスは文字を凝視すると意外な声をだし

なのは達に見せるが古代ベルカ文字の違いなどわからず、アルが質問をするとセレスは仕方なさそうに文体の説明をすると何処の国かを説明する

「それじゃあ、セレスは風帝って所で作られたんやな？」

「そうだよ、元々は風帝のための融合騎だったんだけど結局、使われる事なかったんだけどね」

「それじゃあライナはどうなるんだ？アイツは雷の融合騎だろ」

「詳しくはわかんないけど風帝はデュアルだったって話だよ
風と雷の魔力変換が出来たみたいだから私とお姉ちゃんが作られたんだと思う」

セレスの説明を聞いていたはやてが指を立てながら問いかけると、
頷いて返すセレス

セレスが作られた所の事を聞いて雷の力を持つライナの事を思い出した、アルは疑問を投げ掛けるとセレスは思い出を引き出しながら
答えていく

「あれ？普通に答えてたけどセレスは前の記憶は無いんだよね、どうして覚えてるの？」

「覚えてないのは前のマスターの事だけで基本的なのは忘れてないよ
言わなかったのはアルが聞いてこなかったただだから」

「アルさん…」

「別にどうしても聞くような内容でも無いだろ、ほらセレス、んで
なんて書いてあるんだよ」

フェイトは前にセレスが目覚めた時の事を思い出して言うと、忘れていない事と忘れる事についてセレスが説明する

大事な事を聞いてなかった事に隣にいたアルを見る、なのは

避難の眼差しを浴びたアルは話題をすり替える様に、セレスに予言の和訳を催促する

「えっと…法の塔が落ちる時、憎悪の稲妻を纏った孤独の鷹が飛来する

守護の風を纏いし荒鷲の翼を千切り、鷹は鷲を地に落とす…これって」

「…こうはつきりと死刑宣告されんのは初めてだな」

セレスが話す予言の内容にはやて達は言葉を無くした

荒鷲…それはアルの異名であり稲妻を纏う鷹とはアルファの事だからだ

誰もが言葉にしないようにするなかで当の本人はまるで他人事のよう

に話す

「アル！そないな言い方…」

「悪い…ちょっと席を外す…考え事したいからな」

アルの態度にはやては何か言おうとしたがアルは短く言う部屋を出ていく

扉を閉めた音が虚しく部屋に響いた

「アル…ずいぶんと思い詰めた感じだった」

「アイツは溜め込む事が多いからな、下手な事をしなければ良いかな」

「私、見てくるすまんけどみんな、ちょいと待っててくれへんか？」

「はやてちゃん！？…行っちゃった…」

アルの顔を見たセレスは俯きながら呟くと、クロノが少しまずそうな顔をしてから言うとはやてがいきなり立ち上がり、アルの後を追う様に出ていく

なのはとフェイトは呆氣にとられながら見ているとクロノとカリムは意外そうな顔をしていた

「話しには聞いていたがここまでとはな」

「正にゾッコンって感じね、はやては」

「正直、アルにはもったいない人ですけどね」

「「ア、アハハ…」」

はやてのアルへの思い入れの強さにクロノとカリムは大変に驚き、それに対してセレスはとても自分のマスターに言うにはあまりにも辛辣な言い方をする姿になのはとフェイトは苦笑を浮かべていた

S I D E ..はやて

「アル…何処に行ったんやろ…」

カリムの私室を出た私は辺りを見渡した、だけどアルの姿は何処にも無かった

（部屋から出て直ぐやのに姿が見えないのはおかしい…ん？なんでここ、窓が開いとるんやろ）

廊下にはいないとわかった私は別な場所を探そうとした時、目の前の窓が開いてる事に気付いた

「いた！あないな所に！！」

窓から身を乗り出して探すと教会の中庭にある噴水の側にアルの姿が見えた

私は急いで階段をかけ降りながらふと考えた、どうやって移動したのだろうと…

（窓が開いottaちゆう事は飛び降りたってやろな…相変わらず無茶をする人やな）

アルに悪態をつきながら私は階段を降りきると廊下を出来るだけ早めに歩く、その途中で噴水の真横の廊下を通った時に私はアルが凄く思い詰めた表情をしている事に気が付いた

それは依然、一人でアルファと決着をつけようとしていた時と一緒に

だったその瞬間、私はまたアルがいなくなるんじゃないかと思い急いで駆け出した

――
SIDE..アルフィリオス

「まあ考えても仕方ないか…」

中庭に降りてきて噴水の水を見ながら俺は腕組みをして考えた、その内容は先ほどの予言についてだ

しかしいくら考えても良い答えなど出るはずなく、とりあえずなんとかなるだろうといつもの行き当たりばったりな結論を出して戻ろうとした時だった

まるで地響きのような音が耳に入り辺りを見回した

「アカーン！」

「はやて?…どこに、ってちょっと待てお前!!」

「一人で、行ったらアカーン!!」

不意に聞こえて来たはやての声に俺は振り返るとそこには全力で走って迫るはやての姿があった

慌てて止めようとするが止まる気配のないはやては勢い良く俺の身体に体当たりをして突飛ばした：どうなるか：予想がつくぜ

「あ…」

「はやてー!!」

短いはやての声に俺の怒声が続いたあと豪快な水音が辺りに響いた…

――

「……………」

「本当にすみませんでした」

はやてに突飛ばされて水に落ちたアルは噴水の縁に腰をかけて身体の水気を絞っていた

その近くでは頭に大きなこぶを作ったはやてが申し訳なさそうに頭を下げていた

「なんで突飛ばしたか教えてくれるか？」

「アルがまた私達に黙って行くかと思ったんや…アルファと戦いにいく時と同じ顔しとったから…だから」

水気を切り終えたアルは、はやてに問いかけると顔を俯かせながらぼつりぼつりと呟いていく

それを聞いたアルは面倒そうにため息をついた、顔に出すつもりはなかったからだ

「心配かけたのは悪いと思う…大丈夫だ、俺はもう勝手にいなくなったりしないからよ」

「ホンマに?…」

「ああ、約束しても良いくらいだ
あん時のお前のビンタがかなり効いたんだよ…あれはもう食らいたくない」

「そ、そんな強くはやってへんよ!？」

はやての頭を軽く叩いてからニカツと笑って答えるアル

しかし一度していることに不安を覚えているはやては思わず聞き返してしまう

それに対してアルは苦笑を浮かべながら頬を抑えて言う慌てて否定するはやて

「お前のビンタは肉体ダメージより精神ダメージのほうがでかいんだよ、こっちの事を真剣に考えてるから」

「あう、それは…／／／」

アルは軽くはやての額を小突いてから横を通り過ぎて言葉を出すと、はやては恥ずかしそうに俯く

そんなはやてを知ってか知らずかアルは言葉が続ける

「だからいなくならない、それにお前が守ってくれんだろう？
なら余計に心配する必要はねえな」

「それ…昨日の…」

守る、それは昨日はやてがアルに宣言した言葉だった

自分の言った根拠の無い事を信じてくれるアルにはやては目頭が熱くなった

「それと守られてばかりじゃ不公平だから、俺はお前の背中を守る
だから俺の背中…任せたぜ？」

「…もちろんや！ちゃんときっちり守ったるからな、アル！！」

はやてに背を向けていたアルだったがふと提案を思い付いて、はやての方を向いてから提案をする

はやてはアルの顔をジッと見てから微笑した、提案をしたアルの顔は自信に満ちていたからだ

だからはやてもそれに応じて弱気な発言ではなく自信に満ちた言葉で返答をした

おまけ

「とりあえず服を借りてこないとな…」

「せやな…でも馬鹿は風邪をひかん言うし大丈夫やろ」

「さっきまでのしおらしさは何処にいきやがった？お前も水に落とすぞ！？」

「っな！？／＼／＼こんのドスケベ！！／＼／」

「なんで、砲撃！？あああっ！！」

EP26..未来にかかる影（後書き）

どうもえのきです！

一週間に三回投稿がこんなに辛いとは思わなかった今日この頃です
でもめげずに頑張ります

もう一つめげたくないのはアンケートが全く回答が無いことです
皆さん、忙しいのかそれとも自分がアバウトなのか：恐らく後者だ
ろうな

そんな訳でアンケートの内容を変更します！

題して○○祭、開催！！です

○○にはキャラの名前が入ります

読者様からリクエストをもらい作者のえのきがそのキャラをメイン
としたショートストーリーを作っていきます、多分三本くらい

前に独自にやったヴィータ祭ですね
それを読者様を選んでもらいたいです

メインでもサブでも敵だろうがなんだろうがキャラの名前さえ指定
してくれば作者は頑張ります

期間は来週の月曜日までです

どうかよろしくお願いします

では次回予告に入ります

アルフィリオス「ついに奴が六課に来た

俺の安住を奪うために…チクショウ…もうだめなのか!?

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP27…なんでテメエが来るんだよ!!! にテイクオフ…
あ、ごめんなさい、許してギン、ぎゃあああああっ!!!」

EP27..なんでテメエが来るんだよ!! (前書き)

ギンガが使用する魔法が少ないので一つ追加しました

まあはやてルートじゃ出番はないですけどね (泣)

EP27..なんでテメエが来るんだよ!!

SIDE..アルフィリオス

朝：今日という日ほど起きるのが憂鬱な事はない：それは昨日、聖王教会から帰ってきてはやてが放った一言が原因だった

『明日からギンガがこっちに来るからよろしくってナガジマ三佐が言っとったから』

マジで面倒だ、ギンガに来られたら俺はいつ安らげるんだろうか：教えてくれ、イーグル：

「とりあえず起きればいいと思いますよ」

「お前、最近言葉が冷たくないか？もう少し優しさをくれよ」

「愛のムチという優しさですが何か？」

それは喜ぶのMだけだろ：よし、こんな時には

「二度寝しよ：」

「アホな事をしてないで早く起きてください」

「やだ、寝る」

「やはりいつも通りに起こしてもらえないようですね」

決断をした俺にイーグルは呆れたように言ってくる、しかしそれは無駄だ！

一度寝ると決めた以上誰にもとめられんさ！

そう考えている俺にイーグルは仕方なさそうに呟いた…待て、いつも通りに起こしてもらおうとか言ったよな？ということは…

「あたしも毎回殴るのは悪いとは思ってたけど最近じゃそうは思わなくなっただよな…慣れっつてのは恐ろしいよな、アル」

「そうですね…今日も絶好調ですか？モーニングハンマー」

「そうだ、なっ！！」

少し残念そうな言い方をする人が背後にいる、多分いつもの様にしかめっ面なあいつがいるんだろな…と思っていると、機動六課にいつもの衝撃が走った

――――

「それじゃあ、訓練を始める前に皆に紹介したい人達がいるんだよね」

「本日より機動六課に出向となりました、陸士108番隊のギンガ・ナガジマ陸曹です、よろしくお願いします」

「本局技術部の精密技術官、マリエル・アテンザです」

気軽に声をかけてね」

朝の訓練のために揃ったスバル達の前になのは、フェイト、シグナム、ヴィータ、そして頭にこぶを作ったアルが並びなのはが自分の後ろにいた二人を前に出して自己紹介をさせる

最初にスバル達と同じ訓練服に着替えたギンガが挨拶をするとき次は緑色の髪に眼鏡をかけ本局の制服の上に白衣をきた女性、マリエルが挨拶をした

「ギンガはスターズとして行動するからスバルとティアナ、よろしくね？」

「はい!!」

「ライトニングも仲良くしてね：アルさんも聞いてた？耳をふさいでいるけど」

「ギクッ!!」

なのはがギンガの所属について教えていくなか横目でアルの方を見ると、何故か耳を塞いで我関せずと言わんばかりの態度にため息をつきながら言うところアルはビクッと反応した

「アルさん…」

「そう睨むな：ちゃんとやるから」

「それじゃあ、今日も訓練頑張っていこうか!!」

「「「「「はいっ!!」「」「」「」

睨み付けるギンガにアルは仕方なさそうに答えるとなのはがスバル達に号令をかけると、皆が声を揃えて応えた

――――

「えっと、今日は：ティアナがヴィータ、レキがシグナム、キヤロとエリオがフェイト、俺はスバルだったな」

「はい！今日は防御訓練ですか？それとも格闘訓練ですか？」

「足りてない訓練はねえからな：いっちょ模擬戦でもするか
地上じゃ他の奴らの迷惑になるからウイングロードでの空中戦になるけどな」

「珍しいですね、アルさんが模擬戦するだなんて私が誘っても逃げるのに」

全員が各担当に別れてからアルはスバルと一緒にいた

割り当てを見ながらアルが呟くとスバルは嬉しそうに返事をした

スバルがここまで嬉しそうにするのには訳があった機動六課でスバルの格闘術、SAを直接指導出来るのは体術を使うアル以外はいなかったらである

そんなスバルに視線を向けながらアルは前回までやった事をリストにして見ると、難しそうに唸りスバルの成長を見るために模擬戦を

提案すると後ろから冷ややかな声がかかった

「お前が毎回誘って来なきゃ、少しは模擬戦することに考慮したんだがな」

「そうなんですか？：ならもう少し控えておけば良かったかな：でもそれだとアルさんと一緒に：」

「おゝい、なんか用があつたんじゃないのか？」

「っあ！なのはさんから、スバルのSAの上達を見てほしいと頼まれたので模擬戦をしに来たんです」

後ろからかかる声にアルはため息をつきながら振り返ると、そこには腰に手を当てたギンガがいた

ギンガの顔に指をさしながらアルは陸士108番隊時代の事を言うと、ギンガは意外な顔をしてから残念そうに呟いていく

突然、独り言を言い出したギンガにアルは手をパタパタさせて聞く

ギンガは思い出した様に手を叩いてからなのはからの指示をアルに伝えた

「なのはが？まあギンガなら俺よりわかるだろうな：んじゃ、一回訓練を中断してもらってから少し待ってる：」

なのはからだと言われてからアルは、少し考えたが一通りかんた人間より専門にしてる方が良いと思い、承諾してから全体に通信を繋いだ

「はあああああっ!!」

「うおりゃあああっ!!」

アルから通信を受け取り集まったティアナ達はスバルVSギンガの模擬戦を見ていた

試合が始まって何度か打ち合いをしていた二人だったが数分したあと動きが変わった、スバルがラッシュを始めたからであった

「スバルさんが押し始めましたね」

「中々のコンビネーションだな：アルはどうみるんだ？スバルの担当は長いんだろ」

「ん？まあ：SAの仕上がりとしちゃ良いが：まだギンガには勝てないな」

模擬戦を見ていたレキが呟くとその隣にいたヴィータがアルに質問を投げ掛けるとアルは気のない返事をしてからきっぱりと言い切った

「それはどういう：」

「直ぐにわかる…」

ティアナがアルに聞いたただそうとしたがアルは短く答えて、スバル達に目を向けた

――――

「やっぱり、ギン姉は強い……でもあたしだって強くなったんだよ！」

「っ！そうね、前に見たより良い打撃を打てるようになってるし、動きも良い、だけど！」

攻勢を続けていたスバルだったが一度もギンガにクリーンヒットを与えられていなかった

受けに回っていたギンガはスバルの力量の上達に驚いていたが焦りなどは全くなかった

そしてそこからギンガの反撃が始まった、スバルはギンガの腕に展開された防御壁を破壊しようと腕を振りかぶった時だった

「スバル、これは覚えておいた方が良いわ相手が攻撃してきた時こそ、最大のチャンスだってね！」

「うえっ！？あぐっ！！」

ギンガは魔法壁でスバルのリボルバーナックルを受け流すとスバルの腹部に右掌底を打ち込む

だがギンガの攻撃はまだ終わってなかった、間を置かずに彼女のリボルバーナックルのスピナーが激しく回転をはじめ、拳に青い魔

力が溜まりだした

「そして最大のチャンスには持てる限りの一撃を放つ！ブレイズ、バスター！！」

「わあああああっ！？」

拳がスバルにつき出すと青色の砲撃が放たれ体勢の崩れたスバルはそのまま呑み込まれた

「おいおい、あいついつの間に俺の砲撃を覚えたんだか」

「スバルさん、負けちゃいましたね」

「スバルが勝てない要因が三つもあるんだ、そんなかで戦い抜いたんだからいい方だと思うけどな」

「三つ？確かにS Aや戦歴に差はあるけど他にもあるの？」

「俺が教えた年数だよ」

ギンガの基礎は俺が教えたからな、まあそれからあいつなりに派生はさせたみたいだけど、基本的なのは変わってなかったな」

ブレイズバスターを放ったギンガにアルはため息をついてから呟くとキャロが残念そうに言う

指を三本立てて今の戦いでの違いを示すアル、一本ずつ指を折りながら数えるのはだが最後がわからずアルに問いかける

指を立てながら説明をするとアルは砲撃でのびているスバルの元へと走っていった

――――

S I D E .. スバル

「...うう...あれ？あかし、どうしたんだっけ」

「よお起きたか？」

薄暗い中で風の音が耳に入りあたしは目を開けた
状況が把握出来てないあたしに気さくな声かけられた

アルさんの声だとわかり起き上がると頭の方からタオルが落ちてきた

「これ...」

「ギンガの奴が用意してたんだよ、まだ寝とけ...砲撃の直撃を食らったんだからな」

その言葉でようやく思い出した、あたしは負けたんだそれも一つも防げずに...

そう思ってたらなんだか凄く悔しくなった...強くなれて無いんだと思いきらされたからだ

「悔しいか？」

「えっ？」

「悔しいかって聞いてんだよ…どうなんだ？」

「…ギ、ギン姉とは力量の差があるし、仕方ないかなって思います」

アルさんの突然の言葉にあたしは戸惑った

本音を言えば悔しかったけどあたしは嘘をついた、弱音を吐いちゃったらダメだと思ったからだ…だけどアルさんは予想外の返答をした

「つく、ハハハっ…お前らは本当に良く似てんな」

「な、何ですか！？いきなり」

「いやな、昔に今のスバルみたく叩きのめしたギンガの事を思い出したんだよ、明らかに顔が悔しいって出てんのに弱音を吐かずに力の差があるって言うってな」

「ギン姉が？アルさんに？」

いきなり笑いだしたアルさんにあたしは起き上がって怒鳴るが直撃の影響で直ぐに倒れてしまう

アルさんは笑い終えてからどこか懐かしむ様に語りだした
寝ていて更に日の光のせいで顔は見えないけどアルさんの表情は穏やかに見えた

「ギンガ、何か焦ってたらしくてよ

強くなろうと必死になったりしたから少し灸を据えたんだよ
詳しくは話さない、アイツは恥ずかしがるからな」

「……………」

「続けるぞ？まだ餓鬼のくせに大人みたいな対応するからな、意地悪に聞いてみたんだそしたら直ぐに悔しいって言ったんだ

スバル、弱音は吐いても構わない…だけどそこで立ち上がる事を止めたらダメだ」

「立ち上がる事を止める？」

意地悪く言うアルさんだけど何処か嬉しそうにしていた

黙っていたあたしにアルさんは語り続けていく、普段のギン姉からは想像もできなかったけど多分、アルさんの言う話しがあるから今のギン姉がいるんだろとあたしは思った

そして話し終えたアルさんは一呼吸を置いてからあたしに言い出した、いきなりの事で戸惑ったけどあたしは聞き返すように言うところさんは立ち上がった

「弱音を吐かない奴なんていない、むしろ吐いた方が次に繋ぐための踏み台にすれば良い、本当にしちゃいけないのは立ち上がる事を止め諦める事だ」

「踏み台にする、諦めない…」

「さあ、この手を掴め立ち上がりたいならな
俺は強制はしない、立つ気があるなら俺はそれを助ける
選ぶのはお前だ、お前自身が決める事だ」

空を見上げながらアルさんはあたしに言葉を投げ掛けていく、それは不思議と暖かいものだった

そしてアルさんはあたしに手を差し出した、だけどあたしの手は掴まない差し出すだけであたしを試していた

どうするか：そんなものは決まっている

何とか身体を起こしたあたしはアルさんの手を掴んだ、そして精一杯の声を振り絞る

「立ちます！あたしは強くなりたいですから！！」

「いい答えだ：お前が諦めなきや俺は手を差し述べる
掴むかはお前次第だけだな
さてなのは達が待ってる早くいけ」

「はい！」

あたしの答えにアルさんは笑顔を浮かべて応えると引き上げてくれた
アルさんの言葉はいつも背中を押してくれる、それは命令とか強制的なものじゃなくて支えてくれるようなものだった

だから、ギン姉やティアはアルさんを信じられるんだろうな
背中を押されたあたしは先ほどまで倒れていたとは思えない程の軽やかな足取りでなのはさん達の所に向かった

「いつまで隠れてる気だ？スバルは行ったぞ」

「いつから気付いたんですか？」

「スバルが起きたあたりからだな」

「それ、ほとんど最初じゃないですか!？」

スバルが行った後、アルは近くの木を見ながら言うとその影からギンガが出てきて、呆れたように聞いた

アルは視線をスバルが走った方に向けてから答えるとギンガは腰に手を当てて怒ったような仕草をする

「あんなんで良かったのか？スバルに何か言いたかったんだろ？」

「言いたい事は全部アルさんが言っちゃいましたよ…ありがとうございます」

「気にすんな、それが俺の役目みたいなもんだ」

「そうですか…それじゃあ私達もいきましょか」

怒ったフリをするギンガを無視してアルはスバルに話した内容についていうと、ギンガは少し満足したように言ってから礼をのべた

アルは短く返すと一息ついて腕組みをした、アルの背中を見ながら

ギンガは自分達も戻ろうとアルの隣を通り過ぎた

「ギンガ」

「なんですか？」

「後でブレイズバスターの魔力調整のプランを渡すから、お前のやり方だと射程を無くして威力とチャージに割った方が良い」

「え…いいんですか？ブレイズバスターを使っても…」

歩き出したギンガをアルは呼び止める、不思議そうにギンガは振り返るとアルは先ほどギンガの放ったブレイズバスターについて意見を述べる

予想外の言葉にギンガは思わず聞いてしまった

「別に専用魔法じゃないんだ、特に拘りはねえよ
ただお前が使うならもう少しお前向きしたいだけだ」

「アルさん…ありがとうございます!!」

「うっせ、いくぞ」

アルは面倒そうに頭を掻きながら答えるとギンガは勢い良く頭を下げた

ギンガの真面目な礼にアルは照れ隠しをするようにぶっきらぼうに答えると集合場所に向けて歩き出した

「うーん、本局の技術部に用事あんの忘れてた」

「うえ？ そうなん、せやったら一緒に行こか私もティアナと用事あるさかい」

（フェイトもライトニング連れて出るとか言ってたな、なら六課に残んのはなのはとスバル、ギンガ：か） 「まあ大丈夫か、んじゃ車出すから用意しとけよ？」

「うん、了解や」

訓練を終えて朝食を皆で食べるなかでアルは思い出したように言った隣にいたはやては手に持っていたパンを千切るのを止めてアルの方を見ると一緒に行かないかと提案をする

アルは他にも出るメンバーが居たことを思い出すが、大丈夫だと思いはやてに答えた

その後、食事を終えたアルは車を用意して隊舎前で待機した、はやてとティアナは時間をおく事なく集合したためアルの車は本局に向かうためのポートを指して走り出した

「なんや、今日のメンツはあまりない感じやな」

「まあ、たまには良いだろう、にしてもお前ら本局になんの用事があんだ？」

「クロノ提督とアコース査察官にお話をしたい事があるんです、アルさんはどうして技術部に？」

「なるほどな

俺はイーグルの事で呼び出した、後は個人的な用事だ」

車に乗っている組み合わせを見ながらはやて珍しそうに呟くとアルは笑いながら同意して、はやてとティアナにどんな用事なのかと質問を投げ掛ける

アルの質問に後部座に乗っていたティアナが答えると、逆に自分の事を聞かれアルは簡潔に説明して車を走らせた

そしてアル達が乗る車は目的地につきアル達は、時空管理局の本部に向けて移動した

EP27..なんでテメエが来るんだよ!! (後書き)

どうも、えのきです!

お腹がディストラクションしヤバい中で投稿してます…

ギンガの魔法追加について受けていれて貰えたら嬉しいと思いますが
ら、アルが昔の話しに食い込んでるなと思いましたね

その辺は祭で話そうと思います

祭に関して決まった事をここで発表します

悩みました: 読者様の投稿を元に考えた、その結果: 二回連続でや
ろうと思います!

今さらですが馬鹿だなと思いますね: でも頑張りたいと思います

とりあえず順番ですがやまりようさんリクエストのシャマル祭を2
0万PVとして行い、その次に拓也II どんジョーカーさんのリク
エストのギンガ祭を開催します

計六本: 11月中に上がるかな?

もしかしたら来月に入る不安を覚えながら次回予告です!

アルフィリオス「時空管理局本部にある技術部、そこにいるイーグ
ルの生みの親ことガドルフ

奴から語られる二機のTBシリーズの真実

そして俺が下す決断

次回、魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る
荒鷲～EP28..鷹の爪 隼の嘴 鷲の翼 にテイクオフ！
これがいっしょに勝つための選択だ…」

EP・S：始まりはビターの味（前書き）

やまりょうさんからのリクエストで20万PV記念小説でございます！

ちなみにEP・SのSはシャルのSと考えて下さい

EP・S…始まりはビターの味

SIDE…シャル

「ん…：今日も平和そうね」

暖かな陽射しが差し込む医務室で私は思いっきり伸びをした

私ことシャルは機動六課の医務官です

仕事が無いことは怪我人がいないから良いことだけど暇なのもどうかと思ったりする

《アアルウー！！テメエ、今日こそ粉微塵にしてやる！！》

《どうわあああっ！？スマン、ヴィータ！勘弁してくれ！！》

「？またアルさんが追いかけてるのかしら？…今日はヤケになつてみたい」

医務室の前を騒がしい足音が駆け抜けていくと扉越しにだけど、ヴィータちゃんの怒声とアルさんの悲鳴が聞こえてきた

いつものやりとりだけど今日のヴィータちゃんは何処か様子が変わった

いつもより怒っているようだったからだ

そしてまた足音が響くと今度は医務室の前で止まり、扉が開いた

「シャマル！スマン！匿ってくれ！！」

「ア、アルさん！？どうしたの？」

「訳は後で話す、頼む！！やべ、来た！？」

「シャマル！！」

慌ただしく入ってきたアルさんは慌てて私に助けを求めてくる、ただいきなりの事に私は何が何だかわからずしているとアルさんは慌ててベッドのカーテンを閉めて隠れる

すると今度はグラーフアイゼンを肩に担いだヴィータちゃんが自動ドアを手で開けて入ってきた…開くのを待てなかったのね

「アルの奴を見なかったか！？あんにゃろ、こっちに逃げた気配がしたんだけどよ」

「さっき、窓から外に逃げたわよ
多分訓練スペースの方だと思うわ」

「そっか、サンキュー…絶対に潰す…」

凄惨な剣幕でヴィータちゃんは私に聞いてくる、とりあえずバラして医務室を汚されても困るから私は窓を指してヴィータちゃんに嘘を教える

ヴィータちゃんは部屋から出る間に物騒な発言をすると風のように居なくなった

一体何をしたのかと思いながら私は机から立ち上がる

「そういえば、セレスにこの本の山を返さないと、アルさんについてに持っていってもらおうかしら…よいしょ、っと…結構重いわね」

立ち上がった時にデスクの上に本が2、3冊置いてあるのに気付いた

それは依然、セレスが読んでいたもので預かって欲しいと言われた物だった

流石にいつまでも置いとく訳にはいかなからアルさんに渡そうと抱えるが意外に重量があり少しよろめいてしまう

「アルさん？ ヴィータちゃんはどういわ、それとこの「そうか、もう大丈夫なのか？…あれ？」

「えっ……っ！！／／／」

カーテンを通りベッドの横に立つとベッドに大きな膨らみがあり、ため息まじりに呼びかけてついでに用件を述べようとした時に何故か下からアルさんの声が聞こえた

本をずらして下を見るとベッドの下からアルさんが顔を出していた少し低い隙間から這い出して来たため必然的に私を見上げるような形になる

私の服装は六課の制服に白衣、下はもちろんスカートだったつまりアルさんは私のスカートの中身を見ている結論に至る

顔が焼ける程に熱くなり私は手に持った本を勢い良く振り上げた

「いやああああっ！！！！／＼／＼」

「シャマル、ストツ、ぶげはあ！？」

叫び声と共に降り下ろされた本達は重力と私の力により加速がつき、アルさんの顔に本達は吸い込まれるように落ちていきアルさんは情けない悲鳴を上げて、動かなくなった

「ア、アルさん？」

「……………」

「大変、急いで手当てしなきゃ！！」

しゃがみこんでアルさんの頬をつつくが全く反応しなかった、私は慌ててアルさんを引きずりだすと手当てを開始した

———数分後———

「そりゃ、紛らわしい行動した俺が悪いかもしれないけどよ…本をぶつける事はないだろ軽い質量兵器だぞ…」

「ごめんなさい…でもアルさん、なんでベッドの下にいたんですか？上には枕をぎっしりおいて偽装工作してまで」

「ヴィータの目を欺くためだ…ああやっておけばもういないと判断するかと思ってな」

「あのヴィータちゃんならベッドごと叩き潰すと思うわ」

本が直撃し額を切ったアルはシャルに止血してもらい、包帯を巻いてもらっていた

包帯が巻かれながらアルは先ほど落とされた本を見ながら冷や汗を流して言うと、シャルは申し訳なさそうに頭を下げるが何故ベッドの下にいたかと問いかける

アルは少し得意気に自分の行動を説明すると、シャルは先ほどヴィータの雰囲気では無理だと言い切った

「それにしても、ふむ…」

「どうしたの、アルさん？」

「いや黄緑も悪くないかなって思ってたな」

「黄緑？……………っ！！／／／」

シャルが包帯を留めるなかでアルは何か思い出すような言い方をしはじめる

シャルは不思議そうに首を傾げて手を止めるとアルに問いかける
するとアルは指をたてながらにこやかな笑みを浮かべて答える

最初は意味がわからなかったシャルだったが一つ思い当たり、顔を真っ赤に染めると手に持った包帯を強く握りしめると思いつき

引いた

「イダダダダっ！？シャマル！割れる、割れる！割・れ・る！、割・れ・る！あたまが、割れる！！？」

「何、バツチリ見てるんですか！！／＼もうそんな人だなんて思わなかった…」

「いやそれは勘違いだぞ、シャマル

男はな：見たことない秘境を見たら脳裏に焼き付けるもんなんだよ」

「アルさん、リンカーコアの摘出して少し手を加えたらすんごい激痛になるのよ？」

「すみませんでした…」

絞められた事によりアルは悲鳴を上げながら暴れるがシャマルは力を緩める事は無く

ようやく緩めると腰に手を当てながらしかりつけるが、アルは真剣な口調で返す

シャマルはクラールヴィントを起動させるとニコリと微笑むとアルは平身平頭をして謝った

「所でアルさんはなんでヴィータちゃんに追いかけられていたの？」

「デスクワークを一週間くらい溜めていて、一気に提出したからだと思う」

「それは怒られて当然ね：はい、手当ては終わったから」

「ありがとな：なあシャル、コーヒー貰えないか？」

一息ついたシャルがアルにヴィータが怒っていた理由を尋ねるとアルは少し言いにくそうにしながら答える

シャルは深くため息をついてから呟き、包帯を軽く触ってから終わった事を伝える

微笑を浮かべたアルは礼を述べるとデスクの上にあるコーヒーカップを見ながらシャルに頼む

「ふう、アルさんいつまで医務室にいる気なの？」

まあ別に構わないけど：？そうだお砂糖が切れてたの忘れてた、ちよっと貰ってくるから待っててくれる？」

「おう、出ればヴィータに見つかるかもしれないからここで待っておくから」

文句を言いながらシャルはコーヒーカップとインスタントコーヒーを用意するが、途中で砂糖の瓶が空なのに気付き食堂から分けてもらおうと扉にむけて歩いていく

アルは少し呑気そうに返すとだらだらとくつろいでいた

SIDE…シャル

（全くアルさんには困ったものね：

確かに悪い人じゃないのはわかるけどいい人とも言えないのよね…）

厨房に向かう途中で私はアルさんの事を考えていた

仕事をサボったり、ちゃらんぼらんだったりはつきり言えば悪いイメージしかない、でも…

（そんなアルさんをはやてちゃんとヴィータちゃんは好きなのよね…不思議）

思い浮かぶはやてちゃんとヴィータちゃんがアルさんに向ける、あの視線…

はやてちゃんが好きになるのは何となくわかるけどヴィータちゃんは意外だった

私達はあくまで夜天の書の守護騎士、恋愛なんて無縁だと思ってた多分はやてちゃんと接していくうちに私達は知らず知らず、人の感情というものを理解したんだと思う

（こういう事がわかるのは医務官として関わってきたおかげかしら？）

そう考えながら私は食堂に到着し厨房に足を運んだ

「すみませ〜ん、お砂糖を分けて欲しいんですけど」

「はーい、悪いんだけど手が離せないんだよね、そこに瓶が二つ置いてあるから右側を持っていつてくれるかい？」

「はーい、わかりました…えっと右側よね、二つとも白い粉だから間違えないようにしないと…よし、これで良いわ
ありがとうございました！」

厨房には夜に向けて仕込みをしているシェフがいた、私は少しだけ大きな声で呼びかけるとシェフはこちらを一度、見てから答える

相手の込んだものをしているのかその背中には気迫が満ちていた
私はシェフに言われた通り右側の瓶を手にとると空の瓶に分けて、
礼を述べてからその場を後にした

「アレ？シェフ、誰か来たんですか？」

「ん？シャル先生が砂糖を貰いに来たんだよ」

「えっ？砂糖の瓶全く減ってないですよ？」

「あん？あ…もしかしてこっち持ってたのか？…まあ入れる時にわかるだろ」

シャルマルが立ち去った後、厨房に手伝いが来て二つのうち一つの瓶が
少ない事に気づく

シェフに呼びかけると先ほどの事を説明していく

詰め替えを行なった手伝いは砂糖の方を指でさすとシェフはそこで初めて気付いた

シャルマルとシェフは丁度、真向かいに居たためシェフにとって右側
はシャルマルには左側の瓶をさしていた

つまりシャルマル検討違いな瓶を持っていた事になる、しかしシェフはあまり当てにならない予測をすると作業の続きをしはじめた

――
SIDE..シャルマル

「へくち！誰か噂でもしたのかしら」

厨房から出てきた私は砂糖の入った瓶を抱えて歩いていたら突然、
くしゃみに襲われた

鼻をすすりながら首を傾げながら医務室に戻るとアルさんはセレス
の本を手に取り、読みふけていた

「…アルさん？」

「ん？おう、シャルマル戻ってきたのか
ちよっと勝手に読ませて貰ってたぞ」

「それはセレスのだから構わないわ
ついでに渡しておいてくれる？」

「おう、わかった：コーヒー俺がやるか？」

真剣な表情で本を読んでいるアルさんに見惚れながらも、私は声をかけるとアルさんはいつも通りに、返事をしすまなそうに謝りながら本を見せた

私は本の持ち主について教えると返しておくように頼む

軽く手を上げて返事をしたアルさんは何かを思い出したかのように私に提案をしてくる

確かに料理は少し下手だけどコーヒーくらいは入れられるのに：なら見返してあげないといけないわね

「大丈夫よ、それくらい私が入れられるから、騙されたと思って飲んでみて」

「そ、そうか？なら砂糖は一杯で良いぞ」

「はあい、それじゃあ張り切っていこうかしら」

私は笑顔を浮かべてアルさんに言うと、アルさんはまるで怯えたような顔を見ると砂糖の量を教えてきた

私はカップを用意してからコーヒーの粉を入れると砂糖を一杯カップに入れてからお湯を注いだ

このくらい自慢するのはおかしいけど、私だってやれるものだとアルさんに知らしめるくらい完璧な出来栄であった

カップにいれたコーヒーを軽く混ぜてからアルに手渡しをするために持ち上げる

「はい、アルさんコーヒーです」

「そうか…大丈夫だよな？」

「ちゃんと手順通りにしたから大丈夫よ
自信はあるんだから！」

「……………っ！」

差し出されたコーヒーにアルさんは怪訝な表情を崩さずにいた

そして呟くように私に聞いてきたので私は胸を張って答えると意を決した様に一口、飲んだ

「アルさん、どう？おいしいでしょ」

「シャマル…あのな…」

「なに？」

私は期待をしながらアルさんに問いかけるとアルさんは難しそうな顔をしてから私に声をかけてきた

それに対して私は不思議そうに小首を傾げて返す

「お前：何をいれた？」

「コーヒーよ、失礼ね」

「じゃあ、コーヒーにはとろみはつかないものなのか？」

「えっ！？そんな訳：アレ？嘘！？」

アルさんの言葉に私にムツとした表情をしてから返すと次のアルさんの言葉で硬直した

嘘だと思いアルさんのコーヒーをかき混ぜると確かにとろみがついていた

「そ、そんなこれはお砂糖のはず：あれ？全然甘くない：もしかしてこれ」

「間違いなく：片栗粉だな、これ」

「ご、ごめんなさい！！」

私は慌てながら入れた砂糖を舐めるが甘さは全く感じなかった

とろみが出た原因をアルさんは指摘をするなかで、私は勢い良く頭を下げた

自信満々で進めておいて結局はいつともかわりない、失敗をしたからであった

いくらアルさんでも流石に怒られる、謝りながらそう思い覚悟を決めてアルさんの返答を待った

「シャル…」

「…っ！」

「美味かった、ごちそうさま」

「えっ…アルさん！そんなわけ」

立ち上がったアルさんは私の名前を呼んだ、肩が強ばるのを感じただけどアルさんの放たれた言葉に私は哑然としてしまう

「カップそこに置いておくからな？」

んじゃ…また飲むかもしれないからまたよろしくな」

「あ……またよろしく…か」

セレスの本を片手にアルさんは片手を上げてから医務室を出ていく、残された私はアルの言葉を呟くと少しだけ嬉しくなり、飲みかけのコーヒーを少し口を含む

ビターブレンドのコーヒーが少し甘く感じたのは、多分嬉しいからだと思う…

EP. S.: 始まりはビターの味（後書き）

どうもえのきです

やまりようさんからリクエストをもらい書いたシャルマル祭の第一段ですが：今まで接点のないキャラを絡ませるのは意外に楽しいですね
ただし遅くなったのが気になりますね、次回はもう少し早く投稿出来るように頑張ります

では次回の更新をお待ち下さい！

EP. S.:さめてほしくないもの(前書き)

シャマル祭、第二段！

意外と早く出来ました、楽しんで貰えたら嬉しいです

EP. S.:さめてほしくないもの

SIDE…シャル

朝、窓から入る陽射しが差し込み私は目を開けた

少し肌寒い11月の空気にベッドから出たく無くなるけど出なくちやいけない、朝ご飯を作らないといけないから

「えっと、昨日は和風だったから今日もそれで行こうかしら」

キッチンに立った私は冷蔵庫の食材と昨日の献立を確認する

六課解散から私はあの人と同棲を始めた、それから一年が過ぎて、今二年目を迎えようとしていた

最初にあの人から同棲を申し込まれた時はあり得ないと思ったけど私は頷いた

はやてちゃん達にもちゃんと説明して許しを貰ったけど、あの人ははやてちゃんから「シャルを泣かしたら八神家、全員から肅正するからな？」と脅されていた

今でも思い出すと少し笑いが込み上げてくる、その後で大変だったのは実は私だったりする…

同棲するに渡って家事を担当したが私は料理が苦手だからあの人を何度か倒れさせてしまった

猛特訓のおかげで人並みには作れるようになった、教えてくれたはやてちゃんや試食をしてくれたあの人には本当に感謝をしても足りないくらいだった

「それじゃあ味噌汁から作ろうかしら」

もの思いにふけていているが時間が過ぎてる事に気付いて、早めに朝ご飯を作ることにした

手始めに味噌汁を作る事から始めた
人並みに作れるようになったとはいえ、たまに失敗をしてしまう事がある

「―――？」

「あ、ごめんなさい…今、朝ご飯を作ってる最中だからもう少し待ってくれる？」

「―――、―――」

「そう？じゃあお皿を用意してて待っててくれる？」

少し不安気に調理をしていると後ろから声がかけられて振り返ると、そこにはあの人立っていた

不思議そうに話しかけてくるあの人に、私は謝って事情を説明するとあの方は微笑してから気にしなくて良いと答えてくれた

あの人の優しさを感じながら私は彼に感謝をしながら手伝いを頼み、

調理を続けた

ようやく朝ご飯が出来て二人で食べていた時に私は一つの事を思い出した

「そういえば、今日は大事な記念日だから早く帰ってきてね？
ご馳走を用意して待ってるね」

「――、――」

「うん、じゃあお仕事頑張ってきてね」

「――：――、――」

今日は大事な日、同棲生活をOKした日だから私と彼はこの日は盛大に祝おうときめていた

彼もわかってくれてるみたいで良い返事をしてくれた
食べ終えた彼は食器を片付けると職場にむかうために玄関へと足を運んだ

「あっ！ちょっと待って、襟が曲がってる…うん、これで良し
それじゃあ行ってらっしゃい」

「――：――、――」

「――「――」」

「えっ？ ああ、いつもの？ …はい／／／」

行き掛けに私は制服の襟が曲がっていく事に気づき側に駆け寄り直

すと彼は苦笑をして答えると、人差し指を立ててから言ってきた

いつもの「アレ」…その言葉で私は頬を染めながら爪先立ちで彼の顔に自分の顔を近づける…彼の手が自分の顎に添えられ、唇が触れ合いそうに…「シャル、起きろ!」…誰? 私を呼ぶのは…

――――

「いつまで、寝てる気だ? さっさと起きろ」

「…アルさん? あれ…ここは…」

「六課の医務室だ、自分の城の名前も忘れたのか?」

目を開けるとそこはいつもの医務室で更に腕を組んだアルさんが立っていた

まだ寝ぼけている私に呆れたように話しかけるアルさん、そこでようやく先ほどの光景が夢であることに気づき落ち込んでしまう

「ハァ…良い所だったのに…」

「ハァ? 何をいつてんだ? お前…医療道具の補充を持ってきたぞ何処に置けばいい?」

「ごめんなさい、えっとデスクの脇に置いてくれれば私が整理しとくから」

「おう、よつと…珍しく大忙しだったから寝るのもわかるが、寝ながら笑われたら不気味で仕方ないぞ？」

デスクにうつ伏せになりながらため息を吐く私にアルさんは不思議そうに言う、手に抱えた箱を見せながら聞いてくる

そういえば、今日は擦り傷やら火傷やらと怪我人が続出し、備えて置いた医療道具が切れてしまい近くを通りかかった、アルさんに在庫を持ってくる様に頼んだ事を思い出した

とりあえず、自分の座っているデスクの隣を指でさしてから言う、アルさんは箱を置いてから一息ついてから先ほどの私を思い出して苦い顔をした

嘘…笑ったの？確かに幸せな夢を見てたのは確かだけどそんな顔しなくても良かったのに…

「好きな人と一緒に暮らしてる夢を見たの、悪い？」

「お前…そこまで男に餓えてたのか…少し距離をおいて良いか？」

「ちょ！？誤解を生むような言い方は止めて！！そんな事ないからね、離れない、の！？」

「なんでも良いがとりあえずコーヒー飲むか？眠気覚ましによ」

先ほどの夢を教えるとアルさんは無表情のまま、失礼な事を述べると一歩下がる

慌てて私は否定をするがアルさんは更に一歩下がった、しかし冗談

だと答えてからコーヒーポッドを手を持ち、カップに注いで渡してくれた

そして自分の分も注ぐと近くのソファアに座り軽く飲む、私もそれに続いてコーヒーを飲むほのかな甘味が口に広がる、アルさんは自炊しているらしく意外と料理とか得意らしい：普段ズボラなだけに聞いた時は本当に驚いた

「あれ？アルさん、枝毛があるわよ？」

「あん？別に構わない、死ぬわけじゃないしな」

「身だしなみを整えるのは管理局員として、というより社会人として当然よ？さあ、ほら髪をとかすからジッとして」

「わかったよ：んじゃ頼む」

コーヒーを飲んでいてアルさんの赤い髪が目に入る、すると妙に枝毛が多い事に気づき、指摘をするとアルさんは面倒そうに返した

家事とかするくせに身だしなみなんて本当に無頓着なんだから：

お節介かもしれないけど髪をとかすと言えばアルさんはため息をついてから束ねていたゴムを取り髪をばらす

「ホントに手入れをしてないのね、キレイな髪なのにもったいない：」

「男なのにキレイはおかしいだろ：」

「そう？ともかくこれだけ長いんだからちゃんと手入れしないと痛んでその内、無くなるかも」

「それは嫌だな…つっても手入れなんて忘れるからな…シヤマル、たまにやってくれないか？」

ヘヤブラシをアルさんの髪に入れていく、手入れしてないからたまにつっかかってしまうけど、ちゃんとヘヤブラシは入っていく

髪をとかしながら私は残念な感じにアルさんに言う

それに対してアルさんは凄くうんざりしたように言うと言横目で私を見る

私は髪をとかす手を止めると少し嫌味を言うようにアルさんの頭をつつく

アルさんは顔を見せはしなかったけど雰囲気は心底嫌がっていた、そしてあるうことか私に髪の手入れをしてくれるように頼んできたいきなりの事に私は戸惑ってしまいアルさんの頭にヘヤブラシを食い込ませてしまう

「アダダダっ！刺さってる、刺さってる、頭に刺さっとるーーっ
！！」

「あう！ごめんなさい、だってアルさんが変な事をいきなり言い出すから…」

「そんなに変な事か？まあ、考えてみりゃそうだよな」

ヘアブラシが思いのほか食い込んだらしくアルさんは悲鳴を上げて騒ぎ出す

私は謝りながらもアルさんに文句を言うのと再び髪をとかす作業をはじめ

アルさんは不思議そうに私に問いかけるけど、私としてはあまりにも唐突の事だから驚いただけで：あれ？それって別に構わないということ？あれ？あれ？

「シャマル？だんだん痛くなってきたんだがもういいんじゃないか？」

いやいや、そんな訳ない：それに別にアルさんの事はなんとも思っていない、というかそういう話でもない気が：

「シャマル！？頭皮が削れる！」

そんなわけない、そんなわけない、そんなわけない！！

「シャマルっ！！痛いから本当に痛いから！？」

いい加減にしろ！！！！」

「あっ：ごめんなさい：ちょっと気持ちの整理に没頭してて」

「気持ち？まあ、深くは聞かないけどなんかあったら言えよ？力になるからな」

アルさんの叫び声で私は脳内会議から現実に戻される

そして本当に痛そうな表情を浮かべているアルさんに申し訳なく謝りわけを軽く説明をする

アルさんは頭をさすりながら怪訝そうな表情をするが直ぐに元に戻すと、私に笑顔を見せた

アルさんの笑顔を見た瞬間、自分の胸が高鳴った

それと同時にわかった気がした、はやてちゃんとヴィータちゃんがアルさんを好きになったのが、アルさんは何処か安心させてくれるからだ

今まで誰かに頼る事がなかった、はやてちゃんやヴィータちゃんにはそれが決めてで良くも悪くも人の心に残るアルさん

そしてそれがふとしたきっかけで変化する、これが全部、計算でしているのならアルさんは凄い極悪人だ

でもそうじゃないと思うのは私がアルさんの事を好きになったからなんだろうか？

それについては良くわからないけどそうあって欲しいと思ってしまう

「シャマル、どうかしたのか？黙っちまって」

「えっ？ああ大丈夫よ…アルさんがすごい女たらしなんだと思っただけだから」

「えっ！？なんでそうなるんだよ！！」

「自分の胸に聞いてみたら、ほら葉の整理するから出てく

アルさんがいたら作業に集中出来ないから!」

不安そうに聞いてくるアルさんに私は少し意地悪な言い方をする
いきなりの事に戸惑っているアルさんの背中を押して外へと追い立
てていく

アルさんを外に出したら私は扉にロックをかける、人の心に勝手に
居座る人には丁度良いと思う

アルさんを追い出してから私は薬の整理をせずにデスクにかけると
突っ伏して目を閉じる：もう一度あの夢が見られるように願いな
がら、その相手がアルさんが良いなと思いいながら、そして：目が覚め
たとしてもこの想いが冷めてない事を祈りながら

——おまけ——

「なあイーグル、俺はシャマルを怒らせるような事をしたのか?」

「したんじゃないんですか?」

「イーグル：なんか冷たくないか?」

「気のせいだと思います：私はいつも通りです」

「そ、そうか」

（やれやれ、またこの女たらしの餌食になったようですね：少々苛
立ちますね）

EP. S.:さめてほしくないもの(後書き)

どうも、えのきです！

ちょっと短くないかな！？そう思ってます…

日常編はどうも短く済ませてしまいます、次回でシャル祭が最後なんですが長い作品の方が良いのかなと考えます…

良かったら感想で答えて貰えると嬉しいです

最後になりましたが今回の活動報告は夜天に舞い踊る荒鷺の宣伝みたいな感じに書きます、多分最初に見てくれると思いますですがそちらも見てくださいと嬉しいです

ではシャル祭の最後を期待しながら待ってて下さい

EP. S.: 隠し味それは… (前書き)

シヤマル祭、ラストの作品です!!

さあ! 盛り上がってまいりましょう!!

EP・S…隠し味それは…

SIDE…アルフィリオス

おう、皆のお兄さんのアルフィリオスだ！（キラッ）

俺は今、久しぶりに家に帰宅するわけだが食材が無いことを思い出してスーパーに買い出しに来てるんだ

一人？違うよ、俺は今…

「アルさん、今日はお野菜が安いからお鍋にしませんか？」

「二人で鍋はどうよ？シャマル、どうせなら野菜炒めにしないか？一応、お前の特訓も兼ねてんだからさ」

「うう…そうでした…よっし、気合を入れて頑張らないと」

「とりあえず肩の力を抜く事を覚えた方が良いな」

隣にいる六課の医務室の主、シャマルが特価とかかれたプラカードを指でさしながら提案をしてくるが、今日の目的とは違うため俺は注意をするとシャマルは何か後悔をしたような顔をし、握り拳を作って意気込む

俺はそれにツツコミを入れながら野菜を手籠に連れていく

というかなんでこんな事になっているか、それは約二時間前に遡る

——二時間前——

「改修工事？六課の？」

「せや、スカリエッティを逮捕が出来たのは良かったけど機動六課、特に隊舎が受けた被害が甚大や
せやからこれを機に改修工事をしよと思うてな」

「レリック関係は収束に向かい出してるし、機動六課としちゃ、お役御免だな

一年だけの研修部隊だから一応は残ってんだよな」

「それにスカリエッティの逮捕や事件収束に貢献したから即時解散は今の所無しや
だけど作業に三日くらいかかるそうやから、その間はお休みやな」

とある昼下がり、はやての所に報告書を提出しにいくと何やら通信をしていたはやて

何事かと聞くと六課を修繕するとの話だった、確かに今の六課は未だにあちこちが煤にまみれたりしている

はやての話しに同意している時に俺は休みという言葉に敏感に反応した

よっしゃ！久しぶりに寝ていられるぜ！…あれ？…考えてみりや隊舎にはいられないんだから家に帰らないといけないんだよな？…ああ、面倒だ

「どないしたん？喜んだり、落ち込んだり」

「俺、ラジバン「言わせへん！」

「俺のボケにセリフを被せるとはやるな」

「あんまり嬉しくないんやけど」

不思議そうにするはやてに俺はいつも通りにボケをしたらいい終える前に防がれた

中々な反応をするようになったな、はやて

「さてと、まずは買い出しから済ませないとな」

「あ…、アルさん

珍しく考え事してるみたいだけどどうしたの？」

「シャル、珍しくは余計な一言だ…今日から六課が休みだろ？家に食材あったかなって思ってたよ」

「あう、そういえばアルさんは自炊よね、最後に帰ったのはいつ？」

俺が顎に手を当てながら考えていると後ろから名前を呼ばれると後ろにシャルが駆け寄ってきていた

シャルの言葉に俺はやれやれとため息をついてから軽く、シャルマ

ルの頭を小突く

シャルは妙な声を出していたがふと気になったのか俺に問いかけ
てきた

あれ?…いつ帰ったんだっけ?

「多分…四年前くらい、かな?」

「いろんな意味で気になるわ、アルさんの家…」

「大丈夫だ、近所の人達が掃除してくれてるから、一応人が入れる
と思う」

「じゃあ…今から行っても構わないかしら?」

若干不安そうに話す俺にシャルは怪訝そうな顔をしていう

俺は片手をパタパタと動かして教える、自宅の近くに住んでいるご
近所さんは心優しい人が多く、事前に頼んで置いたからやってくれ
てるはずだ

言葉をいい終えると隣を歩いていたシャルは少し言葉を詰まらせ
ながら俺に質問をしてきた

なんでまた、俺んちに来たいなんていうんだ?

「別に構わんが、何か用事があるのか?」

「えっとあの…そ、そう料理を教えて欲しくて、大丈夫かしら?」

「はやてに頼めば良いんじゃないか？」

「はやてちゃんには内緒で普段、頑張ってるからなんとかしたくて…」

シャマルは俺の問いかけるとビクツという言葉が似合うくらい動揺して、あたふたしながらまるで今思いついたように提案をしてくる俺は軽く首を傾げて問いかけるが指を付き合わせながら俺に説明をしていく、確かにはやては休みが無いことは俺も知ってる

そして八神家では料理を作れるのは、はやてしかない訳だから習いたいのはわかる

「わかった、ただしあんま期待すんなよ？俺も上手い方じゃないからな」

「だ、大丈夫よ！人並みに作ればいいの！！」（勢いで言ってみただけど別な意味で大変な予感が）

「仕方ないな、食材の買い出しに行くからついてこい」（とりあえずOKしたけどどうなる事やらああ、面倒だ）

（（いったいどうなるんだろう…））

ということで、今シャルと一緒にいるのだ：

「下手に手の込んだものになるとシャルじゃ無理だから、失敗が低そうなもので良いよな？」

「正論だから言い返せないわ：でも野菜炒めだけじゃ少ない気がするわね」

「心配するな、他にもレパートリーはある
ヴィータやラインが好きそうなハンバーグとかな」

「それって難易度、高い方だと思う気が：

俺は3つ程の野菜を手籠に入れると調理するシャルに指を立てて説明をしていく

俺の言葉に肩を落として落ち込むシャルだったが、オカズが少ない事に気付き問いかけてくる

シャルの言葉に手を軽く動かして答えると精肉コーナーに足を向けて説明をする

次に作るものを聞いてシャルは自信無さげに言ってくる、こいつ一から作る気でいやがるな：

「一から作るわけないだろ：あらかじめ整った奴を小分けにして焼くんだよ、ただし焼き方をしければ意味はないからな？」

「うう、プレッシャーを与えないで欲しい：これで二品目ね、他に？」

「あんまりレパートリーが多すぎるのもなんだ、これくらいで良いだろ」

シャルの前を歩きながら俺は言うと後ろから脱力したような声が聞こえ俺は笑いを堪えながら歩き、指を折りながら数える

そして多すぎないレパートリーに満足をし会計をするためにレジに向かおうとしたのだけど、シャルが支払いたいと申し出でくれた
だがこれは一応、俺の夕飯でもあるためそれは断った

「さて、ついたぞ」

「ここがアルさんの自宅？ マンションとかをイメージしてたけど全然違うわね」

「生憎と普通の二階建ての家だ…とても誰もいないから幽霊屋敷に見られるけどな」

「あの、アルさんのご両親は？」

スーパーをバイクで出たアルとシャルはクラナガンから、少し離れた住宅街に辿りつくアルは特に迷う事なく進み、一軒の家の前に止まるとバイクのエンジンを止めた

初めて目にするアルの自宅は白を基調とした何処にでもあるデザインの家だった、シャルはご近所が掃除してくれてるといいう言葉でアパート等を考えていたから凄く驚いていた

アルはポケットから鍵を取り出すと家の鍵を開け、バイクを道路から玄関の脇に移動させながらシャルに家の詳細を教えていく

夜の薄暗さがあるからか、人気のない家にシャルは息を呑むとアルの家族について質問を投げ掛ける

「親か？ さあな…どこか遠くにいつちまったからな」

「あ…ごめんなさい…変な事を聞いて亡くなってるなんて知らなくて」

アルは空を見上げながら呟くように答えるとシャルは他界していたんだと思うアルに頭を下げる

「人の家族を勝手に殺すな
家に人がいないのは仕事でいないんだよ、わからないのは最近連絡とってないからだ」

「し、仕事？ 何をしているの？ アルさんのご両親は…」

頭を下げるシャルにアルはやれやれといった感じにため息をつくと、両親について教える

早とちりしていた事を恥ずかしながらシャルは両親の職業について聞く

「親父は考古学者、母親は元武装民族で今は親父の護衛だ」

「えっ！？なんなのそれは！！」

「俺も聞きたいぐらい得体の知れない奴等だよ、仲は普通に良いんだがな：親父は俺の5倍くらいはっちゃけてる性格で、母親の強さは：未だに俺は組み手で勝てた試しがないくらいだ」

「なんか色々凄い親なのね：チートじみてるって言う方が正しいのかしら」

アルは指を折りながら説明するが、あまりにも突拍子な内容にシャルはついて行けずに困惑していた

アルは両親の見た感じを説明をしていき疲れた様にため息を吐く

口に手を当ててアルの両親について感想を述べる

「まああんな両親については聞かないでくれ、なんつうか忙しくて家に居ない奴等だったからな」

「そうなんだ：えっとその「お前が気にする事はねえよ、ほれさつさと料理つくんど腹減ってんだからな」

「あ：アルさん：」（私達が聞かないのもあるけど、自分の事を話さないから：今までアルさんの事、全く知らなかった：寂しかったのかしら、アルさん）

言いにくそうにアルは家の扉を開けて中に入っていく

シャルは背を向けるアルに話しかけようとするが言葉を紡ぐ前に、アルは買い物袋を肩にかつぎながらシャルの言葉を遮ると早く来るように促すと足を進めていく

その背を見ながらシャルは不安な表情を浮かべてからアルの後を追うように家に入った

「そんじゃ、いっちょ作るとするか」

「え、はい！」

キッチンに材料を置いたアルは食材を用意しながらシャルに呼びかける、少し呆けていたシャルは慌てて返事をする

先ほどの事を気にしているのがバレバレなシャルに軽くため息をつくアル

それからも作業をしていく間もシャルの表情は晴れずにいた

「シャル、何か言いたい事があるんじゃないか？正直、今のままで作業するのは危険だ」

「……アルさんはご両親が居なくて寂しくなかったの？」

「寂しかった、つうかそう思わない奴はいないだろ

だけど…それを親父達に言うつもりはなかったんだ」

「どうして？遠慮なんていらないでしょ」

アルの言葉にシャルは意を決した様に言葉を投げ掛ける

アルは当時を思い返す様に言うが我慢をしたと返答する、その答えにシャルは納得が出来なかった

いくらなんでも少年がするような選択ではなかったからだ

「覚えてないけど親父の仕事を邪魔したくなかったんだと思う…、仕事してる顔を見たら言いたくなかったんだろう」

「そう、なんですか…」

「んで俺は10歳から一人暮らしを始めたんだ、最初は不安だったけどな親父達は必ず帰るってわかってたからな」

「いくら護衛があるからって、必ずなんて…」

アルは理由を述べるが記憶が曖昧なのか、語尾が弱かったさらに一人暮らしを始めた経緯を教える

根拠のない自信に満ちたアルの言葉にシャルは思わず問いかける
「帰ってくるならここしかない…それに信じないといけないだろう？
家族だからな」

「家族…」

「そう、後は何か聞く事があるか？」

「いえ、ありがとうアルさん」

微笑を浮かべながらアルは答えると家族という言葉を呟くシャマル
呟きが聞こえたのかアルは肯定をすると他に無いかと問いかける、
シャマルは首を横に振り深々と頭を下げる

それから調理を再開する、そして数分が経過しついに：

「よし、完成だな」

「焼くだけの作業なのにこれだけ手間がいるのね」

「簡単な料理ってのが案外難しいんだ、でもちゃんとしとかないいけないから覚えておけよ？」

「ええ、勉強になったわ…さて食べるとしましょうか」

完成した料理を見て誇らしげな感じにうなづくアル

シャマルは関心したように呟きながら出来上がった料理を見つめる

人差し指を立てて、腰に手を当てながら説明をしていくアル

その説明に満足そうに返答をするシャマル、そして手をポンと叩いてから食べる事を提案する

「ああ、早く食べようか」

「いただきます……」

「っ！これは…」

シャルの提案にアルはうなずくと向かい合わせになる様に座り、手を合わせてから挨拶をする

手始めにアルが先に野菜炒めを口に含む、そして驚いたような表情を浮かべる

アルの表情の変化にシャルは不安そうに感想を待った

「美味しい…」

「本当!？」

「ああ…間違い、ていうか俺が作ったのより美味いから少し悔しいな」

「それは、言い過ぎなんじゃ／＼／＼」

アルの口から漏れた言葉にシャルは素早く反応する

確かめるようにもう一口と味を噛み締めるように食べてから苦笑しながら言うとお過大評価にシャルは頬を染めた

「これなら、はやても喜ぶかもな」

「アルさん：そのはやてちゃんに作るってのは半分くらい嘘なの：
本当は美味しい料理を食べて欲しい相手がいるからお願いしたの：」

「そっか、なら早く食べさせられると良いな
これはお墨付きの味だからよ」

「そう：なら大成功かしら、美味しいって感想もお墨付きも貰った
んだから：」

アルはシャルが料理を作ることにした理由を思い出すと野菜炒め
等をさしながら言えば、シャルは少し考え込んだ後に自分がアル
に頼んだ本当の理由を語る

語られた理由にアルは腕を組んで頷いてから指で丸を作り褒める

シャルは口元に手を当てながら満足そうに呟く、しかしそれはま
るで最初からアルに食べさせる事が決まっていたような言い方だった

「シャル、それって：」

「私は最初っからアルさんに食べさせたくて作ってたの！
アルさんに教えて欲しかったのは二人っきりで居たかったから！！」

「シャル！ちょっと落ちつけ！」

「私は：アルさんが好きです」

意味がわかっていないアルにシャルは自棄になったかのように、
今日の行動の真意を述べていく

叩きつけられるように放たれる言葉の嵐にアルは落ち着くように促すがシャルは止まる事はなく、シャルの短いながらもはつきりとした言葉にその場は静寂に包まれた

「あ：／／／こ、これは、その：／／／」

「シャル：」

「ひ、ひゃい！？」

自分の言葉の重要さに今気づいたシャルはあたふたしながら、言葉をおうとするがその前にアルが割り込んでくる

いきなり名前を呼ばれシャルは思わず声を裏返させてしまう、そして緊張をしながらアルの方を見た

「俺で、良いのか？」

「っ！？…私は、アルさんしか選べません／／／だから…私をアルさんの家族にしてください！！」

「……負けたよ、お前の熱意というか想いに…あんま、付き合おうとかわかんねえけどよろしくな」

「はい！／／／」

アルは真剣な眼差しで問いかける、それは最終確認でもあったしかしシャルは迷う事なく言い切る

アルは一息つくようにすると微笑を浮かべて答える
そして気恥ずかしそうに手を差し出して言うと言うとシャマルはその手を握ると幸せが溢れる笑顔を浮かべて答えた

EP・S：隠し味それは…（後書き）

はい、えのきです

シャマル祭、今回で終わりましたが…改めて自分が日常編が得意で無いことを知りました

でも持てるアイデアさは出せたと思います

次回からはギンガ祭が開催されるのですが…ちょっと休もうかとも検討してます…

どうなるかはまだ決めてませんが祭が始まったら休まずに頑張りたいとおもいます

それではシャマル祭を閲覧してくれて真にありがとうございます！！

20万PVを超えたこの夜天に舞い踊る荒鷲をこれからもよろしく願います！！

EP. G.: 始まりの日 (前書き)

ギンガ祭、第一段!そして自己最長の文になりました

注意、小説中に※があります

そこにはイメージBGMが入ります

※. 1はSwitch On! (土屋アンナ)

※. 2はCLIMBER×CLIMBER (BREAKERZ)

になります

では楽しんで下さい

EP. G.: 始まりの日

SIDE..ギンガ

燃え盛る炎の中で私はあの人と出会った、その時はまだわかってなかった

この出会いが全ての始まりであることに…

「よいしょ、っと…ギン姉、これはここで良いの？」

「うん、二人共…仕事あるのにごめんね？」

「良いんですよ、なのはさんからも許可貰ってますから」

機動六課の隊舎にある私に割り振られた一室にスバルがダンボールを持って入ってくる

ダンボールの中身は私が六課に出向する事となり陸士108番隊から郵送してもらった私物だ

先に部屋について私はティアナと一緒にダンボールの荷ほどきをしていた、だけど本来は通常業務中なのに私事に付き合わせたことに後ろめたさを感じ、二人に申し訳なく謝るとティアナは笑顔で返してくれた

「二人は労って、俺には何も無しですか？ギンガさん」

「アルさんには必要ないですから…って！！何を持ってるんですか！？」

「えっ？ダンボールだけどこれが「わあああっ！お願いですから詮索しないで普通に置いてください！！／＼／＼」

二人に感謝していると気の抜けるような声が聞こえた、そこにはダンボールを二つ抱えたアルさんが立っていた、私はため息まじりにアルさんの方を見て絶句した

そのダンボールには上と下の文字が書かれていた、その単語を書くものは一つしかない

アルさんは不思議そうにダンボールを調べようと動かしだす、そんな事をすれば弾みで中身が出てしまう！

私は焦りながらアルさんに呼びかけると箱を下ろすように言う

「お、おう…そんなに殺気立たなくて大丈夫だ、ちゃんとするから」

「それには絶対に触れないで下さいね？もし破ったら…千切ります」

「何を！？」

私はいつでもアルさんを気絶させられるように拳を構えながら睨み付ける、ただ事じゃない私の様子にアルさんは素直に従いダンボールを下に置く

ホッと一息つくと念を押すようにアルさんに言い渡し、最後に脅しをかけるとアルさんのツツコミが入った

――数分後――

「あれ？これって、ギン姉とアルさん？」

「スバル！ちゃんと片付けなさい！」

「まあまあ、ティアナ…懐かしいわねそれは私が陸士108番隊に入った頃の写真よ」

「そんなの残してたのかよ…物持ちがいいやつだな…お前は」

ちよっとしたハプニングから数分が経過し、スバルと一緒に小物を整理していた時だった一つの写真立てを手に取ったスバルは私に聞いてきた

ダンボールを片付けていたティアナはスバルを叱りつけるけど、私はティアナを制止させてから写真の説明をすると後ろにいたアルさんが面倒そうな声を上げて言ってきた

「記念なんですから良いじゃないですか、それに私が持っていたもアルさんには関係ないですよね？」

「でも、写真のギン姉…表情が笑ってないよ？少し硬いって言うか…」

「その頃は色々あってね：アルさん、話しても良いですよね？」

「好きにしろ、俺は別に構いはしないからよ」

嫌そうな声を出すアルさんに私は呆れたように言っていると、隣にいたスバルは写真を指で指しながら問いかけてくる

私は当時の事を思い出しながらアルさんに許可を求める、アルさんは私が良いならと返答をする

本当にアルさんは曖昧な言い方をするんだから昔と全然変わってないなあ：

私がアルさんと初めて会ったのは四年前に起きたミッド航空火災だったわ：

スバルとはぐれた私はなんとか合流しようとあちこち歩き回ってたんだけど全然、みつからなかったのよね：

「スバル、ゴホゴホ：何処に居るの？」

煙が回っていて息苦しかったんだけどそれよりもスバルが心配だから一生懸命探したの、そしたら火災の他にも爆発が起きて脆くなっていた足場が崩れちゃったの

「あ、きゃああああっ！！」

「ソニックムーブ！」

かなりの高さがあった所から落下した私は、その時ダメだと悟ったんだけど、いつまで経っても痛みとかはやって来なかったの、その代わりに…

「ふう…間一髪だな…無事か？」

安心したように息をつく男の人の声が聞こえたの

――――

「それがアルさんなんだね、ギン姉！」

「うん、そうよ

でもその時は気が動転してて顔が良くわからなかったんだけどね…
その後は実は記憶が曖昧で覚えてないの、アルさんは覚えてますか？」

「俺か？覚えてんぞ…確か…」

私の話しの途中でスバルが身を乗り出して聞いてくる、私は首を縦に振り答える

けどその後はどうしても思い出せず、隣にいたアルさんに問いかけると思い返す様に考えてから話しだした

S I D E…アルフィリオス

あん時はゲンヤさんの指示で救出隊に参加しててな

要救助者を搜索してる時に女の子が一人、引き返したって報告を受けたんだよ

んで移動したと思われるポイントに着いたら丁度、ギンガが落ちる寸前だったから慌てて助けたわけだ

「……………」

「おうい…大丈夫か？」

「は、はい！あの、まだ妹が居るんです！お願いです、助けて下さい！！！」

「わかった、まずは落ち着けでないと情報が少なすぎる」

よっぽど焦ってたみたいでマシンガンみたいに喋るもんだから慌てて、落ち着せたんだ

「す、すみません…私の名前はギンガ・ナカジマって言います

妹の名前はスバルって言います、火災が起きる前からはぐれてあの

子に何かあったらと思うと私…」

「わかった、少し待ってろ」へリイン、聞こえるか？

へどうしました？アルさん

へスバル・ナカジマって少女は救出されたかわかるか？

今、姉のギンガ・ナカジマというんだが

動揺を何とか抑えながら話すギンガに何とかしないうとなって思い、指揮系統の補佐をしていたリインに連絡を取ったんだ

へその子でしたらたった今、なのはさんが保護したです！

へなのは？もしかしてはやての幼なじみの一人か？

へはいです！他にもフェイトさんも参加してくれてるです

へそいつは豪勢だな…ならとつとと脱出するか、はやての消火に差し支えるかもしれないからな

リインから報告を受けて保護した魔導士に聞き覚えがあり、問いかけると案の定はやての知り合いで他にも優秀な魔導士が参加していると聞いた俺は苦笑を浮かべたんだ

そしてはやてが広域範囲魔法での消火をする時間が迫っている事を確認した俺は急いで脱出することにしたんだ

「妹さんは無事に保護されたってよ、良かったな」

「本当ですか！？ありがとうございます！！」

「礼は後だ、先ずは脱出しないとな
ほれ捕まれ、超特急で地上に向うからよ」

「はい！わかりました」

スバルが無事な事をギンガに伝えたと本当に安心したような顔を
してたんだよな

んでギンガを抱えた俺は吹き抜けになつて通路を上昇していった
んだ

「そういや、救助者にプロテクションをかけたんだよな？魔導士を
目指してるのか？」

「はい、陸士候補生なんです」

「そっか、なら尚更無傷で助けられないとな、同じ陸士魔導士としてな」

「あの貴方は「割り込み申し訳ありません、少しよろしいですか？」

「どした？イーグル」

上昇している最中に俺はここに来る前にあった事について、問いか
けるとギンガは短く答えた

俺は微笑を浮かべてから意気込みをするとイーグルが割り込んでき
たんだ

「エリアサーチの結果、地上への脱出路が非常シャッターにより閉鎖されています」

「本当か？なら下から…と言うわけにはいかないみたいだな」

「ええ、下は先ほど爆発の反応がありましたから今、戻るのは危険かと思われます」

「……………っ」

「不安か？」

イーグルからの報告で俺は上昇を止めて、下に降りようとした時通路から爆風が舞い上がったのを確認し、苦い顔をして呟く

イーグルがダメ押しのように指摘すると腕の中のギンガがバリアジヤケットを握りしめるのを感じ、俺は我ながら唐突にと思いながらギンガに問いかけた

「それは、その…」

「別に怒らねえよ、不安ってのは誰にでもあるもんだ、だけどそんな時にこそ自分を励ますんだよ」

「…どうやってですか？」

「諦めない、なんとかなる！、ってな」

腕の中のギンガは言いにくそうにしていたが俺は再び上昇をしながら言葉を続けていく

不思議そうにするギンガに俺ははつきりと言いつて非常シャッターを肉眼で捉える

「イーグル、フルシリンダーでぶち抜く…ソニックバースト、スタンバイ」

「了解しました」

「右腕のフィールドのライズ（出力）をギンガの防御に回してくれ…カートリッジ、ロード!!」

イーグルのステークを非常シャッターに向けて俺は足元に赤い魔方阵を展開をした、それと同時にギンガの身体を赤い魔力光が覆い始める

「ソニックバースト、イグニション!!」

「イグニション！」

「ぶち抜け！フルシリンダー、ステーク!!」

「ワンシリンダー、ロード！」

俺は魔方阵を一気に蹴ると爆発的な加速がかかり非常シャッターに勢い良く突き刺さり一発、また一発とステークが発射していき最後の一撃と共に俺達は地上へと飛び出る

「時には強引にいくのも有り…覚えておけよ？」

「は、はあ…」

地上に着地した俺はギンガに笑いかけると気の抜けたような返答が返ってきた

「てなわけだ…まあ一気に突破したから記憶が曖昧なのは仕方ないな」

「アルさん…昔からそんなだったんですか」

「そんなって？」

「壁抜きとかやったりする事です」

アルが説明を終えるとスバルが手を上げて質問を投げ掛ける

質問の意図がわからずに聞き返すアル、ティアナが補足をするように言う、ちなみにティアナの言葉には壁抜きの他に為になるいい言葉を言うという意味が含まれていた

「まあな、そんな次はギンガが陸士108番隊に入隊した時の話しでもするか、これはギンガから言うべきだな」

「そうですね、えっと航空火災から一年が経過したくらいかしら…候補生から正式に陸士魔導士になったのよね…」

SIDE…ギンガ

ミッド航空火災から一年が経ち私は、お父さんが隊長として働いている陸士108番隊に配属になった

それと同時に私は一つの目的もあったの

航空火災の時に私を助けてくれた魔導士を探すためだ

お父さんに問いかけるとなんととも言えない表情でウチの部隊に入れば教えると言われたから、先ずは配属する事が出来て嬉しかった

「まさか、本当に配属になるとはな」

「まるで会わせたくないみたいな口調なのねお父さん…」

「一応、家族でも隊の中じゃ礼儀はきっちりしろよ？」

「了解です、ナカジマ三佐」

お父さんはため息まじりに言ってくるのを見て私は首を傾げて言う

お父さんは問いかけに答えずに礼儀について言ってきた、まあ鼻屑とかそういうのを無くすにはそれくらいは当然だと思った

「それで、約束の方は守ってくれますよね？ナカジマ三佐
さんさんもったいつけたんだから、これで知らないなんて言いませ
んよね」

「お、おう…今から呼ぶんで待っててくれるか？」

「はい、わかりました」

「…ラッドか？今、アイツは何処にいる…ちよいと用事があるんだが」

中々、約束を守りそうにないお父さんに私は怒りを隠しながら問いかけると、誠意が通じたようでお手上げのように手を出しながら通信モニターを開いて話し出した

火災の時はスバルの事で頭が一杯でちゃんとしたお礼が言えてなかった、それに正式に陸士魔導士としていることを教えたかった

でもなんでお父さんは教えたがらないだろう、あれだけ…凄くカッコイイ人なら別に問題ないのになあ…

「やっぱりいいか…悪かったな、多分いつもの場所だろうギンガ、お前の知りたい奴はいま中庭にいる迎えに行ってくれないか？」

「良いですけど、名前知らないんですけど…」

「ああそういえばそうだな…アイツの名前はアルフィリオス・ラーゼンハルグ

見た目の特徴は毛先だけが白い赤毛の長髪だ…」

「赤毛の長髪？…わかりました、それじゃあ行ってきます」

お父さんはまるでわかっていたかの様にため息をつく、通信モニ

ターを閉じてその人のいるであろう場所を教えてくれた

私は名前も知らないのにその人を探しだすのは無理だと答えると、お父さんはその人の名前と特徴を教えてくれた

「ああ！ギンガ、一つ注意しとくぞ中庭に着いたら…」

「えっ？なんでそんな事を…？」

「そうしないアイツは見つかんないぞ」

「?？」

部隊長室を出ようとした私にお父さんは呼び止めると、中庭にいたらある行動を取るように指示をする

私は訳が分からずに聞き返すとお父さんはため息まじりに返してきた、なんでなんだろう？

——中庭——

「えっと、ここが中庭ね…確か、入り口の近くにある…木に思いっきり衝撃を与えるのよね…

それじゃあ、いざ」

お父さんに指定された場所の木を見ながら言われた事を思い返して、構えをとると木の幹に狙いをつける

「せいや!!」

「うげはっ!? あたた…地震か?」

木に正拳突きを打ち込んだ途端、木の葉の中から男の人が落ちてきた腰を擦りながら辺りを見回す男性は白い毛先に赤毛の長髪だった…もしかしてこの人がアルフィリオス・ラーゼンハルグ? ずいぶん…だらしのない格好をしてるけど…違うわよね?

「あのアルフィリオス・ラーゼンハルグさんですか?」

「ん? なんで俺の名前を知ってんだ?

確かにそうだけど、つうかお前か?

人のサボりを邪魔をしたのは」

「サ、サボり!? …私はギンガ・ナカジマって言います
今日から陸士108番隊に配属になりました!」

「そういや、ゲンヤさんが言ってたな…ああ面倒くせえな…」

私が男性に問いかけると眠そうな顔をしながら答える

嘘だと思ったかった…でもこの人があの時の人とは思いたくない…
きつと別人…うん、そうだ!

とりあえず、敬礼をして挨拶をするがラーゼンハルグさんは頭を掻きながら欠伸をして呟いた

面倒くさいって…こんな不真面目な人が本当に管理局員なんだろう

か!?

「ギンガだったか? とりあえず俺の事はアルで良いぞ
名字や階級じゃわからんからな」

「は、はあ…」

「んじゃ、仕事の説明すつからオフィス行くぞ…ふわあ」

「……なんなの? あの人…」

立ち上がったラーゼンハルグさんは服の汚れを払うとやる気ありませんを全身でアピールしながら、デスクワークを行うオフィスへと移動を始めた

私はここまで第一印象が最悪な人は初めてだった、あの人の言うことには従わずラーゼンハルグ一尉と私は呼ぶことにした

ちなみにラーゼンハルグ一尉はデスクワーク開始わずか三分で逃走した…本当に何がしたいんだろう私は…

——二週間後——

「ハァ…疲れた…」

デスクワークを終えた私は机に突っ伏した、陸士108番隊に配属されてから二週間…私はいろんな意味で疲れ果てていた

理由はもちろんラーゼンハルグ一尉だ

デスクワークは必ず逃走するわ、全体訓練では怠けて寝てるわ、遅刻や居眠りを日常茶飯事に行うわ…ダメだ…言っていて憂鬱になる…

「お疲れだな、ナカジマ」

「カルタス主任、ありがとうございます」

「良いつて事だ、これくらい」

突っ伏している私の近くに何かが置かれた顔を上げて見ると捜査主任のラッド・カルタスさんがコーヒーを持ってきてくれた

私は勢い良く起き上がり敬礼をするとカルタス主任は手で楽にするようにと合図をする

「あの…少し聞いても良いですか？」

「…アルの事か？」

「はい、ラーゼンハルグ一尉…そのなんであんなに素行不良なのに解雇にならないんですか？」

「手厳しい言い方をするな…まあ普通に考えればそうだな」

コーヒーを一口飲んでから私はカルタス主任に質問をすることにした
カルタス主任も内容がわかっているらしく言い当ててくれた

私は無礼を承知の上で質問を投げ掛けるとカルタス主任は苦笑を浮かべていた

「アルの良い所は普通では目にはつかない所にある、お前も根気良く付き合えば自然とわかるようになる」

「は、はぁ…」

カルタス主任はコーヒーを飲んでから語りかけるように言った

（根気良く…カルタス主任には悪いけど、あの人に付き合ってたらかつちの身がもたない…どうしたらいいんだろ）

デスクワークを終えた私は訓練室で一人で打ち込みをしていた
ラーゼンハルグ一尉の事を考えると少し苛立ちが芽生え、打ち込みの威力が心なしか上がっていく

「なにしてんだ？ギンガ」

「…ラーゼンハルグ一尉…少し自主トレを」

「アルで良いって言ってんだろ

まあ努力すんのはかまわないけど、休むのも仕事だからな」

「いつも休んでるラーゼンハルグ一尉には言われたくありません！」

殺気じみながら打ち込んでいると後ろからよく知る人に声をかけられた

振り返るといつも通りのだらしない格好をしているラーゼンハルグ一尉がいた

私は少し苛立ちながら返事をする。ラーゼンハルグ一尉は欠伸をしながらやる気無さげに答える

「ハッハッハ、違いねえな…んじゃ一眠りでもするかな
ああそうだ…ギンガ、打ち込み続けるならもう少し下半身に力をいれろ、上半身だけで打つてると威力でねえぞ…じゃあな」

「…下半身?…こうかな」

ラーゼンハルグ一尉は手をプラプラ動かしながら打ち込みに指摘をすると立ち去っていく

私は首を傾げてからラーゼンハルグ一尉に言われた様に打ち込むと先ほどより良い音が響いた

普通には見えない良い所ってこの事なのかな?

――数日後――

「というわけで最近、麻葉の密輸が横行してる、各員気を引きしめてかれよ」

「」「了解」」

私がラーゼンハルグ一尉を少しだけ見直してから数日が経過した時だった

ミッドチルダでの麻薬犯罪が目立ち始めだし、密輸を取り締まる陸士108番隊は捜査に入りだしていた…でも

「ラーゼンハルグ一尉！皆が捜査に入ってるんですよ！？ちゃんと働いて下さい」

「ん…まあなるようになれだな…」

「っ！もう勝手にしてください！！」

「…元気なもんだな…さてと…動くかな」

資料を両手に持ちながら私はラーゼンハルグ一尉を叱りつける

だけどラーゼンハルグ一尉は特に焦るわけでもなく気のない返事を返す、さすがの私も頭に来てその場を離れた

だからその時にラーゼンハルグ一尉が言ってた言葉を聞く事は出来なかった…

それから先、事件は大々的な動こうとしていた
始まりはカルタス主任の言葉だった

「今回の首謀者の居場所が判明した、場所はミッド山岳地帯にある
廃工場だ
準備ができ次第出動して欲しい」

「了解！」

カルタス主任の情報に108番隊が団結して声をだすと出動の準備
を始めだした
そんな時にカルタス主任がラーゼンハルグ一尉に近づいていく

「アル、今回も頼めるか？」

「ん？おう、わかった」

「あの、二人は何を話しているんですか？」

「ナカジマか、アルにな「偵察だ…廃工場にどれだけ戦力があるか
の、な

お前には関係ないから準備してろ」

ラーゼンハルグ一尉はいつも通りの気のない返事をしてカルタス主
任の方を見る

私は会話の内容が気になり話しに割り込むと説明しようとするカル
タス主任を遮りラーゼンハルグ一尉が答えた

この人がまともに偵察なんてするだろうか…よし、なら！

「あの、少し良いですか？」

——山岳地帯——

「10…20…25か…結構いるな…」

「表でこれだけなら、中にはどれくらい居るんでしょうね」

「お前さあ…偵察についてくる必要ないだろ？」

「私はラーゼンハルグ一尉の部下です、補佐をするのは当たり前かと」

山岳地帯にある岩影から眼下にある廃工場を光学モニターで見ながらアルは呟くと、その後ろに控えたギンガが推測を立てて言う

そこで大きなため息をついてギンガを横目に捉えながら指摘するアル

それに対してギンガは単調な口調で質問に答えるそれを見て大きなため息をもう一度吐くアル

「ならそろそろラッド達を動かすか、ギンガひとつ走りして伝言を頼む」

「私は配達屋じゃありませんよ!？」

「声がでけえよ、通信モニターを開いて敵に気付かれたらどうすんだ？」

通信を傍受されて逃げられたりすんのが面倒なんだ、足の速さならお前の方が速いだからお前に頼んでんだ、わかったか？」

「…わかりました」

敵の配置を把握したアルはギンガに伝言を頼むと、ギンガはぞんざいに扱われることに反論をするとそれを言葉で論破するアル

状況判断として文句の言えないギンガはしぶしぶ、ローラーで斜面を静かに移動していく

（言い分としては正しいけど言い方のせいかいまいち納得が出来ない、そうだ：伝えたら合流した方が良いのかな？一応聞いておこう）
「あれ？居なくなってる…どうして？」

ギンガは思考にふけりながら一つ疑問が浮かびアルの方を振り向くと先ほどまでギンガのいた場所には人の影すらなかった

（嘘、なんでいなくなってるの？捕まった、まさかサボリ！？
いくらラーゼンハルグ一尉が怠け者でもそんなはずはない…探さなきゃ！）

ギンガは名前を呼ぶわけにいかず岩影に隠れながらアルの姿を探した、しかしその姿を発見する事はなかった

「本当に何処に、っ！しまった!？」

アルの搜索を続けていたギンガはため息をついてから止まり再び前進をした時に足元からカチリという音がし、ギンガの頭上を覆う様に網のようなものが発射され身体に被さった

「こんなの直ぐに取り払、うああああっ!!」

ギンガは網だとわかると引き剥がそうと手をかける、その時凄まじい電流がギンガを襲いそのまま彼女の意識を奪った

――
SIDE..ギンガ

「こいつがアジトの周りを嗅ぎまわってたって魔導士か？」

「ヘイ！頭…どうしやす？」

「脱出の時に人質として連れてくか、そこで用が済んだら薬漬けにしてスラムにでも売り飛ばすぞ」

「さすが！悪だな、頭は！！」

まどろみの中で聞き慣れない複数の人の声が聞こえた

目を開けると薄暗い電球の元で数人の男達がゲタゲタ笑いながら話し合っていた

「あなた達は！、っ！？これは…っく、外れない」

辺りを見回してここが廃工場であることを知った、そして自分が縛られていることもわかった

「あぐっ！？」

「ようやく目が覚めたようだな、お嬢ちゃん

アンタのおかげで逃げんのが楽になりそうだ、おい！外に言ってい
つちよ言いふらせ

魔導士を捕まえたぶち殺されたくなきゃ大人しくしろってな！」

「あいよ」

リーダー格の男がおもむろに私の髪を無造作に掴み上げる

髪を引かれる痛さに顔を歪ませる私に、まるでおもちゃを見つけた
ような感じに言う

犯罪者にいいように遊ばれる自分に悔しさが沸き起こる

「にしても一人で来るなんざ、【荒鷲】の真似事か？
身の程は考えたほうが良いぜ？」

「あ…荒、鷲？」

「管理局の奴のくせに知らないのか？

俺らみたいな犯罪者を相手にする時に必ず奇襲してくるクソみたい
な赤毛のことだよ！」

リーダー格の男は掴んでいた髪を離しやれやれといった感じに馬鹿
にしてきた

私は荒鷲という単語に反応すると男は憎いという感情を丸出しにし
ながら答えた

「頭！大変だ！」

「どうした？うるせえな…」

「外の連中がやられ、ぐふえあ！？」

「っな！？誰だ！」

リーダー格の男が答え終わった時に先ほど伝令にいった仲間が血相を変えて戻ってきた

リーダー格の男は苛立ちを隠さずに聞くが、伝令は報告をしようとした瞬間まるで誰かに蹴り飛ばされたかのように地面に転がる

そこで初めて廃工場にいた私を含める全員は、正体の見えない存在に気づく

伝令を蹴り飛ばされた方をみながらリーダー格の男が叫ぶと一つ、また一つと足音が聞こえ、暗闇の中にぼんやりと人の影が浮かび上がった

「ちい！やれえ！！やっちまえ！」

「「「うおおおお」」」

「っ！！！」

「…ソニックバースト」

リーダー格の男が指示を飛ばすと仲間の四人がナイフを抜き放ち、

雄叫びをあげながら人の影に向かっていった

私は思わず息を呑んだ、しかし人の影はボソリと呟き身構えてから地面を蹴る

その瞬間、人の影に爆発的な加速がかかり向かって来ていた男達の一人に突き刺さる

「おがぁ…」

「のやろっ！」

「…リッパー、オン」

「了解です」

私が人の影を確認した時にはその姿は黒を基調とした武装隊のアンダージャケットを身に纏い右手には肘から足くらいまでの長さの大型のライフルを携えていた

そのライフルには銃口のしたに大きなシリンダーと杭のようなものがつけられていた

この人…何処かで見たような

仲間の一人がやられた事を知った男がナイフを振り上げて斬りかかる
アンダージャケットの人は呟くと電子音声が響き、銃口とは真逆の位置からブレードが展開した、さらにブレードの根本からレバーのようなものが出る

アンダージャケットの人は左手でレバーを握るとライフルをトンプアーのように扱いナイフを防ぐ

「ちい！」

「寝てろ」

「ぐはっ!？」

防がれた事に男は苦い顔をするとアンダージャケットの人はブレードを引いて男の顎を蹴りあげる、そして間髪いれずにライフルの銃身を腹に打ち込んで吹き飛ばす

吹き飛ばされた男は壁に叩きつけられ地面に転がった

「次はお前か…さっさと」待て、荒鷲!…いや、アルフィリオス・ラーゼンハルグって言うべきか？」

「ラーゼンハルグ一尉? そんなどうして…」

私とリーダー格の男に背を向けるようにアンダージャケットの人はブレードを収納すると残った一人に銃口をむけた

しかしそれを遮るようにリーダー格の男がアンダージャケットの人の名前を言い出す

え…今、確かにこの人はラーゼンハルグ一尉の名前を言った

アンダージャケットの人がこちらを向いたその顔は普段の怠けてい

るラーゼンハルグ一尉とはうって変わり、真剣そのもので別人に見えた

「…てめえか、相変わらず脱獄が得意だな…ヴィラル・アンバー」

「好きで得意にはなっちゃいいねえ！てめえが何度もぶちこんでくれたおかげだよ！！」

「そのたびに脱獄してんだ、好きじゃなきゃ考えられないだろ…つか、なんで捕まってんだよギンガ」

「それは、その…」

ライフルを肩に担ぐとラーゼンハルグ一尉は話し始めた、若干呆れたようにいうラーゼンハルグ一尉に対してリーダー格の男、ヴィラルと呼ばれた男は他の男達より大きめのナイフを抜くとラーゼンハルグ一尉に向けた

しかしラーゼンハルグ一尉は大して気にせずと言ってから私に視線を向けてきた

いきなり話を振られ私はどうする事も出来ずに言葉を詰まらせてしまう

「てめえ、無視すんな！…へっ！コイツはお前の部下かなんかかなら、おらよ！！」

「あぐっ！！」

「コイツを殺されたくないや、大人しくそいつらに殺られな！おめ

えら！早く、起き上がれ！！」

無視されたヴィラルは憤慨をするが私とアルさんの関係に気づいたのか私の身体を盾にするように掴むと首にナイフを当てた

そして倒れている仲間に怒鳴り付けると、仲間達がノロノロと起き出し、ラーゼンハルグ一尉を取り囲んだ

「てめえもこれで終わりだな、アルフィリオス」

「勝手に名前を呼ぶな、三流：悪いけどやばい状況だろうが俺は諦めない、なんとかするって決めてんだ」

「えっ…その言葉は…」

ナイフを私の首に押し付けながらヴィラルはラーゼンハルグ一尉に言う

しかしラーゼンハルグ一尉はライフルを肩に担いだまま、はっきりと宣言した

その言葉は聞いた事がある、航空火災で助けてくれたあの人の言葉だ

それにその言葉は私が大切にしている言葉でもある、そうだ…こんな状況でラーゼンハルグ一尉を助けるには私が何とかするしかない

そう思って私は目線を下に向けた、そこで私はヴィラル達のミスに気づいた、それは武装を取り上げられてなかった事だ

電流で動けないから油断していたんだろう、なら出来る事はある！

――※・ 1――

「っ！…ウイング、ロード！！」

「っな！ぐあ！？」

「「「頭！！」」」

「ソニックムーブ！！」

ギンガはヴィラルの頭の上を通るように青い光の道を作り出し、その上をローラーでかけ上がる

そして呆気にとられているヴィラルの後頭部目掛けて蹴りを放った
ギンガの突然の行動にヴィラルの仲間が気を取られた隙に、アルはソニックムーブを発動させてヴィラルから解放されたギンガを救出した

「ずいぶん、無茶すんな…」

「なんとかしようと思って、必死でしたから」

「なら今度はなんとかすつか…ギンガ、フィールドの出力を上げろ
少し無茶するから」

「わかりました！」

ギンガを抱えながらアルはため息まじりに言うど苦笑して答えるギンガ

微笑を浮かべながらアルは残った奴等に目を向けるとギンガに指示を出す、アルの言葉にギンガは素直に頷いて答えた

「イーグル、パターンSSSで行くぞ」

「了解、ソニックバースト、スタンバイ
パターンSSS…承認！」

「行くぜ！」

ギンガのフィールドの出力が上がった事を確認するとアルはイーグルを構え、指示を出す

アルの指示と共にイーグルはカートリッジをロードすると足元に魔方阵が展開し、アルは勢い良く地面を蹴り相手の懐に飛び込む

「まずは一つ！」

「ごああ!？」

「二つ!三つ！」

「うぐお!？」 「どうわあ!!!」

懐に飛び込んだアルは勢いのついたままカートリッジを使わずにステークを男の腹部に打ち込む

それだけで攻撃は終わらず、別の敵にソニックバーストで瞬間的に移動をし再びステークで一人、一人撃ち抜いていく

「四つ!!」

「おわあ!!」

「SSSソニヌタヌデーク：コイツが俺の決め手だエース…
三流にはもったいないなかったか？」

最後の一人にステーキを打ち込んでから、イーグルを肩に担ぎ男達に背を向けて言うどまるで男達はまるでスローモーションが解かれたかのように倒れていった…

――――

《今回は犯人確保が出来たのは良かったが次は厳しくいくぞ》

「了解ッス、ゲンヤさん」

《とりあえずは軽い減給で済ませとく、わかったか?》

「十分過ぎるくらいですけど…」

犯人を確保した詳細をアルはゲンヤに報告をするとギンガが捕まった事は処罰ものだと言ひ渡される

犯人確保の功績から差し引いた結果を聞いたアルは額に手を当てながらため息をつく

「まあ、これは父親としての意見だがGINGAに怪我が無くて良かったと思う

ありがとうな」

「あいつが諦めなかったからだ：俺は何もしちゃいない」

陸士108番隊の隊長ではなくGINGAの父親として礼を述べるゲンヤにアルは手を動かして答えるとGINGAの元へ歩きだした

独断行動をしたGINGAは犯人尋問や現場搜索から外され一人、途方にくれていた

「GINGA、何をしてんだ？」

「っ！ラーゼンハルグ一尉：隊長はなんて？」

「俺が減給、それだけだ」

「それだけってそんな軽い訳じゃないですか！？」

後ろから話しかけられたGINGAはパツと振り返り慌てて敬礼をする
と不安そうに質問をした

アルは肩をすくめながら答えるがGINGAは処分としてあり得ないと
否定をする

「軽い言うな、減給だぞ？今月ピンチなのになあ…」

「そうではなく、一步間違えれば犯罪者を逃がすかもしれないミス
をしたんですよ！？」

いくらなんでも甘過ぎです」

「お前が独断行動をしたのは俺が奇襲のために姿を消したからだろ？
なら作戦の詳細を説明してない俺の責任だ、気にすることはない、
違うか？」

「気にしないなんて私は…出来ません…お願いです、ラーゼンハル
グ一尉から処罰をお願いします！でなければ気がすみません…」

「わかった…それで気が済むなら下してやる」

「ありがとうございます」

腕組みをしながらギンガの処罰がない事を説明をしていくアル

しかし罪の意識があるギンガには無罪放免という判断が納得できず
処罰をアルに頼み込む

仕方なさそうにため息をついたアルは腕組みをしながら頷くとギン
ガは小さく礼を言った

「一つ言っておく…これは一度下されたら俺は変更しない、良いな
？」

「はい、構いません…お願いします」

「ギンガ・ナカジマは、今より…俺をラーゼンハルグ一尉と呼ぶ事
を禁止する

俺の事はアルと呼ぶように」

「えっ！？あ、あの！！」「変えないといった筈だ…俺は処罰とかは苦手だからな…これで十分だろ」

注意事項をギンガに伝えてから確認をとるアル
緊張を浮かべてギンガは頷き、処罰を待った

そして遂にアルの処罰が下された、しかしそれは処罰とは程遠い内容であった

呆気にとられているギンガにアルは面倒そうにしながら答えると、
欠伸をしながら立ち去ろうとギンガに背中を向けた

「あ、待って下さいラーゼンハルグ一尉！」

「……………」

「うう…ア、アルさん！」

「ん、どした？」

立ち去ろうとするアルにギンガはラーゼンハルグと呼びかけるが、
アルは止まらずに歩いていき仕方なくギンガはアルと呼べば直ぐに
足を止めるアル

「去年のミッド航空火災で私を助けてくれたのはアルさん、ですよ
ね？」

「ああ、そうだ」

「どうして何も言ってくれなかったんですか？」

私はスバルの事ばかり気にしてお礼も言えなかったんですよ…」

「言う必要がないと思ってな
そのうち諦めるかなって思ってたら全然諦めなくてな、困った、困った」

振り向いたアルにギンガは聞いたかった事を問いかけると、簡単に答えは返ってきた

自分の溜め込んでいたものを吐き出していくギンガにアルはからかうように肩をすくめて苦笑をする

「簡単に諦められる訳ありません！私は貴方のような魔導士になりたいから！

それに諦めない事を教えたのはアルさんですよ、だからこれからよろしくお願いします！」

（はあ…：こう真面目に言われたら付き合わなきゃなんか悪い気がする…）「わかったよ、俺で良いなら面倒見てやるよ
改めてよろしくな、ギンガ」

拳を握りながらギンガは自分の気持ちを告げて頭を下げる

まっすぐなギンガにアルはため息をついてから額に手を当てると、根気負けをしスッと手を差し出す

差し出された手をギンガは握ると満開の笑みを浮かべた、それは彼女がアルの部下になってから初めて見せた表情だった

それから翌日、陸士108番隊がオフィスでデスクワークに励む中でアルはただ一人、中庭の木の上で寝ていた時だった

「全く、やっぱりサボってるんだから…せい!!」

「グヘハっ!?!」

アルを探しに来たギンガはため息をついてから木の根本に近づきいつもの様に木の幹を思いっきり殴りつける

すると木の上で寝ていたアルは衝撃により落ちてカエルのような悲鳴をあげる

「起きましたか? アルさん」

「お前さ、俺みたいな魔導士になりたいとか言ってるんでこんな事が出来るんだよ…」

「それとこれとは話しが別です、アルさんのサボりは無くすように言われてるのでじゃあオフィスに行きますよ…あれ?」

「フハハハ! 誰が捕まるかよ!!」

悔しかった追ってこいや!!!!」

「もう! 待って下さい!! アルさん!!!!」

腰を打って痛がっているアルを腰に手を当てて見ながらギンガは問

いかける

腰を擦りながらアルはギンガにジト目で見れば人差し指を立ててギンガはアルに説明をして、オフィスへと連れて行こうとするが既にアルの姿は遠く彼方へと走って逃げていた

挑発して逃げていくアルにギンガは急いで追いかけていく

この行動は後に陸士108番隊で恒例行事になるのはもう少し後の話であった

「っと言う訳よ」

「アレ？写真はいつ撮ったの？」

「写真はアルさんとわかりあえた時にイーグルが撮ってくれたわ今思えばイーグルが写真を撮りだしたのはあの時かしら…そうでしたよね？ア、ル…さん？」

話を終えたギンガにスバルが不思議そうに質問をすると考え込む様に体勢で、ギンガは思い出してアルに聞こうとするとそこにアルの姿はなかった

「あ、書き置きがある『疲れたから帰る、後はヨロ！byアルフィリオス』だそうです…」

「…スバル、ティアナ少し作業しててくれる？連れ戻してくるから…」

「は、はい…」

残された書き置きをティアナが読み上げると部屋にブチリという音が聞こえ、ギンガがゆらりと立ち上がる

口調は普通ではあるがその背後には般若の姿が浮かび上がり、スバルとティアナは圧倒され頷くしかなかった

そしてギンガが部屋を出ていった後、機動六課に局地的な地震が発生したのと断末魔が響き渡ったのは言うまでもなかった

EP. G.: 始まりの日（後書き）

どうも、えのきです

チャージして書いたらこんな風になりました、みたいなノリです

だけど5日はかかりすぎかなと反省してます

英気を養い、今日から頑張っていきます！

ちなみに今回のBGMはギンガルトの※. 1がOPと※. 2がED
Dとなります

まだ本編が終わってないのに書いて良いのかなと考えますがよろしく
お願いします

EP. G.: 穏やかな日々 (前書き)

ギンガ祭、第二段！

ようやく仕上がりました！

スランプでした、そして今も…

まあそんなこんなな作品ですが良かったら見てください

EP・G：穏やかな日々

それはとある昼下がりの事、陸士108番隊の前で持ち前のバイクに寄りかかる男がいた、アルフィリオス・ラーゼンハルグその人であった

まるで何かを待つように時計を見てから空を見上げた、なんでこんな事になったんだろうと…

話しは数分前に遡る…

「休暇？ギンガに？」

「そうだ、そろそろギンガも部隊に慣れたろうから少し休ませてやろうと思ってな」

「まあ確かに働きすぎだしなあ…良いんじゃないッスか？」

部隊長室に呼ばれたアルはゲンヤからの呼び出しの内容に首を傾げて聞く

ゲンヤは最近のギンガの様子を見ていい頃合いかと思ったと説明をするとアルもそれに納得をした

ギンガとわかりあってからわかったが仕事の力の入れ具合は並の陸

士魔導士を遥かに上回っていて、少し頑張り過ぎじゃないかと思うくらいだった

「ただな、少し問題があるんだ」

「問題？」

「ギンガに聞いたんだがあまり遊び歩く事はしなかったらしいだから休日の過ごし方がわからないと言ってたんだ」

「アイツ、14だろ！？年頃のカキとしてどうなんだよ…」

しかしゲンヤは難しそうに唸りながらアルに問題があるという

それは…ギンガの休日の過ごし方だった

全く出かけていないと聞いてアルは思わずツツコミをいれてしまった

「人の娘になんつう言いぐさだ

アル：お前さん、ギンガと外出してくれないか？」

「それは親公認のデートツスか？」

「違う…遊びにいくだけだ！

まあ、もう隊長権限で休暇届け出しといたから行くしかないんだがな…これでお前の給料を合法的に切れるな」

「ゲンヤさん、マジ鬼！！」

アルの言葉に眉間に皺をよせてゲンヤは言うと、ギンガを遊びに連

れて行って欲しいと頼み込む

呼び出した本当の意味を知ったアルは少し嫌味を言うように言う

ゲンヤは珍しく口調を荒くするが思い出したように休暇届けをアルに突き付けてからしてやったりという表情で言う、休暇を取る間は業務をしないため当然だが給料は入らない

それに気づいたアルは、減給を言い渡されるよりエグいやり方に思わず叫んだ

「にしても、ギンガの奴…遅いな」

「お、お待たせしました！」

「おっ、ようやく来たか」

ゲンヤとのやりとりを思い返して目を細めるアルは、未だに来てないギンガの事を呟くとちょうど良いタイミングでギンガの声が聞こえた

視線を正面に向けると黒のインナーに白を基調とした上着を纏い、白いロングスカートでいつものリボンをしたギンガが走ってきた

少し息を切らすギンガをアルはジッと見つめていた

「どうしたんですか？ 黙りこんだりして」

「出かけることがないって割には私服はちゃんと気をつけてんだ
なと思ってな」

「当たり前です、これは女の子として当然ですからね」

「まあそれは置いて、ほれ：早く乗らないと置いてくぞ」

黙ったアルにギンガは不思議そうに問いかけるとアルは予想してな
かったと、頭をかきながら答える

腰に手を当ててギンガはアルに説教をするかのように言い胸を張る、
しかしアルは特に気にせずギンガにバイクのヘルメットを渡す

「えっ！？ バイクなんですか？」

「ああ、車はまだ取ってないからな」

「：バイクだから仕方なくその密着とかしますけど：変なことを考
えないでくださいね？／／／」

渡されたバイクのヘルメットを見て、ギンガは凄く嫌そうな顔をする
わがまま言うなどアルが諭してなんとか納得したギンガは頬を染め
て忠告をする

「心配するな、お前の胸じゃ間違ってもならないから」

「っ！！」

「がはっ!?! ごめん、ごめんなさい! 殴るのは勘弁して!」

「ううゝ…次にセクハラしたら本気で殴りますからね」

面倒そうに手をパタパタと動かしてアルは答える

その瞬間ギンガの鋭い正拳が鳩尾に打ち込まれ体勢が崩れたところにたたみかけるようにギンガは無言で殴り続ける

なんとかギンガの猛攻から逃れたアルは間髪入れずに土下座をし許しを請う

殴り足りないギンガは不満そうな声を出し拳を握りしめながらも許すと脅しをかけてからバイクに乗る

「今のが本気じゃなかったのか全くとん「何か?」なんでもないです…」

「大体、アルさんはデリカシーというものを知って下さい

誘う時だってわざわざ皆の前で言うし…どれだけ恥ずかしかったか

…／／／

「そいつは悪かった、だからあんまり怒らんでくれ」

「恥をかかせてくれた分、ちゃんと楽しませてくださいね?」

ギンガの言葉にアルは目を細めながら呟くが、ちゃんと聞こえていたらしくギンガに迫力のある声がアルの耳に届く

ギンガは先ほど起こった事を思い返してから文句を言い出す、それ

はアルがゲンヤから休暇を貰って直ぐだった：

『GINGA、いるか？』

『何ですか？アルさん』

『デートしようぜ』

『はい！？』

という流れでGINGAはアルに連れ出される事になり、思い出す度に頬を赤くするGINGAだった

アルは手を縦にして謝るとバイクに股がりエンジンをかける

GINGAは仕方なさそうにため息をつきアルの腰に手を回してつくとうinkenをして声をかける

アルは親指を立てて任せろ言わんばかりにするとバイクを走らせてクラナガンへと向かい走り出した

S I D E ..アルフィリオス

クラナガンに到着した俺達は手始めにゲームセンターに行く事にした

正直な話だが俺も休日遊びに行くことはないし、GINGAくらいの

頃は陸士魔導士になるまでは魔法漬けの毎日だったため出歩く事もなかった

まあ一般的に遊ぶと言ったところしか思いつかないだろうな

「す、凄いですね…こんなに賑やかな場所なんですか？」

「娯楽施設だからな…まあ習うより慣れろだ適当なのやってみようぜ」

「はい、じゃあ太鼓の鉄人っていうのしません？」

ゲームセンターの騒ぎっぷりにギンガは咄然としながら見渡すと、俺は頭を軽く叩いてから実際にプレイをしようと提案をする

俺の言葉にギンガは頷くと近くにあったゲームを差しやってきた、太鼓の鉄人…いわゆる音ゲーだな

譜面で指示された部分を叩いて上手くできるかを競うらしい、普段音楽とか触れてないのに大丈夫なのか？コイツ…

「良いけど、最初は慣れる為に難易度は低めでいくぞ？」

「それは当然ですよ、初めてなんですからそうじゃないとマトモに出来ませんからね」

コインを入れてゲームを立ち上げ先ずは難易度を設定するが、初心者のギンガにも出来るように低く設定するといよいよ、ゲーム開始だ
ん、結果？…うん、圧倒的ってのはこの事だな

俺が高得点に対して、ギンガのは気の毒な点数だった

「こうはつきり差がでると落ち込む…でもいつか完勝するんだから！」

意気込みをするギンガに俺の頭に次はコテンパンにされる嫌な予感が走った

太鼓の鉄人をやめた俺とギンガは次のゲームに移った

「次はコイツにするか」

「これって前にテレビで見ました、エアホッケーですよね？」

「ああ、ルールが単純だから良いだろう

とりあえずこれで打ち返して相手の陣地にあるゴールに入れたら得点だ

多くはいれば勝ち、わかりやすいだろ？」

「確かに、必要なのは反射神経とスピードですね」

俺がギンガに話しながら手を置いたのはエアホッケーの台だった
ギンガも知っていたが一応のルールを確認する

ギンガは楽しそうに準備運動をしながらコインをいれて台につく、
俺も同じように台につくと開始のベルがなった

「先ずは俺からだな、そりゃ！」

「行きますよ、はい！」

「なかなか速いな、よつと！」

「なんの、せい！」

ベルと同時に噴出された空気により円盤がホバリングし始める

俺はそれを壁に1バウンドさせてギンガの所に放つ

勢いのついた円盤をギンガはなんなく弾き返す、しかも少しだけスピードが上がっていた

それでも返せるスピードだったため俺も少しスピードを上げて打ち返す

ギンガもスピードが上がった事がわかったのか更にスピードを上げてきた、そして…

「だらあ!!！」

「えいやあ!!！」

「いい加減、しくれよ! ギンガ!!！」

「アルさんこそ、普段やる気なくせ、に! なんで、こんな時だけやる気出してるんですか!？」

スピードを互いに上げていったため俺達は、ゲームであることを忘れ全力でラリーを続けた

回数が続くと不思議な事に中断する気がなくなっていき、意地でも続けていくという思考に切り替わる

互いに文句を言いながらもラリーはスピードを上げていく

「部下なんだから、上司を立てる名目でミスれよ!!」

「そんな無駄な労力を使うくらいなら、アルさんが上司として、譲るくらいの器量を見せたらどうなんです、かっ!!」

ラリーも口喧嘩もヒートアップしていき、いつしか周りにはギャラリーが出来、どちらが先に落とすか賭けが行われた

「オウルアツ!!」

「つく、しまった!!」

「貰った!!」

「なんの、取らせません! せいや!!」

そんな事を知らずに俺とギンガは打ち続けるが途中でチャンスは訪れた

勢い良く放たれたパックはギンガの不意をついた、しかしギンガは持ち前の反射神経で辛くも返すがパックは俺にとって手頃な位置に飛び俺はここぞとばかりにふりかぶって、パックを打った

だがギンガも意地で弾道に食らいつくと思いつき打ち返す、その瞬間：急な力とフィールドにある浮力のせいでパックは宙を舞い、あろうことか俺の顔面目掛けて飛んできた

「ぐぼあ!!?」

ガツーン!!という鈍い音と共に俺の身体は地面に倒れた…心配するギンガの声がやけに遠くに聞こえるのは多分、俺の意識が途切れかけているからだろうな…そう思いながら俺は意識を手放した

――――

「ん…あれ？」

「あ…目が覚めました？」

「…目の前にギンガのドアップがある…なんてあく「殴りますよ?」…すみませんでした」

「全くせっかく介抱してあげたのに…なんでそうなるんですか?」
アルが目を開けると青い空と自分を見下ろすギンガの姿が見えた、
体勢からして膝枕だとわかった

しかし大げさに反応するのも気恥ずかしいため軽口を叩くと、ギンガはスッと握り拳を見せて答え素直に謝るしかなかった

一方ギンガは心配したのに礼も言わないアルに少し苛立ちながら呟いた

「んで今更だけど俺はどうなったんだ？」

「パックが顔面に激突して吹き飛んだ上で気絶しました…すみません」

「そうか、まあ大事にならなくて良かったな…ギンガ、悪かったな重かったろ？」

「いえその大丈夫です…」

ギンガの呟きを無視しながらアルは意識を失った後の事を聞く、言いにくそうにしながらも説明をするギンガ

そして最後に申し訳なさそうに頭を下げ、謝る

アルは苦笑を浮かべながら気にするなと答えたと寝ていた身体を起き上がらせ、周りを見てゲームセンターから移動してきた事を把握すると頭を下げ、礼を言う

「さて、いい時間だし…飯でも食いにいくか」

「はい、良いと思います」

「んじゃ手頃な店に入るとするか」

大きく伸びをしたアルは時計を見て頷くと、昼食を取ろうと提案するギンガその提案に大いに了承をし移動を始めた

「ここは食堂ですか？牛野屋？」

「そ、牛井専門店で安くて早くて美味しいが目標の店だ…俺はあんまし良い所は知らないんだよな、ここで勘弁してくれ」

「いえ、豪華な場所よりこちらの方が気兼ねしなくて良いかもしれませんね」

ギンガは目の前にある看板を見て小首を傾げた、アルは指を立てて説明をしていくが頭を掻きながら申し訳なさそうに言う

微笑を浮かべながらギンガは気にしなくて良いと答え、二人は店の中へと入る事にした

「いらっしやいませ！何名様ですか？」

「二人だ」

「それでは好きな席にお座り下さい」

店に入ると店員の挨拶をし、人数を問いかけてきたアルがそれに答えると店員は手を席の方に向けてから指示をしてくる

二人は窓際のテーブル席に座ると店員が水を運んできて注文が決まり次第呼んで下さいと言いつ残し、持ち場に戻っていく

「さてと…どれにするかな」

「牛丼と言ってもたくさん種類があるんですね…迷います」

「よし、俺は牛丼のメガ盛りだな、ギンガはどうする？」

メニューを手に二人はそれぞれに選んでいくアルはオーソドックスな牛丼を大盛りより更に多いメガ盛りで頼みギンガに注文を聞いた

「なら私は…テラ盛りでお願いします！」

「えっ？テラって何」

「テラはギガの上の単位ですよ？ほらここに張り紙があるじゃないですか」

ギンガから聞いた言葉にアルは自分の耳を疑い、思わずギンガに聞き返す

不思議そうに俺を見ながらギンガは自分の後ろにあるポスターを指で指す

そこには…『来れ！猛者！テラ盛り、登場！！』と書かれていた

（無理じゃないのか？…）「ギンガ、食えなかったら寄越して良いからな？」

「大丈夫ですよ、そんなに甘く見ないで下さい」

「お、お待たせしました、テラ盛りとメガ盛りです」

心配そうにギンガを見ながらアルは声をかけると笑って返すギンガそしてとうとう二人の所に牛丼が持ってこられた

ドン！という効果音と共に中華料理などに使われるような大皿が置かれ山のようなご飯とご飯を覆うように具が乗せられていた

（やり過ぎだろ！？） 「なあギン「いただきます」って食うのかい
！！」

「だから、いけるって言ってるじゃないですか、ん〜♪美味しい」

「まあ良いか…」（とりあえず残した時に食べられるように空きは
用意しとくか）

内心焦りながらアルはギンガに止めるように宣告しようとするが、
その前にギンガは箸をつけて食べていた

アルの心配を他所に牛丼を食べていくギンガ、ハアとため息をつき
ながらアルは残した時の事を考えながらテラ盛りと比べて並程度に
しか見えないメガ盛りの牛丼を食べだす

――数分後――

「ふう…食べた、食べた」

「あの…アルさん」

「どうした？やっぱり食べきれな「おかわりしても良いですか？」
っは？おかわり？」

「はい、食べ終わりましたけどまだ足りなくて…良いですか？」

メガ盛りを食べ終わったアルは満足したように一息つくど、ギンガがおずおずと話しかけてきた

やれやれとため息を吐いてからアルはギンガに言おうとしたが、次に出された言葉に啞然とした

ギンガはさも当然のように答えると皿を見せた、皿にはご飯粒すらない綺麗なものだった

固まるアルを無視してギンガは店員を呼び出しおかわりを頼んだ：その後もまるで掃除機で吸い込まれるように無くなる牛丼をアルは見る事になった

「はあ〜♪お腹一杯です、ご馳走様でしたアルさん」

「ああそうだな…ギンガ、一つ良いか？」

「別に構いませんよ、何かありました？」

「んじゃちよいと失礼して」

食べ終わったギンガは満足そうにしながら言うどアルは何処か疲れたようにしながら、ギンガに確認をとる

頭に？を浮かべながらギンガは頷くとアルはおもむろにギンガの腹

に手を当てた

「ひゃっ！？／＼／＼」

（この腹の何処に入るんだ？不思議だ）「……………」

「なっ、ななな何するんですか！？／＼／＼」

「ぶげはあっ！！？」

いきなり触られた事により短い悲鳴を上げるギンガ、アルはそれに構わず撫で回しているとギンガの体がわなわなと震えだす

そして渾身の力を込めたボディブローがアルの腹部に叩き込まれた

「アルさんが…そんな事をするはずないって信じてたのに…」

「ギ、ギンガ？」

「この変態！エッチ！スケベ！大馬鹿っー！！」

「げは！ぶほ！ぐへ！ごふぁ！！」

拳を握りしめてギンガは呟いていく、放たれる怒気によりアルは後退りをする

しかし、その前にギンガにつかまり、手始めに右手のビンタから始まり膝蹴り、コークスクリューブロー、最後に左手によるガゼルパンチが打ち込まれた

しかし、ギンガの怒りはそれだけでは治まらず日がくれようとしたクラナガンに謎の悲鳴が上がったのは言うまでもなかった

おまけ

「アル、昨日の休日はどうだったんだ、ゆっくり休めたか？」

「休暇？…そんなのあったのか、悪い…全然覚えてないんだ」

「どうした頭をおさえて、なんならナカジマに聞いてみたらどうだ？」

「さっき聞いてみたんだがまるで猫のような威嚇をしてどっか行っちゃったんだよな…なんでだ？」

「まあとりあえずなんとなくお前が悪いと思うから謝っとけよ」

「ラッド、それ酷くない!？」

EP・G：穏やかな日々（後書き）

どもども、えのきです

今までアルさんといえば一話につき必ず名言っぽい言葉とか言っていた気がします

だけど今回はそれを無くしてギャグを重視してみました
受けたら嬉しいなと思います

そういえば、この小説がもう少しで50話を越えようとしています、
記念として今までアルが言ってきた名言もしくは迷言を募集します

数は問いません、皆さんが良いと思った台詞や面白かった台詞を教えてくださいと嬉しいです

発表は50話を超えた時にします、ではでは

EP. G.：「終わる日と始まる日」 (前書き)

ギンガ祭、最終回です！

スランプに負けずに頑張ります

EP・G:「終わる日と始まる日」

SIDE:ギンガ

「ふわぁ…朝か、さて今日も頑張らないと！」

鳥のさえずりと窓から入る日差しにより私は目を覚ました

いつも通りに起きてから鏡を見ながらリボンを結ぶ

「よし！今日もいい感じ」

リボンの結び具合を見てから、うんと頷いて制服を着て部屋の扉に手をかける

そこで少しいつも開ける感じとは違う事に気づいた、多分それは今日が特別な日だからだ…私、ギンガ・ナカジマは今日で20歳になりました

レリック事件ことJS事件から三年が過ぎてからミッドチルダによりやく平穏が訪れました

事件の解決に一番、貢献した機動六課はすでに解散し皆はそれぞれの場所に配属となった、私とアルさんは陸士108番隊に戻りレキ君は自然保護部隊に移った

セレスは初めはアルさんの元にくるかと思ったけど、アルさんが戦いからは離したいと言い、聖王教会へと預けられ今はシスター見習いとして働いている

たくさん友達が出来たとこの前の通信をした時に教えてくれた

他にも様々な人たちと連絡をとっている

レキ君が移った自然保護部隊のキャロちゃんからは1日にあった事やレキ君との事を教えてもらう

六課時代からラブラブな二人だったけど自然保護部隊に配属になったから、更にラブラブが増した様で聞いていてこちらが恥ずかしくなる

同じ部隊に配属のエリオ君はと言うとJS事件でわかりあったルーテシアと最近の良い仲になっているらしい

ルーテシアといえば、厚生施設では何処か影のある娘だったけど今じゃアルさんに匹敵するくらいのハイテンションな娘になった

エリオ君いわく「あれが本来のルーテシアなんですよ」と言ってた、うん：こっちもレキ君達に負けないくらいにラブラブだと思う

年少組の恋愛談を聞いているとスバル達が心配になってくる：仕事での活躍は聞くけど色恋は全く聞かない

我が妹の将来が心配だったりする

軽くため息をついて下に降りていくと良い匂いが漂ってきた：あれ

？今日は私が当番なのに…？

そう思いながら私はリビングに入る

「…うん、いい味…あ、ギンガおはよう」

「おはよう、ディエチ…今日は私が朝ご飯を作るはずよね？」

「うん、でもお父さんから今日はギンガの誕生日だって聞いたから、私が勝手に変わったの…いつもご飯を作ってくれてるお礼として」

リビングに入ると料理の味見をしているエプロン姿のディエチがいた
挨拶をした私は少し不安気に問いかけるとディエチは詳細を教えてくれた

ディエチ、いやナンバーズと呼ばれた戦闘機人達はJS事件の後、
厚生施設で研修をした後で社会に出た

身寄りのない彼女達をお父さんことゲンヤ・ナカジマ三佐が養子と
して引き取った
最初は慣れなかった彼女達だけど今ではずっと昔からいるような家族になった

ナカジマの性を名乗ってからは各々がそれぞれの場所で働いている、
時空管理局や聖王教会…ディエチは今、栄養士を目指しているらしい
彼女達がここまで変わったのは多分あの人の影響なんだろうな、と
私は考える

「チンク姉たち、今日は早めに帰るからって言ってたからギンガも

早く帰ってきてね？

ご馳走を作って待ってるから」

「うん、その時にはもう一人増えてるかも知れないから」

「あ、うん…わかった」

私が出発しようとした時にディエチは思い出したように言う、私は頷いてから返す

一人増えると聞いてディエチは誰かわかったのか笑顔を浮かべた、そんなにわかりやすいかな？私が連れてくる相手…

陸士108番隊につくと行き交う隊員達から祝いの言葉をもらう、嬉しいけど少し恥ずかしいと思う…

「おはよう、ナカジマ」

「カルタス主任！おはようございます」

自分のデスクにつくとカルタス主任が話しかけてきた

「今日はめでたい日だろ？皆で何か食いにいくか？」

「すみません、今日は早く帰るように言われていますので」

「そっか、先約がいるなら仕方ないな
悪かったな」

「いえ気にしないでください」

カルタス主任は皆で食事に行かないかと誘ってくれたが、今朝の事を思い出して私は頭を下げて断る

苦笑をしながらカルタス主任は自分のデスクへと戻っていく

私は昨日までしていた事を思い出しながらふと後ろにあるデスクに目を向ける

乱雑に置かれた書類やファイル、そして居眠りするために使うアイマスクが置かれたデスク、そこには本来寝ているべき人はいない：

三ヶ月くらい前の事だ、密輸を取りしきる犯罪集団のアジトがある次元世界にあると判明しアルさんは、逮捕のために出かけていた

（そんなにかからないって言ってたのにもう三ヶ月：未だに音信不通、大丈夫かな？アルさん）

私はアルさんを心配しながら三ヶ月前の事を思い出す：

――三ヶ月前――

『んじゃ、行ってくるからよ』

『はい…その…』

『心配しすぎだ、確かに行き帰りしたら一ヶ月はかかるけど、今さら密輸集団に手こずるかよ
長くても二ヶ月だ、誕生日には間に合わせる』

『わかりました、気をつけて下さいね』

出発直前のアルさんは私に挨拶をしにきてくれた

大規模な組織と聞いていたため私は不安を隠せずにいるとため息をついてから、アルさんは頭を撫でてから言葉をかけてくれた

その言葉に私は不安を和らぐのを感じながら、アルさんの背中を見送った

――
《じゃあ、まだ帰って来てないんだね…しょうがないなあアルは…》

「そんなに怒らないでセレス、もう慣れたから」

昼休みになった時にセレスが通信を入れてきた、どうやらアルさんに用事があったようだけど、今はいい事を伝えたとセレスは画面の向こうで憤慨していた

セレスに苦笑を浮かべながら私はなだめる様に言うがセレスはビシッとこちらに指をさしてくる

《甘いよ！いくら任務でも無事かどうかも教えてくれないなんて間

違ってるよ!!!》

「そう、かしら？」

《ギンガさんはアルにわがまま言っても良いと思うよ？
溜め込んでたら大事な事も言えないかもしれないし》

「セレス…」

圧倒されるような雰囲気 of セレスに押されながら私は答えると、仕方なさそうにため息をつくセレスに返す言葉が見つからなかった

確かに私はアルさんに自分のわがまを押した事はない、アルさんに振る舞われるのもあるが、多分心の何処かでアルさんに意見をしたくないと思っているんだと思う

失礼な事を言って失望させたくない、アルさんがそんな事をしないうと思っっているけど確証はない…そんな風に考えているから私は溜め込んでしまうんだと自己嫌悪した

その後、セレスからアルさんが帰ってきたら説教するようになると言われ、私はデスクワークに戻った

「あれ？もうこんな時間？」

目が疲れてもみほぐしていると辺りがオレンジ色に包まれていることに気づき、夕方なんだとようやく理解をした、そこで疲れが一気に身体にのしかかる

いつもとおんなじペースでしてたのになんでだろ？…そっか、アルさんがサボってないからだ

いつもならアルさんが居なくなって探しに行くから、それが身体をほぐすのに丁度良く
また中々見つからないから終わったら軽く休憩したり…

今、考えるとアルさんは私の為にわざとらしくサボってたのかと考えてしまう…

そんな都合の良い考えをしてしまうのは私がアルさんの事を好きだからだ

きっかけは航空火災で助けられてから確証したのは、陸士108番隊に配属されてアルさんが助けてくれた人だとわかった時から…

そう考えると自分がどれほどあの人が好きなのかわかる、もはやアルさん無しでは自分が成り立たない程に…

会えない間、愛は育むものだと言くが育み過ぎるのも問題だ

この三ヶ月の間に育った気持ちはとても苦しく、気が狂いそうになる

「…バカ」

デスクに突っ伏して私は呟く、そうしないとダメになってしまいそうだから

いつまでも帰ってこないあの人にむけて

「…アルさんの…バカ」

いつも思わせ振りの態度で人の心を掻き乱すあの人にむけて

「アルさんの、大馬鹿っ!」

「馬鹿馬鹿、言い過ぎだ…いくらなんでも傷つくぞ」

心を内をさらけだすように叫んだ時に、後ろから呆れたような声がした

それはいつも聞いていたのにどこか懐かしい気がする声だった、私は突っ伏していた身体を起こして声のした後ろに身体を向ける

今まで誰も座る事のなかった椅子にふてぶてしく座り、私を細目で見るとアルさんの姿があった

姿は三ヶ月前から変化はなかった、しかし久しぶりに見るその姿に私は言葉を無くした

「まあ悪口言いたくなる気はわからんでもないけどな…まあちゃんと勘弁してくれ」

「っ!？」

「っと、どうした? ギンガ?」

私が言葉を放つ前にアルさんは頭を掻きながら苦笑をして軽く謝ってくる

その時、私は無意識に身体を動かしアルの胸に飛び込んでいた……戸惑うアルさんの声が聞こえたけど、ダメだ……もう抑えが、きかない

「軽く言わないで下さい！私がどれだけ心配したと思ってるんですか！？」

ずっと連絡しないで、何かあったんじゃないかって……不安でたまらなかったのに……それなのに」

「悪かったよ……連絡を入れたかったけど犯罪集団の尋問に手間取ってな……本当に悪い」

「良いです、少し取り乱しましたけどもう大丈夫です……ただちょっとわがまま言っても良いですか？」

「わがまま？……心配かけた手前、断んのもなんだしなわかった、出来る事なら聞く」

溢れだした想いは留まる事を知らずにアルさんにぶつけられたいい終えた私を優しくアルさんは抱きしめるとすまなそうに事情を話してくれた

正直、連絡をしなかった理由なんてどうでも良かった、ただ帰って来てくれたのならそれで良かった

その時、私はセレスの言葉を思い出してアルさんに言ってみた

アルさんはいきなりの事に面をくらってたが快く了承してくれた……自分で言うのもなんだけど、今から言う初めてのわがままは凄く身勝手なものだと思う

「私を…アルさんの恋人にしてください」

「ギ、ギンガ!? 何いって」

「アルさんと離れて自分がどれだけアルさんに依存してたか、わかりました…：どれだけ好きなのかも…：だからちゃんと帰ってきて欲しいって考えたら恋人になれば良いと思いました」

私の言葉に戸惑うアルさんを後目に私はアルさんの胸に額を当てる…：恥ずかしいから

今さらながら言った事を後悔した、こんな相手の意思を無視するなんて嫌な女だ…

嫌われたらどうしよう、呆れらるたらどうしよう

先ほどから私の頭の中はその言葉で溢れていた、いっすすっぱり叩き斬って欲しい…：アルさんの沈黙が痛い…

「とんでもない事を言う奴だな、お前は…」

「っ!…」

「けど、そのとんでもない事をいう奴に断る理由がない俺もとんでもないのかね…」

「アル、さん…」

アルさんの呆れたような口調が耳に入ると私は身体が強ばるのを感じ

じる

しかし次の言葉でその硬直は一気に解けて、言葉を詰まらせながらもアルさんを見上げる

「公私問わずお前に世話をかけるが、よろしくな」

「はい！ビシビシ行きます」

いつも通りに話すアルさんに私は安堵の息をもらしてから笑顔で応える

「一応言うが公私混同はすんなよ？」

「アルさんが言うんですか？」

「俺はやれば出来る子だから」

「どの口でいうんですか」

まるで指示するように言うアルさんに私はムツとして返すと、ドヤ顔を浮かべてアルさんは返す
呆れたような口調で私はアルさんの胸に再び顔を押し付ける

「ギンガ」

「はい？」

「誕生日おめでとう」

「ありがとうございます」

私の頭の上から優しいアルさんの声が聞こえ、私は喜びながら返す

「アルさん」

「ん？」

「好きです」

「俺もだ」

短い言葉しかないけど確かに伝わる気持ちがある、私はそれを確かめながらアルさんと抱き合った

その後、ナカジマ家に戻り皆に報告をするとやっとかぁと言われた普段からどう見られてたか良くわかり、そしてお父さんとアルさんの壮絶な殴り合いが始まった

私、ギンガ・ナカジマは今日で20歳となりアルさんの恋人になりました

EP・G:「終わる日と始まる日」(後書き)

どうもえのきです！

ようやくキャラ祭が終わりました：なんかちよつとした達成感が芽生えました

ギンガ祭の最後も告白で終わりましたがギンガルートでは違う感じします

余談ですがアルとギンガは付き合っても普段と変わりません
長年パートナーをやったからでしょうか、あまり変わらない気がします

前回に引き続きアルの名言、迷言を募集します

皆様が気に入った言葉、笑った言葉をドシドシ教えて下さい！

新規、飛び込み、なんでもござれです、結果は50話で発表します
それではよろしくお願いします！！

EP28：鷹の爪、隼の嘴、鷲の翼（前書き）

今回でオリジナルデバイスの秘密を紹介します
いつも通りに楽しんでくれたら嬉しいです

EP28..鷹の爪、隼の嘴、鷲の翼

時空管理局本部についたアルは、一緒に来たはやつ達と別れて技術部に向かっていた

「えっとガドルフのじいさんに会うには下に行かないとな…面倒だな」

技術部の前まで来たアルはそのまま歩いて通り過ぎると通路のつきあたりまで歩き、ポケットからカードを取り出し目の前の壁にかざすると壁が横にスライドし更に奥に行けるようになった

アルは相変わらぬ仕掛けだと呆れながら通路に足を踏み入れるとスライドした壁が元に戻り来た通路を塞いだ

「さてとイーグル、里帰りだが気分はどうだ？」

「どうもなにも普通ですが」

「まあ、そうだよな…」

長い道のりに飽きたアルはイーグルに他愛のない話しを振る、しかし返ってきたのは特に面白くない回答に乾いた笑みを浮かべた

そして通路を歩いた先に一つの扉とコンソールパネルがあったアルは再びカードを取り出すとパネルにある差し込み口に入れる

カードを入れると青いランプが点灯し扉が開く、アルがそこに足を踏み入れると足元に魔方陣が展開しアルの身体はその魔方陣が放つ光に包まれて消えた

光に包まれたアルが次に現れた場所は薄暗い研究室だった

アルは迷わず奥に進むと白髪頭の老人が一人でモニターに向かい、
キーボードを打ち続けていた

「よう、ガドルフのじいさん
しぶとく生きてるか？」

「ん？お前さんか、相変わらずふてぶてしく生きてるみたいじゃな」

「お久しぶりです、マイスター」

「イーグルか、久しいのう、調子は良さそうじゃな」

アルはキーボードを打ち続けている老人に向けて皮肉混じりの言葉を
投げ掛けると、老人は手を止めて振り返ると面倒そうに目を細め
ながら悪態をつく

その後イーグルに挨拶をされるとまるで孫に接するかのような優しい
口調で返答をする

「オイコラ、ジジイ！

なんで俺と態度180。違うじゃねえか！！」

「イーグルはワシにとって孫のようなものお前さんと違って当たり前
前じゃろ？ほれ、なんか用があって来たんじゃろ？早く言え」

「このジジイ：まあいい：用件はイーグル本体の強化プランを持ってきた

至急、取りかかって欲しい」

「イーグルの？」

扱いが雲泥の差であることをアルは指摘するが、小馬鹿にするような言い方をして返すガドルフ

握り拳をつくりながら肩を震わせるが本来の目的のために抑えると、咳払いをしてから一枚のデータディスクをガドルフに突きつける

アルの口から発せられた言葉にガドルフは眉間に皺を寄せる

「今のイーグルに不満があるのか？」

「本体じゃないのもあるがアサルトホークに当たり負けした：奴を越えるには強化が必要だ」

「賛成しかねるな、今のままでも身体に負担をかける戦い方をしとるお前さんに更に強力な反動に耐えられるのか？」

「対策は練ってある：それを含めた強化プランだ、まずは見て判断してくれ」

ガドルフの鋭い視線がアルに突き刺さる、しかしアルは臆する事なく言うがガドルフの表情は晴れずにいた

イーグルの最大の長所は急加速によるステークの一撃である

しかしそれを行うには使用者に莫大なりリスクがある

それは物体が加速して何かにぶつかった時に発生する運動エネルギーをその身にすべて受け止めるからである

このリスクが無くせなかったためにイーグルの正式採用は無くなりプロジェクトは凍結された

ならば何故アルが普通にステークを放てるのか、それはアルのバリアジャケットは対衝撃用に特化しているためだからだ

しかし、いくら特化しようとしてフルシリンダーのような連続した衝撃に完全に耐える事は出来ない

現にフルシリンダーを使った際には身体は軋み、放った直後は動けずにいた

そのデメリットを知っているからこそガドルフはアルの提案を受け入れずに断った

だがアルは諦めずにいい続け仕方なくファイルを開くガドルフ

「…はつきり言えば子供じみたプランだな…イーグル本体の装甲強化、カートリッジの装填数の増強、ブレードの硬質化…そしてバリアジャケットの対衝撃魔法の重ねかけ

短所を補うのではなく長所を伸ばし加速と火力だけにつき込む、それで本当に強くなると思っとるのか？」

「短所を抑えたくらいじゃ勝てないくらいは承知済みだから最大の火力と最速の加速が必要なんだ」

「コイツは技術者として到底勧められる内容じゃない…魔力を上げた方が良いと思うがの」

「嫌味のつもりか？」

俺のリンカーコアはもう成長しないだから魔力ランクをあげるのは不可能だ、空戦魔導士には空中戦や射撃じゃかなわない、陸戦魔導士には接近戦では良くて中の上…

今までくぐり抜けた戦闘経験とイーグルの奇襲で生き延びてきた俺にはこれしか方法はない、これが俺の選択だ」

「魔導士を諦めたらという考えはないのかの？
それが賢いやり方じゃ」

アルから渡されたプランに目を通し終えた、ガドルフは鼻で笑うように返す

アルは必要な理由をのべるがガドルフの表情は変わらずに安全な方針を提案する

しかしアルはそれを苦笑をして否定し、自分の魔導士としての数値を述べていく

総合A Aと言っても本職と比べて見れば大した差は無いもので成長に見込みが無いのなら残りは戦術とデバイスの強化以外に勝率を上げる事は出来なかった、だからこそアルはこの強化プランを承諾して貰いたかった

しかしガドルフはアルに非情な決断を投げ掛けた

「それは賢いやり方なら俺は馬鹿のままで構わない！」

それに俺はまだガドルフ、あんたの意見を聞いていない！！」

「ふん、本当に馬鹿な男じゃな：しかしその馬鹿な要求、このガドルフ・バイゼンが受けてやろうか
最高のじゃじゃ馬を仕上げてやろう！」

「ありがたい、ただ他にもやって欲しい事がある」

「ここにあるヴァイスファルケンの強化プランじゃな？
構わんが誰が使うんだ？」

「レキに使わせようと思う：アイツなら可能だと思うからな」

ガドルフの意見にアルは迷う事なく答えるとガドルフに指をさして
問いかける

アルの言葉に鼻で笑うガドルフ、しかしその表情は先ほど違って
おりアルの強化プランを受け入れた

アルは一息ついてから礼を言うと言に更にガドルフへと頼み事をする、
それはレナが以前に使用していたデバイス、ヴァイスファルケンの
強化プランであった

イーグルのついでに了承をするが使い手がわからなかったガドルフ
はアルに問いかけると、レキに渡すという答えが返ってきた

「ならええが、他にもいろいろあるのう：まあいい、それは後々で
見ておくか：アルフィリオス、一つ伝えておく事がある」

「伝えておく事？なんだよ…」

「イーグルとホークについてお前さんには話して無いことがある…」

「なんだよ、話してない事って」

ヴァイスファルケンの事を知らせた後でガドルフは少し考えた後で話しだした

ガドルフからのいきなりの事にアルは戸惑いながらも聞き返す

「イーグルとホークには普通のデバイスとは違う鉱石を使っているんじゃないよ

その名前は【フラグメント】：準ロストログアに指定されるくらいじゃ」

「準ロストログアってなんだって、んなもんを使ってた？
まずそれがどういう代物なんだよ」

「単純に言えば、魔力の伝動率が高い鉱石じゃ、付加をすれば無駄なく伝わり威力があがる代物でな
更に言えば魔力変換資質が使えるなら【フラグメント】の特性も変化するという優れものじゃない」

ガドルフはアルに話していくとモニターを展開する、そこにはイーグルのステークとホークのクラッシャーが映し出されていた

フラグメントと呼ばれる鉱石の危険度の高さを知ったアルは焦りながらもガドルフに問いかけるが、返ってきたのは鉱石の説明だけで

あった

「説明はわかった、なんでフラグメントとやらを使ったか聞いて無
いんだが」

「簡単に言えば、実験じゃな…ロストログアに指定されてないもの
を使用したデバイスの実験じゃ」

「アンタみたいな科学者は本当に食えないな、味方かどうかもわか
らん」

「科学者に味方も何もない、あるのは知識を満たすことじゃ…まあ
罪になるかは人の有益になるか、ならないかの違いじゃな
ワシの場合はお前さんが面白いから味方ではいるぞ」

ガドルフの説明に納得したと答えて未だに話さない使用した訳を問
いかけるアル

ガドルフは一息ついてからモニターに目を向けてからいい放つ、単
純な理由に乾いた笑いをアルは浮かべつつも敵意を瞳に映す

敵意を感じながらもガドルフは飄々と答えていく

「今は信じとく、せいぜい捕まらないようになジジイ」

「小僧に言われたくない、イーグルとホークの能力値に大差はない
ユニゾンが使えて武器も同じ材質…決め手はお前さん次第じゃ
それを忘れるなよ、あとはコイツを持っとけフラグメントのデータ
じゃ…見というて損はないじゃろ」

「貰っとく、ジジイ…出来るだけ早くしてくれよ？全てが終わって

からじゃ遅いからよ」

「わかつとるよ、アルフィリオス」

ガドルフの言葉にアルは敵意を消すと手をヒラヒラと動かして言う、悪態をつきながらもガドルフは返すと忠告をするように言い、データディスクをアルに投げ飛ばす

データディスクを受け取ると来た道を帰るためにガドルフに背を向けると真剣な口調で言う、アルの言葉に耳を傾けながらもガドルフはモニターに向かい、キーボードを打ちながら返した

――

ガドルフの研究室から出たアルは時空管理局本部のエントランスにいた、一緒にきたはやて達を待ったためであった

「アル！もしかして待ってもうた？」

「いや大して待っていないから気にするな」

「それでも待たせた事は事実です：すみません」

「気にするなといったぞ？ほれ、さっさと帰るぞ」

声を掛けられて振り返ると、はやてとティアナがこちらに走り寄ってくるのが見えアルは手を動かして呼びかける

遅れた事を詫びる、はやてに気にするなと答えるが今度はティアナが食い下がる事なく言ってくる

アルは面倒そうに返すとポートの方に足を向けてからぶつきらぼうな感じに言うとはスタスタと歩いていき、はやてとティアナは急いでその後を追った

――機動六課――

時空管理局本部から帰ってきたアルは先にはやて達を隊舎前に降ろすと車をガレージに置き、自室に向かって歩いていると部屋の前に人影を発見する

（誰だ？ 体格的にセレスかレキっぽいな…） 「そこにいんのは誰だ？」

「あ、アルさん…戻ったんですか」

「エリオ？ 珍しいな…なんかあったか？」

人影に声をかけるとそれはエリオであった
アルは不思議そうにしながら近寄るとエリオは沈んだ表情をしていたので問いかけた

「実は相談したい事があるんです」

「相談？ …ああ良いぞ、話してみろ」

「ありがとうございます、この前の下水道での戦いで僕達は一人の召喚士に会いました」

「下水道：確か、ルーテシアっていう名前だったか？
知り合いつても聞いているが」

アルの問いかけにエリオは意を決した様に話し始める

その内容は先日のできごとであった、召喚士と聞いてアルは報告書を思い出して言う

「はい、と言っても数分の関係ですけど：僕はなんとか手を引いて貰うように話しましたが聞いて貰えませんでした：手を伸ばす事も出来ませんでした：アルさん：僕は、どうしたらいいんですか？教えてください」

「：エリオ：その答えは本当はお前の中にあるんじゃないのか？
：だが間違いだと不安だから俺の言葉で答えを塗り潰そうとしてないか？」

「っ！？：それは…」

「なら俺の答えは一つだ：お前が出した答えでやれ」

エリオは少し言葉を詰まらせながら言うのと下を向いて、自分が無力だった事を言う

話を聞いていたアルはエリオが内心に隠していると考えて指摘をすると、パッと顔を上げてエリオは焦りながらも言葉を繋げようとする

しかしその行動はアルの指摘が当たっているという事だった

それを踏まえてアルは自分の意見は言わずにエリオの考えを推した

「でもアルさん、僕は!!」

「局員としちゃ間違ってるってか？何をやるかは知らないがそんなぐ
らいの事を考えてるって顔がいつてんぞ
：エリオ、一つ言っておくぞ？」

「なん、ですか？」

アルの言葉が意外だったエリオは慌てながら反論する

しかしアルは面倒そうに頭を掻いてから指を一本立てて言う

「ルールってのは決めた奴にとって都合の良い物差しみたいなもんだ
人の考えによれば正しくも間違いにも見える：

だから聞くぞ？お前は俺が管理局のルールに乗っ取り命令しあの子
を逮捕したらそれで満足か？

管理局員ではなくエリオ・モンディアルとして」

「っ！：出来ません！僕はあの子を助きたい!!」

「ならそうしろ、ルールが気になるなら：他人に認めさせろ
誰もが認めた結果が真実になる

まっ：やったもん勝ちって奴だな」

「そんな事が言って大丈夫でしょうか…」

エリオにむけてアルはビツと鼻先に指を突きつけると意見を述べていき、エリオ自身に強く問いかける

エリオはそこで初めて自分の考えを吐き出して答える

その答えに満足したアルはエリオの頭をポンと叩くとにこやかに笑った

しかしいざ自分の気持ちを話してもエリオは不安を拭えずにいた

「エリオ、一つ良いことを教えてやるよ

チャンスはお前の気持ちが折れなきやちゃんと来る

一回くらい話を聞いてもらえなくても、手を伸ばせなくても百回でも千回でもやれ

本当に助けたいなら折れる訳無いよな？」

「…っ、はい！！」

「んじゃもう寝るから、明日から頑張れよ？」

不安を残すエリオにアルは励ますために力強く助言をするとそれに応えるようにエリオは返事を返した

アルはエリオの横を通り過ぎて最後に声をかけると部屋へと入っていった、一人残されたエリオは決意を固めたかの様に握り拳を作った

——スカリエッティアジト——

「マスター、少しよろしいですか？」

「ライナか？病み上がりなんだあまり無理をするな」

「お気遣いありがとうございます、しかしもう平気ですから…それよりドクターからアサルトホークについてのデータが回されました」

「ようやくか、渡してくれ」

自室にいたアルファの元に通常の服をきたライナがやってきた

昨日でようやく修復が終わった身体で無理をするなどアルファはライナを労る

ライナは嬉しそうに微笑みながら会釈をするとアルファに尋ねた用件を言い渡し、データディスクを差し出す

アルファはそれを受け取ると近くに置いてある端末に入れるとモニターが映し出される、そこには様々な文字が出された

「フラグメント？…こんなものを使ってたとはな」

「やはり管理局は油断なりませんね」

「いや、これは開発者の独断だ…管理局も知らんさ」

「そのような男のデバイスを使用するのですか？…危険、かと思われます」

そこに出されたフラグメントの情報にアルファは眉を潜めると、隣

にいたライナは恨めしい表情をして言うがアルファは冷静に解釈をする

準ロストログiakラスの鉱石を使い赤の他人が組み上げたデバイスにライナは怪訝な表情を浮かべる

「心配するな、上手く使えばいいだけの事だ、フルシンクロと併用すれば敵はない」

「なら私はマスターの為に身を粉にする所存で従います」

「お前には辛い選択をさせるな：フルシンクロをするために「それ以上は言わないで下さい」

「私はマスターの力に慣れれば良い：それが私の望みです」

モニターに目を向けながらアルファは笑みを浮かべ、ライナもそれに従うつもりでいた

しかし何か思うことがあるのかアルファはゆっくりと目を閉じて後悔をするような言い方をする

見かねたライナはそつとアルファの手に自分の手を添えて握ると微笑みながら言う

「わかった、ならばお前の意を無駄にせぬように今度こそ奴等に打ち勝つぞ」

「はい！マスターの御心のままに…」

アルファもライナの手を同じように握り返すと決意を固めるように
宣言をすると、ライナも同じように応えた

EP28：鷹の爪、隼の嘴、鷲の翼（後書き）

どうも、えのきです

今回、イーグル達の材料が出ましたが若干チート臭いかなと思いましたが皆様はどう思いましたか？率直な意見が欲しいです

作者としてはアルファとアルフィリオスの戦いは同じ条件でやりたいためイーグルとホークの二つにフラグメントを割り振りました

これを含めて楽しんで貰えたら嬉しいです

名言、迷言はまだまだ募集してます

遠慮なくお願いします、アルフィリオス以外でも構いません

EP29..パパは誰だ!?(前書き)

今回はほのぼのを重視していこうと思います

そして今回からこの小説のイメージEDを変えたいと思います

イメージEDは『月光花』(Janne Darc)です

良かった聞いてみて下さい

次回からはOPも変更になります

EP 29…パパは誰だ!?

公開意見陳述会と呼ばれる行事が週末に迫る中、機動六課ではいつものように訓練がおこなわれていた

ギンガを含めたフォワードメンバーの力量が上がってきた事もあり訓練の激しさも増していき、隊長陣との模擬戦が主だってくる

「ほう：アイツラも頑張るねえ」

「うん、シグナムさんとヴィータちゃんを相手にこれだけ粘ってるのが証拠だね」

「防御の堅いヴィータに射撃とスピードのレキと一点突破のエリオ鋭い斬撃のシグナムに防御と連携の取れるギンガとスバルそれをサポートするようにキャロとティアナ：良くここまで考えさせたな、凄い教導官だな」

「私だけじゃないよ、アルさんが皆の心をケアしてくれたおかげだよ、多分それが一番大きいと思うな」

森林地帯で繰り広げられる模擬戦を見ながらアルは関心をする、隣にいた教導隊の制服をきた、なのはが同意をするように頷いて手に持たれたストップウォッチを見ながら呟く

模擬戦でスバル達がやっている戦術を分析をアルはすると満足したように呟く

しかしスバル達がここまで成長したのは自分だけでなく、アルが励ましたりしたからだというなのは

「知らん：成長したのはアイツラだ
俺はただ背中を押したただけだよ」

「それが一番良いんだと思うよ？」

「そうか「二人共！」フェイト、どうかしたのか？」

「もう模擬戦始めちゃっ、てたね：はぁ急いで来たのに：」

「捜査の方で忙しいんだから無理しなくてもいいんだよ？フェイト
ちゃん」

アルは腕を組み不機嫌そうにしながら答えると横目で見ながらなのはは呟くように言う

相づちを打とうとした時に後ろからフェイトの声が聞こえ振り返ると訓練服姿のフェイトが走ってきていた

息を切らしながらフェイトは模擬戦が始まっている事に残念そうに肩を落とした

毎日、捜査に回っていたフェイトをなのはが心配をする

「確かに捜査は忙しかったりするけどこんな時でないと皆と一緒に
いられないから…」

「わからんでもないが、お前が倒れたらどうすんだ？
エリオとキャロが心配しまくるだろうが」

「うう、そうだけど…」

「一緒にいるよりも無病息災が良いんだよ、身体を休める事を優先しろ」

息を落ち着かせたフェイトは少し沈んだ口調で言う。額に手を当てながら面倒そうにため息をつくアル

エリオとキャロが心配するという言葉にフェイトは言葉を詰まらせて黙り、アルは軽くフェイトの頭を小突いてから仕方なさそうに言う。とそこで模擬戦が終了したらしく、なのはが皆を呼び集めだした

――

「皆の動き、とても良かったよ」

それじゃあ今朝の模擬戦の反省をいかして午後からも頑張ろうか！」

「クールダウンを忘れんなよ」

「「「「はい!!」「」「」「」」

「なのはママ」

模擬戦を終えて疲れはてたスバル達になのはが労いの言葉をかけ、アルが面倒そうにしながらも呼びかける

スバル達の返事が返ってきたときにその場にいるはずのない声が聞こえた

「あ、ヴィヴィオ」

「ゆっくりで良いよ、転ばないでね」

へなのは、お前…いつからヴィヴィオの親になったんだ？

「昨日からだよ、正確には保護責任者なんだけどね
フェイトちゃんも後見人をしてくれてるんだ」

その場の全員が声のしたほうに目を向けると、パーカーを着たヴィヴィオがこちらに向かってポテポテと走ってきていた

手を振るなのはと心配そうにするフェイトを見てアルは首を傾げてからなのはに念話でなのはに話しかけると、詳しい事情をおしえてもらい納得する

「あう！？」

「あっ…転んだ」

「ヴィヴィオ！？」

「待ってフェイトちゃん、大丈夫だよ…下は柔いし上手く転んだから怪我はしてない、ヴィヴィオ、一人で立てるよね？」

なのはとアルが念話をしている時に短い悲鳴が聞こえるとヴィヴィオが前のめりになって転んでいた

慌てて駆け寄ろうとするフェイトを押し止めるなのは
そして怪我無いことを言ってからヴィヴィオが立ち上がるのを待つ

「ヴィヴィオはまだ小さいんだよ、っ！」

「あっ！フェイトちゃん」

「大丈夫？怪我してない？」

「フェイトママ…」

しかしフェイトはなのはの静止を振り切りヴィヴィオの元へいくと優しく抱き起こす

心配そうな顔をするフェイトにヴィヴィオは瞳を潤ませる

「もうフェイトママは甘やかしすぎ」

「なのはママは厳しすぎです」

「「むう…」」

「お前ら二人が両極端すぎなんだよ！」

フェイトの元に走り寄るなのはとアル

仕方なさそうにため息をつくなのはに、珍しく張り合うように言い返すフェイト

睨み合う二人に間に入るようにアルが口を出す

「「アルさんならどうするんですか!?!」」

「揃えて言うな…全く、先ずはなのはだがヴィヴィオくらいの歳は

親の愛情が必要な時期だ、この人は守ってくれるって認識させないとグレルぞ

それからフェイト、お前は心配しすぎだ

子供は親の顔に影響されるそんな風に眉下げてたら子供が不安がるニッコニコしながら心配するなどは言わないが出来ただけ顔に出さずに笑いかけてやれ」

「「……………」」

「まったく、魔導士としちゃいっちょ前だが親としちゃまだまだだな、まあそれがヴィヴィオの事を真剣に考えてんだから良いと思うけどな」

間に入ったアルになのはとフェイトは噛みつかんばかりに言うのと、やれやれとため息をついてからなのは、フェイトの悪い点をあげていく

的確かつ真っ当な意見に二人は押し黙ってしまう
それを見て不安そうにするヴィヴィオを目に入れてアルは仕方なさそうに、咳払いをしてから二人に言葉をかける

「まるで父親みたいな言い方だな、アル」

「茶化すな、シグナム…経験上の話しだ…つうか俺に子供はいねえつうの「パパ？」…はい？」

「父親はパパなんだよね？だったらアルはヴィヴィオのパパ？」

アルが二人に言っている間にクールダウンを終えたスバル達は三人の側に来てやりとりを見ていた

ここで珍しくシグナムがからかうようにアルに言うと、アルは顔をしかめながら返事をする。と隣から不思議そうな声が聞こえ振り向くとヴィヴィオがアルの顔をジッと見つめていた

疑問符を浮かべるアルに、ヴィヴィオは期待に満ちた目で聞いてくる

「俺はパパじゃないぞ…なのはからも何か言ってくれ」

「私はアルさんが保護責任者になってくれたら嬉しいなさっきみたくしてくれるのって助かるから」

「フ、フェイトは？」

「ヴィヴィオが良いなら問題ないよ」

困ったように頭を掻きながらアルはヴィヴィオに答えるとなのはに助けを求める

しかし特に反論もなくなのはは賛成をする、望みをフェイトに託しながら、問いかけるものとは同じで賛成の姿勢だった

戸惑っているアルに畳み掛けるようにヴィヴィオの羨望の眼差しとスバル達の視線がアルに刺さる

「わかった…ヴィヴィオのパパになるよ」

「本当！？ワイイ♪パパー♪」

「おっと…やれやれ、これで俺も子持ちか…」

視線に屈したアルは降参するように手を上げて言う。ヴィヴィオはフェイトから飛び降りるとアルに抱きつく。

ヴィヴィオを受け止めたアルは面倒そうにしながらも少し顔を綻ばせていた。

その後、父親役に抜擢されたアルの最初の仕事はヴィヴィオを肩車する事だった。

「んでアルはヴィヴィオのパパになったちゅうわけやな？ 良かったなあ」

「あの…はやてさん、目が怖いんですけど…」

「いややなあ…私は普通にしてるだけやで？」

「……そうか…」

朝の訓練が終わり、食堂に移動すると丁度良くはやてと会い一緒に食事をする事になった。

アルの席には右になのは、左にフェイト、膝にヴィヴィオ、そして真っ正面にはやてと配置になった。

はやてはなのは達から事情を聞き、膝にヴィヴィオを乗せているア

ルに鋭い視線を投げ掛けながら言う

冷や汗を流しながらアルは鋭い視線を向けるはやてに恐る恐る問いかけると手元にあるオムライスにダンっとスプーンを突き立てグリグリとかき回し始めた

口調はワリと普通なはやてだがその背後には黒いオーラが立ち上っており圧倒的な迫力があつた

「うゝ…」

「どした？ ヴィヴィオ」

「ピーマン、苦い…苦いのやゝ…」

そんなはやてのオーラを気にする事なく、ヴィヴィオは目の前のオムライスに嫌そうな声を上げた

アルが話しをすり替えるようにヴィヴィオに話しかけると、オムライスに入ってるピーマンが食べれないとヴィヴィオが答える

「ダメだよ、ちゃんと食べなきゃ」

「うゝ…」

「ちゃんと食べへんと大きくなれへんで？ ママ達みたいになりたいやろ？」

「はやての言う通りだ、ちゃんと食べれば大きくなるから頑張れよ」

「ううゝ…頑張る」

なのはがヴィヴィオに諭すが嫌なものは嫌なのか、あまり効果はなかった

先ほどのまでのオーラを無くしてはやてがヴィヴィオに優しく語りかけ、アルも食事を止めて優しく言えば、ヴィヴィオは渋々ながらも食べようとする

「そうしてるとはやてちゃんがヴィヴィオのお母さんに見えるね…」

「うん、アルと息が合うみたいだし意外と理想的だね」

[illegible]

二人のやりとりを見ていたのはが少し悔しそうにしながら呟くと同じようにフェイトはにこやかにいい放つ

親友からの突然の言葉に顔を真っ赤にして否定するはやて

そんな三人のやりとりをアルは全く気にせずにピーマンを食べ終えて苦い顔をしてるヴィヴィオの頭を撫でていた

「あっ……そうだアルさん少し良いかな？」

「どした？　なのは」

「実は今日、教導隊のほうで集まりがあつて夜いないんだよね

だからヴィヴィオの事頼める？

フェイトちゃんも捜査があるから無理って言ってたから…」

「わかった、良いぞ：しかしもう少し手が欲しい所だな、セレス？」

食べ終わりコーヒーを飲んでいたアルになのはが思い出したように聞いてきた

カップを置いてからアルは応えたと用件を話し始めるのは内容を理解したアルは快く了承するが一人じゃ若干心もとなく、後ろでスバル達と食事しているセレスに話しかける

「ふぁに？」「先ずは口の中のモノを片付けろ」：んぐ、大丈夫、飲み込んだから」

「今日、ヴィヴィオを預かるからセレスも一緒に居てやってくれな
いか？」

「了解！任せといて！」

振り返ったセレスはリスのように口いっぱいにものをつめていたアルはため息をついてから指摘をする

慌てて食べ物を飲み込んだセレスは返答をするとアルはなのはからの用件を伝える、ヴィヴィオについて二つ返事で返すセレス

「そんじゃ、夜は俺とセレスが側にいるからな、ヴィヴィオ」

「うん、わかったパパ！セレスおねえちゃん」

「っ！お姉ちゃんにまっかせなさい！！」

膝に乗っているヴィヴィオにアルは優しく撫でながら言う「アルとセレスを交互に見ながらヴィヴィオは言う」

今まで、姉や年上しかいない機動六課で初めて出来た妹分に張り切りながら答えるセレス

――数時間後――

朝食からデスクワーク、午後の訓練が滞りなく終わり、なのは達は用事の為に出かける事となった

半泣きになるヴィヴィオに後ろ髪を引かれながらもなのはとフェイトは車で出かけていった

「ママ…」

「大丈夫だ、フェイトもなのはもヴィヴィオの所に帰ってくるからな？」

「うん…」

（頭ではわかってるけど気持ちが認めたくないんだな…さて…どうするかな、そうだ…アイツに頼んでみるか…）

寂しそうにするヴィヴィオをアルは抱き上げると慰めようとするが

ヴィヴィオの表情は晴れる事はなかった

今のヴィヴィオにアルは何かしてやれないかと考え、そして一つの案を思いついた

――部隊長室――

「よし、これで本日のお仕事は終了やな、さてと明日に備えてシャワー浴びて寝なアカンな」

へはやて、今少し良いか？

へアル？どないしたん、こんな時間に？

書類にサインを終え大きく背伸びをするはやて、時計を見てから寝る事を決め手元にあったカップを一口飲んだ所でアルから念話が入った

へ今から部屋に来ないか？

「っ！？ゴホ！ゴホ！！」へい、いきなり何を言い出すんや！？
大体…その、部屋にくるって事は…／／／

へ唐突なのはわかってるけど今はお前にしか頼めないんだ…だから

へ…少し、待っててな…その、準備があるから…

へわかった、出来るだけ早く来てくれ

アルの唐突の言葉にはやては激しく咳き込みながら頬を染めると少し言いづらそうに念話を返す

しかしアルは申し訳なさそうに言いながらも何とか聞き入れるように頼み込む

はやてはしどろもどろしながらも決意を固めて返答をする、はやてが了承してくれた事を喜びながらアルは念話を切った

「うう…何を言っとるんや、私は…でも覚悟はしたんや、うん！」

念話が切れた後ではやてはデスクに頭を押し付けて激しく後悔をするしかし今さら引き下がる訳にもいかずに言い聞かせるように言う部屋にあるシャワー室へと足を向けた

シャワーを浴びてパジャマに着替えたはやてはアルの部屋の前まで来くると深呼吸をしてからインターフォンを押す

《はい、アルフィリオスだが》

「ア、アル？わ、私やけど」

《はやて、今開ける》

「…っ！…？アル、一つ聞いてもええか？
なんでヴィヴィオを抱っこしとるん？」

インターフォンから聞こえるアルの声にはやてはガチガチに緊張しながら言う

アルの返答と共に扉が開きはやては息を飲むが出迎えたアルの腕に
ヴィヴィオがしがみついております、呆氣に取られてしまう

しかしなんとか持ち直してからアルにはやては問いかける

「今日はなのは達が居ないのは知ってるだろ？やっぱり寂しいらしくてな…

セレスの奴はキャロ達とパジャマパーティーをするとか言ってる居なくてよ

ヴィヴィオ、はやてにもなついているから少しは寂しさが紛れるかな
って考えてな」

「ふうん…アル、ちょい、ヴィヴィオを降ろして貰えるか？」

「？ああ良いけど…何かあった、って！！なんで殴る体勢になってるんだよ！？」

「そら、もちろん…乙女心を傷つけたからや！！」

「意味がわから、げふあっ！？」

問いかけるとアルは一からはやてに説明をしていき、はやてを
呼んだ理由を話し終えると乾いた笑みを浮かべるはやて

そして顔を俯かせたはやてはアルにヴィヴィオを降ろすように言う
と右拳に力を入れて握り出す

そしてアルが降ろし終えたのを確認すると正拳突きをするかのよう
な体勢を取れば、やり場のない怒りを拳に込めて怒号と共にアルの
ボディに思いっきり打ち込んだ

「あ、が…ごご…」

「さてヴィヴィオ、一緒に寝よなあ…」

「パパは？」

「気にせんでええよ？少しすれば復活するから」

ボディブローをくらい悶えるアルを無視してはやてはヴィヴィオの
手を取ると、ベッドに向けて歩きだす

ヴィヴィオは悶えるアルを心配するがはやてが平気だと答えると素
直に従った

その後、アルは一度閉め出しを食らったがヴィヴィオの温情をもら
い何とかベッドに入れて貰えた

「なあ…まだ怒ってんのか？」

「別に…」

「何で怒ってるかわからないが俺のせいなら謝る
だから機嫌を直してくれ」

「もうええんよ…ちょい自分のたち位置を確認しただけやから」

今、ベッドに二人で横になりその間にヴィヴィオを寝せた状態なのだが先ほどのせいではやてはずっと機嫌が斜めであった

既に寝たヴィヴィオを起こさないようにアルはため息をついてからはやてに話しかけるが返ってくるのは素っ気ない返事ばかりだった何が原因なのかわからないが自分のせいなのはわかるアルは、機嫌を直して貰う為に言う

はやてはあっさりと返答をしてくれたがその後の言葉はアルに聞こえなかった

「なあ、アル…一つ聞いてくれへんか？」

「なんだよ、長い話しは「あのな…」はいはい、お約束ね」

「カリムの予言…覚えてる？」

「ああ…すっかりとな」

一度目を伏せてからはやてはアルを見て言うと、面倒そうにアルは返すがその前にはやては話し始める

懐かしいやり取りだと内心思いながらアルははやての話しに耳を傾ける

はやてが聞いてきたのはカリムの予言であった、聖王教会の一件をアルは思い返して答える

「法の塔が落ちる日：おそらくそんな事が出来るのは公開意見陳述会だけや…」

私はそれを阻止したい、やけど…不安なんや…本当に防げるのかって、予言を覆せるのかって…」

「はやて…」

「そのために機動六課を設立したのもわかつとる、なのはちゃんやフェイトちゃんを集めたのもわかつとる…」

それなのに不安なんや…私は正しいんやろかって…今動いて良かったのかって…私は「大丈夫だ、なんとかなる」アル？」

「はやて、今が正しいかどうか…まだ誰にもわからないけど動かなかったら何も変わらなかった…それだけは確かだそして未来は俺達が作らなきゃいけない」

ぽつりぽつりと、はやては言葉をもらしていく…それは彼女が連日抱えていた不安であった

アルに言っても答えて貰えるかわからない、それでもはやては不安をもらった

背中を押してくれたアルになら頼りたいと思ったからだ、そんな時にアルは優しくはやての肩に手を乗せて励ましの言葉をかける

なんとかなると言い切るアルにははやては不思議そうに見つめると、アルは自分の思う事をはやてに言っていき、不安で固く握られた手を包むように掴む

「はやて、お前は前を見て突き進め

お前は機動六課の部隊長だろ？

だったら不安でも引っ張って行かなきゃなんねんだ

もし後ろや横からなんか来たら俺やヴィータ達がぶち壊す…だから俺を信じろ、自分を信じろ、仲間を信じろ…一人じゃないんだからな」

「アル…うん…わかった、ありがとうな」

「気にすんなよ…さっさと寝るぞ…」

固く握られた手を解すようにしながらアルは、はやての手を握ると力強い意思のこもる瞳で言い切る

はやては微笑を浮かべて返すとアルに応えるように手を握り返すやれやれと一息ついてからアルは手を握ったまま目を閉じて言う

寝付きが良いのか、規則正しい寝息は直ぐに聞こえてきた

「やっぱり…アルはいつでも私を勇気付けてくれるんやな…」

落ち込んだ時でも、危ない時でも諦めない姿勢は絶対崩れへんかった

その後ろ姿をみてたいから私はずっとついていった、そしていつしか後ろ姿が好きになったんやな…

アル…今度はちゃんと言うから今日はコレで勘弁してな？

大好きや…いつか伝えられる日まで私の隣に居てな…」

寝ているアルを見ながらはやては昔を思い返しすように言う

そして優しくもはっきりとした口調で自分の想いを口にしてから祈るようにアルに言い、ゆっくりと目を閉じてから眠りについた

はやてが寝始めてから急にアルが起き上がり空いてる手を顔に押し当ててため息をつく

（今、猛烈に自分の寝付きの悪さを恨んだことはねえ…そして顔のにやつきが止まらねえ

そっか好きか、本当に相性が良いよな…はやて、おんなじ想いなんだからよ

でもそれに応えるのはもう少しだけ待ってくれ…お前の夢をまず叶えてやりたいからな

叶え終えたら応える、だから一緒にいろよ？はやて）

恥ずかしそうに目元を覆うが口元が勝手に上がっていくのをアルは感じた

そして少し気持ちを落ち着かせてからもう一度、横になり繋がれた手を少し強めに握る

一緒にいたい

その想いを表すかのようにアルは手を握ると今度こそちゃんと眠れるように目を閉じた

EP29…パパは誰だ！？（後書き）

どうも、えのきです！

今回ののは我ながら、はやてが可愛くて仕方ないと思う内容でした

ただ、セリフが多い回で読みにくいなとも思います
もし読みにくかったら遠慮なく言って下さい

では、次回からの話しはシリアスをメインに頑張りたいと思います！

次回予告

ついに始まる公開意見陳述会…アル達、機動六課も警備をすること
となる

迫り来るスカリエッティの魔の手を防ぐ事が出来るのか？

次回、リリカルなのはS t r i k e r S ｾﾞ 夜天に舞い踊る荒鷲 ｾﾞ E
P 3 0 …予言の日 にテイクオフ

運命の一日が今、始まる

V. EP: 聖夜のご褒美（前書き）

クリスマス記念小説でございます！

覚えてる方ならわかりますが、前に投稿したA・EP「少し先の未来の約束 一番近くて遠い場所」の続きです！

気になる方は見直してから見てくださると嬉しいです

V・EP..聖夜のご褒美

12月25日

世はクリスマスという行事で賑わう中、機動六課もまたクリスマス気分が：

「ウガアーーーーっ！！」

「八神部隊長がキレたぞ！？」

「いったい何があったんだ！？」

「知らん、だが逃げないところちがあぶねえ！？」

来ることはなく、六課の部隊長こと八神はやての怒号が響き渡っていた

はやては近くを歩いていた男性職員に手当たり次第に夜天の書の角で殴りかかっていた

「ずいぶん荒れてるね：はやてちゃん」

「わからないでも無いけど、今は関わりたくないね：」

逃げ惑う男性職員を見ながら、なのはとフェイトは苦い顔をしていた
なぜ普段温厚なはやてが乱心しているかそれはとある男が原因であった

「あんのアホ男、帰ってきたらぶちのめしたるうーっ!」

返り血がついた夜天の書を振り上げながらはやての咆哮が六課に轟いた

――――

首都クラナガン、市街地

「うおう!? 何か悪寒が…」

「大丈夫か? 風邪でも引いてんじゃないか? その、無理に、スケジュールを合わせてたみたいだから…」

街中を歩いていたアルは突然、悪寒が走り足を止めた

そんなアルを心配するように茶色のコートに赤い帽子を被ったヴィータが言葉を投げ掛ける

「それは心配ねえ、俺はやれば早いからな!」

「うみゅ…威張って言うことじゃないだろ!」

見上げるヴィータにアルは優しく頭を撫でるながら胸を張って答えると、気持ち良さそうにしつつも非難をするように言うヴィータ

「まあそれは置いといてそろそろスノーフェスタが始まる、ホテルに行こうぜ」

「そうだなせっかく、スケジュールを合わせたんだ、目一杯楽しまねえとな」

「なんだかんだで楽しみにしてたんだな」

「別に行事が楽しみなわけじゃねえ！…その…アルと、一緒に嬉しいから楽しいんだ…／＼／」

アルはポケットから券を取り出して言うどヴィータも同じように券を取り出して嬉しように言えば、アルも軽く笑いながら茶化す

噛みつかんばかりの勢いで返すヴィータであつたが頬を染めて恥ずかしそうに答えた

「お前、いきなりのデレは反則だろ！？」

「なんでだよ、何処が悪いんだよ」

「可愛い過ぎるからだ」

「っ！？…なら存分に堪能しとけ…アルとはやて以外には見せないからよ／＼／」

アルは口元に手を当てながら言うどヴィータはショックを受けた様に驚く

慌ててアルに問いかけると珍しくアルは言葉を詰まらせながら答える
思いっきり息を飲んだヴィータはアルのコートの裾を掴みながら、

恥ずかしそうに教えた

――
SIDE…ヴィータ

JS事件を解決してから数ヶ月が経過して機動六課も平和を取り戻した
いつも通りに戻った日常だけでもあたしの周りは少しだけ変化していた

それはアルとの関係…あたしはアルと付き合う事が出来たんだ

受け入れて貰えた事が本当に嬉しくて、はやてやシグナム達にも祝福して貰えた

他の隊員達には今までとの対応の仕方が違うってからかわれたけどなのは式の『お話し』で解決できた

まあベツタリまでとはいかないけど側にいるのは増えたけどそこまで気にする事はねえと思うんだけどな…

今日は依然に海へ行った時に賞品として貰ったスノーフェスタのチケットを使い、食事をするためにクラナガンへ来ている

「どうやら、ここみたいだな…ずいぶんとデカイな」

「シャマルから聞いたけど、ここはミッドでかなり豪勢なホテルなんだよな…」

「……………」

「ちゃんと使えるよな？ コレ…」

「言うな…あたしも同じ事を思ったんだからよ」

アルの言葉にあたしは足を止めるとそこには凄く大きな建物があり、あたしはシャルから聞かされていた事を思い出して呟く

あたしはチケットを見ながら不安そうにするとアルも同じことを考えてたのか乾いた笑いをしていた

—————

「はい、問題ありませんよ

ではスノーフェスタをお楽しみ下さい」

「ほっ…」

「良かったな、本当に」

意を決してあたし達はホテルに入り、レストランでチケットを見せた

そしてウェイターからOKを貰うと、安堵の息を二人してもらしレストランの中へ入った

レストランの中には、クリスマスを表すかのように彩飾豊かな内装になっていてそれを見るだけで来てよかったと思った

「ヴィータ、バイキングみたいだから先に席を確保しとくから料理を取ってこいよ」

「おう、いいところ頼むぞ？
んじや行ってくるから」

コートを置いたあたしにアルが周りの状況を見て伝えてくる

アルの意見に同意をしたあたしは皿を取ってから言うと、料理に向けて駆け足で移動した

「あたしはこんぐらいで良いとして、アルはどのくらい持ってけば良いんだろ…」

皿に山のように積んだ料理を片手にあたしはアルの食い物を選びだす
普段の食事を思い出してみる…アルは前衛型なのにあんまり食べない、というか下手したらキャロよりも少ないかもしれない…

あいつ…良くあれで身体が持つよな、良しなら今日はたくさん食べて貰わないとな

「アル！」

「ヴィータ、ずいぶんかかった…そんなに食うのか？」

「こっちはアルの分だよ、お前はあんま食わないだろ？
今日くらいはたくさん食べてみろよ」

窓際の席にいるアルを発見したあたしは声をかけると、アルは退屈
そうにこちらを向くとあたしの手元を見ながら唾然としていた

あたしと同じくらいの量にしたんだけどそんなにまずかったか？
だけど、あたしには食べて貰える秘策がある！

――――
SIDE…アルフィリオス

ヴィータが持ってきた山盛りの料理に俺は言葉が出なかった
たくさん食べて欲しいってのはわかるけどそんなに入らんから…

俺は普段からあまり食べる方ではない、別に小食というわけでなく
他に理由があるからだ

それは、イーグルが関係してたりする
強襲、突撃が主なスタイルのイーグルを扱う場合、腹に物を入れる
のはいいやり方ではない

急激な加減速を行うと胃が激しくシェイクされ最悪の場合、嘔吐す
るからだ

だから俺はあまり食べずに尚且つ高カロリーの物を食べている

しかし人間とは不思議なものでそんな生き方をしてたら身体がその生活に対応するようになる、適応なんだろうなあこれが：

つうか、さっきからヴィータが何やら楽しそうにしてんのが凄く気になる：

「まあいい、食べようぜ」

「ああそうだな、そんじゃまずは：

「って！俺の皿から取るな」

考えても仕方ないので俺はフォークを手に取り、料理を食べようとした時に何故かヴィータが俺の皿から唐揚げを一つ、箸と呼ばれる地球で一般に使われる物でつまむ

いきなりの事に俺は慌てた唐揚げはヴィータの皿にも乗っかってるからだ

なぜわざわざ俺の皿から取る必要があったのか？

それは直ぐに判明した：

「別にあたしが食うわけじゃない：ほら、あ、アーン／／／」

「ぶは！？／／／何してんだお前は！」

ヴィータは唐揚げをつまみながらあろうことか俺に向けてくる、つまり食べさせようとしてきた

これはくる！普段のヴィータから想像出来ないような、和らいだ表情かつ少し周りを気にして恥ずかしく染めた頬に加え、小さい身体を目一杯使って食べさせようとする健気さ！これはポイントが高い！！…って何を言ってるんだ？俺は…

それもこれもヴィータの行動のせいだし！
しかし簡単には断れない

付き合いだしてからだがヴィータは力による訴えが無くなり、凄く残念そうな顔や沈んだ表情をして訴えてくる…

惚れた弱味のせいや殴られるより辛い、しかも頼みを聞いた時や機嫌を直した時に見せる華のような笑顔を見るとまた見たくなる…

我ながらベタ惚れだと痛感してしまう、まあ悪い気はしないが…

そんな訳でヴィータの頼みは断りづらい、しかも今は周りの視線がチクチクと刺さるため、これはやるしかないのか？ええい！ままよ！！

「わかったよ、ほら…」

「いい心がけだな、アーン／／／」

「たく…羞恥心のせいで味がわかりやしねえな」

「ならもう一個やるしかないよな♪」

観念して口を開ける俺ににこやかに笑いながらヴィータは唐揚げを口に入れる

今まで突き刺さってた視線は妙に生暖かいに変わる…この状況に反撃をするように皮肉に満ちた言葉を呟くとヴィータは再び俺の皿に手を伸ばす

お前…絶対に楽しんでるだろ！

しかしここでやられっぱなしでいるわけにはいかない

「ヴィータ、今度は俺が食べさせてやるよ、ほれ、アーン」

「っ！／／…アーン／／うま！」

「ふぁー！！」

「大丈夫か？アル」

仕返しをしようと食べさせたがヴィータはパクっと食い付いて、本当においしそうに顔を綻ばせる

その仕草というカウンターで逆に打ちのめされた俺は、テーブルに頭を押し付けた

心配するヴィータの声を聞きながら、コイツには勝てないなと思った

その後も続いた食べさせ合う行為にアルはフラフラしながらレストランを出た

「本当に大丈夫か？」

「ああ、少し疲れたただけだから…そんなに気にするなよ」

「…やっぱりアルも変わって思うか？」

「ん？」

クラナガン市街に戻り、アルは疲れたようにため息をつくど、隣にいるヴィータは不安そうに聞いてくる

苦笑をしながらもアルは平気と返すがヴィータは俯いてしまい、不意に問いかけてくる

「素直にしてるあたしはアルは嫌なのか？前みたく…素直じゃなくて憎まれ口を叩くあたしが良いのか？」

「そんな事は言ってな「あたしは！」っ!？」

「嫌がられても前みたくは嫌だ…そのせいでアルは…」

「ヴィータ…」

不安そうに聞くヴィータにアルはフォローをしようとするが、遮るようにヴィータは掠れそうな声で言う

ヴィータの言葉でアルはJS事件に起こった事を思い出したそれはほんの些細なすれ違い、しかしそれで油断をしたアルは危うく魔導士として死ぬかもしれない怪我を負う事となった

ヴィータはその事を未だに気にしていたのか：アルは自分を責めるヴィータを見ながら思った

そして、言葉をかけずにヴィータの身体を抱き寄せた

「アル？」

「気にすんなって言ってお前がやめるとは思わない：だけどあの怪我のおかげで俺はヴィータの気持ちを知ることが出来た：むしろ感謝してる、だからもう許してやれよ：自分を」

「アル！：ありが、とう：」

「いつも通りのヴィータでも素直なヴィータでも構ねえよ
どっちも俺の好きなヴィータだ」

抱き寄せられたヴィータは不思議そうにしながらアルを呼ぶと、アルは一息ついてから言葉をかけていく

優しく語りかけるアルの胸にヴィータは自分の顔を押し付けながら礼を言うと、アルはにこやかに笑いながらどっちのヴィータでも構わないと言う

「アホな事を言うなよ：バカアル」

「いつも通りのヴィータのおかえりか？」

「そうだ：アル：ちよつとしゃがめ」

「なんでだよ？説明してくれるか？」

胸から顔を離れたヴィータは先ほどの和らいだ表情ではなく、いつものツリ目に戻っておりアルはからかうように言う

ヴィータはアルの胸にポスッと頭を押しつけるとアルに命令をする、普段のやりとりに笑いながら答える

「少しは察しろ…バカ／＼／」

「バカだから、わからないなあ」

「…うゝ…出来ないから、しゃがめ！／＼／」

「わかった、わかったほら…これで良いか？」

恥ずかしそうにするヴィータにわざとらしくアルは答える

バシバシと胸を叩きながらヴィータは主張をしてきて、これ以上茶化すのは命に関わると考えたアルは言われた通りにしゃがみ込む

しゃがみ込んだアルの頬に手を添えると、ヴィータは目を閉じてそっとキスをした

「ん…／＼／メリークリスマス、アル／＼／」

「メリークリスマス、ヴィータ…俺からもしとくか」

「ん／＼／…っ！長いって…恥ずかしい／＼／」

唇を離してやんわりと笑みを浮かべるヴィータにアルは答えると、今度はアルの方からヴィータにキスをする

最初は受け入れたヴィータであったが、人目を気にして直ぐに離れてしまう

「さて、そろそろ帰るか…ほれ」

「そうだな…」

「これからよろしくなヴィータ」

「ああ、アル…浮気するんじゃないぞ？」

クリスマスツリーや街のイルミネーションを見ながら、アルは言いヴィータに手を差し出す

差し出されたアルの手をヴィータは握ると頷いて歩きだす、イルミネーションの中を歩きながらアルは楽しそうに言う

ヴィータも嬉しそうに答えるが目を細めるとアルを睨みながら釘を刺す

「しねえって、少しは信用しろよ」

「もししたら…」

「土下座でもなんでも来やがれ、やってやるから」

「アイゼンの、フルコースを味あわせてやる」

「肝に命じときます…」

浮気という言葉を笑い飛ばしながら、アルは胸を張って言い切るが
ヴィータは浮気した時の対応を言う
乾いた笑みを浮かべながら答えた

V. EP.. 聖夜のご褒美（後書き）

グボファ！！（吐血）

あまりにも自分の許容を超える甘さに思わず悶絶しました
人によつては足りないかと言われましようが恋愛経験が無い作者に
はこれが限界でした

あえて言うなら素直なヴィータは最終兵器に匹敵します！

皆様にもわかって貰えたら嬉しいなと思います

次回で念願の50話なのですが、偶然にも30万PVも達成しまし
た！！

皆様、本当にありがとうございます！！

ではいつも通りの記念小説のアンケートを取ります
恋愛ばかりでなく、戦闘オンリーやほのぼのの系も頑張るので遠慮な
くリクエストしてください、祭でも構いません

それでは皆様、メリークリスマスでした！

K・EP：30万PV記念小説・5年ぶりの再会（前書き）

30万PV記念小説です

今回はやまりよう先生の作品、魔法少女リリカルなのはStirik
erS（不真面目・真面目凸凹兄弟in新生機動6課）のコラボに
なります

良い作品になってるかなと不安ですが見てください

ちなみにKはコラボのKです

K・EP：30万PV記念小説・5年ぶりの再会

新暦79年…ミッドチルダを襲ったJS事件から2年半が過ぎた頃だった

陸士108番隊

「すかー…くこー…」

「また寝てる…アルさん、起きてください！」

「うう…メソポタミアが…」

「訳のわからない夢を…仕方ない、起こそうかな」

隊員達がデスクワークを行うオフィスにてその男、アルフィリオス・ラーゼンハルグはいつも通り寝ていた

用事があり起こしにきたギンガはため息をついてから揺さぶって刺激を与える

しかしアルは起きずにうなされるように寝言を言う

ギンガは腰に手を当てて仕方なさそうにため息を吐くと握り拳を作って構えた

「せえーのっ！ハア！！」

「おぶおわ!!」

「目が覚めましたか？ナカジマ三佐が呼んでますので至急、部隊長室まで行ってくださいね」

「ああ…いたあ…年々アレの威力増してないか？…にしてもゲンヤさんがね…嫌な予感…」

勢い良く降り下ろされたギンガの拳がアルの腹部にめり込むと肺から空気を出しながらアルは目を覚ました

咳き込んでいるアルをしりめにギンガは用件だけを伝え、書類を手にオフィスを出ていく

居なくなったギンガに恨みを呟きながらアルは腹をさすると、用事のある方を向いてため嫌な顔をして息をついた

部隊長室

「失礼すつぞ、ゲンヤさん、用事ってなんだ？
変なのは断るからな…」

「お前はなあ…まあいい今日は暇だろう？
なら使いを頼まれてくれるか？」

「わざわざ使いのために俺を呼んだのかよ!？」

「嫌なら別に構わないが…その場合ギンガの手伝いをしてもらうか資料室の整理を、な」

いつも通りに無遠慮の挨拶をしながらアルは部隊長室に入ると、中にいたゲンヤは呆れた様のため息をつく

呼び出した理由にアルが文句を述べるとゲンヤはわざとらしい口調でいい始める

「誠心誠意を、持っていていかせてもらいます…」

「今日は上がりだろ？そのまま帰らなくていいからな
そのテーブルに上がってる箱だから忘れるな行き先も箱に書いてある」

「へーい…よつと…」

深々と頭を下げてアルは使いを引き受けるとゲンヤはテーブルの上にある白い洋紙に包まれた箱を差す

アルは気のない返事をしながら答えると箱を手に取り、行き先を確認して部隊長室を後にした

「それで？結局引き受けたの？」

「仕方ないだろ、断れば資料室行きだ

下手したら帰る時間が無くなり：つく！？古傷が：」

「うん、早く届けて帰ろう：」

私はアルがボコられてるところあんまり見たく無いかな」

陸士108番隊を出ると外にあるバイクにセレスが寄りかかっており、アルは事情を話すと凄く嫌そうな顔をされた

アルは仕方なさそうにため息をつくと不意に時計を見て、もし資料室行きを選んだ場合を考えるといきなり頭をおさえだした

その行動でセレスは一つの出来事を思い出すと苦い顔をして呟いた：

復活したアルはセレスを後ろに乗せてからバイクで目的地に向かって走り出した

「それでどんな部隊に届けるの？」

「確か第037機動部隊だった：と思う」

「なんでそんなに適当なの？」

「他の部隊にゃ興味無いからな
知らなくても死なないだろ」

バイクで街中を走っているとセレスが行き先について聞いてくる

アルは少し自信なさげに答えると、呆れた様に目を細めて睨むセレス特に悪びれる様子もなく返答をするアル

それを聞いたセレスは大きく深いため息を吐いた

「アルはもう少し情報に気をつけた方が良いよ

私がどれだけ苦労したかわかる？」

「それも仕事だ」

「話しを聞かないマスターの尻拭いが仕事なんてやってらんないんだけど…」

「キツイねえ…お前は」

アルの背中をビシビシとつつきながら文句を言うセレスにきっぱりとアルは言い切るが、理不尽だと今度は背中を叩きながらセレスが答える

言い切るセレスにアルは呟きながらバイクを走らせた

時空管理局本局第037機動部隊 隊舎前

「ほえ…軒並、普通？」

「そんなに規模は大きくねえな：とりあえず受付で聞いてくるか」

「了解だよ」

隊舎に目を向けて呑気な声を上げるセレス、そして自分が見てきた隊舎と比べて評価をする

アルはイーグルが検索した情報を見ながら答えると展開したモニターを閉じて隊舎に向けて歩きだすとセレスもそれに続いた

「すみません、少し良いですか？」

「はい、何ですか？」

「陸士108番隊のアルフィリオス・ラーゼンハルグ一尉です
部隊長にお会いしたいのですがいらっしゃいますか？」

「はい、少しお待ち下さい」

「居ると良いね」

「ああ」

受付をしていた女性職員にアルは話しかけると、一応他の部隊という手前のために丁寧語で問いかける

女性職員はゆっくりと頷くと通信を取り出す、隣にいたセレスは早く終わって欲しいと思いながら言う

アルは短く答えて辺りを警戒しはじめた
部隊長という単語を出した途端に、辺りから視線が向けられ出した
からだ

「おいアンタ」

「ん？俺か？」

「ウチの隊長に何か用か？」

「ああまあな、じつ「いきなり来て隊長に会うなんてお前、なんなんだ？」は？今説明するか「隊長に会うなら俺らをまず通してもらおうか」またかよ！話を聞いて「あら可愛いわね、貴方どこの娘？」って今度はそっちかよ！？」

「ふえ？私ですか？「そうそう、名前は？」えっと、わた「髪サラサラだね」あう！？いきなり撫でないでくだ「とりあえず向こうに休憩室あるから行こうか」えっ！ちよっ！、連れてかないで！！アル」

「セレス！？お前らちよっとどけ「何を勝手に行こうとしてんだ、ますます怪しいなまず質問に答えろ」お前らが次々に来るからだろ！それよりセレスが「逃げる気か！お前！」今、絶賛お前らの女性職員にウチのツレがさらわれてんだよ！「なら質問に答えてからにしろや」お前ら！少し黙れや！！」

「アル？お前、アルだろ！」

受付から連絡を待っている時にいきなり一人の男性職員が話しかけ

てきた

アルは頷いてから理由を説明しようとする一人、また一人と会話を職員達に割り込んできた

拳句の果てに女性職員がセレスへと話しかけだし、いつの間にかアル達の周りにはたくさんの人ばかりが出来ていた

そして話しを続ける暇もなくセレスは女性職員に拉致されて行く、慌ててアルは追いかけてようとするがムサイ男達に囲まれ身動きがとれなくなる

そんな時に一人の男の声が聞こえ職員達はそちらを向いた

「「「「隊長」」」」」

「お前ら、コイツは俺の知り合いだから持ち場に戻れ、良いな？」

「「「「了解です」」」」」

「悪かったな、ウチの連中が迷惑かけて大丈夫か？」

隊員達が声をそろえる中で男は職員達に事情を説明すると、職員達はわらわらと散開していく

人が居なくなった所で男はアルへと近づくと苦笑をしながら心配をする

「…お前…誰だっけ？」

「おいおい、忘れたのか？よく思い出してみろって」

「ああ…もしかして！」

「ようやく思い出し「メソポタミアだな」って全然、違うだろ！何だよ！メソポタミアって」

話しかけてきた男を見ながらアルは不審そうに見ていう

アルの態度に男は自分の顔をさしながら言う、ジッと男の顔をアルは見ることにした

セミロングの茶髪、黒い瞳、首には十字架のネックレス

その情報からアルはようやく思い出したのか手をパンと叩く

ホッとしたように一息つく男だったが返ってきたのは全く違う答えだった

「わりいわりい、さっきまで寝てたからそのせいで違う名前が出てたアレンだろ？久しぶりだよな」

「それ弟！俺はレオン！レオン・イエーガーだ！！」

「なんだお前か…髪の色似てるから間違えたじゃないか」

「弟と俺に対しての態度の差がデカ過ぎないか！？」

手を垂直にしてアルは謝ると男の肩に手を置いて言うのにこやかに

名前を呼んだ

しかしそれは男、レオン・イエーガーの弟の名前でありレオンは即座に訂正を入れる

しかし指摘を受けたアルはまるでわざとをバラすかの様な感じに言い出す、レオンは何故か自分の方が弟より下なんだと聞く

「アレンには世話になったりしたからな
態度に違いが出るのは仕方ない、それに陸士108番隊での模擬戦で狙撃ばかりしてきた奴には、ねえ」

「まだ気にしてんのかよ、スタイルの違いだろ…いつまで引きずる気だよ、なんなら射撃に変えれば良かったろ」

「遠距離キライ、近距離スキ」

「なんでカタコト!?!」

アルはレオンの問いかけに答えていくと恨めしそうな顔をする
年月が経過してても覚えていることにレオンはため息をつくと何処か遠くを見る様な目でアルは言う

「ところでさっき隊長とか言われてたけど、お前が部隊長なのか？」

「スルーしやがって…そうだよ、俺が第037機動部隊の部隊長だ
復職したばかりだけどな」

「復職? そういや…ゲンヤさんから5年くらい前にお前が管理局を追いつけられたって話を聞いたような」

「お前：相変わらず自分の部隊以外に興味無いんだな
つうかまさかとは思うけどゲンヤさんが搜索してた時にサボってた
りしてないよな？」

レオンの言葉を無視して、アルは先ほどの事を思い出して問いかける
疲れたようにため息をついたレオンは自分の立場を教えるから近況
も伝える

レオンの言葉でうろ覚えながらも5年前辺りに起こった事件を思い
出す、他の部隊への関心の無さを感じたレオンは恐る恐る問いかける

「さすがに参加はしたさ：本気で搜索はしなかったけどな
今、捕まえても証拠不十分で拘置、最悪は裏工作での有罪と思った
からよ

まあアレンが頑張ってたから手を出さずにちよいと場を作ったくら
いだ」

「そうか、世話かけたな」

「俺は何もしてない、アレンが頑張ってたからお前はここにいらん
だろ？」

ならそれで良いだろ？」

「そうだな、そーいや何か様があったんだろ？受付から連絡が入
ったから来たんだが」

アルは当時を思い出す様に説明をしていく

手助けをしてくれた事にレオンは礼を言うが自分は何もしていないも同然だと答えるアル

そしてレオンの胸を軽く叩いてからにこやかに言う

レオンは微笑をしてから答えると訪問してきた理由を問いかける

「ああ…忘れてたゲンヤさんからの使いでな
届けもんを…あれ？ねえや」

「無くしたのか？」

「いや…あ、そうだセレスに預けて「チェストーーーーーっ!!」
ぶぐはっ!？」

手をポンと叩いてからアルは思い出すが肝心の荷物は無く首を傾げる

レオンも辺りを見ながら探しつつ問いかけると先ほどまでの事を思い出しながら、アルは考えて連れ去れたセレスが持っていた事を思い出した途端、アルの真横から腰めがけてセレスが助走をつけたドロップキックを打ち込みアルは地面に叩きつけられた

「ようやく思い出したの？」

人が命からがら逃げて来たってのに…」

「す、すみませんでした…」

「まあいいや、話しは聞きました
部隊長さんですよ？私はセレス・ラーゼンハルグと言います
これはナカジマ三佐から頼まれたものです」

「あ、ありがとう…ラーゼンハルグ!? アル! お前いつから子持ちになったんだよ!」

頭に怒りのマークを浮かべたセレスはアルに言う。彼女の髪や服は少し乱れており肩で息をしていた。

腹部へのドロップキックを受けて悶絶しながらもアルは謝る、鼻で笑い飛ばしたセレスは先ほどとはうって変わり丁寧な口調でレオンに自己紹介を含めた挨拶をすると手に持っていた箱を渡す。

あまりの変わり身にレオンは呆気にとられていたがセレスの名字を聞いて急いでアルの元にいき揺さぶりながら問いただす。

「揺するな、吐くっての…」

「あっ、わりい…」

「確かにセレスは俺の娘だけど正確には養子だ…管理局に入る為に戸籍が必要でな、それに本当は融合騎なんだよ」

「そうなのか? 融合騎には見えないな…
なあ戸籍なら妹でも良かったんじゃないか?」

「セレスが俺の子になりたいって言ってな
だから妹じゃなく娘になったんだ」

揺すられて気持ち悪そうにするアルにレオンは手を離す。

なんとか持ち直しながらアルはセレスの身元について説明をしていく。

アルの説明にレオンは納得はしたが一つ疑問が浮かび問いかける

レオンの質問にセレスの方を指でさしながら答えるアル

「なるほどな…いやてっきり結婚したかと思っ「結婚はしてるぞ」
…はっ？」

「だから結婚はしてるって、ほれ」

レオンは早とちりした訳じゃなかったと一息ついた時に放たれたアルの言葉に固まった

突然の発言に固まっているレオンに証明するように左手を見せると薬指に指輪がはめられていた

「お前、いつ…」

「一年くらい前だな…元々付き合いはあったから時間はかからなかったな」

「なんか、お前が遠い存在になったな」

「そうか？どうだろうが俺は俺だよ
何一つ、変わらないさ」

「そっか、なんつうかお前らしいよな」

動揺をしながらもレオンは問いかけると指折りしながら答える

少し複雑そうにしながらレオンは呟くと腕を組みながら不思議そう

にしながらも微笑して答えた

レオンも同じように笑えば少し確認をするかのように言った

「そーいやレオン、お前はここの後空いてるか？」

「まあ一応な、なんだ？ 飲みにも行くのか？」

「いや、どうせならウチで飯を食わないかと思ってな
久しぶりにお前と話しとこうかなって思ってたよ」

「おっ、なら邪魔すんぞ」

アルはふと一つ思いついてレオンに提案をすると、レオンは自分の
予定を思い返しながら答える

アルは自分の家に夕食を食べないかと誘うと快くレオンはそれを了
承した

「セレス、悪いけど先に連絡を入れといてくれるか？」

「うん、良いよ」

「ところで、お前の嫁の料理は美味しいのか？」

「ああギガウマだな

ただ…下手に外食とかすると怒り狂い砲撃を撃ち込まれるけどな…
ふっ…」

「苦労してんだな」

隣で暇そうにしていたセレスにアルは連絡を頼むと、セレスは邪魔にならない様に外に出ていく

夕食で気になった事をレオンは尋ねると誇らしげに話すアル

しかし、外食の辺りからだんだんと覇気が無くなり少し震えていた
どれだけ怖い嫁なのだろうとレオンは考えながら励ましの言葉をかける

「あ、先にあがるって副官に伝えてくるからわりいけど待ってくれるか？」

「良いぞ………レオン」

「どした？」

「おかえり」

「ただいま」

レオンは先に帰る事を伝えるために元来た道に戻ろうとする

アルは急にレオンを呼び止めた、不思議そうに振り返ったレオンに
短くもはっきりとした声で言うレオンもそれに応える様に返した

「早く来ないと置いてくからな？」

「うっせ、夕食の時に陸士108番隊時代の恥ずかしい話をしてやろうか？」

「やってみろ、出来るもんならな」

「覚悟しとけよ」

再び歩き出したレオンにアルは意地悪く言うどレオンも負けじと脅しをかけてくる

アルはそれを挑発するように言えば受け答えをするレオン

数年の時間が経過していたとしてもそこには陸士108番隊の時と変わらぬ関係があった

K. EP: 30万PV記念小説・5年ぶりの再会（後書き）

はい、えのきです

皆様のおかげで30万を越えました：これに満身することなく頑張
って続けていこうと思います

来年になる前に小説を投稿出来て良かったです

それでは皆様、来年も夜天に舞い踊る荒鷺をよろしくお願いします

新年からは番外編を二本上げてから本編に入ります
応援よろしくお願いします！

A. EP.:その年の始まり(前書き)

あけましておめでとうございます！

新年の挨拶代わりに小説を更新致します

良ければ見てください

A. EP..その年の始まり

12月31日 海鳴市

「あゝ…寒い…」

「文句を言うたらアカンよ？せっかくの初詣なんや
良い年になるようにせんと」

まだ辺りも薄暗い中で情けない声が広がる
そこにはコートに身を埋めながら歩くアルとそのアルをたしなめる
はやての姿があった

何故二人がここに来ているのか、それは数時間前に遡る…

バニングス邸

「ハツモウデ？なんだそりゃ」

「地球での文化行事や、一年を良い年になるようへの願掛けやな…」

「本当に地球ってのはいろんな文化があるんだな…にしても面倒い」

「アンタねえ…そうやって怠けてないで行ってきなさいよ」

少しは頭がすっきりするんじゃないの？」

「ドキツイ一言をどうも……だがこの寒空の下に好き好んで出たくない！」

年が終わる日にアリサから海鳴市に來ないかと連絡を貰ったはやて、なのは、フェイト

自分達だけでは悪いと思い、なのははヴィヴィオを、フェイトはエリオ、キャロを、はやてはアルとセレスを加えた八神家一同を誘った豪勢なパーティーが行われるバニングス邸でアルは不思議そうに聞き返した

それはアルがはやてに地球の行事を教えて貰っていた時だった聞き慣れない単語を聞いたアルは訳がわからないという顔をしながらはやてを見る

初詣について自分の知っている事をはやては噛み砕いて説明をしていくとアルは関心するように呟く

しかし面倒臭いのかため息を盛大についたすると横からグラスを持ったアリサが非難するような視線を向けながら、アルに言ってきた

久しぶりなのに特に変わらない性格にため息をつくアルそしてグッと握り拳を作って高らかに宣言をした

「「……………」」

「苦労してるわね…はやて」

「あ、あはは…でも普段はこんなやけどちゃんとする時はあるんやで」

「あー、はいはい…そーですか」

無駄な宣言をするアルにアリサは疲れたかのように呟いてはやてを見る
はやてはアリサの言葉にはにきみながらもフォローを入れる
付き合い出したとは聞いていたがこう、のろけを聞かされてはたま
らないとアリサは投げやり気味に返す

「アリサちゃん、はやてちゃん、今からフェイトちゃんとすずかち
やんでトランプやろうと思うんだけど一緒にどうかな？」

「良いわね、そうだ

アル！アンタも参加しなさい！異論は認めないわ！！」

「せめて選択肢をくれても良いんじゃないか？まあ構わないけどな」

「つべこべいわない！！」

アリサとはやての所になのはがやってくるとその手にはトランプが
持たれていた

面白そうに返すアリサは何か思いついたのか、少し後ろの方にいた
アルへと指をさして命令する

いきなりの強引な言い方にアルは面倒そうに返しながらも誘いについた、せっかく誘ったのに面倒そうに言うアルにアリサは怒鳴りつけた

――――

「んで何をやるんだよ…面倒なのはゴメンだぞ」

「そうね…ポーカーなんてどうかしら」

「うん、面白くて良いね」

「私がかまへんよ」

「OKだよ」

「私は少し自信無いかな…」

丸いテーブルに座ったアルはカードをシャッフルしているアリサに問いかける

鮮やかな手つきでシャッフルするアリサはメンバーを見てからゲームを提案する

皆がそれぞれに答える中でフェイトは自信無さげに返した

「にしてもただやるだけじゃ面白くないわね…」

「なんか罰ゲームでもすんのか？」

「それも良いわね、じゃあビリは皆の代理で初詣に行ってもらおうかしら」

「おいおい：流石に女一人で行かすのはどうだよ」

カードを配りながらアリサは何処かつまらなさそうに言うところアルが冗談混じりに言えば、即座に反応する

自分が言ってしまった言葉に嫌悪感を抱きながらアルは頭に手をあてた

そして水を得た魚の様に生き生きしながらアリサは罰ゲームを考えて提案をする

しかしアリサの罰ゲームは自分以外には過酷だとアルは反論する

「確かにそうね：アル

アンタが護衛につきなさい」

「俺が負けたら？」

「その時はアンタ一人だけよ」

「差別でない？」

「全然、それじゃ始めるわよ！」

アリサはカードを見ながらアルに指をさして言う

護衛は構わないと思ったが自分の場合はどうなのだと聞くと凄くぞんざいに扱われた

アルの嘆きの言葉を見無視してアリサはゲームを開始した

S I D E ..アルフィリオス

凄く理不尽な罰ゲームをかけたトランプが始まった

やる気がでない、それは当たり前だ勝とうが負けようが外に出されるのだからアリサ、マジで鬼…けど負けるのはゴメンだ

手札を見てから場に目を移して俺は一つ気付いた

山札が多かったのだ

「アリサ…山札多いんじゃないか？」

「人数多いから、トランプを二つ分使ったわ」

「そうか…」

一体何を考えているのかと思った

山札が多いなら強い役が揃い易いはず、どうせ行かされるなら勝つていこうと意気込みを入れた

勝てる、そう思ってた時期がありました：

まあ考えてみりゃこっちも役が揃い易いけど向こうもおんなじなんだよな

ええ凄い役が出ましたよ俺を除く全員から：結局俺は一人で初詣に向かう事となったが土地勘が無いため誰かに来てもらわなければならかった

それで今に至る訳だ：

「お前らは本当に容赦無いよな」

「まあ負けてしまったのはしゃあないやろ、元気だしてこ」

「にしてもわざわざ寒いのにこんだけ良く出るよな：関心する」

「伝統行事を真っ向から否定する意見はアカンよ」

ポーカーの結末をアルは蒸し返しながら言うとはやては苦笑しながらも励ました

過ぎた事は仕方ないとアルは呟いてから辺りを見回すとあちらこちらに厚着をした町民がいることに気付くと、やれやれといった感じに呟く

明らかに不服そうな物言いのアルにはやては肘で軽く小突きながら注意をする

「それで初詣ってのはどうやるんだ？」

「先ずは社で参拝して、その後はおみくじ引いて、初日の出を拝むのが私が良くやってる事やな
他にもあるけどどないする？」

「それで十分だな、やり方を教えてくれるか？」

「うん、ええよ

ほならさっそく社に行こ」

初詣をする町民が集まる社についた二人、アルはどんな事をするのかと聞くと、自分達がしている事を教えていくはやて

やり方を理解したアルは参拝について教えて貰えないかと聞くとはやては快く了承した、そしてアルの手を取ると先導するように歩きだした

少し恥ずかしくなったアルだがはやてもほんのり耳が赤いのに気付くと微笑をして歩きだした

参拝客が居るなかを順番を待ち、ようやく自分達の番に回るとはやてに教えて貰った通りの手順でアルはお願いをすると社を離れた

「なんつうか、頼み事をしてる姿を人に見られんのは緊張するな…」

「確かにな、そやな…えっと、アルはどんなお願いをしたん？」

「出来る限り平穏が続くように、だな…はやては？」

「えっと言わな、アカン？」

参拝を終えたアルは疲れがドツと押しかかりため息を吐くとはやてはそれに同意をする

そして少し考えた後でアルに願い事の内容を問いかけた

アルは腕組みをしながら答えると逆にはやてに問いかける、しかしはやては少し言いづらそうに返した

「人に聞いておいてそれは無いだろ
フェアに教えてくれよ」

「笑わへん？…んと二つあるんやけど、一つはアルとおんなじで平和なのが続けばええなって事で…も一つは…アルとずっと一緒に居られますようにって願ったんや／／／」

「はやて…」

「あいたっ！？なんで叩くん？」

アルは目を細めながら問いかけるとはやてはしどろもどろに言っていき、いい終えると目をそらした

アルははやての名前を言うとき軽くはやての額をはたいた

ペチンと短い音ときなりの痛みにはやてはすっとなきような声を上げる

「それを神様に願わなきゃならない程、俺は信用が出来ないのか？」

「ちゃうよ！…ただな、アルならいい人に巡り会えるなって思えるから…」

「アホか？お前は

自分に自信を持て…俺はお前以外の女を好きにならねえ

つか約束したろ？世界の果てだろうが、次元の果てだろうが、お前の所に飛んでくつてよ

俺は約束を守る男だ信用しやがれ」

「アル…うん、そやなアルは約束を守る人やもんな…信じな彼女失格やな」

呆れた様にアルははやてに問いかけると慌ててそれを否定して訳を話すはやて

不安そうにするはやてにアルは軽く頭に手を置いてから語りかける様に言っていき、自分を親指でさしながらにこやかに宣言した

そんなアルの姿に悩んでた自分が馬鹿らしくなったのか、笑みを浮かべてアルに返すはやて
そしていい終えるとアルの腕に抱きつく

「少しは人目を気にしろ、んじゃ次はおみくじとやらを引くとするか」

「エヘヘ、せやな

おみくじは階段を降りた売店にあるで、行こか」

腕に抱きついてきたはやてに面倒そうにしながらアルは返すが振り
ほどく事はしなかった

そのままでもいいと判断したはやては嬉しそうにしながら、階段の下
をさして教えた

「えっと…ここに金を入れるんだな？」

「せやで、そんで中から紙が出てくるからそれを取るんや」

「これだな」

売店の横にあるおみくじ売り場に來たアルは、はやてに教えて貰い
ながら金を入れて中から出てきた紙を手取る

「大吉や、新年早々に幸先ええな」

「なあ…はやて」

「どないしたん？」

「おみくじで悪いのは凶というのか？」

「そうや、ちなみに一番悪いんは大吉いうんや…アル、出たんか？」

「いや大凶は出てない」

おみくじを開いたはやては書かれている文字を見て喜ぶ、しかし隣にいたアルは紙を見つめたまま黙っていた

そしておもむろに質問をはやてに投げ掛ける、アルの問いにはやては答えると苦笑をしながら聞いてみたが、アルは首を横に振った

「せやったら何が出たん？」

「『極凶』だ…」

「『極：凶』？なんやそれ：ホンマや、何を極めとるんやろ…」

「さあな…悪いもんを極めてんじやないか？」

不思議そうに聞いてくるはやてに、アルはおみくじを見せる

そこにははっきりとした文字で『極凶』と書かれていた

今まで見たこともないものにはやては目をそらすかのように言う

アルも現実から目をそらすように乾いた笑みを浮かべながら返すととりあえずおみくじを丁寧に縦に折り畳んだ

「確かおみくじは悪かったらここに結ぶんだよな？」

「そ、そうやで！」

アル！元気出してな？」

「ああ…むしろなんかこんだけ悪いのを引くとむしろすがすがしいな…変にポジティブになってくる」

アルは少しふらつく足取りで歩くとおみくじが結んである場所に『極凶』を結びつける

はやてはなんとか元気を出して貰おうとフォローの言葉をかける

アルは結んだおみくじを見ながらうんと頷いてからはやての方を向いた

「それじゃ、次は初日の出を見に行こうぜ！」

「お、おー…」

先ほどの事を忘れるかのような笑みを浮かべながらアルは言うとはやては戸惑いながらも答えた、だが不運はこれだけではなかった

「「……………」」

「曇ってるな」

「うん、曇ってんね…」

海沿いの公園まで来たのだが空には重たい色の雲が漂い、夜空が見えずにいた

「こりゃ初日の出は諦めた方が良いな」

「……………」

「ア、アル？」

「諦める？誰がするかよ

はやて：初日の出とやらをなんとかして見るぞ」

観光客の一人が言った言葉にアルは俯いてしまう

不連続きのアルにはやては恐る恐る問いかけるとアルの呟きが聞こえ、そして顔を上げたアルははやてに宣言した

「でも、どないして見る気や？

多分この雲はかなり厚いと思うよ？山でも登れば少しは違うかもしれないへんけど」

「高い所に行くのは間違いじゃない

山に上がる暇が無いなら俺らにできるのは一つしかないよな」

「ま、まさか：」

宣言を聞いたはやてはもったもな疑問をアルに投げ掛けた
ある程度予想される対処を考えて言う

しかしアルはニヤリと悪どい笑みを浮かべながら上を見上げた

ろくでもない事を考えている、はやては瞬時に悟ると一つの考えが
頭をよぎった

——海鳴市上空——

「アル！！さすがにマズイて！無許可での魔法は見つかったら非常にマズイで！？」

「見つかったらの話だろ？なんとかなる

ちよいと日の出を見るためにブレイズバスターで雲を吹き飛ばすだけだ

正にあげましておめでとうだな」

「いやいや、確実にバレるし全然上手くないで！？」

「イーグル、景気付けだワンシリンダーで行くぞ」

「了解しました」

日の上がらない暗闇みではやての声が響く

そこにはイーグルを展開したアルとアルの腕に抱えられたはやての姿があった

分厚い雲に入るとアルは腰のホルダーにしまったイーグルを抜くと太陽の上がる方向にむけた

面白そうに笑うアルにはやては力強く否定をするが、聞く耳を持たないアルはイーグルに指示を出す

「アル！いくらカートリッジを使った言うてもこんだけの雲を吹き飛ばせる訳ないやん！！」

「はやて、俺を誰だと思ってる？

俺はアルフィリオス・ラーゼンハルグ、暗雲を吹き飛ばす風だ！行くぜ！ワンシリンダー、ロード！フルブレイズバスター！！」

はやては焦りながらもアルに止めるように説得する

しかしアルは普段とはうって変わった生き生きとした表情で、イーグルのトリガーを引いた、そして通常の倍以上の大きさの砲撃魔法が放たれ、曇天を切り裂く

切り裂かれた所からオレンジ色の光が空を照らした日の出であった…

「ホンマに吹き飛ばした…」

「さあていい具合に日が出てきた…ちよつとだけ空の散歩してから帰ろうぜ」

「もう、ホントにしょうのない人やな…ええよ、私も付き合うから」

「そうこなくっちゃな、んじゃ行くぜ！」

切り裂かれた曇天にはやては驚き戸惑いながら呟く

アルは何処かすっきりしたように言ってからもう少し飛んでいようと提案をする

やれやれとため息をつきながらもはやては了承をすると、アルは楽しそうに言い飛行速度を上げた

余談だがその日の海鳴市のニュースに謎の赤い閃光、空を割る！？というのが報道されアルがなのは達に説教を食らったのはまた別の話であった

A. EP..その年の始まり（後書き）

どうもえのきです！

いかがでしたか？

アルは年が変わろうと変化はしないという事を伝えてみたのですが

本当なら新年に上げる予定でしたが遅くなってしまいました

次回の話しは早く仕上げたいとおもいます

では今年も夜天に舞い踊る荒鷲をよろしくお願いします

A. EP: 新年会DEATH!! (前書き)

注意事項

今回の小説はキャラの性格が違います
主になるのはとフェイトがおかしいです

二人が好きな人はオススメしません

それでも良いならこのまま進んで下さい

A. EP..新年会DEATH!!

新年 機動六課

無事に一年を終えた事と新たな一年のために皆が集まり新年会を開く事になった

「ほなみんな、グラスは持ったね？それじゃあ、新しい一年を迎えた事を乾杯!!」

「「「乾杯!!」「」「」」

部隊長である八神はやての乾杯音頭と共に隊員達は、それぞれに並べられた料理に手をつけていく

「ハグハグ、モグモグ!」

「お前、本当に良く食うよな…」

「だっふえ、たふえなひと、もっふあいなひよ」(だって、たべないともったいないよ)

「まずは口の中のものを片付けてから喋ろ…」

隣で掃除機のように食事を食べていくセレスにアルは呆れたように言うど、セレスは口に物を含みながら答える

とりあえず忠告をしたアルは自分が取ってきたパンをかじり、新年会を楽しんでいる六課メンバーへと目を向けた

それぞれが飲んだり騒いだりするのを見て少し嬉しそうにした

「アル何、一人でちびちびしてんだよ、飲むか？」

「ヴァイスか…なら一口貰うか」

「あいよ、ほれ」

「……っ！お前、これずいぶん度数が高い酒だな」

周りを眺めているアルにヴァイスが肩を叩いて話しかけてきた
その手には透明な瓶とグラスをそれぞれ持たれていた

アルはグラスを貰い受けると酒を自分で注ぎ、口に含むしかし味が
思ったよりきツかったらしくアルは顔をしかめた

「そうか？50くらいだったけどな
まあ景気良く行こうぜ」

「何処がだよ…酒で景気良くいけるか」

「そうつれない事を言うなよな、ほれ飲め飲め」

「ヴァイス陸曹、ここにいたんですか？」

ヴァイスはもってきた酒のアルコール度数を教えると、楽しげに笑
いながら言う

対してそこまで酒が好きじゃないのかアルは、気だるそうにしながら

ら言うがヴァイスは更に酒をすすめてくる

するとヴァイスの背後から声が聞こえ振り返る二人、そこにいたのはアルト・クラエッタであった

「どした？何か用事か？」

「カードやろうかと思ったんですが人数が足りないんですよ
それでヴァイス陸曹を誘いに来たんですが…」

「行ってこいよ、黙っているよりは楽しいぞ」

「おう、わりいな」

呼びかけられたヴァイスはアルトに事情を問いかける、用件を簡単に説明したアルトはアルを見てから少し気まずそうにする

三人の間に気まずい空気が流れ出したがそれはアルの言葉によって破られた

カードに行くように言われたヴァイスはすまなそうにアルに言ってから席を離れた

やれやれとため息をついてからアルはグラスに残った酒を飲み、顔をしかめた

「あれ？アルさん、一人？」

「なのはか…まあな、セレスは何処かに食いに行っただし、一人って言えば一人だな」

「そうなんだ、飲み物を探してたんだけど良かったら持って行って良いかな？」

「ああ、構わないぞ
適当に持ってけ」

アルコールに顔をしかめていると聞き覚えのある声に呼ばれ振り返るとなのはがそこにいた

アルはなのはからの問いかけに答えつつ、隣を見るとバカ食いしていたセレスが居なくなっており一息ついた

受け答えをしつつなのはは訪ねてきた用件を伝える、飲み物と聞いてアルはテーブルを見てから了承をする

「なんかいつもより元気が無いね、アルさん」

「一年が無事にすんで感傷に浸ってんだよ…少ししたらいつも通りになる」

「珍しい事もあるんだね、明日は雪かな？」

「うるさい、さっさといけ」

「はーい、わかりました」

いつもと雰囲気が違うアルになのはは不安気に聞くと、アルは苦笑をしながら答える

するとなのはアルを見ながらからかうように言い出す

アルは手で追いつく動作をしながら言えば、わざとらしい口調でなのは瓶を持ってテーブルへと帰っていく

「まったく…あれ？酒の瓶がなくなってる…まさか…」

居なくなったなのはに悪態をつきながらふとテーブルの上にあった酒瓶が無いことに気付く

更になのはが持って行ったのが酒瓶だった事を思い出して慌てて席を立ち、なのは達の席に向かった

「うゝ……」

「むゝ……」

「なのはちゃん、フェイトちゃん、大丈夫？」

「遅かったか…」

なのは達の席につくとそこにはうつぶせになるなのはとフェイト、そして二人を心配するはやての姿があった

アルは行動の遅さを悔やみながら、なのは達に近づく

「アル、なんかアルのテーブルから持ってきた飲み物を飲んだらなのはちゃんとフェイトちゃん具合が悪くなったみたいなんや」

「そいつはヴァイスが持ってきた酒だ、気付くのが遅かった」

「そんなん持ってきたヴァイス君は滅給確定やな…」

「アルさん…」

気持ち悪そうに呻いているのはに近づくとはやてが、心配しながら状況を説明するとアルは申し訳く謝りながら瓶の説明をする

酒であつた事にはやては静かに怒りながら元凶のヴァイスの処罰を決める

その時、気持ち悪そうにしていたなのはが顔を起こしてアルに声をかける

「どうした、何かいるのか？なのは」

「塵芥の分際で私に近づくなんていい度胸なの！！殲滅されたいのかな！？」

「ハア！？どうしたんだ、なのは？」

「気安く呼ばないで！呼ぶときはなのは様って呼ぶの！！」

アルがなのはの側に寄った瞬間、なのはは目を据わらせながら指を突き立てていい放つ

突然の言動にアルは戸惑いながらも質問をするが、なのはとの会話が噛み合わずにいた

（完全に酔ってやがる…）「いったい…どうしたら…」「アル…」フエイト？目がさめたのか？」

「いまの、にゃのははにゃのはじゃなくて、にゃままーなんだよー…」

「にゃまま！？」というかお前、呂律が回ってねえぞ！」

「アハハ、世界が回ってりゅ」

「回ってんのは世界じゃなくてお前自身だ！？」

なのはの変わりっぷりにアルが押されていると急に服の裾を引かれる

引いていたのはなのはと同じくダウンしていたフエイトであった

アルが呼びかけると寝ぼけたような目で口を開いた、しかし酔っているためか何を言っているのかわからず拳句の果てにいきなり立ち上がりクルクルと回りだした

先ほどまで感傷に浸っていたアルであったが、フエイトやなのはの奇行にそれどころではなくなっていた

「よし！ちよつと身体を動かすために模擬戦をするの！行くよ！フエイトちゃん」

「あゝい、にゃのは」

「にゃのはじゃない、なのは様なの！
皆も来るの！来ないとバスターを撃ち込むの！！」

「「「「イ、イエスマム！！」「」「」」

アルがフェイトに気を取れている最中になのはが立ち上がり背伸び
をしている放つ

呂律が回らない口調のままフェイトは答える、そしてなのははレイ
ジングハートを掲げて隊員達を強迫する

なのはの尋常ではない雰囲気を押され、新年会気分であった隊員達
は一気に覚醒し敬礼をしてからなのはの後に続いた：

——訓練スペース——

「久しぶりの模擬戦だね、フェイトちゃん！」

「うん、頑張るによ～…」

訓練スペースの上空で向かいあったのはとフェイト
しかし片や目が据わり片や呂律が回らずフラフラと浮いている、そ
んな二人を見ながらある者は心配し、ある者は賭をし、ある者は騒
いでいた

「なんでこうなったんだろうな…」

「わからへん…止めようにもなのはちゃんの、あのプレッシャーに

言うことも出来へんからなあ…」

二人を見ながらアルは呟くとはやてがどこか諦めた表情で答えた

そして遂に酔っ払い二人の戦いが始まった

「フェイトちゃん、まずは小手調べなんだよ！ダイバイン、バスター！！！」

「どこが小手調べ！？確実に落とす気満々じゃねえか！！」

「ふふふ、甘いによ

そんな砲撃じゃ私は落とせないんだによ、にゃのは！あう！？」

「…直撃や！しかも回避動作、完璧に遅れとる！！」

開始のブザーと共になのははフェイトに宣言をし、バスターモードに切り替えたレイジングハートで砲撃を放つ

放たれた砲撃はなのはの言った小手調べとは真逆で、当たれば並みの魔導士なら簡単に撃墜出来そうな魔力が込められていた

見物していたアルのツツコミをかき消すかの様に突き進む砲撃に対してフェイトは涼しげな表情であった

そして砲撃を放ったなのはに指を突き立てて宣言した途端、フェイトの身体は砲撃にのみこまれた

あまりにも自然な動きだったために、はやては少し呆けていたが直ぐにツツコミを入れていく

「アーハッハッハ！！所詮口だけだったの！！」「プラズマランニャー！！！」なに！？」

「不意打ちの砲撃は良かったによ…だけど私のスピードなら、簡単に防げるんにゃよ」

直撃の影響で巻き上がる爆煙に高笑いをするなのは

しかし次の瞬間、爆煙を切り裂くように金色の閃光がなのはを襲った

驚きつつもなのははプロテクションで閃光を防ぐとフェイトの余裕ある声が聞こえる

声ともに爆煙の中から現れたフェイトのバリアジャケットは特に損傷していなかった

「確かにフェイトちゃんの速さならあのタイミングでバックステップをして防ぐ

そして巻き上がる爆煙を隠れ蓑にしての反撃、フェイトちゃんならではの戦法やな…」

「でも呂律が回らないのは変わらないんだな…ランニャーって」

「いや、そこは萌え要素って事やろ」

「違うだろ…」

フェイトの言葉から不意打ちのバスターに対しての対処をはやては予測していく

それに対してアルは少しでも良い点に注目していた

呂律が回っていない事をはやては笑いながら答えると冷や汗を流し

ながらアルは言う、その間にも戦況は変わっていきフェイトが高速の接近戦で攻めていた

「ハア！てい！ニャア！！」

「つく！？なんの！！」

右、左、回り込んでの袈裟切り

次々と流れるように迫るフェイトの斬撃になのはは防戦一方であった
酔っているせいなのかフェイトの斬撃はととも、しなやかで先読み
が出来ずにいるなのは
しかしフェイトはまだ全力では無いのか斬撃の速度は徐々に上がっ
ていく

「そこお！！」

「キャアアっ！？」

度重なる斬撃の殴襲になのははプロテクションは音を立てて砕け、
攻め時とみたフェイトはバルディッシュをザンバーフォームに変え
て、思いっきりなのはを吹き飛ばす

砕けたプロテクションと共になのははビルの上に叩きつけられた

「よし、ハーケンセイバーで、っ！これは！？」

「アッハッハッハ！フェイトちゃん、まさか私がただ防いでいただ
けと思ってたの？」

この時を待ってたの：ハーケンセイバーでバルディッシュをおもいつきり振りかぶった時、それこそバインドをかけるのに最適なタイミング：」

「つく：まさか：」

「本当はかけるタイミングはいくらでもあった：だけどこぞという場面ですれば精神的にダメージが大きいでしょ？」

（（（悪魔だ！！）））

ビルの上にいるなのはに追撃をかけようとハーケンフォームに戻し振りかぶる、しかし振りかぶったバルディッシュはピクリとも動かずにいた

驚きながらフェイトはバルディッシュを見ると刃先に桃色のバインドがかけられ、なのはの高笑いが聞こえてきた

ビルの上にいるのははバリアジャケットについた埃を払い、バスターモードに変えたレイジングハートをフェイトに向けながら説明する

悔しそうにするフェイトになのははまるで選ぶ様にしながら言うと、凄く良い笑顔で言い切る

そのなのはの諸行にアル、はやて、フェイトの三人は同じ事を考えた

「悪魔で良いよ：悪魔らしいやり方で勝つだけだから、デイベインバスター！！！！」

「つく!?!でももう解除出来る!」「甘いの!フェイトちゃん!?!」
「っえ!?!」

「フェイトちゃんが解除出来るタイミングは予測済みこのバスターは威力を割いて速さを高めたの!装甲の薄いフェイトちゃんなら十分当たるの!?!」

「っ!なんの!?!」

ニヤリと笑いカートリッジを二発ロードしたなのははフェイトに向けてバスターを放つ

しかし長々と解説していたおかげか、フェイトはバインドの解除に成功した

だがなのはのバスターは既に目の前まで迫って来ていた
そして再びなのはの説明が耳に届く

聞く余裕のないフェイトは全力で回避に専念するがバスターはフェイトの肩を抉っていく様に通り抜けた

「…流石だね…砲撃戦でにゃのはに勝る者はいにゃいと思うによ…
だけど!にゃのはじゃ私に絶対勝てにゃいものがありゆ!?!」

「それは、なんなの?」

「私がそれは露出!?!」

「」「はっ?」「」

肩を押さえながらなのはを褒めるフェイト、そして呂律の回らない口調でなのはに宣言をした

いきなりの事にレイジングハートを構えながら聞き返すのはだがフェイトからの言葉になのはや見物していたアルとはやては脱力した

そして宣言と同時に真ソニックフォームになるフェイト、同時に沸き上がるヴァイスを筆頭とした一般男性職員の歓喜の声

だが女性職員はそんな男性職員に軽蔑の眼差しを投げつけていた

「わかるかにゃ？この歓声！エクシードになれば更に露出が減るのはとは段違い！！」

これが、私がなのはに勝てる部分にゃんだよ！！！！」

「そんな……………くだらないことで！」

「え？…っ！バインド！！」

「フェイトちゃん…覚悟するの、エクシードドライブ！ブラスター3！！」

「「一気にとんだ！！？」」

男性職員の歓声を浴びながらフェイトは自慢をするように言うなかで、なのははレイジングハートを握りしめながら言うどフェイトにバインドをかける

そして一気に強化システムを走らせる、アル達がツツコミを入れる中でなのはの周りに四機のビットが展開した、しかし四機の内半

分はフェイトでは無く見物の方に向いていた

「ごちゃごちゃ騒ぐ塵芥どもをまるごと一掃するの！スターライト
！！」

「ちょっ！待っ！！」

「ブレイカー！！！」

なのはの言葉で巻き込まれると察知した隊員達は慌てて逃げ出すが
時は既に遅く、桃色の集束砲は放たれた：

「アーハッハッハ！粉碎！玉碎！！大喝采、なの！！！」

集束砲が辺りを破壊する様を見ながら撃った張本人は満足そうに叫
んだ：

――――

その後を簡潔に説明するなら、スターライトブレイカーの直撃を受
けた訓練スペースは半壊し多数の負傷者が病院に搬送された

ブレイカーを撃ったなのはと模擬戦の相手をしたフェイトは、クロ
ノからたっぷり説教を貰い、事の発端のヴァイスは一月分の給料を
カットされたそうだ：

こうして悲劇の新年会と呼ばれた行事は終わりをつけた：
ここまでを事件報告の書類とする

報告者、アルフィリオス・ラーゼンハルグ

A. EP..新年会DEATH!! (後書き)

どうもえのきです

今回はいろいろと疲れました

会話はギャグなのに、戦闘は真面目にやったり凄く疲れました
文章が可笑しく見えたりしたら遠慮なくお願いします

では次回から本編に移りますが区切りがつくまでは番外編はしません
それだけ真剣に取り組もうと思います

それでは次回の更新を待って下さい

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5118u/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～夜天に舞い踊る荒鷲～

2012年1月9日02時51分発行